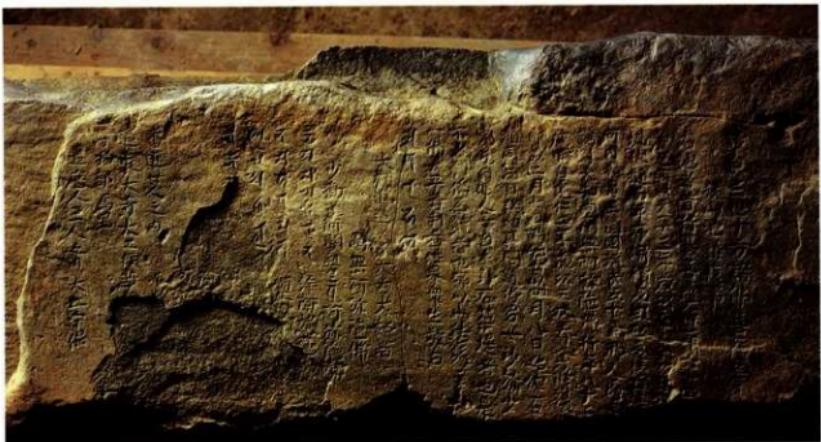


狹山池

埋藏文化財編



中種遺構出土 重源狹山池改修碑



中種遺構全景



東漢上層遺構



東漢下層遺構



西柵上層遺構



北堤斷面全景



木製枠工全景



狭山池 1 号窓全景

ごあいさつ

狹山池では、現在、農業用水の溜池から洪水調節機能を有するダム化への大改修工事がすすめられています。この工事に先立ち、狹山池が大阪府の「史蹟名勝」に指定されているところから、市内在住の考古学者故末永雅雄博士のご提唱により、大阪府土木部のご理解とご協力のもとに狹山池調査事務所を設立し、文化財の調査事業にあたってきました。

狹山池調査事務所では平成元年度以来、発掘調査を中心とした調査をおこなつてまいりましたが、検出された北堤断面や埴の遺構については、調査時から大きな話題となりました。

またその他の分野についても、関係する地域の古文書や絵図などの文献史料の調査や、築造技術や災害の痕跡などについての科学的調査を総合的におこなつてまいりました。その成果の報告としてすでに『絵図に描かれた狹山池』や『ふるさとの風景』を、また正式な報告書の第1冊として『狹山池』史料編を刊行しております。本報告書は狹山池調査の第2冊目の報告書として、埋蔵文化財調査の成果を掲載しております。この報告書が今後、狹山池をはじめとする溜池研究に役立つことを念願してやみません。

最後になりましたが、発掘調査にご指導、ご協力を頂いた皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月

狹山池調査事務所

理事長 岡本修一

序 文

本書は3章より成り、第1章を序章とする。

狹山池調査事務所においては、1987年の創設以来、狹山池および周辺の発掘調査に務めてきた。遺跡遺構のもつ情報量は大きく価値高いものがある。

さきに『狹山池』史料編を刊行し、本書は狹山池の埋蔵文化財編として発掘調査の経過および調査結果を報告する。本書以外の研究諸調査は第3冊として報告が次に出版される。序説につづく第2章は多くの遺構の発掘調査の経過とその結果等を述べているが、具体例の一、二、三を示す。その一は樋についてである。北堤付近で中樋・東樋・西樋の遺構が見出されたが、中樋において石棺が鎌倉時代以来使用されたようである。重源狹山池改修碑を残した重源による改修が有名である。東樋遺構は上下2本あるが、下層遺構によって狹山池築造の時期が推知され7世紀初頭とされる。中樋遺構は西樋遺構と同様に慶長13年(1608)の改修工事の時築造されている。東樋上層も同年築造されたらしい。これらの築造には樋本体に木材使用が著しいが、船材が利用されており、近世初頭の造船技術を伝えて応用したことが考えられる。

狹山池周辺部の例として東岸部の発掘調査がある。これによると古墳時代の大溝や建物跡が確認された。建物跡は大阪狭山市において古墳時代のはじめての建物跡である。

次に狹山池および近辺における須恵器窯跡発掘調査により出土した須恵器が注意される。狹山池はもっとも主要な須恵器の生産地域である。狹山池1号より4号、東池尻1号の窯と名づけている。1号窯灰原より出土した遺物により狹山池築造時期の上限と下限が特定され、7世紀初期以後の年代が与えられる。池尻遺跡(2)において、南側に古墳時代の水田の上に須恵器窯の灰原などの間層があり、その上にまた水田中心の遺構が出土している。

第3章は考察と題している。第1・2節は池尻遺跡において発掘した花粉および珪藻などの分析調査により堆積年代を推定し、池の築造との関連を考え、第3節は狹山池出土の東樋・中樋の遺構の木樋の年輪年代を明らかにする。第4節狹山池狹山池および近辺の多数の窯跡より資料を採取して、その形式の確認に務める。第5・6節は発掘成果より考えて築造以前より鎌倉時代また慶長の改修さら

にそれ以降の狭山池の規模構成等を検討する。全体的には樋や須恵器の諸地域にわたり多数の発掘調査の総括的記述を意図したものがあると考える。

以上は恣意的に若干の項目記述を紹介したに過ぎぬ。その発掘調査は綿密周到に企画し準備して行われている。その成果はわが国における土木技術・農業技術の歴史資料としても価値高いものがある。しかし狭山池調査はこれで完了したわけではない。

さて、発掘調査の主要な対象となる取水部・樋管・排水部等についての形式面・構造面・技術面において、地域や時期によって差のあるを検討する。他方において農業用溜池の灌漑機能を調査してその関連を追求する。狭山池が溜池としてわが国において最も古く築造され、大規模であったことは疑いない。

ところで近代には洪水調節目的の治水ダム工事が進展し、農業用水の貯水量を常時確保するとともに、池底を掘り下げ堤防をかさ上げして、洪水調節容量を具えるダム本体工事が諸地に見られる。利水用の溜池工事とともに治水用ダム工事について、今日までの経過を狭山池として対応し比較するはいかがであろう。これにより狭山池の歴史上の位置、文化的技術的地位が知られるであろう。

平成10年3月

小葉田 淳

例　　言

1. 本書は狭山池のダム化工事にともなう発掘調査の報告書である。なお狭山池は大阪狭山市岩室に所在する。
2. 発掘調査及びそれにともなう整理作業は大阪府土木部の委託により、狭山池調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は1988年から1996年まで行った。
4. 発掘調査は市川秀之・植田隆司が行った。
5. 本書の執筆は第1章・第2章第1～3節(2節中樋石棺部分を除く)・第5節・第3章第5・6節は市川が、第2章第2節(中樋石棺部分)・第4節・第3章第4節は植田が行った。また、分析結果については、第3章第1・2節を渡辺正巳氏(川崎地質株式会社)に、第3章第3節を光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所)に執筆を依頼した。
写真撮影は阿南辰秀・伊藤慎司が行った。
製図は笹岡裕里子・橋本和美・山崎和子・若宮美佐が行った。
6. 発掘調査及び整理作業については以下の方々の参加と協力を得た。(五十音順)
井穴俊一・福岡華希・井上恭輔・植山てる江・尾崎彩・大塚貴幸・柿木宏文・川口真一・古川邦子・五福實幸・阪口勝昭・桜源繁太郎・高林正男・津野忠之・塔木真知子・中尾美津江・中里伸明・西田君代・沼間恵子・橋本幸男・林奈智香・扶川陽子・松川友和・森亮・森岡大生・安有美子・矢田直樹
7. 発掘調査および保存処理については、以下の機関の協力を得た。
飛鳥建設・大阪府農林技術センター・大阪府文化財調査研究センター・人林組・佐藤工業・奥村組共同企業体・近畿ウレタン・狭山池土地改良区・与測エンジニアリング・大晃建設
8. 発掘調査および保存処理については、以下の方々をはじめとする多くの諸氏ならびに諸機関の御指導、御教示を得た。記して感謝する次第である。(五十音順、団体内五十音順)
荒崎博・石上英一・泉森経・上田宏範・大山喬平・奥田尚・門脇禎二・勝部明生・神吉和大・金田草裕・木越邦彦・熊井久雄・小山靖憲・佐伯俊源・坂井秀弥・柴原永遠男・辰巳眞・千賀久・筒井寛秀・坪之内徹・出口晶子・中尾芳治・中村俊夫・畠大介・服部英雄・広瀬和雄・堀田啓一・堀池春峰・松木哲・村田修三・森浩一・森勇一・吉川周作
有井宏子・石神怡・井藤徹・大谷治孝・小山田宏一・芝野圭之助・瀬川健・田中和弘・広瀬雅信・堀江門也・山上弘・山本彰(大阪府教育委員会)
江浦洋・小林義孝・鍛柄俊夫・坪井清足・山口誠治(大阪府文化財調査研究センター)
工楽普通・沢田正昭・館野和己・田中琢・光谷拓実(奈良国立文化財研究所)
9. 狹山池調査の全般にわたっては狭山池調査委員の御指導を得た。
小菜田淳(委員長)・網干善教・石野博信・井上薰・今本博健・日下雅義・粉川昭平・外山秀一・豊田兼典・永島福太郎・西田一彦・福島雅藏・三田村宗樹・山口之夫

目 次

第1章 序 章

第1節 調査にいたる経過	1
第2節 狹山池周辺の自然環境	4
1 位置 2 地形環境 3 気象 4 植生	
第3節 狹山池周辺の歴史環境	8
1 考古学 2 文献史学 3 地理学 4 自然科学	
第4節 狹山池をめぐる研究史	11

第2章 調査の結果

第1節 北堤堤体の調査	15
I 北堤断面	15
1 調査の経過 2 調査の方法 3 大層序の特色 4 遺物	
5 西側断面 6 各層の年代について 7 東樋遺構部分の断面について	
8 第12層の築堤方法について 9 小結	
II 木製枠工	61
1 調査の経過 2 遺構 3 遺物 4 小結	
第2節 樋の調査	66
I 中樋遺構	66
1 調査の経過 2 遺構の概要 3 遺物 4 小結	
II 東樋上層遺構	100
1 調査の経過 2 遺構の概況 3 取水部 4 樋管 5 排水部	
6 墨書き 7 刻印等 8 遺物 9 小結	
III 東樋下層遺構	117
1 遺構の概況 2 取水部 3 樋管 4 排水部 5 小結	
IV 西樋遺構	129
1 調査の経過 2 遺構 3 遺物 4 小結	

第3節 池周囲の調査	197
I 東岸部の調査	197
1 調査の経過	2
2 基本層序と調査区内の自然地形	3
3 造構と遺物	
4 小結	
II 西除崩壊部の調査	204
1 調査の経過	2
2 造構の概要	3
3 造構の性格	
第4節 須恵器窯の調査	209
I 狹山池1号窯	209
1 調査の経過	2
2 層序	3
3 造構	4
4 出土遺物	5
5 小結	
II 狹山池2号窯	299
1 調査の経過	2
2 造構と層序	3
3 山土遺物	4
4 小結	
III 狹山池3号窯	317
1 調査の経過	2
2 造構と層序	3
3 出土遺物	4
4 小結	
IV 狹山池4号窯	361
1 調査経過	2
2 造構と層序	3
3 出土遺物	4
4 小結	
V 東池尻1号窯	373
1 調査の経過	2
2 造構	3
3 遺物	4
4 小結	
第5節 下流遺跡の調査	413
I 池尻遺跡(1)	413
1 調査の経過	2
2 造構と遺物	3
3 小結	
II 池尻遺跡(2)	431
1 調査の経過	2
2 層序	3
3 造構と遺物	4
4 小結	
III 池尻城跡	444
1 調査の経過	2
2 造構	3
3 小結	
第6節 出土遺物・造構の保存処理	448
1 はじめに	2
2 木製枠工	3
3 中橋造構本体等	4
4 中橋造構出土石棺	
5 中橋造構出土重源狭山池改修工	6
6 東橋造構	7
7 西橋造構	
8 西橋造構出土鐵製品	9
9 北堤敷設工法	10
10 小結	

第3章 考 察

第1節 池尻遺跡(2)における花粉分析	455
1 はじめに	2
2 試料について	3
3 花粉分析方法および分析結果	
4 花粉分带	5
5 堆積年代について	6
6 古環境変化	7
7 まとめ	

第2節 池尻遺跡(1)・狹山池ボーリングの珪藻・花粉分析	460		
1 はじめに	2 試料について	3 分析方法	4 分析結果
5 考察	6 まとめ		
第3節 狹山池出土木柵の年輪年代	470		
1 はじめに	2 東柵遺構	3 中柵遺構	
第4節 TK217型式の類型化および他型式との相対評価 —狹山池1号窯およびその近辺の窯跡資料を中心にして—	472		
1 はじめに	2 比較基準の設定	3 陶邑窯跡群資料のTK217型式 に至るまでの変遷過程	4 TK217型式に分類される窯跡資料の細分類
5 狹山池およびその近辺の窯跡資料	6 まとめ		
第5節 狹山池出土の柵の復元と系譜	479		
1 柵の形態と類型	2 狹山池出土の柵の復元	3 柵の系譜	
第6節 発掘成果からみた各時代の狹山池	495		
1 はじめに	2 各時代の狹山池の規模	3 狹山池築造以前	
4 築造時の狹山池	5 奈良時代の狹山池	6 鎌倉時代の狹山池	
7 慶長改修時以降の狹山池	8 小結		

題字 小葉田 淳

図・写真・表目次

口 絵

- 中柵遺構出土 重源狹山池改修碑
 中柵遺構全景
 東柵上層遺構
 東柵下層遺構
 西柵上層遺構
 北堤断面全景
 木製枠工全景
 狹山池1号窓全景

図

〔1章〕

図1	狹山池北堤付近の遺構位置図	2
図2	発掘調査箇所位置図	3
図3	狹山池周辺地形分類図	6
図4	狹山池周辺等高線図	7
図5	狹山池周辺跡分布図	9

〔2章〕

図6	北堤断面図(中柵地点東側)	17
図7	第6層・第7層の土壤層(スクリーントーンが土壤層)	20
図8	第8層にみられる液状化の跡	
図9	第8層上流側斜面の滑り痕	21
図10	北堤第10層灰土層平断面図	22
図11	第10層の敷葉(スクリーントーンは有機物層・波線は敷葉層)	23
図12	第11層の滑り痕	23
図13	第12層にみられる有機物層	24
図14	第12層の敷葉(スクリーントーンは有機物層・波線は敷葉層)	25
図15	堤体内出土遺物①	26
図16	堤体内出土遺物②	27
図17	北堤断面図(中柵地点・東側・西側)	28
図18	北堤断面図(東柵地点・東側・西側)	31
図19	東柵地点東側断面第7層の敷葉・土薙積み(スクリーントーンが土壤・波線が敷葉層)	32
図20	最初の堤体の築堤方法	34
図21	北堤断面部分図の位置	35

図22	北堤灰土層出土遺物①	36
図23	北堤灰土層出土遺物②	37
図24	北堤灰土層出土遺物③	38
図25	北堤灰土層出土遺物④	39
図26	北堤灰土層出土遺物⑤	40
図27	北堤灰土層出土遺物⑥	41
図28	敷葉出土状況	42
図29	木製枠工断面図	62
図30	木製枠工における材木の接着方法	62
図31	木製枠工土層断面図	63
図32	木製枠工出土遺物実測図	64
図33	木製枠工と中柵遺構の位置関係	64
図34	中柵遺構平面図	67
図35	尺八櫛の名称	68
図36	中柵遺構機本体平面図	69
図37	中柵遺構機本体内面断面見通し図	70
図38	中柵遺構機本体正面立面図(同背正面立面図)	71
図39	扁板立断面図	73
図40	石組立断面図	74
図41	石棺6・7背後の裏込め石平面図	75
図42	石棺1背後の裏込め石平面図	75
図43	重源狹山池改修碑実測図	77
図44	重源狹山池改修碑の被覆山・ノミ原(1)	
	拓影	77
図45	重源狹山池改修碑拓影	79
図46	中柵遺構出土石棺の呼称	83
図47	中柵遺構出土 石棺1	84
図48	中柵遺構出土 石棺2	85
図49	中柵遺構出土 石棺3	86
図50	中柵遺構出土 石棺4	89
図51	中柵遺構出土 石棺5	90
図52	中柵遺構出土 石棺6	91
図53	中柵遺構出土 石棺7	92
図54	中柵遺構出土 石棺8	93
図55	中柵遺構出土 石棺9	94
図56	中柵遺構出土 石棺10	95
図57	昭和初期出土の石棺	98
図58	東柵上層・下層遺構東西断面図 付図	
4a	地点	101
図59	東柵上層遺構東西断面図 付図 4b 地点	
図60	東柵上層遺構取水部平面図	102

図61 東船上層造構取水部立面図(南から)	103
図62 東船上層造構取水部立・面図(西から)	104
図63 東船上層造構取水部断面見通し図 (記号は図60に対応)	105
図64 東船上層造構排水部平立面図	107
図65 東船上層造構墨書きレース図(1)	109
図66 東船上層造構墨書きレース図(2)	110
図67 東船上層造構墨書きレース図(3)	111
図68 東船上層造構刻印レース図(1)	113
図69 東船上層造構刻印レース図(2)	114
図70 東船上層造構出土物実測図	115
図71 狹山池北側の水掛図(1987年調査)	116
図72 東船下層造構東西断面図	117
図73 東船下層造構南北土層断面図	118
図74 東船下層造構取水部平立面図	120
図75 東船下層造構取水部断面見通し図	121
図76 梁管の接続方法	123
図77 梁管の概念図	125
図78 東船下層造構部分断面図	126
図79 東船下層造構排水部平立面図	126
図80 西船造構付近の土肩柱状図	129
図81 西船造構上層造構平面図	130
図82 西船造構土留1立面図(→正面、2 →背面)、シガラミ立面図(正面から)	131
図83 西船造構土留2立面・断面見通し図	132
図84 西船造構土留3立面・断面見通し図	133
図85 内船造構土留4立面・断面図	134
図86 内船造構 上層造構と下層造構の関係 (スクリーントーンが上層造構)	135
図87 西船下層造構全体平面図	136
図88 西船造構本体平面・正面図	137
図89 西船造構断面・側面図	138
図90 西船造構断面見通し図(主軸方向)	139
図91 前方の柱と側板の組合せ法	140
図92 後方の柱と側板の組合せ法	140
図93 板材と材の組合せ法	140
図94 西船造構木製枠工・最底立面図	141
図95 木製枠工東西土層断面図	142
図96 材木Iにおいて観察できる加工痕	145
図97 構造船の構造(『船』世界文化社より)	147
図98 西船造構出土材木実測図(1)	150
図99 西船造構出土材木実測図(2)	151
図100 西船造構出土材木実測図(3)	152
図101 西船造構出土材木実測図(4)	153
図102 西船造構出土材木実測図(5)	154
図103 西船造構出土材木実測図(6)	155
図104 西船造構出土材木実測図(7)	156
図105 西船造構出土材木実測図(8)	157
図106 西船造構出土材木実測図(9)	158
図107 西船造構出土材木実測図(10)	159
図108 西船造構出土材木実測図(11)	160
図109 西船造構出土材木実測図(12)	161
図110 西船造構出土材木実測図(13)	162
図111 西船造構出土材木実測図(14)	163
図112 西船造構出土材木実測図(15)	164
図113 西船造構出土材木実測図(16)	165
図114 西船造構出土材木実測図(17)	166
図115 西船造構出土材木実測図(18)	167
図116 西船造構出土材木実測図(19)	168
図117 西船造構出土材木実測図(20)	169
図118 西船造構出土材木実測図(21)	170
図119 西船造構出土材木実測図(22)	171
図120 西船造構出土材木実測図(23)	172
図121 西船造構出土材木実測図(24)	173
図122 西船造構出土材木実測図(25)	174
図123 西船造構出土材木実測図(26)	175
図124 西船造構出土材木実測図(27)	176
図125 西船造構出土材木実測図(28)	177
図126 西船造構出土材木実測図(29)	178
図127 西船造構出土材木実測図(30)	179
図128 西船造構出土材木実測図(31)	180
図129 西船造構出土材木実測図(32)	181
図130 西船造構出土材木実測図(33)	182
図131 西船造構出土材木実測図(34)	183
図132 西船造構出土材木実測図(35)	184
図133 西船造構出土材木実測図(36)	185
図134 西船造構出土材木実測図(37)	186
図135 西船造構出土材木の刻印・刻字(1)	187
図136 西船造構出土材木の刻印・刻字(2)	188
図137 内船造構本体柱の墨書き	188
図138 西船造構出土金属器実測図(1)	190
図139 西船造構出土金属性器実測図(2)	191
図140 西船造構出土金属器実測図(3)	192
図141 西船造構出土金属器実測図(4)	193
図142 西船造構出土金属器実測図(5)	194
図143 内船造構出土金属器実測図(6)	195
図144 東岸部造構平面図	198
図145 東岸部東西断面図	199
図146 大溝東西断面図	200
図147 建物址平面図	201
図148 東岸部出土遺物実測図	202
図149 西除崩壊造構配設図	204
図150 西除崩壊部石組1平面図	205
図151 西除崩壊部石組2平面図	206

図152 狹山池西除ヶ略絵図トレース図（田中家文書）	207
図153 狹山池1号窯と池尻遺跡(2)の位置関係	210
図154 狹山池1号窯灰原土層断面図	210
図155 狹山池1号窯灰原平面図(1)	212
図156 狹山池1号窯灰原平面図(2)	213
図157 狹山池1号窯灰原平面図(3)	214
図158 狹山池1号窯灰原平面図(4)	215
図159 狹山池1号窯灰原出土遺物(1) 下層灰原	222
図160 狹山池1号窯灰原出土遺物(2) 下層灰原	223
図161 狹山池1号窯灰原出土遺物(3) 下層灰原	224
図162 狹山池1号窯灰原出土遺物(4) 下層灰原	225
図163 狹山池1号窯灰原出土遺物(5) 中層灰原	226
図164 狹山池1号窯灰原出土遺物(6) 中層灰原	227
図165 狹山池1号窯灰原出土遺物(7) 中層灰原	228
図166 狹山池1号窯灰原出土遺物(8) 上層灰原	229
図167 狹山池1号窯灰原出土遺物(9) 上層灰原	230
図168 狹山池1号窯灰原出土遺物(10) 上層灰原	231
図169 狹山池1号窯灰原出土遺物(11) 上層灰原	232
図170 狹山池1号窯灰原出土遺物(12) 上層灰原	233
図171 狹山池1号窯灰原出土遺物(13) 上層灰原	234
図172 狹山池1号窯灰原出土遺物(14) 上層灰原	235
図173 狹山池1号窯灰原出土遺物(15) 上層灰原	236
図174 狹山池1号窯灰原出土遺物(16) 上層灰原	237
図175 狹山池1号窯灰原出土遺物(17) 上層灰原	238
図176 狹山池1号窯灰原出土遺物(18) 表面採集	239
図177 狹山池1号窯灰原出土遺物(19) 表面採集	240
図178 狹山池1号窯灰原出土遺物(20) 下層灰原	241
図179 狹山池1号窯灰原出土遺物(21) 下層灰原	242
図180 狹山池1号窯灰原出土遺物(22) 下層灰原	243
図181 狹山池1号窯灰原出土遺物(23) 下層灰原	244
図182 狹山池1号窯灰原出土遺物(24) 下層灰原	245
図183 狹山池1号窯灰原出土遺物(25) (583～586中層灰原 587～589上層灰原)	246
図184 狹山池1号窯灰原出土遺物(26) 上層灰原	247
図185 狹山池1号窯灰原出土遺物(27) 上層灰原	248
図186 狹山池1号窯灰原出土遺物(28) 上層灰原	249
図187 狹山池1号窯灰原出土遺物(29) 上層灰原	250
図188 狹山池1号窯灰原出土遺物(30) 上層灰原	251
図189 狹山池1号窯灰原出土遺物(31) 上層灰原	252
図190 狹山池1号窯灰原出土遺物(32) (627上層灰原 628・629表面採集)	253
図191 狹山池1号窯灰原出土遺物(33)	254
図192 狹山池1号窯灰原出土遺物(34)	255
図193 狹山池1号窯灰原出土遺物(35)	256
図194 狹山池2号窯灰原平断面図	300
図195 狹山池2号窯灰原土層断面図	301
図196 狹山池2号窯灰原上層遺物(1) (1～14上層灰原 15～22中層灰原)	303
図197 狹山池2号窯灰原出土遺物(2) (23～32中層灰原)	304
図198 狹山池2号窯灰原出土遺物(3) (33～44中層灰原 45～59下層灰原)	305
図199 狹山池2号窯灰原出土遺物(4) (60～73下層灰原 74～78表面採集)	306
図200 狹山池2号窯灰原出土遺物(5) 中層灰原	307
図201 狹山池2号窯灰原出土遺物(6) 下層灰原	308
図202 狹山池2号窯灰原出土遺物(7) 下層灰原	309
図203 狹山池3号窯灰原上層断面図	318
図204 狹山池3号窯灰原平面図	319

図205 狹山池3号窯灰原形成前原地形図：	
上岡	322
図206 調査区位置図：下岡	322
図207 狹山池東岸の旧地形(大正の改修以前) (「狹山池法下耕地整理地区及び之ニ 隣」)	323
図208 狹山池3号窯灰原出土遺物(1) (1~12) 上層灰原 13~22下層灰原)	325
図209 狹山池3号窯灰原出土遺物(2) 下層灰原	326
図210 狹山池3号窯灰原出土遺物(3) 下層灰原	327
図211 狹山池3号窯灰原出土遺物(4) 下層灰原	328
図212 狹山池3号窯灰原出土遺物(5) 下層灰原	329
図213 狹山池3号窯灰原出土遺物(6) トレチ内	330
図214 狹山池3号窯灰原出土遺物(7) トレチ内	331
図215 狹山池3号窯灰原出土遺物(8) トレチ内	332
図216 狹山池3号窯灰原出土遺物(9) 上層灰原	333
図217 狹山池3号窯灰原出土遺物(10) (122~ 123上層灰原 124表面採集 125下層 灰原)	334
図218 狹山池3号窯灰原出土遺物(11) 下層灰原	335
図219 狹山池3号窯灰原出土遺物(12) 下層灰原	336
図220 狹山池3号窯灰原出土遺物(13) 下層灰原	337
図221 狹山池3号窯灰原出土遺物(14) 下層灰原	338
図222 狹山池3号窯灰原出土遺物(15) 下層灰原	339
図223 狹山池3号窯灰原出土遺物(16) 下層灰原	340
図224 狹山池3号窯灰原出土遺物(17) 下層灰原	341
図225 狹山池3号窯灰原出土遺物(18) 下層灰原	342
図226 狹山池3号窯灰原出土遺物(19) 下層灰原	343
図227 狹山池3号窯灰原出土遺物(20) トレチ内	344
図228 狹山池3号窯灰原出土遺物(21)	
トレチ内	345
図229 狹山池3号窯灰原出土遺物(22)	
トレチ内	346
図230 狹山池4号窯灰原上層断面図	362
図231 狹山池4号窯灰原平面図	363
図232 狹山池4号窯灰原出土遺物(1)	365
図233 狹山池4号窯灰原出土遺物(2)	366
図234 狹山池4号窯灰原出土遺物(3)	367
図235 東池尻1号窯焼成部平面図(1)	375
図236 東池尻1号窯焼成部平面図(2) 上層断面図(1)	376
図237 東池尻1号窯平面図	377
図238 東池尻1号窯土層断面図(2)	378
図239 東池尻1号窯土層断面図(3)	379
図240 東池尻1号窯灰原出土遺物(1) (1~23) 第1次焼成床面 24~29第2次焼成床 面)	384
図241 東池尻1号窯灰原出土遺物(2) (30~35) 第3次焼成床面 36~60灰原)	385
図242 東池尻1号窯灰原出土遺物(3)	386
図243 東池尻1号窯灰原出土遺物(4)	387
図244 東池尻1号窯灰原出土遺物(5)	388
図245 東池尻1号窯灰原出土遺物(6)	389
図246 東池尻1号窯灰原出土遺物(7)	390
図247 東池尻1号窯灰原出土遺物(8)	391
図248 東池尻1号窯灰原出土遺物(9)	392
図249 東池尻1号窯灰原出土遺物(10)	393
図250 東池尻1号窯灰原出土遺物(11)	394
図251 東池尻1号窯灰原出土遺物(12) (灰原2次堆積層出土遺物)	395
図252 東池尻1号窯灰原出土遺物(13) (灰原2次堆積層出土遺物)	396
図253 東池尻1号窯灰原出土遺物(14)	397
図254 池尻遺跡(1) A・D調査区遺構平面図	414
図255 池尻遺跡(1) A・D調査区 東壁断面	415
図256 池尻遺跡(1) A・D調査区出土遺物 落ち込み 1(1)	418
図257 池尻遺跡(1) A・D調査区出土遺物 落ち込み 1(2)	419
図258 池尻遺跡(1) A・D調査区出土遺物 落ち込み 1(3)	420
図259 池尻遺跡(1) A・D調査区出土遺物 落ち込み 1(4)	421
図260 池尻遺跡(1) A・D調査区出土遺物(5) (68~70右組 71ピット 3 72ピット 7 73土壇 3 74~75上積 1)	422

図261 池尻遺跡(1) A・D 調査区出土遺物 落ち込み 1 出土鉄製品(6)	423
図262 池尻遺跡(1) B 調査区 第 3 遺構面 平面・南壁断面図	424
図263 池尻遺跡(1) C 調査区 第 2 遺構面 平面・西壁断面図	426
図264 池尻遺跡(1) C 調査区 第 3 遺構面 平面図	427
図265 池尻遺跡(1) C 調査区 第 4 遺構面 平面図	427
図266 池尻遺跡(1) C 調査区 第 5 遺構面 平面図	428
図267 池尻遺跡(1) C 調査区出土遺物	429
図268 池尻遺跡(1)付近の小字図	430
図269 池尻遺跡(2)東西断面図	432
図270 砂層出土遺物実測図	433
図271 盛土遺構平面図	434
図272 水田遺構平面図	435
図273 大塚と小塚	437
図274 灰原の広がり	438
図275 池尻遺跡(2)トレンチ内出土遺物 実測図	439
図276 池尻遺跡(2)包含層出土遺物(1)	440
図277 池尻遺跡(2)包含層出土遺物(2)	442
図278 池尻城跡調査区位置図	444
図279 池尻城跡遺構平面図	445
図280 池尻城跡縦断面図	446
 〔3章〕	
図281 木製枠工ウレタン樹包状況（スクリー ントーン部分がウレタン）	449
図282 木製渡岸 PEG 液散布状況	450
図283 束樋遺構含浸状況	452
図284 試料採取地点	455
図285 No.1 地点の花粉ダイアグラム	457
図286 No.2 地点の花粉ダイアグラム	458
図287 試料採取位置図	460
図288 池尻遺跡(1) No.1 地点の珪藻ダイア グラム	462
図289 池尻遺跡(1) No.1 地点の珪藻総合ダイ グラム	462
図290 池尻遺跡(1) No.2 地点の珪藻ダイアグ ラム	463
図291 池尻遺跡(1) No.2 地点の珪藻総合ダイ グラム	463
図292 池尻遺跡(1) No.3 地点の珪藻ダイアグ ラム	464
図293 池尻遺跡(1) No.3 地点の珪藻総合ダイ アグラム	465
図294 狹山池ボーリング+E301 No. 2 の珪藻 ダイアグラム	466
図295 狹山池ボーリング No. 2 の珪藻総合ダ イアグラム	467
図296 狹山池ボーリング No. 2 の花粉ダイア グラム	468
図297 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(1)	473
図298 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(2)	473
図299 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(3)	473
図300 陶邑窯跡群主要窯跡の 杯身たちあがり(1)	473
図301 陶邑窯跡群主要窯跡の 杯身たちあがり(2)	474
図302 陶邑窯跡群主要窯跡の 杯身たちあがり(3)	474
図303 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(4)	474
図304 陶邑窯跡群主要窯跡の 杯身たちあがり(4)	474
図305 陶邑窯跡群主要窯跡の 杯身たちあがり(5)	474
図306 狹山池 1 号窯(下層灰原)の杯身法量	475
図307 狹山池 1 号窯(中層灰原)の杯身法量	475
図308 狹山池 1 号窯(上層灰原)の杯身法量	475
図309 狹山池 1 号窯(下層灰原)の 杯身たちあがり	475
図310 狹山池 1 号窯(中層灰原)の 杯身たちあがり	475
図311 狹山池 1 号窯(上層灰原)の 杯身たちあがり	476
図312 狹山池 2 号窯の杯身法量	476
図313 狹山池 3 号窯の杯身法量	476
図314 東池尻 1 号窯の杯身法量	477
図315 狹山池 2 号窯・3 号窯の 杯身たちあがり	477
図316 東池尻 1 号窯の杯身たちあがり	477
図317 狹山池 4 号窯の杯身法量	477
図318 狹山池 4 号窯の杯身たちあがり	478
図319 束樋下層遺構取水部（細かいトーン； 上部構造・粗いトーン；土留・トーン なし；下部構造）	480
図320 束樋下層遺構（奈良時代） 取水部復元図(全体)	481
図321 束樋下層遺構（奈良時代） 取水部復元図(部分)	481
図322 「石造物発見図」(『狭山池改修誌』)よ	

り) ······	482
図323 「樋管実測図」(『狹山池改修誌』より) ······	482
図324 中世石樋復元図 ······	483
図325 「河内国丹南郡狹山池東樋絵図」(田中家文書)トレス図(東樋は中樋のこと) ······	486
図326 「河内国丹南郡西樋絵図」(田中家文書)トレス図 ······	486
図327 西樋復元図(S=1/150) ······	487
図328 「樋管伏設全景図」トレス図 ······	488
図329 山賀遺跡出土の樋(『山賀』その2より) ······	489
図330 鶴田池東造構出土木樋(『西浦機・鶴田池東遺跡発掘調査概要』より) ······	490
図331 水城取水口復元図(『特別史跡水城』より) ······	491
図332 益田出土木樋(泉森鉄「益田池の考古学的調査」より) ······	491
図333 益田出土木樋復元図(泉森鉄「益田池の考古学的調査」より) ······	492
図334 田原本町における溜池面積の推移(宮木誠「奈良盆地の水土史」より) ······	492
図335 狹山池内の等高線図(三田村宗樹「既存ボーリング資料のデータベース化と狹山池堆積物の分布状況」より) ······	495
図336 堤体高と余裕高の関係 ······	496
図337 北堤以北の旧流路(日下雅義『歴史時代の地形環境』所載図に加筆) ······	497
図338 延長期の狹山池灌漑範囲(緑線:西堀掛り・横線:中堀掛り・点:狹山池太満池直法) ······	498
図339 築造時の狹山池(斜線部は近世の人工掘削箇所) ······	499
図340 堤体の高さと周辺地形 ······	499
図341 狹山池・太満池堤体の段丘の標高 ······	500
図342 昭和改修以前の狹山池 ······	502
図343 延長改修時の狹山池 ······	504

写 真

〔1章〕

写真1 現地説明会(池尻遺跡2) ······	2
写真2 作業風景(東樋造構) ······	2
写真3 工事前の狹山池内(1987年冬) ······	5
写真4 工事前の狹山池(1985年北側上空から) ······	5

〔2章〕

写真5 北堤と堤体保存箇所 ······	16
写真6 堤体保存作業 ······	16
写真7 黏土ブロックによる盛土 ······	18
写真8 中樋地点第12層の土壠積み ······	33
写真9 木製枠工全景(内から) ······	62
写真10 桁の先端の様子 ······	62
写真11 中樋造構全景 ······	66
写真12 樋木体部分 ······	68
写真13 ハの字型の板と板石 ······	69
写真14 樋管(うしろから) ······	69
写真15 砂蓋 ······	71
写真16 扇板アンカー ······	72
写真17 船釘の痕跡 ······	72
写真18 石棺の間に詰められた石 ······	76
写真19 東側石棺の裏込め石 ······	76
写真20 西側石棺の裏込め石 ······	76
写真21 重源狹山池改修碑出土状況 ······	76
写真22 石棺4の底部外面 ······	87
写真23 石棺6のクサビ痕 ······	88
写真24 石棺7の内面 ······	88
写真25 石棺A ······	96
写真26 石棺Bの内面 ······	96
写真27 狹山池絵図(田中家文書) ······	96
写真28 上下二本の縫管 ······	100
写真29 東樋上層造構取水部(上から) ······	105
写真30 杖柱のはぞ穴 ······	105
写真31 取水部の基礎にされた東樋下層造構 ······	105
写真32 取水部上面の穴 ······	105
写真33 砂蓋に打たれた釘 ······	106
写真34 側板の接続部 ······	106
写真35 痛んだ砂蓋(1) ······	108
写真36 痛んだ砂蓋(2) ······	108
写真37 墓書(魚) ······	112
写真38 墓書(ねずみ) ······	112
写真39 東樋下層・上層造構と敷葉層の関係 ······	119
写真40 堤体にみられる滑り痕 ······	119
写真41 取水部の平面形 ······	119
写真42 樋管1の先端部 ······	119
写真43 砂蓋を押さえための柱 ······	122
写真44 樋管7と8の接続 ······	124
写真45 樋管をつなぐ鉄釘 ······	124
写真46 樋管1の柱と蓋板 ······	126
写真47 柱の基盤部 ······	126
写真48 排水部で検出された縫管材 ······	127

写真49 東橋遺構と新しい取水塔	128
写真50 昭和大改修以前の西橋	129
写真51 シガラミ	131
写真52 斜めにおかれた二枚の板材	131
写真53 土留2	132
写真54 上留3	132
写真55 上層遺構全景	134
写真56 西橋遺構全景	135
写真57 棚本体	135
写真58 側板をとめる継釘の穴	138
写真59 側板の下部と板材	138
写真60 ハの字型の二枚の板	140
写真61 尻板(南側)	142
写真62 尻板(北側)	142
写真63 継釘	144
写真64 カスガイ	144
写真65 埋め木	144
写真66 梁穴	144
写真67 木栓	145
写真68 東岸部全景(南から)	197
写真69 大溝全景(北から)	200
写真70 大溝の内部(南から)	200
写真71 建物址の炉付近	200
写真72 石組溝1	203
写真73 石組溝2	203
写真74 土壌1	203
写真75 土壌2 周辺の遺構(南から)	203
写真76 石組1	206
写真77 石組2	206
写真78 狹山池1号窯と北堤	209
写真79 下層灰原遺物検出状況	216
写真80 下層灰原直下のピット群	217
写真81 2号窯灰原と狹山池	299
写真82 狹山池2号窯灰原	299
写真83 狹山池3号窯灰原断面	317
写真84 下層灰原遺物出土状況	320
写真85 灰原層以前のピット列	321
写真86 東池尻1号窯の位置(南上空から)	373
写真87 窯体遠景(西から)	374
写真88 灰原遠景	377
写真89 池尻遺跡II調査区	413
写真90 落込み	416
写真91 石組△	416
写真92 落込み1土器出土状況	417
写真93 土壌1土器出土状況	417
写真94 B調査区全景	417
写真95 C調査区第2遺構面	425
写真96 第4遺構面の水田	425
写真97 池尻遺跡(2)と狹山池北堤	431
写真98 灰原層と水田作土層	431
写真99 一番小さい水田	436
写真100 水田に造された足跡	436
写真101 岬全景	438
写真102 溝池3の橋	446
〔3章〕	
写真103 木製枠工の棚包作業	448
写真104 木製枠工の吊り上げ作業	450
写真105 東橋遺構のブルーへの搬入	451
写真106 石棺7	482
写真107 石棺10	482
写真108 西極復元模型	486
写真109 取水塔全景	489
写真110 取水塔の橋	489
写真111 狹山池巡見絵図	503
写真112 御巡見御改狹山池絵図	503
写真113 河内国丹南郡狹山池図面	503
表	
〔1章〕	
表1 年度ごとの発掘調査	2
表2 堤・河内長野の年間降水量	5
〔2章〕	
表3 大層序とその年代	17
表4 狹山池北堤の工事	
(『狹山池改修誌』より作成)	29
表5 史料に記された堤の高さ	30
表6 北堤灰土層出土遺物観察表	43
表7 北堤断面土層表	52
表8 積管砂蓋の墨書き	111
表9 東橋下層遺構の積管材・蓋板材	122
表10 西極遺構出土木材観察表	147
表11 西極遺構出土金属器数量表	189
表12 狹山池1号窯下層灰原出土遺物 観察表	257
表13 狹山池1号窯中層灰原出土遺物 観察表	266
表14 狹山池1号窯上層灰原出土遺物 観察表	272
表15 狹山池1号窯灰原表面採集遺物 観察表	294
表16 狹山池2号窯上層灰原出土遺物	

観察表	310
表17 狹山池 2号窯中層灰原出土遺物 観察表	311
表18 狹山池 2号窯下層灰原出土遺物 観察表	313
表19 狹山池 2号窯灰原表面採集遺物 観察表	316
表20 狹山池 3号窯上層灰原山土遺物 観察表	347
表21 狹山池 3号窯下層灰原出土遺物 観察表	348
表22 狹山池 3号窯灰原トレンチ内山土遺物・表面採集遺物観察表	356
表23 狹山池 4号窯灰原出土遺物観察表	368
表24 東池尻 1号窯と東槽下層琵琶との 関係	383
表25 東池尻 1号窯第1次焼成床面出土遺物 観察表	398
表26 東池尻 1号窯第2・3次焼成床面山土 遺物観察表	399
表27 東池尻 1号窯灰原山土遺物観察表	400
表28 東池尻 1号窯灰原2次堆積層出土遺物 観察表	410
表29 水田の規模と方位	436
表30 池尻遺跡(2)出土遺物	441

[3 章]

表31 狹山池出土石棺の法量	483
表32 尺八柄法量の比較	485
表33 岩室村の溜池築造年代	492
表34 各時代の狹山池	496

図版目次

図版1 狹山池の景観

- 1 狹山池全景 北から・1985年
- 2 狹山池全景 北から・1990年

図版2 狹山池の景観

- 1 東除(1989年)
- 2 西除(1989年)
- 3 龍神祠(1989年)

図版3 北堤断面

- 1 堤体保存箇所(中樋地点)
- 2 中樋地点西側断面
- 3 断面の整形作業
- 4 H鋼の挿入作業
- 5 第8層の液状化の跡
- 6 第8層の滑り痕

図版4 北堤断面

- 7 第10層灰土層の広がり
- 8 第10層灰土層断面
- 9 第10層灰土層遺物出土状況
- 10 第10層敷葉
- 11 第10層敷葉
- 12 第12層土壌積み(斜面部分)

図版5 北堤断面

- 13 東樋地点西側断面
- 14 東樋地点東側断面上裏積み
- 15 東樋地点東側断面
- 16 堤体の滑り痕(池内)
- 17 池内の砂層
- 18 堆積物の液状化の跡

図版6 北堤内出土遺物(1)

図版7 北堤内出土遺物(2)

図版8 木製枠工

- 1 土中に埋め込まれた丸太材
- 2 杖材と竹
- 3 東側断面

図版9 木製枠工

- 4 後方丸太材と梁の接続(西から)
- 5 後方丸太材と梁の接続(東から)
- 6 後方丸太材と梁の接続
- 7 横板どうしの接続
- 8 横板切断部
- 9 横板の鋸痕

図版10 中樋遺構

- 1 中樋遺構全景(上から)

図版11 中樋遺構(西側)

図版12 中樋遺構(東側)

- 4 樋本体(上から)
- 5 樋本体(切断された柱)
- 6 樋本体(側板間の梁)

図版13 中樋遺構

- 7 樋本体西側壁板
- 8 樋本体東側壁板
- 9 西側届板
- 10 東側届板
- 11 西側届板(背後から)
- 12 東側届板(背後から)

図版14 中樋遺構

- 13 西側石組
- 14 東側石組
- 15 東側石組の裏込め石

図版15 中樋遺構出土重源改修碑

1 碑文

2 側面

3 側面

図版16 中樋遺構出土石棺(1)

- 4 石棺1(上面)
- 5 石棺1(斜めから)
- 6 石棺2(斜めから)
- 7 石棺2(小口)
- 8 石棺3(斜めから)
- 9 石棺3(小口)

図版17 中樋遺構出土石棺(2)

- 10 石棺3(主軸方向から)
- 11 石棺3(墨書)
- 12 石棺4(斜めから)
- 13 石棺4(主軸方向から)
- 14 石棺5(斜めから)
- 15 石棺5(主軸方向から)

図版18 中樋遺構出土石棺(3)

- 16 石棺6(斜めから)
- 17 石棺6(主軸方向から)
- 18 石棺7(主軸方向から)
- 19 石棺7(小口)
- 20 石棺7(斜めから)

- 図版19 東極下層遺構(4)
- 21 石棺8(斜めから)
 - 22 石棺8(主軸方向から)
 - 23 石棺9(主軸方向から)
 - 24 石棺9(斜めから)
 - 25 石棺10(主軸方向から)
 - 26 石棺10(斜めから)

- 図版20 東極上層遺構
- 1 取水部正面
 - 2 上層・下層の重なり

- 図版21 東極上層遺構
- 3 取水部(正面上方から)
 - 4 取水部(上から)

- 図版22 東極上層遺構
- 5 取水部(西から)
 - 6 取水部 横蓋(前方から)
 - 7 取水部(背後から)
 - 8 取水部横蓋(背後から)
 - 9 取水部縫穴(上から)
 - 10 横管 接続部

- 図版23 東極上層遺構
- 11 横管砂蓋
 - 12 横管砂蓋の釘穴
 - 13 横管側板の墨書
 - 14 横管砂蓋の釘
 - 15 排水部(上から)

- 図版24 東極上層遺構墨書(1)

- 図版25 東極上層遺構墨書(2)

- 図版26 東極上層遺構墨書(3)

- 図版27 東極上層遺構墨書(4)

- 図版28 東極上層遺構印(1)

- 図版29 東極上層遺構印(2)

- 図版30 東極下層遺構

- 1 下層遺構全景
- 2 取水部

- 図版31 東極下層遺構
- 3 排水部(北から)
 - 4 盖板 接続部
 - 5 排水部 构型
 - 6 蓋板
 - 7 排水部付近の蓋板
 - 8 土留丸太

図版32 東極下層遺構

- 9 取水部(東から)
- 10 横管1・2の接続
- 11 取水部(前方から)
- 12 横管
- 13 取水部の転用材
- 14 蓋板ソケット式の接続

図版33 西極遺構

- 1 西極遺構全景(東から)
- 2 取水部(上から)

図版34 西極遺構

- 3 北側扁板
- 4 取水部(背後から)
- 5 南側扁板

図版35 西極遺構

- 6 上層遺構全景(北東から)
- 7 上層遺構全景(西から)
- 8 上層遺構全景(南東から)

図版36 西極遺構

- 9 横木本体壁板
- 10 横木本・横管組み合せ
- 11 横管切断部
- 12 横蓋を入れる溝
- 13 横管と棚板
- 14 八の字型板の接続

図版37 西極遺構

- 15 側板の加工痕
- 16 棚板
- 17 南側扁板(船板・南から)
- 18 南側扁板(船板・東から)
- 19 北側扁板(船板・北から)
- 20 北側扁板(船板・東から)

図版38 西極遺構

- 21 北側木製枠工(全景)
- 22 北側木製枠工(部分)
- 23 北側木製枠工板の接続
- 24 北側木製枠工梁と柱の接続
- 25 出土した木材
- 26 現地説明会風景

図版39 西極遺構出土材木(1)上層遺構

図版40 西極遺構出土材木(2)上層遺構

図版41 西極遺構出土材木(3)上層遺構

図版42 西極遺構出土材木(4)上層遺構

図版43 西極遺構出土材木(5)上層遺構

図版44 西極遺構出土材木(6)上層遺構

図版45 西極遺構出土材木(7)上層遺構

図版46 西極遺構出土材木(8)上層遺構

- 図版47 西極遺構出土材木(9)上層遺構
- 図版48 西極遺構出土材木03上層遺構
- 図版49 西極遺構出土材木01上層遺構
- 図版50 西極遺構出土材木02上層遺構
- 図版51 西極遺構出土材木03上層遺構
- 図版52 西極遺構出土材木00下層遺構
- 図版53 西極遺構出土材木03下層遺構
- 図版54 西極遺構出土材木00下層遺構
- 図版55 西極遺構出土材木07下層遺構
- 図版56 西極遺構出土材木08下層遺構
- 図版57 西極遺構出土材木09下層遺構
- 図版58 西極遺構出土材木09下層遺構・刻印(1)
- 図版59 西極遺構刻印(2)
- 図版60 西極遺構出土金属器(1)
- 図版61 西極遺構出土金属器(2)
- 図版62 西極遺構出土金属器(3)
- 図版63 西極遺構出土金属器(4)
- 図版64 東岸部
1 遺構全景(南から)
2 池内堆積物
3 建物址
- 図版65 東岸部
4 大溝(北から)
5 南側の遺構群
6 建物址の炉
7 建物址遺物出土状況
8 落ち込み内断面
9 池内堆積物断面
- 図版66 東岸部出土遺物
- 図版67 西除削壕部
1 石組 1(正面から)
2 石組 1(背後から)
3 石組 2(侧面から)
4 石組 2(西上方から)
5 狹山池西除ヶ崎岡(田中家文書・部分)
6 建築中の新しい洪沢吐(西除)
- 図版68 狹山池 1号窯
1 池尻遺跡(2)水戸上灰原跡
2 第1次調査区上層灰原・下層灰原
3 第1次調査区上層灰原検出状況
4 第1次調査区上層灰原検出状況
5 第1次調査区下層灰原検出状況
6 第1次調査区下層灰原遺物出土状況
- 図版69 狹山池 1号窯
7 第1次調査区灰原直ドピット群(東側)
8 第1次調査区灰原直下ピット群(西側)
9 第2次調査区下層灰原
- 10 第2次調査区下層灰原遺物出土状況
11 灰原と第1次堤体
12 灰原断面
- 図版70 狹山池 1号窯灰原出土遺物(1)
- 図版71 狹山池 1号窯灰原出土遺物(2)
- 図版72 狹山池 1号窯灰原出土遺物(3)
- 図版73 狹山池 1号窯灰原出土遺物(4)
- 図版74 狹山池 1号窯灰原出土遺物(5)
- 図版75 狹山池 1号窯灰原出土遺物(6)
- 図版76 狹山池 1号窯灰原出土遺物(7)
- 図版77 狹山池 1号窯灰原出土遺物(8)
- 図版78 狹山池 1号窯灰原出土遺物(9)
- 図版79 狹山池 1号窯灰原出土遺物(10)
- 図版80 狹山池 1号窯灰原出土遺物(11)
- 図版81 狹山池 1号窯灰原出土遺物(12)
- 図版82 狹山池 1号窯灰原出土遺物(13)
- 図版83 狹山池 1号窯灰原出土遺物(14)
- 図版84 狹山池 1号窯灰原出土遺物(15)
- 図版85 狹山池 1号窯灰原出土遺物(16)
- 図版86 狹山池 2号窯
1 狹山池 2号窯と狭山池
2 上層灰原(北側)
3 上層灰原(南側)
4 中層灰原(北側)
5 中層灰原(南側)
6 下層灰原(南側)
- 図版87 狹山池 2号窯灰原出土遺物(1)
- 図版88 狹山池 2号窯灰原出土遺物(2)
- 図版89 狹山池 2号窯灰原出土遺物(3)・狹山池 3号窯灰原出土遺物(1)
- 図版90 狹山池 3号窯
1 土層灰原
2 下層灰原
3 下層灰原遺物出土状況(北側)
4 下層灰原遺物出土状況(南側)
5 下層灰原遺物出土状況
6 下層灰原遺物出土状況
- 図版91 狹山池 3号窯灰原出土遺物(2)
- 図版92 狹山池 3号窯灰原出土遺物(3)
- 図版93 狹山池 3号窯灰原出土遺物(4)
- 図版94 狹山池 3号窯灰原出土遺物(5)
- 図版95 狹山池 3号窯灰原出土遺物(6)
- 図版96 狹山池 3号窯灰原出土遺物(7)
- 図版97 狹山池 3号窯灰原出土遺物(8)
- 図版98 狹山池 3号窯灰原出土遺物(9)
- 図版99 狹山池 3号窯灰原出土遺物(10)
- 図版100 狹山池 4号窯

- 1 灰原直下のビット列
 2 灰原断面
 3 灰原全景(東から)
 4 灰原全景(北から)
 5 灰原遺物出土状況
 6 灰原断面
- 図版101 狹山池 4号窯灰原出土遺物(1)
 図版102 狹山池 4号窯灰原出土遺物(2)
 図版103 狹山池 4号窯灰原出土遺物(3)
 図版104 東池尻 1号窯
- 1 遺構全景(北側上方から)
 - 2 窯体遺存状況
 - 3 窯体焼成部(上方から)
 - 4 窯体焼成部(北方から)
 - 5 窯体焼成部 1次床面
 - 6 窯体焼成部 2次床面
- 図版105 東池尻 1号窯
- 7 灰原全景(南から)
 - 8 灰原遺物出土状況
 - 9 灰原遺物出土状況
 - 10 灰原木材出土状況
 - 11 灰原東端の遺物出土状況
 - 12 灰原断面
- 図版106 東池尻 1号窯出土遺物(1)
 図版107 東池尻 1号窯出土遺物(2)
 図版108 東池尻 1号窯出土遺物(3)
 図版109 東池尻 1号窯出土遺物(4)
 図版110 東池尻 1号窯出土遺物(5)
 図版111 東池尻 1号窯出土遺物(6)
 図版112 東池尻 1号窯出土遺物(7)
 図版113 池尻遺跡(l) A・D調査区
- 1 落ち込み 1(北半分)
 - 2 落ち込み 1(南半分)
 - 3 A調査区全景
 - 4 落ち込み 1遺物出土状況
 - 5 水田畔と洪水砂
 - 6 土壌 2
- 図版114 池尻遺跡(l) A・D調査区出土遺物(1)
 図版115 池尻遺跡(l) A・D調査区出土遺物(2)
 図版116 池尻遺跡(l) A・D調査区出土遺物(3)
 図版117 池尻遺跡(l) B・C調査区
- 7 B調査区全景
 - 8 B調査区水田畔
 - 9 C調査区第2遺構面
 - 10 C調査区第2遺構面の溝
- 11 C調査区第3遺構面
 12 C調査区第3遺構面(遺物出土状況)
- 図版118 池尻遺跡(l) C調査区
- 13 C調査区第4遺構面
 - 14 C調査区第4遺構面の水田水口
 - 15 C調査区第4遺構面の溝状遺構
 - 16 C調査区第5遺構面の溝 1
 - 17 C調査区第5遺構面の焼土塊
 - 18 C調査区第5遺構面噴砂の痕跡
- 図版119 池尻遺跡(l) C調査区出土遺物
- 図版120 池尻遺跡(2)
- 1 調査区全景(東上方から)
 - 2 水田遺構
 - 3 煙造構
- 図版121 池尻遺跡(2)
- 4 掘り残し部分
 - 5 盛土遺構と水田遺構
 - 6 畑の検出状況
 - 7 灰原検出状況
 - 8 足跡の残された水田
 - 9 足跡
- 図版122 池尻遺跡(2)出土遺物(1)
 図版123 池尻遺跡(2)出土遺物(2)
- 図版124 池尻遺跡
- 1 A調査区(南から)
 - 2 A調査区(西側)
 - 3 A調査区(中央)
 - 4 A調査区(東側)
 - 5 B調査区(溜池 3 の木樋)
 - 6 B調査区(木樋)
- 図版125 取水塔
- 1 遷景
 - 2 下から
 - 3 内部
 - 4 解体作業
 - 5 吊り上げ作業
 - 6 搬送
- 図版126 遺構の保存処理
- 1 木製枠工(ウレタン塗装)
 - 2 木製枠工(ウレタン塗装完了)
 - 3 木製枠工(吊り上げ作業)
 - 4 木製枠工(保存処理施設内部)
 - 5 東機遺構の搬送
 - 6 木製遺物保存処理施設

第1章 序 章

第1節 調査にいたる経過

狹山池は記紀にも記載されたわが国でもっとも古い段階の溜池である。かねてより周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡の扱いをうけ、大阪府の史跡名勝としても指定されている。狹山池は現在でも農業用溜池として広く利用されているが、また一級河川西除川(旧天野川)がこの池に流入し、また流出しているために溜池自体が西除川の一部としてダム機能を果している。狹山池に灌漑機能だけではなく治水機能を持たせるためにダム化工事を行う計画は以前から存在したが、1982年夏の大暴雨によって下流で洪水が発生し大きな被害をもたらしたことが契機となり、狹山池治水ダム工事は一挙に具體化することとなった。狹山池はもちろん周知の文化財であったために、地元の大坂狹山市では1985年に市内在住の考古学者故木永雅雄氏を委員長とした狹山池調査委員会を設置して調査への体制を整えた。この調査委員会は狹山池をめぐる総合的な調査を志向したものであり、自然科学者を含む多彩なメンバーで構成されている。その後、大阪狹山市教育委員会では、具体的な調査の主体をどこに置くかをめぐって、工事主体者の大阪府上本部や、大阪府教育委員会と協議を続け、1987年7月に狹山池調査事務所を設立し、調査を推進する体制が整った。調査事務所の理事としては、府・市の職員の他に狹山池調査委員会の委員を委嘱した。他の開発にともなう調査とは異なり、狹山池には古くから継続して使用してきた溜池という特殊性があるため、発掘調査はもとより、古文書調査や、地理学・古生物学・土木工学などのさまざまな分野の調査も狹山池調査事務所に大阪府が委託して行うこととなった。これら多様な調査の成果のうち、狹山池に関する文献史料については平成7年度に当事務所より『狹山池』史料編をすでに刊行している。また発掘調査以外のさまざまな調査に基づく論考については今後報告書として刊行する予定である。したがって本報告書は狹山池調査事務所が刊行する調査報告書の第2冊ということになる。

昭和62年度に発足して以来、狹山池調査事務所が実施した発掘調査等は以下の通りである。本報告書では、年度ごと、調査区ごとの報告という形式をとらず、構造の性格によって分類し、北堤堤体の調査、樋の調査、周辺部の調査、窯跡の調査、下流遺跡の調査という構成をとっている。

以上の調査の成果については現地説明会(計6回開催)や、年度ごとの概要報告書において報告し、また大阪狹山市教育委員会が主催した狹山池フォーラムその他の機会にも成果の一端は報告してきているが、本書においては調査成果を再検討し、これまでの発表を若干修正した部分もある。

表1 年度ごとの発掘調査

昭和62年度	狹山池内岸部の遺物分布調査
昭和63年度	池尻城跡試掘調査
平成元年度	狹山池内岸部試掘調査
平成2年度	東岸部発掘調査・狹山池2号窯発掘調査
平成3年度	池尻城跡発掘調査・狹山1号窯遺跡(1)発掘調査・狹山池3号窯発掘調査
平成4年度	池尻城跡発掘調査・池尻遺跡(2)発掘調査・東池尻1号窯発掘調査
平成5年度	木製枠工発掘調査・中橋遺構発掘調査・狹山池1号窯発掘調査・西極遺構発掘調査
平成6年度	西極遺構発掘調査・東極遺構発掘調査・北堤断面観察調査
平成7年度	東極遺構発掘調査
平成8年度	狹山池4号窯発掘調査・西除崩壊部発掘調査
平成9年度	整理作業

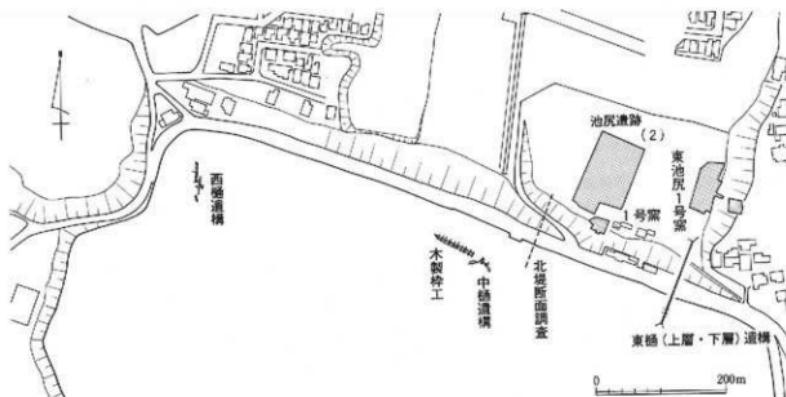


図1 狹山池北堤付近の遺構位置図 (S=1/7,500)



写真1 現地説明会（池尻遺跡2）



写真2 作業風景（東極遺構）

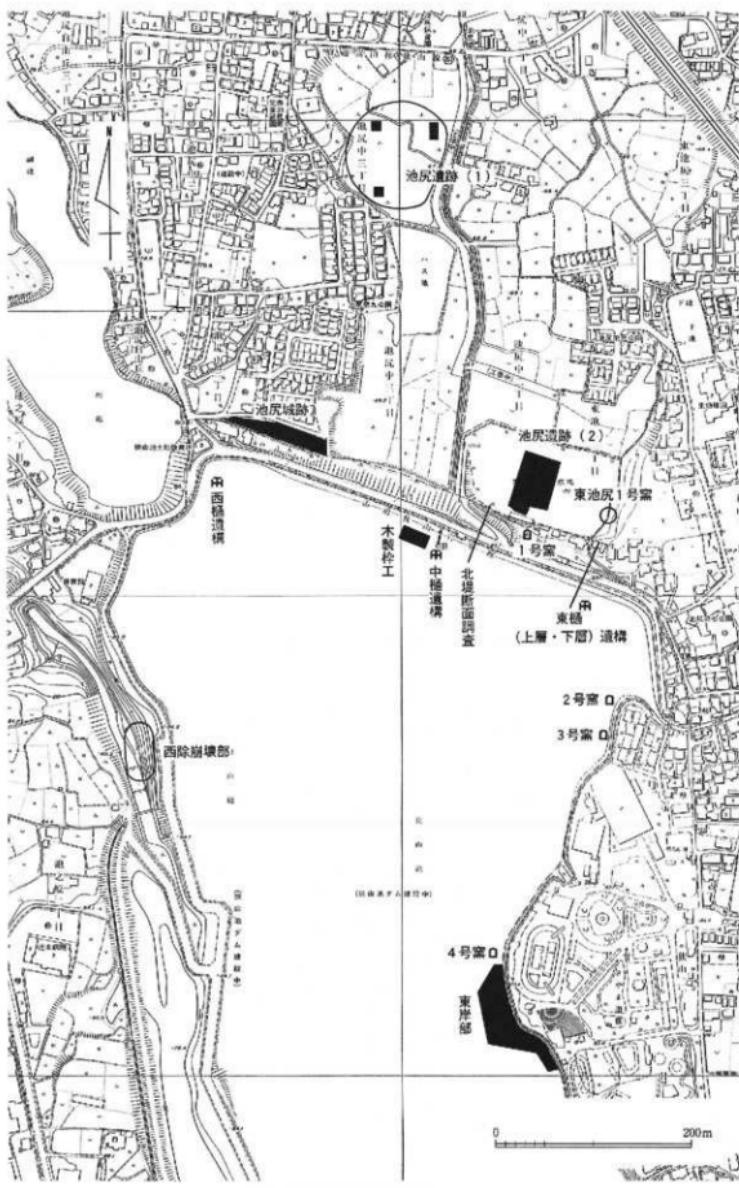


図2 発掘調査箇所位置図 (S=1/5,000)

第2節 狹山池周辺の自然環境

1 位 置

狹山池は大阪府南部に位置する大阪狹山市のはば中央部に所在する人工の溜池で、溜池水面および堤防が埋蔵文化財包蔵地および大阪府の史跡名勝となっている。池の中心部は北緯34度30分、東経135度33分20秒であり、池の南北の長さは最大で約960m、東西の長さは560mである。池の外周の長さは約3.8kmである。後にも述べるように狹山池は谷地形を、磁北に対して約70度の角度をもつ北西—南東方向の堤防によって締め切って作られているが、現在の堤防の長さは直線部分が約490mである。

2 地形環境

大阪府南部の地形は、和歌山県との府県境を形成する和泉山脈と、そこから緩やかに下降して北上および西進する複数の尾根と丘陵を特色とする。このうち北上する尾根のひとつは羽曳野丘陵を、別の先端は陶器山丘陵などの高位段丘を形成している。狹山池は中央に西除川(旧天野川)を配し、羽曳野丘陵と陶器山丘陵に挟まれた扇状地を刻む谷の一部を堤で締切って築造されている。狹山池から北側に広がる扇状地形の表面はおおむね起伏の少ない平坦な台地(段丘)であるが、細部には南北方向を基調とした開析谷や旧河道がみられる。これらの谷地形のうち最も規模の大きなものが、現在の西除川の氾濫原および谷底平野である。当初その流路は広域に及んでいたが、下方浸食によって中位段丘崖を形成したと思われる。その後中位段丘の間にできた谷を埋めて、西除川の右岸に沖積段丘が、やがて氾濫原・谷底平野・自然堤防などの形成が進んだと考えられる。

狹山池をとりまく広域の地形環境は以上の通りである。次に狹山池周辺の微細な地形環境についてH・下野義氏の研究によりながら述べていきたい。^③ 狹山池東側の羽曳野丘陵は、東寄りに分水界を持ち、尾根線の標高は160mから130mで、北へ向って高度を下げていく。また狹山池の西側に位置する陶器山丘陵も標高153mの最高点から北に少しづづ低くなっていく。両丘陵ともに深い開析谷を持ち、特に陶器山丘陵に深く入り組んだ二つの谷は狹山池のかつての湖岸線にも影響を与えていた。狹山池はこのような二つの丘陵の間に発達した段丘の崖を利用して築造された溜池である。段丘は旧天野川の侵食作用によって形成されたものであるが、築造当初の狹山池の東岸となつたのは北堤付近において高さ80m程度の中位段丘であり、西岸は標高75m程度の低位段丘を利用している。狹山池に流入するもっとも大きな河川はもちろん西除川(旧天野川)であるが、さらに狹山池の西南の大阪狹山市今熊に源流をもつ三津川も北東に向かって流れて旧天野川と合流していた。二つの河川は狹山池の拡大によって直接狹山池に流入することとなつたが、その流入地点付近には土砂が堆積してデルタ状の地形が形成されている。この部分については江戸時代中期以降新田開発が行なわれている。

3 気象

狹山池周辺の気象は、温暖少雨で積雪もほとんどない瀬戸内海式気候に含まれる。灌漑用溜池であ

る狹山池が古代に築かれ、以後現在にいたるまでその機能を果たし続けてきたのも、狹山池をとりまくこのような気象条件があったからである。表2は狹山池の北側にあたる堺と、南側の河内長野観測所の気候データであるが、山間部の河内長野の降水量が堺よりも一割ほど多いことに気付く。この中に位置する狹山池は、やや豊富な南側の雨を一旦貯水し、水の乏しい北側の平野の灌漑に利用する機能をもっている。

表2 堀・河内長野の年間降水量(1975年～1984年の平均)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
堺	32	53	88	117	135	206	116	110	149	106	62	40	1,214
河内長野	39	61	93	117	138	213	131	111	152	117	86	47	1,304

4 植 生

狹山池周辺の植生については、今回のダム工事に先立って姫大阪府緑化・環境協会によって詳細な調査が行われている。²⁾ その結果によると狹山池の東北部・西北部の斜面においてはクヌギ・コナラなどの落葉広葉樹林の群落がみられ、また池の東および西側には帯状にスルア・タラノキなどの好陽性の落葉低木の群落がみられた。このほか南側の道など草刈りなど的人為的干渉の著しい箇所においてはシロツメクサ・ギョウギシバなどの低茎草本群落がみられた。また池の内部においては、南岸部分においてヨシの群落がみられ、西除川流入口付近においてはキシユウズズメノヒエ群落、セイコノヨシ群落がみられた。そのほか池の西部においてはマコモ群落がみられ、南側の広い範囲でヒシ群落がみられた。これらの植生はもちろん狹山池の築造以後形成された二次的なものであるが、これも今回のダム工事によって大きな変化を受けている。



写真3 工事前の狹山池内 (1987年冬)



写真4 工事前の狹山池 (1985年 北側上空から)

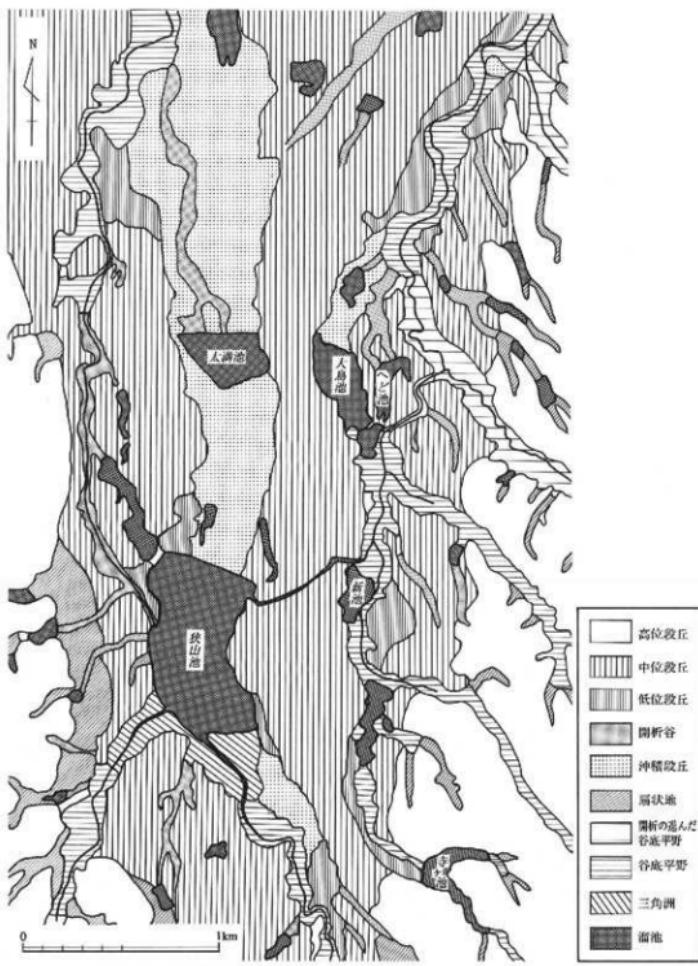


図3 狹山池周辺地形分類図（日下雅義『歴史時代の地形環境』より引用）（S=1/25,000）

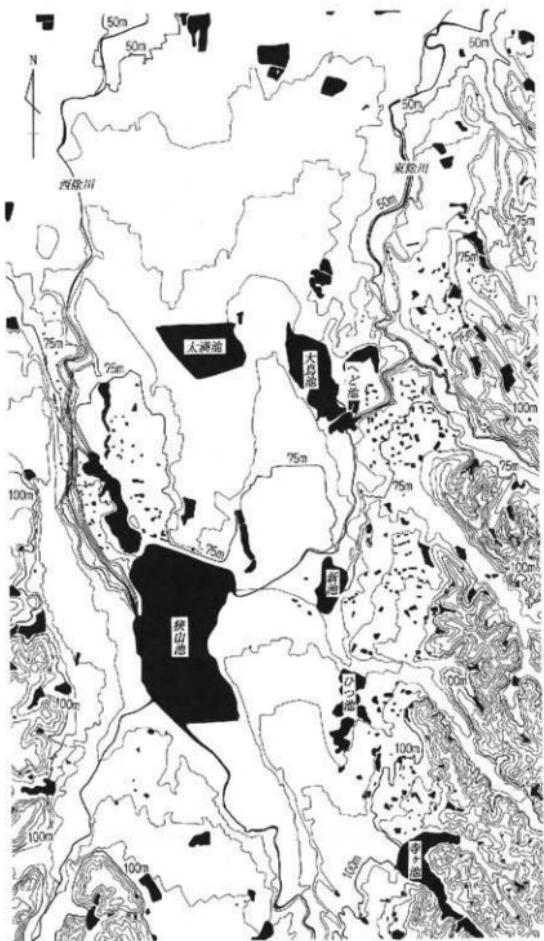


図4 横山池周辺等高線図 (S=1/25,000)

第3節 狹山池周辺の歴史環境

次に狹山池の周辺および、狹山池に密接に関連する狹山池灌漑範囲における歴史的環境について述べる。

狹山池内部においてはいくつか縄文時代のものと思われる石器などの打製石器が採取され、また近くの寺ヶ池においても旧石器時代の有舌尖頭器が、またひつ池や池之原でもナイフ形石器が採集されている。寺ヶ池においては縄文時代のスクレイバーや石器が大量に採集されており、当時から狹山池周辺が縄文人の狩猟の場であったことが推測できる。付近の縄文時代の集落遺跡としては鉛織遺跡が著名であるが、旧天野川流域ではこの時期の集落遺跡はいまだ確認されていない。弥生時代後期になると狹山池周辺でも集落遺跡がみられるようになってくる。狹山池の南側約3kmの場所にある柴曳木遺跡は弥生後期の高地性集落である。しかしながら中野遺跡や大師山遺跡などがみられる石川流域に比較して旧天野川流域には弥生時代以前の遺跡は極めて少ない。

古墳時代にはいると狹山池西側の泉北丘陵には多くの須恵器窯が築かれ、当時のわが国における代表的な須恵器生産地の一部を形成する。5世紀に開始された須恵器生産は6世紀に至り、爆発的な発展をみせ、窯の数も急激に増加する。それにともない、当初は西部の丘陵地帯に限定して分布していた須恵器窯も東部にまで広がり、登り窯の築造には比較的不向きな段丘崖や小規模な谷を利用して窯が造られるようになる。本書において報告する狹山池の東岸を形成する段丘崖に築かれた窯もその一部である。古墳時代の遺跡としてはこれまで須恵器窯の存在が知られていただけであったが、狹山池ダム工事にともなう発掘調査によって狹山池北側の低地において古墳時代前期から継続する池尻遺跡が発見されている。

この地域の生活史にとって狹山池の築造は非常に大きな意味を持っている。狹山池が築造された7世紀初頭を契機として、狹山池周辺および流域地域では遺跡の様相に大きな変化が生じている。狹山池にもっとも近い池尻遺跡では整然とした畦をもつ水田が検出されており、また下流の美原町域においても大規模な集落遺跡がみられるようになる。太井遺跡においては6世紀末から7世紀中葉にかけて東西あるいは南北方向の溝がみられるようになり、7世紀から8世紀にかけては集落が営まれるようになる。^④ 半尾遺跡においても6世紀末から7世紀中葉にかけての整然と並んだ大規模建物が検出されている。^⑤ またこのような集落遺跡の増加とともに関連して狹山池周辺では寺院の建立がみられるようになる。狹山池の北方約4kmに所在する黒山廃寺は、出土する瓦から考えて7世紀後半の創建と考えられ、また狹山池の北1.5kmの東野廃寺も7世紀中葉から後半の創建と考えられる。^⑥ 東野廃寺は狹山池中権筋のもっとも重要な子池である太満池にはほど近く狹山池の水利にもかかわった可能性が強い。これらの集落遺跡の増加や寺院の建立は狹山池築造と深く関連した事項として考えるべきであろう。

築造以後、狹山池の周辺では狹山神社遺跡・半田遺跡・池尻城跡・狹山藩陣屋跡など各時代の遺跡が段丘面を中心に展開されることとなる。狹山神社は延喜式にも記載された古社であるが、背後に広がる森林にはコ字型の上墨がめぐっていることも近年実施された測量調査などで明らかになっている。^⑦ この土墨内部については部分的な試掘調査も行われているが、平安期の瓦をはじめとする多くの遺物が検出されている。^⑧ また半田遺跡においても大阪府立狹山高校の建設にともなって大規模な発掘調査が実施されている。^⑨ この調査では中近世の集落跡が検出されている。古代、中世の集落遺



図5 狹山池周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

跡や寺院は狹山池の水下でも同様に多数検出されている。美原町から堺市にかけて広がる口置莊遺跡では8世紀以降継続的に集落が営まれる。特に13世紀の集落からは鉄造造構が検出されているのが注目される。^④ 同様の鉄造造構は美原町の太井遺跡や丹上遺跡、松原市の立部遺跡など狹山池水下の多くの遺跡から出土しており、文献史料によって知られていた河内鉄物師の活動の痕跡を示すものと考えられている。狹山池の影響を農業面だけで評価すべきでなく中世村落の中にも工業など多様な要素が混在していたことが示されている。狹山池のすぐ北に所在する池尻遺跡では13世紀の屋敷跡が検出されており、またそのすぐ東の庄司庵遺跡でも13世紀後葉の土器が出土している。^⑤ 狹山池では建仁2年(1202)に重源による改修が行われているが、これらの遺跡は狹山池の改修と関連した再開発によるものである可能性がある。先に述べた口置莊遺跡では14世紀にはいると周囲を堀によって区画された一町四方の大規模な居館が建設されている。この遺構はその規模から考えて南北朝の内乱と関連する遺構と考えられるが、同時期の城は美原町の大鑿城や、堺市の野田城など西除川沿いに点々と分布している。狹山池のすぐ北東にも池尻城が所在している。この遺跡は大阪府教育委員会によって発掘調査がなされ、13世紀末から15世紀前半にかけての城館であるとみられている。^⑥ 池尻城の立地はこの場所が下高野街道沿いの交通の要地であったことによるものと考えられるが、狹山池の水利を掌握する目的もあったのではなかろうか。

近世にはいると狹山池の畔には狹山藩陣屋が築かれる。狹山藩陣屋跡は狹山池の北東に設置された上屋敷と、狹山池東側(現在の南海さやま遊園地)の下屋敷から構成される近世の陣屋跡である。陣屋は狹山池を一種の防御線として利用して設けられたものであり、支配の面でも狹山池との関連が深い。

第4節 狹山池をめぐる研究史

1 考古学

本節では狹山池をめぐるこれまでの調査、研究の成果の整理を行うこととした。

狹山池内外における遺跡の有無、あるいはその性格については、狹山池の築造、修復の問題と深く関連しながらこれまで議論が重ねられてきた。このように狹山池の研究が比較的多かったのは、すでに述べたように狹山池の名が記紀にも登場するわが国でも最古の段階の溜池であると考えられ、しかもその灌溉範囲が百舌鳥と古市との両古墳群の間という古代史上の重要な地点にあたるからである。

初期の狹山池研究をリードしたのは地元狹山の住民でもあった考古学者故末永雅雄氏であった。大正から昭和にかけての狹山池大改修に際して、文化財調査を担当した末永雅雄氏は、北堤の中において石棺を転用した石橋などを調査している。これらの調査結果は『大阪府史蹟名勝天然記念物第1号』^⑨『狹山池改修誌』^⑩などに掲載され、その後の研究の基礎資料となっている。末永氏は戦後に著書『池の文化』^⑪を発表しているが、その中で池岸の須恵器窯との時期的な問題に触れ「たとえ狹山池がすでにそのむかしに築造されてあったとしても、貯水位が低く汀線はずっと今日よりも内方にあって、陶業者達はこの水を利用して製陶に従事した考えると、いま窯跡はいくらあっても池の築造年代を、右の貞觀元年の記事に準拠しなくもよく、その年代的な長さは須恵器の初現に通ることができるから西暦三世紀を下ることはなかろう。」と述べている。狹山池の築造年代は末永氏以来常に周辺の須恵器窯との関連で論じられてきた。森浩一氏は、昭和30年代に当時の狹山町内の須恵器窯の分布調査を行い、昭和42年(1967)に刊行された『狹山町史』の中で狹山池内における5ヶ所の須恵器窯について解説している。^⑫ 森氏はその後、『大阪府史』第1巻のなかでこれらの須恵器窯の年代が6世紀であることを根拠に、狹山池築造の年代を6世紀後半から7世紀初頭と推定している。^⑬ 狹山池内の須恵器窯と、狹山池築造年代の関連については、森氏以後、野上丈助氏も狹山池内の須恵器窯と池の築造年代の関係について触れ、森氏の見解には賛同を示している。^⑭ これらの研究はいずれも狹山池周辺の遺跡のうち、須恵器窯について注目したものであった。今回のダム工事以前には冬期に池水が干上了った時、池内を歩いてみるとかなり広い範囲で須恵器片の散布がみられ、その中には明らかに窯の灰原と思われる箇所も見られた。しかしながら、これらの発掘調査は未実施であり、詳細は不明であった。また須恵器窯以外の性格の遺構については、その存在すら議論されることもなかった。その中で1985年狹山池西北部の高台において大阪府教育委員会によって池尻城跡の発掘調査が行われている。^⑮ 池尻城は狹山池の築造よりはるかに後世の南北朝時代の城跡であったが、この発掘によつて狹山池周辺にはさまざまな性格の遺跡が散在し、それらとの有機的な関連において狹山池の歴史的性格を考える必要が明確となってきた。この池尻城跡の発掘調査において多くの奈良時代の遺物が出土し、行基が設けたといわれる狹山池院との関連が指摘されたのはその一例であろう。

また昭和初期の改修工事によって中樋の下流側からは計7基の石棺等が出土している。これについては調査を担当された末永雅雄氏はさまざまな著書において、その図面を報告し、また『南無阿弥陀仏作善集』などの記載から、鎌倉時代初頭の僧重源の改修によるものと推測している。^⑯

今回の狹山池ダム化工事にともなう文化財調査が開始されて以降、本書でも報告する諸遺構の出土をみたため、それらを材料として研究がいくつか出されている。工業普通氏は狹山池にみられた敷葉

工法の類例を広く集め、その源流を朝鮮半島や中国大陆に求めた。⁸ また市川も狭山池で検出された樋の形態を紹介し、他の樋の出土例も参照しながらわが国における樋の系譜を解説している。⁹

2 文 献 史 学

狭山池の名は古事記や日本書紀に次のように記載されている。

- 六十二年秋七月乙卯朔丙辰、詔曰、農天下之大本也、夙所恃以生也、今河内狭山埴田水少、是以、其国百姓怠於農事、其多開池溝、以寬民業、冬十月、造依網池、十一月、作菟坂池、反折池、一云、天皇居桑間宮、造之ニ池也(『日本書紀』崇神天皇紀)
- 次、印色入日子命者、作血沼池、又狭山池(『古事記』垂仁天皇紀)

これらの記事はわが国の溜池の記載の中でももっとも古いものであるため、狭山池は我が國最古の溜池といわれ、さまざまな歴史辞典においても溜池の説明の項目では必ず取り上げられている。文献史学からの狭山池に関する研究も枚挙にいとまがないが、代表的なものを紹介しておきたい。戦前の研究としては当時一流の学者が我が国的主要な土木遺産について時代別に集成解説した『明治以前日本土木史』¹⁰に狭山池が紹介されている。戦後、農業史学者の古島敏雄氏は『土地に刻まれた歴史』¹¹を著し、地形環境や条里制の施行との関係で狭山池の築造の問題を取り上げている。

狭山池は奈良時代に僧行基によって改修が行われたことが『行基年譜』などの文献資料にみられる。また天平宝字6年(762)にも堤が決壊したため83,000人余の労働力を投入して工事が行われたことが『続日本紀』にみえるが、これらの改修については井上薰氏が詳細な研究を行っている。¹²

中世については東大寺の再建工事を進めた僧重源が狭山池の改修を行ったことが「南無阿弥陀仏作善集」に記されている程度で文献史料はきわめて少ない。したがって中世の狭山池をめぐる研究もほとんどなされていない状況である。しかしながら中樋造構の発掘調査によって重源狭山池改修碑が検出されたことにより今後中世の狭山池の研究が進展するきざしがみられる。

狭山池は近世初頭の慶長13年(1608)に片桐且元によって大改修が行われている。本書に報告した中樋造構をはじめとした諸造構も大半がこの改修によって築造されたものである。近世にはこの改修以後も度々改修が行われている。近世の狭山池については多くの古文書、絵図が地元に残されていることもあって研究が多い。喜多村俊夫氏は全国の水利慣行を歴史的に集成した研究の中で狭山池西樋筋の中心的な溜池であった森池の潰廃と、それを利用していた中筋村など堀廻りの農村の水利について述べている。¹³ また福島雅蔵氏は『狭山町史』など多くの著書、論文で狭山池の水利慣行、水利組織について述べている。^{14~16} 福島氏の研究は狭山池が下流に与えた影響を見る上で重要である。ただ近世史においても今回の発掘で検出された樋や堤など水利施設の土木史的な研究はない。

狭山池関係の文献史料については、近世を通じて池守を務めた田中家文書をはじめ、流域の旧家にも多量に残されている。これらの一部は『狭山池改修誌』¹⁷ や1966年に刊行された『狭山町史』史料編¹⁸に掲載されている。狭山池調査事務所でも調査開始依頼、近世文書、絵図の収集、写真撮影、読解などの作業を継続し、平成7年度に『狭山池』史料編¹⁹を刊行している。狭山池の発掘調査は、考古学的な発掘データと、豊富に残された文献史料を照合しながら進めていく必要がある。

3 地 理 学

文献史学や考古学の成果を取り込みながら、地理学の立場から狭山池の全容を解説したのが日下雅

義氏の研究である。^⑧ 日下氏の研究は、狭山池周辺の地形分類をもとに各時代の狭山池を復原したもので、築造当初の狭山池の堤が現在のものより随分小さかったこと、堤の嵩上にともなって池の面積も推移したことなど非常に重要な指摘を隨所に含んでおり、今回の発掘調査を進める上で大きな指標となつた。日下氏の研究は自然地理学と歴史地理学の境界領域を開拓したものといえるが、人文地理学の立場から狭山池および水下の溜池にアプローチした研究として川内谷三氏の一連の研究がある。^{⑨・⑩} 川内谷氏の研究は溜池の漬廃状況を主として考察したものであり、これまで遺跡として扱われてこなかった溜池の保存活用を考える上でも重要である。

4 自然科学

土木工学、地質学など自然科学から狭山池を取り上げた研究は今回の調査が開始されるまではほとんどなかつた。しかし狭山池の文化財調査は、発掘だけではなく、文献調査や自然科学的な調査を含んだ総合調査の形をとつたこともあって調査開始後は多くの研究がうみだされることとなつた。ことに現地調査や、ボーリングデータの分析によって堤体の構造および池内の堆積物については多くの研究が蓄積され、これらの成果は発掘調査を進める上で重要な示唆をあたえた。また堤体や堆積物の年代決定などの面で発掘成果や文献調査の成果が、これらの研究に利用されることも多く狭山池においては総合調査は非常に良好に機能したといえよう。また大阪府土木部によって進められている北堤断面の保存処理についても、わが国でも初めての試みであることから、その保存処理方法をめぐって多くの研究が蓄積されている。これらの自然科学的な調査の成果のうちいくつかについては、今後刊行される『狭山池』論考編において紹介される予定である。またこれらの研究のうちいくつかはこれまで学術雑誌などに発表されている。^{⑪～⑯}

注)

- ①日下稚義『歴史時代の地形環境』古今書院 1980
- ②財団法人大阪府緑化・環境協会『狭山池自然環境調査報告書』 1986
- ③『太井遺跡(その2)』大阪府教育委員会・鶴大阪文化財センター 1987
- ④『平尾遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1975
- ⑤上田睦『藤井寺市及びその周辺の古代寺院(?)』藤井寺市教育委員会 1987
- ⑥『狭山神社遺跡測量調査報告書』大阪狭山市教育委員会 1989
- ⑦『狭山神社遺跡試掘調査報告書』大阪狭山市教育委員会 1990
- ⑧『半田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1981
- ⑨『日置莊遺跡』大阪府教育委員会・鶴大阪文化財センター 1995
- ⑩『大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書7』大阪狭山市教育委員会 1997
- ⑪『池尻城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1987
- ⑫末永雅雄『狭山池』(『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第1回』1930 所収)
- ⑬『狭山池改修史』大阪府 1931
- ⑭末永雅雄『池の文化』創元社 1947
- ⑮森浩一『土器の生産』(『狭山町史』本文編 1967 所収)
- ⑯森浩一『狭山池とその年代』(『大阪府史』第1巻 1978 所収)
- ⑰野上丈助『河内における泡瀬開発についての覚書』(『羽曳野史』3号 1978)
- ⑲『池尻城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1987
- ⑳末永雅雄『池の文化』創元社 1947 など
- ㉑T. 桑善通『日本古代の土木技術に関する予察』(『奈良国立文化財研究所創設40周年記念論文集』1995)
- ㉒市川秀之『井堰と溜池』(『考古学による日本歴史』2 雄山閣 1996 所収)

- ◎社團法人上木学会『明治以前日本土木史』岩波書店 1936
- ◎古島敏雄「土地に刻まれた歴史」岩波書店 1957
- ◎井上薰「律令制下の狭山地域」(『狭山町史』本文編 1967 所収)
- ◎喜多村俊夫「日本灌溉水利慣行の歴史的研究」各論編 岩波書店 1973
- ◎福島雅彦「近世の狭山池と美原町域の村々一小平尾村の狭山池懸かり入用銀一件」(『美原の歴史』第2号 1976年)
- ◎福島雅彦「近世河内狭山池の分水慣行」(大阪歴史学会編『封建社会の村と町』1960 所収)
- ◎福島雅彦「狭山池」(『狭山町史』本文編 1966)
- ◎『狭山池改修誌』大阪府 1931
- ◎『狭山町史』史料編 1966
- ◎狭山池調査事務所『狭山池』史料編 1996
- ◎日下雅義「歴史時代の地形環境」古今書院 1980
- ◎川内昇二「狭山池灌漑地域における溜池潮流とその保全について」(『大阪をみる視点と地理教育』地理教育研究会大阪サークル 1986)
- ◎川内昇二「堺市金田(現金岡町)における溜池潮流とその変貌」(『攝河泉文化資料』第41号 1990)
- ◎西田一彦「古い堤体の構造と土性について」(『第25回土質工学研究発表会講演集』 1990)
- ◎三田村宗樹・吉川周作・里口保文・内山高・Sunardi, E・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「狭山池の堆積物(その2)」(『日本地質学会第102回学術講演要旨』 1995)
- ◎三田村宗樹・吉川周作・里口保文・内山高・Sunardi, E・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「大阪狭山市狭山池北堤体の崩壊跡断面について」(『Proceedings of the 5th symposium on Geo-environments and Geotechnics』 1995)
- ◎榎木玲美・後藤敏一「大阪南部・狭山池堆積物の珪藻群集—鎌倉時代以降の狭山池の水域環境変遷—」(『日本第四紀学会講演要旨集』 1995)
- ◎吉川周作・三田村宗樹・里口保文・内山高・Sunardi, E・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「狭山池の堆積物(その1)」(『日本地質学会第102回学術講演要旨』 1995)
- ◎吉川周作・三田村宗樹・里口保文・内山高・Sunardi, E・榎木玲美・中村俊夫・市川秀之・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「狭山池の堆積物」(『日本第四紀学会講演要旨集』 1995)
- ◎藤田健二・北田隆久・橋良忠・川地武「狭山池の堤体構造とその保存技術」(『遺跡の保存技術に関するシンポジウム発表論文集』 1995)
- ◎企盛弥・古澤裕・木村昌弘・西園恵治「歴史的ダム保全事業の取り組みについて」(『土木史研究』第15号 1995)
- ◎企盛弥・古澤裕・木村昌弘・西園恵治「古代の堤体が語る土木技術について」(『土木史研究』第15号 1995)
- ◎辻本勝彦・市川秀之・西田一彦・西形達明・田中久丸「狭山池の歴史と堆積物の物理・力学的性質—ジオアーケオロジーの一試み—」(『遺跡の保存技術に関するシンポジウム発表論文集』 1995)
- ◎西田一彦「遺跡に学ぶ知恵と技術」(『地盤工学会関西支部平成8年度総会特別講演資料』 1996)
- ◎内山高・兵頭政幸・吉川周作「溜池堆積物の古地磁気年代測定」(『第四紀研究』36-2 1997)
- ◎西田一彦「狭山池における古代技術の発掘と保存」(『地盤工学会関西支部平成9年度講話会資料』 1997)
- ◎吉川周作・三田村宗樹・内山高・長橋良隆・榎木玲美・Edy, Sunardi・里口保文・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「大阪狭山市狭山池堆積物における液状化跡」(『地質学雑誌』第103巻10号 1997)
- ◎内山恵美子「ため池立地に関する地質学的要因—大阪府下のため池を例として—」(『第四紀研究』30号 1998)

第2章 調査の結果

第1節 北堤堤体の調査

I 北堤断面

1 調査の経過

狹山池は大きな南北方向の谷を北側で堰きとめて築造した溜池であるため、北堤の歴史は狹山池の歴史をそのまま表現したものといえる。しかしながら今回の調査が開始される以前は、狹山池の堤防の断面がどのような状態であるのかはまったく不明であった。

このような中で、大阪府がダム工事のために北堤において実施した数多くのボーリングデータなどの分析が進み、狹山池北堤の内部には築造当初の堤体が残存している可能性が指摘されることとなった。狹山池調査事務所では西田一彦氏(関西大学教授)に依頼し、大阪府がダム工事計画のために北堤で施工したボーリングデータの分析を1987年に行っていている。^① 西田氏は土質工学的な見地からボーリングコアの土質検査を行い、その結果から狹山池の堤体の内部には古い堤体が残存しているとの結論を得ている。そして翌1988年には北堤上で狹山池調査事務所が主体となりボーリング調査を実施し、その分析を西田氏、粉川昭平氏(大阪市立大学名誉教授)、三田村宗樹氏(大阪市立大学講師)、外山秀一氏(皇學館大学助教授)等に依頼した。^② このボーリングは当初より堤体の内部状況を歴史的に探ることに重点を置いたものであったため、その成果も非常に大きかった。まず注目されたのは堤体内部に数層の有機物層がみられたことである。これはある時期の狹山池の堤防の表面である可能性が強く、また有機物の洗い出しと花粉やプラントオパールの同定によって表面の植生もある程度明らかになった。もっとも大きな成果は堤防築造以前の地表面の植生層を検出できたことである。外山秀一氏が行ったプラントオパールの分析ではこの層からイネのプラントオパールが検出され、狹山池築造以前には水田が付近に存在していたことが明らかになった。また木越邦彦氏(学習院大学教授)に依頼して実施されたこの有機物層の炭素同位体年代測定法においては、570年±250年という年代が導きだされている。^③ この数字をそのまま狹山池築造時期の上限とすることはできないが、その後行われた発掘調査の成果を考えれば、非常に意味のある数字が導きだされていたこととなる。これらの成果を受けてダム工事を施工している大阪府土木部においてもこの堤体が貴重な文化財であるという認識が強まり、堤体の調査およびその保存を検討するための狹山池堤体保存検討委員会が1990年8月に設立されている。事業者側が積極的に歴史的文化遺産の大規模な調査、保存に取り組んだという点でこの大阪府土木部の方針は大きな意味を持っている。同年12月には堤体の内部を探るために大阪府によってボーリング調査、深礎工、物理探査、上流側法尻の掘削などが行われた。これらの調査の結果、やはり狹山池の堤体の内部には築造時の堤体が残存しており、その後数次の嵩上による層も残存していることが確認された。とくに深礎工による調査では、北堤の天端付近から直径1.8m、深さ20mのマンホール状の穴が掘られ、その断面の観察を実施できたために多くの成果があった。特に古い時期の堤体に



写真5 北堤と堤体保存箇所



写真6 堤体保存作業

カシ類の葉が土の間に敷かれた状態で残っていることが注目された。この工法はこの時点で敷葉工法と命名された。この名称は以下の報告においても引き続き使用する。また堤防の盛土に須恵器の灰原が利用されていることも観察できた。これら一連の予備的な調査によって、狹山池の北堤は最初の堤体の上に何處かの嵩上工事を経て現状に至っていることが明らかになった。堤体保存検討委員会では、この結果を受けて堤体の断面を目にする状態で保存するための検討作業に入った。さまざまな方法が検討されたが、結果的には堤体の断面を大型ブロックの形で採取し、樹脂含浸によってそれを固める方法が取られることとなった。^⑨ その後さまざまな実験が行なわれ、ブロックは横3m、縦1.5m、厚さ0.5mの規模となった。北堤の断面はこのブロック100個分の大きさになる。またブロックの採取や保存に失敗することも想定し、同時に断面表面のはぎ取りも実施することとなった。堤体保存を行う箇所については特に慎重に検討され、ポーリング調査や電磁探査が行われた。最終的には中樋の場所よりも少し東側に保存箇所が決定した(図1参照)。この場所を以下の報告では中樋地点と呼びたい。また以下の報告においては堤体保存箇所以外に東樋造構において狹山池調査事務所が実施した堤体の断面調査についても報告することとする。こちらは東樋地点と呼称する。

2 調査の方法

以上のように堤体保存工事の概要が定まり、実験によってその実現性も確認されたため、1994年10月より作業が開始された。これにともない狹山池調査事務所ではすべての断面の実測図を作成することとなった。工事は一段(1.5m)ずつ施工されたため、断面図も採取ブロックを単位として10分の1で作成し、のちにこれを張り合わせて全体断面図を作成した。また同時に35mmのカラーネガとリバーサルフィルムによる写真撮影を実施した。

断面調査において直接的に実施した作業は、他の発掘調査における断面図と同様にある特色を持つ土の固まりを他と識別し、その境界に線を引き、土の固まりの特色を記載することであった。しかしながら今回の調査の対象となったのは盛土であり、單一の土粒子から構成される層はまれで、複数の土粒子の混合からなるものが大半であった。したがって層の識別も困難であったが、可能な限り築堤作業時の土の単位を想定した分層を行った。しかしながら盛土のブロックが断面として把握できない部分も多く、その場合には帯状の分層となつた。堤防断面は12の大きな層に分類できる。これを大層序と呼ぶこととし、以下上から順に第1層、第2層のように表現する。この大層序の上面はある時期の堤防の表面であったと考えられる。どの上層境界線がある時期の堤防の地表面となるのかを判断するためにはおおむね次の基準によつた。

- (1) 土層境界線が連続して形成されている。

表3 大層序とその年代

大層序	高さ	標高	基底幅	工事の特色・災害	年代
第1層	15.4	84.4	62	上流側に大規模な腹付け、コンクリートブロック護岸、アスファルト舗装	昭和39年(1964)完成
第2層	15.0	84.0	62	小規模な嵩上	昭和2年(1927)完成
第3層	14.6	83.6	62	小規模な嵩上	明治19年(1886)の工事
第4層	13.8	82.8		小規模な嵩上	近世後期～末期の工事
第5層	13.0	82.0		小規模な嵩上	近世後期～末期の工事
第6層	12.1	81.1		小規模な嵩上、上流側に天端を広げる	寛保元年(1741)の改修
第7層	11.8	80.8	50	小規模な嵩上、上下流両方への嵩上、土壌形成	慶長13年(1608)の片桐の改修
第8層	11.3	80.3		小規模な嵩上、腹付け、地震で上流側に滑る、天端で噴砂底	永祿年間(1558～1569)の改修 慶長元年(1596)の地震
第9層	10.2	79.2		小規模な嵩上	建仁2年(1202)重原の改修
第10層	9.5	78.5	54	大規模な嵩上、腹付け、敷葉工法、粘土・堆積物・砂を混合して盛土、上流側に抵強	天平宝字6年(762)の改修
第11層	6.0	75.0		小規模な嵩上工事、敷葉工法地震で上流に滑る	天平3年(731)行基の改修 天平6年(734)の大地震
第12層	5.4	74.4	27.2	最初の築堤、敷葉工法、土糞積み、段丘上の粘土を利用	616年頃

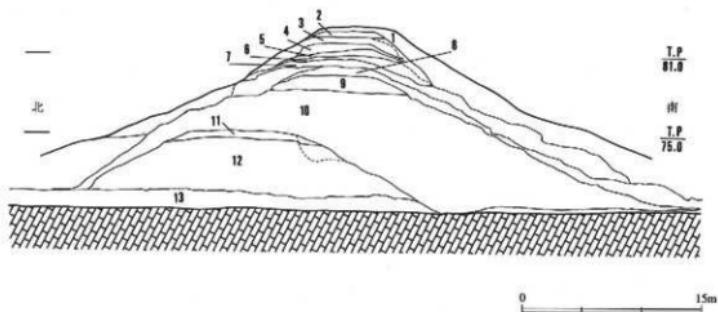


図6 北堤断面図(中程地点東側)(S=1/400)

- (2) 土壌層が連続的に形成されている。
- (3) よくしまっていて固い。
- (4) 上の層と不整合がみられる。
- (5) 道構や、液状化の跡などがみられる。

断面図の図面は前述の通り採取ブロックごとに1枚作成したので、それを上下、左右に組合せた後、どの線がある時代の地表面を形成しているのかを先の基準を参考にして決定した(図6)。また各層を構成するさらに細かい土層を表現したのが付図1である。細かい土層の重なりは小層序と呼びたい。また付図1に対応する小層序の一覧表は本項の末尾に表7として掲載した。小層序は基本的には大層序を築いた時の作業単位を表現することとなる。

3 大層序の特色

①第1層

工事開始前の狹山池北堤の天端の標高は 84.7m であった。基底面の標準的な高さは 69.0m であるので、堤の高さは 15.7m ということになる。北堤の天端は道路であったのでアスファルト舗装してあり、路床には砂利が敷き詰めてあった。断面調査に先行してこの部分は機械掘削を実施した。調査はその下面(標高 84.4m)から開始している。掘削した部分は高さ 0.3m 分である。第1層は天端の嵩上と、上流側斜面の腹付工事によって形成された層である。天端は漂泥じりの砂質土やシルトを水平方向に盛り立てたもので、厚さは 0.4m であった。アスファルトの上面までを想定すると、第1層の工事の際の盛土は 0.7m であったことになる。腹付部分は 20~30cm ずつ上を替えながら水平に盛り立てている。盛り立ては概して上ほど薄く、下にくほど厚い。天端付近では水平方向に 1.6m、標高 77m の地点では 3.8m、基盤部付近では 3.0m 程度の厚さで腹付をしている。標高 79m、標高 77m、標高 74.5m の 3箇所においてはそれ以前の斜面をカットし、平面を構築して盛土を施している。第1層の上流側斜面は標高 74m の地点から盛り立てが始まっているのが断面から観察できる。それより下には池の堆積物が分布するが、これを撤去せずその上に直接盛土をしている。上流側についてはこの地点が斜面端部と思われるが、下流側は基底部の端まで調査ができなかったので、工事前の北堤の基底幅は断面からは不明であるが、地図などから約 62m であったことがわかる。

第1層は昭和37年(1962)から39年にかけて行われた工事であることが関係者の記憶や諸記録から明らかである。この時の工事の記録である『狹山池地区事業概要書』^⑤によれば、そのころ堤体の老朽化が激しく、特に西堤において一部漏水がみられ、また満水面の余裕高が乏しかったので、補強工事として前刃金工と嵩上工を実施したことがわかる。同書には前刃金工事の幅は、天端で 1.5m、腰部で 3.5m、床部で 2.0m であったことが記されており、先に述べた現状の数字とある程度符合する。この工事では上流側斜面にはコンクリートブロックによる護岸が施されているが、これは調査前に撤去されており図化しえなかった。また下流側については、堤防北側に1968年グラウンドができたため、堤防からそこに降りるための道路が造成されている。この道路部分については調査の対象から除外した。

②第2層

第2層は天端への嵩上工事からなる層で、天端の標高は 84.0m、基底からの高さは 15.0m である。第3層の表面との差は 40cm という小規模な盛土である。この層は天端の盛土だけであるので、基底幅は第1層と同じく約 62m となる。この層の盛土は、まず直径 30~40cm の粘土やシルトのプロックを敷き並べ、その上を砂・粘土などで覆ったものである。大きく 3 層の盛土からなる。

③第3層

第3層は天端の小規模な嵩上と、上下流双方の斜面上部の腹付工事からなる大層序である。天端の標高は 83.6m、第4層から 80cm の嵩上となる。また基底面からの高さは 14.6m である。斜面は両側とも標高 79.5m よりも上で腹付をしており、下流側はシルトや砂質土など比較的締っていない土を斜め方向に積んだものである。また上流側の腹付土は細かい粘土ブロックが入ったシルトである。上流側では腹付に際して斜面の掘削が行われており、下の層の上面を切っているばかりか、3層の天

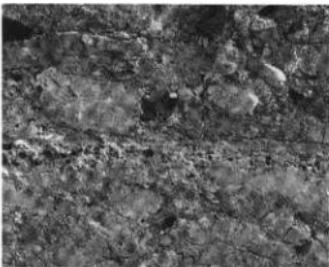


写真7 粘土ブロックによる盛土

端面も切っている。この場合上の2層の盛土のための掘削の痕跡とも考えられるが、3層の大端に敷設された砂層がこの上流側の腹付土の上にも敷設されているので、この腹付土は3層の盛土の後の補修工事の痕跡と考えられる。天端最上層の砂層はよく締まっている。天端の嵩上工事は黄白色の粘土ブロックを一見無秩序に積み重ねたもので、粘土ブロックの間には砂を挟む。粘土ブロックのなかには不整形に変形したものがあり、積んだ後に足などで踏み固めたものと思われる。

④第4層

第4層も天端の嵩上を中心とする大層序であるが、上流側斜面については第3層の補修工事によつて削平されていて状況は不明である。天端の標高は82.8m、基底からの高さは13.8mとなる。また下の第5層の天端からは80cmの嵩上工事である。第2層・第3層の盛土の材料は粘土ブロックが中心であったが、第4層では砂が中心となっている。天端の中心付近に砂で盛土をし、下流側はそれにすりつけるように4回から5回程度にわけて砂主体の材料で盛土している。後に述べるように第5層の天端は下流側に向けて傾斜していることもあり、この部分の盛土は斜め方向に施工されている。また中心より上流側は水平に盛土されている。上流側斜面においては土壤層が形成されている。また下流側については長さ2.8m、高さ0.9mの規模の補修工事が行われている。天端は道として利用されていたようなので、これは道の拡張工事として施工された可能性がある。

⑤第5層

第4層から上の層はいずれも断面で観察できる天端が水平であった。これはもちろん狭山池北堤が道としても利用されてきたことと関連があるが、第5層は少し様相が異なり、上流側から下流側に向けて約10度の角度で傾斜している。ただ第5層の天端は、断面を観察する限り、明らかに第4層嵩上の際に掘削されており、傾斜もこの掘削と関連する可能性が大きい。したがって当初の第5層の規模、形態は不明であるが、残存している天端の最高標高は82.0m、基底からの高さは13.0mになる。下の第6層からの嵩上は90cmである。この工事は天端の嵩上を主な目的とするものであったようである。ただ上流側斜面については第2層の補修工事、および第1層の腹付によって掘削を受けその規模が明らかでない。盛土は天端中央より少し上流側を中心として斜め方向に盛り立てられており、中央から端部へと十を盛っていったことが断面から観察できる。盛土の材料は砂が多く、ときに粘土を挟む。

⑥第6層

第6層は表面に形成された土壤層によって上の層と区別できる。天端の高さは標高81.1m、基底からの高さは12.1m、下の第7層の天端との差は30cmという小規模な嵩上工事である。ただし第6層は上流側の腹付工事をともなうものであったようで、標高78.6mより上の箇所において腹付が行われている。嵩上工事は天端に橙色のシルトを盛っただけのもので、その上に植生による土壤が形成されている。この土壤層が形成されていない箇所が、天端中央よりも少し下流側に1.9mにわたって存在する。この箇所が道の場所であった可能性がある。また上流側斜面にみられる腹付は、まず黄橙色の粘土ブロックを水平に積んだ後、その上に同色の粘土を斜め方向に積んで施工している。ただ上流側斜面の表面は第2層の補修工事に際して掘削されており、土壤層もその部分で途切れています。

⑦第7層

第7層は天端への盛土と上下流斜面への腹付工事によって形成された大層序である。天端の標高は80.8m、基底からの高さは11.8mである。基底の幅は上流側は明確に確認できたものの、下流側では調査区の関係で確認できなかったが、おおむね50mであると思われる。天端部分では幅11.1mの明瞭な土壤層が形成されていてこの面が比較的長く使われていたことがうかがえる。天端部の盛土は

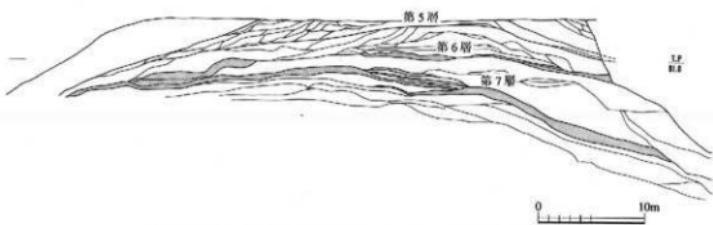


図7 第6層・第7層の土壌層(スクリートーンが土壌層) (S-1/450)

砂を主体とし表面にシルトを載せたもので、第5層までのように水平な面ではなく両端にむかってやや傾斜のある蘆鉢型である。また天端中央よりやや上流よりで土壤層と砂・シルトの層が互層になった場所があるが、この箇所において数次の改修が行なわれたと考えるべきであろう。上流側斜面の基底は標高71mであり、第8層の堤体の斜面に腹付をした形となっている。斜面の腹付の施工方法は標高77m付近までは水平方向に積み、それよりも上においては斜め方向に積む。また下流側斜面の標高76m付近までは水平方向に盛土されているが、それより上は斜め方向に盛土が施工されている。この斜面では標高74.2m付近において顕著な2層の土壤層が検出されている。下流側法尻付近での腹付は水平方向で6mにも及ぶ大規模なものである。

⑧第8層

第8層は天端の嵩上と上流側への腹付によって形成された層である。天端の標高は11.3m、基底からの高さは80.3m。また第9層からは110cmの嵩上工事となる。嵩上はシルトを水平方向に積んでおり、一番下の層には須恵器窯の灰土が多く含まれていた。またこの層からは須恵器の破片も多く出土しており、この層を盛るときに周辺の須恵器窯灰原の土を利用したものと思われる。上流側斜面では黄褐色のシルトなどをおおむね水平方向に積み上げている。この斜面の基底は標高70mで、一番下には複数の種類のシルトを混合した土が積まれているが、その下には明らかに自然堆積物と考えられる粗い砂の層がみられた。この砂層の厚さは調査区の一番南端において80cmにも及ぶ。断面をみるとかぎりこの砂を除去せず

その上に第8層を築いたことがわかる。一般的には溜池の内部には砂は溜りにくく、第8層の施工時には溜池が決壊している可能性がある。またこの層には地震の痕跡がいくつか残されている。天端では盛土中の砂が地震の振動によって液状化して上方に吹き出した痕跡が検出できた。噴砂の幅は1cm以下ときわめて細いが、これは突き破る層が池の堤防という意味で堅い地層であったためであろう。検出された噴砂の縦方向の長さは152cmである。第9層の一

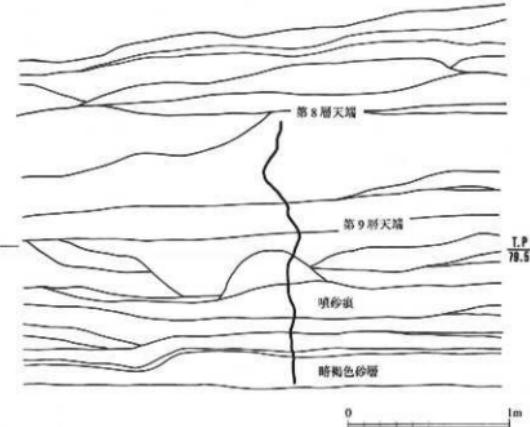


図8 第8層にみられる液状化の跡

番下の暗褐色砂層が上方に吹き出して形成されたものと思われる。また上流側斜面の標高 73m から 74m 付近において地層が池側に滑っている様子が観察できた。この場所では水平方向にオリーブ黒色シルトが積まれていたが、これが池側に 55cm 程度滑り、さらにもう一度 2cm ほど滑っている。これも地震によって堤防の表面が池側に滑った痕跡と思われる。

⑨ 第9層

第9層は天端での嵩上工事からなる層で、斜面への腹付は行われていない。天端の標高は 79.2m、基底からの高さは 10.2m である。下の第10層からは高さ 70cm、幅 11.5m の盛土となる。天端は断面で観察するかぎり水平に近い状態であり、第9層の嵩上に際してそれ以前の天端を掘削して水平にする工事が行われた可能性がある。第9層断面の全体の形は蒲鉾型を示す。盛土は砂・シルトを主体として数 cm の厚さで水平方向に少しづつ盛られている。上流側から下流側に向けて工事が施工されたことが土層の重なり具合からうかがえる。一番下に暗褐色砂の厚い層があるが、この層が前述の通り液状化した痕跡が、第8層から第9層にかけてみられる。

⑩ 第10層

第10層は第11層を大幅に嵩上し、また基底幅も倍近く拡張した大工事によって形成された層である。天端の標高は 78.5m、基底からの高さは 9.5m である。基底幅は 54m である。第11層からの嵩上高は 3.5m となる。この層には全体が有機物と粘土・シルトなどの互層で構成されるという顕著な特色がある。同様の盛土方法は最近全国で検出されており、地域において多様な呼び方をされているが、本報告書においてはこれを敷葉工法と呼称する。

第10層の天端は横方向 11.6m にわたって水平であるが、これは後世の削平によるものである可能性が大きく、築造時は天端高はさらに高かったと思われる。上流側斜面はなだらかで角度は平均 25 度である。また下流側斜面も 28 度と傾斜はゆるい。盛土は全体に敷葉工法で盛り立てられているが所々に特徴的な層がある。標高 76.5m 付近には砂を主体とした厚さ 20~25cm の層がみられる。この層は上流側に近付くにつれ薄くなり、ついには消滅する。厚い盛土の中に砂の層を故意に挟む工法は、現在でもサンドドレンとして行われている。第10層にみられるこれらの砂層も盛土中の水分を抜くために採用されたものであろう。第10層は第12層の上に直接盛土を施している。第12層の端部よりも下流側については、池堆積物を除去してから第10層を築造していることが断面から観察できる。盛土の材料は目視で観察する限り、段丘上に分布する粘土やシルトを主体としながらも、池の堆積物と思われる青灰色のシルトや川砂などを混合して使用している。また第10層の基底部、第12層の端部付近においては、長さ 12.8cm にわたって須恵器窯の灰原層と思われる層があった。この層については当初、須恵器窯の灰原層がそのまま残存している可能性が考えられたため、平面的な発掘調査を実施した。図10は灰原の平面面図である。断面をみれば明らかのように灰原は最初の堤体(第12層)の上に盛られており、明らかに第10層の盛土中の一つの層である。ただこの地点では南側にわずかに微高地があり、灰原の土は堤防の微高地の間を埋める目的で盛土された可能性がある。灰土内の遺物については後述するが、須恵器の年代にばらつきがあり、複数の窯の灰土が利用されている可能性が強い。



図 9 第8層上流側斜面の滑り痕

次に第10層においてみられる敷葉工法について述べる。敷葉工法とは前述の通り、調査開始以前に実施された深礎工において観察された工法で、土の表面に一面に枝についたままの木の葉を敷き詰めたものである。北堤の敷葉はすべて堤防の長さ方向に枝を並べているために、今回の調査のように堤防の縦断面を観察する場合には、断面には枝の断面と非常に薄い葉の層だけがみえることになる。図11は第10層のほぼ中心部、標高76m付近の断面図である。波線で示した箇所が断面で観察できる敷葉の部分、スクリーントーンの部分が有機物を多く含む層である。敷葉層については図の左端に矢印を付してある。これをみると1.5mの間に14層の敷葉層が存在することがわかる。枝の間隔について

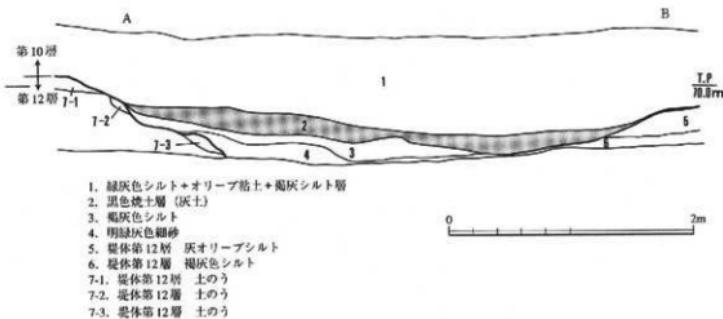
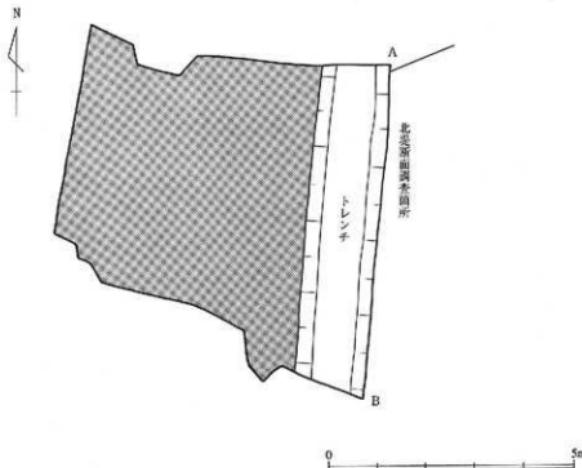


図10 北堤第10層灰土層断面図 ($S=1/100 \cdot 1/40$)

は平面的な発掘をごく一部しか実施していないので不明であるが、断面で観察するかぎり約8~10cm間隔である。枝の長さは平均1m程度であり、あまり長いものはみられなかった。第10層において敷葉層はほぼ全体で観察できるが、先に述べた砂層においては少ないと。また第10層の場合、層を斜めに横切るよう浸潤線(堤防内の地下水位上面のライン)が通っている。浸潤線の下方では土はおおむね還元状態で青灰色であるが、上では酸化して茶色になっている。敷葉層は水平に施工されているが、浸潤線より下では明瞭に葉や枝が残っている。それを水平方向に追いかけて、浸潤線よりも上の場所に至ると、敷葉層は茶白色のシルトあるいは粘土へと変化する。つまり施工時には敷葉が施されていても地下水位よりも上であれば、植物は残存せず粘土化することがわかる。これまで敷葉層が検出されている遺跡は多くはないが、築造時には多くの遺跡の盛土遺構で施工されていた可能性がある。

①第11層

第11層は築造時の堤防である第12層の天端に嵩上された層で、天端の標高75.0m、基底からの高さ5.0m、下の12層からの嵩上高0.6m、嵩上幅12.6mの薄い層である。天端は平坦面をもたず、全体が蒲鉾型の形状である。層が薄いために築造の様子があまり明確ではないが、盛土は大きく2層に分けることができる。この層においても敷葉工法が観察できる。またこの層で注目できるのは、南端においてみられる円弧滑りの痕である。この痕跡は下の第12層にまで及ぶが、滑りの上端は第11層であり、第11層の時代に滑りが生じたことがわかる。

図13はこの部分の断面図であるが、点線で示したのが目視で観察できた滑り面である。同じ番号の土を比較すると左側(南側・上流側)に堤防が滑っていることがわかる。

②第12層

狹山池築造時の堤防が第12層である。天端の標高は74.4m、基底からの高さは5.4mである。天端は蒲鉾型で、天端幅は12.6mである。また基底の端部については両方とも確認することができ、その幅は27.2mであった。これらの数字から築造当初の北堤は高さは現在の約3分の1、幅は約2分の1であったことがわかる。ただし天端ラインのうち下流側の第11層との境界部に大きな変化点が

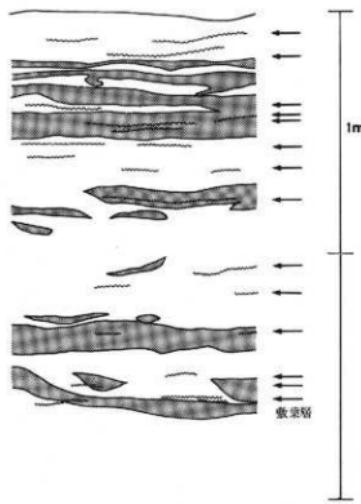


図11 第10層の敷葉層(スクリーントンは有機物層、波線は敷葉層)(S=1/20)

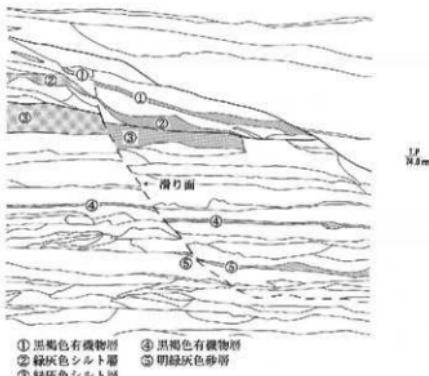


図12 第11層の滑り痕

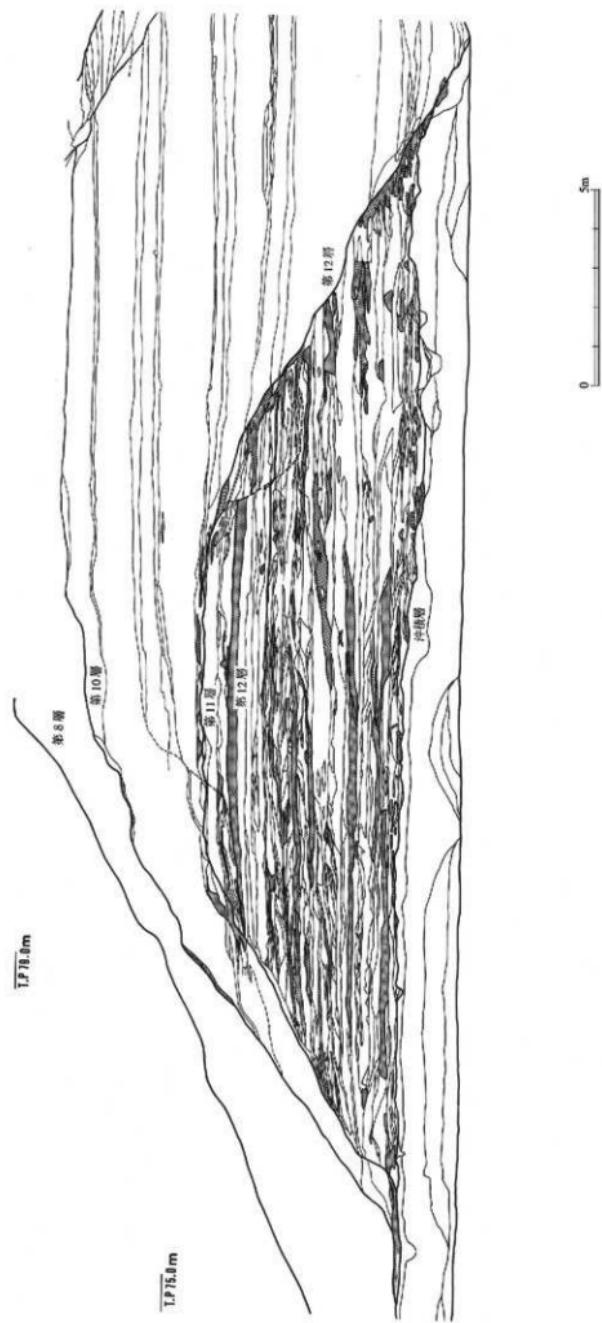


図13 第12層にみられる有機物層 ($S=1/125$)

あることから、第11層の盛土に際して天端の土が削平された可能性があり、高さについてはもう少し高かったと思われる。そのこともあってか第12層の天端には土壤層はみられなかった。ただし両側の斜面では明瞭な土壤層がみられた。

盛土は段丘面の上面に分布すると思われるシルト・粘土を主たる材料としているが、細かくみると約10cm程度の厚さで少しづつ盛り立てていることがわかる。また一つの土ブロックでも単一のシルト・粘土を用いず、複数の種類の土が混合され使われている。これが材料の土を掘削し運搬する段階で偶然生じた混合であるのか意識的な混合であるのかは不明である。ただ第10層でみられた粘土・シルトと川砂を混ぜたものはみられなかった。もちろん築造時の堤体であるから、溜池の堆積物も用いられていない。また砂による帶状の層も所々にみられた。大半は厚さ5cm程度の薄い層であるが、中には20cm以上の厚さのものもある。この砂の層は第10層のものと同様にサンドドレーンの機能を果たしていたと思われる。

第12層では築堤技術として敷葉工法および土嚢積み工法が観察できた。敷葉工法は全体で観察できるが、図14に示したのは標高73m付近の断面図である。垂直方向の敷葉の密度は1mに4層程度であり、第11層と比較すれば少ない。また第12層においては水平方向に長軸を持つ楕円形の土の固まりがみられた。この土塊の色調はおおむね茶褐色で、幅は30cmから40cm、高さは10cm程度のものがもっとも多い。土塊は明らかに有機物を多く含んでおり、有機物が腐植して茶褐色の色調を示していると思われる。外山秀一氏によってこの土塊から取られたサンプルのプラントオバール分析が行われているが、その結果イネのプラントオバールが検出されている。この土塊については現在のところ稲藁で土を包んだ土嚢状の形態を推定しているが、具体的な構造の様子は植物の土壤化が著しく復元できない。以下の説明ではこの有機物を多く含む土塊を土嚢と呼ぶことにする。図13は第12層の断面図であるがスクリーントーンの部分が有機物を多く含む土層である。そのすべてがいわゆる土嚢とは限らないが、楕円形の土層に注目すると両方の斜面部分と、堤体の基底付近に集中していることがわかる。また堤体の内部にも散在した状況であるが土嚢はみられる。この土嚢積みと敷葉工法を組み合わせた形で最初の堤体が築かれているが、その詳細については後述したい。第12層の基底部はそれ以前から存在した沖積層表層の土壤を除去せずそのまま築堤したようであり、沖積層に削平による不整合は観察できない。この断面の地点の沖積層はおおむね砂層によって形成されている。

4 遺 物

北堤の各大層序からはごく少量ではあるが、遺物が出土している。図15、図16に掲載したものが、堤体内からの出土遺物である。13・14は第3層天端付近で出土した遺物である。13は白磁の徳利の口であるが、時期的には近代に下る可能性がある。14は染付の盃であるが草花文は型紙刷で刷られており、コバルトの色合からみても近代の所産であろう。15・16は第4層中より出土している。ともに肥前系磁器で近世後期の所産である。1・2・11などの須恵器は第8層の天端付近で出土した。ただし出土地点は堤体保存箇所よりも40m東の地点で、この場所においては須恵器の散布がみられたばかり

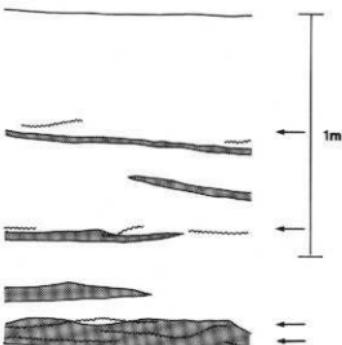


図14 第12層の敷葉(スクリーントーンは有機物層、波線は敷葉層)(S=1/20)

りではなく、須恵器窯の灰原でよくみられる赤茶色の焼土も多くみられ、須恵器窯の灰原の土を盛土に利用したものと思われる。同様の灰土層は深礎工による断面調査の際にも標高80mの地点で検出されている。また昭和初期の改修の時にも標高は不明であるが堤体中の須恵器片が観察されており、須恵器は中樋付近において広範囲で盛土内に含まれるものと思われる。いずれも細片であり時期の決定は困難であるが、TK43型式あるいはTK209型式に含まれる須恵器である。この時期の窯は狭山池周辺に多くみられるためどの窯の土を利用したかは判断できない。10も第8層中より出土した須恵

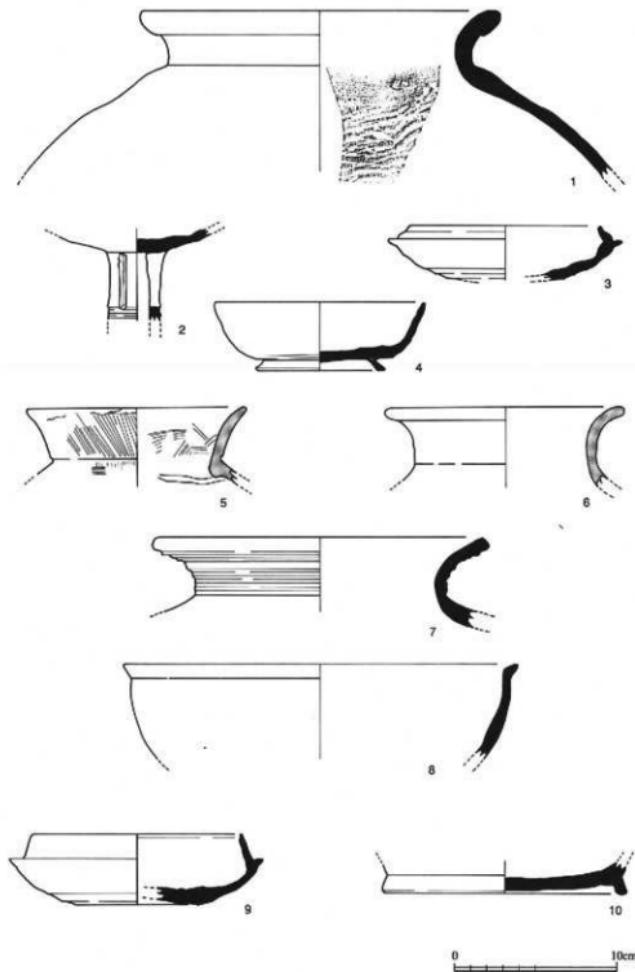


図15 堤体内出土遺物(11)

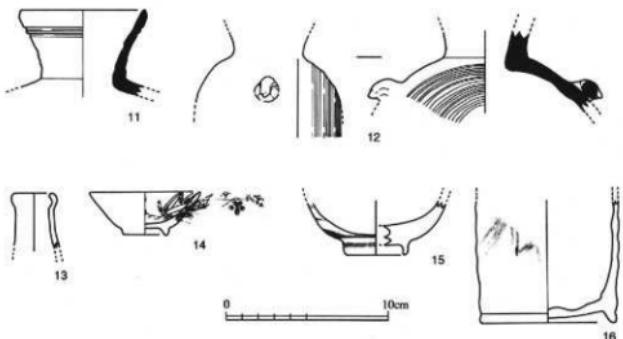


図16 堤体内出土遺物(2)

器であるが、環身の底部高台部分であり先に述べた3つの須恵器よりも時代は下がる。3・4は第10層より出土した須恵器环身である。3の环身は立ち上がりが内傾し、高さも非常に低い。TK209型式に含まれる。4は高台を持つ环身で、高台は底部のやや内側に張りつき、外側に開いている。TK217型式の須恵器であろう。5・6・12は第11層より出土した遺物である。5は土師器整の口縁部、6も同様である。12は須恵器提瓶であるが、残存するのはごく細片だけである。把手の形骸化が著しく、わずかに鍵型をとどめているにすぎない。7は最初の堤体である第12層中より出土した須恵器の壺である。口縁部の一部のみが出土しているために型式の確定は困難である。8・9は堤体の基底よりさらに50cm下の砂層から出土した遺物である。8は外面に指押さえが残る土師器、9は須恵器环身である。9の环身はMT15型式に含まれる。

堤体盛土から出土した遺物は、土とともに移動した可能性が強く、必ずしも各層の年代を示すものではない。特に狭山池周辺には6世紀から7世紀にかけての須恵器窯が多く分布しており、その灰原の土を堤体の盛土に利用する可能性は極めて高い。第5層の天端付近でみられた須恵器はこのように運ばれた灰原の土に含まれた遺物と思われる。この場合各層の遺物については、その遺物の時代以後に各層が築かれたという意味しか持たない。しかしながら第3層でみられた近世、近代の遺物や、第11層で検出された土師器などはいずれも生活用具であり、ある程度層の時代の下限を示すものと思われる。また築堤以前の層より出土した遺物も、河川堆積物中のものとはいえ、ある程度時代を示すものと考えられよう。

また前述の通り、第10層の基底部からは須恵器窯の灰原層と思われる黒褐色灰土層が出土し、層中からは多くの須恵器が出土している。北堤灰層に含まれていた須恵器の総量は相当量に達するが、そのうち113点を図化した。実測図および観察表は数が多いため項の末尾に掲載している。器種は、杯H身・杯H蓋・杯G身・杯G蓋・高杯・椀・短頸壺・短頸壺蓋・甕・甕である。個々の遺物の詳細は、項末に掲載した表5の遺物観察表を参照していただきたい。北堤灰土層出土遺物の組成の特徴として、各時期の須恵器が、單一の灰層中に混在していたことがあげられる。この状況がもっとも顕著である杯について、型式差の確認を行うと以下の通りとなる。^⑥

杯H身15は口径13.4cm、たちあがり高1.1cm、16は口径13.6cm、たちあがり高1.6cm、17は口径12.6cm、たちあがり高1.0cm、73は口径11.6cm・たちあがり高1.1cmを計測し、TK10型式～TK43型式に含まれる資料と思われる。杯H身18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・46・47・48・49・50・51・53・55・56・60・78は、たちあがり形状と法量から、TK43型式～TK209型式

のに含まれる。杯 H 身31は口径 8.6cm、たちあがり高 0.6cm、34は口径 9.0cm、たちあがり高 0.3cm、59は口径 9.0cm、たちあがり高 0.4cm を計測し、TK217 型式に含まれる。同様に、28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・52・54・57・58・59・76・77・79・80の杯 H 身も TK217 型式に含まれる資料である。また、杯 G 身の68・69、杯 G 蓋の61・62・63・64・65・66・67も TK217 型式に含まれる。

このように、北堤灰土層中には、TK10 型式・TK43 型式・TK209 型式・TK217 型式の各型式に比定できる杯が含まれておらず、こうした遺物組成は、狹山池および狹山池周辺の須恵器灰原では考えられないものである。北堤灰土層中に含まれている TK10 型式の須恵器を産出する窯は、狹山池周辺では確認されておらず、陶器山丘陵とそれに連なる高位段丘斜面以西のみに造営されていたと考えられる。これらの状況は、大規模な改修工事であった第10層の築堤に際しては、狹山池から相当離れた窯を含む複数の須恵器窯灰原から灰土が集められ、堤体の盛土に利用されたことを示している。

5 西側断面

これまで述べてきた断面は中橋付近で堤体を開削して現われた二つの断面のうち東側の断面であるが、当然のことながら西側にも断面が存在する。この断面は当初調査を想定していなかったために傾斜が急で、詳細な実測作業ができず、図17に示した非常に大雑把な断面図のみを作成している。西側の断面は一見して明らかのように、東側断面とはまったく異なり、最低でも2回の大規模な崩壊によってほとんど築堤時の姿をとどめていなかった。滑りはいずれも上流側に向けてのものであり、2回の滑りはほぼ平行する痕跡を残している。大阪府土木部が堤体保存工事の予備調査として北堤上で行ったボーリング調査の結果によれば、中層よりも西側についてはほとんど敷藁工法が検出されておらず、ある時期に北堤の西側は大規模に決壊していることが想定されている。今回検出された滑りの痕跡は時期は特定できないものの北堤西側の大規模決壊の痕跡とみられる。

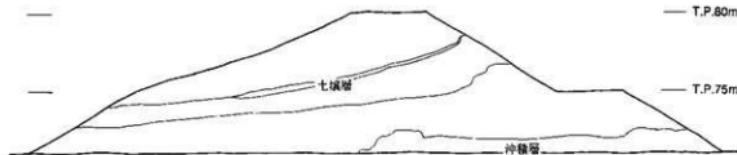


図17 北堤断面図（中橋地点西側）

6 各層の年代について

堤体の各層から出土した遺物は、第10層底部の須恵器窯灰土に典型的にみられたように必ずしも大層序の年代を示すものとはみなせない。しかし、土師器や近世の遺物、あるいは狹山池周辺に窯のみられない時期の須恵器などについては大層序の年代決定の参考にすることができる。また堤体に残された地震などの痕跡や、土壤層なども大層序の年代を考える根拠となる。狹山池は古来より著名な溜池であり多くの文献史料が残されている。これら断面の観察で得られた情報と、文献の記載を照合して作成したのが、表4である。以下、年代を推定した根拠について説明する。

12層が最初の築堤を示す大層序であることは断面の観察によって明らかである。沖積層上面の土壤の直上に第12層が築かれていたことや、東側遺構の場所においても第12層と同様の層が検出されたことからもこの結論は確定的なものである。現在の狹山池の築造以前にさらに小さな溜池が存在し、その堤防を一旦撤去して新たな堤防を築いたという説は、狹山池の池底がダム工事によって全面的に掘

削された現在の地点で

表4 狹山池北堤の工事(『狭山池改修史』より作成)

年 代	西暦	内 容	年 代	西暦	内 容
はまったく成立する余地はない。東側造構で検出された桶の材木は年輪年代法によって西暦616年の春から夏にかけて伐採されたことが明らかになっており、狭山池の最初の堤体	616頃 天平3 天平宝字6 建仁2 元和1 元和6 元和6 寛永11 寛永2	狹山池の築造 行基の改修 修築 重源の改修 片桐の改修 腹付 堤が切れ人洪水 小堀の改修 北堤を3尺嵩上 北堤腹付	寛文6 延宝4 宝永4 寛保1 慶応1 慶応3 明治19 明治28 昭和2 昭和39	1666 1676 1707 1741 1865 1867 1886 1895 1927 1964	堤版栗詰改修 堤東側を改修 大地震で崩壊れる 北堤腹付 北堤中樋改修 狹山池堤防工事 狹山池堤防工事 狹山池改修工事 狹山池改修

(第12層)は、極管の伐採の直後、すなわち7世紀初頭に築堤されたこととなる。

第11層はこの第12層の天端に嵩上しただけの大層序である。層内からは土師器が2点検出されているが、それにもまして年代決定の根拠となったのは、この層においてみられた上流側への堤体の凹弧滑りである。大規模な第10層の嵩上の時期を仮に天平宝字6年(762)とすると、それに先行する文献で知られる改修としては行基による改修が第11層にあてはまることとなる。行基が狹山池を改修したことは行基研究の根本史料である「行基年譜」にも記されている。ただし改修の年は「行基年譜」には書かれていない。ただ同書には天平3年(731)に行基が狹山池院・尼院を創建したことが記載されており、この年に狹山池の改修がなされたという説が有力である。今回の調査で中樋構造より出土した重源狹山池改修碑にも天平3年に行基によって狹山池の工事が行われたことが刻まれている。第11層を仮に天平3年に行基によって施工された改修によるものとすると、この層に残された地震の痕跡も説明が可能となる。奈良時代の大地震としては天平6年(734)と天平17年(745)のものが知られているが、特に天平6年4月7日に起こった地震は、南河内に大きな被害をもたらした。狹山池北堤もこの地震によって一部被害を受けたことが推定できる。第10層は狹山池北堤の規模を高さ、基底幅ともに約2倍にする人工事である。その規模から考えてこの層は、天平宝字6年(762)の改修によるものと考えられる。この工事については『続日本紀』に「河内国狹山池隣決。以単功八万三千人修造」という記載があり、動員された人数から相当大規模な工事であったことがうかがわれ、第10層の工事への比定はほぼ間違いない。

第9層より上については年代の確定がきわめて困難である。第1層は前述の通り昭和39年(1964)の改修であることは確実であり、その下の第2層も昭和初期の改修によるものであることは間違いがない。またその下の第3層も明治19年(1886)の改修とみてよいだろう。遺物の年代もほぼ符合する。これより下の第4層から第9層までは遺物との照合も困難で、年代の比定は推定の域にとどまざるを得ない。ただ一つ参考となるのは第8層に残された液状化現象、および上流側斜面の滑りの痕跡である。ともに大規模な地震の痕跡とみられる。吉川周作氏(大阪市立人文学助教授)、三田村宗樹氏らのグループによって行われた狹山池内の堆積物の調査では、狹山池では築造以来少なくとも2回大規模な地震が起こっていることが明らかにされ、さまざまな年代測定法を駆使して2回の地震の年代が1510年と1596年に比定され、慶長元年(1596)の地震によって堤防が決壊したといふ説が出されている。文献によると狹山池に大きな被害を与えた地震としては宝永4年(1707)の大地震がある。しかし慶長元年の後、慶長の大改修が行われているのに対して、宝永4年の地震の後に大きな改修が行われた記録はなく、被害の程度は慶長地震の方が格段に大きかったと考えられる。以上のことから第8層にみられる地震痕跡をここでは慶長元年のものであるとしておきたい。このように考えると第8層は当然のように慶長元年以前に改修された層であるということになる。近世以前の狹山池の改修史料はきわ

めて乏しいが、「狹山池明細書」(池尻田中家文書)などの狹山池関係の多くの近世史料には、永禄年中(1558~1569)に安見美作守によって改修が試みられたが成功しなかったことが書かれている。これらはすべて後世の伝承的な記録でありその信憑性には限界があるが、仮に第8層をこの時期の改修とすると、地質学的な研究から導かれている1510年に狹山池に大きな地震が襲ったという仮説に符合することとなる。この仮説は将来的に訂正される可能性があるが、現在のところ第8層は16世紀の改修工事によるもので、慶長元年の地震によって被害を受けたという説を探っておきたい。とすればそれによるとかぶさった第7層が慶長の改修による層ということになる。この層は人端に土壤層が重層的に形成されており部分的な改修が度々行われたことが推定できるが、これらのうちの一つは先に述べた宝永4年の地震後の改修によるものである可能性がある。また第8層を先のように16世紀の改修によるものとすると、すでに年代を定めた第10層との間の第9層の年代もほぼ確定してくる。奈良時代から中世後期の間の最大の工事としてはやはり鎌倉初期に重源によって行われた工事を想定しなければならない。重源の改修の具体相はもちろん不詳であるが、重源狹山池改修には堤防の工事が部分的にせよ行われたという記載があり、第9層が重源の改修に符合する可能性は極めて高いといわねばならない。以上のように地震痕跡を根拠として第7層から第9層までには一応年代を与えることができた。第4層から第6層までは近世から明治にかけての改修であるとみてよいだろう。これらの改修はいずれも小規模なものであり、断面から技術的な特色を読み取ることはできない。また近世には度々堤防の改修が行われたという記録があり、各層をそのどれに比定するのかは非常に困難である。表5は近世史料にみられる狹山池北堤の高さの記載であるが、18世紀のなかばを契機として高さが6間半(11.7m)から7間(12.6m)に高くなっていることに気付く。この時期の改修としては寛保元年(1741)のものが知られている。この工事では堤の腹付が行われていることが「御普請所河州丹南郡狹山池度々御普請覚帳」(池尻田中家文書)などの近世史料に記されており、その内容と高さを参照すると第6層を寛保の改修としてよいだろう。第3層と第4層は近世後期から末期にかけての工事であろう。具体的な年代としては慶応年間が想定される。

表5 史料に記された堤の高さ

史料年代	史料名	堤の高さの記載
天和3(1683)	狹山池遍見絵図(池尻田中家文書)	6間半(11.7m)
享保5(1720)	狹山池一件之留書(京人所藏杉山家文書)	6間半(11.7m)
安永8(1779)	河州丹南郡狹山池開闢書(池尻田中家文書)	7間(12.6m)
享和3(1803)	狹山池明細書(池尻田中家文書)	7間(12.6m)

7 東橋造構部分の断面について

中橋付近で観察した堤体断面の様相とその年代についてこれまで述べてきたが、東橋造構の調査箇所においても堤体を断ち割っており断面の状態を観察することができた。東橋地点の事例は、中橋地点での報告が特殊なものでないということを立証する上で重要であり、また古代の築堤方法などを知る上では中橋地点以上に良好な資料が得られたためここに併せて報告することとした。ただし東橋造構地点においては堤体断面の実測をする予定がなかったので、断ち割りの角度が急で、中橋地点で実施したような詳細な実測調査はできず、いわゆる大層序の把握にとどまった。また東橋造構はダム工事中に突然発見されたということをもあって堤防の高さはこの時点で標高80mの高さまで掘削されており断面図もその高さまでしか作成できなかった。ただし東橋地点の西側断面のうち一番古い堤体については盛土の単位を把握できる程度の図面を作成している。

西側の斜面では築造当初の堤体を確認することができた(7層)。これは中橋地点における第12層と対応する層である。天端は部分によってかならずしも水平ではないが、平均的な高さは標高76.0m

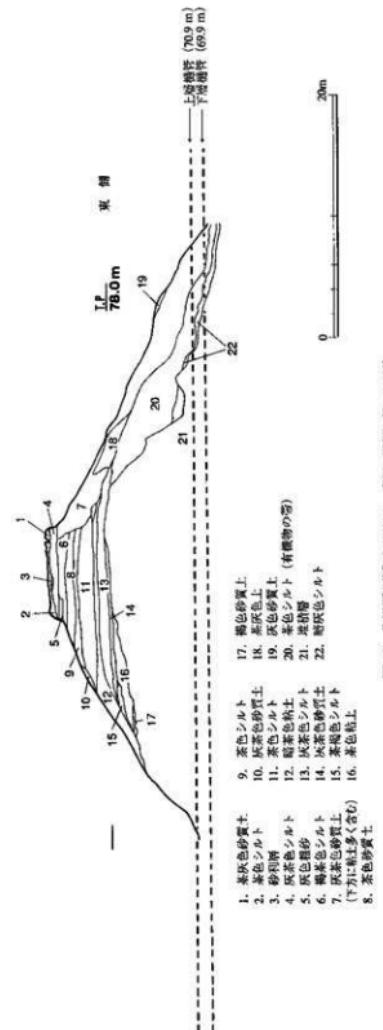
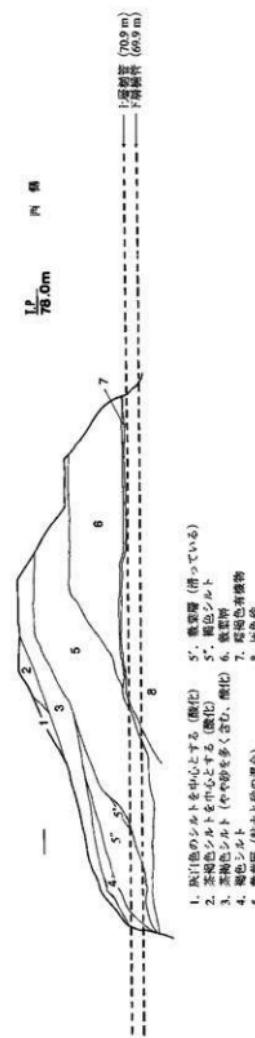


図 18 北見断面図（東側地区 東側・西湖）(S-1/400)

程度である。この標高は中樋地点よりも1.5m程度高いが、これは一つは中樋地点の堤防がその後の改修などのために削平を受けていることと、東樋地点では堤防が段丘に取りついているために、段丘の高さにあわせて若干堤防を高くしたという二つの可能性がある。おそらくは双方の理由によるものであろう。この大層序においては図19あるいは口絵カラー写真に示したように敷葉工法および土嚢積みの痕跡が非常に明瞭に観察できた。特に土嚢は堤体内に垂直方向に積まれたもの、基底部に積まれたもの、斜面部分に積まれたものの三つの種類があることが判明した。このような特色からある程度堤体の築造方法が推定できるが、これについては後述する。残念ながらこの層の下流側斜面についてはすでに削平されており確認できなかった。この層の基底部には築堤以前の植生によって形成されたと思われる有機物層がみられた。また第7層の上層50cmについては土嚢がとぎれおり、それより下とは盛土の方法に少し差が見られた。あるいはこの部分が中樋地点での第11層に対応する可能性がある。東樋地点においても中樋地点同様狭山池の最初の堤体が観察できたということには、狭山池の堤体は築造以来ずっと現在の場所に築かれていたということが明らかになったという点でも非常に重要な点である。

第6層には敷葉工法がみられるが、土嚢積みは見られず明らかに中樋地点での第10層に対応する特徴が観察できる。第6層の標高は78.7mで中樋地点第10層の天端の高さとはほぼ同じである。中樋地点においては第10層を池側に拡張する際、池の中の堆植物を一旦撤去して、その上に堤を積んでいったことを述べたが、同様の特色は東樋地点の第6層においてもみられた。また東樋造構の下流側には大きな円弧滑りの痕跡がみられたが、この滑りがどの層から開始されているかが明らかではないために、地震の時代は確定できない。第5層の上方にも4層の大層序が存在するが、いずれも天端側、斜面側が掘削されており、その規模や特色を確かめることはできなかった。したがって中樋地点での大層序に対応するかは不明である。

図18-下は東樋発掘のために開削した部分の東側斜面である。この斜面はこれまでみてきた二つの斜面とはまったく異なる特徴を持つ。狭山池の北堤は東側の段丘崖に取りついているが、この断面はその取りつき地点の断面である。この地点では標高78mの高さで段丘の上面が検出されている。段丘の断面は上層の1.5mが粘土層でそれより下層は砂礫層であった。段丘の上面の高さは最初の堤体の天端よりも2m程度高かったこととなる。中樋地点の第10層に対応する層はこの場所においても明瞭である。段丘層から池側に張り出した茶色シルトの層があり、その中には有機物の層が帶状にみられる。この地点では地層の酸化が著しく、この帶状の有機物は敷葉層が酸化して変化したものと思われる。奈良時代にいたって狭山池の堤防はようやく段丘上面の高さに達したと思われる。堤防の上が道として利用されるのもこの時代以後のことであろう。この層の上にも6層程度の大層序の存在が認められるが、年代については検討できなかった。

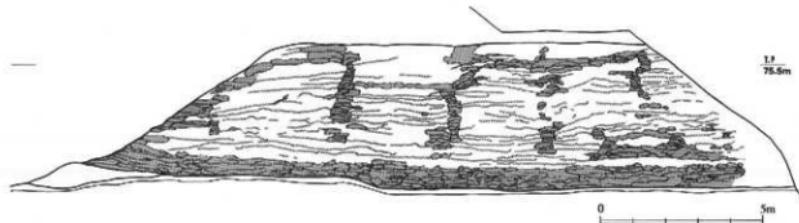


図19 東樋地点東側断面第7層の敷葉・土嚢積み（スクリーントーンが土嚢・波板が敷葉層）(S-1/150)

8 第12層の築堤方法について

東柵地点の西側断面において観察できた第7層の大層序は、中柵地点の第12層に対応し、ともに狭山池築造時の堤体であると思われる。特に東柵地点においては敷葉、土嚢積みなどの特色が明瞭であり、またこのような特色は東柵地点ほど明瞭ではないにせよやはり中柵地点でもみられるため、これらを対照すれば、おぼろげながら最初の築堤の方法を復元することができる。図19は東柵地点の断面図であるが、基底部には高さ平均80cm程度まで土嚢が積まれていることがわかる。この特色は中柵地点では観察できないが、同所でも沖積層が堆んだ場所においては土嚢が集中的にみられるので、全体的に低い場所や低湿地には土嚢をいれて全体の基底の高さを平均化するとともに、軟弱な地盤への対応を行ったことが推測できる。この土嚢の設置後に本格的な築堤が開始されているが、特に注目されるのは東柵地点での土嚢の垂直方向への配置である。垂直方向の土嚢列は全部で5列観察できるが、一番南のものは斜面に沿って並べられたものであり、南から2列目からはほぼ垂直に積まれている。列の間隔は2列目と3列目の間が約3.5m、3列目と4列目の間が3.3m、4列目と5列目の間は3.2mである。これらの土嚢列を当初はまず縦方向に土嚢を積みその後に列の間に土を積んだものとみていたが、土嚢列をよく観察すると縦方向にまっすぐ積まれているわけではなく、1段ごとに少しづつ左右のずれがある。また土嚢一つ分の高さと敷葉の縦方向の間隔がほぼ等しいために現在では図20のような方法で築堤されたと考えている。

まず平坦面にまっすぐ土嚢を何列か並べる。土嚢の間隔は先述の通り約3~3.5mである。次にその間に土を入れていく。土は土嚢の高さまで入れるので、盛土後でもおぼろげながら土嚢列は確認できる。土を入れて平坦面が形成されると一面に敷葉が施される。狭山池では敷葉は堤防の長さ方向に約10cmの間隔で並べられていた。敷葉の上からおそらく足踏みなどの方法で土の締め固めが行われたと思われる。その積極的な根拠はないが、中柵地点の断面では、一つ一つの小層序の上面には微妙な凸凹がみられた。これを足跡と考えたい。この作業の後、再度土嚢が並べられた。ただしこの時には斜面部分の土嚢は前回よりも少し内側に並べられる。堤防の斜面角度を一定に保ちながら盛土を施すのは現在でも難しいが、土嚢列を少しづづずらす方法で角度を固定したと思われる。また堤防内の土嚢は前回の土嚢列の直上になるように並べられたと考えられる。つまり断面でみると土嚢は縦方向に積まれたような状態で並ぶこととなる。また作業は東柵のほうから中柵の方に向かって進行したことも想像できる。東柵地点では明瞭な縦方向の土嚢列が、中柵地点では斜面部分を除いて無秩序で土嚢が散在しているようにみえるのは、東柵と中柵の間で一つ一つの土嚢が少しづつ左右にずれた結果であると考えている。ともかくもこのような土嚢積みと敷葉工法を融合した方法で築堤が進められたことが断面の観察から想像できる。



写真8 中柵地点第12層の土嚢積み

9 小 結

今回の堤体の調査によって、明らかになったことは多いが、特に重要であったのは、次の点である。

- (1)各時代の堤防の規模。
- (2)堤防の位置が築造以来現在まで一定であったこと。
- (3)各時代の築堤技術。ことに古代の堤防については具体的に復元が可能となったこと。

(4)堤防の災害の歴史。このことによって同時に各時代の改修の原因も明らかになった。

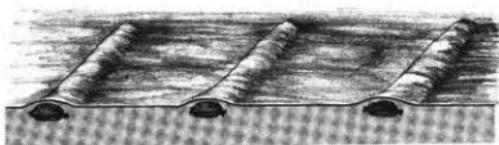
(1)の点については項の最初に示した表3に掲載した内容が、現地点での大層序の年代観である。ただ規模については盛土は長年のうちに少しづつ縮まり、高さは築造時よりもいくぶん低くなることが予想できる。また次の嵩上のときには前回の天端を少し削平することも当然あるので実際の堤防は断面で観察できるものより少し高かったと思われる。堤防の高さが明らかになれば各時代の狭山池の規模もおおむね復元が可能となる。この点については第3章で考察したい。

(2)は中穂地点だけではなく東穂地点でも断面調査を実施した結果明らかになったことである。

(3)の築造技術のうち、敷葉工法は第12・11・10の各層で確認できた。古代特有の技術であると考え



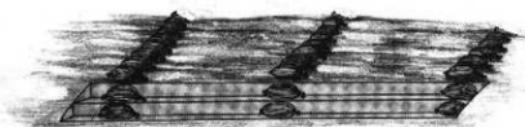
土壌を開拓をあけて並べる



土塊列の間に土を入れる



土の上に木の枝を敷いて踏み固める



この作業を繰り返す

図20 最初の堤体の築造方法

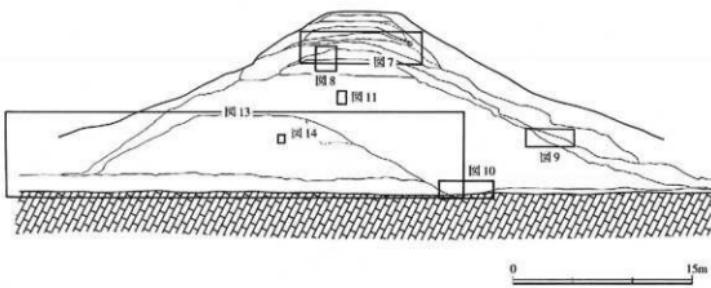


図21 北堤断面部分図の位置 (S=1/400)

られる。また土壠積みは第12層のみで確認できる。また土の盛り立て方は第12層から第8層までは水平方向に積む盛り立て方であるが、それより第7層から第3層は中心に向って斜め方向に盛り立てていく方法が取られている。ただし第2層・第1層では再び水平方向の盛り立てに変わっている。また第7層から上は前時代の堤防斜面を部分的に削って段を作り漸次盛り立てていく方法がとられている。これは第1層にも採用されている。第7層は慶長の改修であると考えられるので、斜め方向に盛り立てたり、前時代の斜面を段状にカットする技法は近世以降のものとすることができる。また古代の築堤技術である敷葉工法、土壠積みについては最近他の遺跡でも検出事例が増えており、古代における技術の系譜を示す一つの指標となりつつある。敷葉工法についてはすでに工楽善通氏の研究があり、⁹ わが国では狭山池以外にも八尾市の亀井遺跡や太宰府の水城などで検出されていることが明らかにされている。工楽氏は韓国の碧骨池や中国の安豐塘などでも同種の築堤技術がみられることから、敷葉工法を大陸から伝来した技術であると述べている。築造当初の狭山池北堤は現在の狭山池の3分の1程度の高さであるが、それでも約5mの高さは現在の溜池の中でも大きな部類に属する。小さな溜池から段階的に発展して狭山池のような大きな溜池が誕生したのではなく、いきなり大規模な溜池が登場してくる背景には、海外からの技術の導入が前提となるだろう。また土壠積みについては最近羽曳野市の藤塚古墳で検出され大きな話題となっている。こちらの事例は敷葉工法以上に少ないが今後事例が増加することにより、狭山池の築堤技術の系譜はより明らかになるだろう。

(4)については調査前にはまったく予想しなかった成果がいくつか得られた。災害の痕跡の発見は大層序の年代決定にも有効であった。当然のことながら改修にはそれぞれ要因があったはずである。今回確認できたのは地震災害だけであったが、当然大雨や台風による改修も多かったことと思われる。

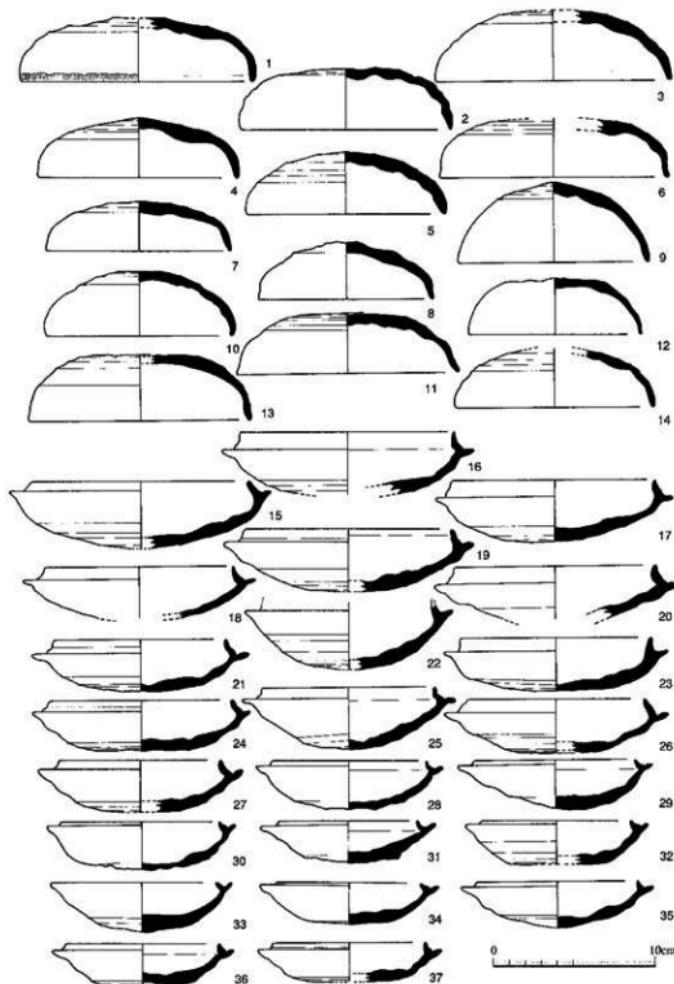


図 22 北堤灰土層出土遺物 (I)

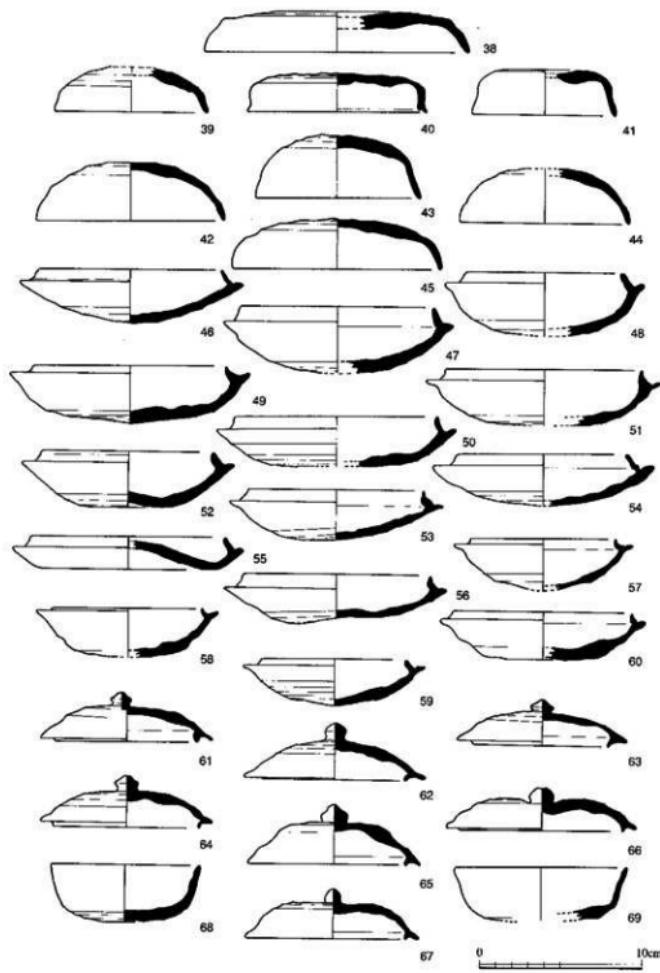


図23 北堤灰土層出土遺物(2)

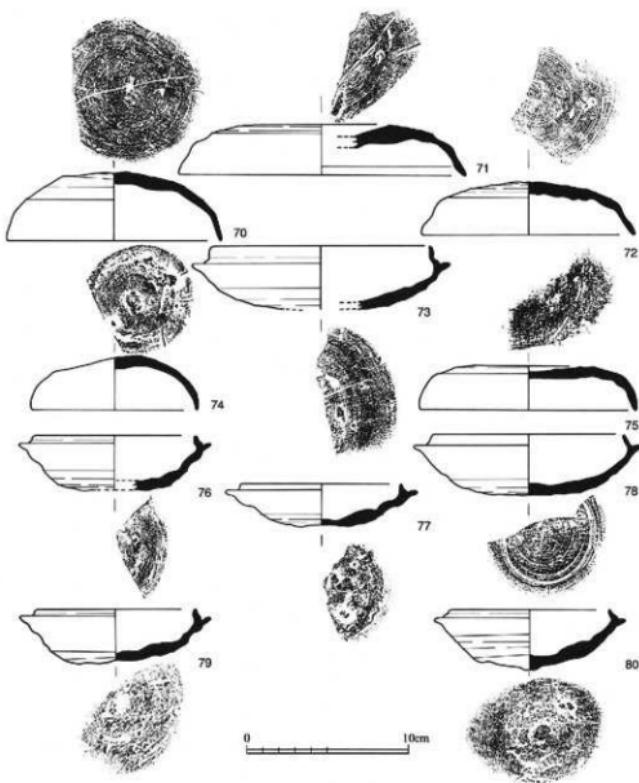


図24 北堤灰土層出土遺物(3)

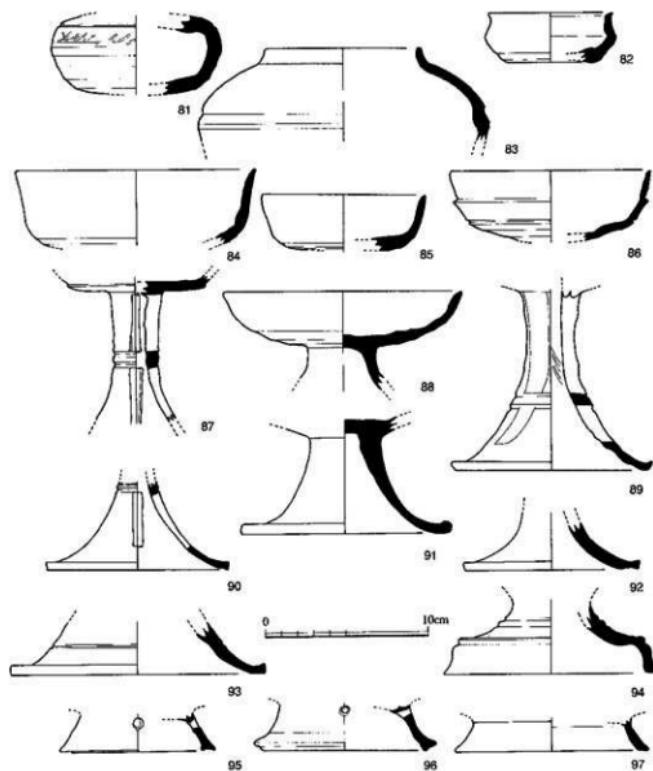


図25 北堀灰土層出土遺物(4)

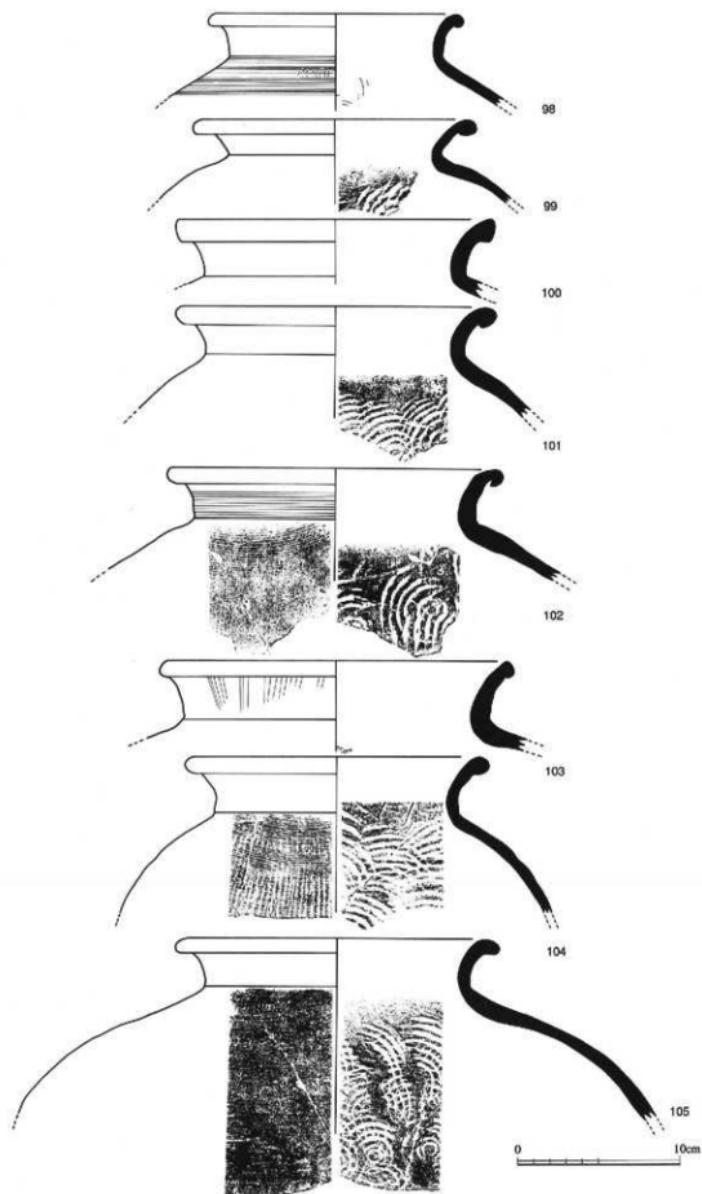


図 26 北堤灰土層出土遺物 (5)

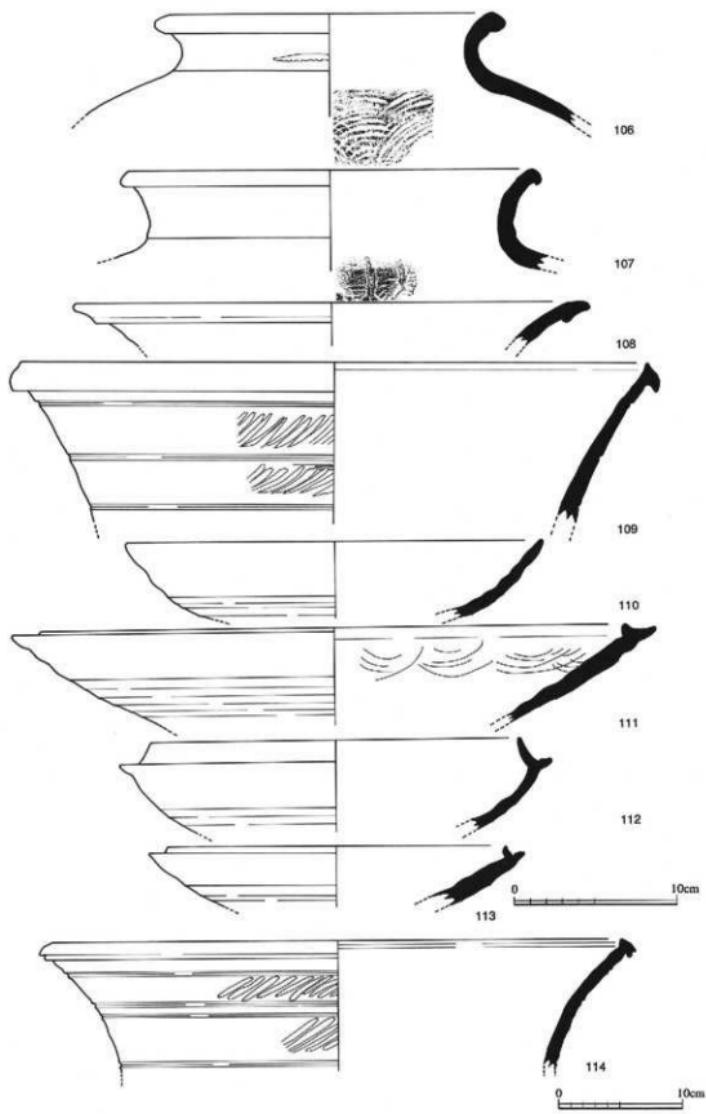


図 27 北堤灰土層出土遺物 (6)



図28 敷葉出土状況

表 6 北堤灰土層出土遺物観察表

(丁はちあがりを示す)

器種	断面 形状	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	22- 1	口径14.4 残存高4.0	体部・口縁部は下方へ内傾して下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。大井部中央火鉢。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面1/4回転ヘラ削り調整。口縁部内面一本の比較。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを若干含む。施成：良好。残存：口縁全体1/3。反転復元。
杯 蓋	22- 2	口径13.0 残存高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面1/4回転ヘラ削り調整。大井部外面1/4末調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石や多く含む。施成：良好。残存：口縁、全体1/2。外尚に自然釉付着。
杯 蓋	22- 3	口径15.8 残存高4.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁1/6、全体1/5。反転復元。
杯 蓋	22- 4	口径12.6 残存高3.7	体部・口縁部はやや内傾して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/4末調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁、全体1/4。反転復元。
杯 蓋	22- 5	口径12.6 残存高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外面一暗灰色。内面一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石や多く含む。施成：良好。残存：口縁、全体1/4。反転復元。
杯 蓋	22- 6	口径14.4 残存高3.7	体部・口縁部は下方に下り、口縁部でやや外反する。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。天井部中央火鉢。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクテ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石をや多く含む。施成：良好。残存：口縁1/5、全体1/4。反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	22- 7	口径11.5 器高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を僅かに含む。施成：良好。残存：口縁1/8、全体1/4。反転復元。外面灰かぶり。
杯 蓋	22- 8	口径10.8 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁1/4、全体1/5。一部反転復元。外面口縁部に自然釉付着。
杯 蓋	22- 9	口径11.8 器高5.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁1/6。反転復元。
杯 蓋	22- 10	口径11.4 残存高4.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁1/5、全体1/5。一部反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	22- 11	口径14.0 残存高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。天井部中央火鉢。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁1/4、全体1/8。外面に自然釉付着。
杯 蓋	22- 12	口径10.8 器高3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面2/3末調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートをや多く含む。施成：良好。残存：口縁1/7、全体1/5。一部反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	22- 13	口径13.8 器高4.1	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。天井部中央火鉢。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを若干含む。施成：良好。残存：口縁1/8。反転復元。
杯 蓋	22- 14	口径12.6 残存高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。天井部中央火鉢。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 身	22- 15	口径13.4 受部径15.8 残存高3.9 T高1.1 T角度47°00'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底井部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口縁1/4、全体1/8。反転復元。

杯 身	22- 16	口徑13.6 受部径16.4 残存高4.2 T 高0.8 T 角度27°30'	たちあがりは内傾したの中位ではね直し、端部はやや丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：やや難。残存：口縁1/3、全体1/5。反転復元。
	22- 17	口徑12.6 受部径14.9 残存高3.9 T 高1.0 T 角度31°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：统一灰赤褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外間に自然釉付着。
杯 身	22- 18	口徑11.8 受部径16.4 残存高3.3 T 高0.5 T 角度36°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外間に自然釉付着。
	22- 19	口徑12.8 受部径15.6 残存高3.9 T 高0.9 T 角度34°00'	たちあがりは内傾したの中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はやや丸く。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	22- 20	口徑12.4 受部径15.2 残存高3.2 T 高1.2 T 角度29°30'	たちあがりは内傾したの中位ではね直し、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	22- 21	口徑10.8 受部径13.6 残存高3.2 T 高1.0 T 角度32°30'	たちあがりは内傾したの中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。底：灰。残存：口縁1/8、全体1/5。反転復元。
杯 身	22- 22	口徑10.8 受部径13.0 残存高4.2 T 高0.6 T 角度38°45'	たちあがりは内傾してのびる。端部は丸く。受部は外方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は深く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。自然釉付着。
	22- 23	口徑12.0 受部径14.0 残存高3.3 T 高0.9 T 角度11°00'	たちあがりは基部より直立し、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。底：灰。残存：1/2。外間に自然釉付着。
杯 身	22- 24	口徑11.2 受部径13.6 残存高3.1 T 高0.8 T 角度38°00'	たちあがりは内傾したの中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3本調整。1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	22- 25	口徑10.7 受部径13.4 残存高3.6 T 高0.7 T 角度39°00'	たちあがりは内傾したの中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。外間に自然釉付着。内面灰かぶり。
杯 身	22- 26	口徑11.0 受部径14.0 残存高3.4 T 高1.0 T 角度36°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。底：灰。3mm以下の長石若干含む。焼成：良好。残存：1/5。全体1/5。反転復元。
	22- 27	口徑11.0 受部径14.0 残存高3.4 T 高2.0 T 角度41°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く。底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部より1/2回転ヘラ削り。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。底：灰。残存：口縁1/8、全体1/4。反転復元。外間に自然釉付着。
杯 身	22- 28	口徑9.6 受部径11.7 残高3.0 T 高0.4 T 角度47°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く。底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：灰かぶり。
	22- 29	口徑10.0 受部径16.2 残高3.1 T 高0.4 T 角度57°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：口縁とんどなし。全体2/3。外間に灰かぶり。外間に自然釉付着。
杯 身	22- 30	口徑9.8 受部径11.8 残高3.0 T 高0.3 T 角度51°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外周面未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。合成復元。外間に自然釉付着。灰かぶり。

杯 身	22- 31	口徑8.6 受部径11.0 残高2.6 T 高0.6 T 角度42°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面調整。他の回転ナダ調整。底部内部に静止ナガあり。	ロクロ回転：右回り。色調：外一層灰白色。内一灰色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：口縁・全体1/2。外表面灰があり。
	22- 32	口徑9.2 受部径11.4 残高2.7 T 高0.4 T 角度54°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部中央欠損。底部は半ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一層灰白色。内一暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：口縫1/8、全体1/5。反転復元。
杯 身	22- 33	口徑9.6 受部径11.4 残高3.0 T 高0.3 T 角度54°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部中央欠損。底部は半ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面/8回転ヘラ削り調整。3/5未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口縫1/8、全体2/3。一部反転復元。重ね焼きによる上器片焼着。
	22- 34	口徑9.0 受部径11.2 残高2.6 T 高0.3 T 角度58°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面/3未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口縫1/5、全体1/3。反転復元。
杯 身	22- 35	口徑10.0 受部径12.0 残高2.9 T 高0.4 T 角度31°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面/9回転ヘラ削り調整。底部外表面5/9未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：口縫1/11、全体1/4。反転復元。自然釉付着。
	22- 36	口徑9.6 受部径13.4 残高2.6 T 高0.5 T 角度38°36'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面/10回転ヘラ削り調整。底部外表面6/10未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。以反転復元。
杯 身	22- 37	口徑9.4 受部径11.4 残高2.4 T 高0.5 T 角度32°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外表面/1/10回転ヘラ削り調整。底部外表面3/10未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	23- 38	口徑16.6 残高2.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。大井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/1。反転復元。外側に自然釉付着。
杯 蓋	23- 39	口徑9.6 残高2.8	体部・口縁部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外表面1/3未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	23- 40	口徑11.2 器高2.4	体部は下方に下り、口縁部は外反する。口縁端部はやや内傾する面を作り、外側で接地する。天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外表面/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石・石英・チャートを含む。焼成：良好。残存：口縫1/8、全体1/4。反転復元。外側一部に自然釉付着。
蓋 蓋	23- 41	口徑9.0 残高2.8	体部・口縁部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面1/5回転ヘラ削り調整。大井部外表面1/5未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	23- 42	口徑11.7 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面1/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を多く含む。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。自然釉付着。
杯 身	23- 43	口徑10.3 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面1/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を多く含む。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4、全体1/3。一部成復元。外側に自然釉付着。
	23- 44	口徑10.6 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。大井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一層灰白色。内一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/5。反転復元。外側に自然釉付着。
杯 蓋	23- 45	口徑13.0 器高3.2	体部・口縁部はやや内彎して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外表面5/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。口縁部少し歪んでいる。

杯 身	23- 46	口径11.4 受部径14.0 器高3.5 T 高0.9 T 角度35°00'	たちあがりは内傾したのも端部で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面4/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。外面に自然釉付着。灰かぶり。
	23- 47	口径12.1 受部径14.3 器高4.1 T 高0.9 T 角度29°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は瓶と外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面4/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。外面に自然釉付着。
杯 身	23- 48	口径9.6 受部径12.6 器高3.9 T 高0.9 T 角度38°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面4/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/8、全体1/3。反転復元。自然釉付着。
	23- 49	口径12.0 受部径15.0 器高3.5 T 高0.6 T 角度51°15'	たちあがりは内傾したのも端部で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/8、全体1/3。反転復元。自然釉付着。
杯 身	23- 50	口径12.6 受部径15.0 器高4.1 T 高0.9 T 角度24°00'	たちあがりは内傾したのも中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/6、全体1/4。反転復元。自然釉付着。
	23- 51	口径12.2 受部径14.7 器高3.5 T 高0.9 T 角度33°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mm以下の長石を僅かに含む。焼成：良好。残存：口縁1/4、全体1/7。反転復元。自然釉付着。
杯 身	23- 52	口径10.8 受部径13.3 器高3.5 T 高0.7 T 角度39°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面5/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を僅かに含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。口縁部に自然釉付着。
	23- 53	口径11.0 受部径13.4 器高3.2 T 高0.9 T 角度37°30'	たちあがりは内傾したのも中位で直し、端部はやや深い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を僅かに含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。口縁部に自然釉付着。
杯 身	23- 54	口径10.6 受部径17.8 器高3.2 T 高0.9 T 角度37°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。口縁部に自然釉付着。
	23- 55	口径12.2 受部径14.4 器高3.2 T 高0.7 T 角度36°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は瓶と外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央は焼け合ひ。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石・石英・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外面に自然釉付着。
杯 身	23- 56	口径11.6 受部径13.9 器高3.2 T 高0.9 T 角度27°15'	たちあがりは内傾したのも中位で直し、端部は丸くおさめる。受部はやや深く、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面5/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/5、全体1/4。反転復元。
	23- 57	口径9.0 受部径11.2 器高3.2 T 高0.4 T 角度48°30'	たちあがりは内傾したのも端部で上方にのび、端部はやや深い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/2回転調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面灰かぶり。
杯 身	23- 58	口径9.4 受部径11.4 器高3.0 T 高0.3 T 角度44°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。底部中央欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石・石英を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面に自然釉付着。
	23- 59	口径9.0 受部径11.4 器高3.0 T 高0.4 T 角度42°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/3回転調整。他の回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石・石英を含む。焼成：良好。残存：口縁1/4、全体1/3。反転復元。外面に自然釉付着。

杯 身	23- 60	口径11.1 受部径12.9 高さ5.0 T高0.6 T角度28°45'	たちあがりは内側でのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面部面調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：口盤1/4、全体1/3。外面に自然釉付着。受部外間に重ね焼きによる土器片埋入。
	23- 61	口径10.8 高さ3.1 つまみ径 つまみ高0.9 かえり高0.3 かえり角度16°00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部はやや低くや丸い。大井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。外面に自然釉付着。灰かぶり。
蓋 蓋	23- 62	口径9.0 残存3.5 つまみ径1.2 つまみ高1.0 かえり高0.2 かえり角度59°45'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部はやや低くや丸い。大井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	23- 63	口径10.7 高さ2.9 つまみ径1.4 つまみ高0.8 かえり高0.3 かえり角度12°00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや脱い。かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部は低く平ら。大井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口盤3/4、全体4/3。
蓋 蓋	23- 64	口径10.0 残存3.2 つまみ径1.5 つまみ高1.0 かえり高0.3 かえり角度24°30'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや脱い。かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部は低く平ら。天井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一暗灰褐色、内一暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。外面灰かぶり。
	23- 65	口径10.8 高さ6.8 つまみ径1.7 つまみ高1.2 かえり高0.2 かえり角度38°30'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部はやや低く半ら。天井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一暗灰褐色。内一灰褐色。胎土：密。5mm以下のチャートを含む。焼成：良好。残存：口盤1/4、全体1/3。一部反転復元。口縁部に重ね焼きによる土器片埋入。
つまみ付 き杯 蓋	23- 66	口径10.0 受部径11.8 高さ2.7 つまみ径1.5 つまみ高1.0 かえり高0.2 かえり角度37°00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや脱い。かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部は低く平ら。天井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面3/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口盤1/4、全体1/2。反転復元。
	23- 67	口径11.0 高さ6.1 つまみ径1.1 つまみ高1.0 かえり高0.2 かえり角度40°15'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。かえりは口縁端部以下に突出せず。口縁端部とかえり端部の双方で接地する。天井部は低く平ら。天井部外面部面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。6mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。一部反転復元。
杯 身	23- 68	口径9.0 高さ4.3	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石・石英を僅かに含む。焼成：良好。残存：口盤1/8、全体1/5。反転復元。
	23- 69	口径10.6 残存高3.3	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面1/2本調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一灰色。内一淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	24- 70	口径13.4 器高4.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口盤1/4、全体1/2。反転復元。記号：天井部外面に「一」あり。
	24- 71	口径18.0 残存高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口盤1/7、全体1/6。反転復元。ヘラ記号：大井部外面に「一」あり。

杯 蓋	24- 72	口径13.4 残存高3.3	体部・口縁部はやや外反してト外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外山1/2回転ヘラ削り調整。天井部外山1/6回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：外暗灰オーラー色。内一階灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/8、全体1/7。ヘラ記号：天井部外山に「-」あり。
	24- 73	口径11.6 受部径16.2 器高3.9 T 高1.1 T 角度28°45'	たちあがりは内傾したのも底位で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：外暗灰オーラー色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/4、全体1/7。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。反転復元。
	24- 74	口径10.4 器高3.4	体部・口縁部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くない。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外山2/3回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：外暗灰オーラー色。胎土：密。7mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/4、全体1/7。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。
杯 蓋	24- 75	口径13.4 器高2.7	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外山5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：外暗灰オーラー色。胎土：密。3mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：口縁2/5、全体1/8。ヘラ記号：天井部外山に「-」あり。
	24- 76	口径10.0 受部径12.0 残存高3.4 T 高0.6 T 角度35°15'	たちあがりは内傾したのも中位でやや上方にのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/3回転ヘラ削り調整。底部外山2/3回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。一部反転復元。
	24- 77	口径10.0 受部径12.0 残存高2.6 T 高0.5 T 角度33°00'	たちあがりは内傾したのも中位ではほ直立し、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/5回転ヘラ削り調整。底部外山2/5回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。一部反転復元。
杯 身	24- 78	口径12.0 受部径14.5 器高3.8 T 高0.7 T 角度29°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山2/3回転ヘラ削り調整。底部外山4/5回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/2。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。反転復元。外面上自然釉付着。灰ふかぶり。口縁部1/2歪んでいる。
	24- 79	口径10.0 受部径12.0 残存高3.2 T 高0.7 T 角度29°45'	たちあがりは内傾したのも中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/4回転ヘラ削り調整。底部外山5/8回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。
	24- 80	口径10.0 受部径12.0 残存高3.7 T 高0.6 T 角度42°00'	たちあがりは内傾したのも中位で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/4回転ヘラ削り調整。底部外山1/2回転。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。ヘラ記号：底部外山に「-」あり。
脚 輪	25- 81	体部最大径10.7 残存高4.9	口縁部は基部から外側へして外方に回り、端部は丸くおさめる。脚部は下外方に下り、底部は平らに近い。体部最大径は上口2/5に位置し、ほぼ中位の高さに凹孔を穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。一条の縫合・沈継を2ヶ所、その間をタッキリ施す。底部回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	25- 82	口径7.8 器高3.1	口縁部は基部から外側へして外方に回り、端部は丸くおさめる。脚部は下外方に下り、底部は平ら。底部中央欠損。体部最大径は中位に位置する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
灯 籠	25- 83	口径9.6 基部径10.8 最大径18.2 残存高5.8	口縁部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は各下方に割り出し、体部は下外方に下る。肩部にあまり段を成す。体部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	25- 84	口径15.0 残存高4.7	体部・口縁部はやや外反して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は深い、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山1/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
高 杯	25- 85	口径10.2 残存高3.5	体部・口縁部は上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外山2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	クロコ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
					クロコ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。外面上自然釉付着。口縁部歪んでいる。

高体(深部)	25- 86	口径12.6 残存高3.4	体部・口端部は上外方にのびる。口 縁、端部は丸くおさめる。底体部は やや深く、底部はやや浅い。底部、 体部境界にやや弱い。脚部中位 に弱い沈線をめぐらす。底部中央、脚 部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部 外縁1/2回転ヘタ削り調整。他 は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縁3/5、全体1/3。反転復元。 灰かぶり。自然釉付着。
	25- 87	基部径3.5 残存高9.1	体部都上以下欠損。杯底部は平ら。脚 部は下方に下ったものも外反して下外 方に下る。底部欠損。脚部中位に2 条の鈍い沈線をめぐらす。2段2方 向に長方形スカッシュ有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。回転 ナダ調整。脚部内面にしづり目 あり。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰 色。胎土: 塗。3mm以下の長石 を僅かに含む。焼成: 良好。残存: 脚底部なし。外部光沢。反転復元。
高杯	25- 88	口径14.8 基部径4.5 残存高5.2	体部・口縁部は外方にのび、口端 部は丸くおさめる。底体部は浅 く、底部はほぼ平ら。脚部は下外方 に傾いて下る。脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部 外縁1/2回転ヘタ削り調整。他 は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を僅かに含む。焼成: 良好。残存: 口縁1/4。一部反転復元。
	25- 89	脚部底径12.0 残存高11.3	杯底欠損。脚部は下方に下ったもの が外反して外下方に下る。端部部は外 側する平面を成し、端部内面で接 する。脚部下方2/5の位に2条の やや鈍い沈線をめぐらす。2段3方 向に長方形スカッシュ有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。回転 ナダ調整。脚部内面にしづり目 あり。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 綠色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を僅かに含む。焼成: 良好。残存: 脚底部1/6。反転復元。
高体(脚部)	25- 90	脚底部11.4 残存高5.6	脚部上方以下欠損。脚部は外反して 外下方に傾いて下る。端部部はやや 外側する平面を成し、端部内面で接 する。脚部中位に2条の沈線をめ ぐらす。2段2方向に長方形スカッシュ 有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を僅かに含む。焼成: 良好。残存: 脚底部1/4。反転復元。
	25- 91	脚部底径12.6 基部径4.6 残存高7.3	脚部底上以上欠損。脚部は基部よ り下外方に外反して下る。脚部底上 面であるまじき段を成し、端部は丸くお さめる。脚部内面で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を僅かに含む。焼成: 良好。残存: 脚底部1/3。一部反転復元。 外面上に自然釉付着。灰かぶり。
高体(脚部)	25- 92	脚部底径11.0 残存高3.6	脚部上方以下欠損。脚部は外下方 に傾いて下る。端部部は外側する平 面を成し、脚部内面と端部内面の双 方で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 白色。胎土: 塗。焼成: やや難。 残存: 脚部ねば完形。
	25- 93	脚部底径16.0 残存高3.3	脚部上方以下欠損。脚部は外下方 に傾いて下る。端部部はやや内傾す る平面を成し、端部内面と端部内面の 双方で接地する。脚部中位に1条 の沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を若干含む。焼成: 良好。残存: 脚底部1/5。反転復元。外面上に自 然釉付着。灰かぶり。
高体(脚部)	25- 94	脚底径13.4 残存高4.7	脚部上方以下欠損。脚部は外反し ながら外下方に傾いて下る。外曲2 箇所に段を成し、後をめぐらし、内 弯して下方下りする。端部部は外反す る。端部部は内側する凹面を成し、 端部外側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 青色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縁1/5。反転復元。外面上灰 かぶり。自然釉付着。内面上土器片と 土器窓残片付着。
	25- 95	脚底径8.0 残存高2.4	杯底欠損。脚部は外方に下る。端 部部は凹面を成し、端部内面で接地 する。脚部上方2方向に円孔スカッシュ を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縁1/5。反転復元。外面上灰 かぶり。
高体(脚部)	25- 96	脚底径10.0 残存高2.9	杯底欠損。脚部はやや外反して下外 方に下る。端部部は外側する凹面を 成して端部内面で接地する。脚部上 方1方向に円孔スカッシュを有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗 色。胎土: 塗。1mm以下の長石 を若干含む。焼成: 良好。残存: 脚底部1/4。反転復元。
	25- 97	脚底径11.8 基部径9.8 残存高2.1	脚部欠損。脚部は外方に下る。端 部部は平面を成し、端部で接地す る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を僅かに含む。焼成: 良好。残存: 脚底部1/4。反転復元。外面上灰 かぶり。
高体	26- 98	口徑15.0 基部径13.4 残存高5.7	口部部は外脣して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのひたものも内脣 して上内方にのび、口縁部内面に平 なる。脚部は外下方に下る。脚部下半 以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調査。口 部内面タタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰 色。胎土: 塗。2mm以下の長石 を含む。焼成: 良好。残存: 口縁 1/4。反転復元。
	26- 99	口徑16.8 基部径13.4 残存高5.3	口部部はやや外反して上外方にの び、口縁部下で外下方にのひたものも内脣 して上内方にのび、口縁部内面に平 なる。脚部は内脣して外下方に下る。脚部下半 以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰 色。胎土: 塗。1mm以下の長石 を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縁1/4。反転復元。自然釉付 着。
要	26-100	口徑20.0 残存高4.0	口頭部は外脣して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのひたものも内脣 してやや内上方への、口縁部内面に 平なる。脚部は外下方に下る。脚部下半 以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰 緑色。胎土: 塗。焼成: 良好。残存: 口縁1/4。反転復元。自然釉付 着。

要	26-101	口径19.0 基部径16.2 残存高7.0	口縫部はやや外側にして上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち内側にしてやや上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部内面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4。反転復元。肩部内面青海波タキ。
	26-102	口径20.4 基部径17.6 残存高7.0	口縫部はやや外側にして上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち内側にして外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。口縫部外面青海波タキ調整。肩部内面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4。反転復元。肩部内面青海波タキ。
要	26-103	口径21.4 基部径19.2 残存高6.0	口縫部はやや外側にして上方にのび、口縫部は内側にして上方にのび、内方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。口縫部外面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4。反転復元。肩部内面青海波タキ。
	26-104	口径18.0 基部径15.2 残存高9.7	口縫部は外側にして上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち内上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。体部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部外面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰白色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4。反転復元。自然釉付着。灰かぶり。
要	26-105	口径18.4 基部径16.6 残存高11.0	口縫部は外側にして上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち内上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外側にして外下方に下る。体部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部内面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰白色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4。反転復元。自然釉付着。
	27-106	口径20.0 基部径19.4 残存高6.4	口縫部は外側にして上方にのび、口縫部は内側にして上方にのひたのち内上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部内面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/4。反転復元。灰かぶり。自然釉付着。
要	27-107	口径25.1 基部径22.9 残存高8.3	口縫部は外側にして上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち内側にして上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部内面青海波タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/10。反転復元。自然釉付着。
	27-108	口径32.2 残存高2.7	口縫部は上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち外反して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰白色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/7。反転復元。
要	27-109	口径38.8 残存高11.0	口縫部はやや外反して上方にのび、口縫部下で下外方にのひたのち内側にして上方にのび。端部は丸くおさめる。口縫部内面に非常に多い段を成す。口縫部直下1条、頂部上方1/3に1条、頭部下1/3に鉛、1条の沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上に輪隔き捺行沈線文を有する。肩部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/7。反転復元。
	27-110	口径26.0 基高4.8	体部・口縫部は外下方に下り、口縫部は丸くおさめる。大井部は高く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面8/9回転ヘラ削り調節。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：外一暗灰白色。内一明灰色。胎土：密。2mm以下の長石や多く含む。焼成：良好。残存：口縫1/6。反転復元。
器合	27-111	口径36.4 残存高6.0	たちあがりは短く上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面に大きい段を成す。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深い。底部・脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面8/9回転ヘラ削り調節。内面、同心内タキ。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：口縫1/15。
	27-112	口径25.0 受部径27.0 残存高5.7 T高1.5 T角度38°00'	たちあがりは内傾したの中空で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部・脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面8/9回転ヘラ削り調節。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫1/8。反転復元。
高杯	27-113	口径21.0 受部径23.4 残存高3.7 T高0.6 T角度35°00'	たちあがりは内傾したの中空で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部・脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面8/9回転ヘラ削り調節。他の回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一暗灰色。内一暗青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。

	27-114	LI縁47.0 残存高10.7	<p>口頭部は外側して上外方にのび、口 輪部下で下方にのびたのも上方にの び、段を成したのち内側して上内方 にのびる。端部は丸くおさめる。口 縁部内面にあまい段を成す。口縁部 蓋下に1条、頬部上方1/3の位置に 2条の沈鬱をめぐらし、頬部下方1/ 3の位置に1条のやや浅い沈鬱をめ ぐらす。上方1/3の沈鬱の上下に横 書き斜行沈鬱文を有する。胃部以下 欠損。</p>	<p>マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。</p>	<p>色調：暗灰色。筋上：密。施成： 良好。残存：LI縁。反転復元。</p>
--	--------	--------------------	---	---------------------------------	--

表 7 北堤断面土層表

色調	土質	備考	色調	土質	備考
(第1群)					
1 黄褐色	砂	2~5cmの礫を多く含む	58 淡青色	砂	屑の下方に5cmの礫多く含む
2 灰黄色	粗砂	10cm程度の礫を多く含む	59 棕色	粘土	
3 黄褐色	砂	3cm程度の粘土ブロック1cm程 度の礫を多く含む	60 明褐色	シルト	
4 明黄褐色	砂	1~4cmの礫、2cm程度の粘土 ブロック含む	61 黄褐色	粘土	
5 明黄褐色	砂	4cm程度の礫を含む 粘土ブ ロック含む	62 にふい黄褐色	シルト	
6 灰褐色	砂質土	2~5cmの礫を多く含む	63 明黄褐色	粗砂	
7 瑞灰黄色	砂	2~10cmの礫を非常に多く含 む	64 明黄褐色	粘土	
8 黄褐色	シルト	2cm程度の礫を含む	65 棕色	シルト	
9 棕色	シルト	2cm程度の礫を含む	66 棕色	砂	
10 淡黄褐色	砂	1~10cmの礫を多く含む	67 黄色	粘土	
11 明赤褐色	粗砂	5mm~5cmの礫を多く含む	68 明黄褐色	シルト	
12 灰白色	粘土 バラス		69 暗灰黄色	砂	須走跡片あり 灰斑か?
13 棕色	砂	粘土ブロックを多く含む	70 白灰色	シルト	
14 棕色	砂	2cmの礫を多く含む	71 灰茶色	シルト	
15 明褐色	砂質土	2cm程度の粘土ブロックを多 く含む	72 灰褐色	粘土	粗砂を含む
16 黄褐色	粗砂	褐色粘土ブロックを多く含む	73 茶色	シルト	
17 黄褐色	砂		74 灰茶色	シルト	
18 灰色	粗砂		75 茶色	シルト	
19 灰白色	粘土		76 灰茶色	粘土	
20 灰白色	粘土ブロック		77 杏色	シルト	
21 赤褐色	シルト		78 灰白色	粘土	
22 灰色	粗砂	2cm程度の礫を含む	79 明黄褐色	シルト	
23 青灰色	粘土		80 棕色	シルト	
24 灰黄色	粗砂		81 棕色	粗砂	
25 黄色	粘土		82 棕色	粗砂	
26 灰黄色	粗砂		83 明黄褐色	シルト	
27 オリーブグレー色	粘土	池の上か?	84 黄褐色	粘土	
28 棕色	粗砂		85 棕色	粘土	
29 オリーブグレー色	粗砂	同色の粘土ブロックが混じる	86 黄褐色	シルト	
30 にふい粒状	砂	同色の粘土ブロックが混じる	87 灰茶色	粘土	
31 棕色	シルト		88 灰茶色	粘土	
32 黄褐色	シルト		89 黄褐色	粘土	
33 にふい褐色	粗砂		90 棕色	粗砂	
34 淡黄褐色粘土	粘土		91 基灰色	粗砂	
35 灰白色	粘土		92 黄褐色	粘土	
36 明褐色	粗砂		93 灰白色	粗砂	鉛錆した層
37 緑灰色	粘土		94 にふい褐色	シルト	
38 明褐色	粗砂		95 黄色	粘土	
39 棕色	粘土		96 明黄褐色	シルト	
40 棕色	粘土		97 黄褐色	シルト	
41 粘土			98 緑灰色	粗砂	
42 暗緑灰色	シルト油の 堆積		99 明黄褐色	粗砂	
43 オリーブ黄色	砂	1~3cm程度の礫を多く含む	100 明黄褐色	シルト	
44 灰色	粗砂		101 にふい黄褐色	シルト	
45 オリーブグレー色	シルト		102 明黄褐色	粗砂	
46 にふい黄褐色	粘土		103 明黄褐色	シルト	
47 明緑灰色	シルト+淡青 シルト+土 褐色色シルトの 混合土	細灰シルトの大きなブロック を含む この層は淡水砂、東 から西に流れて堤体、堆積物 を侵食している	104 黄褐色	粗砂	
48 浅黄色	粗砂	48の中のブロックか?	105 黄褐色	粗砂	
49 青灰色	シルト		106 にふい黄褐色	シルト	
50 底白色	粗砂	堆の堆積物か?	107 黄褐色	粘土	
51 翠灰色	粗砂	-部酸化して浅黄色	108 黄褐色	粗砂	
52 青灰色	粗砂	底部に有機物多い	109 浅黄褐色	シルト	
53 青灰色	シルト		110 浅黄褐色	粘土	
54 新しい盛り土			111 黄褐色	砂	
(第2群)			112 明黄褐色	粘土	
55 浅黄色	シルト	2~5cmの丸い礫を多く含む	113 黄褐色	砂	
56 黄褐色	粗砂	1~10cmの礫多く含む	114 明黄褐色	粗砂	
57 棕色	粗砂	2~10cmの礫多く含む	115 浅黄色	シルト	
			116 黄褐色	砂	
			117 黄褐色	砂	
			118 明黄褐色	砂	
			119 黄色	シルト	
			120 黄褐色	砂	
			121 黄色	シルト	
			122 棕色	シルト	
			123 にふい褐色	シルト	
			124 淡褐色	粘土	

色	調	土質	備考	色	調	土質	備考
125	灰褐色	シルト		192	暗黄色	土壤	
126	褐色	シルト		193	にふい橙色	砂	
127	にふい黄褐色	シルト	2cm程度の礫を多く含む	194	褐色	シルト	
128	黄褐色	シルト		195	褐色	シルト	土壤か?
129	浅黄褐色	シルト		196	にふい橙色	シルト	
130	黄褐色	粘土		197	にふい橙色	シルト	
131	明黄褐色	細砂		198	黄褐色	シルト	
132	明黄褐色	シルト		199	褐色	細砂	
133	褐色	シルト		200	明褐色	シルト	
134	褐色	砂		201	明褐色	上壤	
135	浅黄色	シルト	5mm程度の礫を含む	202	褐色	砂	
136	淡黄色	粘土		203	黄褐色	シルト	
137	浅黄色	粘土		204	明褐色	シルト	
138	黄色	シルト		205	褐色	シルト	
139	黄色	シルト		206	褐色	シルト	
140	淡黄色	シルト	5mm以下の小礫を含む	207	褐色	シルト	
141	淡黄色	シルト		(第6例)			
142	黄褐色	粘土		208	暗灰茶色	土壤	
143	褐色	砂		209	暗赤褐色	シルト	
144	褐色	細砂		210	灰褐色	上壤	
145	明黄褐色	シルト		211	暗褐色	土壤	
146	灰褐色	砂		212	黄褐色	粘土	
147	明褐色	シルト		213	にふい褐色	細砂	
148	にふい褐色	シルト	5mm程度の礫を含む	214	黑褐色	シルト	炭化物を含む
149	にふい褐色	粘土		215	黄褐色	砂	
150	棕色	砂質土		216	にふい橙色	粘土	
151	黄褐色	砂		217	褐色	シルト	青灰色粘土を層状に挟む
152	明褐色	砂		218	黄褐色	シルト	
153	にふい黄褐色	シルト		219	にふい赤褐色	土壤	
154	明褐色	粘土		220	褐色	シルト	
155	にふい褐色	粘土		221	褐色	土壤	
(第7例)							
156	灰色	粘土		222	赤灰色	上壤	
157	灰色	砂		223	暗灰黄色	土壤	
158	浅黄色	シルト		224	暗赤褐色	土壤	
159	茶色	粗砂		225	黄褐色	シルト	
160	茶灰色	砂		226	暗赤褐色	土壤	
161	灰白色	シルト		227	明黄褐色	シルト	
162	灰白色	砂		228	暗褐色	上壤	
163	灰白色	シルト		229	黄褐色	砂	
164	灰色	粘土		230	青灰色	シルト	
165	茶灰色	粘土		231	にふい褐色	シルト	
166	灰色	粘土		232	にふい黄色	砂	
167	灰白色	粘土		233	にふい褐色	砂	2cmの礫を含む
168	灰褐色	シルト		234	灰黄褐色	砂	
169	茶灰色	シルト		235	褐色	粘土	
170	茶褐色	粗砂		236	暗オリーブ褐色	シルト	2cm程度の礫を含む
171	茶色	シルト		237	にふい黄褐色	砂	
172	明褐色	シルト		238	黄褐色	粘土	
173	茶灰色	シルト		239	にふい赤褐色	シルト	
174	茶褐色	粘土		240	明赤褐色	シルト	
175	茶褐色	シルト		241	明赤褐色	シルト	
176	茶灰色	砂		242	オリーブ黄色	粘土	鉄分を含む
177	灰色	粘土		243	オリーブ褐色	シルト	
178	茶灰色	シルト		244	赤褐色	シルト	
179	明黄褐色	粘土		245	灰色	粘土	
180	黄茶色	粘土		246	褐色	シルト	
181	灰色	砂		247	灰白色	シルト	5mm程度の礫を多く含む
182	褐色	粗砂		248	明黄褐色	シルト	
183	茶灰色	シルト		249	黄褐色	シルト	
184	灰白色	シルト		250	明黄褐色	細砂	
185	灰白色	粗砂		251	暗紅褐色	粘土	
186	褐色	砂		252	灰白色	細砂	
187	黑褐色	砂		253	灰白色	粗砂	
188	灰褐色	粗砂		254	黄褐色	粘土	2cm程度の礫を含む
(第8例)							
189	黄茶色	粘土		255	灰白色	砂	
190	黄茶色	シルト		256	褐色	シルト	
191	茶色	砂		257	明褐色	砂	
				258	綠灰色	細砂	

色	調	土質	備考	色	調	土質	備考
259	灰褐色	シルト		316	浅黄色	砂	1~10cmの褐色～青灰色の シルトブロックを含む 淀水性
260	褐色	有機物		317	明黄褐色	細砂	
261	褐色	シルト		318	灰白色	粗砂	
262	オリーブ灰色	シルト	褐色を多く含む	319	黄色	シルト	
263	黃色	粘土		320	明黄褐色	粘土	
264	黃灰色	シルト		321	明黄褐色	砂	
265	灰白色	粗砂		322	明黄褐色	細砂	
266	黃灰色	シルト		323	明黄褐色+褐色	砂	3~5cmごとに層状に覆む
268	オリーブ灰色	シルト	褐色の有機物を層状に挟む はは水平に	324	明黄褐色	シルト+砂の 版塗	シルト2~4cm砂1cm程はは水 平
269	緑オリーブ色	砂	褐色を多く含む	325	暗灰黄色	シルト	
270	オリーブ灰色	シルト		326	暗褐色	粘土	
271	緑灰色	粘土		327	褐色	シルト	2~5mmの礫を含む
272	褐色灰色シルトの 互層		油の堆積	328	黃褐色	シルト	10cm程度の礫を層状に挟む
273	にふい黃褐色	細砂		329	褐色	粗砂	
274	にふい黃褐色 粗砂と褐色灰色シ ルトの互層		3~5cm巾	330	褐色	シルト	
275	暗褐色灰色シルト と褐色灰色有機物 の互層		3~5cm巾のやや左上がり	331	灰黃褐色	細砂	10cmごとに褐色砂を挟む
(第8頁)				332	にふい黃褐色	シルト	鉄分を含む
276	褐色	シルト	5cmの礫を多く含む	333	黃褐色	シルト	土築岩細片を含む 15cm程度 の巾で上をはは水平に横む
277	灰褐色の粘土		上器を含む	334	にふい褐色	シルト	上の方にはこし有機物を含 む
278	明黄褐色	粘土		335	にふい褐色	シルト	
279	明黄褐色	シルト		336	黃褐色粘土+ブロ ック+灰白色砂		はは水平に粘土を横み間に 砂を含む
280	明黄褐色	砂		337	にふい黃褐色	砂	有機物腐か?
281	黃褐色	シルト		338	灰黃褐色	砂	5mm程度の礫を多く含む
282	浅黄褐色	シルト		339	黃褐色	粘土	
283	淡黄褐色	シルト		340	にふい黃褐色	粗砂	
284	明褐灰色	細砂		341	灰黃褐色	シルト	有機物屑
285	黃褐色	シルト		342	黃褐色粗砂～淡 黃褐色粗砂(礫を 多く含む)		水平に3cmごとに横む
286	黃褐色	粘土		343	にふい褐色	粗砂	2~15cmの礫を含み斜め に横む
287	にふい黃褐色	細砂		344	明褐色	粘土	
288	黃色	シルト	同色の砂を層状に挟む	345	オリーブ灰色	粘土	
289	明黄褐色	細砂		346	暗赤褐色	砂	
290	浅黄色	細砂		347	褐色	粘土	
291	黃褐色	細砂		348	明青灰色	粗砂	
292	黃褐色	砂		349	黃褐色	シルト	
293	浅黄色	シルト		350	オリーブ灰色	シルト	有機物を含む
294	淡黄色	シルト		351	明黄褐色	細砂	
295	淡黄色	細砂		352	にふい黃褐色	砂	地下水位より下は青灰砂
296	灰黄色	砂		353	淡黄色	シルト	地下水位より下は様板シルト
297	淡黄色	シルト		354	褐色	シルト(2~10 cmの礫含む)	地下水位より下は青灰砂
298	灰白色	砂		355	黃褐色	粘土	
299	灰白色	細砂		356	オリーブ灰色	細砂	
300	敷藁屑の灰門土			357	にふい褐色	シルト	北側は酸化して褐色をおびる
301	灰褐色	シルト		358	淡黄色	シルト	
302	灰褐色	有機物屑		359	オリーブ灰色	シルト	
303	灰オリーブ色	シルト		360	オリーブ褐色	シルト	
304	暗綠灰色	シルト		361	にふい青褐色	シルト	20cm程度の礫を含む グラウ ンドの盛土
305	オリーブ灰色	シルト	有機物屑を層状に挟む 初め 水半盛上であるが漬った方が 20度左上がり	362	褐色	シルト	2~5cmの礫を多く含む
306	オリーブ黒色	シルト	礫を含む 流している	363	黑褐色	シルト	礫 木屑を多く含む
307	褐色灰色シルトと 緑褐色シルトの 互層		厚さは5~7cm	364	暗綠灰色	シルト	
308	綠灰色	粗砂 同色の 粘土ブロック		365	明黄褐色	粘土	
309	明緑灰色	細砂		366	黄色	粘土	燒土、須煮器を含む
310	明緑灰色	細砂	有機物を含む	367	灰黃褐色	砂	根砂が多く混入
311	赤灰色	シルト		368	にふい黃褐色	砂 バラス	
312	明緑灰色	細砂		369	オリーブ褐色	シルト	
313	淡黄褐色	細砂		370	明緑灰色	シルト	
314	オリーブ灰色細 砂+同色シルト の混合土			371	淡黄色	粗砂	
315	オリーブ灰色シ ルト+褐色灰色シ ルトの混合			372	黄色	粘土	
				373	褐色	シルト	
				374	褐色	シルト	
				375	褐色	シルト	
				376	淡黄色	シルト	

色調	土質	備考	色調	土質	備考
377 淡黄色	砂		441 にぶい黄褐色	シルト	上部にうすい土層
378 淡黄色	シルト		442 にぶい黄褐色	粘土	
379 灰白色	粗砂		443 褐灰色	有機物	
380 灰色	粗砂		444 浅黃棕色	シルト	
381 淡黄色	シルト		445 にぶい黄褐色	砂	
382 淡黄褐色	砂		446 黄褐色	細砂	
383 黄色	シルト	上方は粘土状	447 棕色	細砂	
384 黄褐色	粗砂	1cmの礫を含む	448 淡灰褐色	土壤	
385 浅黄褐色	粗砂		449 棕灰色	有機物	
386 明黄褐色	砂		450 灰色	粘土	
387 黄褐色	シルト		451 綠灰色	シルト	
388 黄色	粘土		452 墓地灰色	有機物	
389 オリーブ褐色	砂		453 黒褐色	有機物	
390 明黄褐色	シルト		454 灰色	細砂	
391 黄褐色	粘土		455 にぶい黄色	シルト	
392 黄色	粘土		456 黑褐	砂	礫を多く含む バラス層
393 にぶい黄褐色	シルト		457 錫灰色	シルト	
394 黄色	粘土		458 明綠灰色	細砂	
395 黄褐色	砂		459 オリーブ灰褐色シルト + 暗オリーブ色骨機物層 緑灰色砂散葉層		
396 黄褐色	粘土		460 明綠灰色	細砂	
397 褐色	粗砂	バラス層	461 オリーブ灰色	シルト	
398 黄褐色	粘土		462 オリーブ灰色	粘土	
399 灰白色	シルト		463 灰白色	細砂	
400 墓地灰色	砂		464 橙色	砂	緑灰色シルトブロックを含む
401 灰白色	粘土		465 暗オリーブ	有機物層	
402 茶褐色	シルト	5cmの礫を含む	466 棕灰色	細砂	
403 淡黄色	砂		467 灰白色	細砂	
404 灰白色	粗砂		468 綠灰色	細砂	
405 黄褐色	シルト	炭化物が混じる	469 淡黄色	細砂	
406 黄褐色	シルト	1cmの礫を多く含む	470 オリーブ黒色	木質	
407 黄灰褐色	シルト		471 綠灰色	シルト	
408 黄褐色	シルト		472 灰白色	細砂	
409 黄褐色	砂		473 綠灰色	細砂	
410 黄褐色	粘土		474 灰オリーブ色	有機物層	
411 黄褐色	粘土		475 明暗灰 (黒灰)	粘土	
412 淡黄色	粘土		476 灰白色 (暗灰)	細砂	
413 黄色	粘土		477 暗褐色有機物 + 暗褐色砂 + 暗灰 褐色シルト (黒い層)		須立層の出土品多く灰暗層の 可能性あり
414 灰黄褐色	粘土		478 墓地色 (黒い層)	シルト	1cm程度の礫を含む
415 黄色	粘土		479 黑褐色 (黒い層)	シルト	1cm程度の礫を多く含む
416 灰黄褐色	粘土		480 にぶい黄褐色	シルト	1cm程度の礫多く含む
417 明黄褐色	砂		481 暗褐色	シルト	
418 にぶい黄色	細砂		482 明暗灰層 (青い層)	細砂	
419 灰黄色	細砂		483 次オリーブ色 (青い層)	シルト	
420 淡黄色	シルト		484 暗褐色有機物 + 暗褐色砂 + 暗灰 褐色シルト (黒い層)		
(第10層)			485 暗白色	細砂 (小礫含む)	
421 黄褐色	砂	2cm程の礫を多く含む	486 暗褐色シルト + 淡黃褐色細砂 + 暗 褐色シルト		
422 にぶい黄褐色	細砂		487 暗白色	中砂	褐色シルト5~10cmブッ クを含む
423 にぶい黄褐色	シルト		488 褐灰色シルト + 褐灰色シルト + 淡黃褐色細砂 + 中 砂混合土		褐色シルトの割合多い 土壤シルトブロック含む
424 にぶい黄褐色	粘土		489 綠灰色	シルト	褐色シルト5~10cmを含む
425 明黄褐色	シルト		490 褐灰色シルト + 褐灰色シルト + 淡黃褐色細砂 + 中 砂混合土		
426 明暗灰	粘土				
427 褐色	シルト	シルト + 粗砂 - 粘土を水平に 積む			
428 暗赤灰色	有機物層	有機物が集中している 粗砂(2cm) + 有機物(2cm) + 粘 土(4cm)のくりかえし			
429 綠灰色	粘土				
430 明綠灰色	細砂				
431 青灰色	砂	1cm程度の礫を含む			
432 綠灰色	粘土				
433 浅黄色	砂				
434 褐灰色シルト + 褐色細砂 + 褐 色有機物(数 量少)	有機物層				
435 暗褐色	シルト				
436 黄褐色	粘土				
437 明暗褐色	粘土				
438 从白色	シルト				
439 灰白色	シルト				
440 黄褐色	粘土				

色調	土質	備考	色調	土質	備考
491 オリーブ灰シルト+灰白軟砂混合土	細砂～中砂		546 明緑灰色シルト+苔オリーブ灰色有機物+明緑灰色砂	シルト	オリーブ灰有機物層を5~12cmごとに挟む
492 淡黄色	細砂～中砂		547 緑灰色	シルト	苔灰色粘土の2~3cmのブロック混入
493 緑灰色	細砂～シルト(緑灰色シルト+ブロッカを含む)		548 オリーブ黄褐色	シルト	有機物層
494 緑色無砂と淡黄 色細砂混白土	細砂		549 灰オリーブ色	シルト	
495 緑灰色シルト+ オリーブ色粘土+ 褐灰色シルト	無はほぼ10cmごと		550 明オリーブ灰褐色	シルト	
496 黒色地上層 (灰黒)			551 青灰色粘土+褐 灰色有機物(5~ 10cm程度のブロ ックで覆る)	シルト	
497 緑灰色	シルト		552 灰黄色	細砂	
498 灰色	細砂		553 増緑灰色	シルト	
499 褐灰色	シルト		554 緑灰色	シルト	
500 明緑灰色	細砂	ラミナ状の構造が残る。築造 期以後の堆積物の可能性	555 緑灰色	シルト	
501 緑灰色	粘土		556 緑灰色	シルト	
502 緑灰色シルト+ 灰オリーブ色シ ルトの混合土			557 増青褐色	シルト	有機物層
503 灰色	シルト	有機物を含む	558 黒褐色	有機物上層	
504 褐灰色シルト+ 淡黄褐色粘土の 混合土			559 細灰色	シルト	
505 緑褐色	シルト	有機物を含む	560 オリーブ灰色	有機物層	
506 青灰色	シルト		561 緑灰色	シルト	
507 灰色	シルト		562 黒褐色	有機物層	
508 緑灰色	粘土		563 灰白色	細砂	
509 オリーブ色	シルト		564 浅黄色	粗砂	
510 淡黄色	粘土		565 緑灰色	粘土	
511 オリーブ灰色	細砂		566 増緑灰色	有機物層	
512 灰白色	中砂		567 灰白色	砂	
513 緑灰色シルト+ 褐灰色シルトの 混合土			568 増緑灰色	有機物	
514 灰黄褐色	粘土		569 緑灰色	シルト	有機物層
515 オリーブ灰色	シルト		570 増緑色	有機物層	
516 灰黄褐色	粘土	有機物を含む	571 灰白色	砂	
517 緑灰色	粘土		572 褐灰色	有機物層	
518 緑褐色	シルト		573 緑灰色	粘土	
519 灰白色	粗砂		574 增緑色	有機物層(明 顯な散葉層)	
520 淡黄色	中砂		575 緑灰色	シルト	2cm程度の層を含む。また有 機物層灰褐色の砂層と水平の 層状に挟む
521 黒褐色	シルト		576 緑灰色	シルト	
522 黄灰色	シルト		577 淡黄色	粗砂	
523 黒褐色	砂		578 灰色	細砂	
524 緑灰色	シルト		579 灰色	粘土	
525 オリーブ灰色	粘土		580 綠灰色	シルト	
526 褐灰色シルト+ 明オリーブ灰色 シルトの混合			581 増緑色	シルト	
527 オリーブ灰色	シルト	炭が入る	582 明緑灰色	砂	
528 灰色	シルト	炭が入る	583 増青灰色	有機物層	
529 灰色	シルト	炭化した小さな有機物含む	584 緑灰色	粘土	
530 青灰色	シルト		585 綠灰色	シルト	
531 灰オリーブ色	シルト		586 にふい黄褐色	シルト	
532 中砂			587 黑褐色	有機物層	
533 灰褐色	細砂		588 明黄褐色	粗砂	
534 明灰褐色	砂		589 綠灰色	シルト	
535 灰白色	砂	縫を含む	590 増緑灰色	粘土	
536 黑褐色	有機物層		591 黄褐色	粗砂	
537 青灰色	シルト		592 褐灰色	細砂	
538 灰白色	シルト		593 明黄褐色	粗砂	
539 青灰色	シルト		594 灰黄褐色	シルト	
540 黄色	シルト		595 明緑灰色	粘土	
541 にふい黄褐色	粘土		596 明緑灰色	粗砂	有機物を多く含む
542 明黄褐色	粘土		597 黑褐色	有機物	
543 灰白色	粘土		598 黄褐色	粗砂	
544 灰白色	砂		599 上茎	シルト	
545 淡黄褐色	シルト		600 細灰色	粘土	
546			601 細灰色	粗砂	
			602 灰白色	中砂	
			603 オリーブ色	細砂	
			604 灰オリーブ色	シルト	

色調	土質	備考	色調	土質	備考
605 暗オリーブ灰色	粘土		672 オリーブ灰色	細砂	
606 緑灰色	粘土		673 緑灰色	細砂	
607 下部は灰オリーブの有機物層上部は暗緑色の有機物層			674 暗緑色	シルト	
608 灰白色	粗砂		675 緑灰色	細砂	
609 灰白色	粗砂		676 暗緑灰色	細砂	
610 黄灰色	有機物質		677 緑灰色	細砂	
611 灰黄色	砂		678 灰白色	有機物層	
612 オリーブ灰色	細砂		679 緑灰色	シルト	
613 黒褐色	有機物層		680 オリーブ灰色	砂	
614 黄褐色	有機物層		681 暗緑灰色	シルト	
615 オリーブ灰色	シルト		682 暗オリーブ灰色	有機物層	
616 灰色	シルト		683 緑灰色	細砂	
617 土黃			684 暗オリーブ灰色	有機物層	
618 明緑灰色	シルト		685 灰白色	有機物層	
619 緑灰色	シルト		686 暗緑灰色	シルト	
620 暗赤灰色	シルト		687 緑灰色	シルト	
621 にふい黄褐色	砂		688 暗緑灰色	シルト	
622 緑灰色	シルト		689 灰白色		
623 にふい黄褐色	粗砂		690 明緑灰色	砂	
624 緑灰色	シルト		691 緑灰色	シルト	
625 緑灰色	シルト		692 にふい褐色	シルト	
626 斐貴褐色	有機物質		693 暗褐色	有機物層	
627 明緑灰色	シルト		694 暗褐色	シルト	
628 緑灰色	シルト		695 オリーブ灰色	細砂	
629 オリーブ灰色	シルト		696 オリーブ灰色	シルト	
630 暗緑灰色	シルト		697 暗オリーブ色	有機物層	
631 緑灰色	シルト		698 暗緑灰色	有機物層	
632 明緑灰色	細砂		699 灰白色	砂	
633 灰白色	粗砂	2cm程の縫を含む	700 灰オリーブ色	有機物層	
634 オリーブ灰色	シルト		701 緑灰色	シルト	
635 オリーブ黒色	有機物層		702 黒色	有機物層	
636 暗緑灰色	シルト		703 暗緑灰色	シルト	
637 緑灰色	細砂		704 灰オリーブ色	有機物層	
638 緑オリーブ灰色	有機物層		705 細灰色	シルト	
639 灰オリーブ色	有機物質		706 灰白色	砂	
640 緑灰色	シルト		707 緑灰色	シルト	
641 暗オリーブ灰色	有機物層		708 暗オリーブ色	有機物層	
642 オリーブ黒色	有機物層		709 緑灰色	細砂	
643 オリーブ灰色	シルト		710 細灰色	砂	
644 極暗褐色	有機物層		711 灰白色	砂	
645 緑亦褐色	有機物層		712 暗オリーブ色	有機物層	
646 オリーブ黄色	有機物質		713 オリーブ灰色	砂	
647 緑灰色	シルト		714 緑灰色	シルト	
648 緑灰色	シルト		715 暗オリーブ色	有機物層	
649 灰白色	砂		716 灰白色	砂	
650 明緑灰色	細砂		717 緑灰色	シルト	
651 灰オリーブ色	有機物層		718 暗緑灰色	シルト	
652 オリーブ灰色	粗砂		719 オリーブ灰色	シルト	
653 暗オリーブ色	有機物層		720 暗オリーブ色	有機物層	
654 暗緑灰色	シルト		721 暗オリーブ灰色	有機物層	
655 暗オリーブ灰色	有機物層		722 細灰色	シルト	
656 緑灰色	シルト		723 緑灰色	シルト	
657 緑灰色	シルト		724 暗オリーブ色	有機物層	
658 緑灰色	細砂		725 緑灰色	細砂	
659 暗緑灰色	シルト		726 灰白色	粗砂	
660 細灰色	細砂		727 明緑灰色	細砂	
661 暗緑灰色	シルト		728 緑灰色	細砂	
662 暗オリーブ灰色	有機物層		729 細灰色	砂	
663 灰白色	砂		730 緑灰色	細砂	
664 緑灰色	シルト		731 明緑灰色	砂	
665 暗緑灰色	有機物層		732 明緑灰色	シルト	
666 明緑灰色	細砂		733 オリーブ灰色	細砂	
667 暗オリーブ色	シルト		734 細灰色	シルト	
668 緑灰色	シルト		735 緑灰色	シルト	
669 緑灰色	シルト		736 緑灰色	シルト	
670 緑灰色	シルト		737 暗オリーブ灰色	有機物層	
671 暗緑灰色	シルト		738 明オリーブ灰色	細砂	
			739 暗オリーブ灰色	細砂	
			740 緑灰色	シルト	

色調	土質	備考	色調	土質	備考
741 増オーリーブ灰色	シルト		810 緑灰色	シルト	
742 緑灰色	シルト		811 緑灰色	粘砂	
743 明緑灰色	細砂		812 増オーリーブ灰色	有機物質	
744 暗緑灰色	シルト		813 明緑灰色	粘砂	
745 増緑灰色	シルト		814 緑灰色	シルト	
746 増緑灰色	シルト		815 増オーリーブ灰色	砂	
747 増緑灰色	シルト		816 明緑灰色	粘砂	
748 オリーブ灰色	シルト		817 明オーリーブ灰色	砂	
749 鮮灰色	シルト		818 鮮灰色	シルト	
750 オリーブ灰色	シルト		819 緑灰色	シルト	
751 増オーリーブ灰色	有機物質	枝多い	820 海灰色	粘砂	
752 増緑灰色	シルト		821 鮮灰色	砂	
753 オリーブ灰色	シルト		822 オリーブ黒色	有機物質	
754 緑灰色	シルト		823 増オーリーブ色	シルト	
755 黃灰色	シルト		824 淡灰色	砂	
756 増オーリーブ灰色	有機物質		825 鮮灰色	砂	
757 灰白色	砂		826 緑灰色	シルト	
758 緑灰色	細砂		827 増オーリーブ色	有機物質	
759 鮮灰色	砂		828 緑灰色	シルト	
760 増オーリーブ灰色	有機物質		829 黃灰色	シルト	
761 増緑灰色	シルト		830 灰モリーブ色	砂	
762 明緑灰色	砂		831 鮮灰色	砂	
763 黃灰色	細砂		832 灰白色	砂	
764 細灰色	細砂		833 灰白色	砂	
765 灰白色	砂		834 増オーリーブ色	有機物質	
766 細灰色	細砂		835 オリーブ灰色	シルト	有機物を層状に挟む
767 増緑灰色	シルト		836 灰白色	砂	
768 細灰色	シルト		837 黒褐色	有機物質	20cm巾のブロックによって構成
769 灰白色	砂		838 オリーブ灰色	シルト	
770 増緑灰色	シルト		839 灰白色	砂	
771 増オーリーブ灰色	有機物質		840 増灰黄色	有機物質	
772 オリーブ灰色	砂		841 灰色	細砂	
773 増緑灰色	シルト		842 増オーリーブ色	シルト	
774 緑灰色	シルト		843 鮮灰色	細砂	
775 緑灰色	細砂		844 緑灰色	細砂	
776 増オーリーブ灰色	有機物質		845 黄灰色	シルト	
777 灰白色	砂		846 淡黄色	砂	
778 増オーリーブ灰色	有機物質		847 黄灰色	シルト	
779 灰白色	砂		848 増灰黄色	有機物質	
780 灰白色	細砂		849 明緑灰色	細砂	
781 細灰色	シルト		850 灰黄色	砂	
782 細灰色	細砂		851 黑褐色	有機物質	
783 鮮灰色	細砂		852 黑灰色	砂	
784 明緑灰色	砂		853 灰白色	細砂	
785 明緑灰色	砂		854 増オーリーブ色	シルト 有機物多く含む	
786 緑灰色	シルト		855 オリーブ黑色	有機物質	
787 明緑灰色	粗砂		856 灰白色	砂	
788 緑灰色	砂		857 オリーブ黄色	細砂	
789 細灰色	シルト		858 増オーリーブ色	有機物質	
790 増オーリーブ灰色	有機物質		859 オリーブ灰色	細砂	
791 増オーリーブ灰色	有機物質		860 増オーリーブ色	シルト	
792 灰色	有機物質		861 増オーリーブ色	粘土	
793 鮮灰色	シルト		862 灰白色	細砂	
794 明緑灰色	砂		863 オリーブ灰色	細砂	
795 黃灰色	シルト		864 淡黄色	砂	
796 灰白色	有機物質		865 増オーリーブ色	粘土	
797 増オーリーブ灰色	シルト	有機物を含む	866 灰白色	砂	
798 淡黄色	粗砂		867 細灰色	粗砂	
799 オリーブ黒色	有機物質		868 灰白色	砂	
800 オリーブ灰色	シルト		869 増オーリーブ色	細砂	
801 増緑灰色	シルト		870 鮮灰色	シルト	
802 緑灰色	シルト		871 黄灰色	有機物質	
803 黒色	有機物質		872 オリーブ灰色	シルト	
804 鮮灰色	シルト		873 灰白色	砂	
805 明緑灰色	シルト		874 緑灰色	シルト	
806 増オーリーブ灰色	有機物質		875 灰白色	細砂	
807 灰白色	細砂		876 灰白色	砂	
808 明緑灰色	細砂		877 黑褐色	有機物質	
809 増オーリーブ灰色	有機物質				

色調	土質	備考	色調	土質	備考
878 オリーブ灰色	細砂		947 オリーブ黒色	有機物質	
879 淡黄色	細砂		948 オリーブ灰色	シルト	
880 オリーブ灰色	細砂		949 灰オリーブ色	シルト	
881 灰白色	粗砂		950 オリーブ黒色	有機物質	
882 灰褐色	有機物質		951 細縞灰色	砂	
883 灰白色	砂		952 細縞灰色	シルト	
884 灰白色	粗砂		953 オリーブ黄色	砂	
885 灰灰色	有機物		954 細灰黄色	有機物質	
886 明暗灰色	シルト		955 オリーブ灰色	シルト	
887 細灰色	細砂	有機物を層状に挟む	956 暗灰色	有機物質	
888 オリーブ黄色	砂		957 緑灰色	シルト	
889 黄褐色	砂		958 細灰黑色	砂	
890 細灰色	細砂		959 オリーブ灰色	細砂	有機物を多く含む
891 淡黄色	砂		960 オリーブ黒色	有機物質	
892 オリーブ黒色	有機物質		961 オリーブ黄色	砂	
893 オリーブ灰色	シルト		962 オリーブ灰色	シルト	
894 灰オリーブ色	砂	3cm程度の隙を含む	963 緑灰色	細砂	有機物を含む
895 淡黄褐色	有機物質		964 オリーブ灰色	細砂	
896 オリーブ灰色	シルト		965 オリーブ黒色	有機物質	
897 明暗灰色	細砂		966 にじく黄色	砂	
898 淡黄色	砂		967 増オリーブ灰色	シルト	
899 オリーブ灰色	細砂		968 灰白色	砂	
900 灰オリーブ色	有機物質		969 灰オリーブ色	有機物質	
901 オリーブ黄色	細砂		970 オリーブ黄色	砂	
902 細灰色	有機物質		971 青灰色	シルト	
903 緑灰色	細砂		972 灰白色	砂	
904 黄灰色	有機物質		973 暗灰色	有機物質	
905 灰黃褐色	有機物質		974 灰白色	砂	
906 細灰色	細砂		975 淡黄色	細砂	
907 暗オリーブ灰色	シルト	有機物を局状に挟む	976 オリーブ黄色	シルト	
908 細灰色	有機物		977 淡黄色	砂	
909 にじく黄色	砂		978 オリーブ黄色	シルト	
910 細灰色	シルト		979 淡黄色	砂	
911 オリーブ灰色	細砂		980 灰色	シルト	
912 オリーブ灰色	細砂		981 暗灰色	シルト	
913 灰白色	粗砂		982 暗灰色	シルト	
914 オリーブ灰色	細砂		983 灰白色	砂	
915 オリーブ黒色	有機物質		984 灰白色	砂	
916 灰オリーブ色	有機物質		985 にじく黄色	細砂	
917 淡黄色	砂		986 緑灰色	シルト	
918 オリーブ灰色	細砂		987 暗灰色	シルト	
919 淡黄色	粗砂		988 明オリーブ灰色	シルト	
920 灰白色	砂		989 暗灰色	シルト	
921 オリーブ灰色	砂		990 淡黄褐色	砂	
922 細オリーブ灰色	有機物質		991 暗灰色	細砂	青灰色シルトブロックを含む
923 オリーブ黒色	有機物質		992 にじく黄褐色	砂	
924 オリーブ黄色	砂		993 灰色	粘土	
925 オリーブ黄色	砂		994 灰オリーブ色	細砂	
926 オリーブ灰色	砂		995 灰色	細砂	
927 オリーブ黒色	有機物質		996 細黄褐色	有機物質	
928 オリーブ灰色	シルト	有機物を多く含む	997 灰黄色	シルト	有機物を含む
929 オリーブ黒色	有機物質		998 淡黄色砂-明暗 灰色シルト	シルト	
930 にじく黄色	砂		999 灰白色	粗砂	
931 緑灰色	シルト		1000 オリーブ灰色 砂+灰オリーブ 色シルト	粗砂	
932 暗赤灰色	有機物質		1001 暗灰色	シルト	有機物を含む
933 オリーブ灰色	シルト		1002 灰白色	細砂	
934 灰褐色	有機物質		1003 黄褐色	砂	
935 オリーブ灰色	細砂		1004 淡黄色	細砂	
936 オリーブ灰色	細砂		1005 明褐灰色	シルト	
937 オリーブ灰色	細砂		1006 暗灰色	シルト	
938 灰褐色	有機物質		1007 淡黄色	砂	
939 明暗灰色	シルト		1008 緑灰色	細砂	有機物を含む
940 緑灰色	砂		1009 暗灰色	シルト	有機物を多く含む
941 オリーブ黄色	粗砂		1010 灰オリーブ色	有機物質	黄灰色シルトの小ブロックを 含む
942 灰褐色	有機物質		1011 オリーブ灰色	細砂	
943 緑灰色	細砂		1012 灰オリーブ色	細砂	有機物を多く含む
944 オリーブ灰色	砂				
945 明暗灰色	粘土				
946 オリーブ灰色	シルト				

色調	土質	備考
1013 増オリーブ色	粘土	
1014 黒褐色	有機物層	
1015 赤灰色	シルト	有機物を多く含む
1016 土糞		
1017 褐灰色	シルト	
1018 黄灰色	シルト	
1019 赤灰色	シルト	
1020 黃灰色	シルト	有機物を多く含む
1021 灰白色	粗砂	
1022 浅黄色	砂	緑灰色シルトが混ざる
1023 黄色	粗砂	
1024 オリーブ灰色	粗砂	
1025 灰色	粘土	
1026 土糞		
1027 青灰色	シルト	
1028 オリーブ灰色	砂	
1029 褐灰色	シルト	
1030 褐灰色	シルト	有機物を多く含む
1031 灰白色	シルト	
1032 褐灰色	シルト	
1033 褐灰色	シルト	土壤化した層
(付註記)		
1034 灰オリーブ色	シルト	有機物が多い
1035 灰白色	中砂	
1036 灰白色	粗砂	
1037 灰色	粗砂	有機物ウミナ状に入る
1038 灰オリーブ色	シルト	灰白色中砂を挟む
1039 オリーブ黒色	粘土	
1040 褐灰色	シルト	有機物を多く含む
1041 明顯灰色	中砂	灰白色中砂を挟む
1042 反白色	粗砂	
1043 灰白色	粗砂	
1044 灰色	シルト	緑灰色シルトを層状に挟む 下の方は砂に近い
1045 黄褐色	砂	
1046 青灰色	粗砂	
1047 褐灰色	シルト	
1048 灰色	砂	
1049 褐灰色	シルト	
1050 灰白色	粗砂	
1051 淡黄色	中砂	
1052 褐灰色	シルト	
1053 褐灰色	粗砂	有機物を多く含む
1054 淡黄色	粗砂	有機物を多く含む
1055 褐灰色	粗砂	
1056 黒褐色有機物～ 褐灰色シルトか 何かのかたまり		
1057 褐灰色	シルト	
1058 黒褐	シルト	
1059 オリーブ黒色土 層		
1060 灰白色	粗砂	
1061 灰白色	中砂	

II 木製枠工

1 調査の経過

狹山池の調査は多岐にわたったが、もっとも成果があったのは北堤付近において行った一連の発掘調査であった。その端緒を劃いたのは平成5年度に行われた木製枠工の発掘調査である。ただし木製枠工の発掘調査は当初よりその存在を予想して行ったわけではない。中樋造構の所在を求めて池の堆積物を掘り進むうち偶然に検出したのがこの遺構であった。予想外の新たな遺構が検出されたため、中樋造構の探索は一旦中止し、木製枠工の発掘調査を開始したが、遺構の規模は当初の予想を越えて大きく広がり、全長約30mにも及んだ。1993年8月28日には現地見学会を実施した。調査期間は1993年4月から1994年3月までであった。調査終了後、木製枠工のうち2区画だけはウレタン樹脂で梱包して土と一緒に取り上げ、残りの部分は材木を解体した状態で取り上げ、保存処理を行った。

なおこの遺構の名称は、調査時より木組造構、木製護岸など一定しなかったがその機能を考えて、木製枠工とした。

2 遺構

出土した木製枠工は取水塔の西側に所在し、総延長28.6mであった(付図2参照)。現在の狹山池底から3.1m堆積物を除去したところで遺構の上面が検出された。遺構は長さ3mから5.3mの丸太材を2列に上に打ち込み、前後左右を横木で連結させ枠状のものを作り、その中に土を入れたのち、前方の丸太の間の上の表面に水平方向に竹を敷き並べ、最後に縦に杭を打ち込んで作られている。丸太は10組、20本検出されている。いずれも松材の丸太で樹皮はついていない。先端は鉛筆状に尖っているが、土の断面を観察するかぎりでは、土の表面から打ち込まれたのではなく、まず土を掘ってそこに丸太を埋め、一応安定して立つ状態になってから打ち込むといった方法で固定されたと思われる。前方の丸太は鉛直方向から40度、また後方の丸太は45度の傾斜で立てられている。前方の丸太と後方の丸太は上下2本の横木によって連結されている。横木はいずれも角材で上は断面が長方形、下は正方形をしている。上の横木は丸太の上端に凹状に切り込みを入れ、そこに横木をはめこみ連結している。後方の丸太の頭は前方よりもやや上に出ているものが多く、ほぞあなをあけて、横木を通し、ビンでとめる方法で接合している。さらに下の横木は丸太にはぞ穴を穿ち、そこに横木を通し、横木にあけたほぞあなにビン状の小さな木を通して固定する方法で丸太と接着している。また丸太のほぞ穴に遊びがある所では先端を尖らせたくさびを打ち込んでがたつきを止めている。

また前方の丸太間を連結する横木については、次のような方法で丸太と接合していた。まず丸太に長方形のほぞ穴を穿ち、横木の先端は三角形に尖らせ、お互いが噛み合うように隣接の横木とほぞ穴内で接続している。この部分ではビンなどは利用されていなかった。また横木にはノコギリの痕跡が明瞭に残っていた。後方の丸太間を連結する横木はなかった。

土は基本的には以上の枠組みが完成したのちに枠内に盛られたと思われるが、調査の最後に断面を観察したところ、断面土層は大きく2層に分けられた。下層は木製枠工の構築より前から存在していた堤体の盛土である。この層は植生によって形成された土壤層の上に盛られたもので1層が10cm程度の厚さである。全体的に砂を主体とした盛土である。この土を掘りこんで丸太を入れ、その上に盛土を施したのがこの遺構構築時の盛土層である。この盛土層は大きく3層に分けられる。最も下は砂質土を中心としたやわらかな層で、その上に暗青灰色の砂質土を盛っている。この層の上面はほぼ水

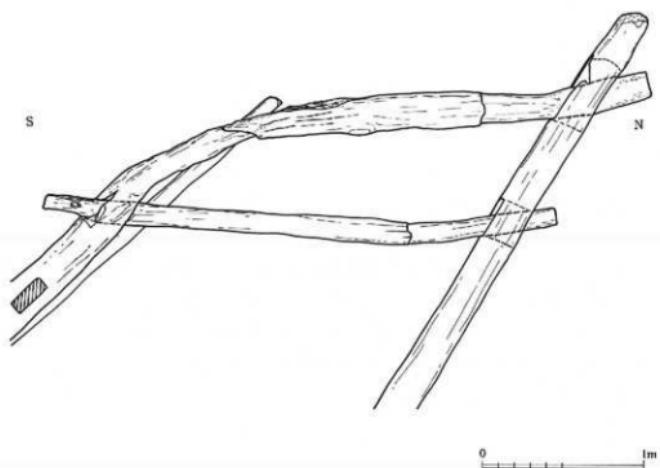


図29 木製枠工断面図 (S=1/30)



写真9 木製枠工全景 (西から)



写真10 杭の先端の様子

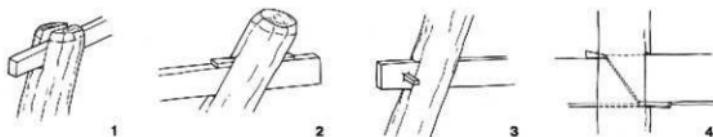
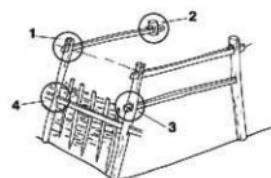
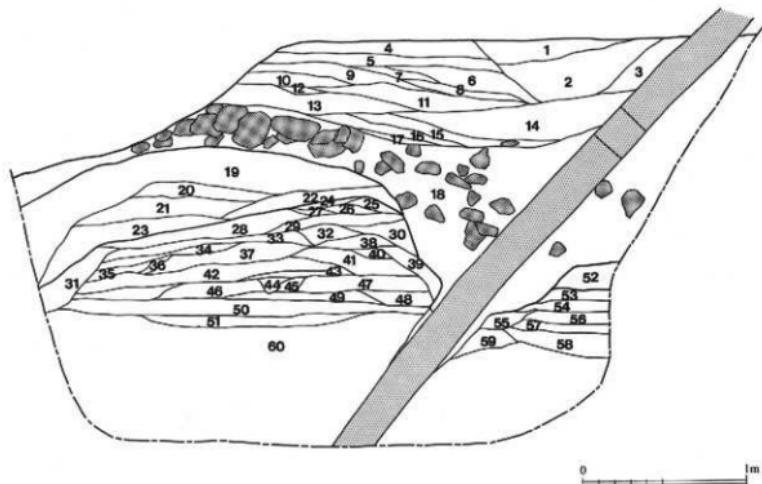


図30 木製枠工における材木の接着方法

平に仕上げられ、大きな礫が並べられている。盛土工事の一段階として表面を水平に仕上げ、そこに礫を敷き並べる段階があったと考えられる。さらにその上に粘土、シルトなどによって盛土がなされている。盛土の池側斜面には竹類が横方向に並べられていた。竹は篠竹で、割らずにそのまま敷かれていた。この竹を敷いたのち斜め方向に杭が打たれている。杭は一辺15cmの角材で、先端はやはり鉛筆状に尖っていた。丸太とは異なり、この杭は上から打ち込まれたよう所々で土を引っ張っている様子が観察できた。杭は丸太の間に5本から8本打たれていて、その間隔は平均40cm程度であった。また木製桿工に使用されている材木はすべて松であった。

今回検出された丸太は先にも述べたように10組20本であり、西側には角材による杭が打たれていた。杭の高さは西にいくほど低くなり、また堤防側にしづむような形態を示す。木製桿工の工事はこの張

71.5m



- | | | |
|-----------------------|------------|-----------|
| ① 緑青灰色シルト | ⑪ 灰青色砂質土 | ⑯ 灰青色粘土 |
| ② 緑青灰色砂質土 | ⑫ 灰灰褐色砂質土 | ⑰ 灰青色砂 |
| ③ 灰灰色砂質土 | ⑬ 灰青色砂質土 | ⑱ 灰色シルト |
| ④ 灰色シルト | ⑭ 細粒紫色有機物層 | ⑲ 青灰色粘土 |
| ⑤ 灰青色砂 | ⑮ 青灰色砂 | ⑳ 黄灰色粘土 |
| ⑥ 灰色粘土 | ⑯ 灰色砂 | ㉑ 灰色砂 |
| ⑦ 灰青色シルト | ㉒ 茶灰褐色シルト | ㉒ 青灰色砂 |
| ⑧ 灰青色シルト | ㉓ 灰灰褐色有機物層 | ㉓ 灰青色砂 |
| ⑨ 灰青色粘土 | ㉔ 灰色シルト | ㉔ 灰青色粘土 |
| ⑩ 灰青色砂 | ㉕ 青灰色シルト | ㉕ 紫紫色有機物層 |
| ㉑ 灰色シルト | ㉖ 灰色シルト | ㉖ 灰色砂質土 |
| ㉒ 灰青色粘土 | ㉗ 青灰色シルト | ㉗ 灰青色砂 |
| ㉓ 灰青色砂 | ㉘ 茶灰色シルト | ㉘ 灰色砂 |
| ㉔ 灰青色シルト | ㉙ 灰灰褐色有機物層 | ㉙ 灰色シルト |
| ㉕ 灰青色砂質土 | ㉚ 灰色シルト | ㉚ 明青灰色シルト |
| ㉖ 灰青色シルト | ㉛ 灰色粘土 | ㉛ 青灰色シルト |
| ㉗ 灰茶色砂質土 | ㉜ 灰色砂質土 | ㉜ 灰色粘土 |
| ㉘ 灰色砂(20~30cmの裡を多く含む) | ㉙ 灰色砂 | ㉙ 灰色砂 |
| ㉙ 灰灰褐色砂質土 | ㉚ 灰色粘土 | ㉚ 灰色砂 |
| ㉚ 灰青色シルト | ㉛ 灰色砂 | ㉛ 青灰色砂 |

図31 木製桿工土層断面図 (S=1/30)

出しの部分で施工されたことがわかる。また東側は昭和初期の工事のために断ち切られていた。調査範囲のさらに東側で中樋造構が検出されたが、この切断のために木製枠工との立体的な関係は把握できなかった。東西方向の関係は図33のようになっている。この図から切断以前の木製枠工は長さ34m程度の規模であったことが推定できる。

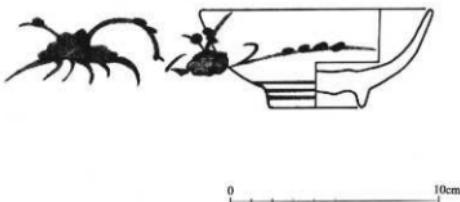


図32 木製枠工出土遺物実測図

3 遺 物

木製枠工の盛土の中からは遺物は出土していない。ただその前面の堆積物の中から図32に示した染付瓶1点が出土している。瓶の口径10.9cm。器高4.1cmの肥前系の磁器で、近世中期の所産と考えられる。

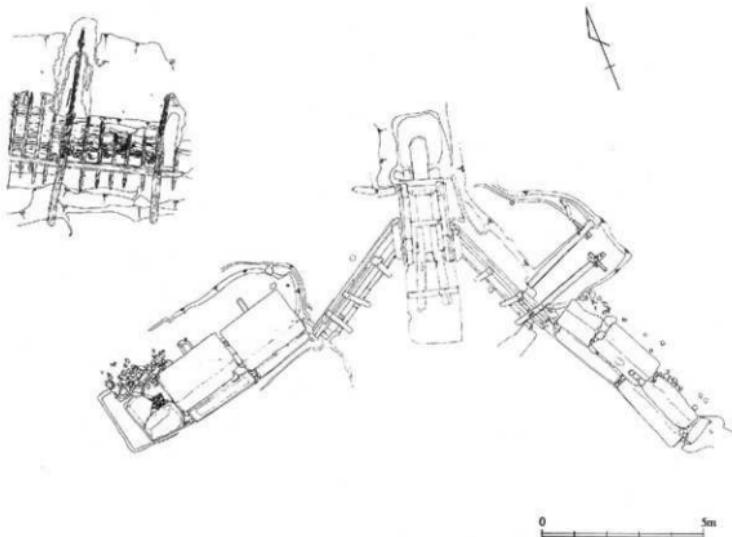


図33 木製枠工と中樋造構の位置関係 (S-1/150)

4 小 結

木製桿工はこの調査の翌年に実施された西桿造構において、桿本体の両翼で同様のものが検出されている。本調査区において検出された木製桿工も桿の両側の堤体を保護するために施工されたものと考えるのが妥当であろう。中桿・西桿は慶長13年(1608)の工事において作られたことが明白であるため、それにともなう木製桿工の年代も慶長の改修時と考えられる。古い桿を撤去し新たな桿を伏せ替えるためには、桿の部分の堤の土を掘削する必要がある。その部分の堤体はどうしても弱くなるため、オープンカットされた部分のみに木製桿工を施したのであろう。また慶長13年の改修の前提として、その少し前に大地震があり堤体が内側にすべっていることが、吉川周作氏、三田村宗樹氏などによつて行われた池の堆積物の調査から明らかになっている。^⑨ また西田一彦氏は堤体の中での木製桿工の位置関係から、この護岸片は堤体の円弧すべりを阻止する目的で設置されたことを推定している。^⑩ 西桿の木製桿工は右翼 4.9m、左翼 12.3m という小規模なものであり、それに対して本調査区のものは残存している部分でも長さが 28.6m もあり、はるかに大規模なものである。地震との関係も十分考慮すべき条件と思われる。

注)

- ①西田一彦「ボーリング調査試料の分析」(『狭山池調査事務所昭和62年度調査報告書』狭山池調査事務所 1988)
- ②粉川昭平、三田村宗樹「狭山池北堤ボーリングの観察と植物遺体報告」(『狭山池調査事務所昭和63年度調査報告書』狭山池調査事務所 1989)
- 西田一彦「狭山池北堤の土層構造と土性について」(『狭山池調査事務所昭和63年度調査報告書』狭山池調査事務所 1989)
- 西田一彦「狭山池北堤の土層構造と物理、化学的性質」(『狭山池調査事務所平成元年度調査報告書』狭山池調査事務所 1990)
- 外山秀一「狭山池の形成と植生環境 その1」(『狭山池調査事務所平成2年度調査報告書』狭山池調査事務所 1991)
- ③木越邦彦「ボーリングコアの¹⁴C年代測定」(『狭山池調査事務所平成元年度調査報告書』狭山池調査事務所 1990)
- ④堤体の保存処理法については次の文献に詳しい。
企盛弥、古澤裕、木村昌弘、西岡恵次「狭山池ダム・堤体の保存事業について」(『土木史研究』15 1995)
- ⑤『狭山池地区事業概要書』大阪府 1964
- ⑥須恵器の編年は田辺昭一氏の編年によつた。
田辺昭二「陶邑古窯址群 I」平安学園考古学クラブ 1966
- ⑦吉川周作、三田村宗樹、内山高、長橋良隆、榎木玲美、Edy Sunardi、里口保文、橋本定樹、山本岩雄、田中里志、山崎博史、佐藤隆春、市川秀之「大阪狭山市狭山池堆積物における液状化跡」(『地質学雑誌』第103巻第10号)
- ⑧工楽善通「日本古代の一土木技術に関する考察」『奈良国立文化財研究所創設40周年記念論文集』1995
- ⑨吉川周作・三田村宗樹・内山高・長橋良隆・榎木玲美・Edy Sunardi・里口保文・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「大阪狭山市狭山池堆積物における液状化跡」(『地質学雑誌』第103巻第10号 1997)
- ⑩西田一彦「狭山池における古代技術の発掘と保存」社団法人地盤工学会関西支部 1997

第2節 構の調査

I 中構遺構

1 調査の経過

狹山池には近世に中構・西構といふ二つの大きな尺八構が存在しており、それらは昭和初期の改修まで、小規模な修理を重ねながらも機能していた。尺八構とは底構に斜構(建構)が取り付けられ、斜構にいくつかの取水口がある構で、大きな溜池において用いられる。狹山池においては4段の尺八構が存在していた。昭和初期の改修において狹山池の二つの尺八構はその使命を終え撤去されたが、中構・西構ともその再下段のみが残されたことは、當時文化財調査を担当した末永雅雄氏の様々な著書にも記されている。ただしその正確な位置はこれまで明らかではなかった。その位置や規模を確定するため、1993年4月より『狹山池改修誌』に掲載されている説明をもとに試掘を行ったが、なかなか中構遺構は発見できず、この試行錯誤のなかで新規に北堤の木製枠工が偶然検出された。先行して実施された木製枠工の調査のなかで、木製枠工が昭和初期に取水塔を建設する際に、断ち切られていることが明らかになり、中構遺構は取水塔付近に残存している可能性が高くなった。同年11月に木製枠工の調査が完了したため、再び中構遺構の調査を再開した。常識的に構は現在の北堤付近に所在していると考えられるため、その付近の池の堆積土を機械掘削しながら遺構の所在を確認する方法を探ったが、調査再開直後に早くも大きな石材が検出された。狹山池では昭和初期の改修時に中構の下流側(北堤の北側)において古墳の石棺を樋管に転用したものが7点出土しており、今回出土したものも同種のものと考えられた。堆積土の掘削を継続するなかで、木製の構本体なども姿を現し、遺構の全体像が明らかなものとなってきた。同年12月18日に行った現地説明会には500人を越える参加者があり、また新聞などの報道でも大きく取り上げられた。調査期間は1993年11月10日から1994年3月31日までであった。

2 遺構

① 遺構の概要

中構遺構検出の最大の障害となったのは狹山池に長年にわたって堆積した土砂であった。中構遺構の存在した箇所において池の堆積土の表面の標高はほぼ75.5m、中構遺構の最も高い部分は70.8mであるから、5m近い厚さの堆積土に覆われていたことになる。この堆積土を重機によって除去したところ、取水塔の正面部分において中構遺構が検出された。

中構遺構の構本体は現在の取水塔の正面に位置している。先にも述べたように尺八構の上部は昭和初期の改修の時に撤去され再下段のみが残存していた。構本体の左右に木の板を縦に3枚ずつ並べたものがあったが、これは構に集まる水が堤体を破損しないように作られた一種の護岸であるとみられる。近世に狹山池の池守を勤めた田中家の古文書にはこのような板の存在



写真11 中構遺構全景

がしばしば記載され「扇板」と呼ばれている。これに習い今回出土したこの遺構も扇板と呼ぶこととしたい。またさらにその両側には古墳時代の家形石棺を上下二段に積んだものが存在した。これも機能的には扇板と同じものであろう。これらの詳細について次に述べることとする。なお、橋の説明については、橋の各部位の名称を固定する必要があるが、名称は図35のように「河川狭山橋之帳」(田中家文書)などの近世文書に登場するものを採用することにした。近世文書記載の橋名称も、時代や文書の性格によって多少の差異があるが、もっとも一般的に使われている名称を採用している。この

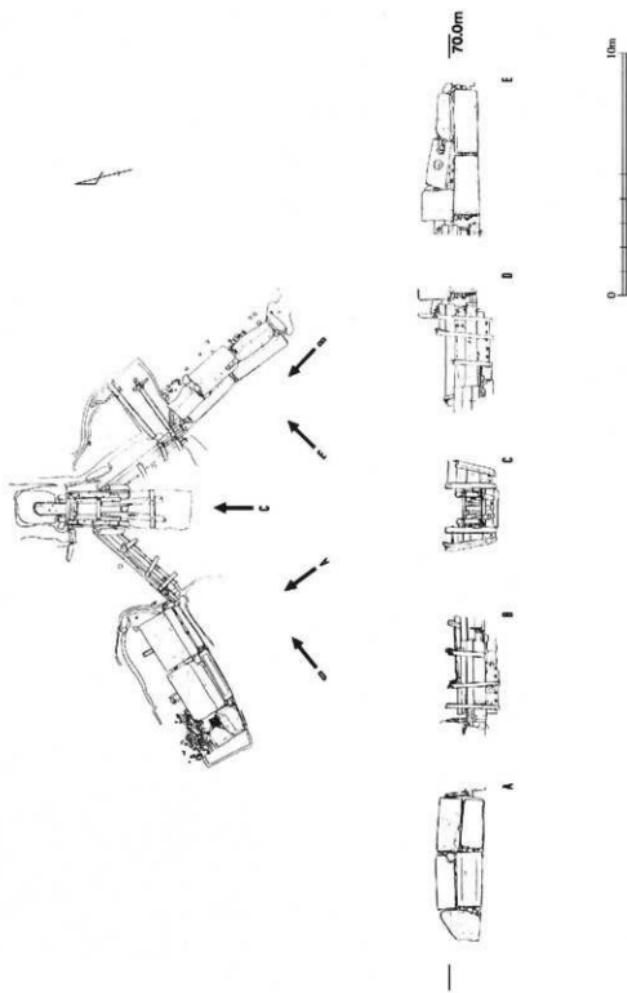


図34 中橋遺構平面図 (S=1/200)

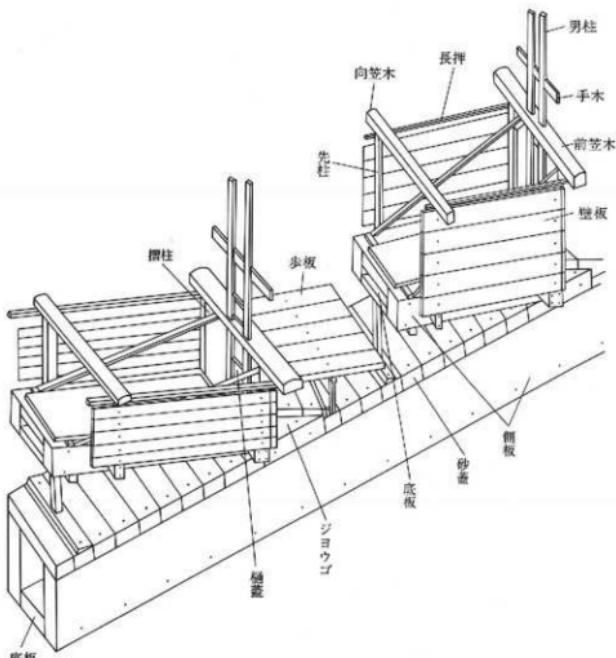


図35 尺八櫛の名称

櫛の部位名称については西櫛造構、東櫛上層造構などにも同じものを使っている。

② 櫛本体

今回出土したのは尺八櫛の4段目の部分および櫛管の一部分であるが、昭和初期の改修によって相当破壊されており、全体像については造構だけでは知ることができない。

櫛本体は残存長が474cmで、残存高は170cmである。櫛1段の高さについては近世文書などから3m程度はあったと思われるが、約半分程度が破損を受けていることになる。櫛は4本の柱と板によって構成された箱状の部分と、底から前方に伸びる2枚の板からなる。前方の板は2枚とも長さ284cm、幅39cm、厚さ12cmである。櫛に水をスムーズに送るためにロートのような役割をしていたと考えられ、前方部がやや開いている。先端において立て板が外側にまげられてロート状に開いている。またこの変化点より下流側では箱部分との接着のために立て板の外側が削られていた。2枚の板の間隔はもともと前方で56cm、後方で23cmである。また立面方向でも、この2枚の板は上方がやや外側に開いている。角度はともに垂直方向から10度傾いている。この2枚の立て板を固定するため先端から39cmのところに角材がのせられている。立て板とこの角材は互いの一部を凹状に削って咬合するように固定され、さらに上方から鉄釘が打たれ

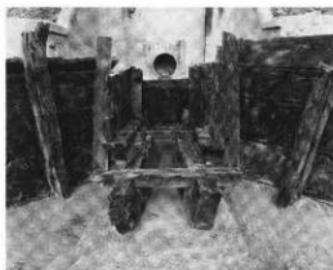


写真12 櫛本体部分



写真13 ハの字型の板と板石



写真14 管(うしろから)

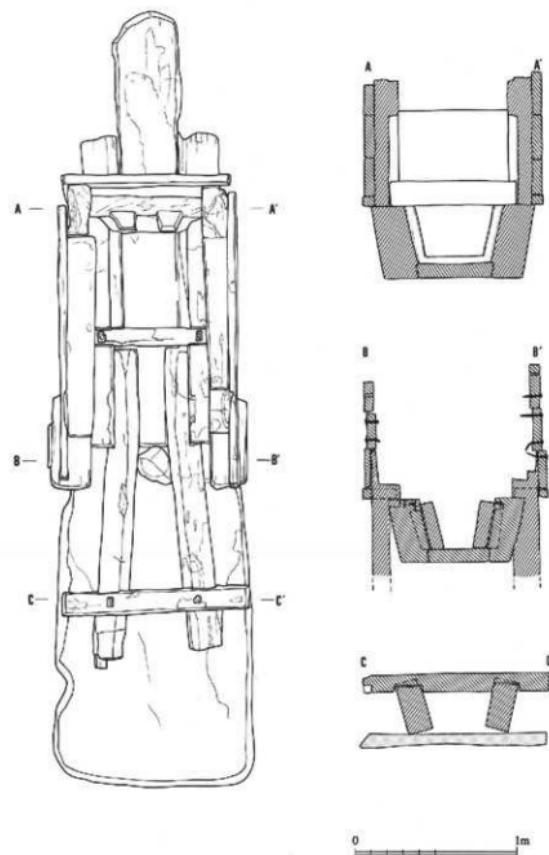


図36 中種遺構桿本体平面図 (S-1/30)

ている。また立て板と箱型の部分はそれぞれ4箇所の鉄釘で固定されていた。この立て板の間には底板はない。またこの2枚の板の下には全長259cm、幅160cm、厚さ35cmの大きな板石が敷かれていた。この板石は中樋本体の沈下や移動を防ぐ目的で設置された一種の基礎と考えられる。

箱部分が樋本体の主要部分であるが、これはさらに柱や壁板からなる上部構造と、樋管に連続するU字溝状の樋管部分に分けて考えることができる。まず樋管部分から順に説明していく。樋管は上方がやや開きぎみに立つ2枚の側板と、底板1枚によって組み立てられている。側板は東側が長さ252cm、縦44cm、厚さ24cmで、西側が長さ268cm、縦44cm、厚さ25cmであった。底板は水平に置かれており、側板はこの底板に対する鉛直方向からそれぞれ13度ずつ外側に開いた状態で立つ。底板の厚さは場所によって少しずつ異なるが、もっとも厚い部分では25cmに達する。この底板の断

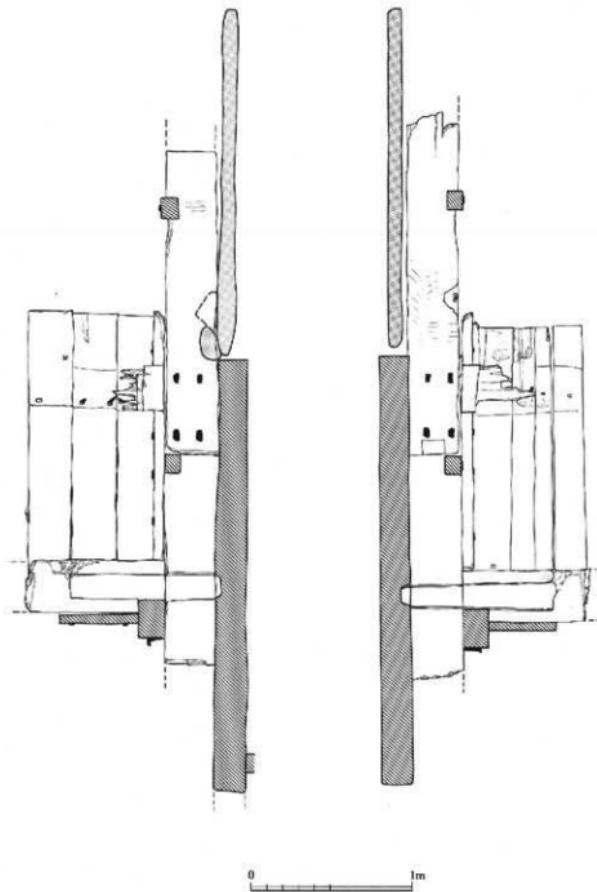


図37 中樋道構樋本体内面断面見通し図 (S-1/30)

面は逆台形を呈し、上面は幅 53cm、下面は幅 48cm であった。上面の左右の端部を斜めに面取りし側板との接続面としている。側板は下から 27cm にわたって、深さ 3cm のえぐりを入れ、このえぐり面と底板を接着させている。底板と側板の接着部は一見すると一本の材木を割り貫いて造ったかと思うほど密着しており、透き間にには檜皮が詰められていた。いうまでもなくこれは水漏れを防ぐための工夫であろう。また蓋の入る箇所においては底板には深さ 6cm、側板には 8cm の溝があり、この部分からの水もれを防ぐ機能を果していたと考えられる。2 枚の側板の間には角材が横たえられ、角材、側板双方に彫りこみをいれて咬合させ上方から釘で固定している。桶管の底板は堤防側に向って少し入り込んでおり、この部分については現在の取水塔の基礎であるコンクリートを割って調査を実施した。この部分においては底板の下に枕木として角材が置かれていた。

桶蓋は下向きの凸型をしており、上辺は 75cm、下辺は 48cm、高さ 58cm であった。深さ 3cm の 2 本の溝が表面に彫られており、溝内には釘穴が残されている。おそらくこの部分に男柱が入り、それを上から引き上げることによって桶蓋が開閉していたものと思われる。桶本体についてはヒノキ材で作られていたが、この桶蓋のみはクスノキ材で作られていた。

桶管の周囲 4 箇所には柱が立てられており、この柱とその間に張られた板によって上部構造が構成されている。前方の二本の柱はともに桶管側板上端の少し上でノコギリ状の工具によって切断されており、本来の高さは不明である。ただ壁板には柱の痕跡が残っており、もとの柱は残存する 3 枚の壁板の高さ以上であったことは確認できる。前方の柱 2 本の横幅は 37cm、奥行は 23cm である。但し西側の柱は桶管部分との接続部より下が、9cm の深さで削られて柱自体が細くなっているが、東側の柱では、側板と重なる部分のみを三角形に削っており、左右の断面は対照ではない。後方の 2 本の柱には桶蓋用の溝が彫られている。左右とも柱の横幅は 45cm、奥行は 20cm である。ここに幅 20cm、深さ 8cm の溝が彫られ桶蓋が入るようになっている。これら 4 本の柱の間に外側から側板が張られている。この側板も近世文書にならって壁板と呼びたい。壁板の厚さは 8cm、横幅は 245cm、継は最も長いもので 35cm、短いものが 25cm である。

壁板は外側から釘で固定されていた。上部構造の後側(堤防側)の面にも高さ 43cm、幅 83cm の一枚板が張られていた。この板も外側から計 4 本の釘が打たれ固定されていた。釘の箇所には縦方向に墨壺の線が残っていた。

以上が桶本体の概要であるが、全体的には非常に精巧に作られているという印象を受ける。また



写真 15 桶蓋

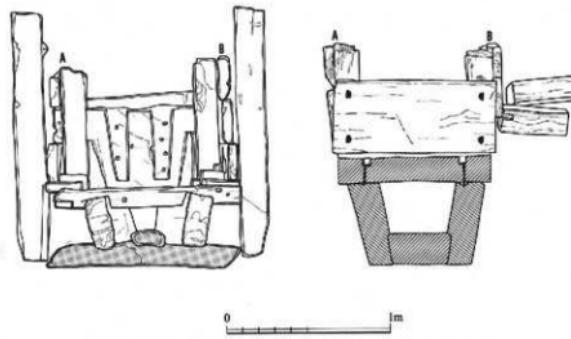


図 38 中桶這構桶本体正面立面図 ⑩・同背面立面図 ⑪ (S=1/30)

樋の本体に利用されていた材木には多くの釘穴が残されていた。これらの穴のなかには樋の構造上まったく必要がないとみられるものが多くあり、この材木が再利用されたものである可能性を示している。

③扇板

樋本体の左右には水圧から堤を守るために築かれたと考えられる木製の擁壁が立っていた(写真16)。これを古文書に登場する言葉を借りて扇板と呼ぶことしたい。2組の扇板は76度の角度を持ち、前方に向かって開いていた。東側の扇板は5枚の板を縦に並べ、4本の柱を土に突き刺して立て、これらを支えている。扇板全体は地面への鉛直方向から18度後方(北側)に傾斜しており、背後には標高69.5mの高さまで土が盛られていた。板部分の最大幅431cm、高さ221cm。中央の2本の柱は上部が破損しており、本来の高さは不明であるが、もっとも外側の柱の高さは扇板の一一番下から303cmであった。この柱の上部にはねぞ穴が穿たれ、後方の角材とくさびによって接着されていた。この角材にも反対側にはぞ穴があり、そこに通された材は地面に打たれた杭2本によって固定されていた。この角材は扇板が池側に倒れないよう引っ張るアンカーの役割りを果たしている。西側の扇板ではこのようなアンカーはみられなかったが、この扇板の裏側は昭和の改修時の擾乱がひどい部分であったため、恐らくもともとはアンカーが存在したと考えられる。西側の扇板も合計5枚で、4本の柱によって支えられていた。板部分の最大幅448cm、高さ177cmであった。やはり堤防側にむけて傾斜しているが、傾斜角度は地面に対する垂直線から24度と、東側より少し大きい。扇板の背後には東側同様土が盛られており、土の表面のレベルは69.6m程度であったと考えられる。

この扇板に利用された材木にも一見不必要とみられる穴が多く残されており、特に左右とも一番下の板には一列に大きな穴が並んでいた。また東側の上から2番目の板にも縦報告に二つ釘穴がみられ、また西側の上から3番目の板は端部が削られて小さな釘穴がみられ、戸建のための溝も彫られている。発掘調査当時から、このような痕跡からこれらの板は舟材を再利用したものである可能性を想定していたが、その後西傾遺構から多くの船材が出土したため、これらの板材も船材であることはほぼ確定的となった。扇板の材木としては、アンカーを留める杭にマツ材が使われていたほかは、ヒノキ材が使用されていた。

④再利用された石棺など

扇板の両側には古墳の家形石棺などを2段に積み上げたものがあった(図46参照)。機能としては扇板と同様、中樋に集まる水の勢いから北堤を守るためにものと考えられる。東側のものは、家形石棺の底を手前に向けて立てたもの2基(石棺8・9)を下段に並べ、上段には西側から割れて半分のみ残存した石棺(石棺6)と、ほぼ完形で穴が二つあけられた石棺(石棺7)、もっとも東には和泉砂岩の重源狭山池改修碑が並んでいた。石棺6、石棺7とも底を手前に向けて立てられていた。重源狭山池改修



写真16 扇板アンカー

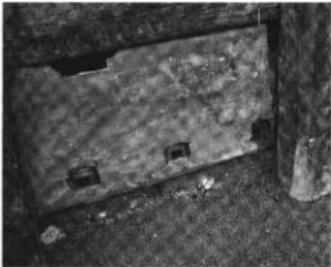


写真17 船釘の痕跡

碑は刻字のある面が下方を向いた状態で石棺の上に重ねられていた。石棺は地面に対しての垂直線から、20~22度北側に傾いた状態で置かれており、背後には標高 70.0m の高さまで土が盛られていた。この高さは背後にあった裏込め石の高さから判断したものである。下段の石棺の間にはこぶし大の石が詰められていた。また上段と下段の石棺の間には人頭大の石が詰められ、さらに最も東の重源狹山池改修碑の東側から背後にかけても石詰めが見られた。この部分では一番大きな石は長さ 92cm のも

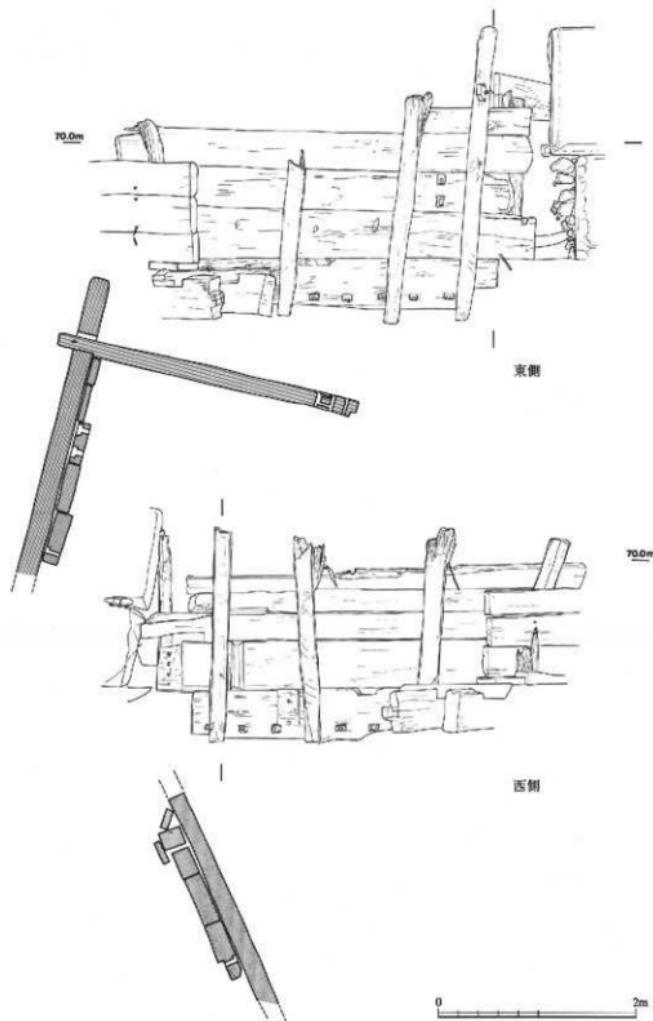


図 39 扇板立断面図 (S-1/50)

のがあった。これらの石は明らかに川原石と思われる丸みを帯びたもののはか、石棺を割って利用したと思われるものもみられた。色や石の質からみて上段のもっとも西側の石棺(石棺6)の一部と思われるものが多い。これらの石は石棺の角度を固定するための役割を果している。

また石棺6および石棺7の背後には図41のような裏込め石が施されていた。裏込め石の範囲は長さ555cm、最大幅108cm。幅は石棺6の背後が大きく、石棺7の背後では幅30cm程度である。石は直径10cm程度のものが多いが、石棺6の背後では直径40cmほどの大きな石も使われていた。この裏

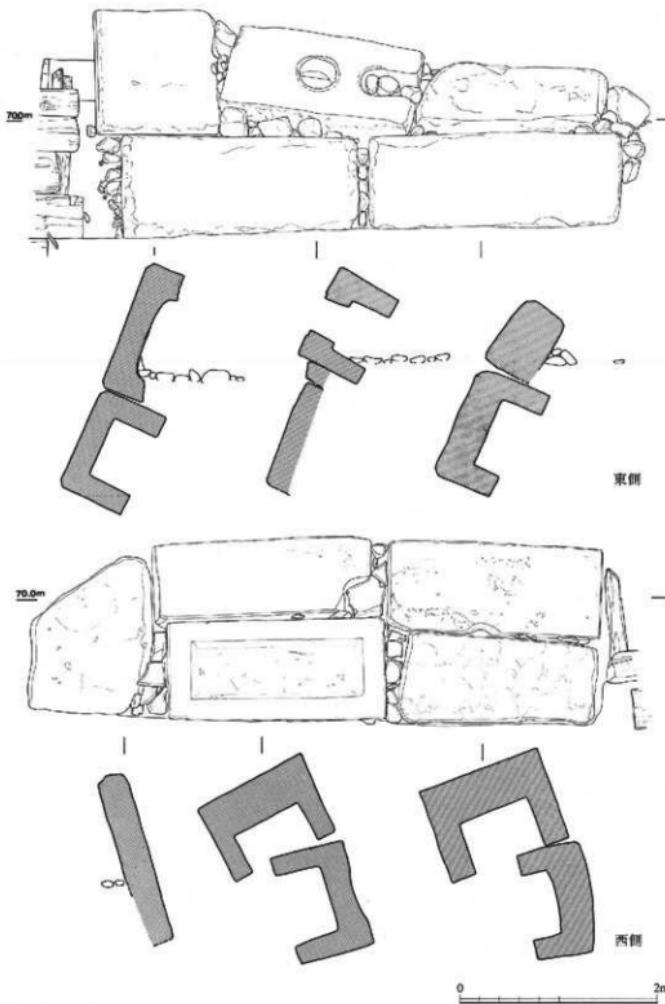


図40 石組立断面図 (S=1/50)

込め石は石棺が背後に倒れるのを防ぐ目的で施工されたと考えられるが、取り上げ時にトレンチを入れて、この部分の断面を観察したところ、表面に見えている石以外は並べられておらず、平面的な石敷であることが判明した。このような構造で石棺が倒れるのを防ぎ得たのかどうか、やや疑問が残る。

西側ではやはり下段に二つの石棺が底を正面に向けて並べられていた。西側ではさらに一番外側(西側)に破損され三角形になった石棺1が底の部分を手前にに向けて長軸方向を縦にした状態で並んで

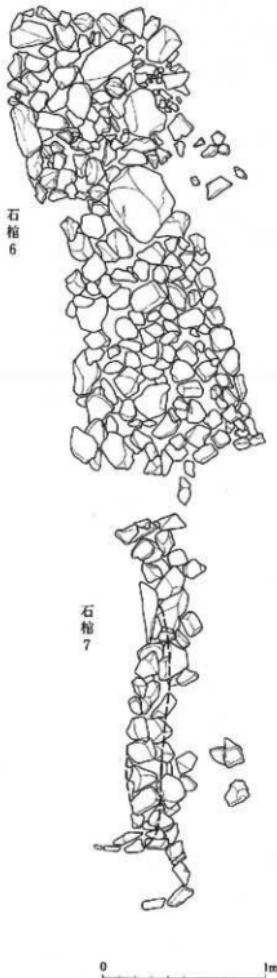


図41 石棺6・7背後の裏込め石
平面図 (S=1/30)



図42 石棺1背後の裏込め石平立面図 (S=1/30)



写真18 石棺の間に詰められた石



写真19 東側石棺の裏込め石

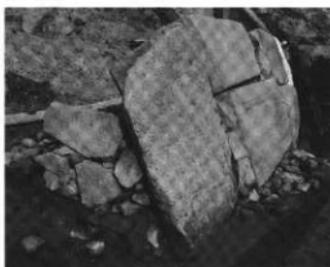


写真20 西側石棺の裏込め石



写真21 重源狹山池改修碎出土状況

いた。上段には2基の石棺が並んでいたが、ともに側面を手前にし底を上に向かた状態で並べられていた。石棺の間には20~40cmの石が詰められていたが、その多くは石棺6の一部と思われる。また下段石棺の下にも多くの石が詰められていたがこちらは大きさ5~10cm程度で、川原石と思われる丸みを帯びた石であった。石棺1の背後には図42に示したように多くの石が詰められ、石棺1を支えていた。この石の中にも長さ90cmという大きな石が含まれており、この石などはやはり石棺材であると思われる。

これらの石棺は扁板同様堤の保護のために並べられたに違いないが、石棺7には底面に直径30cmの2つの穴があけられていた。ともに円周に段を持った精巧な穴であり、これがかっての樋穴であつたことは疑うべくもない。また石棺7は片面、他の石棺については両面の小口が破壊されており、U字溝のような状態になっていた。昭和の改修時に出土した石棺は、鎌倉時代の僧重源が狹山池改修の際に埋設した石棺であることは、重源の事績を記した「南無阿弥陀仏作善集」の記載などから推測されていたが、今回石棺と同時に出土した重源狹山池改修碑の銘文によってこの推測はほぼ確実なものとなつた。今回出土した石棺もまた建仁2年(1202)の改修の時、重源がいざれかの古墳から狹山池に搬送し、石工によって樋管として加工され、堤防を断ち割った後に埋設されたものとみてよいだろう。それが400年後の慶長の改修の時、再び掘り出され、今度は護岸として再々利用されたものと考えられる。

3 遺物

①重源狹山池改修碑

先に述べた石棺の中に混じって、東側石組上段のもっとも東側で一つだけ和泉砂岩製の石棺ではない石柱状のものが検出された。造構の上を落すうちにこの石の下側には字が刻まれていることが明らかになり、それを読解したところ鎌倉時代の東大寺の僧重源が狹山池を改修した時の記念碑であるこ

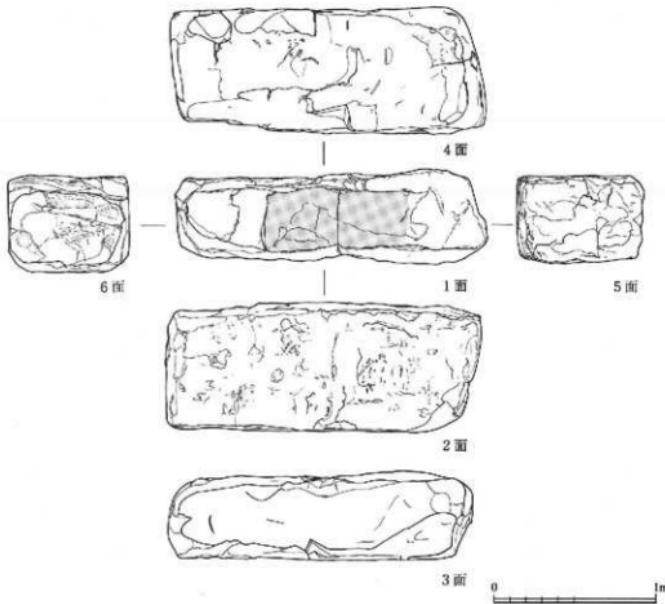


図43 重源狹山池改修碑実測図 (S-1/30) (スクリーントーンの部分に刻字)

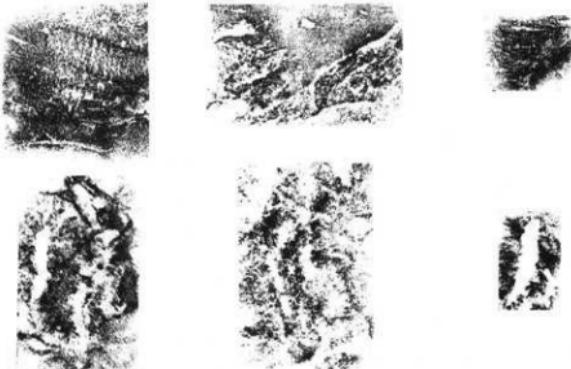
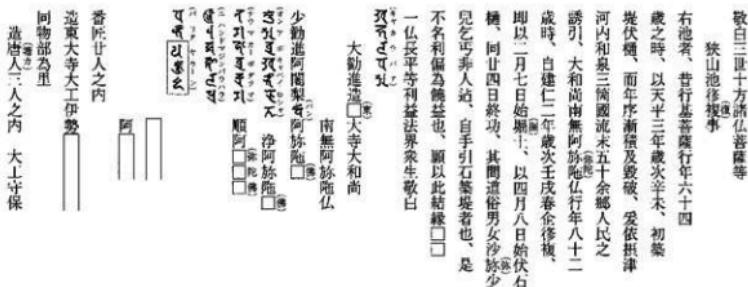


図44 重源狹山池改修碑の擦痕 (1・ノミ痕) 拓影

とが判った。重源は源平の戦いによって焼かれた東大寺の再興に勤めた勧進聖の顕日であるが、自筆と伝えられる「南無阿弥陀仏作善集」に狹山池改修の記事がわずかに記載されるだけで、改修の具体相は今回の重源狹山池改修碑ではじめて判明した部分が大きい。

重源狹山池改修碑は長さ192cm、幅58.5cm、厚さ79.5cmの直方体である。重さは約1.8tであった。刻字のある面を仮に1面とし、字の方向にそって2面、3面、4面と呼ぶことにしたい。また1面を正面としたとき、右側になる面を5面、その左側の面を6面とする。1面は平坦に仕上げられた面で、刻字の部分は美しく調整されている。この面の中心部の高さ34cm、幅91cmの範囲に字が彫られていた。刻字面は他の部分より3cmほど高く削り残されている。字の上端からこの面の端部まで約10cmの余裕があるが、字の上端に浅い線が彫られている。字の下方は端部まではとんと余裕がなく、字が角の部分にまで至っているものも見られる。また字の彫られている範囲の中には横28cm、縦14cmにわたって割離があり、この部分については字の読解ができない。割離は1面の他の部分にもみられるが、割離面の上から字を刻んでいる箇所もみられ、割離は時期を経て何回か生じたことが明らかである。また刻字のはば中央に縦方向の割れ目が観察できる。この割れ目も字を横断しており、刻字されたのち生じたものである。2面も全体的にはほぼ平坦に仕上げられているが、1面と比べると自然の起伏が残されている。また幅9cm程度の大きなノミ痕が数箇所に残されているが、いずれもやや突出した部分であり、この部分を削平するためにノミが使われている。またこの面には長さ2~3cm、幅2mm程度の擦痕が所々に残されている。これは重源狹山池改修碑が搬送された時に地面との摩擦によってつけられたものであろう。この面が搬送の時、下を向いていたことがわかる。3面は1面を上に向けて保管しているために調整痕などの観察はできなかった。4面は全体的に荒い仕上げで、あるいは調整後再び何らかの理由で一部が削られた可能性がある。1面側の端部の中央部には非常になめらかな部分が20cm四方にわたって存在する。5面については顯著な調整痕は観察できないが、6面には部分的に削られて平滑になった面が存在した。この部分にも刻字が存在する可能性があるが、現状では確認できない。

次に刻字の内容について述べたい。刻字は現在確認できるだけ27行あり、おおむね2cm四方の字が刻まれている。刻みの幅は平均3mm程度、深さは1mmに満たない。一部欠落している字もあるが、全体的には摩滅も少なく、約800年前の石造物としてはきわめて残存状態良好といるべきである。図45は碑文の拓本である。この読解については重源狹山池改修碑の発見以来多くの研究者の指導を得ているが、研究者の中でも読解および解釈について少し差異がある。現在のところもっとも一般的



重源狹山池改修碑文



図45 電源狭山池改修碑拓影 (S=1/4)

的と思われる読解を掲載しておく。

1～2行は碑文の表題ともいべき部分で、「三世十方諸仏菩薩等」に狹山池修復の事を敬白することが述べられている。3～4行目には天平3年(731)に行基が狹山池を改修したことが記されている。「行基年譜」には行基が天平3年に狹山池院を建立したことが書かれているが、狹山池が同年改修されたことを記した史料としてはこの碑文が最古のものであろう。ただ3行目の下には「初築」という文字があり、この時代には行基は狹山池の改修をしたのではなく、築造を行ったと信じられたことがわかる。行基が狹山池を築造したという説は近世の史料などにも散見される。5～6行目では行基の改修以後年月が経ち、池が壊れてきたので、「撰津河内和泉三箇国流末五十餘郷人民」の誘いによって重源が狹山池の改修に乗り出したことが述べられる。撰津河内和泉三箇国流末五十餘郷がこの当時の狹山池の灌漑範囲であったことが推測されるが、特に撰津、和泉が含まれていることが注目される。近世初期には狹山池の灌漑範囲は撰津国平野郷に及んでいたが、和泉国にはほとんど配水されていない。^① 鎌倉初期の狹山池は近世以上の広い灌漑範囲を持っていたのであろうか。

8行目からは工事の具体的な工程が書かれている。延仁2年(1202)の春から修復を企て、2月7日に土を掘りはじめ、4月8日に初めて石樋を伏せ、4月24日に竣工したことが述べられている。石樋は重源狹山池改修碑と同時に出土した石棺群とみて間違いがないだろう。10行目以降には工事に「道俗男女沙弥小兒乞丐非人」など多様な人々が自ら石を引き、堤を築いたことが書かれている。一種の修飾的表現である可能性は否定できないが、乞丐や非人が工事に参加したと述べられていることは重源とその集団の土木工事の性格を考える上で非常に重要である。また「非人達」の「達」の字は、字体、内容とも「等」である可能性がある。12～13行目にはこの工事が重源の名誉のためのものではないことを述べ、最後は仏教的な常套句で文書が終っている。14行目は梵字の光明真言。15行以降は工事参加者を記載した重要な部分で、まず2行にわたって「大勸進造東大寺大和尚無阿弥陀仏」と重源の名が彫られている。「南無阿弥陀仏」とは阿弥陀信仰者であった重源が自ら名乗った号で、彼は多くの弟子にも順阿弥、淨阿弥といった阿弥号を授けた。重源は養和元年(1181)に抜擢されて東大寺勸進職に任命されているが、その後も僧位ではなく文治心年(1185)の大仏像の完成、建久6年(1195)の大仏殿の再建などを経て、同年3月の開眼供養に際して「人和尚」の号を受けられた。^② この碑に刻まれた「大和尚」の号には以上のような背景がある。17行目には「小勸進阿闍梨者阿弥陀仏」の名が記載されている。者阿弥陀仏は先に述べた阿弥号であるが、記載の順や小勸進という役職から者阿弥陀仏は重源に次ぐ立場の人物であったと考えられる。同時代の僧侶で者阿弥陀仏に該当する人物としては高野山の僧鏡阿がます考えられよう。鏡阿は高野山の勸進僧として活躍した盲目僧で備後國太田社の経営などに努めた。鏡阿の生年は不明であるが、承元元年(1207)に没しているためこの工事の時は相当な高齢であったことが推測される。なお重源が造立したといわれる法華寺の仏頭墨書きにも「南無阿弥陀仏」(重源)と並んで、「者阿弥陀仏」の名が記されており、^③ また東大寺南大門金剛力士像(阿形・吽形)内より最近発見された「一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」の交名や、金剛杵の墨書きにも者阿弥陀仏の名が見える。^④ 鏡阿と重源の関係はこの碑文によって初めて確認されたことであり、今後の研究が待たれる。

18行目からは上段に4行にわたって光明真言が彫られ、下段には淨阿弥陀仏、順阿弥陀仏などの人名が記されている。ただこの部分は石の表面が剥離しているためにこの2名の名も下方が読み取れない。また順阿弥陀仏の左側にもさらに阿弥号が書かれているようであり、「阿」の字がかすかに読めるほかは、やはり後世の剥離のために読み取ることができないのは残念である。間隔から考えて4名程度の人名が彫られていたと思われる。ついで工事に参加した職人等の名が記載されている。まず

「番匠廿人之内」とあり20人の番匠(今日の大工のこと)が工事に加わったことがわかる。次行より番匠のうちの代表者2名の名が書かれている。最初は「造東大寺大工伊勢」とあるが、以下が剥離のため欠落している。次行には「同物部為里」と刻まれている。物部為里は重源にしたがった番匠であるが、「伊勢權守」という受領名を名乗っていた。とすれば前行の「伊勢」とは物部為里のことかと思われるが、この場合「同」の意味がわからなくなる。この碑文では重源以外の人物はいずれも1行で記されており、「造東大寺大工伊勢……」と物部為里はやはり別人と考えるべきであろう。

最終行はもっとも難解な行であったが、一応「造唐人三人之内人工守保」と読んでおきたい。「造」を「過」と読んで、故人の意を示すという説もあるが、この碑文の改修碑という性格を考慮すれば「造」と読むのが妥当であろう。意味の上で難解なのは次の「唐人」である。「唐」は「堀」(つつみ)の土偏を略したもので「造唐人」で堀を造る人の意であるという意見もあり、また重源が宗人の石「などを使っていたことから文字通り造作をする唐人であるという説もある。どちらの解釈を探るべきかは今の段階では決めがたい。

以上が碑文の内容であるが、今後とも検討を要する部分が数箇所残されている。内容的には狹山池の改修に重源がかかわっていたことを直接示す第一級の資料であることは当然であるが、わが国中世の土木技術と宗教者の関係を考える上でも貴重な資料であろう。ついで重源狹山池改修碑の設置状態とその機能について考えてみたい。

これまで述べてきたように重源狹山池改修碑は慶長13年(1608)の改修に際して動かされ、擁壁として利用されていた。碑文の表面をよく観察すると、刻み目のなかに墨の痕跡を認めることができる。近世の初め以来狹山池の管理者である池守を勤めた田中家の古文書の中には重源狹山池改修碑の模写と思われる「狹山池修復記」という文書が残されている。文書の末尾には「慶長十三年季戊申八月十五日西園之住僧比丘秀雅僧都書之」という記載がある。現在の重源狹山池改修碑の状態から考えて、慶長の改修時に一度碑は掘り出され、魚拓のような方法で拓本がとられ、それを秀雅という僧侶が読解したものと推定できる。「狹山池修復記」と重源狹山池改修碑を比較すると、「狹山池修復記」では前半と後半が逆転しており、ずいぶん読み違いも多いことに気付く。おそらく拓本は2枚の紙にわたってとられたために、实物を見ていない長雅は逆さまに読解したのであろう。このようなことからも慶長の改修の際に重源狹山池改修碑は一度出土していたことが想像できるが、それ以前の状態については造構の状況からは推定することすらできない。重源狹山池改修碑の完成直後の姿に関わる問題点は、おおむね3点に集約できる。一つはこれがどの面を上にして置かれていたのか、次にそれはどの場所に置かれていたのか、三つ目の問題点は重源改修碑は完成時に現在の形態であったのかである。一つ目の問題点については、常識的な見解として碑文が刻まれた1面が横になるように、すなわち4面が上を向くように設置されていたという回答がまず考えられよう。現在でも多くの記念碑はこの状態で立てられている。ただ碑文の字は1面の下端に接して刻まれており、読むという面からはやや疑問も感じる。この状態で置くためには土台が必要となる。また1面を上にして設置するという可能性もある。この場合は地面に設置するよりもむしろ埋設されることが前提となる。現在でもダムの定礎式の時には「定礎」と彫られた石が使用されるが、これは堤防予定地に彫られた穴に入れられて埋設され、その上に堤防が築かれていく。このように一つ目の問題点は、次の問題点である最初の設置場所の問題と密接に関連をもつ。これを整理すると次の二つの可能性が考えられよう。一つ目の可能性は重源狹山池改修碑は碑文を側面に向けて立てられていたというものである。この場合、改修碑は改修したという行為を後世に伝えるという意味を持つから、常に水中に没する池底や樋の周辺に置かれることはありえず、堤防上などの人目につく場所に設置されたことが想定できる。二つ目の可

能性は碑文を上にもけて設置する場合で、この場合は堤防の底あるいは桶周辺などに埋設することが前提となる。ただ碑文には改修工事の完了まで書かれているので、堤防の底に埋める可能性はなく桶の周辺ということになろう。この二つの可能性のうちどちらかを選択する根拠は調査のなかで見いだしえなかつた。ただ現在のところいくつかの傍証から桶の周辺に埋設された可能性が強いと考えている。傍証のひとつは重源狹山池改修碑は800年前に刻まれているにもかかわらず現在でも非常に刻字の残りがよいという点である。和泉砂岩は柔らかいために石造物によく用いられるが、剥離や摩滅が生じやすく中世のものはほとんど残されていない。重源狹山池改修碑は最古の和泉砂岩の石造物であろう。ところが重源狹山池改修碑は一部で剥離が見られるものの、刻字自体は非常に鮮明である。完成後、土中に納められたとすればこのような状態も理解しやすい。また重源碑は同時に出土した石棺に比べれば軽いものの、約1.8tの重さがあり、長い距離を移動するには相当な労力が必要である。石棺や重源狹山池改修碑は重源の設置段階から出土地付近、つまり現在の中桶遺構付近に所在し、慶長段階で小規模な移動によって據置として再利用されたと考えておきたい。石碑を埋設するという行為については、仏像や経塚内の埋納經と同じく他者に見せることを前提としない宗教的な心意の存在を考慮すべきであろう。重源狹山池改修碑の碑文が仏に対する敬白文の形態をとるのもこの故であるとは考えられないだろうか。なお三つの問題点である完成直後石碑の形態も、もちろん碑の設置場所や設置方法と関連する問題であるが、現在のところ完成直後から変化を受ける可能性が認められるのは4面のみである。4面は非常に荒々しい表面であり、後世削られた可能性がある。しかしながら完成直後の形態を遺物の現状から推測することは困難であり、今後類例との比較のなかで解決するしか方法はないだろう。

②石 棺

狹山池中桶遺構において扇板の両側で検出された石組遺構には、古墳時代後期～終末期の石棺材もしくは石槨材が主として使用されていた。これらの石のうち、石棺の身と考えられるものは、その小口部分が意図的に破碎され、欠損している。この小口の破碎部分のノミ痕は同一個体での他の調整痕と明らかに異なり、概して粗いものである。この小口部分を欠損した石棺材は、鎌倉時代の僧重源によって伏せられた石檻に転用されていたと想定されるため、石檻材としても扱うことができるが、本項ではこれらの大型石製造物を便宜上、転用以前の機能を中心にして考えることとする。よって、これらの石製造物の呼称も石棺とし、石槨材の可能性を残す石材についてもとりあえず石棺として扱う。また石棺としての使用が想定できない石製造物については、「石材」と呼称する。また中桶遺構から出土した大型石製造物は、重源狹山池改修碑も含めて全部で11基あるが、図46のように番号を与えた。なお岩石種の鑑定については、奥田尚氏(八尾市立曇川小学校教諭)に依頼した。石棺の形式および調整技法については和田晴吾氏(立命館大学教授)、山本彰氏(大阪府立近つ飛鳥博物館)のご教示を得た。

(石棺1) 図47

西側石組の南端に位置した石棺である。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩で、石材採取地は二上山と鑑定されている。刳抜式家形石棺の身と考えられるこの石材の法量は、現存長201.5cm、現存幅127.0cm、現存高63.0cm。ただし石棺としての法量は、欠損部分が多いために主要な数値を知ることができないが、全幅は現存幅の計測値に近いと考えられる。また、内幅は小口部分で約89cm、小口の厚みは約42cm、底部の厚みは最大で約50cmであった。石棺外面で遺存している部位は、小口外面と図47平面図下側の側面の一部である。石棺外面の加工痕は、遺存状況が悪いために確認できない。石棺内面は破碎を免れていたために、ノミ痕等の加工痕を確認することができる。なお、石棺内面に

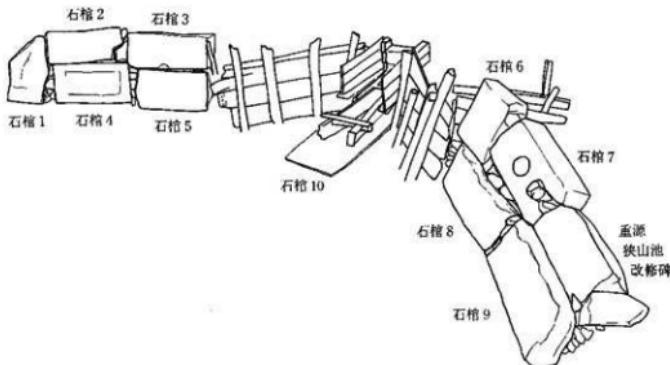


図46 中樋造構出土石棺の呼称

は水銀朱が塗布されており、明らかに古墳において石棺として使用されていたものと判断できる。後世の転用時における加工痕は、石棺長軸方向での破断、小口および左右両側面の破碎など全体に及ぶ。底部内面中央にみられる筋状の彫り込みは、転用に際して石棺を細かく削るためのものと考えられる。なお、転用時の加工痕は、中世の石桶転用時のものか、近世の中樋造構石組構築時のものかを判別することができない。

(石棺 2) 図48

西側の右組を構成する石棺で、上段南側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質熔結凝灰岩。いわゆる竜山石の範疇に含まれる石材であるが、黒色の礫を含み、全体に赤みがかかった色調であるため、石材採取地は竜山ではなく、兵庫県加西市長付近と鑑定されている。削抜式家形石棺の身と考えられるこの石材は、全長 227.0cm、全幅 122.0cm、全高 87.0cm。平面形は 9:5 の比率の長方形であり、両小口の幅はほぼ同じである。底部の厚みは約 40cm、内高は 42~45cm で、底部厚と内高の比率は 7:8 である。底部内面以外の各面は手斧によるタタキ調整で平滑に仕上げられている。側面と小口の境界部分の外側角は 4 箇所ともすべて面取り加工が施されており、この部位の仕上げも平滑である。なお一方の側面外側では、下半部の手斧タタキが完全でなく、ノミ痕が比較的粗く残存する。両小口は打ち欠かれており、全体の形状は U 字溝形である。小口部分を打ち欠いた粗いノミ痕は、図上右側の小口の底部内面および側面内面で明瞭であるが、図上左側の小口では判別しがたい。左右の側面とも左上角が打ち欠かれており、一方の打ち欠きは底部内面近くにまで達する。この部位のノミ痕も小口を打ち欠いた加工痕と同様に粗雑である。後述する石棺 3 と同様に小口と側面左上の打ち欠きは、この石棺を樋管材として転用した際の加工と推定できる。石棺 2 は後世の小口破碎加工の痕跡が、一方において不明瞭であるため、削抜式家形石棺の身であるとともに、家形で削抜式の横口式石桶の可能性も考える必要がある。

(石棺 3) 図49

西側石組を構成する石棺で、上段北側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質熔結凝灰岩で、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。いわゆる竜山石である。石棺 3 同

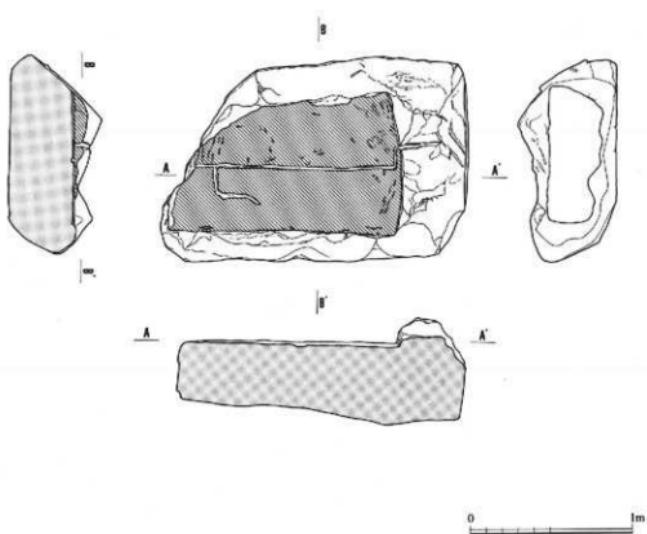


図47 中樋造構出土 石棺 I (S-1/30)

有の特徴として、岩石生成時の発泡孔の存在が指摘できる。剝抜式家形石棺の身と考えられるこの石材の法量は、全長 222.0cm、全幅 130.0cm、全高 100.0cm である。平面形は 7:4 の比率の長方形であり、両小口の幅はほぼ同じである。底部の厚みは約 22cm であり、内高との比率は 2:5 である。底部を含む内外面は、手斧によるタキ調整で平滑に仕上げられており、多くの場所では成形段階のノミ痕を確認することが難しい。両小口部分は打ち欠かれており、全体の形状は U 字溝形を示す。また片側の側面上辺の中央付近には、半円形の打ち欠きがある。これも、中樋造構の石組部材としては機能を考えられないため、樋管材転用の段階での加工痕と想定される。半円形の打ち欠きがある側面には、外面の左上方に墨書痕が存在する。墨書きされている文字は「野遠大斐」と読めるが、さらにその下に一字存在する可能性がある。「野遠」は現在の堺市、「大斐」は現在の美原町にある地名で、近世の狹山池改修工事の際に、水下にある野遠・大斐の両村の人々の手によって、石棺 3 が運搬されたことを意味する墨書きであると推定される。この墨書きは、中樋造構検出直後には肉眼で明瞭に文字が判読できるほど鮮明であったが、調査後数ヶ年を経過した現在では、残念ながら視認できないほどである。なお、この石棺材の法量と岩石の質は、中樋筋放水口付近から出土した剝抜式家形石棺蓋（B 号石棺・図57-2）と非常に似通っている。この蓋と身が対をなして、古墳の横穴式石室内で使用されていた可能性が高い。

（石棺 4） 図50

西側の石組を構成する石棺で、下段南側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質熔結凝灰岩で、他と同じく、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。剝抜式家形石棺の身と考えられるこの石材の法量は、全長 226.0cm、全幅 113.0cm、全高 79.5cm である。平面形は 2:

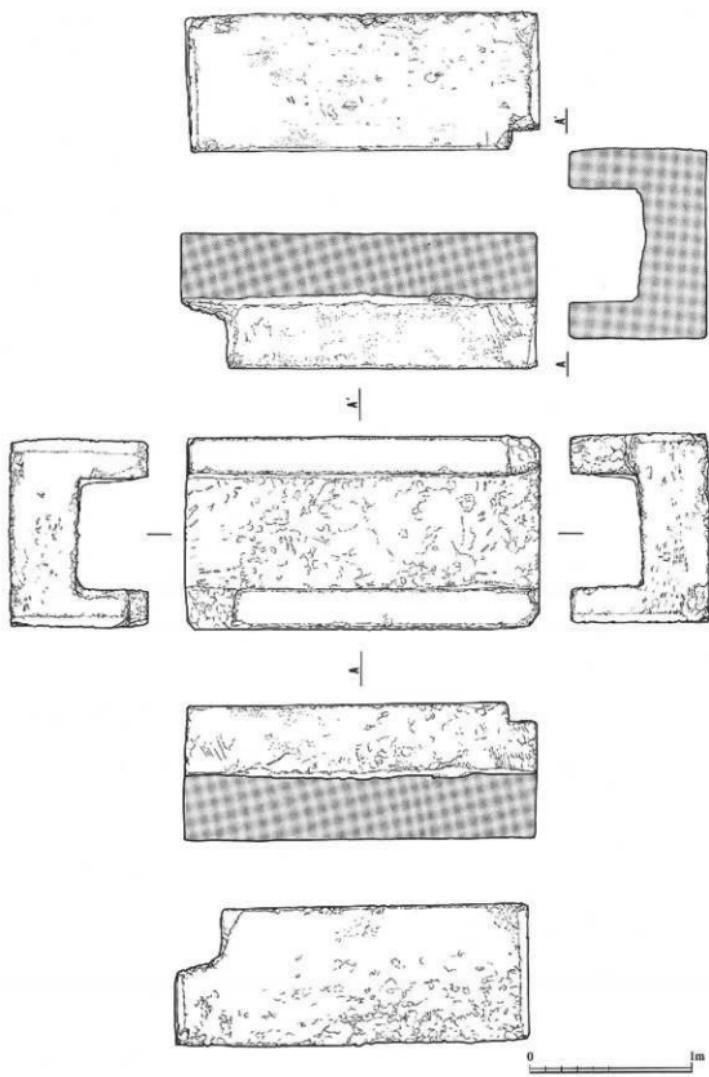


図48 中室遺構出土 石棺2 (S=1/30)

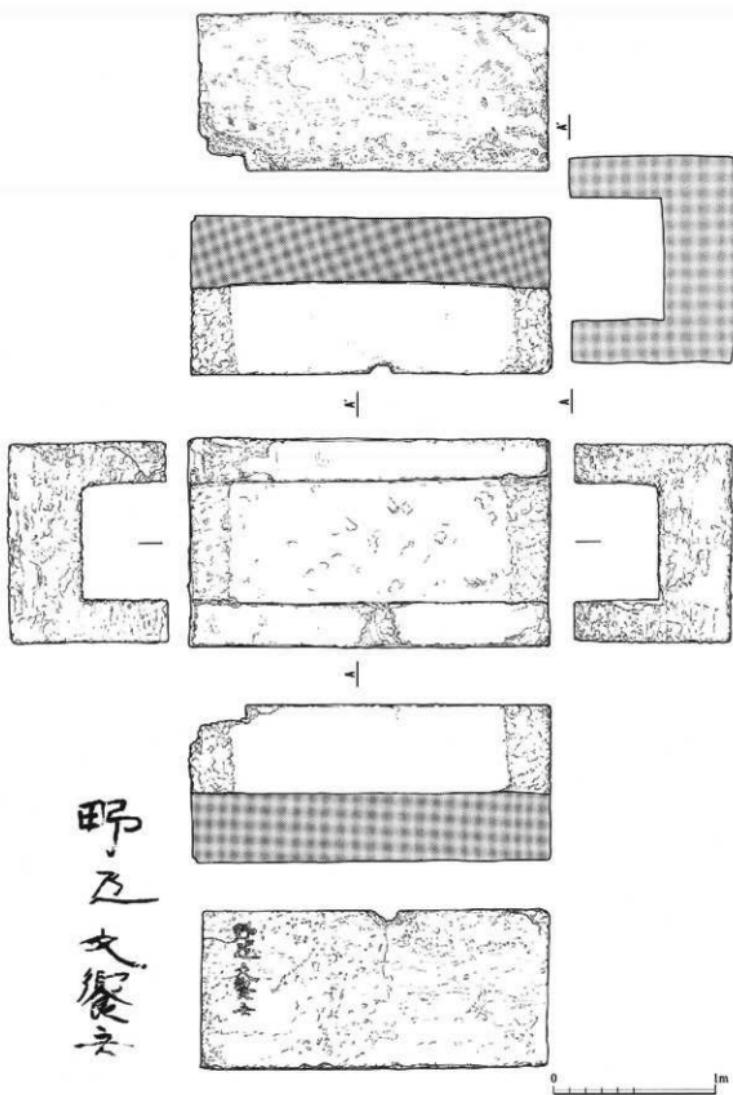


図49 中紀遺構出土 石棺3 (S-1/30)

1の比率のやや長細い長方形であり、両小口の幅はほぼ同じである。底部の厚みは約35cmであり、内高との比率は4:5である。外面は、手斧によるタタキ調整で平滑に仕上げられている。この石棺個別の特徴として、底部外面における独特の成形が指摘できる。底部外面の中央部分を外形と同様の比率の長方形に彫り窪め、周囲を額縁状に彫り残す加工痕が確認できた。通常、削抜式石棺の身の底部外面を実見する機会が少ないため、国内で出土している他の石棺の底部外面に同様の加工痕が存在するものがあるかは不明である。石棺4は、中轍造構において、底部外面を造構の正面に向けた状態で横倒しに据えられていたため、幸いにもこの加工痕を確認できた。石材切り出しの段階から石棺としての最終成形段階に至る過程で、この石材を石棺蓋として利用しようとしたための加工痕であるのか、あるいは削抜式家形石棺の身の重量を軽減する目的で行われてた加工なのかは、類例の知見がないために判断できない。両小口部分は打ち欠かれており、全体の形状はU字溝形を示す。小口部分を打ち欠いたノミ痕は、石棺3と同様に、他の箇所のノミ痕とは明らかに異なり、粗く大まかなノミ痕である。ただし、一方の小口(図上右側)における小口破碎痕は不明瞭である。一方の側面の左上角は若干打ち欠かれている。

(石棺5) 図51

西側石組を構成する石棺で、下段北側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質熔結凝灰岩で、他と同じく、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。この石材は底部が丸みをおび、底部の厚みも大きいややいびつな形状を示す。全体の幅は各部位においてほぼ同じである。底部の厚みは約54cmであり、内高との比率は1:2である。外面には粗いノミ痕が残っており、他の石棺にみられるような手斧タタキを明瞭に確認できる部位はない。ただし、側面の上端面のみは平坦に仕上げられている。両小口は打ち欠かれており、全体の形状はU字溝形を示す。小口を打ち欠いたノミ痕は、石棺3と同様に、他の箇所のノミ痕とは明らかに異なり、粗く大まかなノミ痕である。ただし、底部内面では仕上げ自体が粗いため、ノミ痕の差を峻別しがたい。他の石棺にみられるような、側面の上端角の打ち欠きは認められない。この石棺材は、側面の上端が平坦に仕上げられているため、かろうじて削抜式石棺材やそれに類似するものと認識できるが、はたして石棺の身か、蓋か、もしくは家形の横口式石棺材であるかを判断することは難しい。各面の仕上げが粗いこと、内法が著しく浅いこと、底部(あるいは天井部)が丸みをおびていること、小口が存在していたこと等から、削抜式家形石棺蓋の未製品である可能性が高いと考える。

(石棺6) 図52

東側石組を構成する石棺で、上段北側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質熔結凝灰岩で、他と同じく兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。法量は全長134.0cm、全幅138.0cm、全高64.0cm。図上左側の端部は破断面であり、図上右側の端部が小口部分である。削抜式家形石棺身の一方の小口付近の破片と考えられる。全体の形状は不明であるが、部分的な形状の特徴を2点指摘することができる。1点は内面の底部と側面・小口との接点部分が角張らずにドーム状を示していることである。もう1点は石棺の内面下端の幅は、小口付近と破断面付近とで約



写真22 石棺4の底部外観

9cm の差があり、小口付近の方が狭くなっていることである。石棺材としての加工は綿密に施されており、側面・小口の外面下端の角以外は、手斧タタキによる調整が確認できる。小口部分は削除されていて、底部および側面内面に粗いノミ痕が残る。側面上方は大きく破碎されおり、わずかに側面の基部が残存する。また、図上左側の破断部分の中央には、底部の内外を貫通するクサビ痕が残る。これらの石棺材の転用に伴う加工痕のうち、小口部分の打ち欠きは中世の樋管への転用時における加工痕と思われる。他の加工痕は、樋管として利用する場合に不必要的加工であるため、中樋造構石組への転用時における加工痕であると推定する。

(石棺7) 図53

東側の石組を構成する石棺で、上段中央に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質焼結凝灰岩で、他と同じく、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。法量は全長 199.5 cm、全幅 98.0cm、全高 68.0cm。平面形は 2:1 の比率で、両小口の幅はほぼ同じである。石棺材としての底部の厚みは約 39cm で、内高との比率は内高 3 に対して 4 である。外面および内面は手斧タタキで調整されているが、側面下端付近には手斧タタキが完全に及んでいないため、この部分では成形時のノミ痕が明瞭である。中世の樋管転用段階に施された加工は非常に特徴的で興味深いものである。まず石棺底部内面のうち 3 分の 2 の広さを面的に彫り込んでいる。この箇所の内高は約 39cm で、石棺本来の底面からは 10cm 程度深くなっている。この部位のノミ痕は粗く、これと同様のノミ痕で、一方の小口を削除している。底部内面中央と、削除していない小口側の底部内面の 2 箇所には直径約 30cm の円孔が大きく穿たれ、底部外縁まで同幅で貫通している。円孔の内側は平滑に調整されている。また底部外縁では、2 つの円孔の周縁に幅 2cm の段が作られている。この部位の仕上げも非常に丁寧である。小口側の円孔の小口側の部分には切り通しがあり、それは小口の下端から 33cm の箇所まで伸びている。この切り通し部位は、小口外面側からみると U 字状、底部外面側からみると円形と組み合わせた長方形である。なお、他の石棺にみられるような、側面上端角の打ち欠きは認められない。石棺7 の独特の転用加工は、中世の樋管転用時のものと思われる。2 つの円孔があけられていること、一方の小口が残されていることから、樋管先端の取水部として使用されていたと考えられる。この円孔部分には、おそらく木製の柱を差し込み、柱を上下させて樋管内への水の流入を調節していたと考えられる。円孔から小口側への切り通しは、樋管内に堆積した土砂を除去するための造作であろう。

(石棺8) 図54

東側石組を構成する石棺で、下段北側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質焼結凝灰岩で、他と同じく、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。法量は全長 244.0



写真23 石棺6のクサビ痕

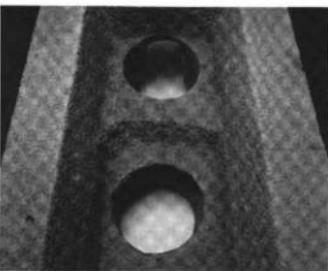


写真24 石棺7の内面

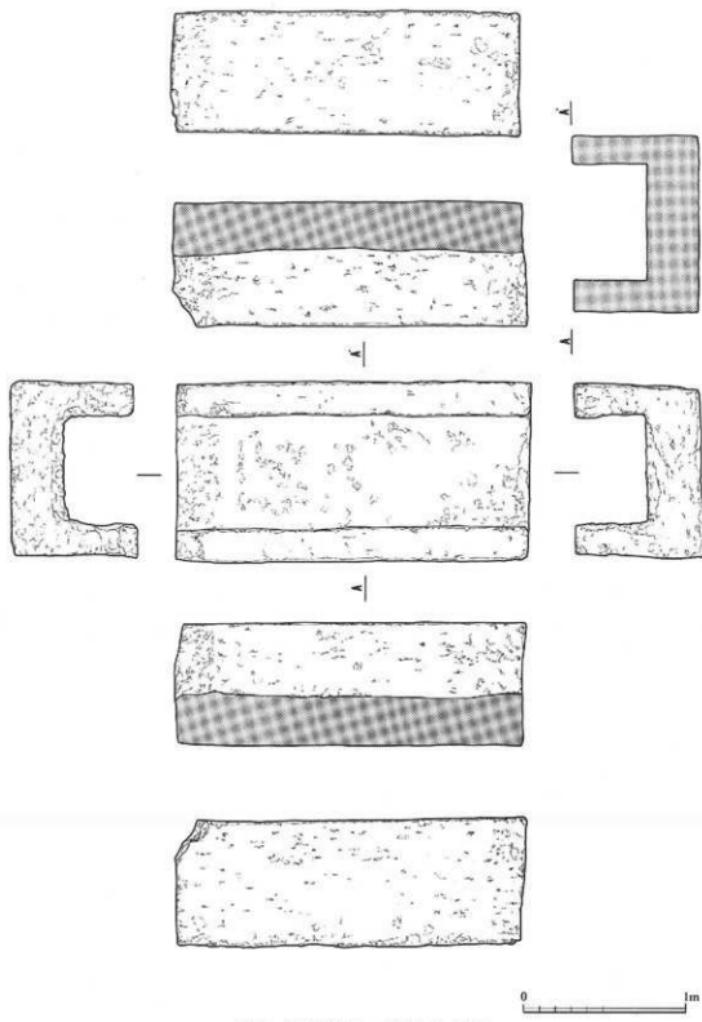


図50 中総造構出土 石棺4 (S-1/30)

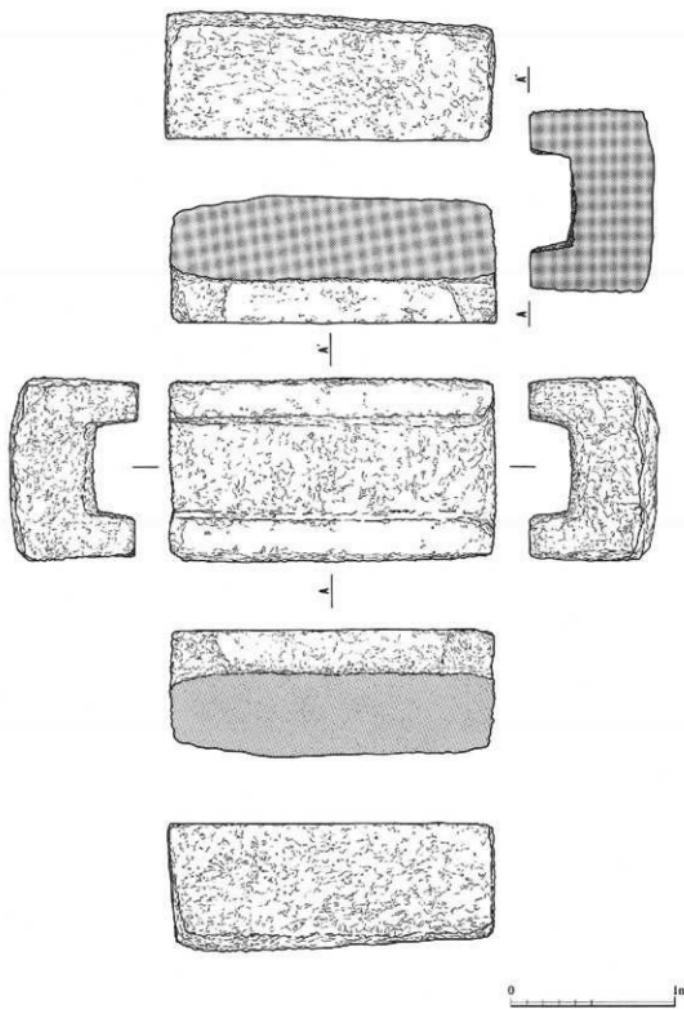


図51 中越遺構出土 石棺5 (S-1/30)

cm、全幅 119.5cm、全高 82.5cm。平面形は 2:1 の比率の長方形で、両小口の幅はほぼ同じである。石棺材としての底部の厚みは約 35cm で、内高との比率は内高 4 に対して 3 である。外面および内面は手斧タタキで調整されているようであるが、他の石棺に比して調整が粗いためか、成形時のノミ痕が判別しやすい。両小口部分は打ち欠かれており、全体の形状は U 字溝形を示す。小口部分を打ち欠いたノミ痕は、石棺 3 と同様に、他の箇所のノミ痕とは明らかに異なり、粗く大まかなノミ痕である。ただし、側面内側における小口を打ち欠いた際の加工痕は不明瞭である。両方の側面の左右上の角は少し打ち欠かれている。なお、石棺 8 の側面と底部との境界部分には内外面を全周するひび割れが生じている。これは、中樋遺構の石組において、側面を下にして斜めに立てられ、上段の石棺の重量がかかっていたことに要因があると思われる。

(石棺 9) 図 55

東側石組を構成する石棺で、下段南側に位置する。岩石種は流紋岩質凝灰角礫岩質熔結凝灰岩で、他と同じく、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定さ

れている。法量は全長 263.0cm、全幅 128.0cm、全高 96.0cm。平面形は 2:1 の比率の長方形で、両小口の幅はほぼ同じであるが、中央付近での幅は小口部分よりも 5cm 程度広い。石棺材としての底部の厚みは約 47cm で、内高との比率はおおむね 1:1 である。外面は手斧タタキで調整されているようであるが、他の石棺に比して調整が粗い。また、小口板下方・側面下方では成形時の鑿痕がそのまま残っている。両小口は打ち欠かれており、底部内面・側面内面にみられる破碎の際のノミ痕は、石棺 3 などと同様に、他の箇所のノミ痕とは明かに異なって粗く大まかである。両方の側面の左右の上の角は大きく打ち欠かれており、片側ではこの打ち欠きが底部内面にまで達している。

(石棺 10) 図 56

中樋本体の先端を載せていた石材である。岩石種は角閃石黒雲母英閃綠岩で、石材採取地は金剛山麓千早付近と鑑定されている。法量は全長 259.0cm、全幅 160.0cm、全高 35cm。上下の平坦面および側面には、ノミ痕のみが確認できる。形状が単純なこともあって、いつの時代に最初の加工がなされて、転用にともなう痕跡があるのかどうかは判断しがたい。中樋遺構で検出された時点では、黒色

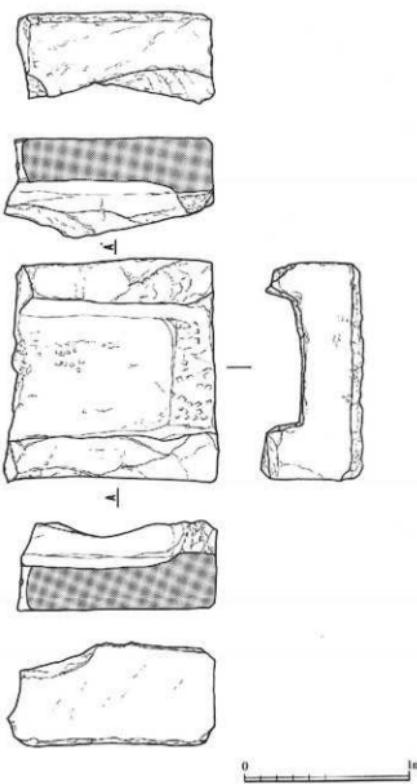


図 52 中樋遺構出土 石棺 6 (S-1/30)

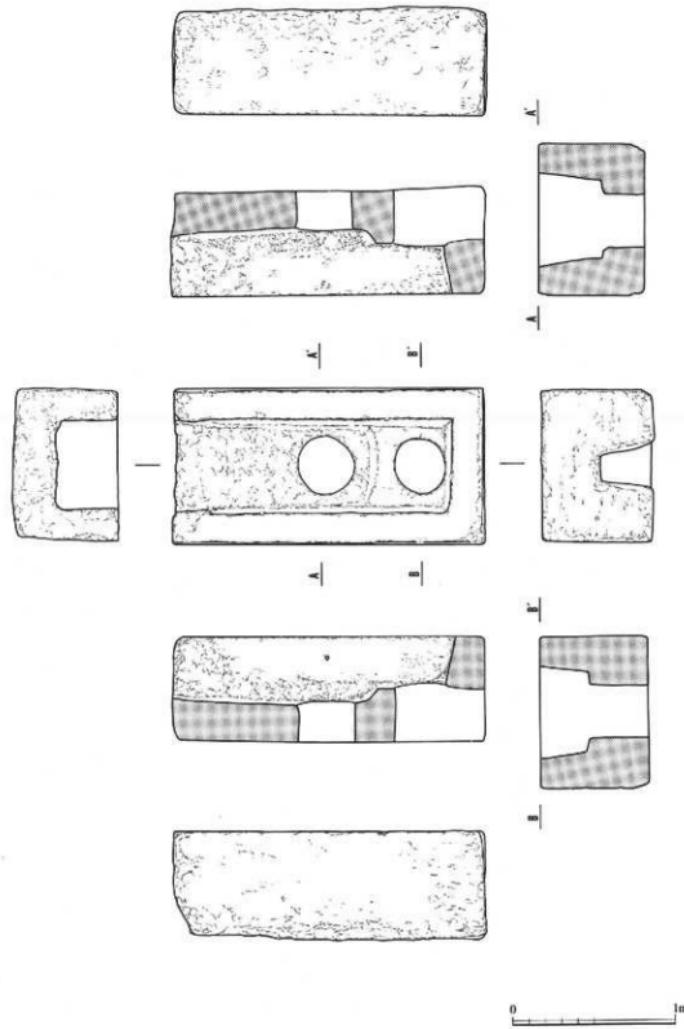


図 53 中埴造構出土 石棺 7 (S=1/30)

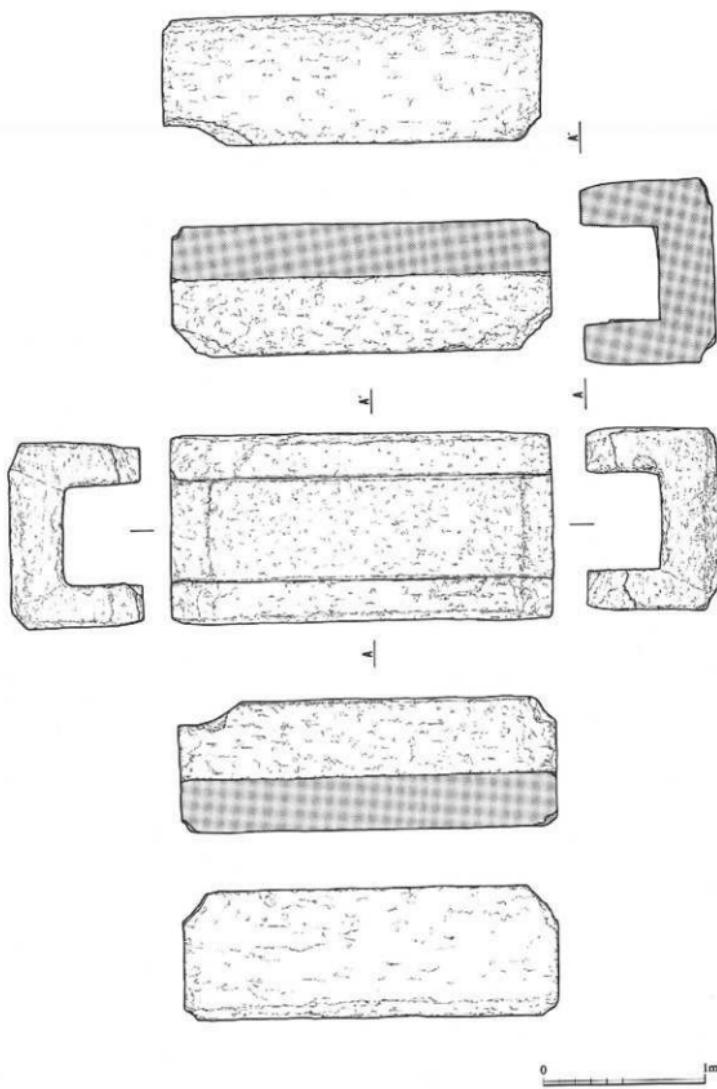


図54 中継造構出土 石棺8 (S-1/30)

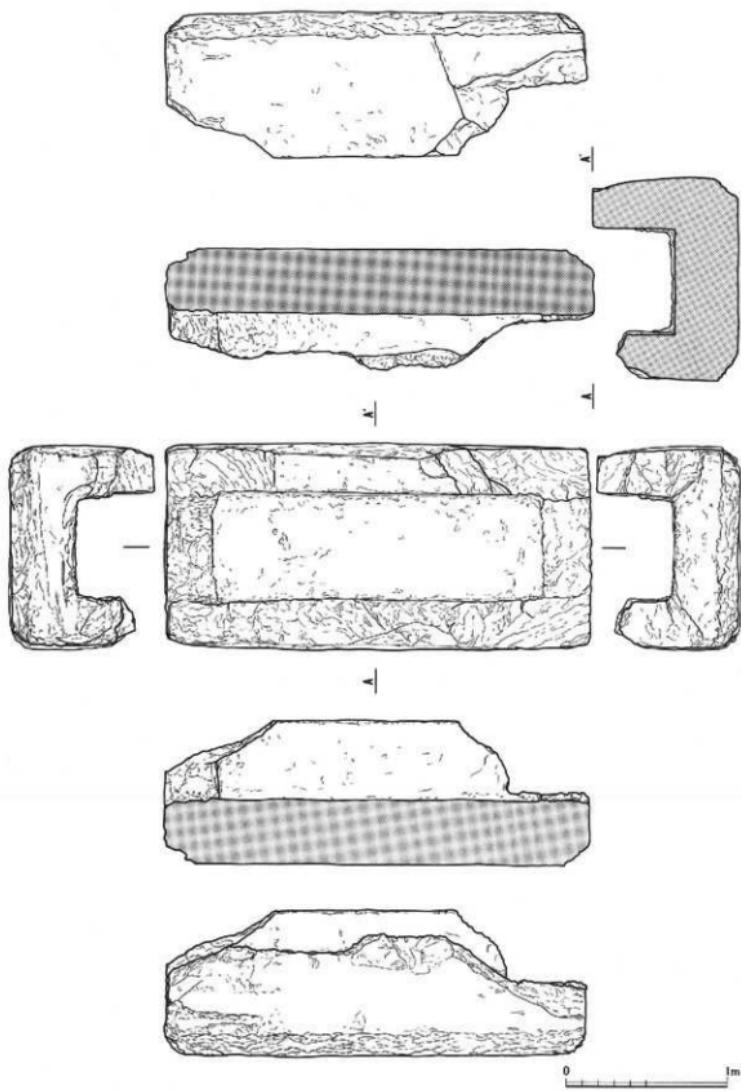


図 55 中継造構出土 石棺 9 (S-1/30)

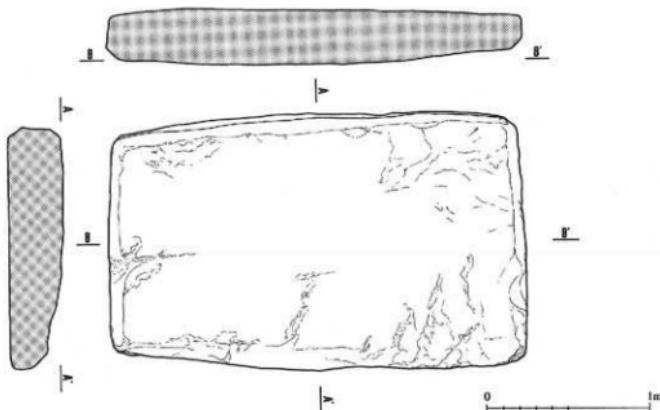


図56 中樋遺構出土 石棺10 (S=1/30)

の変色帯が上面の四周に確認されていた。このため切石組合式の横口式石棺の部材であった可能性も考えられる。また中世の樋管敷設時や近世の中樋遺構築造の際に新たに切り出された石材である可能性もある。

(中樋遺構出土石棺材の性格について)

中樋遺構から検出された石棺材のうち、石棺6はやや古い形態を持ち、6世紀中葉～後葉頃の削抜式家形石棺身と考えられる。石棺2・石棺3・石棺4・石棺7・石棺8・石棺9はその形態から6世紀末葉～7世紀の削抜式家形石棺身であると考えられる。石棺1は、遺存状況が不良であるが、おおむね6世紀後葉以後の削抜式家形石棺身であると判断できる。石棺5は、おそらく6世紀末葉以後の削抜式家形石棺蓋の未製品であると考えられる。石棺10以外の石棺には小口を破碎してU字溝状とする加工痕および側面上端の加工痕がみられた。中樋遺構築造時の加工痕と、中世の石製樋管への転用時の加工痕との区別は難しい。ただし、石棺を分断するような大きな破碎や側面部分の大きな破碎以外の加工痕は、中樋遺構の石組みに不必要的ものであり、樋管としての機能を石棺材に与えるための加工であると理解できる。

また、石棺1の内側に水銀朱が塗布されていたように、明らかに古墳において石棺として使用されていた形跡のあるものもあれば、石棺5のように未製品である可能性が高いものも存在する。これらの石棺を狭山池北堤付近に集積させた中世の樋管設置工事のときに、古墳の主体部から石棺を取り出して狭山池まで搬送したケースと、石材採取地等から狭山池まで直送したケースとの両方を想定する必要がある。大阪府下において知られている削抜式家形石棺の総数は、狭山池出土のものを除外すると、わずか21例にすぎない。中樋遺構およびその周辺からは、確実なものだけで15基もの削抜式家形石棺が出土しており、他の古墳で確認されている削抜式家形石棺の数と比較すると、驚異的な集中を示している。狭山池出土の石棺は大阪府下の古墳のみから運ばれてきたとは限らず、奈良県下の横穴式石室墳や他の地域の古墳、兵庫県の石材採取地等からの搬入も想定される。いずれにしても、鎌倉時代の僧重源による石碑設置に伴う石棺搬送作業は、非常に大規模なものであったことがうかがえよう。

③(参考資料) 昭和初期出土の石棺について

狹山池で昭和初期に行われた改修に際して、今回の発掘地点とは北堤をはさんで反対側にあたる中橋の下流側(堤防の北側)において石棺が数基出土している。またこの時に、堤体の内部においても1基の石棺が出土している。これらの石棺については末永雅雄氏によって出土状況および遺物の略図が作成され『狹山池改修誌』などに報告されているが、その出土位置からみて、今回出土した石棺と類似した性格を持つと考えられる。狹山池調査事務所では、昭和63年度に昭和初期出土の石棺の実測調査を実施しているが、以下中橋遺構出土の石棺の性格を考える上での参考資料として、調査の成果を報告することとする。なお昭和初期出土の石棺は、中橋遺構出土の石棺と区別するために石棺A、石棺Bなどと呼称することとする。

(石棺 A) 図57-1

狹山池東堤の樅荷神社境内に置かれていた削抜式家形石棺の蓋である。現在は、大阪府の文化財に指定され、大阪狭山市立郷土資料館前庭に保管されている。昭和初期の改修において石棺Aだけが堤体盛土内で検出されている。岩石種は流紋岩質培結凝灰岩で、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。法量は全長214cm、全幅118cm(本体幅102cm)、全高55cm。底部からほぼ垂直に立ち上った後、不整形なままで傾斜して屋根部を形成し、一般的な家形石棺にみられる頂部の平坦部を持たない。垂直面が丁寧な加工を施しているのとは対照的に、屋根部は荒削りをおこなったままの状態である。繩掛突起は短辺に各1個、長辺に各2個の計6個が彫り出されており、5個のみが現存する。いずれの突起も垂直面上端から上方に向へ20cm程の位置から斜め方向へ突出する。完存する突起の端面は縦15cm、横42cmの扁平な長方形で、垂直面より7cm突出する。端面の下端は垂直面のはば中程にまで至る。短辺部の突起は、欠損があるため、その形状は明らかではないが、現状では垂直面より3cm程度突出し、長辺側の突起と比較して小さい。小口部分が削り取られており、後世に樋管転用のための加工を受けたものと考えられる。



写真25 石棺A

(石棺 B) 図57-2

岩石種は流紋岩質培結凝灰岩で、兵庫県の加古川流域竜山付近で採取された石材と鑑定されている。両短辺の繩掛突起の突出部を欠損する以外は、ほぼ完存する削抜式家形石棺蓋である。法量は全長223cm、全幅144cm(本体幅135cm)、全高64cm。底面から垂直に立ち上がり、約45度に傾斜しながら棟部分にあたる頂部平坦面に至る。頂部平坦面は長さ144cm、幅48cmである。平面形はほぼ長方形であるが、両側側面は若干外へ張り出している。繩掛突起は短辺に各1個、長辺に各2個の計6個が彫り出されている。いずれの突起も屋根部傾斜面のはば中程から斜め下方へ突出する。突起の端面は縦26cm、横38cmの長方形で垂直面より4cm程突出し、下端は蓋の底面から



写真26 石棺Bの内面

4cm 上方にまで達している。残存している突起の端部には、上辺を除いた3辺に幅2cm程の丁寧な面取りが施されている。なお傾斜面から突起への移行は非常になだらかで明瞭な境界線はない。小口は破碎されており、これは樋管転用にともなう加工痕と考えられる。全体的に手斧タキをもちいて平滑に仕上げられており、各面の調整は中樋造構石棺3に近似している。また、岩石生成時の発泡孔が、中樋造構石棺3と同様に右棺Bにも確認できる。法量からみても、石棺3の計測値は全長222cm、全幅130cmであり、ちょうど蓋と身として対をなすふさわしい。

(石材) 図57-3

この石材は自然石と思われ、昭和改修以前の中樋樋管から放水する際に、樋管の振動を抑止するための重しの役目を果たしていた。全長212cm、全幅96cm、全高98cm。

(石棺C) 図57-4

全長186cm、全幅102cm、全高約60cm。内高は約30cm、内幅は上端で約57cm、下端で約55cmを測る。側面の下半部に粗い調整痕が残る。

(石棺D) 図57-5

全長158cm、全幅92cm、全高53cm。内高は30cm、内幅は上端で約50cm、下端で約45cm。

(石棺E) 図57-6

全長167cm、全幅75cm、全高約57cm。内高約24cm、内幅は上面で約50cm、下端では約43cm。長軸中心より約20cmの箇所に、直径約15cmの不整円形の孔が穿たれている。底部外面では径が広がっているようであり、樋管転用時における機能において、中樋造構石棺7の機能との関係性を考える必要がある。

(石棺F) 図57-7

全長180cm、全幅112cm、全高約40cm、内高約20cm、内幅は上端で約63cm、下端で53cm。上面外側の端部には約5cmの高さで段が彫り込まれ、いわゆる印籠合せの形状をなしている。この上面の平坦面は、他の石棺と比較して粗雑なノミ痕が残っている。石棺材よりも、横口式石鄰部材や中世の石風呂などの他の部材として考える方が妥当である。

(石棺G) 図57-8

繩掛突起をもつ家形石棺蓋の破片。おおむね全体の4分の1程度に相当する。高さは50cmであるが全長、全幅などの法量を復元することはできない。繩掛突起は頂部平坦面からわずかに下った位置からやや斜め上方に突出する。突起の幅は傾斜面を下るほど広くなっているが、突起の先端部は欠損しているため、詳細な形状は不明である。突起の下端は傾斜面内に收まり、垂直面には至らない。なお、短辺には繩掛突起が存在した痕跡は認められない。小口部分を破碎しており、中世の樋管転用に伴う加工を受けていると考えられる。

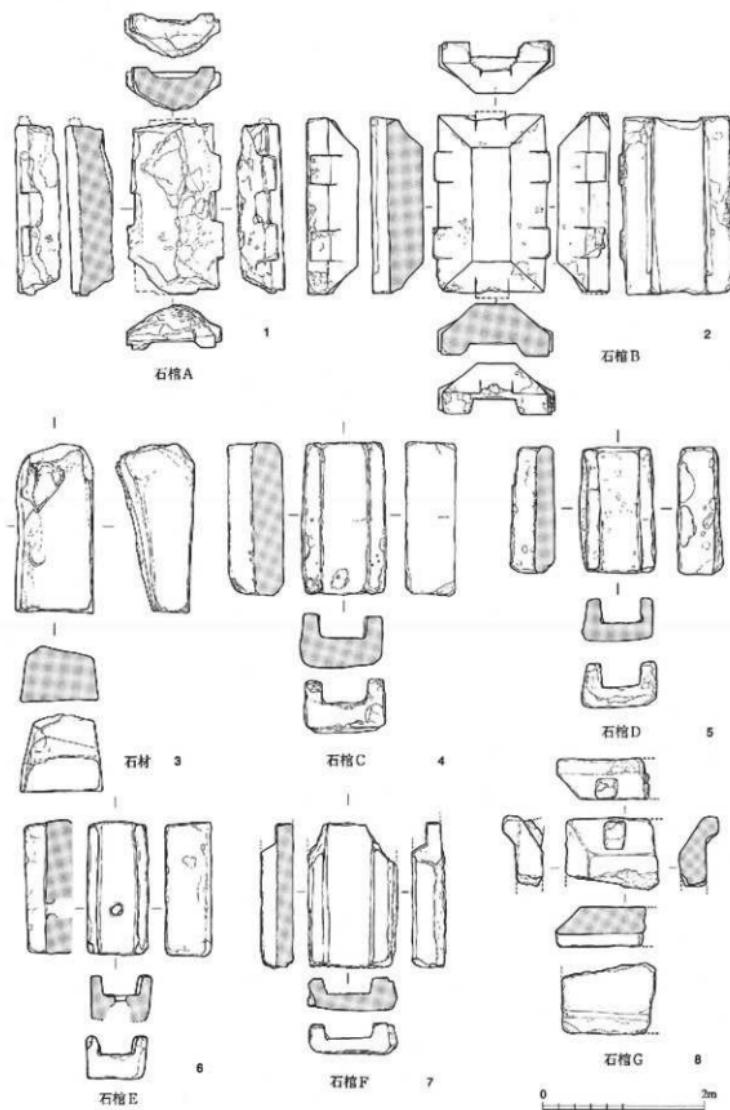


図57 昭和初期出土の石棺 (S-1/60)

4 小 緒

中樋造構は昭和の改修まで使用された尺八樋の最下段である。中樋造構は西樋造構などと同様に慶長13年(1608)の改修工事の際に築造されたものであることが、さまざまな近世文書に記載されている。「狹山池間数并池山緒覚」(明和3年・1766『田中家文書』)には、東伏樋(中樋のこと)は長さ39間、内法1尺5寸6分で、樋大工小和田宗右衛門、同久兵衛によって作られたことが書かれている。中樋造構からは土器などの遺物はまったく出土しなかったが、奈良国立文化財研究所の光谷拓光氏に依頼して中樋造構層板の年輪年代を測定していただいたところ、表皮は残っていないものの一番外側の年代は1566年という結果を得た。このことからも中樋造構は慶長13年に作られたことは確実である。田中家文書などには近世の狹山池の改修に関する古文書が大量に残されているが、中樋、西樋の最下段の取水口については改修の記録はない、今回の調査で検出された中樋造構は西樋造構とともに慶長の改修で作られ、それ以後昭和の改修まで連続的に使用されてきたものと考えられる。

今回の中樋造構の発掘調査は、狹山池の歴史研究にとって貴重な多くの資料を与えた。近世に関する成果として、まず近世の尺八樋の一部が出土し、尺八樋の復元が具体的に可能となったことがあげられる。これまで文献史料によってしか分からなかった慶長の改修が造構によって確認されたことの意義は大きい。また船材の使用や、マキナワ技法によって造船技術が近世初頭の土木技術に応用されていることも明らかになった。中世に関する成果としては、まず重源狹山池改修碑の発見があげられる。碑文の内容によって、これまで「南無阿弥陀仏作善集」の短い文章で知るしかなかった鎌倉初期の改修の様子を、具体的に知ることができるようになった。宗教と開発の関係、職人集団の性格、モノとしての重源狹山池改修碑の意味などは今後解明されなければならない課題であろう。また重源狹山池改修碑と一緒に出土した多くの石棺もまた、中世の土木技術の実態をわれわれの前に示してくれた。遺物としての石棺からは、その石材の産地は鑑定できても、どの古墳から搬送されたのかは知ることはできない。産地→古墳→狹山池という石棺の旅の過程を今後とも解明していくなければならない。さらに僧侶である重源が石棺を樋管として再利用したことの背景にある宗教観は、今日のわれわれの理解をこえるものがあり、興味深い。この点も今後の問題となろう。また石棺はもちろん、石棺そのものとしても貴重なものである。われわれは普段狭くて暗い石室のなかで石棺を見ることが多いが、中樋造構出土の石棺は詳細な観察が可能であり、今後の石棺研究に益することが大きい。

中樋造構が以上のように多くの歴史的な情報をもたらしてくれた背景には、建仁や慶長の改修で、石棺や船材が再利用、再々利用されたことがある。このことによって近世初頭の造構である中樋造構は、中世から古墳時代にいたる歴史的重層性を付加されたのである。

II 東樋上層造構

1 調査の経過

昭和の大改修以前に狹山池には中樋と西樋という2つの樋が存在していたが、今回の一連の発掘調査の結果、その造構については詳細を知ることができた。しかしこの2つの樋のはかに北堤の東北側には「金樋尻」という小字名があり、カナビという金属製の樋が存在したという伝承が地元には存在した。またいくつかの近世文書や絵図にもカナビの記載がみられる。狹山池調査事務所でもこの伝承を重視し、池尻遺跡⁽²⁾の試掘調査などでもその存在を念頭において事前調査を実施したが、結局該当する造構は発見することができなかった。ところが1994年の初冬、ダム工事の一環として北堤の掘削を実施していたところ、突然北堤の東端において木製の樋が検出された。樋の内部は空洞であったためにビニールパイプなどを突っ込み、その長さを確認したところ、30m以上に達することが明らかになった。ダム工事の建設サイドとしては空洞が堤体内に存在することは設計上認められないとの判断もあり、協議の結果、堤体を開削し、発掘調査および造構の取り上げを実施することとなった。

発見当初は樋は一本のみ存在すると考えていたが、調査のために掘削を進めるうちに、上の樋の直下にもう1本の樋が存在することが判明した。当初この造構については伝承を重視しカナビ造構と呼んでいたが、上下2本の樋管が確認できたために、中樋造構・西樋造構との整合性も鑑み、東樋造構と呼称することとした。上下2本の樋管については上を上層造構、下を下層造構として区別した。調査は1994年11月から1995年5月まで行った。また1995年2月19日には現地説明会を実施した。

なお、東樋造構の発掘に際しては北堤を断ち割ったので、その断面についても実測、写真撮影などを行ったが、その詳細については中樋付近の断面調査の結果とあわせて第1節で報告している。

2 造構の概況

上層造構は北堤に対して垂直に設置されており、造構の全長は72.8mに及んだ。中樋造構・西樋造構の場合は長く使用してきたことが、逆に災いとなって昭和初期の改修のときに大半が撤去され、取水施設の一部のみが残存しただけであったが、東樋上層造構は幸いにして取水部から排水部までの全体が残されていた(付図4参照)。

上層造構の東西方向断面は図58に示す通りである。A-A'-A''が上層部設置のための掘削面である。上端幅390cm、底幅120cm、深さ160cmの溝状の掘削をまずおこない、固く締めたシルトや粘土で

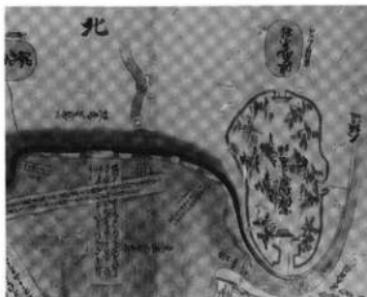


写真 27 狹山池絵図(田中家文書)

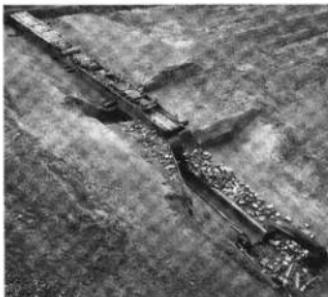
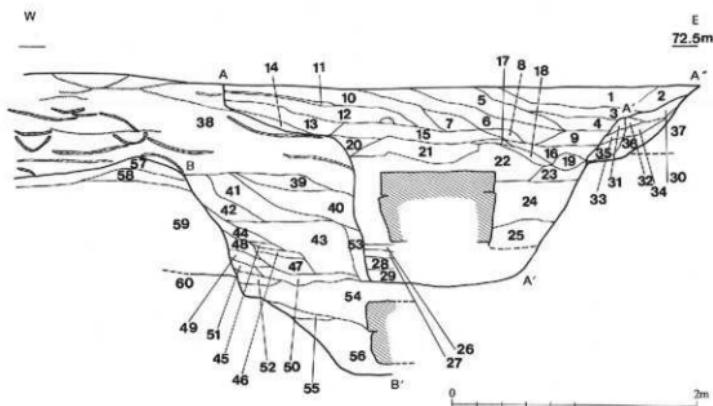
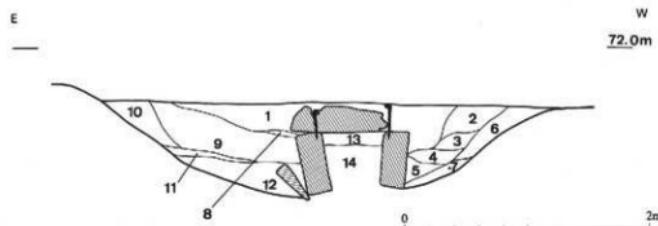


写真 28 上下二本の樋管



- | | | |
|----------------------|--------------------------|------------------------|
| ① オリーブ灰色シルト | ⑫ 黄褐色シルト | ⑬ 黄褐色粘土 |
| ② 緑灰色砂疊層 | ⑭ 斜オリーブ色粘土 | ⑭ 青灰色シルト (2cm程の礫を多く含む) |
| ③ 暗灰色シルト | ⑮ 灰青色シルト | ⑮ 黄褐色粘土ブロック |
| ④ オリーブ灰色シルト | ⑯ 灰褐色シルト | ⑯ 黄褐色粘土上 |
| ⑤ オリーブ灰色シルト | ⑰ 灰褐色細砂 | ⑰ 黄白色砂 |
| ⑥ オリーブ黄色粘土 | ⑱ 灰褐色細砂 (礫を含む, よくしまっている) | ⑱ 黄褐色粘土 |
| ⑦ 暗オリーブ色粘土 | ⑲ 灰褐色シルト | ⑲ 灰白色砂 |
| ⑧ 灰灰色シルト | ⑳ 灰褐色細砂 (礫を含む, よくしまっている) | ⑳ 黄褐色シルト |
| ⑨ 紅灰色シルト (2cm程の礫を含む) | ㉑ 紅褐色シルト | ㉑ 青灰色シルト |
| ⑩ 灰灰褐色シルト | ㉒ 黄褐色粘土ブロック, 青灰色ブロック | ㉒ 黄灰色砂 |
| ⑪ 紅灰色シルト (2cm程の礫を含む) | ㉓ 黄褐色粘土上, 黄灰色ブロック | ㉓ にまい青灰色細砂 |
| ⑫ 黄灰色シルト | ㉔ 灰色砂 | ㉔ 黄褐色粘土 |
| ⑬ 紅灰色シルト (2cm程の礫を含む) | ㉕ 紅褐色砂疊層 | ㉕ 黄灰色細砂 |
| ⑭ 灰灰色粘土 | ㉖ 灰褐色シルト | ㉖ 青褐色粘土と青灰色粘土のブロック |
| ⑮ 暗オリーブ色粘土 | ㉗ 灰褐色粘土 | ㉗ 深灰色砂 |
| ⑯ 黄灰色シルト (礫を多く含む) | ㉘ 黄褐色粘土 | ㉘ 黄灰色粘土 |
| ⑰ 暗灰色シルト | ㉙ 灰褐色細砂層 | ㉙ 黑褐色有機物層 |
| ⑱ 暗灰色シルト (2cm程の礫を含む) | ㉚ 黄褐色粘土 (微風化, 有機物の跡を含む) | ㉚ 暗灰色砂 |
| ⑲ 塗オリーブ色粘土 | ㉛ 灰褐色シルト (2cm程の礫を含む) | ㉛ 灰褐色シルト |
| ⑳ 灰褐色細砂 | ㉜ オリーブ灰色シルト | ㉜ 灰白色砂粉 |

図 58 東橋上層・下層構造東西断面図 付図 4a 地点 (斜線は散在層) (S=1/40)



- | | |
|--------------------|-------------------|
| ① 暗灰青色砂質土 | ⑤ 暗灰青色粘土 |
| ② 暗灰青色粘土 (液化褐色) | ⑥ 暗青色粘土 (-一部酸化褐色) |
| ③ 深灰青色粘土 (②よりやや暗い) | ⑦ 暗灰青色シルト |
| ④ 暗青色粘土 | ⑧ 灰灰褐色 |
| ⑤ 暗青色粘土 | ⑨ 暗灰青色粘土 (-一部酸化) |
| ⑥ 暗褐色砂質土 (濃多い) | ⑩ 暗灰青色砂質土 |
| ⑦ 暗褐色粘土 | ⑪ 暗灰青色砂疊層 |

図 59 東橋上層構造東西断面図 付図 4b 地点 (S=1/40)

30cm程度埋め戻し、その最上層には砾を含んだ細砂を敷いてその上に樋管を設置していた。樋管の周囲は粘土質の土で巻きその上に堤防の土が積まれている。この断面の場所では上層遺構にともなう掘削の時には下層遺構の上面にまで至っていないが、取水部などでは完全に下層遺構の面まで掘削が及んでいる。上層遺構の調査に際しては、樋管周囲の埋土を除去し樋管を露出させ、実測、写真撮影等の作業を実施した。

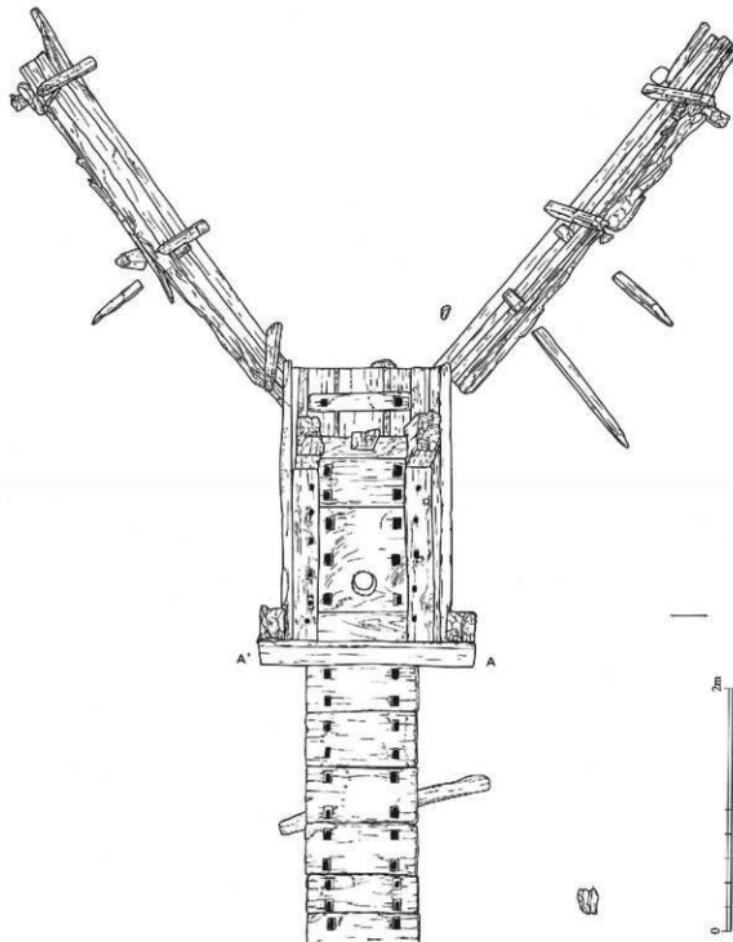


図60 東橋上樋遺構取水部平面図 (S=1/40)

3 取水部

東柵上層造構は大きく取水部・柵管・排水部の3つにわけられる。取水部は中柵、西柵と同様に4本の柱を地中に打ち込み、その間に板材を張って箱状にした部分と柵管の一部、さらに前方に八の字型に突き出した部分からなっている。

箱部分の長さは248cm、幅184cmであった。柱は4本ともに最上部が欠損しているが、もっとも高いものは柵管の底板から344cmであった。ただし後方の柱は柵管の底板よりさらに58cm地面を掘削して埋め込んでおり、この部分まで含めると残存長は394cmとなる。後方の柱にはほぞ穴があけられこの部分の柵管の下側を通る枕木に接続していた。この柱を埋め込むための掘削によって下層造構の上面が出土し、柱の基礎として下層造構を利用していた。

また前方の2本の柱は柵管の下部の部分で終わっていた。取水部の前方には板材は張られておらず、両側面と後方の3面に板材を縦方向に並べて張った壁が存在した。側面の板材(壁板)は前方の2本の柱の外側、および後方の2本の柱の内側に釘によって接続されていた。つまり4本の柱は後方がやや開いた台形状に配置されることになる。壁板は東側が5枚、西側が6枚で、前方、後方の柱に2箇所ずつ鉄釘で固定している。後方の板は6枚。板の厚さは8cmであった。

東柵上層造構が西柵造構・中柵造構などと構造の上で大きく異なるのは、尺八柵ではなく一段のみの柵であることである。また柱と板材を組み合わせた箱型の構造をもつことは同じであるが、組合せ方や柵蓋の設置法の点で両者とは差がある。西柵造構・中柵造構では後方の2本の柱の内側を彫りこんで、そこに水門を設置する構造になっているが、東柵上層造構では前方の柱に同様の施設を設置していた。そのために柵管が箱形部分の内部にまで延びていた。さらに東柵上層造構では柵管の上面にも直径18cmの穴があけられていた。これは他の2つの柵ではみられなかったものである。おそらくここに先端を尖らせた杭(男柱)を差し込み、それを上下させることによって水の出入を行っていたと考えられる。つまり東柵上層造構においては柵管上面の穴と、前方の柵蓋の二つの取水方法が存在し

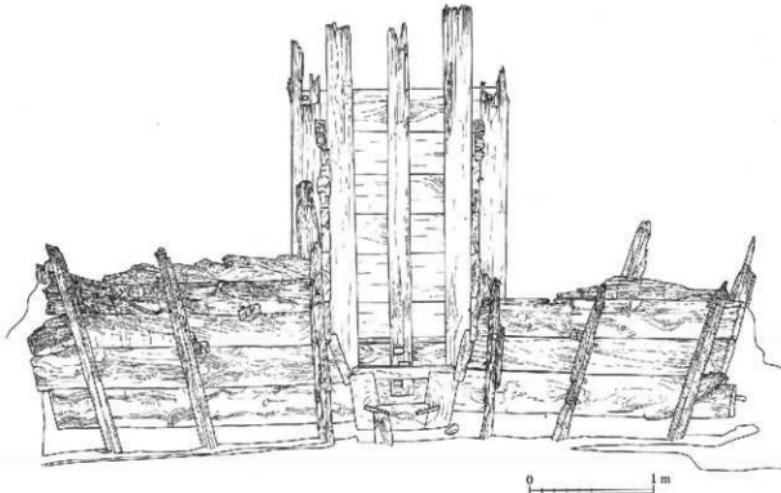


図61 東柵上層造構取水部立面図(南から)(S-1/40)

たのである。現在の溜池を観察するかぎり、日常的な水の出入は上面の穴を利用して行い、水が極端に少なくなった時や、樋管の掃除の時には前面の樋蓋を利用したことが推測できる。

東樋造構の取水部、樋管はすべてヒノキ材を用いているが、樋蓋のみはクスノキ材を使っていた。樋蓋は縦 54cm、最大幅 78cm、厚さ 18cm で、下から 28cm については樋管に彫りこまれた溝にはまるように加工されている。引き上げの便のために中心に残存長 312cm、幅 18cm の柱が付いている。これは 3 本の鉄釘によって、樋蓋と接続されていた。なお取水部の箱形部分の後側の板にはいくつか墨書きがみられた。この墨書きについては後述する。

取水部の前方には八の字型に開いた據壇状の造構が存在した。同様のものは中樋造構においても検

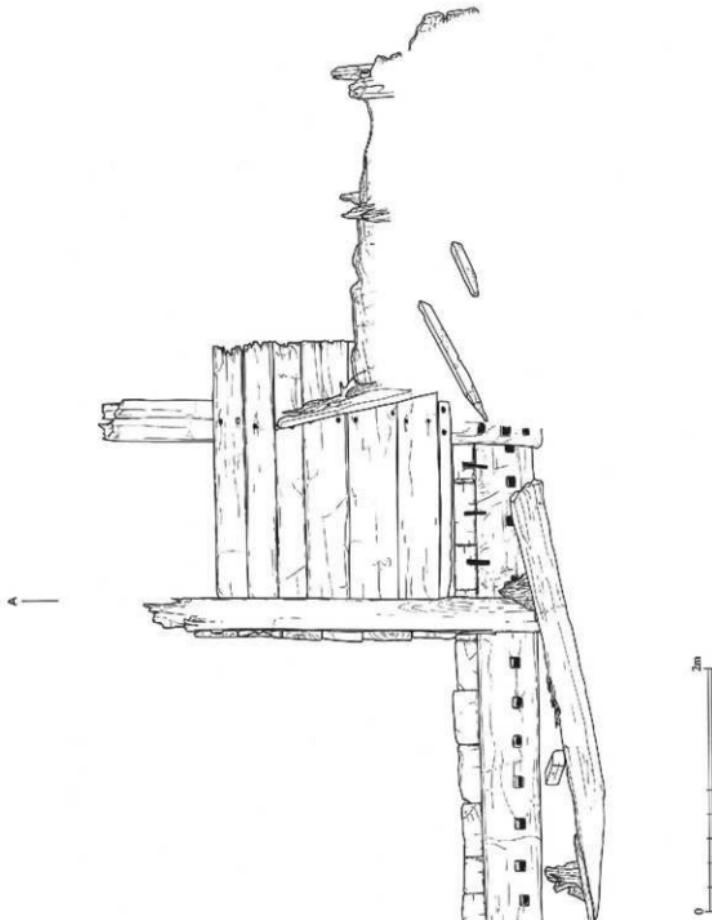


図 62 東樋上層造構取水部立面図（西から）(S=1/40)

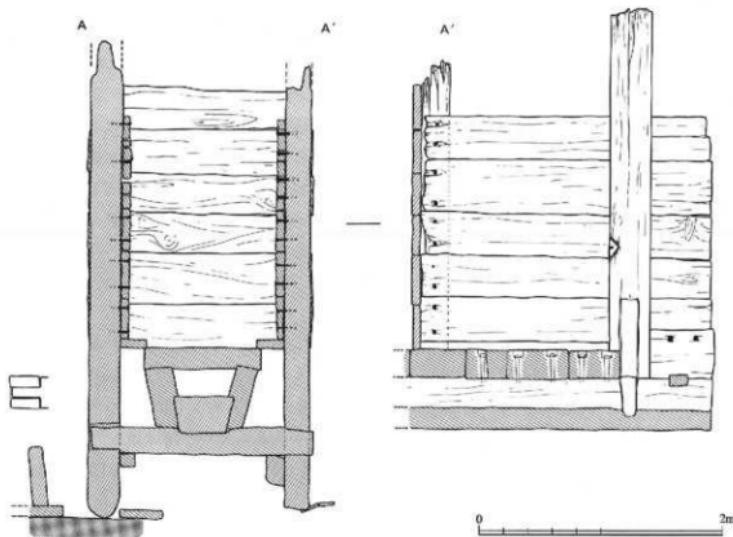


図 63 東橋上構造取水部断面見通し図（記号は図80に対応）(S-1/40)



写真 29 東橋上構造取水部（上から）



写真 30 柱材のはぞ穴



写真 31 取水部の基礎にされた東橋下層構



写真 32 取水部上面の穴

出されており、近世文書の表記にしたがって扇板と呼んでおきたい。左右の扇板は樋管の延長方向からそれぞれ外側に35度開いた角度をもっている。西側は5枚、東側は4枚の板材を縦方向に並べて壁状にしたもので、両側とも一番上の板は破損が激しいが、残存高は西側が143cm、東側が118cmであった。扇板の長さは西が370cm、東が368cmである。両側ともに上流側にむけて斜めの状態で立てられており、地面に対する角度は平均で82度であった。板を立てるために西側には3本、東側には2本の杭が打たれている。また板の背後は堤体の土が入れられていたが、扇板が前に倒れるのを防ぐために、西側で2本、東側で1本の杭が打たれていた。これは板に穴をあけ、穴を通して杭を背後の土に打ち込んだもので、板より杭の頭を少し出し、その部分にピン状の小杭を打ち込んで板と接着していた。この杭は現在でいうアンカーボルトの役割を果たしていたと思われる。

4 樋 管

東樋上層の樋管は材木を図77-①のように接続して作ったものである。なお以下の叙述における樋の部位の名称については中樋構造の項で示した図34に従っている。樋管の砂蓋は側板の上にのり、側板は敷板を挟むように立っている。側板は敷板の鉛直方向に対して左右とも15度ずつ外側に開いているため、断面は上方が開いた台形である。多少のバラツキがあるものの外縁は高さ33cm、上辺48cm、下辺は36cm。また内部は高さ11cm、上辺は27cm、下辺は16cmである。内部の断面積は344平方cmとなる。

砂蓋は取水部内に3枚、樋管部には164枚残存していた。ただし下流側の砂蓋は相当腐食してくなっていた。また年輪年代法のサンプルのために付図4の作成時には2枚分を取りのぞいている。

砂蓋の長さは85cm程度のものが多くバラツキは少ない。また砂蓋の幅は最大が68cm、最低のものが20cmで、40cm程度のものが多い。砂蓋は上方から左右2本ずつの鉄釘を打ち、側板に固定していたが、幅の大きなものには左右3箇所、小さなものには1箇所ずつ釘を打ったものがみられた。釘を打つときは12cm×7cm程度の大きさの穴をまずノミで彫り、そこに鉄釘を打ち込んでいた。また鉄釘のまわりにヒノキの樹皮を巻き付けて打ち込んだものがみられた。また取水部のなかに入りこんでいる3枚の砂蓋については鉄釘だけではなく、側面に鎧を打ち込んで両側板に固定している。さらに砂蓋には設置する順番を書いたと思われる墨書きや、刻印などがあったが、これについては後述する。

側板は長さ厚さ57cm、幅47cmの長い板材を連結したものである。長さは最も長いものが737cm、短いものは487cmである。材木は東西とも10枚であるが、両側の側板は同じ場所で連結されているのではない。つまり東西の側板を異なった場所で連結させることによって横方向への強さを確保した

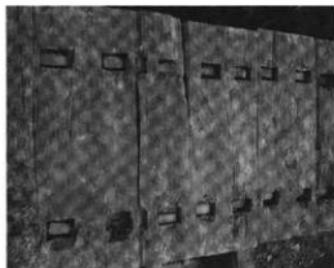


写真33 砂蓋に打たれた釘



写真34 側板の接続部

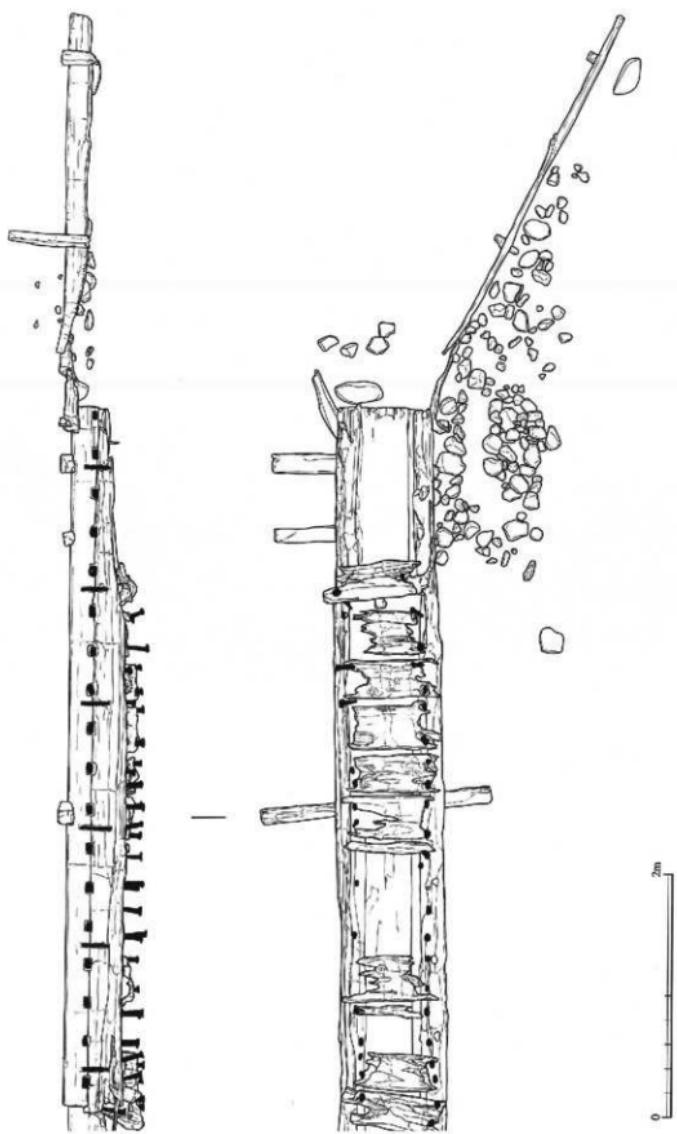


図 64 東橋上解釈構排水部平立面図 ($S=1/40$)

と考えられる。側板は平均37cm間隔で鉄釘が打たれ、敷板に固定されている。また側板同士の接続方法は取り上げ時にも砂蓋を外さなかったために詳細は不明であるが、接続点付近では下流側の側板に3本から5本の釘が打たれており、側板がソケット式に組合されている可能性がある。また側板にはその形状から考えて船の材木を再利用したと考えられるものが2点あった。この材には犬や魚の落書きが墨書きで施してあった。他の材木にも墨書きがみられたが、これらは板を組む際の方向と順序を示したものと思われる。西側の側板のうちもっとも下流側のものは二つに割れており、それを鎌で補修していた。この補修が築造当初のものであるのか、後世の補修であるのかは不明であるが、この部分の破損の激しさを考えると、後世のものである可能性が強いだろう。

樋管のうち排水部から715cmまでの部分は板の腐食が甚だしく、釘も錆びていた。これは東樋敷設後ある時期までこの部分が堤の外に露出していたため痛みが激しかったためと思われる。樋管の先端から損傷が始まる部分までの長さは55.7mであり、この長さが東樋上層造構築時のこの部分の堤の底幅であると考えられよう。また樋管の敷板の下には25本の角材が敷かれていた。これは樋管の沈下などを防ぐために敷かれた枕木であると思われる。角材は平均160cm程度の長さであった。



写真35 痛んだ砂蓋(1)



写真36 痛んだ砂蓋(2)

5 排水部

排水部は東側に長さ364cmの角材が据えられていた。この角材は樋管の延長方向に対して25度外側に開いている。西側にも元来は角材が設置されていたと思われ、元来はハの字型に開いた平面形であると考えられる。角材の裏側にはこぶし大の石が敷き詰められていた。これより下流は工事のために掘削されており調査はできなかったが、東側の段丘の裾にそって北側に水路が続いていたと思われる。

6 墨書き

東樋上層造構においてみられた墨書きは、取水部の背面の板材の墨書き、樋管の側板、樋管の砂蓋の3つの部位に残されていた。以下順にそれぞれの部位の墨書きについて述べていきたい。

取水部背面(下流側)には全部で6枚の板材が張られていた。図65-1～4はいずれもこの部分に書かれていた墨書きである。すべて板材の長さ、幅、厚さが書かれている。完全に読むことができる-4には「厚さ二間、はゝ一尺一寸、あつさ二寸」と書かれているが、現状の板は幅、厚さの規模はほぼ合致するもの、長さは一間にも満たず墨書きの内容には合わない。記載の内容の板を切断して、この部分に利用したものと思われる。

樋管の両側板には、側板の番号を示す墨書きが記されていた。図65-5は取水部から数えて3枚目の西



1



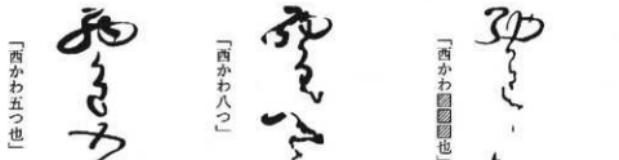
2



3



4



5



6



7

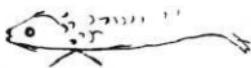


8



9

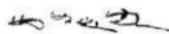
図 65 東経上層遺構墨書きトレース図 (1)



10



13



11



12



14



15



16



17



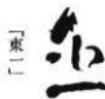
18



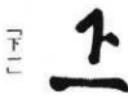
19



20



21



22



23



24

図 66 東通上層遺構墨書トレイス図 ②

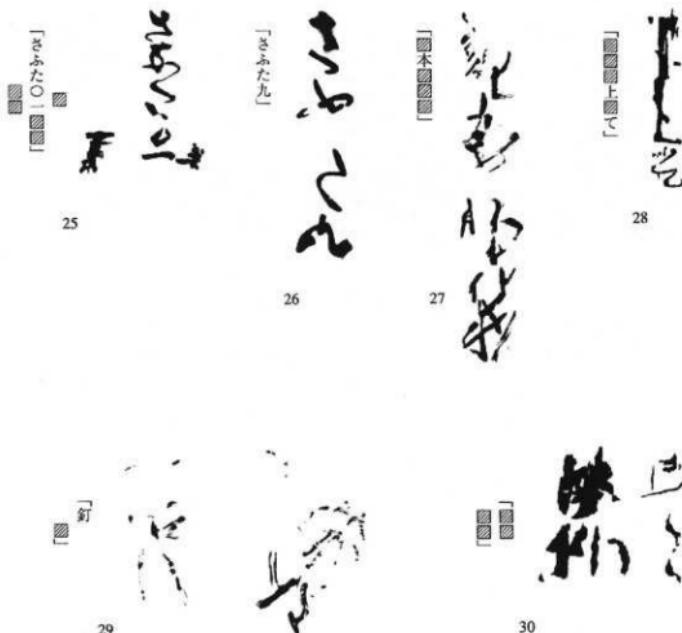


図67 東柵上層造構墨書トレース図(3)

側板の墨書であるが、「西三つ也」と記されている。同様に4枚目の側板には「西かわ四つ也」と書かれている。東側の側板にも同じような内容の墨書がある(図65-13、-15)。後述する砂蓋の墨書と同じく、側板も事前に製材や切断を済ませて現地で組合せたと考えられる。先にも述べたように側板のなかには船板を再利用したと思われるものが存在した。図66-10、-11、-12はいずれも船材の転用材である西側の2番目の側板にかかれていた絵である。-10は魚、-11は四匹のねずみ、-12は犬などの動物である。この絵は落書きであると思われるが、樋の建築時に描かれたものであるのか、あるいは船として利用されていた時に描かれていたものであるのか確定はできない。ただ船材だけにこのような落書きがみられたことから船の時にかかれたものである可能性が強いだろう。

砂蓋には設置の番号と思われる墨書が記されていた。東柵上層造構の場合樋管は取水部のなかにまで伸びていたが、この部分に3枚の砂蓋が使われている。この部分、および樋管部の取水部側から27枚目、つまり合計30枚については砂蓋の墨書による番号はみられない。28枚目に「〇」(図66-17)、29枚目に「二」(図66-18)という文字が記され、以下順に「二」「三」と数字が「卅」まで書かれている。文字の並びからみて28枚目の「〇」は現在の数字の零に対応する記号と思われる。「卅」の次は数字の頭に五をつけた「五」という字が記されており、以下「五」「五」と続き、「卅」で終わって

表8 樋管砂蓋の墨書

場所	内容
取水部内(3枚)	記載なし
砂蓋1～27	記載なし
砂蓋28	〇
砂蓋29	二
砂蓋30～58	二～卅
砂蓋59～88	三～卅
砂蓋89～118	三～卅
砂蓋119～	二～卅



写真37 墨書(奥)

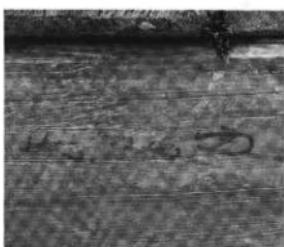


写真38 墨書(ねづみ)

いる。五の次には「東」の字が頭についた数字が「三」から「弄」まで並んでいる。ついで「下」字と漢数字の組合せが砂蓋119からみられるが、排水部に近づくと砂蓋の痛みが激しく、砂蓋138より先は文字が読み取れない。これも30枚が一単位になると考えれば、砂蓋146が「弄」となる。砂蓋147よりも下流側はさらに痛みがひどく、字の痕跡すら認められず、また元来の枚数も特定は困難であるが、長さから考えて、築造当初は排水部までに30枚の砂蓋があったと考えられる。これらの砂蓋の番号を示す墨書きは砂蓋の東側のはば同じ場所に書かれていて、きわめて規則正しい配置を示しているが、それ以外にもいくつか墨書きがみられる(図67)。25は砂蓋29に記された墨書きで「さふた三」と記されている。このことから近世史料などにみられる「砂蓋」が「さふた」と発音されており、樋管の蓋材であることがわかる。

砂蓋の番号墨書きによってある程度樋管部の築造過程が推測できる。まずひとつ確かなのは樋管の材料がどこか別の場所で切断され、番号を付けられて、現地で組み立てられたことである。また砂蓋の墨書きは30枚が一単位になっており、なんらかの作業分担があったことがわかる。「東」「下」「五」などの字の意味はまったく不明であるが、30枚ごとの単位は全部で5組あり、東樋上層遺構を作った樋大工の下に少なくとも5組以上の労働単位があったと思われる。

7 刻印等

砂蓋の部分には多くの刻印が見られた(図68・69)。東樋上層遺構の刻印の大半は、金属でつくられた印を槌で打って刻んだものと思われ、焼印ではない。また1、2、3、19などは彫刻刀のようなもので木に彫られたものである。14は針状のもので刻まれている。打たれた刻印は大きく分類して、分銅型のものと丸型のものに分類できる。中に字が書いてあるもの(4、11)もあるが、意味は不明である。また5のように的に矢があたった形のものもみられる。4と24のように異なった場所にあっても、もとの印は同じと思われるものもある。刻印は東樋上層遺構の施工に当たった職人集団や、あるいは材木の供給元を示す可能性があるが、残されたデータだけではそれを確定することは困難である。これらの刻印は砂蓋にまんべん無くみられたのではなく、取水口から墨書き番号が始まるあたりに集中的にみられた。

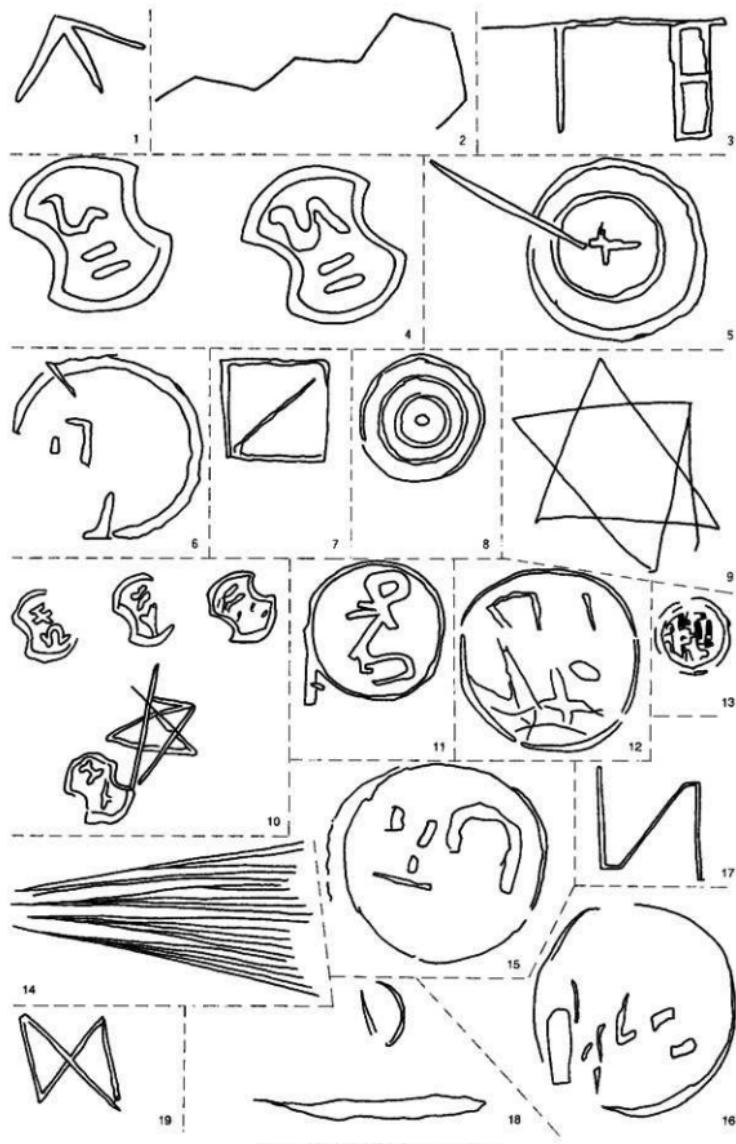


図68 東洋上層遺構刻印トレース図(II)

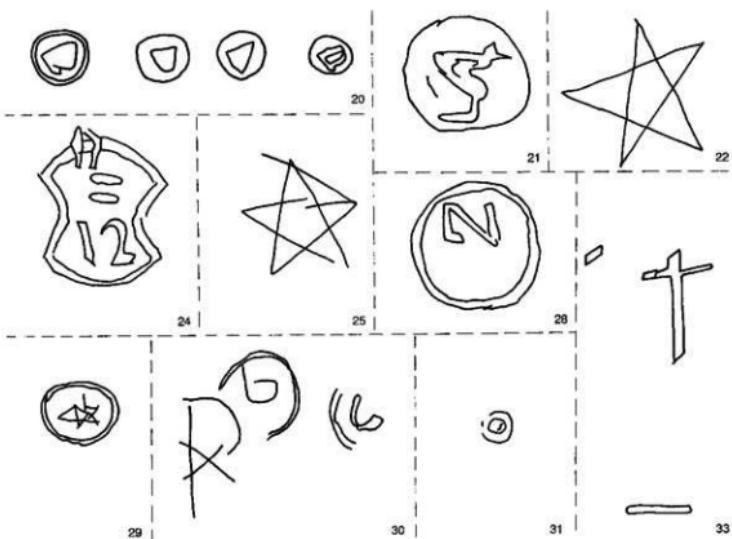


図69 東櫛上層造病刻印トレス図(2)

8 遺 物

東櫛上層造構に直接随伴する遺物は見られなかったが、取水口付近の堆積物あるいは上層の桶管の埋土中からいくつか遺物が検出されている。図70の1、2は須恵器杯蓋とともに桶管の埋土中から検出されている。1は8分の1が残存しており、口径12.2cm、残存高2.9cm。天井部にヘラ削りが見られる。2は全体の3分の1が残存しており、口径10.6cm、残存高3.0cmであった。3も桶管埋土中からの山上で、須恵器杯身。4分の1が残存しており、口径9.6cm、器高3.3cm、受部径11.6cm、立ち上がり高0.6cmである。4は取水部付近の堆積物中から検出された染付皿。内面外周に雷文、底部に風景を描き、外面には唐草文を描く。口径13.6cm、器高3.5cmであった。近世中期の所産であろう。5は須恵器蓋の口縁部。口径52.8cm、残存高17.2cm。

造構の規模に比較して遺物の数は非常に少ない。1～3の須恵器はいずれも田辺編年TK209型式に含まれる須恵器であり、また4の磁器は近世のものである。東櫛造構を発掘するために北堀を開削したが、断面を観察すると須恵器の碎片を多く観察することができた。これは堤体の材料として須恵器窯近くの土を利用したためであろう。今回検出された須恵器もこのようにして付近の土砂採取地から運ばれてきたものであると考えられ、東櫛上層造構の年代を決定する資料としての性格は持たないと思われる。

9 小 結

先に述べたように、遺物から東櫛上層造構の年代を確定することはできない。東櫛上層造構は尺八櫛ではないが、取水部が箱型の構造をもつことや、桶管の組み合わせ方のような構造面、あるいは鉄釘の形態などの技術面において東櫛造構・西櫛造構と類似している。また今回検出された刻印の中には西櫛造構において検出されたものも見られる。よって東櫛上層造構の築造年代は慶長13年(1608)と

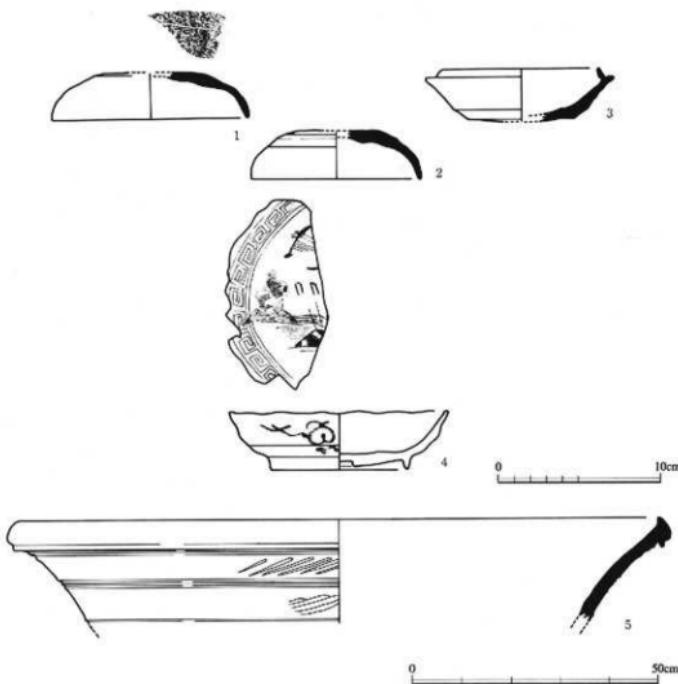


図70 東堀上層遺構出土遺物実測図

みてよいだろう。奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に依頼し、砂蓋2点の伐採年代を年輪年代法によって鑑定していただいたところともに表皮は残っていないものの一番外の年輪の年代は1600年と1554年という結果を得た。この結果からみても東堀上層は慶長の改修のときのものとみて問題はないだろう。享保5年(1720)に書かれた「狹山一件之留書」(京都大学総合博物館所蔵杉山家旧蔵文書)には「東堀此堀鉄之由申伝候、唯今ハ埋り水之通路無御座候」という記載があり、近世中期にはすでに使用されず埋まっていたことがわかる。埋まった原因は元和6年(1620)5月21日の洪水に際しての被害によるものと考えられる。「狹山池改修誌」が引用する「田中氏記録」には「元和六年六月洪水にて上未申烈風強堤浪打丑寅の方流失仕元狹山藩廊中西林之各字口腹之三ヶ所當時池也」という記事がある。これによってこの年の洪水で、堤の丑寅の方(東北)が流出したことがわかる。その被害は大きなもので、「氏朝自撰家譜」(北条家文書)によれば、この洪水で「蛙(クチバミ)池」(現在の御庭池)ができるといった。その被害の場所から考えて、この元和6年の洪水によって東堀は洪水によって流されてきた砂に埋没し、機能を失ったと考えられよう。東堀上層遺構は慶長13年(1608)から元和6年まで10年あまりしか使用されなかったことになる。

ついで東堀上層遺構の機能について考えたい。東堀上層遺構は西堀遺構や中堀遺構とは異なり一段のみの構造(底堀型)であり、また設置された位置も底のレベルが標高70.7mと他の堀よりもずいぶん高い(中堀は68.1m、西堀は66.6m)。のことから東堀が供給できる水量は他の堀よりも少なく、し

たがって灌漑範囲も狭かったものと思われる。東側から北側に続く水路は、グランド造成や宅地建設に伴う改変が大きく、検出することができなかつたが、地形から考えて段丘崖の裾にそつて北流していたものと思われる。したがつてその灌漑範囲は狭山池と太満池の間の低地の東部分に限定できるだろ。図71は狭山池のダム工事が開始される以前の1987年に調査した池尻地区の溜池ごとの水掛りである。

この地域の農業用水は基本的には地形の制約を受け、南から北に流れるが、東側の段丘上に立地する御庭池から流れる水だけは水路のレベルや堰のたて方によって北から南にいわば逆流するようになつてゐる。御庭池は先にも述べたように元和6年の水害によって段丘上が掘削されてできた池で、それに堤、堰などを整備して溜池としたものであるが、その成立事情、時期から考えて、この御庭池の灌漑範囲が概ね近世初頭の東側の灌漑範囲であったと思われる。



図71 狹山池北側の水掛り図
(1987年調査)

III 東柵下層遺構

1 遺構の概況

上層遺構の発見後、発掘調査を実施するなかで上層遺構のほぼ直下にもう一本樋管が存在することが明らかになった。上層遺構の横の数箇所でトレーナーを掘削したところ下層遺構も上層遺構とはほぼ同じ長さをもつことが判明した。そこで上層遺構の発掘調査終了後すぐにその取り上げ作業を実施し、下層遺構の発掘にとりかかった。下層遺構は全長 72.65m。その大半をしめる樋管の長さが 68.25m であった。遺構は上層遺構と同じく取水部・樋管・排水部に分けられる。また樋管は築造当初のものと、後世に延長された部分に分けられる。

下層遺構は図72に明らかなように地山を幅 150cm、深さ 80~100cm ほど掘りこみその中に敷設されたものである。樋管は粘土系の土で埋めてあるが、これはもちろん樋管からの水漏れを防ぐためであろう。その上に北堤堤防の盛土を施しているが、この盛土は敷葉工法などを施した一番最初の堤体であることが南北方向の断面の観察から明らかである。したがってこの東柵下層遺構は狭山池の築造時に布設された一番最初の樋管であるといふことができる。

図73は樋管と堤体断面の関係を示した図である。樋管 1 の部分が堤体のかさ上げに対応したもので

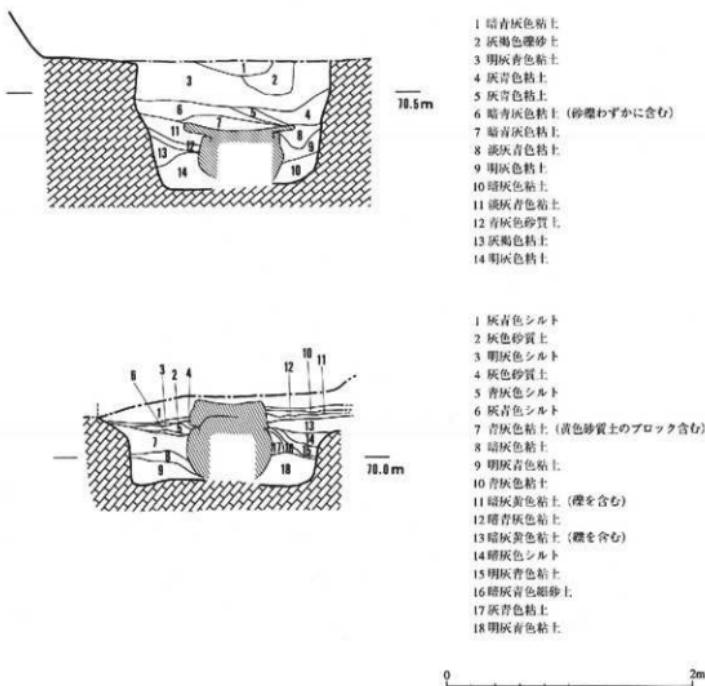


図 72 東柵下層遺構東西断面図 (S=1/40)

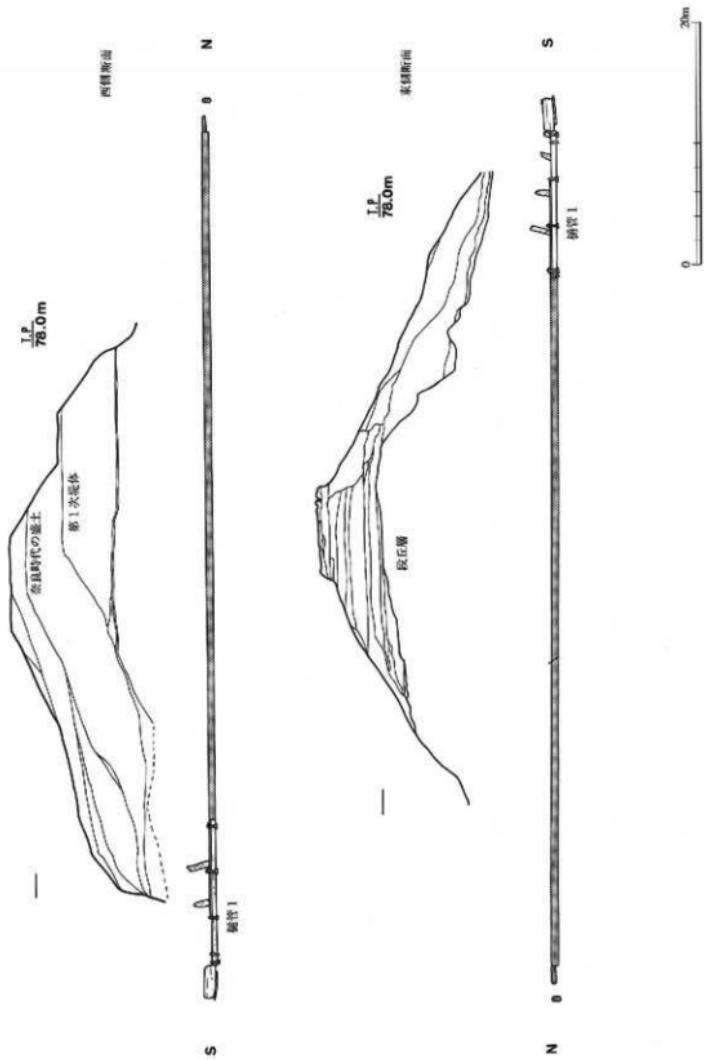




写真39 東詰下層・上層造構と敷葉層の関係



写真40 堤体に見られる滑り痕

あることが読み取れよう。この層は、中樋付近でおこなった断面の調査と照合すると、その規模や敷葉工法などの特色から第10層に対応するものと考えられる。時代的には天平宝字6年(762)の改修に対応する(第1節参照)。したがって樋管1は、天平宝字の改修時に堤防がかさ上げされ堤防基部が池内に大きく張り出した時に延長された部分であると考えられる。また図73の奈良時代の盛土層の下流側の部位では池の方向に堤体土が滑っている状態が観察できる。この部分は南東側の狹山遊園方面から北西方向に流れる小河川が流れていることが断面からわかるが、盛土層はこの小河川をそのまま埋め立てて作られており、きわめて不安定な地盤であった。堤体の滑りがいつの段階で生じたのか明らかではないが、その遠因としてこのような地盤条件が想定できよう。

2 取水部

以下、各部位の細部の説明を行うが、樋管については取水部に近い側から樋管1、樋管2のように呼称することとしたい。

下層取水部は樋管1を利用して作られており、もちろん樋管1と同時代のものである。樋管1は後に述べるよろに奈良時代にそれまでの樋管を延長したものである。築造時の樋管の上流側先端には当然取水部が存在したと思われるが、それを破壊し、その先に樋管を接続して取水部も作り直したものと思われる。したがってこの取水部は築造時のものではない。奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に依頼して樋管1の伐採年代を年輪年代法によって鑑定していただいたところ、表皮は残存していないものの一番外側の年輪は西暦726年であるとの結果を得た。樋管1および取水部の年代を天平宝字6年とする推論にも一応の妥当性が認められよう。

取水部の平面形は長さ324cm、幅382cmの長方形でその中に樋管の先端部が180cm入りこんでいる。樋管は他の部分とおなじく丸太材を断面の3分の2ほどの場所で割り、内側を溝状にえぐったもので、えぐり部分の深さは32cm、幅は42cmである。ところが先端の30



写真41 取水部の平面形



写真42 樋管1の先端部

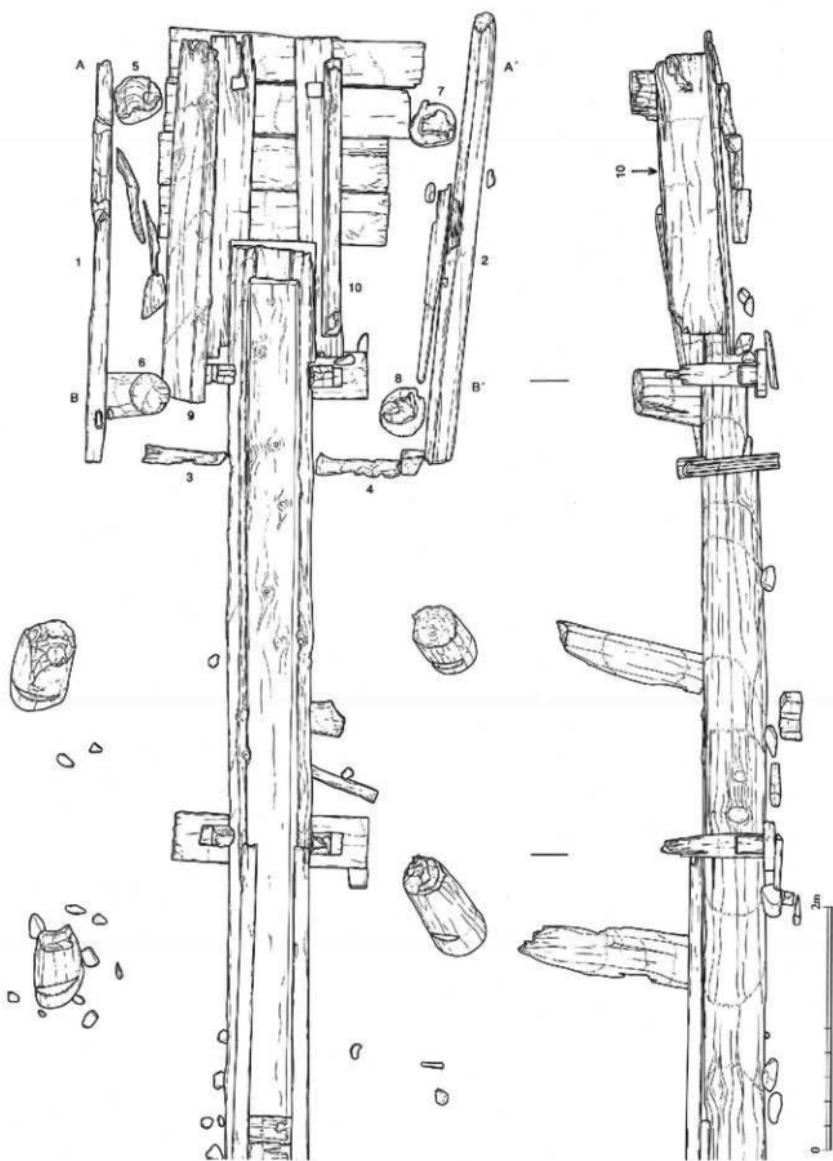


図 74 束桶下層追構取水部平面図 (S=1/40)

cmについてはえぐりが深さ22cm、幅28cmと浅く小さくなっている。樋管の先端に統いて4枚の板材が樋管と直行するように地面に並べられていた。この4枚の板は取水部の基礎の役割を果すと考えられる。その上に2枚の板が40cmの間隔をあけて樋管と平行して敷かれていたが、両板とも角の部分において幅16cm長さ96cm長方形に削られており、その部分に樋管の先端がはまる形となっている。この2枚の板のもう一方の先端には両方とも一辺13cmの正方形の穴があけられていた。この穴は下に敷かれた板材も貫通している。形状からみて柱をたてるために開けられた穴と考えられる。この2つの穴の外側には2枚の長い板材が立った状態で置かれていた。西側の板は厚さ17cm長さ

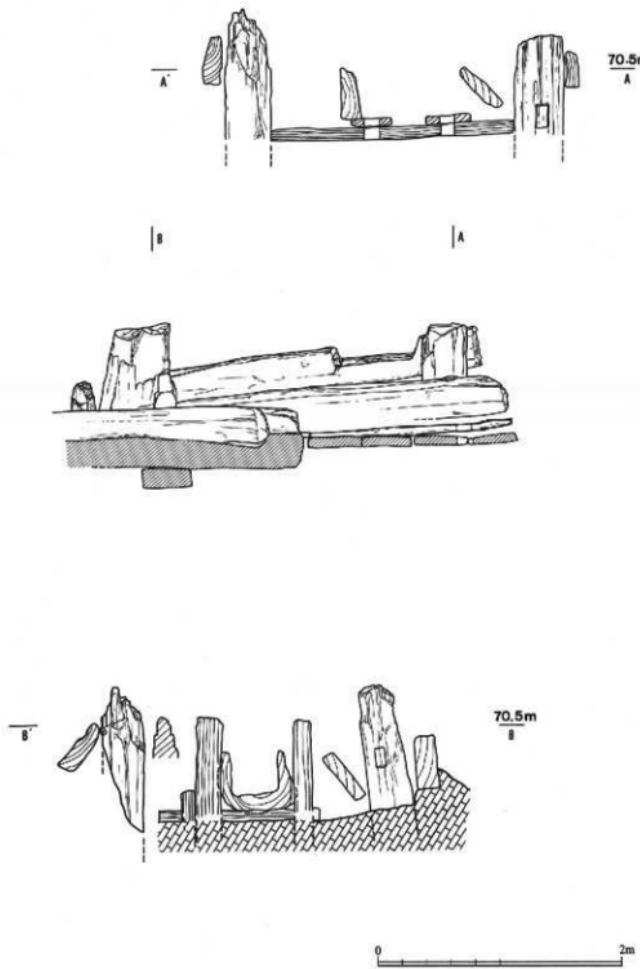


図75 東端下層造構取水部断面見通し図 (S=1/40)

231cm、幅42cmで、直立していたが、東側の板は厚さ13cm、長さ300cm、幅45cmで内側に傾いた状態で出土した。これも築造時には当然直立していたのだろう。

また樋管の先端から104cmの場所(図74のB-B')においては樋管の下に長さ134cm、幅40cm、厚さ10cmの板材が敷かれており、両端に開けられた正方形の穴に2本の柱材が樋管を挟むように立てられていた。このような構造はこの樋管1において4箇所見られ、いずれも砂蓋を押さえこむための装置と見られる。この敷板および樋管のまわりには4本の柱材が立てられ、それにもたせかけるように外側から2枚の板材が立て掛けられていた。またこれと直行するように北側にも2枚の板材が樋管を挟んでたてられていた。こちらのはうはそれを支える柱材は存在しなかった。

東樋下層で検出したような構造では、明らかに池の水を取り入れることは不可能であり、なんらかの上部構造を想定する必要がある。この点については第3章で一応の復元を試みている。試案では材木9、10によって構成される長方形の部分が本来の取水部であり、5~8の柱と1~4の板材によって外側の長方形は樋の取水部を布設するために必要とされた土留めのための施設であると考えている。先述のように取水部の設置工事は天平宝字6年(762)に行われたと考えられる。とすれば7世紀初頭の狭山池築造時からは150年程度経っており、相当な土砂が堆積していたと考えられる。取水部設置のために、工事部分の土砂を除去し、周囲の土砂が流入するのを防ぐ必要がある。土留矢板はそのために設置されたと考えられる。

取水部に使われていた材木の中には明らかに転用材と思われるものが含まれていた。図74は取水部の平面図であるが、1の板材は上面にはぞ穴が見られる。また2、3の板材は側面に溝状のえぐりがあり、扉のような構造である。さらに4~7の柱材についてもぞ穴があげられている。これらの穴や溝は樋の取水部にとっては不要なものと思われ、建築材などを転用したものと考えられる。

3 樋 管

東樋下層遺構は全部で8本の樋管となる。樋管はすべて丸太材を断面の3分2程度のところで割り、内側をえぐったもので、直径は部位によって差があるが75cm程度のものが多い。樋管は少しずつ重なりながら接続するが、接続部分までの各樋管の長さは表9のとおりである。また樋管財の樹種は1のみがヒノキで2~8はコウヤマキであった。1のみ樹種が異なるのは先述のようにこれが奈良時代の改修工事にともなうものだからである。

また樋管の接続方法にもいくつかの類型が見られた。樋管1と2の接続部は2の先端部を切断し、そこに樋管1をつなぎ、接続部には樋管を挟むよう2本の角材を立てている。また底部にも板材を挟んでいる(図76-1)。この接続法は1箇所しかみられない。樋管2と3、3と4、4と5においては、両方の材の端部を削り、上流側の材が下流側にかぶさるようにして、両者をソケット状に組合わせる方法が採られている(図76-4、-6、-9)。これはいうまでもなく樋管内を流れる水がもれないと工夫である。

表9 東樋下層遺構の樋管材・蓋板材

樋管	長さ(cm)	樹種	蓋板	長さ(cm)	樹種
1	1,323	ヒノキ	1	3,376	コウヤマキ
2	995	コウヤマキ	2	4,380	コウヤマキ
3	725	コウヤマキ	3	4,010	コウヤマキ
4	992	コウヤマキ	4	4,016	コウヤマキ
5	572	コウヤマキ	5	4,192	コウヤマキ
6	865	コウヤマキ	6	4,014	コウヤマキ
7	830	コウヤマキ	7	3,252	コウヤマキ
8	522	コウヤマキ			



写真43 砂蓋を押さえるための柱

ろう。樋管5と6、7と8の合わせ目についても底部の接続方法は同じであるが、側面に両側から板材をたて、その外側から板材を水平方向にあてている。この板材については鉄釘で2本の樋管に接着している。樋管6と7の合わせ目部分には、たて方向の材が見られず、樋管同士を上流が下流の上になるように接合し、側面の両側から2本の板材をあて、それを鉄釘で樋管に鉄釘でとめる方法を探っている。

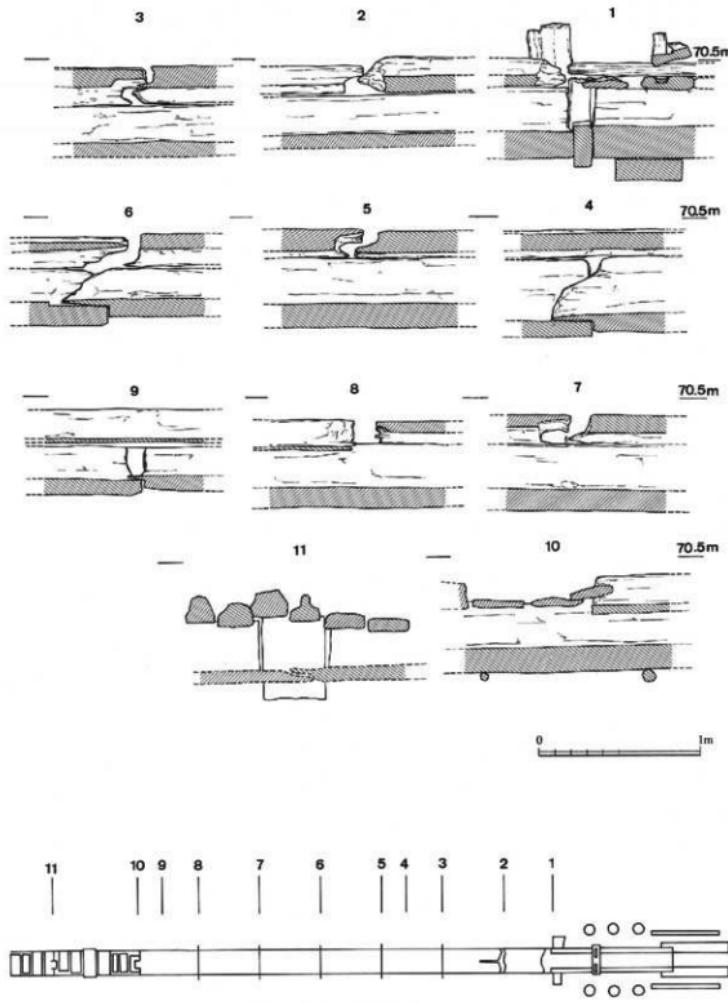


図76 樋管の接続方法 (S=1/30)

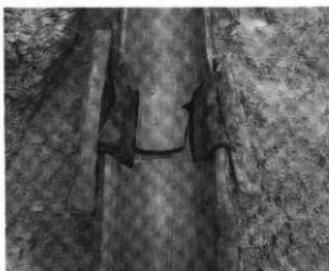


写真44 樋管7と8の接続

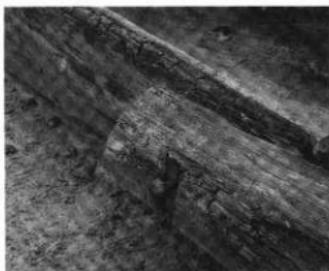
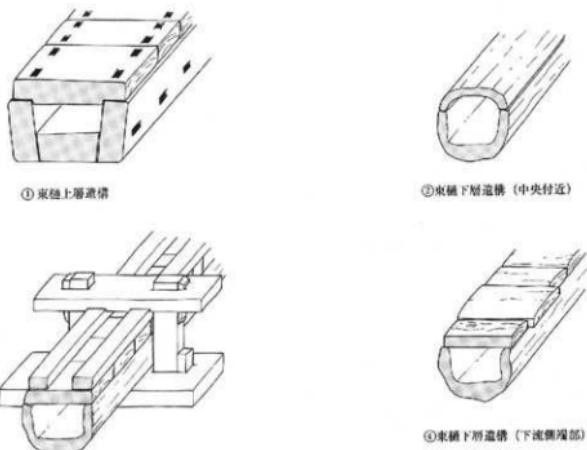


写真45 樋管をつなぐ鉄釘

樋管の上には蓋板がのるが、蓋板の種類やその固定の仕方にも類型が見られる。蓋板1より上流においては、蓋板は幅30cm~40cm長さ70cmの板材を並べたものである。これを押さえつけるために2本の角柱を平行に置き、さらにその角柱を押さえるために角柱と直行する板材を敷設している。この板材も水圧が加われば上に浮き上がるるために樋管の下に板材を敷きそこから2本の柱をたてて上方の板材とつないでいる。それぞれの接続部ではくさびなどで材を固定している。このような設備を3.7mごとに3箇所設けている。樋管2から5にかけては7枚もの長い板材を樋管の上に載せたものが見られたが、この蓋板の長さは表9の通りである。この部分の蓋板材も樋管と同じく端部を加工し、隣接する材との合わせ目ににおいては上流側が下流側の下になるように接合している(図76-5、-7)。樋管5~8においては、短い材木を並べて蓋板としている。この点樋管1の部分と同様であるが、1で見られた蓋板を押さえつける工夫は見られない。またこの部分では蓋板のない部分が半分以上をしめている。残っている蓋板も破損が激しく、現在蓋板のない部分もかってはすべて存在したものと思われる。

なお樋管1の蓋板のなかに1ヶ所墨書きが見られた。墨書きは「甚」と読めるがこの場所においては下層造構の樋管は上層造構と少しずれている。先に述べたように、上層造構には墨書きで砂蓋の番号が書かれているが、取水部に近い部分はそのような墨書きは見られない。ところが下層に墨書きがある部分の直上の上層造構の砂蓋を取水部側から数えてみるとちょうど24枚目の板であった。以上の根拠によつて、この墨書きは奈良時代のものとは思われず、近世初頭の職人が心覚えに記した墨書きと思われる。

また同じく樋管1の両側には3本ずつ計6本の掘建て柱がたてられていた。柱は東側の最も下流よりのものが最も高く、地表から269cmで、北側にくくほど低くなっている。図78は西側の最も上流側の柱部分の断面図であるが、当時の地盤を深さ120cmまで掘削して柱を建て、埋め戻したのち、今度は樋管を入れるための掘削が行われているのがわかる。埋め戻しの土の中にはこぶし大の礫が多く含まれていたが、これも柱を支えるためであろう。またいずれの柱も上流側に10度ほど傾いていた。先に述べたようにある時期に堤体は上流側にむかって滑っている。柱の傾きもこれと関係があるのでなかろうか。



③ 東槽下層造構（取水部付近）

図77 管の概念図

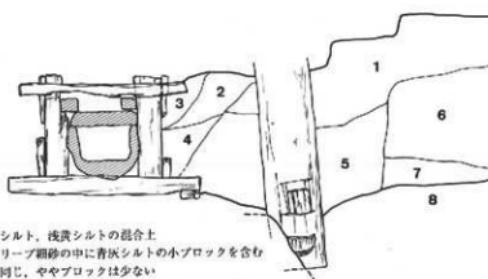


写真46 柱管1の柱と蓋板



写真47 柱の基盤部

71.5m



- ① 青灰シルト、浅黄シルトの混合土
- ② 灰オリーブ細砂の中に青灰シルトの小ブロックを含む
- ③ ②と同じ、ややブロックは少ない
- ④ 青灰色シルトのブロックの中にオリーブ細砂を含む
- ⑤ 灰色シルト（10～20cmの大きな塊を含む）
- ⑥ 幅3～7cmごとに層状にシルト、砂が重なる
- ⑦ 海灰色有機物層
- ⑧ 灰褐色砂（こぶし大の塊を含む）

0 1 2m

図78 東槽下層造構柱部分断面図 (S=1/40)

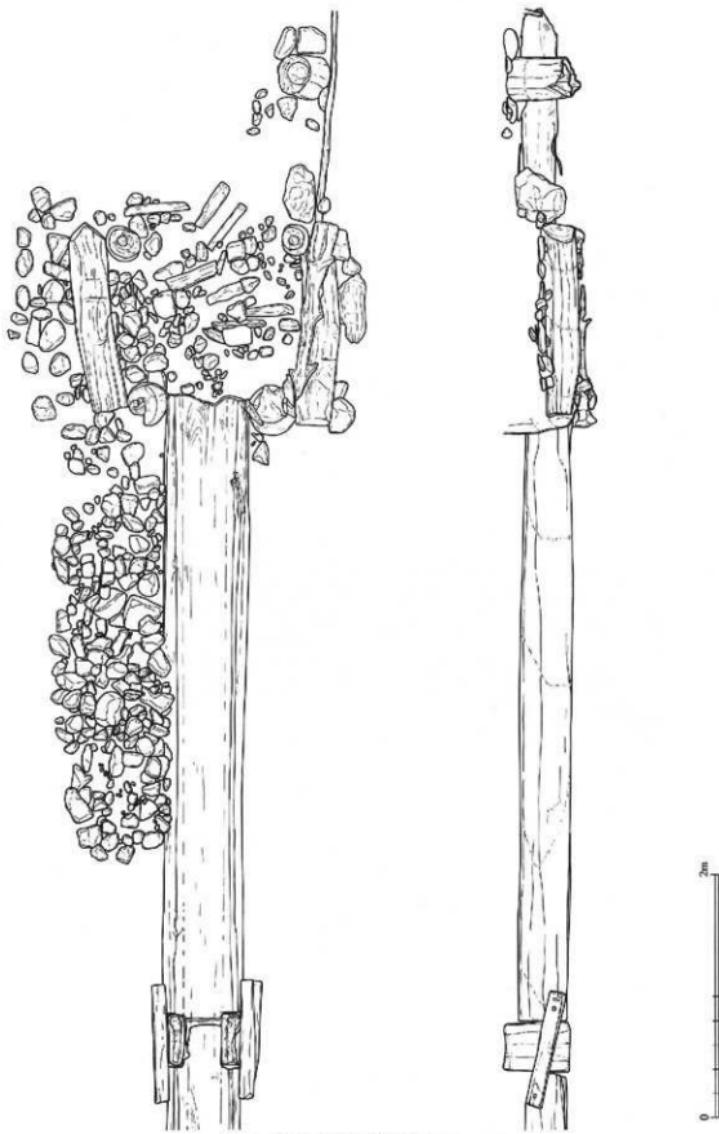


図 79 東橋下層造構排水部平立面図 (S=1/40)

4 排水部

樋管の下流側先端は樹型の構造となっており、水はこの部分に出されたち水路によって下流に運ばれたものと思われる。樹形の大きさは南北310cm東西220cmで、地面に埋め込まれた四本の丸太材とその外側に横たえられた丸太材によって構成されている。丸太の内部にはこぶし大の川原石が敷きつめられており、それに混じって長さ40cmほどの木材片が8本散乱していた。この木材は樋管としてもちいられたものと同じヒノキ材で、その中の1本を奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に依頼し年輪年代を測定していただいたところ、表皮は見られないものの一番外側の年輪は西暦590年という数値を得た。このことからこれらの木材片も元来は樋管の一部であると考えられよう。排水部の西側においても石敷が見られた。石敷の範囲は南北が540cm、東西が90cmで、樋管の西側に伸びていた。この石敷は樋管の東側には見られなかつたことから、段丘の裾に設置された樋管の先端部が、谷側(西側)にすべることを防ぐ目的で設置されたものと考えられよう。



写真48 排水部で検出された樋管材

5 小結

東樋下層遺構の築造された年代を土器などの出土遺物から判断することは困難であった。そこで奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に依頼し樋管材の年輪年代測定を実施した。その結果、樋管1をのぞく複数の樋管では表皮が残存しており、伐採年代は西暦616年の春から夏にかけてという結果を得た。先にも述べたように東樋下層遺構は沖積層を掘削して埋設されており、その上に北堤が築かれている。堤の層には中樋付近の堤体断面の観察調査において最初の堤体の特色であると判断された敷葉工法が見られることから、東樋下層遺構は狹山池築造時の遺構であることが確実である。この樋の伐採年代が西暦616年であることが判明したため、狹山池の築造年代もその直後であることが確実となった。水中で使用される樋の材木は建築材などとは異なり、伐採直後でも使用できる。現在でも溜池の工事は、農閑期で雨も少ない冬に行われることが多く、少し想像をたくましくすれば616年の冬には狹山池の築造工事がおこなわれたと考えることができよう。

東樋下層遺構の発掘によって長年の謎であった狹山池の築造年代は7世紀初頭にはほぼ限定されることとなつた。西暦616年は推古天皇24年にあたる。狹山池の築造は記紀には崇神天皇や垂仁天皇の時代のこととして記載されているが、今後はその記事の意味について問われなければならないだろう。また東樋下層遺構は全長がほぼ残存していたために、7世紀の樋管の構造や築堤技術について多くの情報を与えてくれた。築造当初の取水部こそ残存しなかつたが、奈良時代の取水施設は一部が検出され、他の出土例と比較すればその復元も可能となる。この樋管は天平宝字の改修以後いつまで使用されたのかは、発掘成果だけでは知ることはできない。また灌漑範囲についても接続する水路を検出できなかつたため不明というしかない。ただ地形から考えて、東樋上層と同様に水路は段丘崖の裾を縫うように北に流れていることが推定できよう。狹山池の北側約1kmの位置には現在太満池が所在する。太満池は狹山池中樋から流れ出した水が一旦すべてそこに落ち、下流に分配される重要な溜池である。『統日本紀』天平四年(732)十二月条には狹山下池の築造記事が見られるが、この狹山下池は現在の太満池であると考えられる。したがって7世紀初頭には東樋下層遺構から流れ出した水は太満

池よりもさらに北側まで流れていた可能性が強いだろう。中樋・西樋については度重なる改修工事のために狭山池築造当時の樋を確かめるすべもないが、これら2つの樋は設置されたレベルが東樋よりも数m低く、水の有効利用の点からも築造当初から存在していた可能性が強いだろう。東樋下層遺構は太満池の築造によって灌漑範囲が狭まり、相対的にその重要性が低下したものと考られる。

東樋下層遺構は、上層遺構のはば真下に埋設されている。これは単なる偶然ではなく、東樋所在箇所の地形的な条件によるものと思われる。東樋が設置された場所は狭山池の東岸を画する段丘のちょうど裾の部分にある。したがって発掘のために開削された部分の西側断面は堤体の盛上の状況を示すが、東側の断面は自然の段丘層の上に盛土がのったものとなっている。段丘層は沖積層よりも強固であり、安定した地盤を求めて場所を検討した結果、約千年の時間を経て二つの樋が上下に重なって設置される結果となつたのである。ちなみに今回のダム化工事においても上層下層の東樋遺構が検出されたのとまったく同じ場所に取水のための新しい樋が設置されている。



写真49 東樋遺構と新しい取水塔

IV 西樋遺構

1 調査の経過

狹山池の西樋は、池の西北にある副池に一旦水を落とし、西除川と合流して美原町西部、堺市方面に水を送る重要な樋である。今回のダム工事以前には中樋のような取水塔はなく、ハンドル式の取水装置が設けられていた。昭和の大改修以前には、尺八樋と呼ばれる巨大な樋があったが、これは慶長13年(1608)の大改修のときに設置され、その後数回の改修を経て長く使用されてきたものである。また副池はこの昭和の大改修の時に新たに築造されている。尺八樋は昭和大改修で上の3段は撤去されたが、最下段と伏樋については残されていることが『狹山池改修誌』などに記されている。しかしながらその後の急速な土砂堆積によって、かつての西樋の位置や規模などは全くわからない状態となっていた。そこで狹山池調査事務所では、平成5年度に西樋の所在を確認するために事前発掘調査を実施し、遺構を発見したため、引き続き上層遺構の調査を行った。西樋は慶長の改修で築造され、その後樋管の伏せ替え工事は行われなかつたと思われるが、土砂の堆積に伴って樋本体以外の施設は堆積物の上に作られている。上層遺構はこのような性格の遺構と考えられる。

調査はその後中樋遺構が検出されたために一旦中断し、平成6年度に下層遺構の調査を行った。調査期間は1994年6月1日～10月30日であった。



写真50 昭和大改修以前の西樋

2 遺構

① 上層遺構

西樋遺構の所在地は現在の西樋取水口より10m程度北側であるとの『狹山池改修誌』の記載を頼りに掘削を開始したが遺構はなかなか検出できなかった。場所を変えて掘削を続けたところようやく現在の池底地盤(堆積物の上面)より4.5m下の場所において材木群が姿をみせはじめた。西樋遺構周辺は西除川流出口が近いこともあって中樋以上に土砂の堆積速度は早かったようであり、樋の最下段はほとんど埋設しており、昭和改修以前には樋に水を取り入れるために樋本体の周囲だけを人工的に掘削して使用していたと思われる。上層遺構は土砂が樋本体の方に流れるのを防ぐための土留状の遺構とみられる。なお図80は西樋遺構付近の堆積物の柱状図である。

上層遺構は、1基のシガラミ遺構と4基の土留遺構から構成されている。樋本体の正面前方にはシガラミ状の遺構が出土している。これ

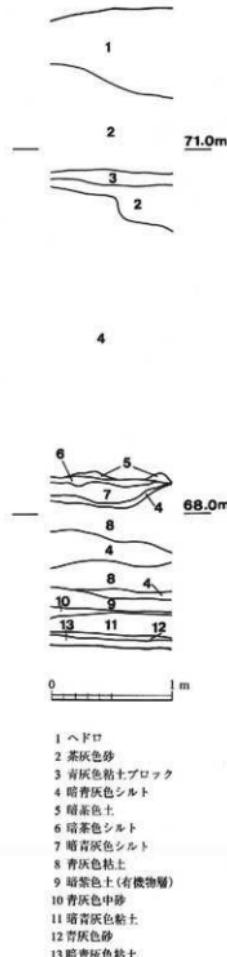


図80 西樋遺構付近の土層柱状図 (S-1/40)

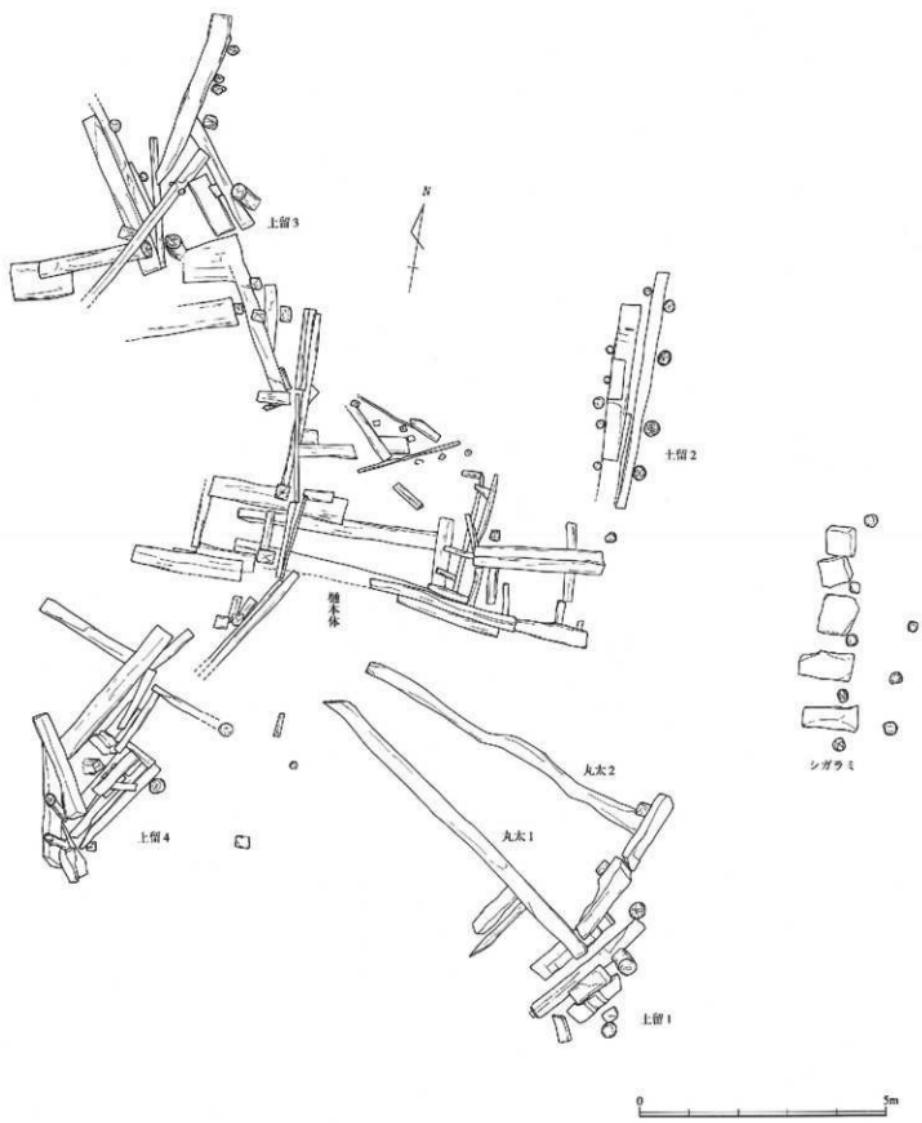


図 81 西橋遺構上層遺構平面図 (S=1/100)



写真 51 シガラミ



写真 52 斜めにおかれた 2 枚の板材

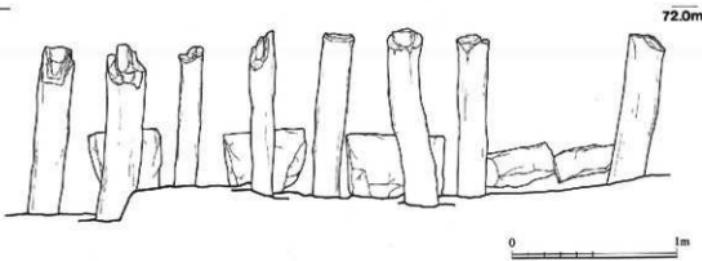
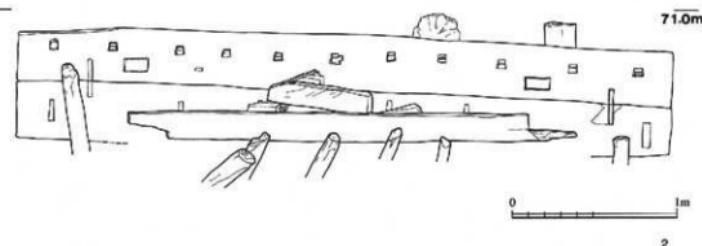
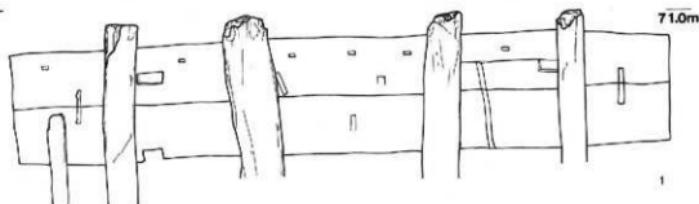


図 82 西橋遺構土留 1 立面図 (1→正面、2→背面)、シガラミ立面図 (正面から) (S=1/30)

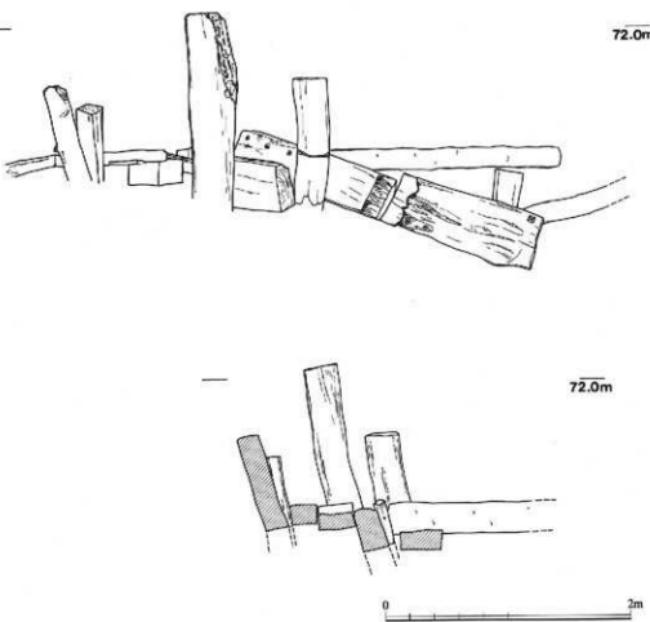


図83 西橋遺構土留2立面・断面拡通し図(S-1/40)



写真53 土留2



写真54 土留3

は8本の丸太杭を千鳥足状に打ち込み、杭と杭の間には角型の石を配置したものである。樋に流木などが流れこむのを防ぐ目的で作られたものとみられる。シガラミから樋本体に向けては人工的に掘削された斜面となっているがこの部分には2枚の板材が敷かれていた。この板材の下には北側のものは2本、南側のものには4本の柱材が枕木状に置かれていた。この板材は斜面が水流によって崩壊するのを防ぐ目的で敷かれたものと思われる。

土留造構は樋本体の左右に2基づつ存在した。土留1(本体より北前方)は船材と思われる長さ491cmの大きな板材を垂直に立て、前方に5本の大きな丸太杭を打ち込み、後方には小さい杭を6本打って固定したものである。土留2(樋本体より南前方)は板材2枚を立て、前面に丸太杭を打ち込んで固定したものであるが、後方には丸太1(長さ739cm)、丸太2(長さ643cm)を横たえて板が後方

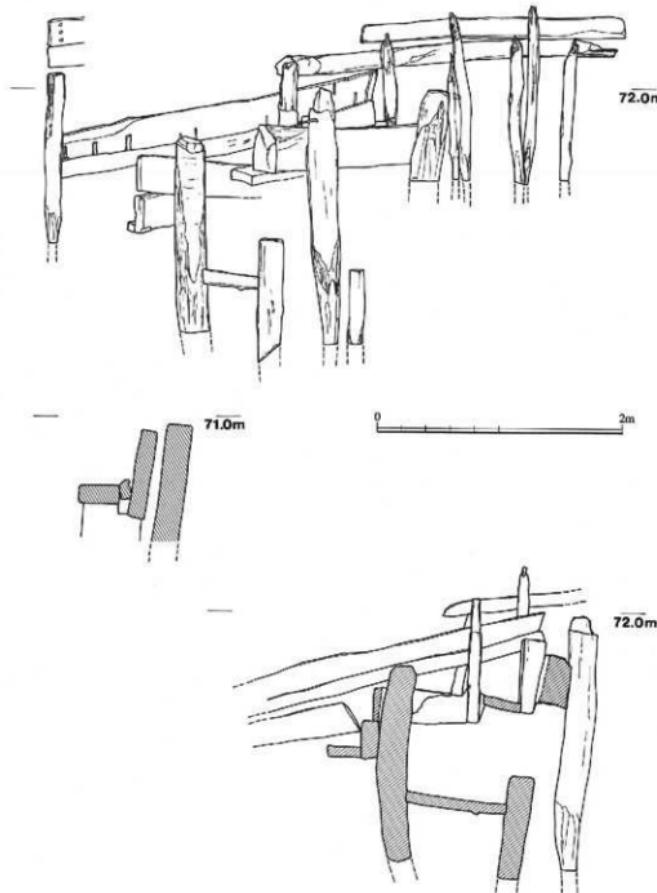


図84 西樋造構上留3立面・断面見通し図 (S=1/40)

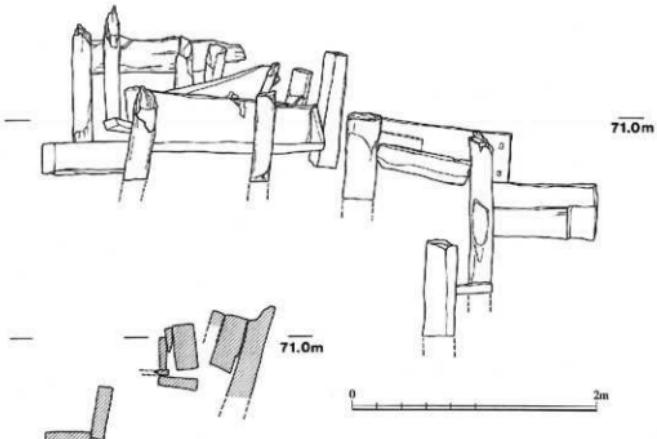


図85 西繩道橋土留4立面・断面図 (S=1/40)

に倒れるのを防いでいる。土留3(本体より北後方)、土留4(本体より南後方)の二つの土留は樋本体よりやや後方に位置している。池の堆積物だけでなく堤からの崩土を防ぐ機能をもった土留と考えられる。形態的にも土留1、2よりやや複雑である。土留3は4本の板材を立てそれを前後から杭で固定したのである。板のレベルに差がみられることから、数次にわたって作り足された可能性がある。土留4も同様の構造である。いずれの土留も下層造構などと比較して作り方が粗雑であり、土砂の崩落や堆積に伴って応急遮置的に構築されたものと考えられる。板材は樋の材料や、船の廃材を利用しており樋の改修の時に不要となった材木を再利用したのであろう。

上層造構と下層造構との標高の関係を示したのが図86である。これによればシガラミは標高70.8m、土留2は70.6m、土留3は70.2~70.6mの間に作られた造構である。下層造構の樋本体が67.7mの面に作られているのと比較すると2.5mから3.1mも土が堆積していることがわかる。このような激しい堆積作用に対応するために構築されたのが上層造構のシガラミ造構や土留造構であると考えられよう。上層造構については顯著な遺物もなくその時代も不明というしかないが、多くの巨大な船材が使用されていることから考えて慶長の改修からそれほど年月を経ずして作られたものと推定される。



写真35 上層造構全景

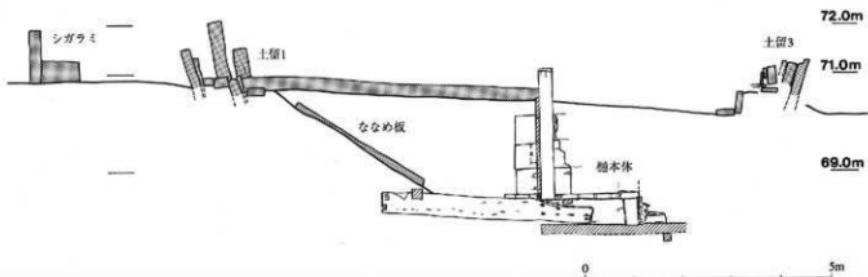


図 86 西種遺構 上層遺構と下層遺構の関係 (スクリーントーンが上層遺構) (S=1/100)

②橋本体

上層遺構を構成する土留遺構などをまず撤去し、その下の堆積物を除去すると橋本体を中心とする西種下層遺構が姿を表した。遺構の中心には尺八樋の最下段があり、その両脇には大きな板材が立てられた状態で出土している。さらにその両側では中樋遺構の西側で検出した木製枠工とまったく同じものが検出されている。

本体とその両脇の板材および木製枠工はほぼ平行線上に配置されており、この平行線の方位はほぼ南北である。現在の北堤は池の西側で大きく南側にカーブしているが、この平行線はカーブ後の堤の方向にはほぼ平行している。

橋本体の残存長は 622cm であり、樋管に連続するとと思われる後部は破損している。幅は 155cm、高さは 338cm であった。橋本体の構造は中樋とほとんど同じである。上部構造は 4 本の柱を建て、その間に板を張って、箱形のものを作り、後方の 2 本の柱にえぐりを入れてそこに水門をいれていたものと思われるが、後方の柱は大きく破損していて水門も残っていないかった。前方の 2 本の柱は横断面が 29cm・21cm で長辺に板が打ち付けた。高さはともに 329cm であった。下端は四角く整形されており築造当初の姿をとどめているが、上端にははつられた形跡があり高さはいま少しあったと思われる。後方の柱は南側のみが残っているが、これも樋管の上端付近で切断されており、残存しているのは高さ 81cm にすぎない。この部分の柱の横断面は 41cm・21cm であった。前方の柱とは異なり、下端は角が丸く仕上げられている。後方北側の柱は釘もろとも引きぬかれていた。柱はいずれも樋管に外側から四本の釘によって打ちつけられ固定されていた。釘は平行四辺形の頂点の位置に打



写真 56 西種遺構全景



写真 57 橋本体

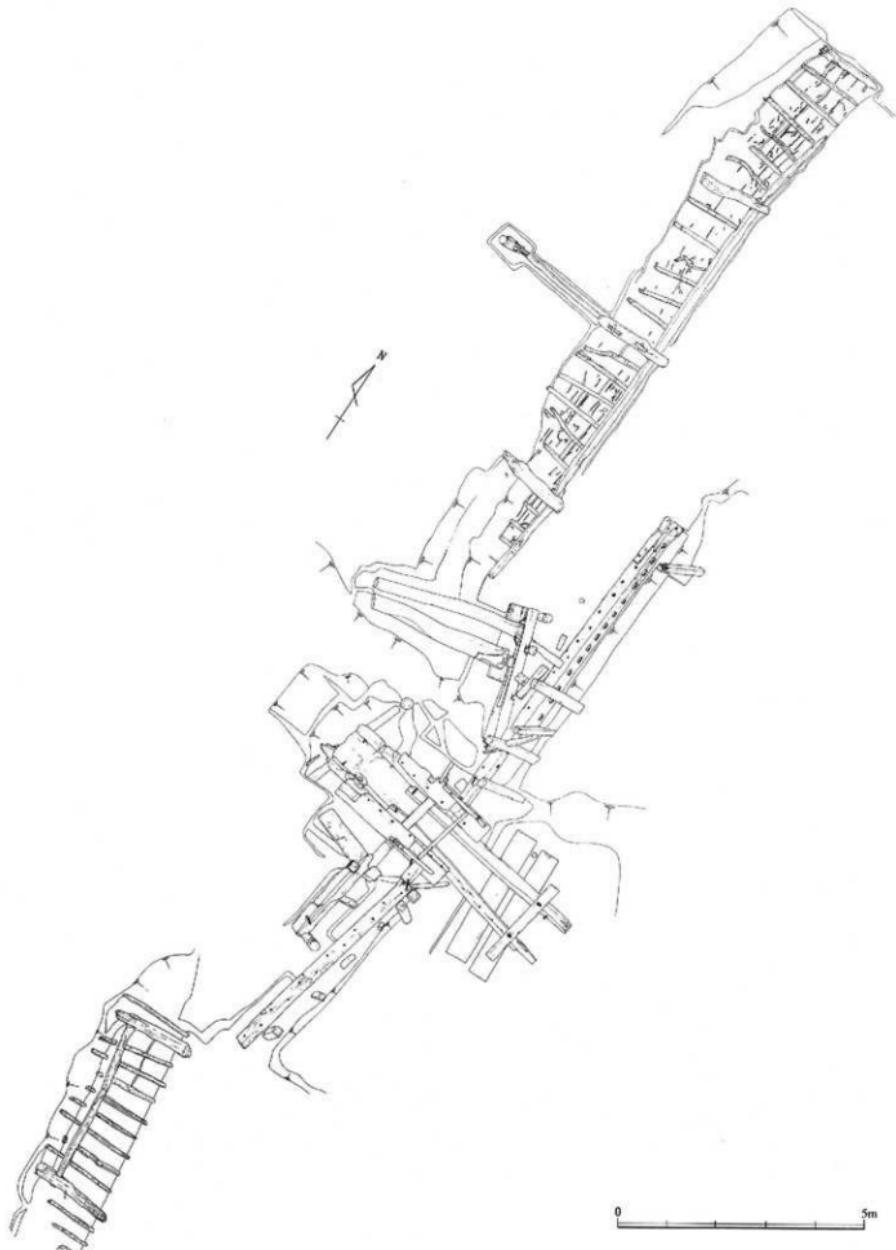


図87 西橋下層遺構全体平面図 (S=1/100)

たれていた。上部構造の側板は前方部と両側面のものが残存していた。後方部に側板があったかどうかは後方の柱が破壊されているために不明であるが、中樋遺構・東樋遺構と比較すれば築造当初は存在したことが想定できる。前方部の板は4枚が残っていた。柱に残された釘から判断すればあと1枚この上に板が張られていたようである。板は幅がいずれも133cm、厚さは6cmで、1枚ごとの高さは上から順に41cm、49cm、53cm、54cmである。2本の柱に上下2ヶ所づつ鉄釘で打ち付けられている。側面の板は柱の外側に貼られていた。板は前方の柱よりさらに50cm前方に伸びている。ただ柱より後の部分は南北とも鉢状のもので切断されている。側板の厚さはともに6cmで高さは南側が上から順に59cm、52cm、51cm。北側は一番上のものは上部が破損していて残存高39cm、75cm、73cmである。向い側や前方部の側板と1枚ごとの高さをそろえず、お互いにずらしている。側板は外側から釘によって柱に固定されているだけではなく、側板同士も縫釘によって固定されていた。またこの上部構造の一一番下には2枚の板材があり、側板はこの上にのる形で柱に固定されていた。板と柱との接続は板の一部をえぐり、そこに柱を噛み合わせるかたちで接続している。またこの板自体は上から釘を打ち込んで樋管に固定していた。

樋管は長さ284cmが残存していた。それより後側はやはり鉢状のもので切断されていた。樋管は厚い板を組み合わせて作られていたが、発掘調査の途中までは大きな丸太材を

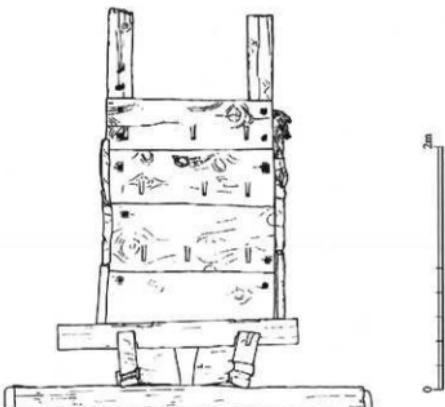
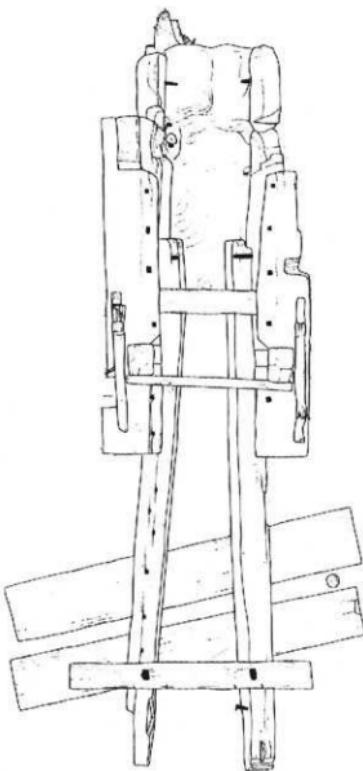


図88 西廻遺構樋本体平面・正面図 (S=1/40)

削り貫いて作られていると錯覚していたほど精密に組み合はさっていた。底板を両側から側板が挟む形態で桶蓋より後は当然砂蓋もあったと考えられるが残っていない。破壊の痕跡からナタ状の道具で桶管をこわし桶蓋を取り出したものと思われる。底板は厚さ 21cm、上幅 60cm、下幅 57cm の逆台形の断面である。側板はともに厚さ 23cm・高さ 74cm で鉛直方向に対して 8 度外側に開いている。したがって桶管の内法は、上辺 73cm・下辺 61cm・高さ 52cm の逆台形をしていることとなる。こ

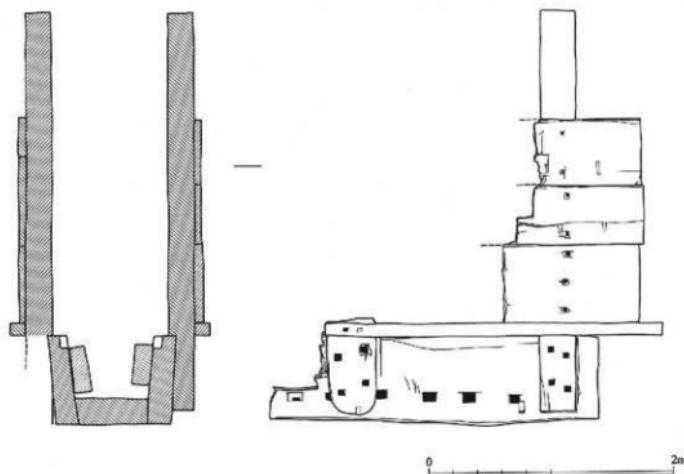


図 89 西極造構桶本体断面・側面図 (S=1/40)

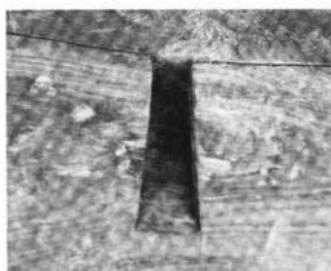


写真 58 側板をとめる釘の穴

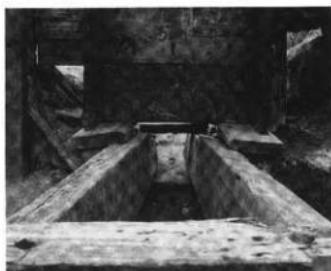


写真 59 側板の下部と板材

の部分の断面積は 3484cm^2 となる。桶管の内面には後側の柱が立つ場所において溝がみられる。えぐりの幅は 26cm で、深さは底板において 3cm、側板では 7.5cm であった。この溝には水を出し入れする桶蓋がはいっていたものと考えられる。また上部構造の柱と桶管の側板との接続は、前と後で差がある。前方は柱の一部をはつてそこに側板を入れる形をとっているが、後方は逆に側板の一部をはつりそこに柱を入れる形となっている。

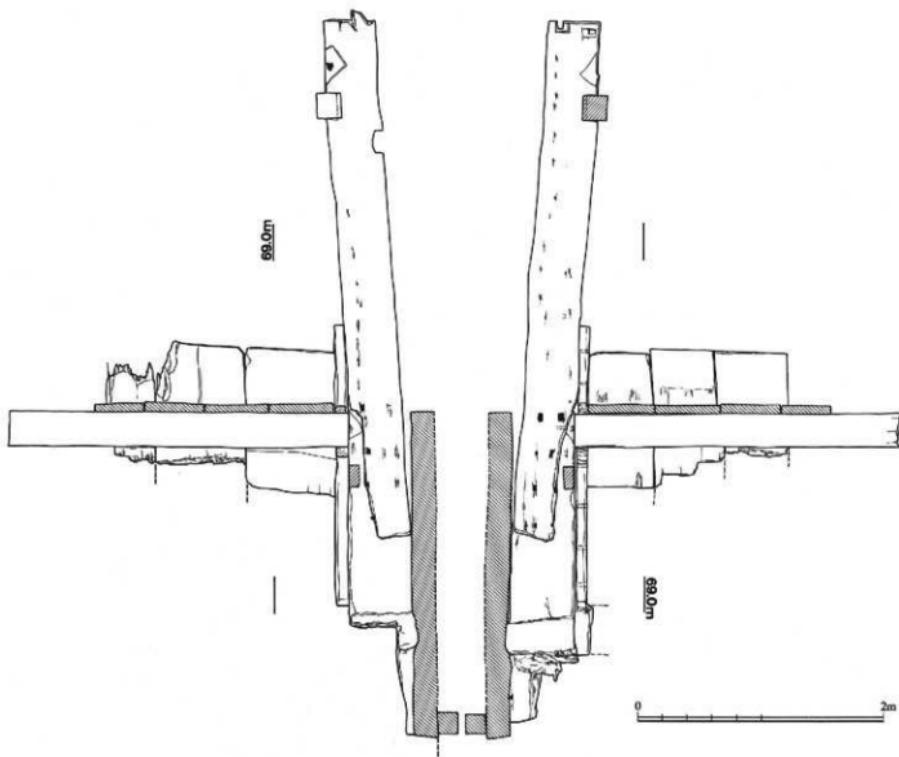


図 90 西桶造構断面見通し図（主軸方向）(S=1/40)

橋本体の前方に向けては2本の長い板材がハの字型に開いて置かれていた。これは中橋造構においてもみられたものと同様のもので水門に水を導くための装置とみられる。板は南側が長さ435cm・高さ平均45cm・厚さ12cm。北側の板も長さ435cm・高さ平均44cm・厚さ13cm。両方の板の角度は6度であった。この2枚の板の先端から65cmの場所には板同志を連結するように角材が置かれており、上方から釘で打ち込んで固定していた。また2本の板材の下にもかまぼこ型の板材2枚が横たわっていた。この材は橋全体の地盤沈下を防ぐために設置されたものであろう。

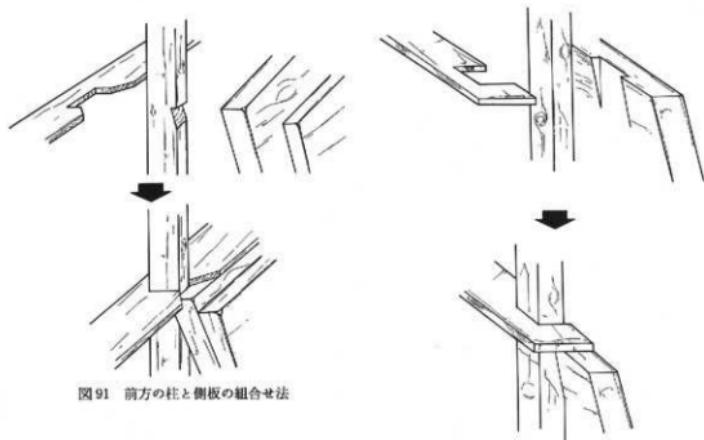


図91 前方の柱と側板の組合せ法

図92 後方の柱と側板の組合せ法

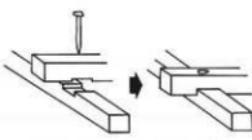


図93 板材と架材の組合せ法



写真60 ハの字型の2枚の板

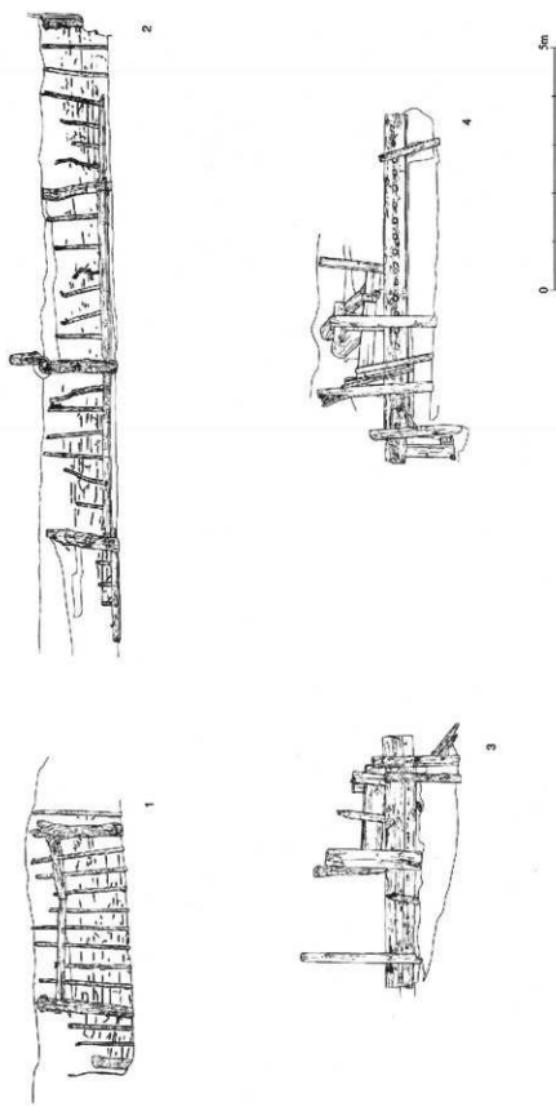


図 94 西橋造木製枠工・層板立面図 (S=1/100)

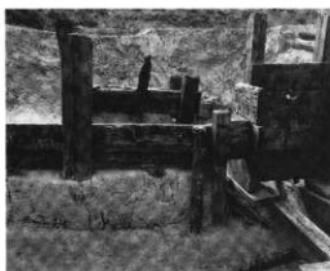
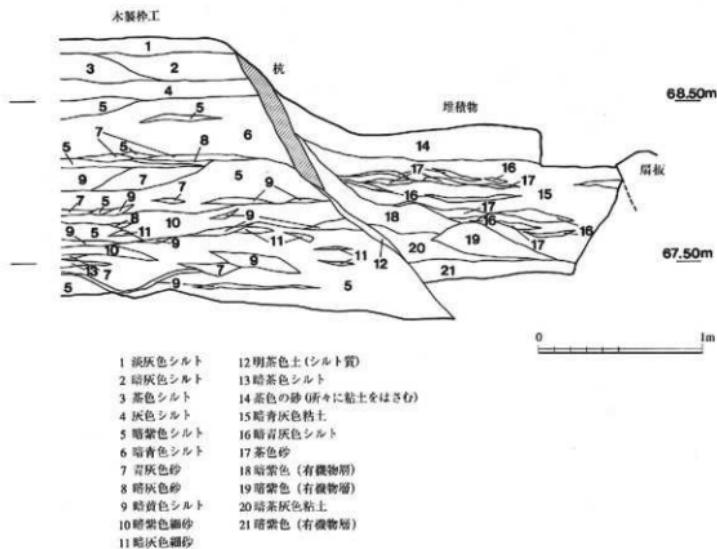


写真61 扇板(南側)



写真62 扇板(北側)



③扇板

橋本体の左右にあった板材はともに船材を転用したものであり、橋側面の護岸あるいは擁壁の役割を果たしていた。南側の板は双方とも前方に杭を打ち込み固定している。南側の板材は長さ 457cm、幅 58.5cm であった。この板の後にはやや短い板(長さ 205cm)が立てられていた。両方の板は前後に杭を打って地面に立てかけていた。北側の板材は、長さ 652cm、幅 52cm でその背後にももう 1 枚の板があった。前方の板は西側で検出された船材のなかでもっとも長いものであり、やはり杭によって立てられていた。後方の板材は横たえられた丸太と連結することによって立てられていた。

④木製枠工

木製枠工については中橋構造の西側において検出したものと同じく、丸太を 2 列に斜め方向に打ち込み、前後左右の丸太はねぞ穴をあけて板材によって連結したものである。その後堤の盛土を施し、表面には水平方向に竹を並べ、垂直方向に先を尖らせた杭を打ち込んで構築している。この木製枠工

は西極の伏櫓を敷設した時に堤体の一部をオープンカットした場所に設置したものと思われる。南側の護岸は長さ 525cm であった。3 本の丸太が打たれ、11 本の杭がその間に打ち込まれていた。最も南側の丸太は頭の位置が低くなっていた。樋本体側においては木製枠工は扁板端部の辺りから施工されていた。また北側では 1295cm の長さで木製枠工が残っていた。こちらには 4 本の丸太と、21 本の杭が打たれていた。船材の端部から北側に 980cm の場所から木製枠工が作られている。1 本目の丸太と 2 本目の丸太の間は 355cm でその間に 8 本の杭が打たれている。2 本目の丸太と 3 本目の丸太の間には 6 本、3 本目の丸太と 4 本目の丸太の間にも 6 本の杭が打たれている。4 本目の丸太よりも樋本体側にも杭はあるが、杭は次第に短くなってしまっており、この部分が木製枠工の端部であることがわかる。北側の木製枠工の北の端部は土砂崩落の恐れがあり確認できなかった。また杭の下には水平方向には竹が並べられていた。これも中樋西側において確認された木製枠工とまったく同じ技法であり、土のすべりを押さえための工夫であろう。

図95は南側の木製枠工部分の土層断面図である。枠の中はシルト系の土で水平に盛られており、ところどころに砂を挟む。中樋遺構西側の木製枠工においては盛土の中ほどに礫を多く含んだ層があつたが、西極遺構の木製枠工ではこれはみられなかった。

⑤廃材の利用

西極遺構を構成する材木のなかには西極自体にとって不必要と思われる切り込みや穴などがある。これらの材木は樋を作る時に再利用されたものと考えられる。とくに樋本体の前面におかれていったハの字型の先端部には穴やえぐり、釘穴などが残されている。しかしながらこれらの材が樋以前に何に使用されていたのかは不明である。

3 遺 物

①材木の性格

西極遺構は上層遺構と下層遺構に大きく分けられるが、ともに多くの材木から作られている。その中の樋本体部分、および堤体の保護のため取り上げを断念した木製枠工以外の材木は解体して取り上げている。以下、これらの材木のうち主要なものの概要を表10、図98～図134に掲載している。ただし解体した樋木体や土留材のうち、明らかにその目的のためだけに使用され、再利用の可能性のないものは遺物としては扱っていない。また遺物は一応、上層遺構・下層遺構に分類して取り上げているが、ともに堆積物中から出土したものが多く、また土留などに利用されているものも、前時代の樋を解体して得られた材木を再利用しているものがあり、上層下層の別が必ずしも時代の前後を示しているわけではない。

出土した材木の当初の機能は、その形態から船材、および樋の一部、土留などに伴う杭やくさび、用途不明のものに分けられる。以下、この順に概要を述べていこう。

②船 材

図面に示した遺物のうち、船材の再利用であることが確実なものは 18 点である。これらの船材は慶長 13 年(1608)に建設された西極最下段の擁壁材などにも利用されており、現在のところわが国でも最も古い構造船の船材であるといえよう。わが国の船は繩文時代まで遡る丸木船を出発点に、少しづつ発展し、やがて丸太に板材を接続して容積を増やした準構造船が誕生する。準構造船の時代は長く続いたが、戦国時代から近世初頭にいたってようやく構造船の時代となる。ところが鎖国による影響もあり、近世には大型船舶の建造が禁止され、船は小型化する。その意味で鎖国前夜の近世初頭は、わが国の造船の歴史にとって非常に重要な画期となっている。ところが文献資料の乏しさや、発掘資料の不足



写真63 縫釘



写真64 カスガイ

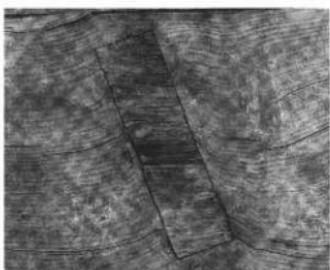


写真65 埋め木

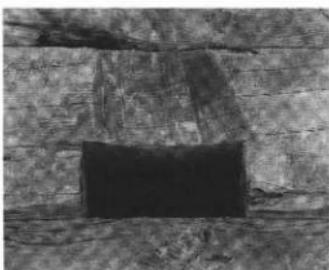


写真66 釘穴

からこの大きな変化については実証的な検証がなされてこなかった。今回の出土船材はこのようなわが国の造船史を考えれば、非常に重要な位置を占める存在といえる。

以下これらの船材にみられる特色について技法の痕跡が明瞭なものを取り上げて述べてゆきたい。図98-1は2材を縦方向につないだ船材で多くの船特有の技法が残されている。2材を接続するためにカスガイおよび縫釘が使用されている。写真63、64はこの木材にともなうものではないが、やはり西橋遺構から出土したカスガイと縫釘である。参考のために掲載した。カスガイは現在と同様2つの木をつなぐ時に両者にうたれる金具であるが、材木1では木自体に溝を彫りこみこれにカスガイを打ち込む形となっている。材木1にはカスガイは残存していないが、この溝だけが残存する。船の場合はカスガイを打ったのち溝に板を打ちこんで、カスガイが塩水に触れないようにし、これを板カスガイと呼んだ。溝はこのために必要であった。また縫釘というのは、やや反り返った形の釘で、ななめ方向に打ち込み2材を接続する時にもちいる。1の材木では6本の縫釘が使われており、またa材の断面に残された釘穴から他の材とともに縦方向に接続していたことがわかる。縫釘の場合もカスガイと同様、打ったのち埋め木がなされて水に触れないように工夫されている。材木1では埋め木が残存している。

また材木1のうちb材のほうには船釘の釘穴が残されている。穴は板の表面から垂直にあけられており、この方向に他の板が接続していたことがわかる。また材木1には材木に2箇所の四角い穴が並んで残されている(写真66)。これは水圧によって船がつぶされるのを防ぐため水平方向に梁を入れる穴と思われる。さらに材木1の裏面には幅25cmの溝が彫られている。これも水圧に抗するるために船の内部にたてられた板をはめるための溝と考えられよう(戸建)。これらの技法の痕跡から材木1が船材であることは確実である。他の板を船材と判定したのも、このような船特有の技法の痕跡が観察

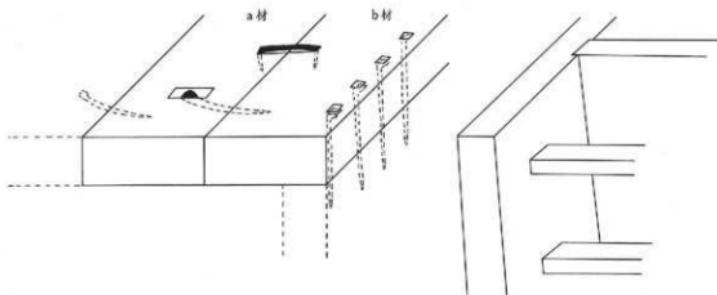


図96 材木1において観察できる加工痕

されたからである。また船には多くの部分があるが、材木1は棚とよばれる船の側面の部材であると思われる。後述するように近世初頭のわが国の船は、板材を組み合させて作られた構造船であると考えられるが、この時期の船の細部の構造についてはほとんど研究がない。したがって棚が何段で材をどのように組合せていたのかなどは今後の研究に待つしかないが、少なくとも西極遺構出土の船材においては材木1のように垂直方向に棚をつないだと思われるものが多く残されている。

図101-10も形態から船材の棚部分であると考えられる。

材木1にみられた縫釘、船釘などはこの材においても観察できる。また板から垂直方向に張られていた梁も、切断はされていたものの一部が残存しており、先にみた材木1の穴が梁穴であることを検証できる。またこの材木10においては材木1で直接観察できなかった縦方向に木を接続する際の技法がみられる。それは双方の板の接続面に穴をあけ、そこに木の小片をさしこんで、木がぐらつかないようにする技法である。この木栓が材木10では残されていた。木栓自体が残存しているものは少ないが、木栓をいれる穴が残されている材は、6、15、17、32、37、67など数多くみられ、縦方向に材木をつなぐときの一般的な方法であったと考えられる。以上みてきたように棚材を縦方向に接続するための技法として、船釘や縫釘、カスガイ、木栓などの技法が確認できた。次に材木を長さ方向に接続するための技法について述べたい。

図108-82は両端が残っている船材である。やはり棚板の部分であろう。この板においては端部より11cm内側に少し段をつけ、そこから端部に向けて材を斜めに削っている。反対側の裏面においてもほぼ同様の加工を施している。このようにして材の端部を斜めに削り、同様に加工した他の材と接続したのである。端部には釘穴が残されているから釘によって接合をしたことがわかる。同様の端部の加工は多くの材で観察される。図123-78は西極遺構出土の船材の内もっとも長いものであり、樋本体横において扁板として使われていたものである。この材においては切断はされているものの、長さ方向に接続された2材が残存しており、船においてどのように棚板が接続されていたのかがよくわかる。この材においては木の端を斜めに削り、組み合わせるだけでなく、接着面をJ字状に加工してお互いが噛み合うようにしていた。図122-77も材木78同様に樋本体横の扁板として利用されていた船材で、側面には縫釘の穴が千鳥状に残されている。また船釘やカスガイの跡も明瞭である。

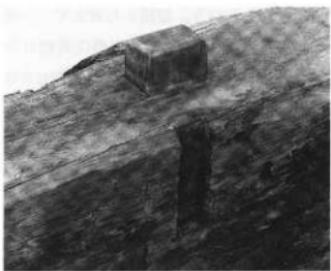


写真67 木栓

これまで説明してきた船材はすべて棚部分に利用されたと思われるものであったが、構造船の一番底の部分にあたる航(カワラ)と考えられる材木も2点出土している。図100-9は航材の端部と思われる。元来の厚さは21cmであるが、端部を削って約半分の厚さとし、その部分に8本の釘を打つて別の航材と接合されていた。図120-74の板材も片方が切断されており、元来の形は不明であるが、8つの釘穴が残り、その位置が先の材木9に合致することから、やはり航材で74と接合していたことがわかる。

船材に関する情報は、観察の精度をあげることによりさらに増加するものとみられる。しかしながら現在は船材をすべて保存処理にまわしており、直接的な観察は困難である、以上の解説も写真と図面によるものであることを断っておきたい。今回出土した船材のなかには厚さが20cmをこえるものも多く見られた。船材についてご指導いただいた松木哲氏(神戸商船大学名誉教授)によれば、この船板の厚さや、残存する船板の長さから考えて船は30m程度の全長、石におすと千石クラスのものが想定されるという。規模から考えて、一般的な輸送用の船は考えにくく、軍船である可能性があるといふ。慶長13年(1608)の改修が豊臣秀頼の命によってなされたことを考えると、軍船である可能性も高いといえよう。大改修の翌年、幕府は500石以上の船の築造禁止と、既存の大船の破却を命令する。領国への第一歩となるこの政策によって、それ以後わが国の造船技術は大きく停滞するが、今回の出土船材は幻の時代ともいべき近世初頭の造船技術を今日に伝える大きな価値を持っている。船材の詳細は分析および復元は松木哲氏、出口晶子氏(関西外国语大学助教授)によって現在進行中であり、近く『狭山池』論考編の中に発表される予定である。今後、さまざまな分野からこの船材の研究が進み、船全体の復元が可能となる日を楽しみとしたい。

③櫛の部材

西櫛造構においては当然のことながら櫛の部材と思われるものが多く出土している。西櫛は田中家文書などの近世文書によると、今回出土した4番目の櫛(底櫛)や櫛管こそ改修されていないが、一番櫛から三番櫛は度々改修されており、それらの改修に伴って櫛の部材が、再利用されたり、また櫛付近に放置されたものが今回出土したのであろう。

図100-8は下層造構の前面の堆積土砂のなかから出土した尺八櫛の櫛蓋である。長方形のうち長辺の両端が少し突出した平面形で、上端幅197cm、下端幅155cm、高さ50cm、厚さ31cm。2材を組み合わせて作ってあり、表1本・裏2本のカスガイドで接続している。下端の断面をみるとかぎりさらに1枚の板材が下方に接続されていたようである。表面には幅38cm、深さ8cmの溝が2本彫られている。これは男柱を固定するための溝であろう。図99-2は長さ270cm、幅30cmという細長い板材である。田中家文書の「狭山池明細帳」によれば西櫛の本体の壁板は長さ9尺、幅1尺であった。この法量は先の材木2のものに一致するため、この板材は櫛本体側面の壁板であると思われる。ほぼ同様の法量の板材は、材木2のはかにも7、5などいくつかあり、いずれも壁板と考えられる。また厚さ、幅が材木2と同様で、長さが短い18、19、45などは前壁板と呼ばれる櫛本体前面の壁板材である可能性が強い。櫛本体を構成する材木としてはほかに柱材、梁材などがあげられる。図114-58は形状から考えて、櫛蓋がはまる柱の部分であろう。下部が薄く削られており、この部分に4ヶ所の釘孔がある。その上の部分には長さ40cm、幅9cm、深さ3cmの溝が彫りこまれている。この部分に櫛蓋がはまっていたと思われる。図123-80は扇板の杭として転用されていた柱材であるが、はぞ穴や溝などが彫られた櫛の本体の柱穴と思われる。この材には記号が彫られている。これに対して図125-86は両端がはぞ状に尖っており、梁として利用されたことが推定できる。同じく図125-85は舟鉢型の板材で、貫通しない穴が二つあけられている。これは櫛の櫛蓋が入る柱を上方で連結する笠木と呼ばれ

る部材であろう。これまで述べてきたのはいざれも樋本体の部材であったが、樋管の部材もいくつか検出されている。図99-4は厚さ17cmという厚い板材で、4ヶ所に大きな釘穴が残されている。東檣上層造構と比較しても(写真33)、樋管の砂蓋とみて間違いがないだろう。73、76なども同様に樋管の砂蓋であろう。これらの樋の部材は、出土位置から考えて西檣のものとは思われるが、時期は特定できない。

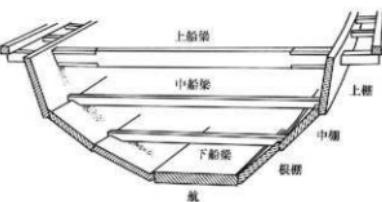


図97 構造船の構造(『船』世界文化社より)

表10 西檣遺構出土材木察観表

順	図面番号	写真番号	長さ	幅	厚さ	備考
上層	1	1	400.5	80	19	船材、樋部分の2枚の板を縦方向にあわせたもの。船材同士は表裏5本の縫合と、6本の縫釘でとめる。直交する他材に接続するための釘跡11カ所。梁穴3カ所と、戸建のための溝が残る。
	2	2	271	30	8	樋本体の壁板か。釘穴3カ所。記号を刻む。
	3	3	214	33	18.5	樋本体の笠木か。釘穴正面2、側面2。釘2残存。
	4	4	124	45.5	18	樋管の砂蓋。釘穴4。
	5	5	204.5	26.5	8.5	樋本体の壁板か。縫釘跡。手斧、鋸の痕跡が明瞭に残る。
	6	6	299	22.5	15	船材、樋部分。木栓跡4、縫い釘跡9、端部は凸状。
	7	7	274	30	8	樋本体の壁板か。釘穴4。記号を刻む。2と類似。
	8		78.5	17.5	9	用途不明。釘穴などなし。
	9	9	144	42	21	船材。航部分の難ぎ目か。釘穴8。あり難ぎ痕あり。
	10	10	295.5	43.5	17	船材。樋部分。木栓2カ所。縫釘跡4カ所。鉛跡2カ所。釘穴7カ所。
	11	11	193	36	20	用途不明。2材を釘で封着。
	12	12	416	57		樋本体の長押材か。柱材2本を根元で切断。
	13	13	204	20	65	用途不明。釘穴2カ所。
	14	14	202	26	13	船材。樋部分。再利用のために切断されている。釘1本残存。釘穴1。
	15	15	185	44.5	16	船材。樋部分。木栓1。鉛跡1、縫釘跡5。釘穴5。釘1本残存。
	16		268.5	20	6.5	用途不明。釘1本残存。釘穴3。
	17	17	288.5	33.5		船材。樋部分。木栓跡1。釘穴4。
	18	18	155	32	9	樋本体の壁板か。釘穴2。
	19	19	211	23	7	樋本体の壁板か。釘穴4。
	20		270	9		用途不明。柱材。
	21	21	163	29	8.5	樋本体の壁板か。釘1本残存。縫釘跡2。
	22	22	94	42.5	8.5	用途不明。釘穴2。
	23	23	49	98	16	樋本体の蓋板。3材を釘、縫で接合する。男柱をいれる溝が2本。
	24	24	184.5	28	6.5	用途不明。中央に浅い段。釘穴2。記号を刻む。
	25		146.5		4.25	用途不明。釘穴4。
	26	26	24	23	8.5	用途不明。釘1本残存。
	27	27	145.5	35	9	樋本体の壁板か。釘穴5。
	28	28	38.5	15.5	7.5	くさび。
	29	29	49.5	14.5	7	用途不明。
	30	30	48	19.5	5	用途不明。再利用材。釘2本残存。木栓跡2。
	31	31	63.5	33	3	用途不明。釘穴2。
	32	32	138	17.5	8.5	船材。樋部分。両端の接続部まで残る。縫釘2、縫跡2、木栓跡2。釘1本残存。
	33	33	134	12.8	3.75	樋本体の壁板か。記号を刻む。
	34	34	57	7	3.25	用途不明。
	35	35	61.5	19	8.5	用途不明。釘穴5、釘1本残存。
	36	36	144.5	16.5	8.5	船材。樋部分。縫い釘2、鉛跡2。木栓跡2、梁穴1、端部の一方は凹状。
	37	37	124	17.5	6.75	船材。樋部分。釘穴9、釘1本残存。木栓跡1、鉛跡2。端部は両方とも残存。側面に刻印あり。

順	医面番号/工具番号	長さ	幅	厚さ		
上層	38	38	37.25	11	8.75	用途不明。釘1本残存。
	39	39	53.5	13	11	くさび
	40	40	61	22.5	12	用途不明。釘4本残存。
	41	41	72	32.5	4	用途不明。釘穴なし。
	42	42	77.5	20.5	6	用途不明。
	43	43	51	26	12.5	船材。櫓部分の端部を切断した物。釘穴1。
	44	44	147	57.8	8	櫓本体の壁板か。釘穴2。
	45	45	84	24.3	3.5	櫓本体の壁板か。縫合跡3、釘1本残存。
	46	46	58	17.5	7.75	くさび。釘1本残存。
	47	47	121.5	25.5	6.5	用途不明。
	48	48	149.5	20.8	7	櫓本体の壁板か。縫合跡3、釘1本残存。
	49		100	8.5	4.25	用途不明。柱材。
	50		40	13	14.5	用途不明。釘穴1。
	51		85.5	14.3	7.5	用途不明。釘穴1。
	52	52	126	33	14	用途不明。櫓管の部材か。釘穴8、うち4に埋め木。錆痕残る。
	53	53	68	21.5	7.5	用途不明。釘2本残存。
	54	54	24	28	7.5	船材櫓部分の端部を切断した物。釘穴1。
	55	55	71.5	13	8.5	用途不明。
	56		70	18	10	用途不明。
	57	57	70.5	28.8	9	用途不明。縫合跡1。
	58	58	115.5	20	9	櫓本体の隅り柱。端部に凸状の突起。櫓蓋がはいる深さ5センチの溝。下部に4カ所の釘跡。
	59		146.5	22	4.5	用途不明。釘穴1。
	60	60	128	18	7	櫓の壁板か。両端に釘穴2
	61	61	44.5	24.5	5	用途不明。釘穴などなし。
	62	62	57.5	18	16	用途不明。釘穴などなし。
	63	63	141	27	6	用途不明。釘穴2。
	64	64	80	16	12.5	用途不明。釘穴などなし。
	65		39	18.5	13	用途不明。釘穴などなし。
	66	66	71.25	17	15.5	用途不明。釘穴などなし。
	67	67	155.5	34.5	15.5	舟板。櫓部分。縫合跡4、木栓跡2、鍵3、釘5、釘1本残存。
	68		35.5	16	10	用途不明。
	69		111	26.5	19.5	船材。再利用のため両端が削られた部位不明。釘穴2。
	70	70		30	19.5	用途不明。えつり穴残存。
	71	71	70	14.5	11	くさび。釘穴4、釘2本残存。
	72	72		30.5	7.5	用途不明。釘跡3、焦げ跡あり。
	73	73	33.5	89.5	14.5	櫓管の砂蓋。釘跡2。
	74	74	76.5	36.5	13	船材。舷部分か。端部が凸状。釘穴8、釘穴が9に対応。
	75	75	81	36	5.5	用途不明。釘穴などなし。
	76	76	84	29	11	櫓管の砂蓋。釘穴2。
	77	77	457	58.5	28	船材の櫓部分。釘穴16、縫合跡12が千鳥に付く。鍵跡1、両端は切断。
	78	78	652	52	54	船材の櫓部分。2材を接続。あり繋ぎにする。釘穴20。縫合跡16、鍵跡1。
	79	79	558	56	42	櫓本体の柱材。片面を丸く仕上げる。ほぞ穴2。鍵跡2、釘1本が残存。
	80	80	804	42	48	櫓本体の柱材。先端を削って尖らせる。ほぞ穴1、溝1、記号を刻む。
	81	81	157	35	10	櫓本体の壁板か。釘1本が残存。
	82	82	222	38	18	舟板の櫓部分。釘2、縫合跡2、鍵1。
	83	83	132.5	9	9	机。
	84	84	158	9	9	櫓本体の柱材。両端をほぞにして尖らせる。
	85	85	178	23.8	10.5	櫓本体の部材。笠木か。片面を丸く仕上げる。ほぞ穴2。
	86	86	156	9	8	櫓本体の柱材。両端をほぞにして尖らせる。記号を刻む。
	87	87	125	19.3	15.8	用途不明。櫓の主要材か。端部にえぐりを入れる。
	88	88	147.5	12.5	3	櫓本体の壁板か。釘跡3。
	89	89	66.5	21	14.5	くさび。釘1本が残存。
	90	90	66.5	8	5	用途不明の柱材。えぐりを入れる。
	91	91	167	18	5.5	用途不明の板材。片方の先端を削って薄くする
	92	92	120	23	3.5	用途不明の板材。錆痕残る。
	93	93	42	13	10	用途不明。釘跡3。
	94	94	73.5	17	3	櫓本体の壁板か。釘穴3、釘1本が残存。

層	測定番号	長さ	幅	厚さ	備考
F層	95	95	133	52	8.5 檻本体の壁材か。両端に釘2本が残存。
	96	96	79.5	18.5	5.5 用途不明の板材。
	97	97	28	20	7.5 用途不明。釘穴3、釘1本が残存。
	98	98	55.5	21	10.5 用途不明。釘穴2。
	99	99	61.5	15	15 用途不明。檻本体の部材か。釘穴2、溝あり。
	100	100	58.5	25	15 用途不明。釘穴2、釘の部分で割れている。
	101	101	116	14	7.5 用途不明の柱材。釘穴4、釘1本が残存。
	102	102	119.5	19	10 檻本体の梁材か。用途不明。両端をけずってはぞとする。設をもつ。釘穴1。
	103	103	92	28	4.5 用途不明の板材。いたみが激しい。
	104	104	82.5	21.5	15 檻管の砂面。釘穴2、字を刻む。
	105	105	91	20	19 檻本体の柱材を切断したもの。段を持つ。釘1本が残存
	106	106	113.5	7.5	6.5 用途不明の柱材。釘穴などなし。
	107	107	135	30	8.5 檻本体の壁板か。両端に釘穴2。
	108	108	98.5	10.5	10.5 檻本体の部材か。部位不明。溝2本を入れる。
	109	109	84	19.5	18.5 檻本体の柱材か。はぞ穴に梁材をいたれた状態で切断。直交するはぞ穴2。
	110	110	74.5	16	13.5 檻本体の柱材か。片方を削って薄くし、くさびとして再利用。
	111	111	133	23	7.5 檻本体の壁材。両端に釘穴2。
	112	112	205.5	11	11 檻本体の柱材。片方を削って尖らせる。はぞ穴1、字を刻む。
	113	113	66.5	27.5	10.5 檻本体の壁板か。切断して端部を削りくさびとして再利用。縫釘跡2。
	114	114	50.5	59.5	26.5 柱材の端部を切断したものの。釘穴6、釘1本が残存。
	115	115	61.5	22	19 柱材の端部を切断してくさびとして再利用。釘1本が残存。
	116	116	39.5	84.5	16 用途不明の板材。両端に釘穴2。
	117	117	241.5	17.5	13 檻本体の柱材。先端を削って尖らせる。同方向のはぞ穴2。

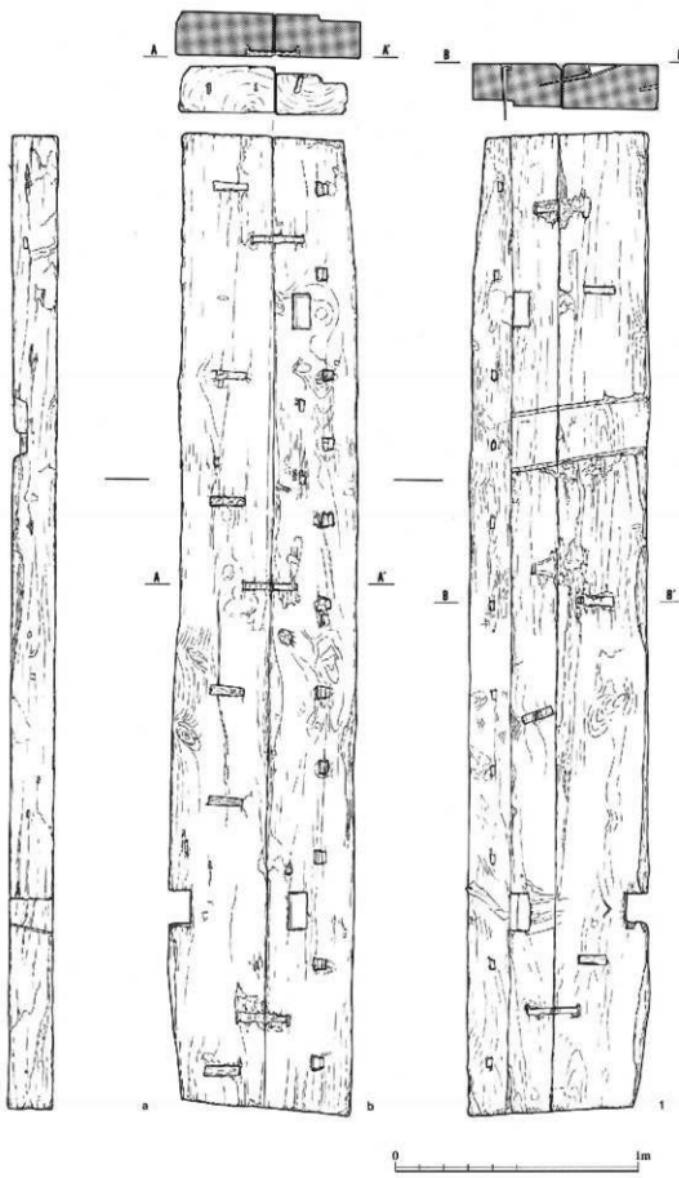


図 98 西橋遺跡出土材木実測図 (I) (S=1/20)

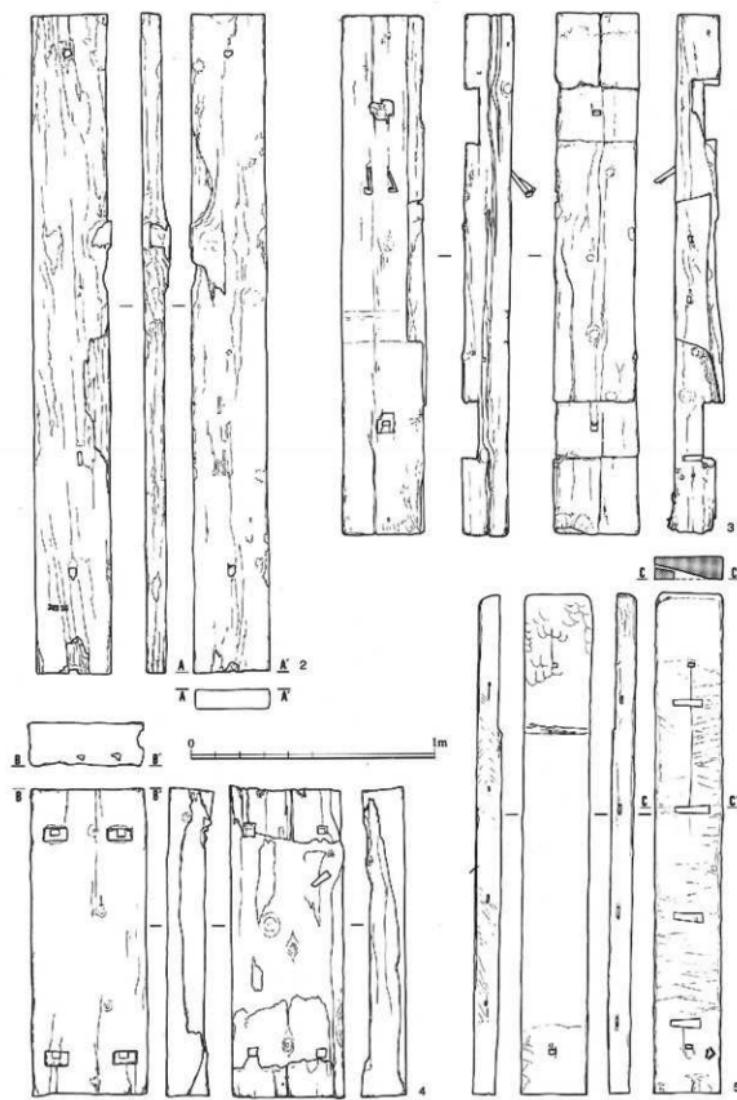


図99 西極遺構出土木材実測図(2) (S=1/20)

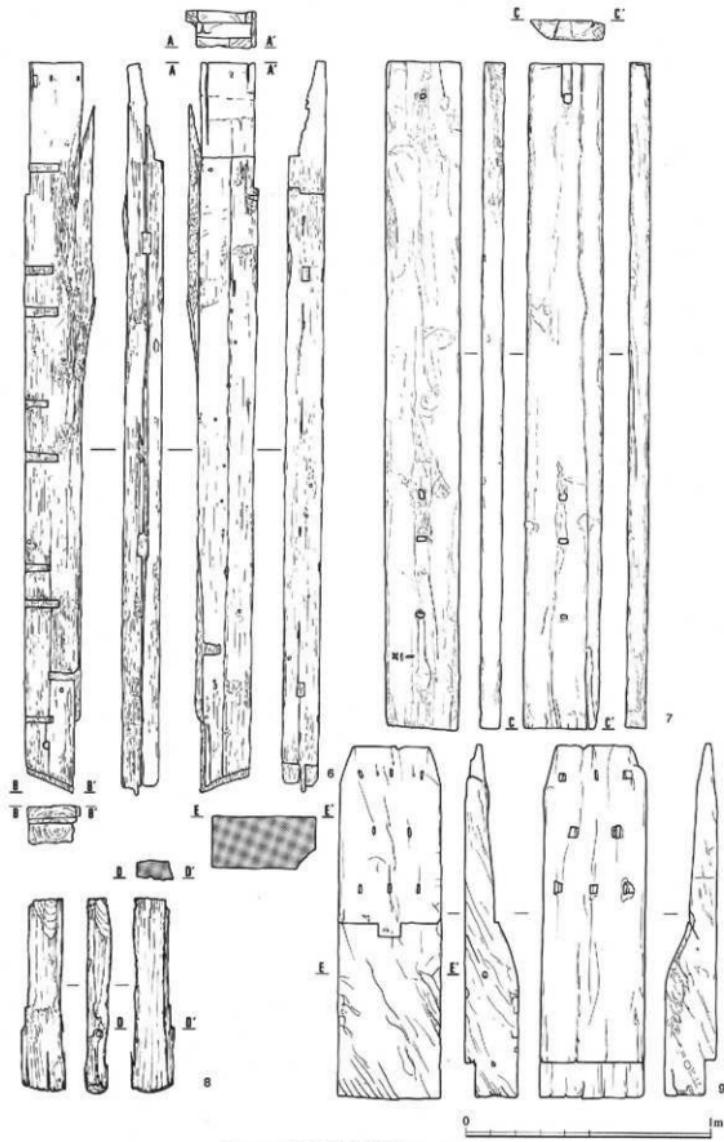


図100 西極道橋出土材木実測図(3) (S-1/20)

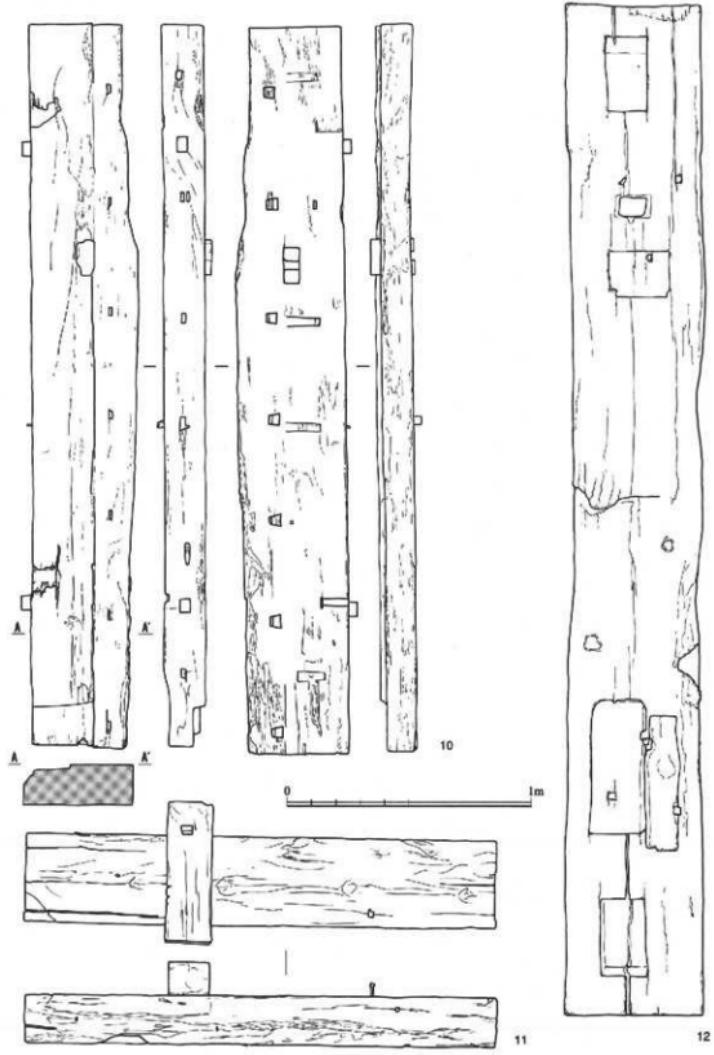


図 101 西橋遺構出土材木実測図 (4) ($S=1/20$)

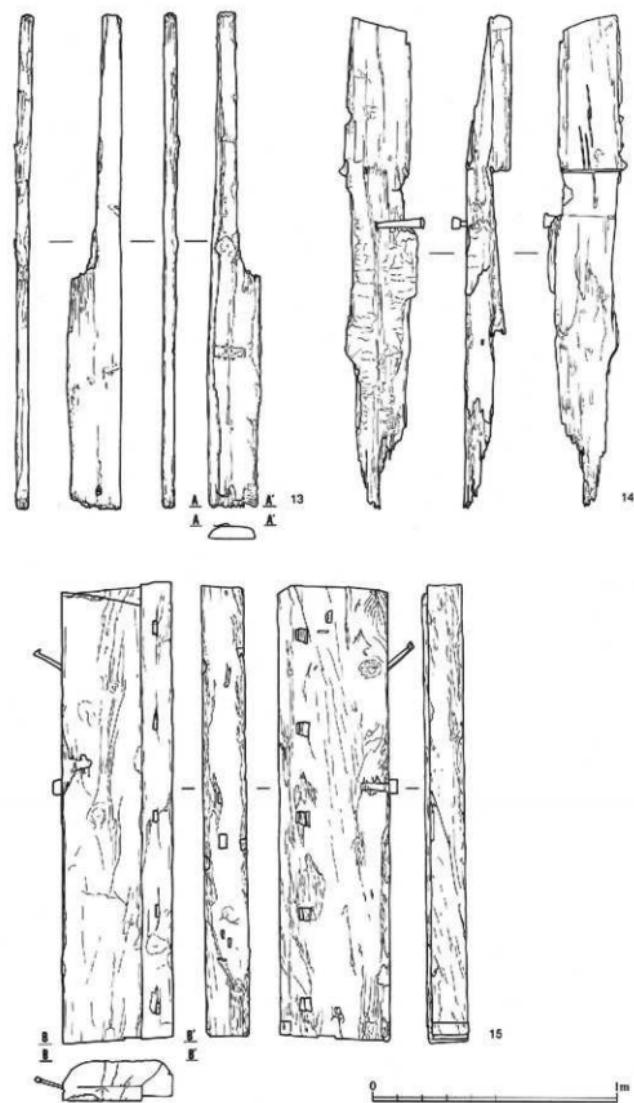


図 102 西橋遺構出土材木実測図 (5) ($S=1/20$)

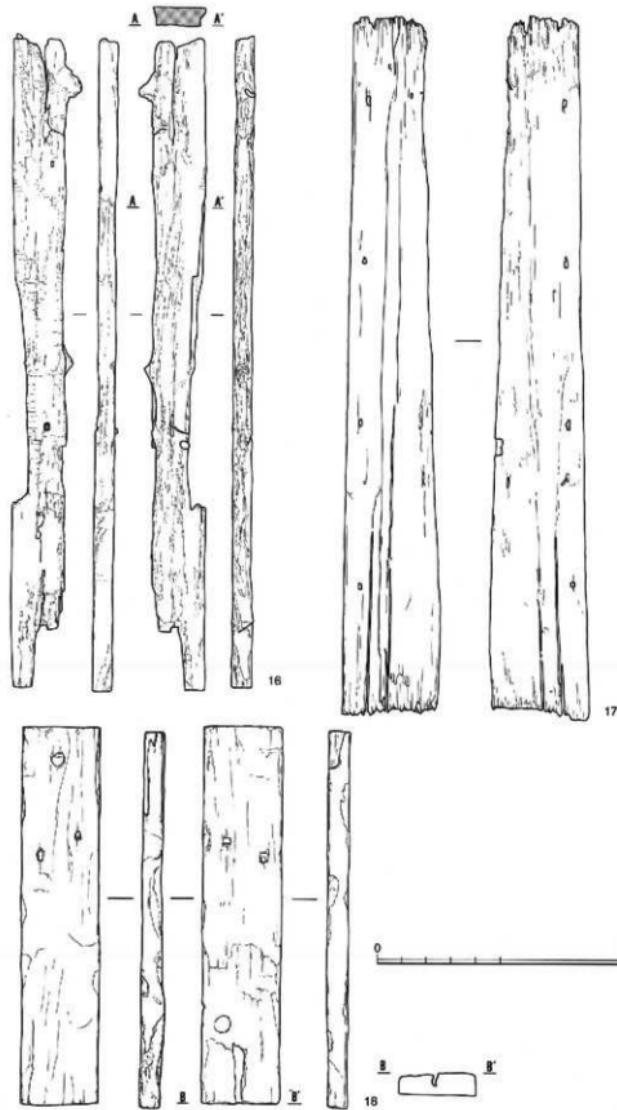


図 103 西施遺構出土材木実測図 (6) (S=1/20)

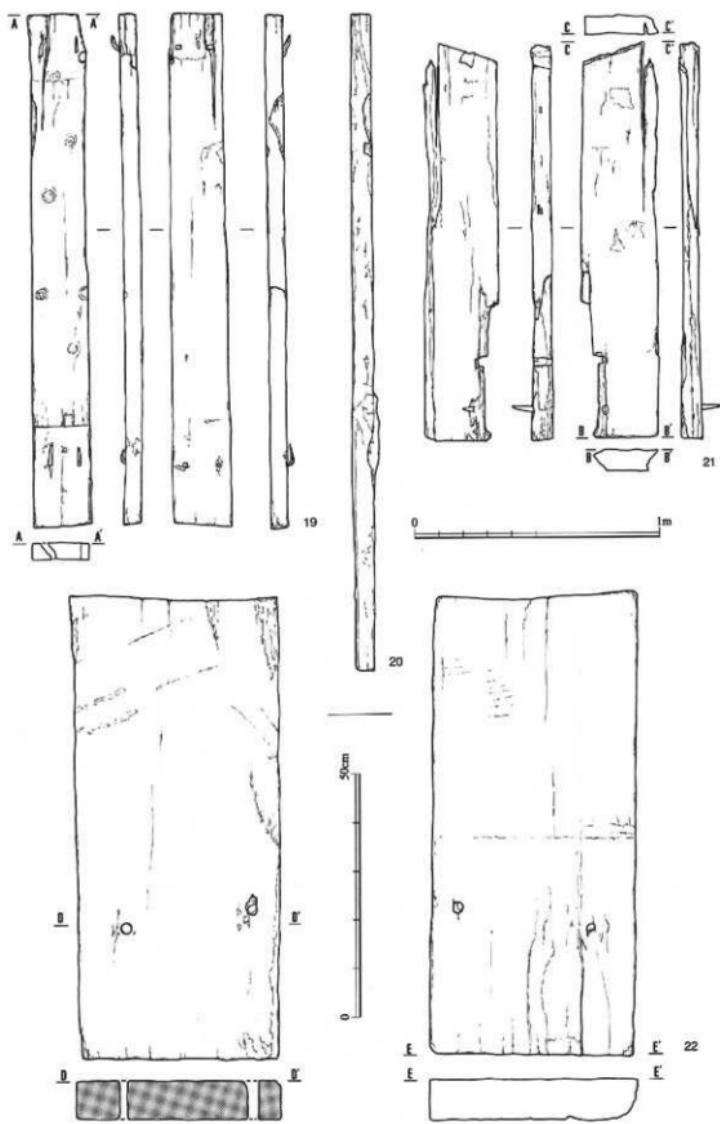
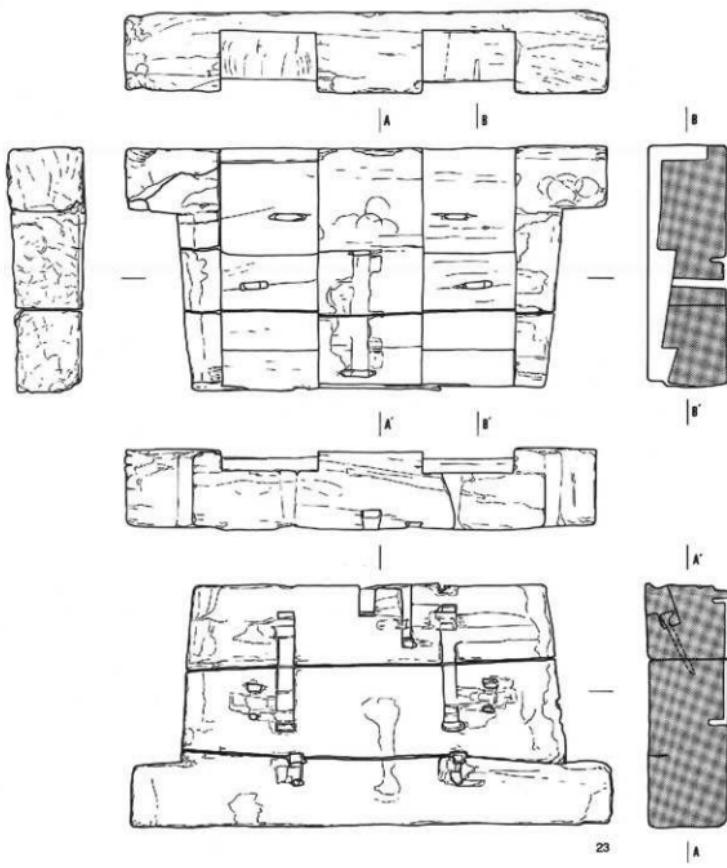


図104 西施遺構出土材木実測図(7) (S=1/10・1/20)



23

0 50cm

図105 西極造構出土木材実測図(8) (S=1/10)

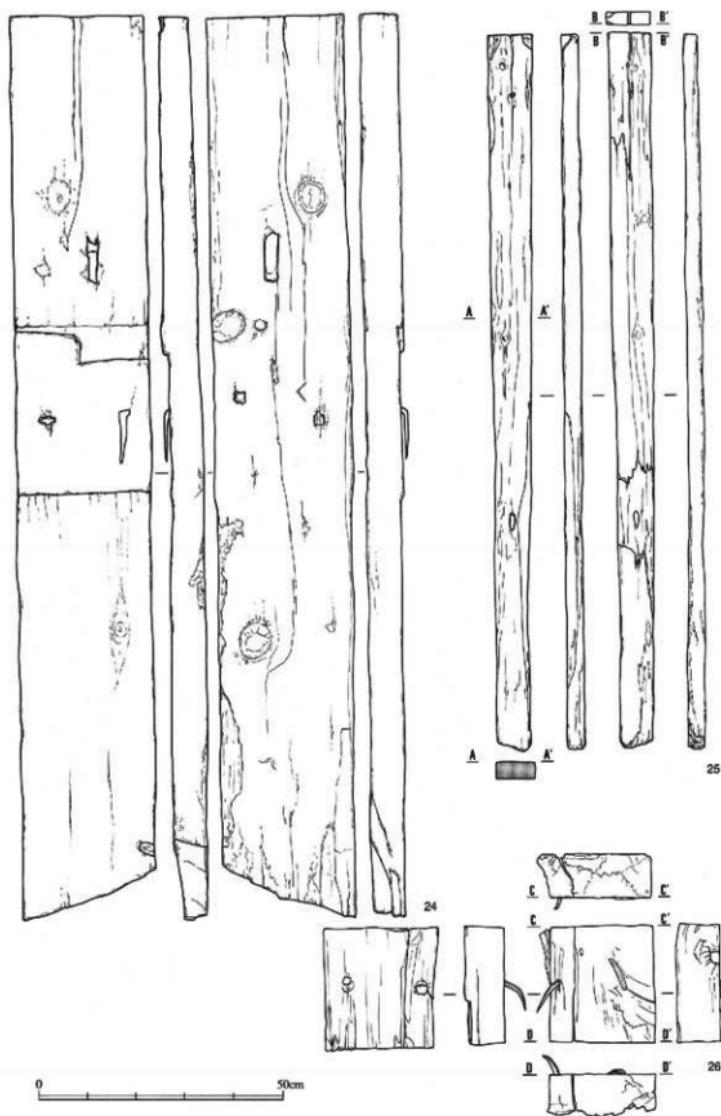


図 106 西祇遺構出土材木実測図 (9) ($S=1/10$)

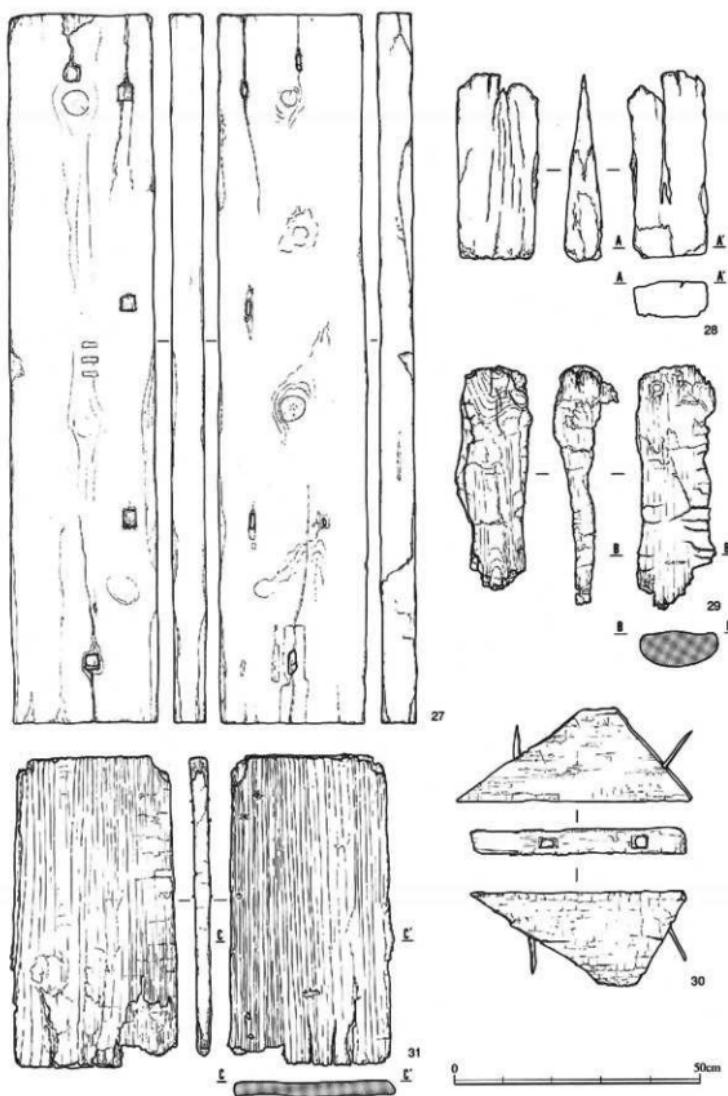


図107 西極遺構出土木材実測図 98 (S-1/10)

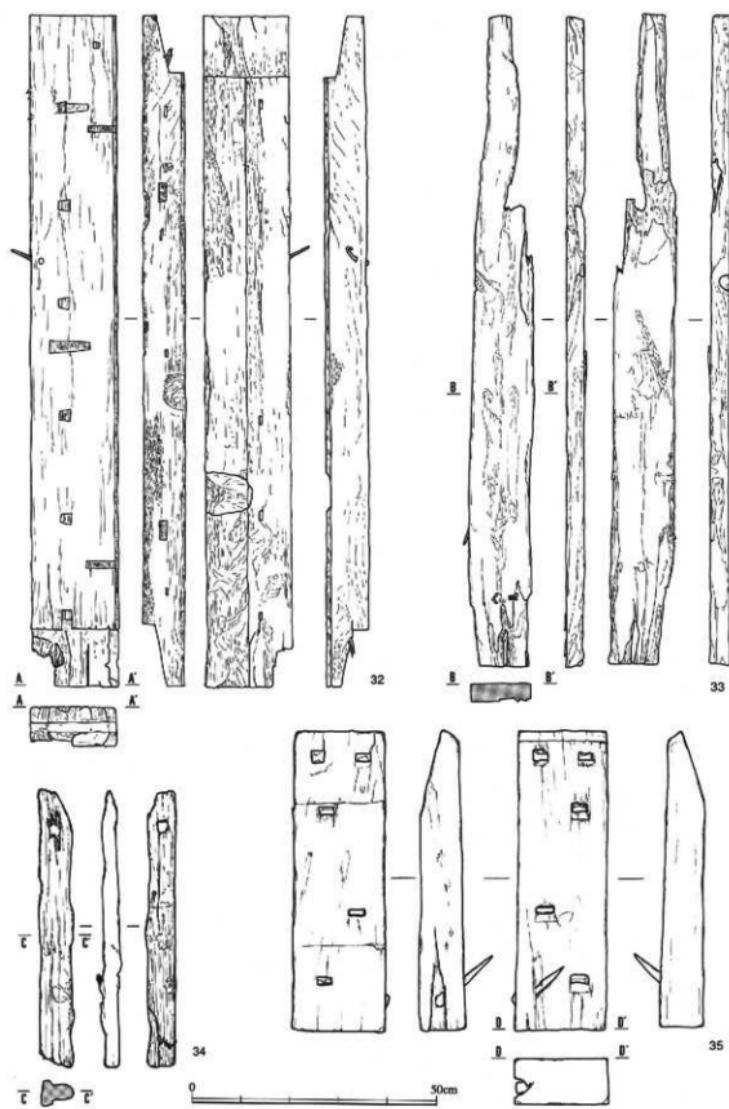


図 108 西藏遺構出土材木実測図 II (S=1/10)

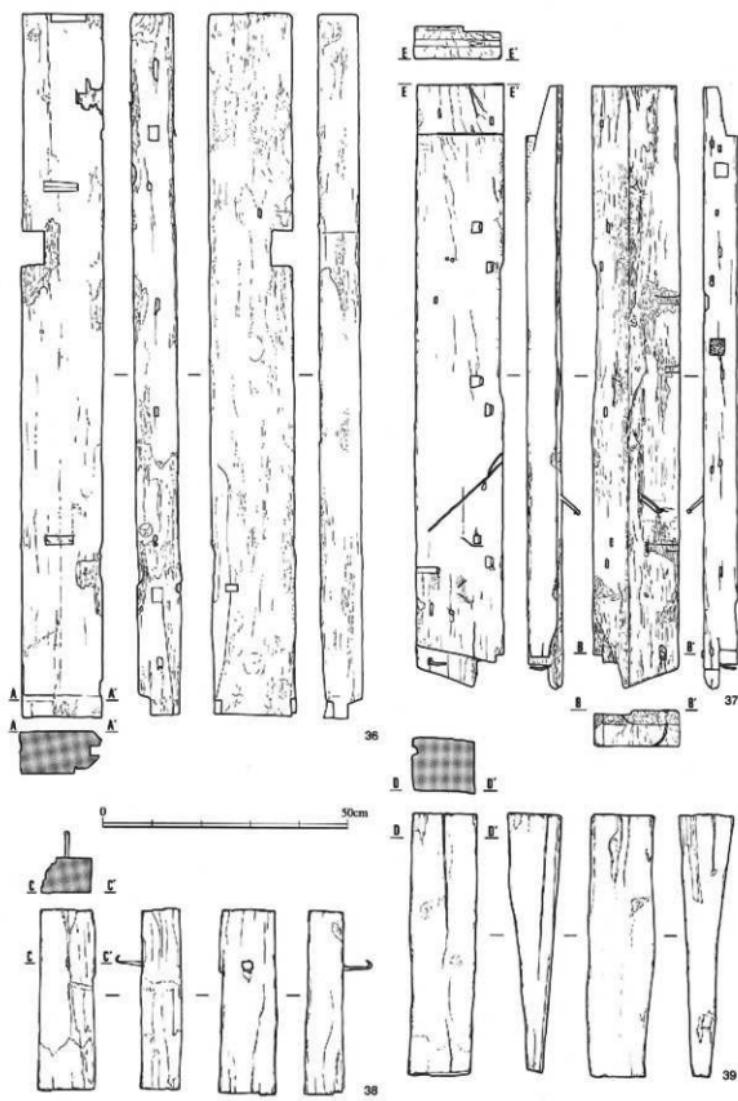


図109 西棟造構出土材木実測図 39 (S=1/10)

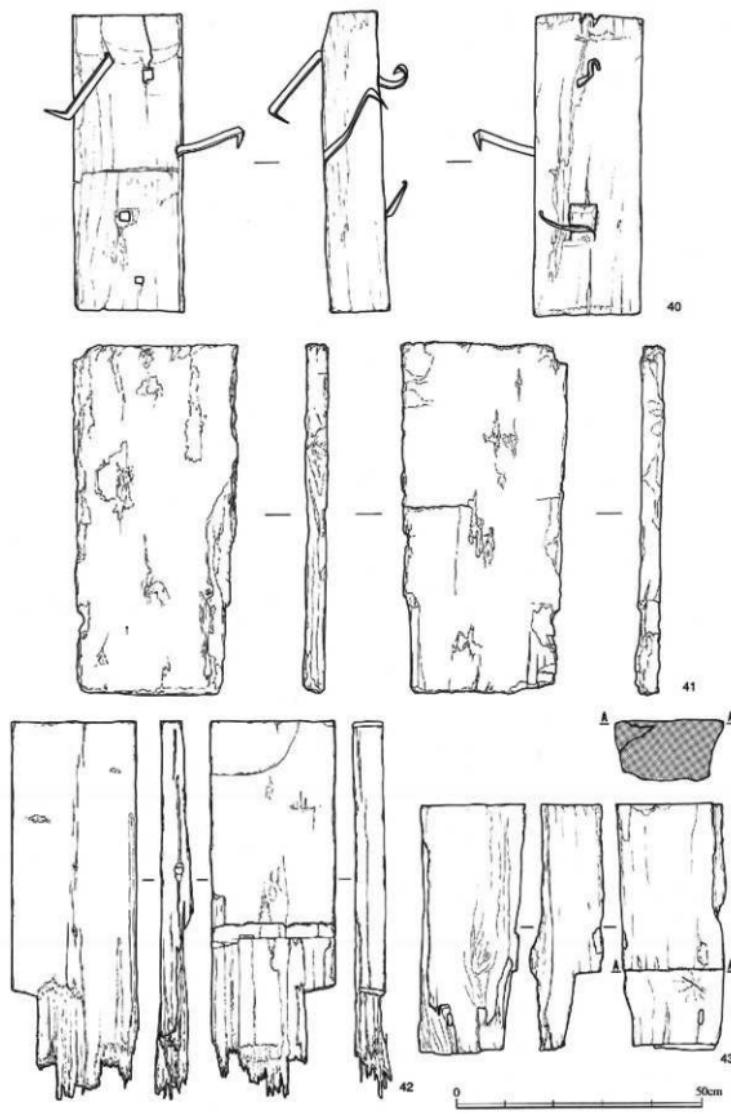


図110 西橋遺構出土材木実測図 09 (S=1/10)

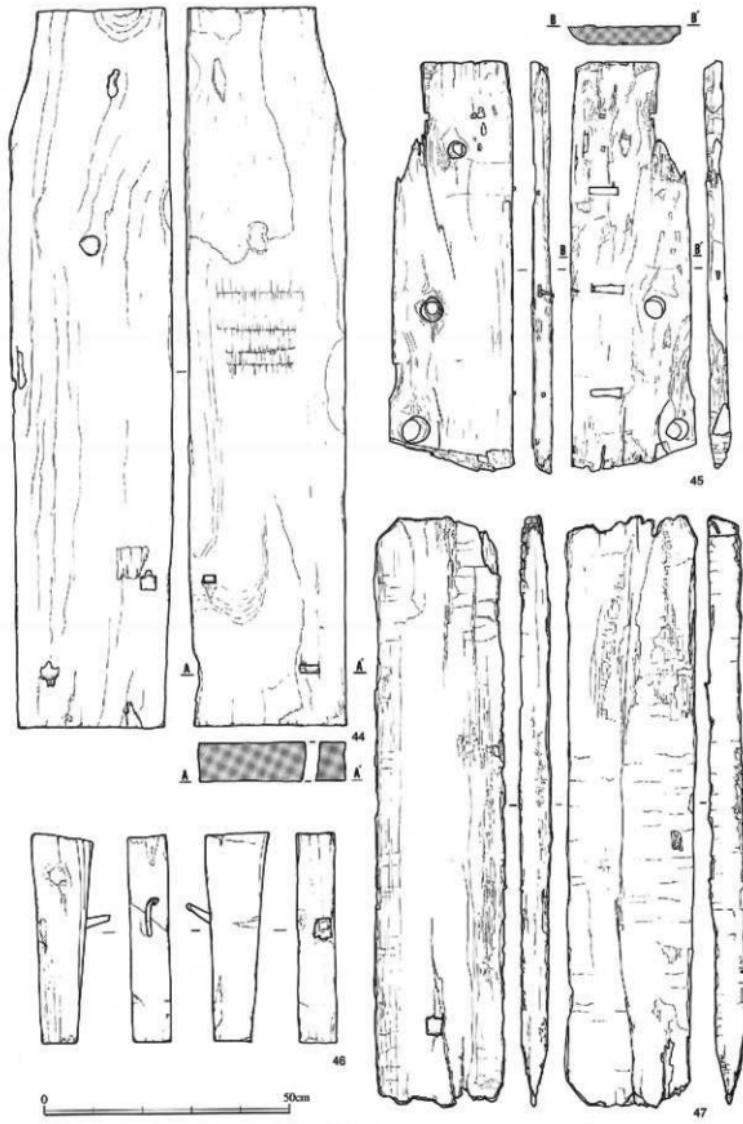


図111 西種遺構出土材木実測図 06 (S-1/10)

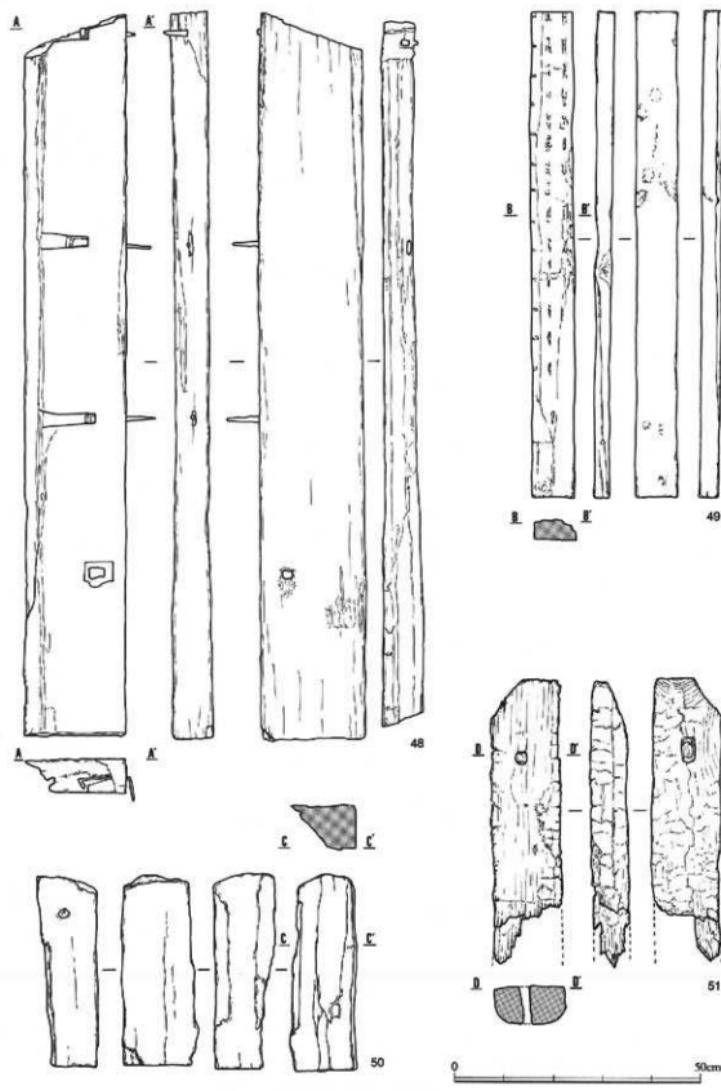
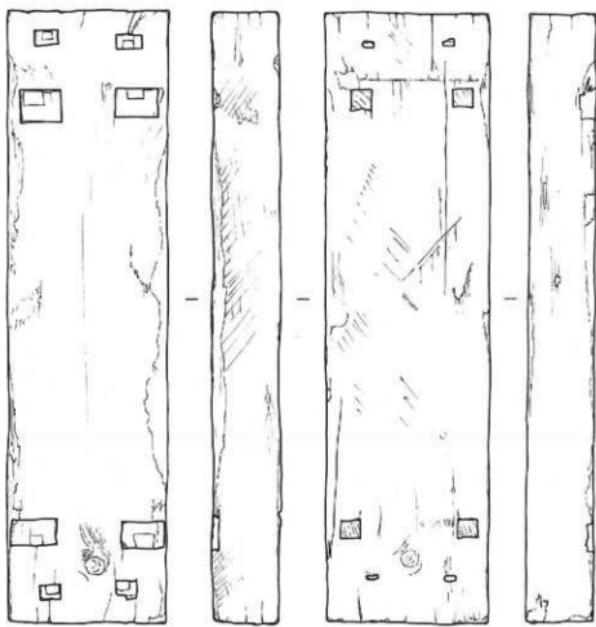
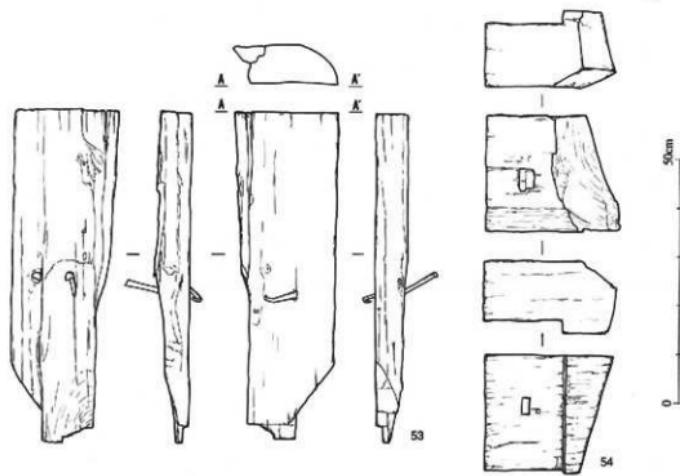


図112 西施遺構出土木材実測図 03 (S=1/10)



52



53

54

図 113 西橋遺構出土材木実測図 06 (S=1/10)

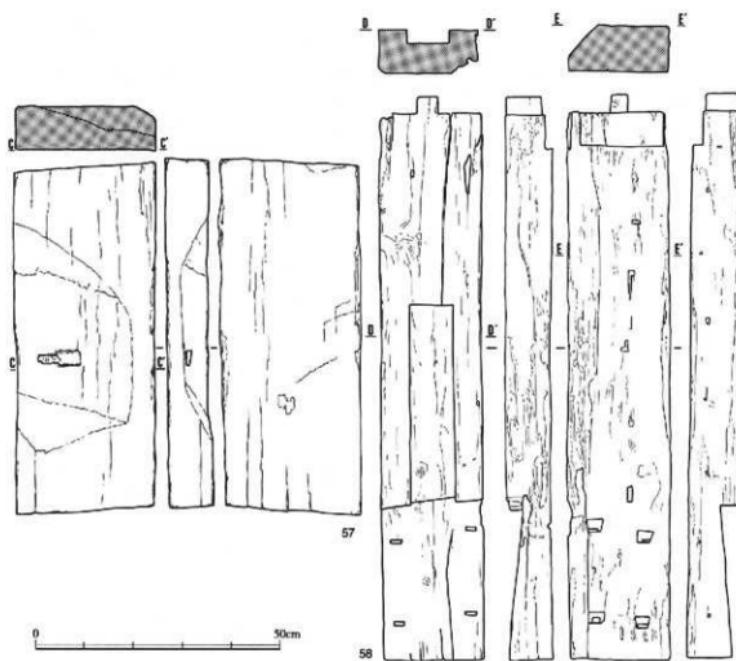
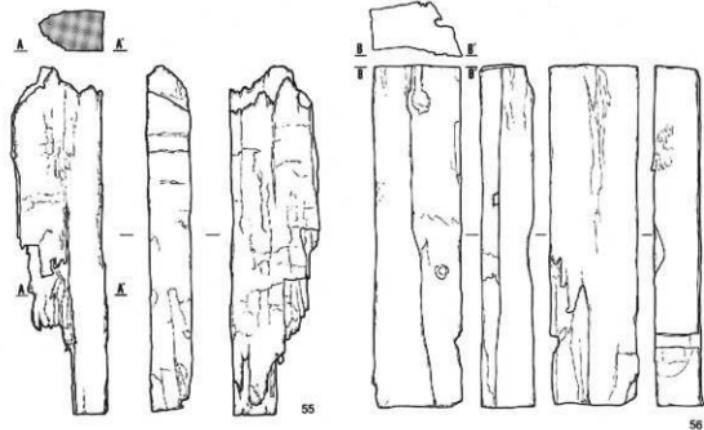


図114 西橋遺構出土材木実測図 07 (S=1/10)

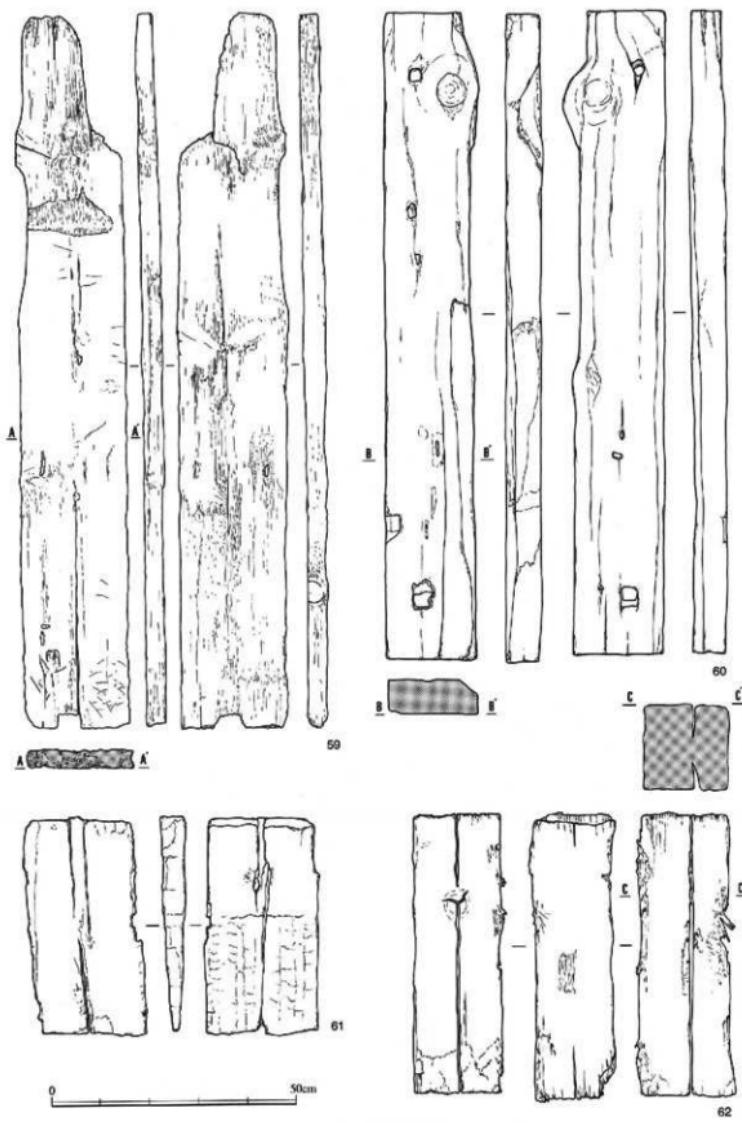


図115 西橋遺跡出土材木実測図 08 (S=1/10)

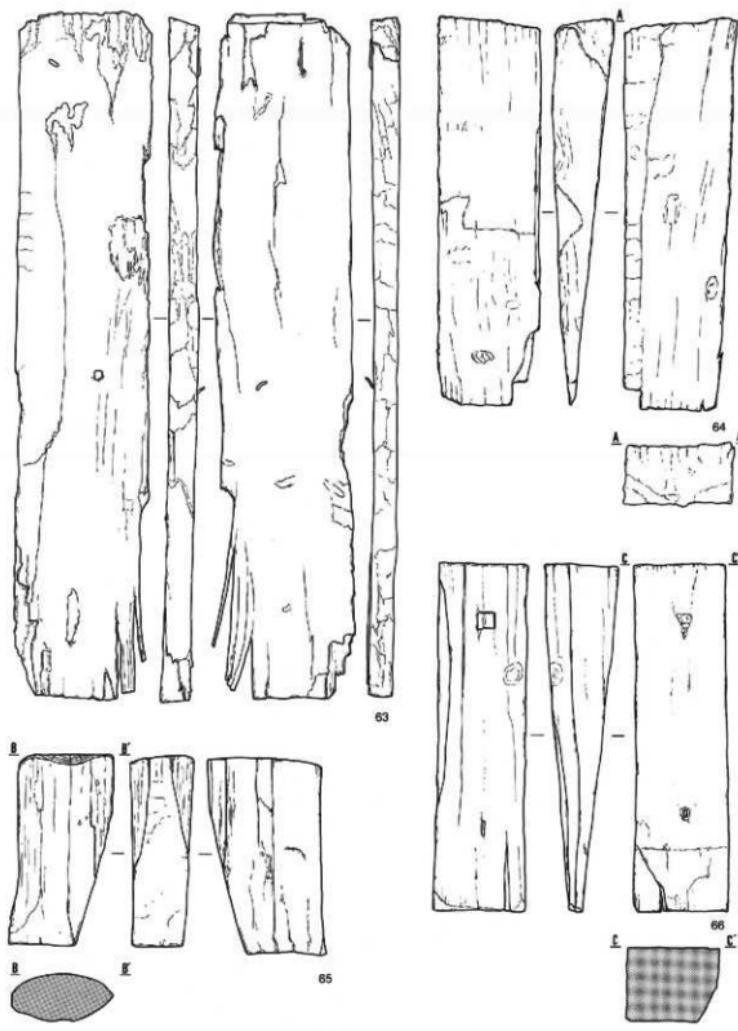


図116 西様造構出土材木実測図 03 (S=1/10)

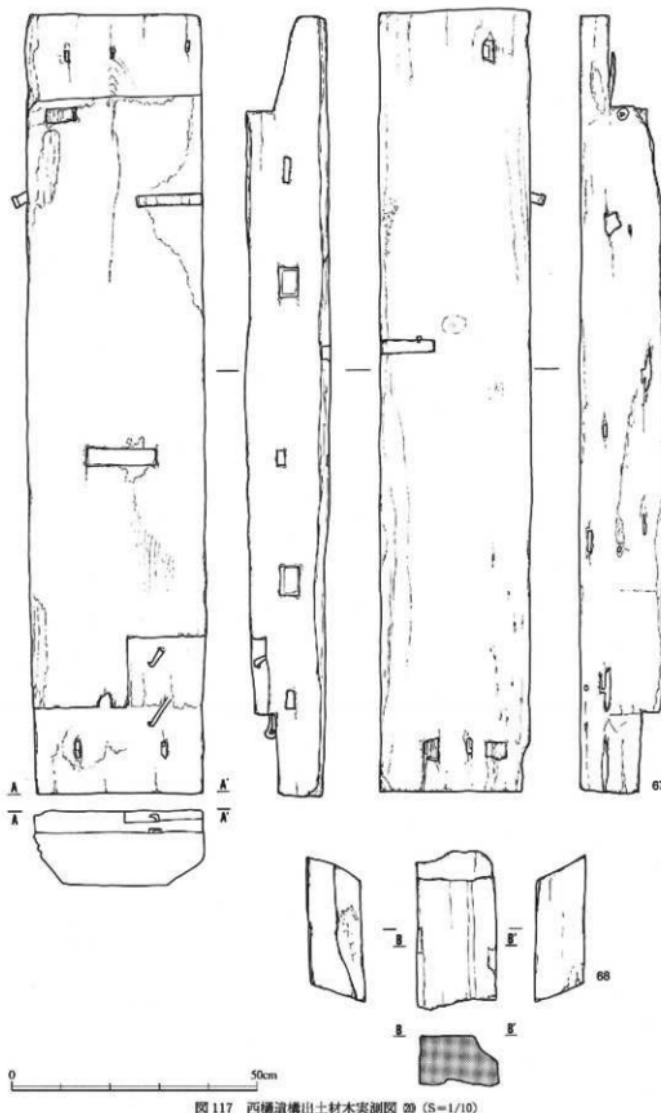


図117 西橋遺構出土材木実測図 20 (S=1/10)

0 50cm

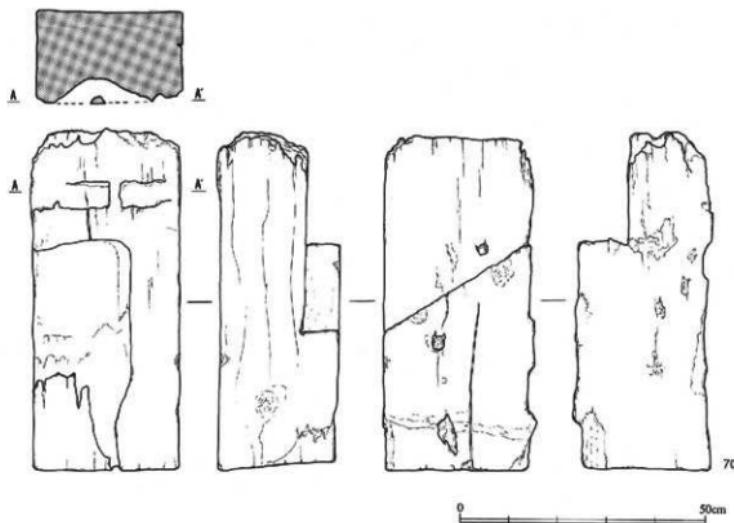
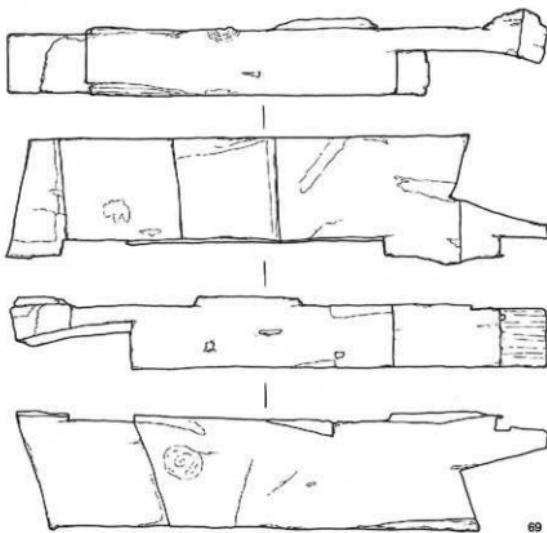


図118 西種遺構出土木材実測図 69 (S-1/10)

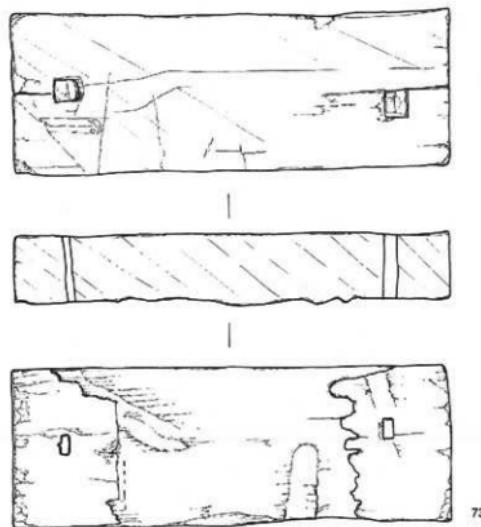
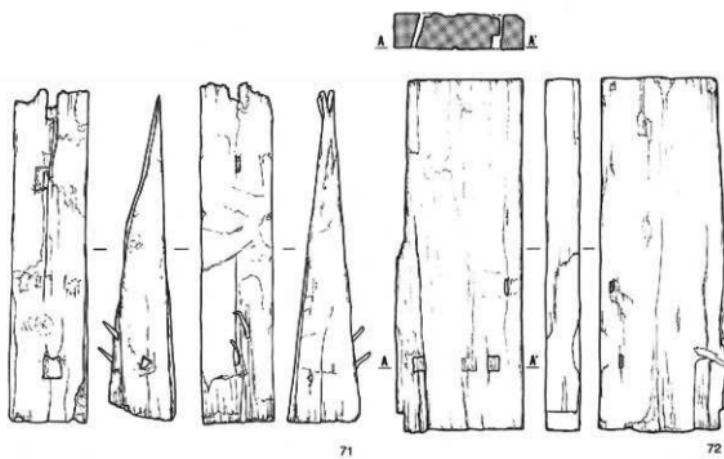
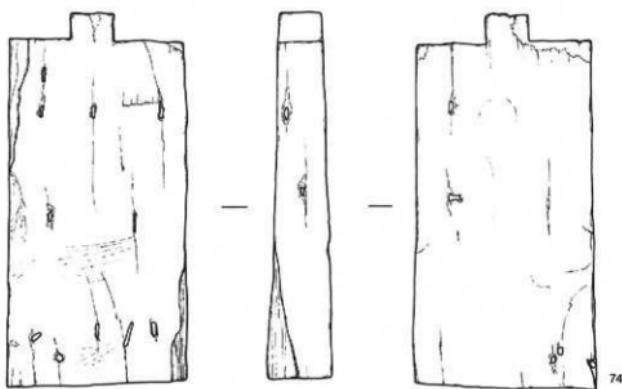
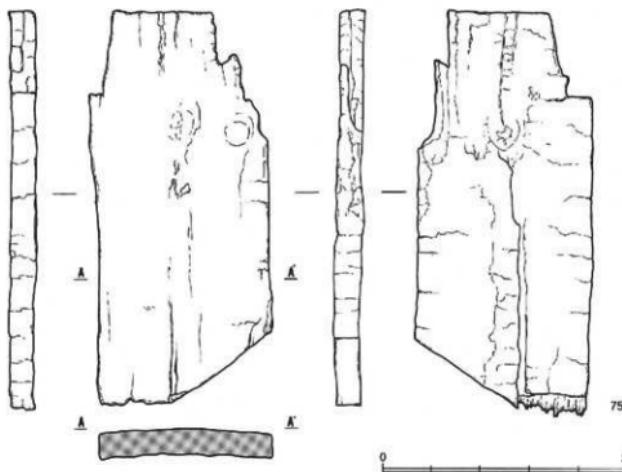


図119 西縦連構出土材木実測図 ② (S-1/10)

0 50cm



74



75

図120 西橋遺構出土材木実測図の(S=1/10)

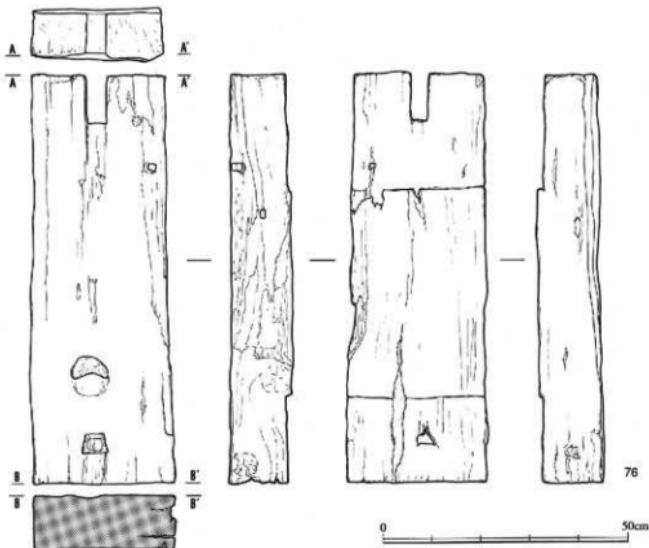


図121 西極遺構出土木材実測図 26 (S=1/10)

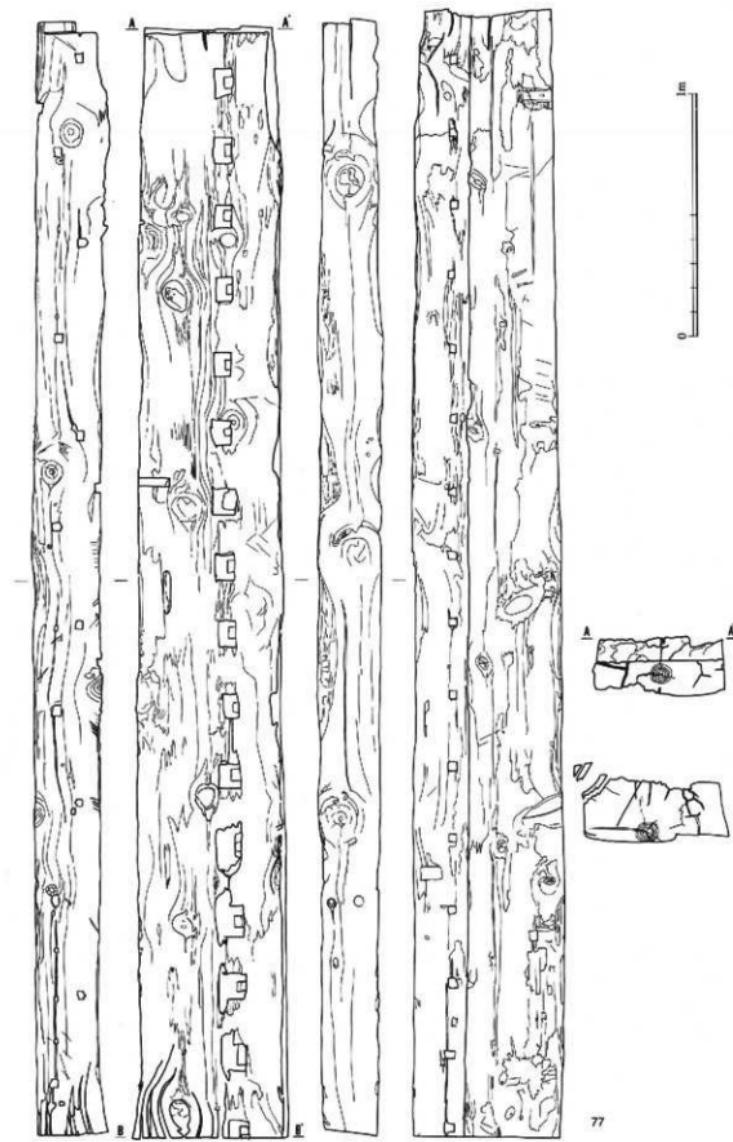


図122 西施造出材木実測図 (S-1/20)

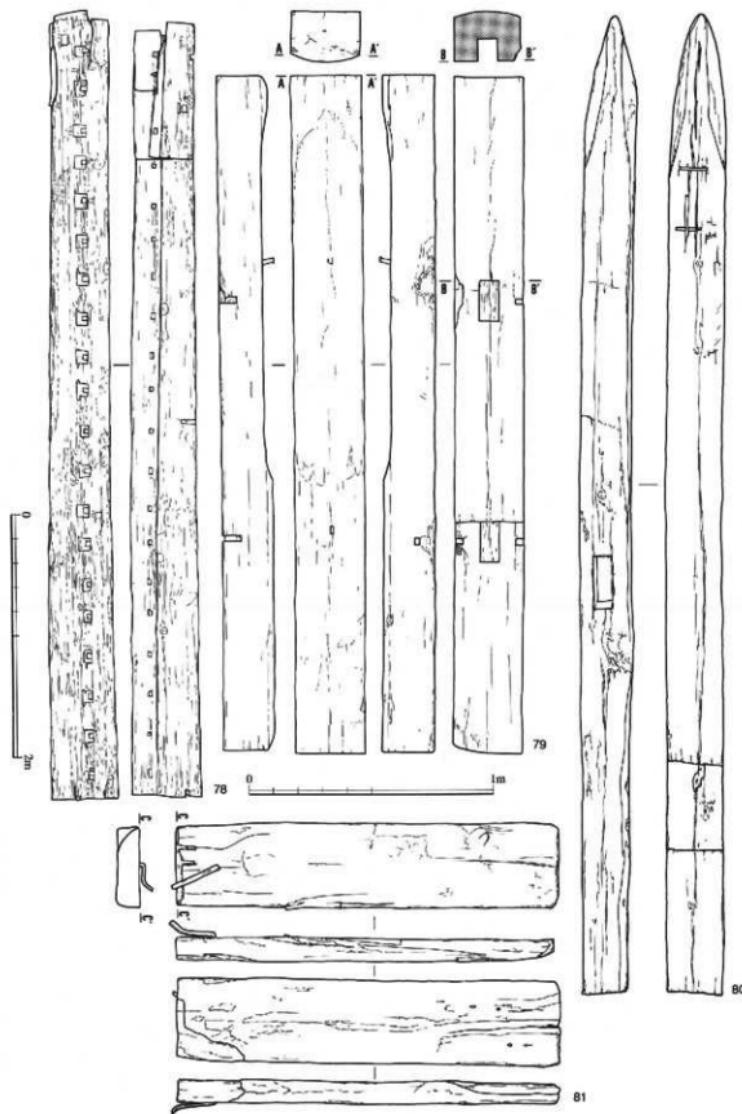


図123 西橋道橋出土材木実測図 ⑨ (S=1/20・1/40)



82

A

A'

0

1m

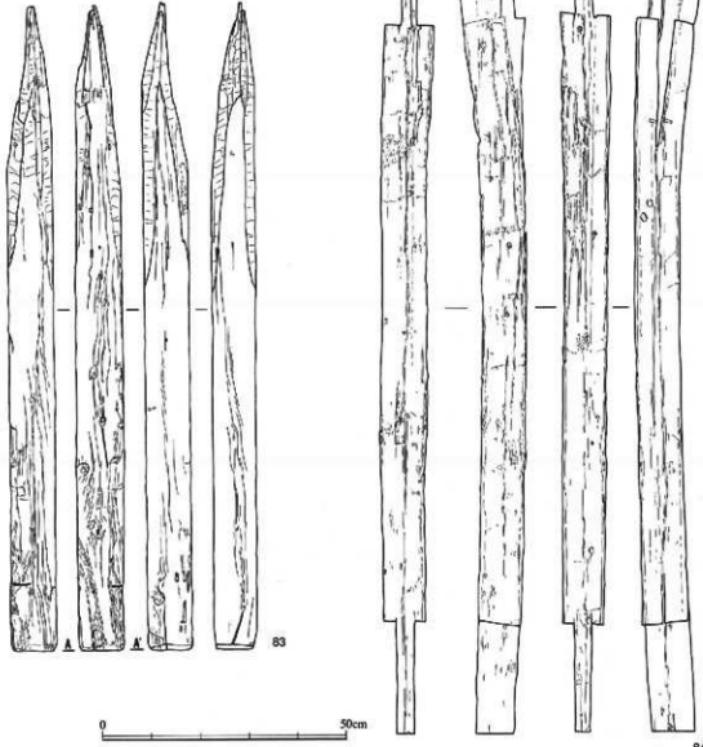


図 124 西橋遺構出土木材実測図 ② (S=1/10・1/20)

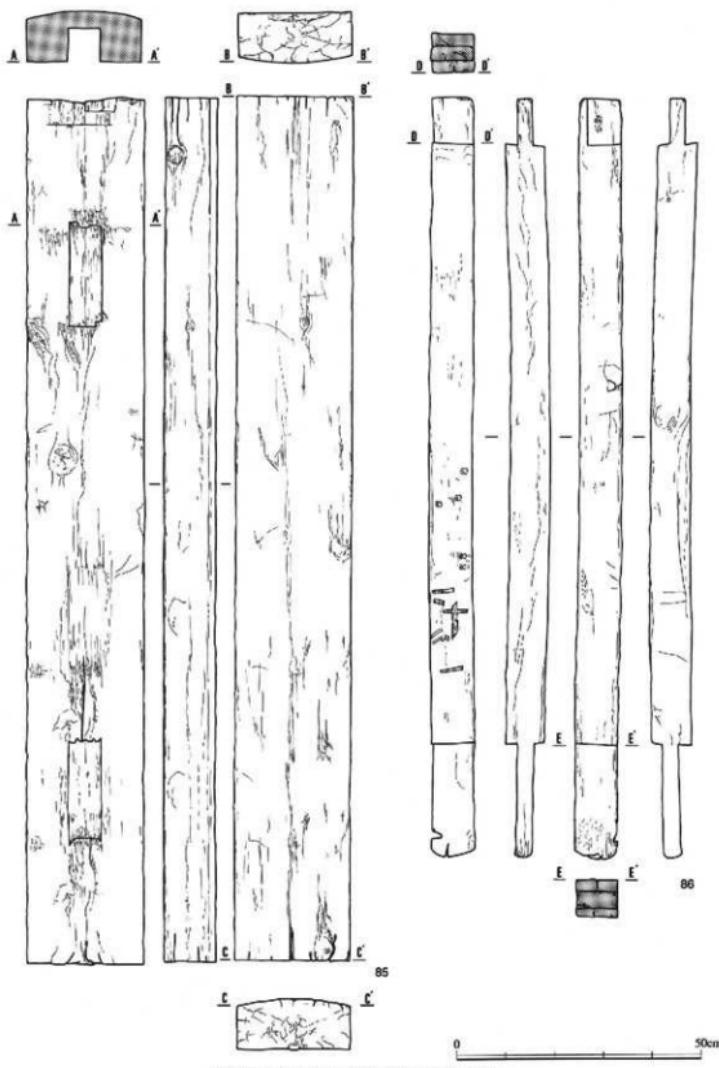


図125 西施遺構出土材木実測図 29 (S-1/10)

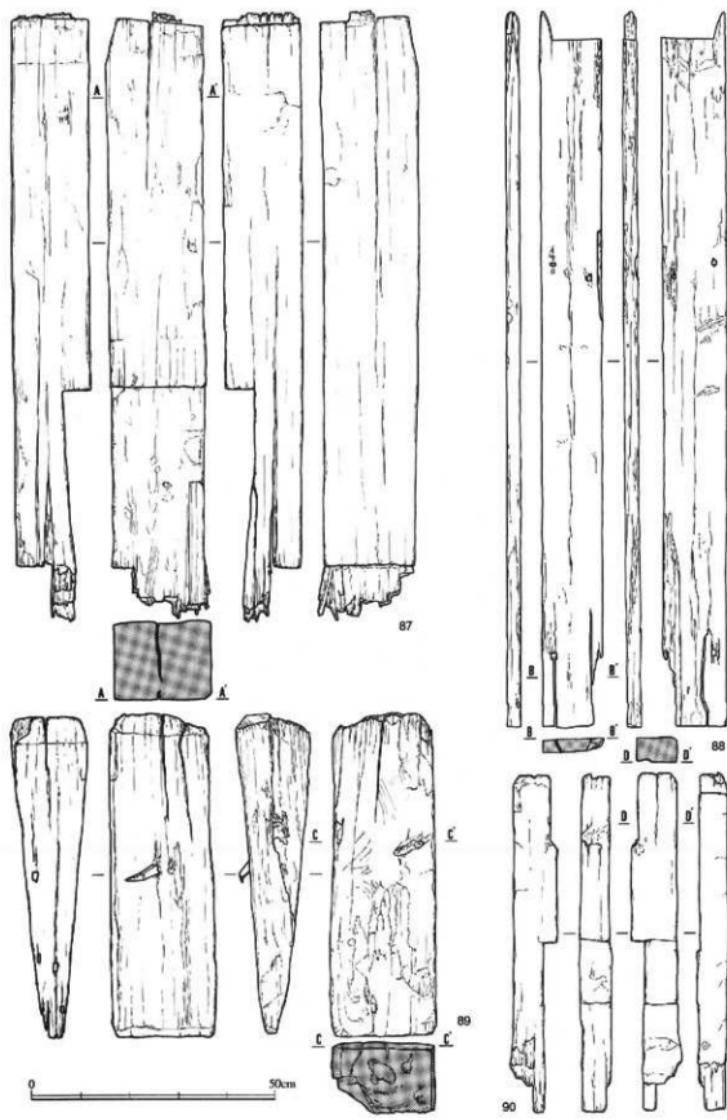


図126 西総遺構出土材木実測図 ⑨ (S=1/10)

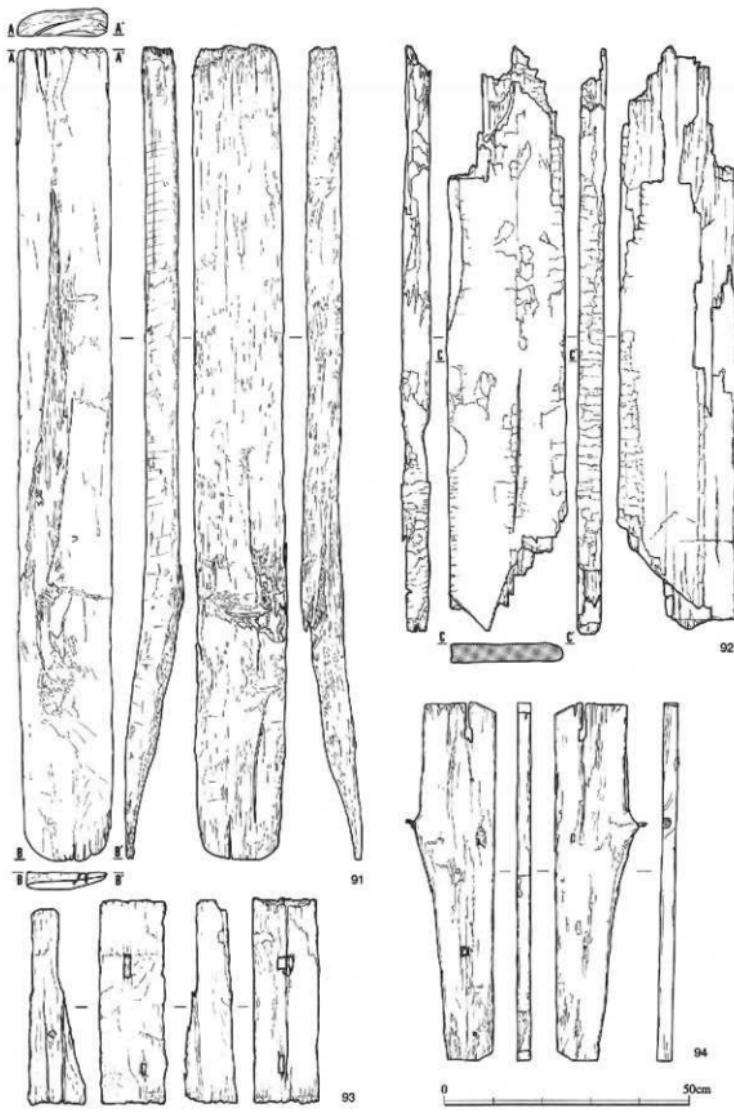


図 127 西橋遺構出土材木実測図 08 (S=1/10)

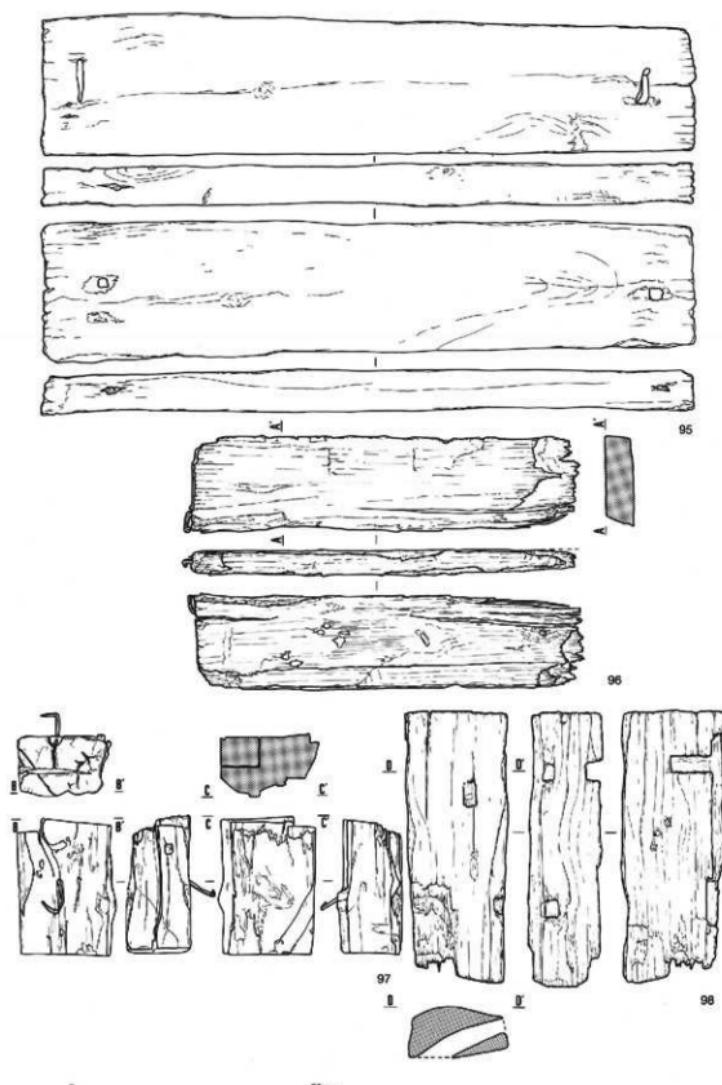


図128 西橋遺構出土材木実測図 39 (S=1/10)

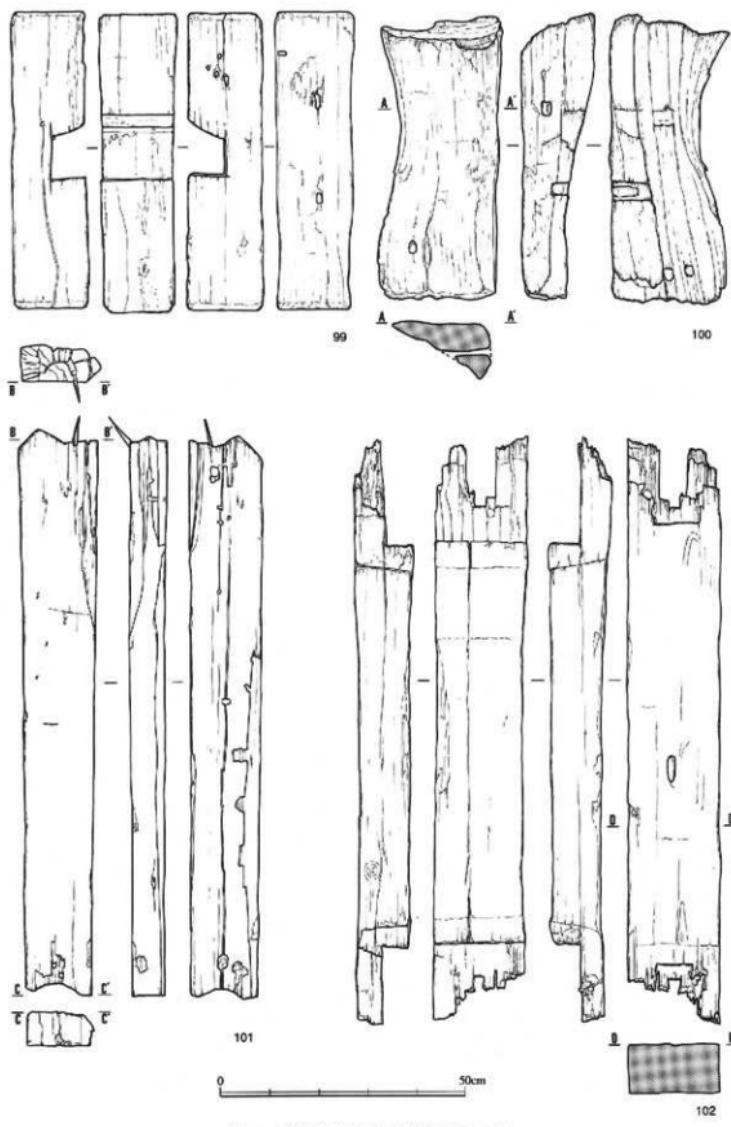


図 129 西穂波橋出土材木実測図 ③ (S=1/10)

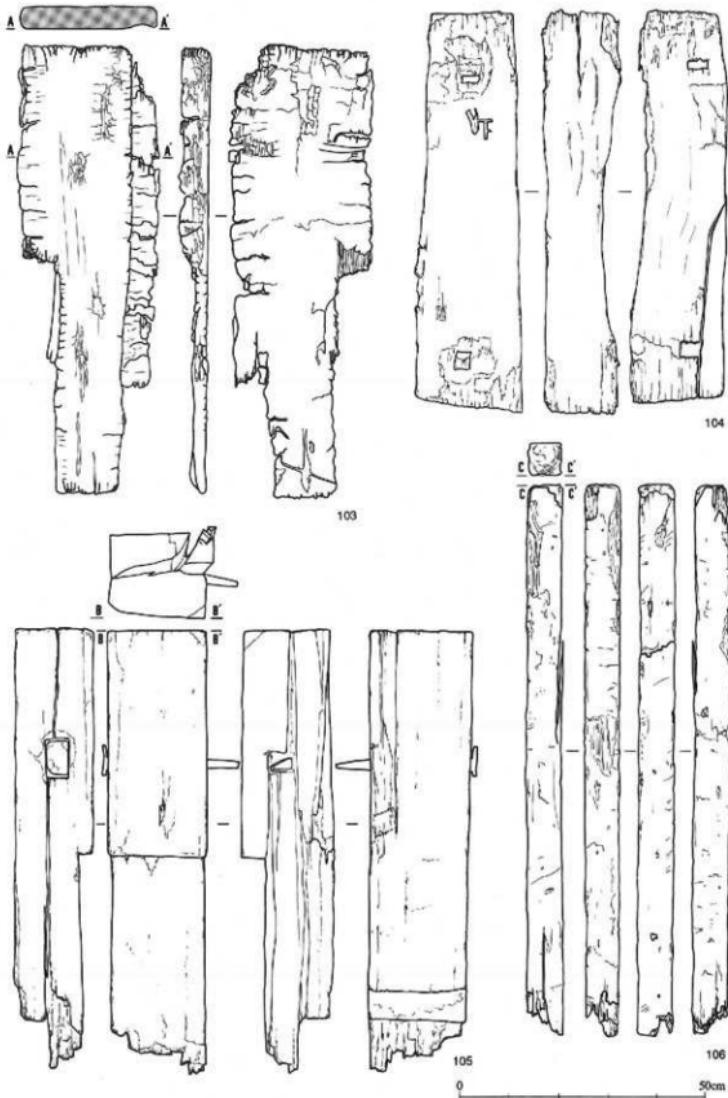


図130 西街造構出土材木実測図 39 (S-1/10)

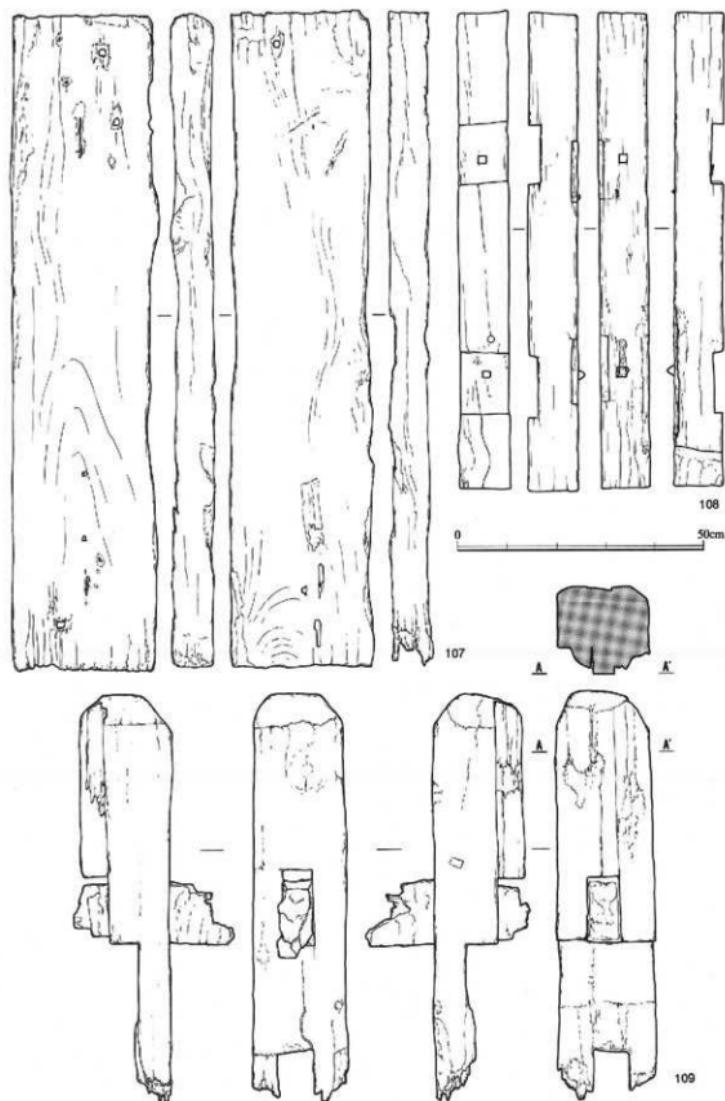


図 131 西施遺構出土材木実測図 06 (S=1/10)

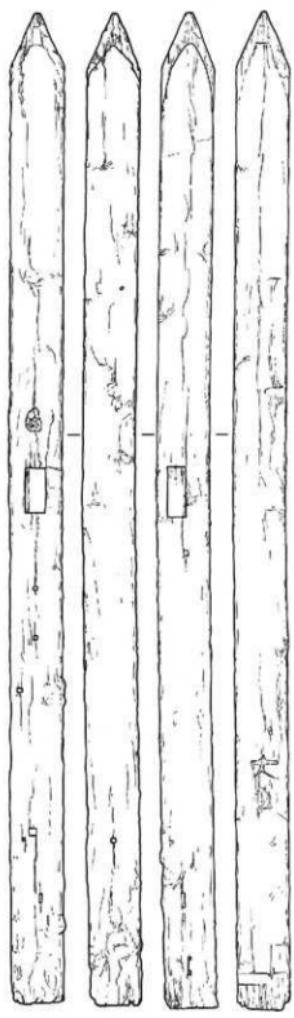
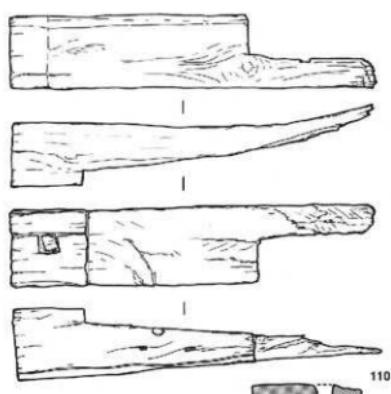


図132 西窯造構出土材木実測図 03 (S=1/10)

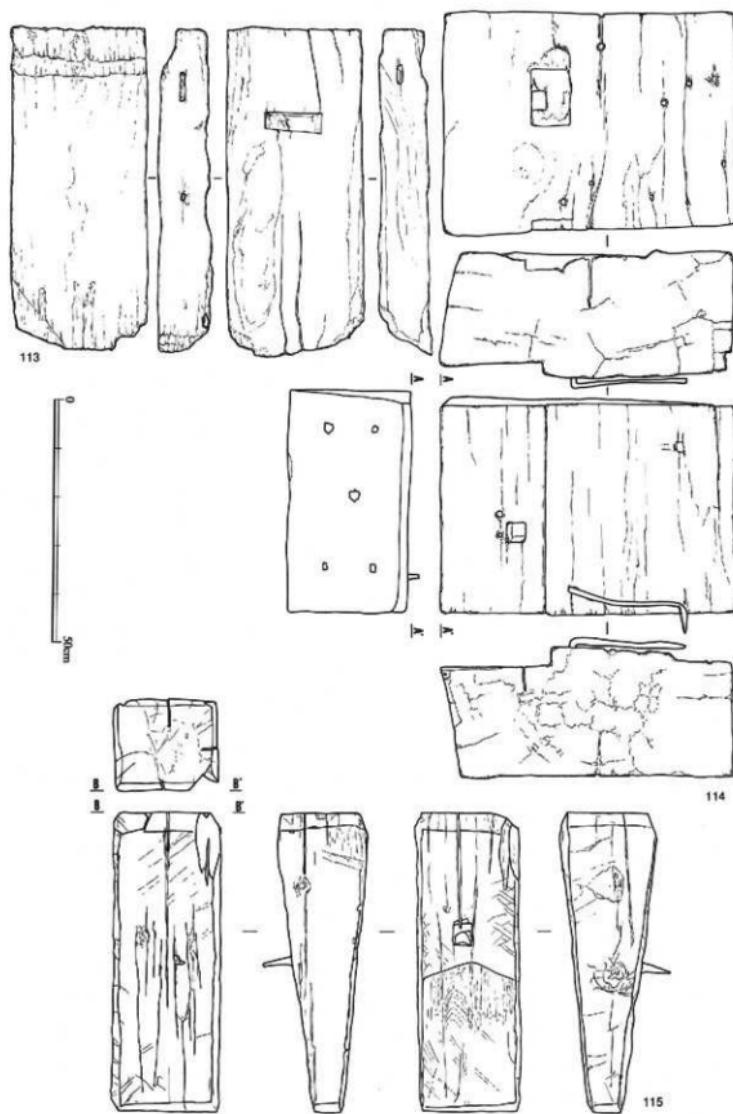
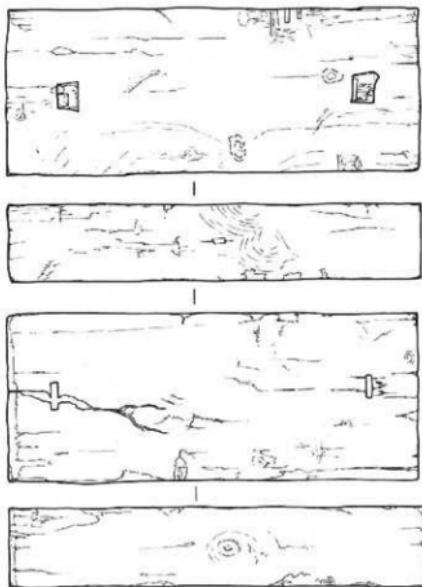


図 133 西施遺構出土材木実測図 36 (S=1/10)



116



0 50cm

117



図134 西橋造構出土材木実測図 ⑩ (S=1/10)

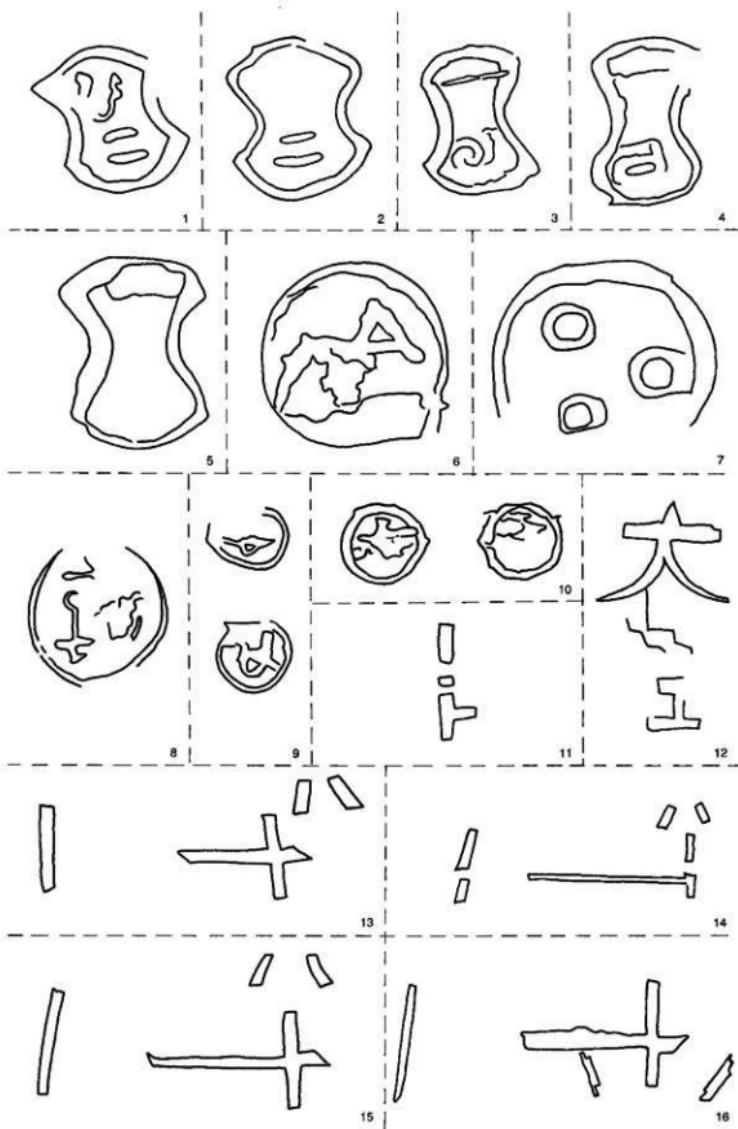


図135 西畠遺構出土材木の刻印・刻字 (I)

④刻印・刻字・墨書
またこれらの樋の部材には刻印や、刻字あるいは墨書きがみられた
(図135・図136)。図135

-1～8は材木78におされた刻印で分銅型のものと円型のものがある。
刻印は打ち付けるタイプのものばかりで、いわゆる焼印はみられない。
1・2は東樋上層遺構の樋管において同じものが検出されている。

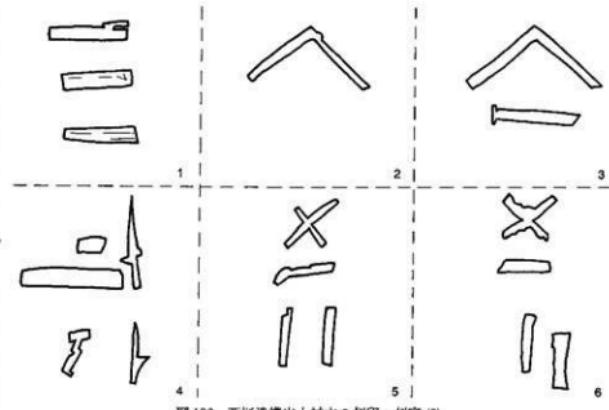


図136 西樋遺構出土材木の刻印・刻字(2)

る。図135-11～16まではいずれも柱材にノミで彫りこまれたもので、12は材木112、13は材木86、14は材木84、15は材木80、16は材木117に彫られている。112は「大工」と彫られているようであるが、13～16はいずれも「ハ」「十」「一」の三字を組み合わせた形となっている。図136に示したのは細いノミで彫られた記号である。1は3本の線で材木27に彫られている。2は「へ」の字型の記号で材木24に、3は「へ」と「一」の組合せで材木5に彫られている。4は「-」の字で材木15に、5は「X」と「-」と2本線の組合せで、材木2に彫られている。6もほぼ同様の記号で材木7に彫られている。これらの記号は非常にシンプルで、なにかの符号のようであるが、今のところその意味するところは不明である。すべて板材に彫られているが、その中には材木5のように樋本体の壁板と見られるものと材木15のように船材の再利用材とみられるものがあることから、樋へ再利用の時、あるいはそれ以後に彫られたものとみられる。

また樋の柱材には墨書きが見られた(図137)。「河筋狭山池樋材木十五ノ内」と書かれている。慶長13年(1608)の改修時に書かれた墨書きと思われる。

⑤金属器

西樋遺構からは多くの釘、カスガイなどの金属器が出土している。材料はすべて鉄である。もちろん材木についたままの釘、カスガイなども多くみられたが、ここでは材木とは独立して堆積土砂の内部や材木の間から出土したもののみを取り上げた。図138-1～8、および図11～13は鉄釘である。いずれも長方形の断面をもつ鉄を先端で折り曲げて頭としたもので一番長い14は長さ37.5cmという巨大な釘である。頭は1・2・3のように比較的短いものは胴とおなじ幅であるが、大きなものでは幅が広くなり、13などでは脚部の約2倍の幅となっている。西樋遺構をはじめ、東樋上層遺構や中樋遺構などでは、樋本体や樋管において今回出土したのと同様の巨大な釘が隨所にみられる。

これらの釘が船釘なのか、建築用の釘なのかはもちろん不明であるが、後述するように狭山池の慶長13年の改修には船大工の関与が想定されており、船釘が樋の建造に利用されたと考えることもでき

河筋狭山池樋材木十五ノ内

図137 西樋遺構
木柱の墨書き

表11 西橋造構上金属器数量表

番号	種別	全長	頭部長	脚部長	頭部幅	脚部幅	頭部厚	脚部厚
1	釘	20.4	2.4	18.8	2.8	2.1	1.8	1
2	釘	15	1.9	14	1.8	1.7	1	0.9
3	釘	9.6	2.3	8.7	2.3	2	0.9	1
4	釘	21.2	3.1	20.1	6	2	1.1	0.9
5	釘	10.4	1.8	9.7	2.2	1.5	0.7	1
6	釘	16.4	1.9	15.1	2	1.8	1.3	1
7	釘	25.8	4.1	24.3	5.9	3.8	1.5	2.3
8	釘	21.6	3.8	20.5	5.5	4	1.1	2.1
9	不明	15.5	最大幅5.5 厚さ5.6	脚部長5.8				
10	不明		-	边幅4.9 厚さ4.5~4.9				
11	釘	32.6	3.8	31.3	6.9	3.7	1.3	2.1
12	釘	29.2	3	28.2	5.2	3.2	1	2
13	釘	36.3	5.3	35	7.8	4.2	1.3	2.6
14	釘	37.5	5.2	36.3	8.3	3.4	1.2	1.5

番号	種別	全長	脚部長	上先端長	下先端長	脚部幅	上先端幅	下先端幅	脚部厚	上先端厚	下先端厚
15	カスガイ	16.5	12.9	1.8	1.8	0.8	0.9	0.7	0.9	0.9	0.7
16	カスガイ	21.3	17.5	6.2	6.1	1.6	1.6	1.6	1.4	1.1	1
17	カスガイ	19.9	15.2	6.8	7.5	1.9	1.6	2	1.7	1.2	1.6
18	カスガイ	23.6	17.2	5	5.1	1.9	1.7	1.6	0.9	0.8	0.9
19	カスガイ	23.2	18	7.2	6.5	2	2.2	2.2	1.3	1.2	1
20	カスガイ	24.4	20.5	5.6	5.4	2.1	1.8	1.9	0.7	0.7	0.8
21	カスガイ	26.3	22.1	10.5	9.7	2.8	2.7	2.5	1.3	1.9	1.7
22	カスガイ	26.3	20.6	9.8	9.7	3.1	2.6	3.1	2.6	2.1	2.1
23	カスガイ	26.9	22.6	9.6	10.1	3	2.5	3	2.2	1.4	2
24	カスガイ	26.2	20.8	6.6	7.1	1.9	1.4	1.9	2	1.7	1.6
25	カスガイ	20.5	19.2	3.9	3.7	0.8	0.8	0.6	0.9	0.8	0.7
26	カスガイ	25.6	19.5	7.8	7.8	1.5	1.5	1.2	1.5	1.2	1
27	カスガイ	31.2	26.6	8.5	7.2	1.7	1.7	1.3	1.7	1.5	1.2
28	カスガイ	26.7	22.9	6.9	7.2	2.8	2.8	2.8	1	0.9	0.9
29	カスガイ	28.4	24.7	7.2	6.9	2.8	2.4	2.2	2.2	0.8	0.8

る。また東極上層造構では千本をはるかにこえる釘が確認されており、西極・東極においても同程度、あるいはそれ以上の数の釘が必要であったと思われることから、極の築造にあたっては現地近くに鍛冶屋が勤員され、大工からの注文に応じて必要な形態の釘が製作されていた可能性が強い。仮にこれらの釘が船釘であるとすると、先に述べた先端を曲げただけの形態のものは「皆折釘」、先端を折り幅を広げた形態のものは「四釘」「継手釘」などと呼ばれていたことが「和漢船用集」に記されている。また皆折釘は縫釘として利用されていたことが「木割書」に記されている。西極造構の本体に残る釘を見れば、このような船釘としての釘の機能はそのまま極にも継承されていることがわかる。

図138-9は扁平な三角形に先端が尖った柄がついた鉄器で、両刃の刃物であることはわかるが用途は不明である。ヤリカンナとして利用されていた可能性がある。10は鉄の固まりであるが、断面をみると一方が尖っている。ノミの先端であった可能性がある。図140-14~19、図141-20~23、図142-24~27、図143-28、29はすべてカスガイである。胸部の形態は、断面が16、17のように比較的細くて正方形であるもの、19、20のように扁平なもの、21、22のように太くて正方形の断面をもつものに分けられる。また15~23、29は脚部の方向が同じであるのにに対して、24~27は脚部が90度の角度を持っている。この形態のものは断面が細くて正方形である。カスガイは複数の材を接続する役割をもつが材の接合の方向によってこのような変形のカスガイが作られたのであろう。

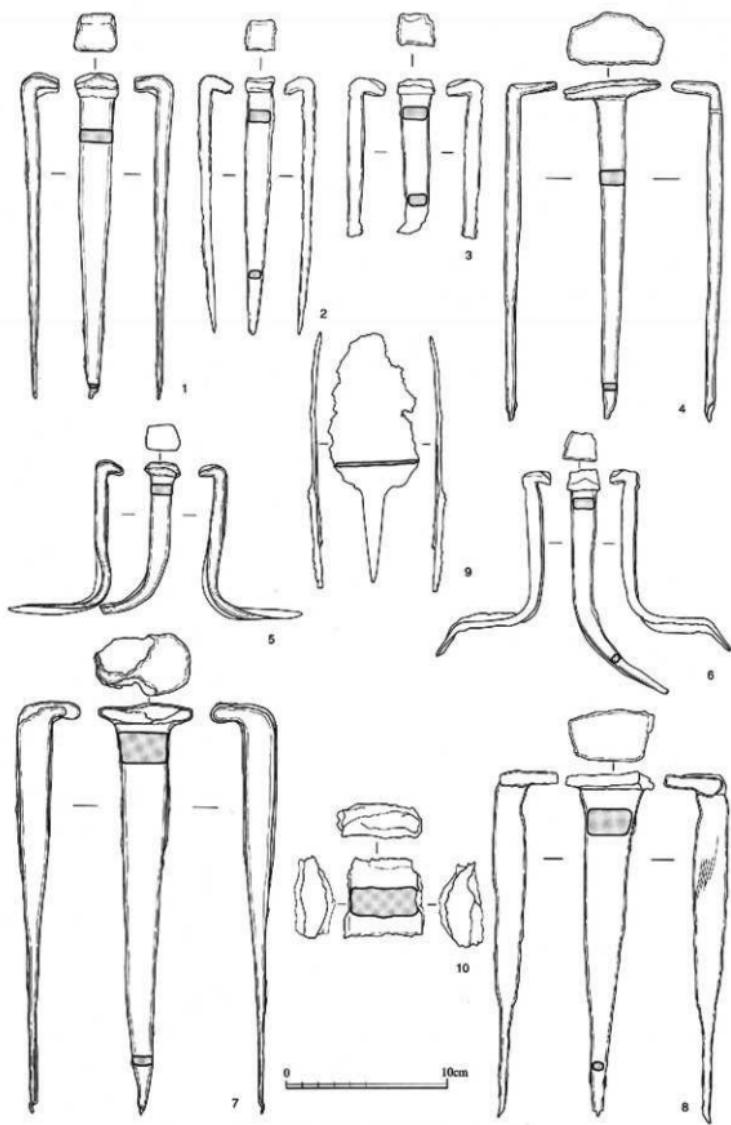


図138 西稚道構出土金属器実測図(I) (S=1/3)

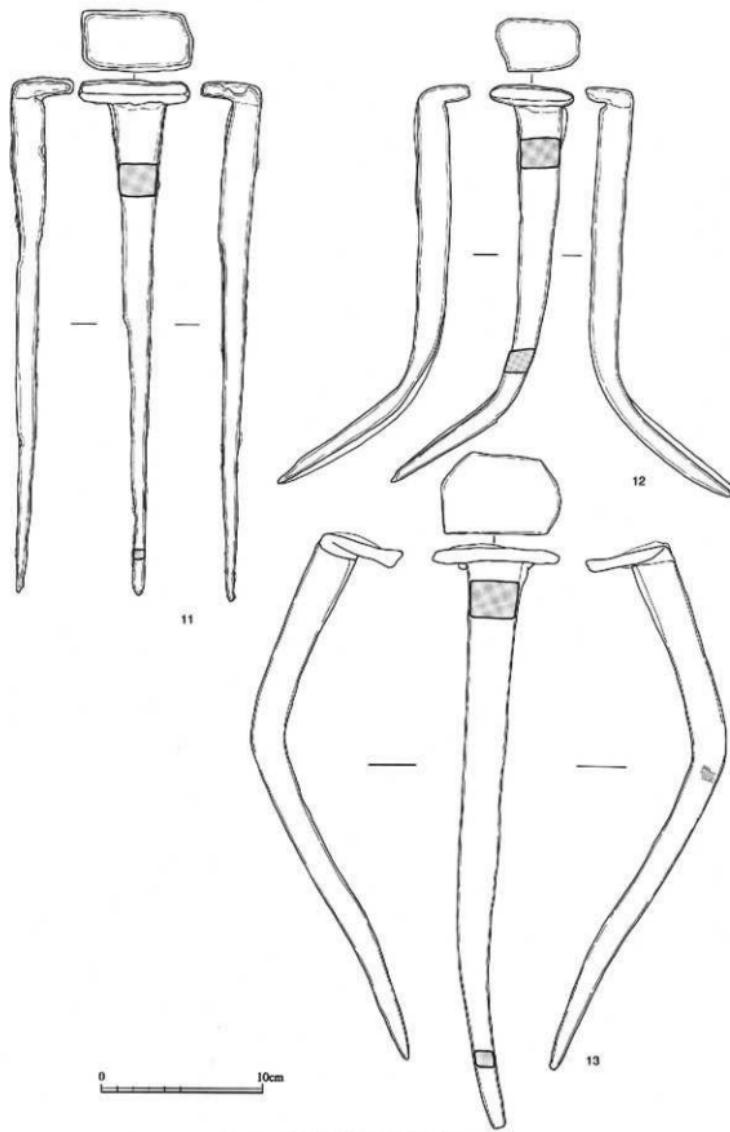


図139 西極遺構出土金属器実測図(2) (S-1/3)

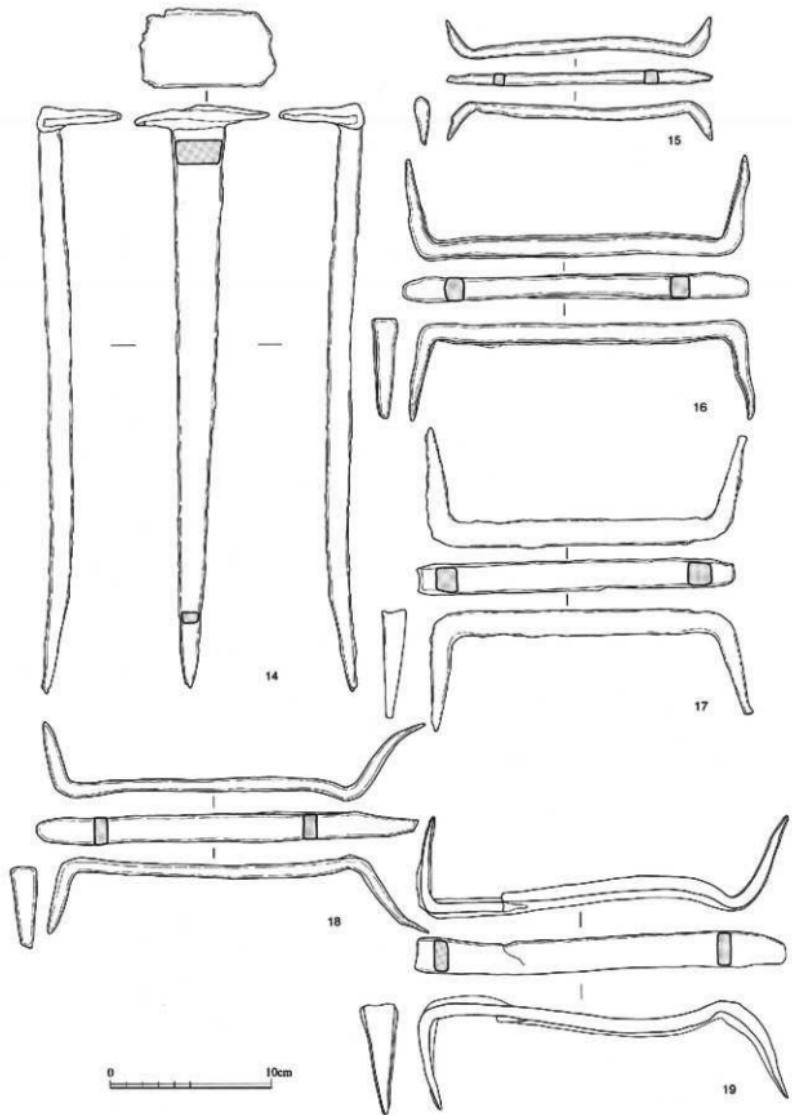


図 140 西橋遺構出土金属器実測図 (3) (S=1/3)

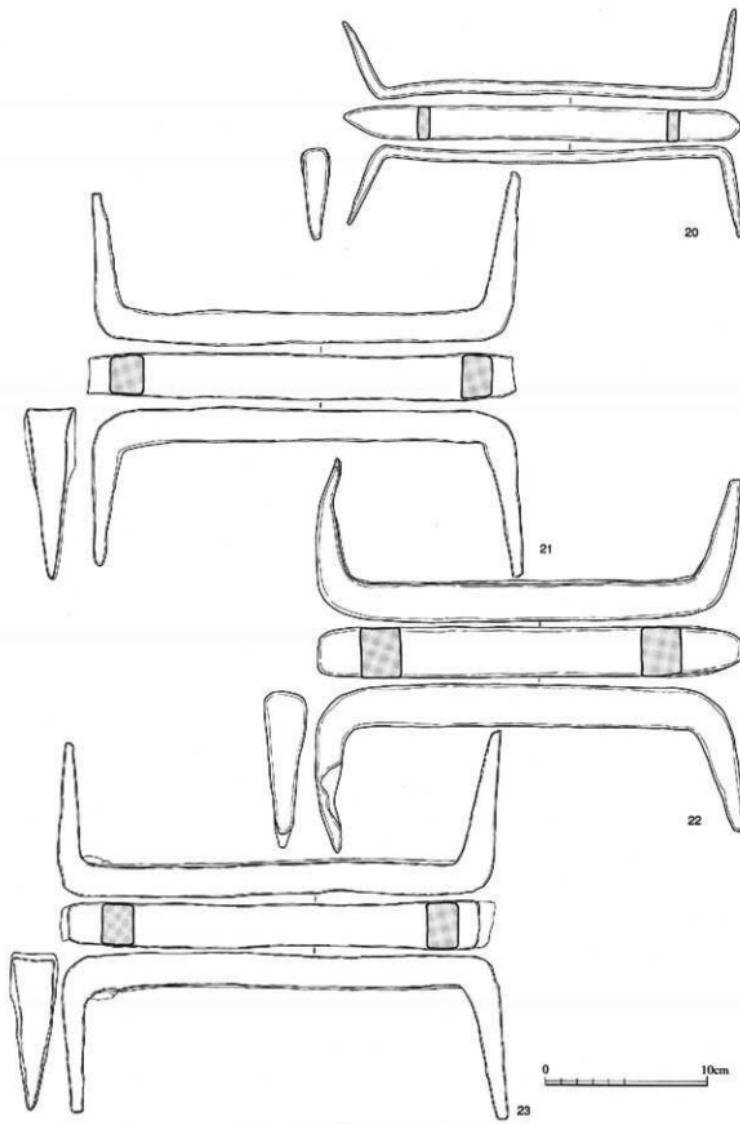


図141 西極遺構出土金属器実測図(4) (S=1/3)

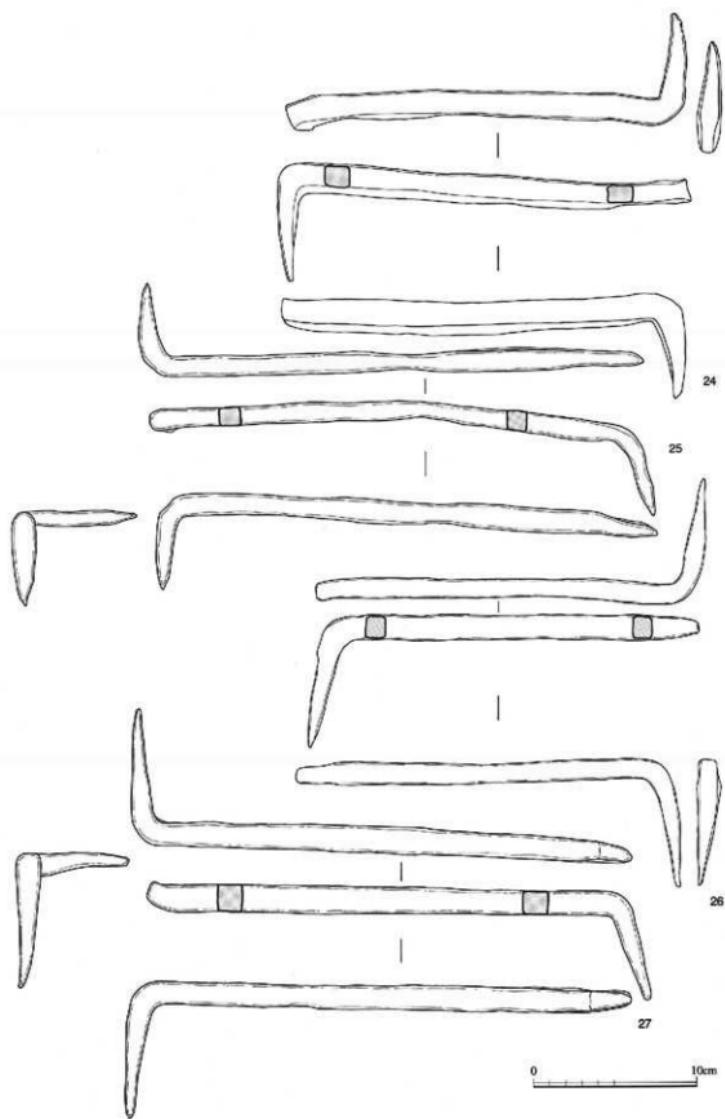


図142 西極遺跡出土金属器実測図(5)(S=1/3)

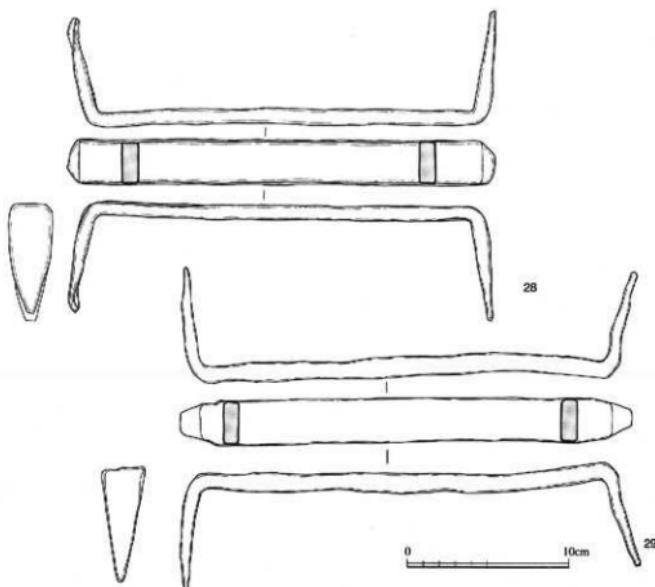


図143 西船遺構出土金銅器実測図(6) (S=1/3)

4 小 結

西船遺構においては、解体された材木や金属器が多く出土したために、樋の技術史的な面で新たな知見が数多く得られた。最も大きな成果は慶長の改修において多くの船材が使用されていたことが明らかになったことであろう。これは造船史の面で良好な資料を提供するだけでなく、土木史にとっても大きな意味をもつ。つまり近世初頭の大土木工事においては、造船技術の影響がみられること、あるいは船大工自身が工事に加わっていることが明らかになるからである。西船遺構においても、単に船材が再利用されているだけではなく、樋本体では壁板では縫釘の技術がもちいられていること、樋の内部でも船梁の技術の応用と思われる梁がみられることなど随所に造船技術の応用が観察できる。また樋全体の構造も船をねたものである可能性があろう。戦国時代に大きく発展したわが国の造船技術は、鎖国によって外的な発展を阻まれることとなるが、国内の土木技術などに応用され、近世はじめの大土木工事を可能にしたことが西船遺構の成果からはうかがうことができよう。西船遺構では、近世の遺物、遺構のみが検出され、それ以前のものは出土していない。西除、西樋が慶長の大改修以前にどのような姿であったのか、あるいは存在したのかということについては今回の発掘調査ではついに明らかにすることはできなかった。今後、下流の開発史との関連で解明すべき問題であろう。

注)

①「狹山池中樋水出ス割符帳」「狹山池大樋水出ス割符帳」とともに慶長17年、田中家文書。

②小林剛『後重坊重原の研究』有隣堂 1971 重原の事績については同書を参照した。

③四日市市立博物館『特別展重原上人』図録 1997

- ④松島健「東大寺南大門金剛力士像(吽形)像内資料」(『南都仏教』第64号 1990)
松島健「東大寺南大門金剛力士像(阿形)像内資料」(『南都仏教』第67号 1992)

第3節 池周囲の調査

I 東岸部の調査

1 調査の経過

狹山池調査事務所は1987年に池内部の遺物散布状況などの調査を実施し、1989年以降は池の周辺部に機械掘削によってトレンチを入れ、遺構・遺物の所在把握に努めた。その結果、本書で報告する須恵器窯などを確認したが、以下報告する東岸部の諸遺構もこのトレンチ調査の結果検出されたものである。トレンチ調査の結果、狹山遊園地の東側において南北方向の大溝などが検出され、須恵器などの出土遺物もあったため、トレンチ調査の結果や地形などを考慮し、約1200m²の調査区を設定し、発掘調査を実施した。発掘調査は1990年11月から、1991年2月8日まで実施した。また1991年3月17日に現地説明会を実施した。

2 基本層序と調査区内の自然地形

調査区は狹山遊園地の西側に広がる微高地の全域を発掘することを目的に設定した。微高地は調査区の北側ほど東西幅が狭くなり、西側においては落ち込みを確認した。微高地はほぼ正方形の形状であるが、北側と南側で入江状の地形がみられる。この二つの入江を結ぶように後述する大溝が南北方向に掘削されているが、北側の入江状の地形については堆積物があり厚く、掘削が困難であったため、航空写真で確認するだけで発掘は行わなかった。また調査区南側においては、池の東岸を画するコンクリート擁壁から東側に傾斜した地形があり、この部分からも土壌などの遺構が検出された。南側の入江状の地形については、段丘脇まで検出することを目標としたが、池の堆積物が非常に軟弱であったため、ついにそれを果たせず、途中までの掘削に止めた。

つぎに微高地部分の断面を図144のA-A'において実測したのが図145である。これをもとにこの部分の基本層序について説明することとしたい。微高地の東側を画する大溝の西肩のレベルはT.P 79.7mである。段丘面はこの地点から緩やかに西側に傾斜している。大溝から西へ9mの間はほとんど堆積物がみられず、ごく最近の遺物を含む砂質土がみられるのみである。他の場所では古墳時代の建物跡や土壙等、多くの遺構が検出され、遺構中からは遺物も多く検出されているにもかかわらず、大溝から西へ9mの区間では、遺物包含層すらも見られないことは不自然なことと思われる。また大溝からこの地点までは、9mで0.9m標高が下がっているが、この地点から西に9mのところにある旧川岸までの傾斜は9mで1.7m下がっており、大溝から西へ9m地点が変化点となっている。以上のことからこの地点以東については後世に地山の上取りが行われた可能性が強い。そして大溝西肩から19mの地点において段丘は急激に落ち込んでいる。この落ち込みのレベル(77.1m)よりも上の堆積物はいずれも層厚が薄くまた砂を主体とするものである。これらは池岸に波によって吹き寄せられた堆積物層と考えられ、時期的にもそれはどう古いものとは考えられない。この落ち込みの中の堆積物



写真68 東岸部全景（南から）



図144 東岸部造構平面図 (S-1/320)

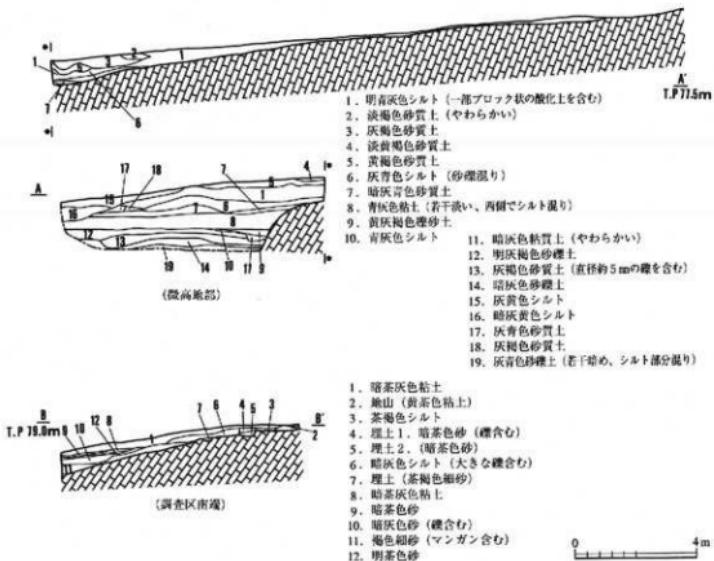


図 145 東岸部東西断面図 (S-1/160)

は大きく3層に分類できる。最上層は青灰色粘土で、この層は池形成以後、静水によって形成されたものと考えられる。その下は茶色混じりの砂層である。この砂層からは古墳時代後期～江戸期の土器が細片ではあるが出土している。この層は池形成以後のものであることは混入した土器から明白であるが、それが池中の砂州のようなものの残なのか、また池が一時的に決壊した時などに水流により形成されたものなのかなは判然としない。その下の暗灰色をベースにする砂層には、明確なラミナが観察できる。三田村宗樹氏に現地で御教示いただいた結果、この砂層はかなり速い水流によってできたものであり、しかも攻撃斜面であるとのことであった。この砂層からはかなり磨耗した状態の弥生土器が出土している。日下雅義氏の研究によると、^⑩ この地点は氏の推定された築造直後の狭山池東岸にあたる。これに今回の発掘結果を合わせると、この砂層より下の層は、狭山池築造以前この地を流れている旧天野川によって形成されたものであり、この落ち込みは、旧天野川、および築造時の狭山池の東岸と考えるのが妥当であろう。また微高地以南の傾斜地の地層については、調査地の最南端の東西断面において観察したが、堆積はいずれも池形成以後の堆積層と思われた。この地域においては岸の下場ラインから西へ12m程度のところで地形が極端に落ち込み入江状の地形を形成している。この岸下場ラインと入江状地形の間の南北約50m、東西12mの帯状の傾斜地にも後述するように土坑、溝等の多くの遺構がみられた。

3 遺構と遺物

東岸部においては多くの遺構を検出することができた。以下、順にその概要を記す。また遺物についてはその総数もさほど多くはないので遺構ごとに説明を加えることとした。

① 大溝

微高地を南北に断ち切るように、大規模な溝を検出している。最大幅4.8m、調査地内における長

さは48mであった。方向は磁北から西へ21度の角度をもつ、ほぼ直線の大溝である。断面はV字型で、深さは最大3.1mである。また溝中の堆積物の層序は図146に示す通りである。先にも述べたようにこの溝の北端・南端は入江状の落ち込みに連続していた。狹山池は築造以後数次の拡張工事が行われており、特に岸部については改变が著しい。この落ち込みも後世の掘削に伴うものと考えられる。したがって大溝は南北にさらに伸びてしたものと思われる。

さて、この溝の時期であるが、1989年に実施した試掘調査では底部から50cm程度上から図148-12の須恵器杯蓋が出土している。他にも何点か出土しているが、いずれも細片であり時期を議論するには不十分である。12の須恵器は田辺昭三氏の編年によれば² TK217型式に含まれる。また1988年に実施した試掘調査では大溝の底部に近いところからTK43型式の須恵器杯身を検出している(図148-1、2、3)。以上のことよりこの大溝は古墳時代の後期に掘削され、比較的短期間にその機能を失い埋められたものと考えられる。また断面形がV字型を呈しており、深さも非常に深いため農耕用の灌漑水路とは考えられない。この調査の終了後実施された東柵遺構の調査の結果などを考慮すれば、この大溝は狹山池の築造に伴って、中柵を設置するために旧天野川を一時東側に移動させた一種のバイパス水路ではないかと考えられる。検出された大溝は南北が切られているが、調査区内においては溝は定規で引いたように真っすぐ掘削されていた。仮にこの直線を北に延長した場合、北側はほぼ東柵遺構の位置に達する。東柵遺構はこのバイパスを利用して敷



写真69 大溝全景 (北から)



写真70 大溝の内部 (南から)

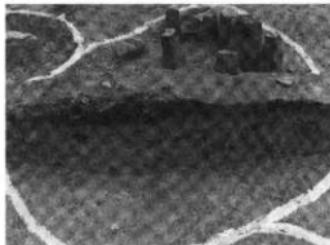


写真71 建物址の炉付近

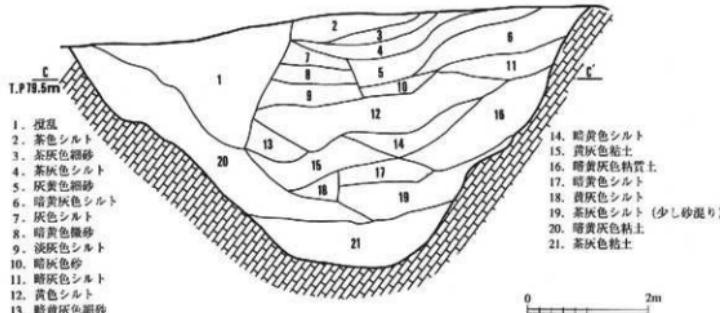


図146 大溝東西断面図 (S=1/80)

設された可能性が考えられる。

②建物跡

大溝のすぐ西で小規模な竪穴式の建物跡を検出した。この竪穴は長径3.2m、短径2.2mの非常に小規模なもので周辺に12箇所の柱穴が配置されている。また北側には幅70cm、長さ2.0mの溝が続いており、この部分が入口部と考えられる。竪穴部の中央は深さ10cm程度に浅く掘られており、中に焼土、炭などが入っていた。これは炉と考えられる。竪穴部、入口部の底面からは遺物が出土している。大部分は須恵器であるが、1点だけ土師器がふくまれていた。出土した須恵器は図148の-4～-11、-13～-15に示す通りである。またこれらの出土状況は図147に示す通りである。図は竪穴部、入口部の全域にわたって分布しており、杯蓋は竪穴部の特に炉の周辺部、また杯身は竪穴の縁辺部付近に多く分布していた。出土須恵器は田辺昭三氏の編年によればTK43型式を中心とするものであり、この建物の年代も6世紀末

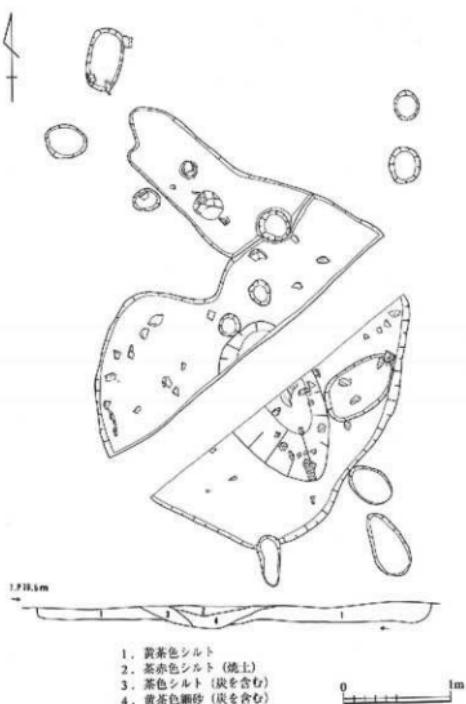


図147 建物址平面図 (S=1/45)

頃とするのが妥当であろう。またこの建物の機能を考える上でヒントを与える遺物が図148-15の須恵器壺の破片である。この壺の外部には須恵器窯の窯体が焼着していた。このような不良品は一般には流通しないものと考えるのが妥当であり、須恵器生産に従事していた工人にその利用者も限定されていたと考えられる。よってこの建物も狭山池周辺の須恵器窯において作業に従事していた工人らのものであった可能性が強い。さらにこの建物の規模の小ささや、周辺の柱穴の状態からは非常に仮設的な建物であったことが想像できる。以上のことより現在の段階においては、この建物は狭山池周辺の須恵器生産者の休憩所、あるいは作業所であったと考えている。

③石組溝

調査区はセクションA-A'の箇所においてもっとも標高が高くなっているが、その箇所から南北に流れる2本の石組溝が検出されている。南側の石組溝1は1989年に実施した試掘調査に際しても検出している。長さ11m、最大幅4.4m、底部は北から南に傾斜している。この付近の地山面は大きな礫が多く含まれているが、この遺構はその面を最大0.5m掘り下げたものである。底部には掘削の際に出土したと思われる礫を並べてある。北側の石組溝2は北から南に流れる溝である。最大幅5m、調査区内における長さ9mである。この溝の埋土の中にも多くの礫が入っていたがこれは溝2ほど整然としたものではない。双方の溝とも遺物の混入がなかった。先述した通りセクション付近においては地山が掘削されていることが予想されるが、その際この溝の一部も破壊された可能性が強い。本来

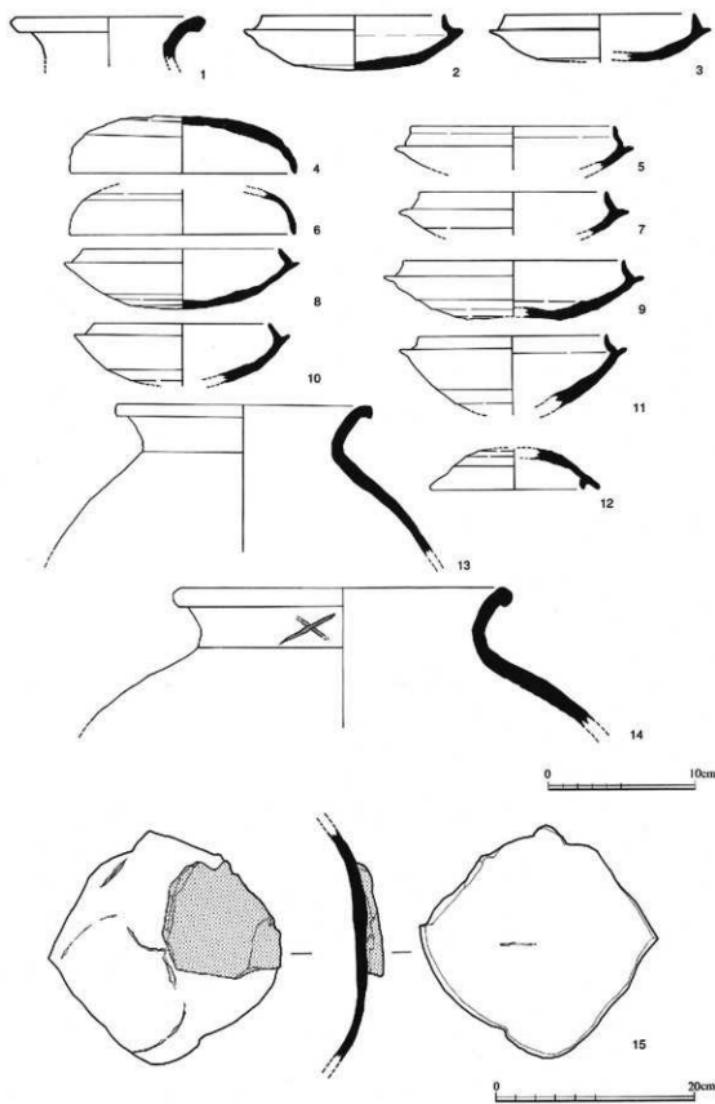


図 148 東岸部出土遺物実測図 (S-1/3・1/5) (1、2、3、12は大溝出土、他は出土址出土)

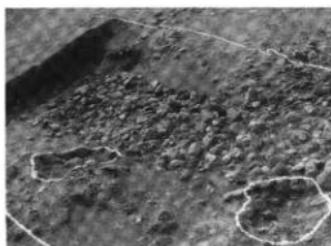


写真72 石組溝1

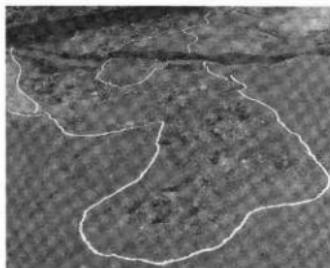


写真73 石組溝2

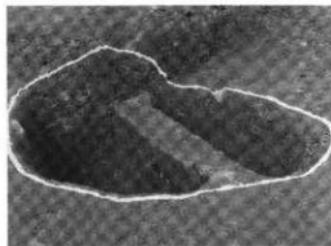


写真74 土壙1



写真75 土壙2周辺の遺構(南から)

は連続した遺構であったことが推定される。

④土 壙

土壤1) 石組溝1の南に所在。直径1.5m、深さ0.8mの井戸状の遺構であるが、遺物は検出されなかった。

土壤2) 大溝の南東に所在。長径3.8m、短径3.0mの楕円形の土壤である。深さは最大で40cmであるが傾斜地に掘られているため東側を深く掘っている。埋土中から須恵器の細片が出土している。なお土壤2の南側には深さ20cm以下の浅い土壤や溝がたくさんみられるが、出土遺物もなく、遺構の性格も明らかではない。近世以降の土採りに伴う遺構かと思われる。

4 小 結

東岸部の調査によって解明された事実は多い。特に古墳時代の大溝や建物跡を確認したことの意義は大きいと考えられる。大溝はこれまでわが国で発掘されている古墳時代の溝としては最大規模のものである。その掘削には相当な労働力が投入されたことが推測される。当然のことながら狭山池の築造との関連が注目されるが、今のところその機能として狭山池築造の際のバイパス水路が考えられよう。自然河川を堤でせきとめ、樋を設置して溜池を築造するためには、自然河川をいったん付け替える必要がある。今回の調査区の北側および南側は狭山池築造後、池面積を拡大させるためにあらたに掘削されたために、この大溝の延長を推定できないのは残念であるが、他にこれだけ大規模な溝を掘削する積極的な理由も考えられずバイパス水路の可能性をここでは示しておきたい。

また建物跡は小規模なものとはいえ、大阪狭山市内におけるはじめての古墳時代の建物跡であり、また遺物から須恵器の工人との関連も予想され今後の研究の良好な資料となるものであろう。

II 西除崩壊部の調査

1 調査の経過

狹山池における当初より予定されていた埋蔵文化財発掘調査は1995年をもってほぼ終了したが、以下報告する西除崩壊部は本格的な発掘調査に先立って行った分布調査、試掘調査などでは確認されず、ダム工事の進捗に伴って発見され、工事業者の連絡を受けて調査に着手した遺構である。調査は1996年11月に実施した。

2 遺構の概要

調査地は狹山池西除部の東側斜面の裾部に所在していた。この部分は地盤が不安定で狹山池のなかでも過去の決壊がもっとも顕著であった場所である。西除には今回のダム工事においても常用、非常用の二つの洪水吐が設置される予定であるが、遺構はこの工事の過程で、斜面を削るなかで発見された。西除の東側斜面においては工事のためにまず表土の掘削が行われたが、この段階で幅20m、高さ13mにもおよぶ崩落痕が目視で確認された。この崩落痕は勿論土をいれて補修されていたが、現地は垂直に近い斜面であるため、工事によってこの埋土が撤去されることは文化財調査は不可能であった。埋土が撤去され西除の川床部と同じレベルに達したとの連絡を受け、現地におもむいたところ、斜面の裾部において板石を組み合わせて筒状にしたものを探出した。これを石組1と呼称する。板石は花崗岩で今回の工事まで西除の底石として貼られていたものによく似ていたが、西除では近世に度々工事が行われており、近世文書などにも工事についてはそれまであった石材を再利用することが記されているので、これらの石材がいつのものなのかは特定ができない。

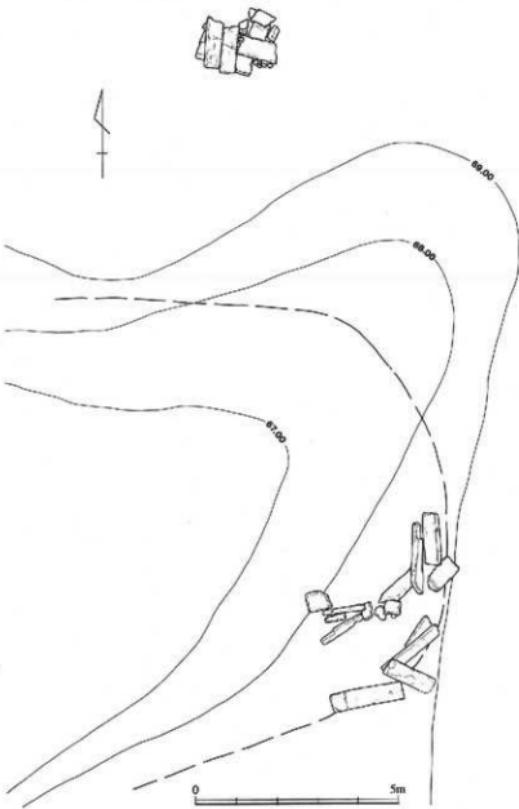


図149 西除崩壊部遺構配置図 (S=1/120)

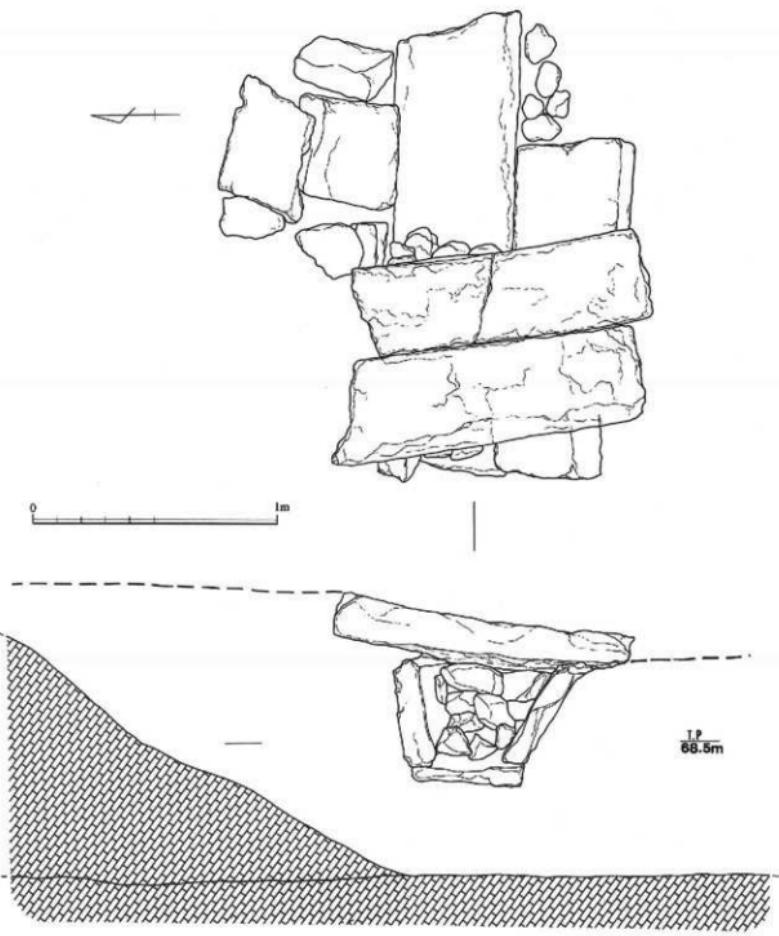


図150 西除崩壊部石組1平面・立面図 (S-1/20)



写真76 石組1



写真77 石組2

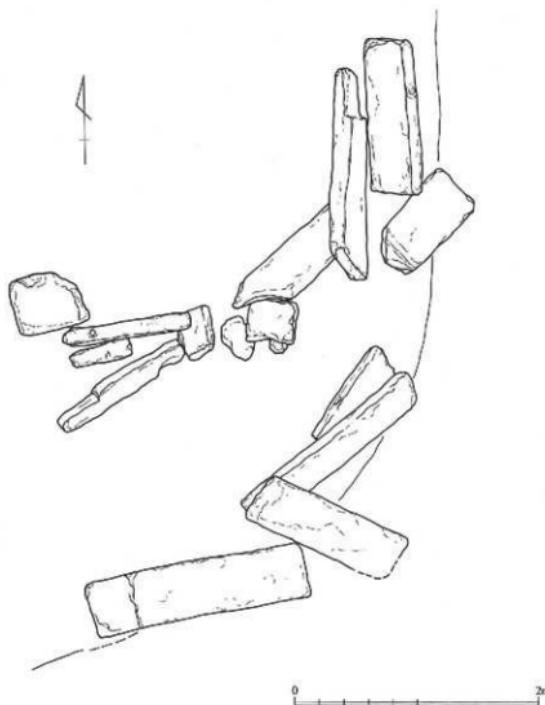


図151 西除崩壊部石組2平面図 (S=1/40)

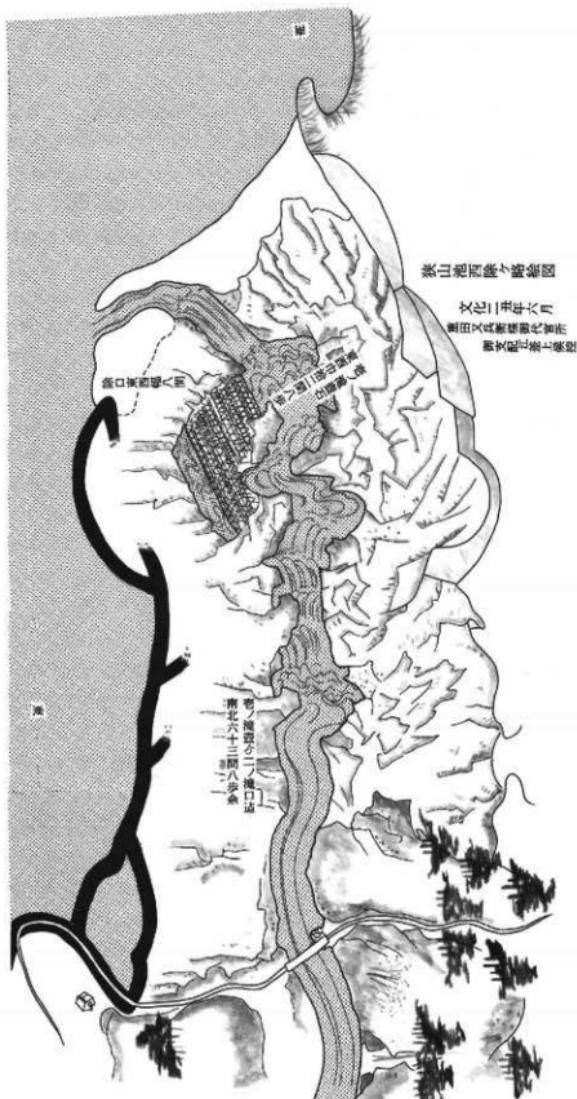


図 152 狹山池西除ヶ略繪図トレス図 (田中家文書)

板材は唯一完全な形で残っていたものの長さが122cm、幅55cm、厚さ4cmであった。他の欠損している石材も元来はおおむねこのような大きさのものであったと思われる。板材は土を掘削し底面、側面に張りつけるようにしてこれを置き、蓋は他の板材に直行するように置かれていた。また内部にはこぶし大の川原石が充填されていた。管状の構造の内部は、上辺が55cm、下辺は30cm、高さは40cmであった。また蓋の石材のうち一つは真ん中で折れていた。上方から強い土圧がかかっていたことが想像できる。この石管状の遺構は総長が2.1mで終わっていた。当初さらに奥に続いていたのかは検出状況からは推定できない。この石管状遺構の性格は内部に川原石が充填されていたことから暗渠であることは間違いない。斜面の崩落が生じ、それに盛土をする過程で湧き水の処理のために設けられた仮設的な施設と思われる。

この遺構の実測、写真撮影などを終え、工事上の必要もあり奥の盛土の撤去を進めたところ、崩落部底部の規模は幅16m、深さ14mであることが判明した。底部のもっとも奥の部分においてやはり石材が集中して出土した(右図2)。この石材は先のものとは異なり管状の構成をとらず、散在した形で検出された。ただ乱雑ながら底部外周の弯曲にあわせて2列に並んでおり、元来は管状に配列されていた可能性はある。石材が分布するのは東西19m、南北24mの範囲であった。この部分において崩落部の斜面はほぼ垂直であり、場所によってはオーバーハングした状況であった。こちらの石材も排水用として利用されていた可能性が強いが、同時に法面の保護のための土留の役割を果していたとも考えられる。計15点の石材が検出され、もっとも長いものは長さ181cm、幅46cm、厚さ5cmであった。石材はいずれも花崗岩である。遺構の性格は明確ではないがやはり崩落部復旧工事のための仮設的設備であることは確かであろう。

3 遺構の性格

狹山池西除は度々崩壊を起こしている。今回の調査によって崩壊と復旧工事の実態を知ることができたが、はたして災害、および復旧の時期はいつなのであろうか。狹山池調査事務所で進めている古文書、絵図などの調査の知見と照合すると、今のところ一番可能性が高いのは近世後期の文化年間(1804~1817)の改修工事の痕跡であると考えられる。この工事は享和2年(1802)の大雨のため崩壊した部分の改修工事である。水下村から度々改修の願いが出されているが、取り上げられず、最終的には文化11年(1814)になってようやく本格的な工事が施工されている。その間には一時しのぎ的な仮普請が何度か繰り返されたようである。文化4年(1807)の狹山池西除ヶ略絵図にはちょうど今回の調査地付近に大きな斜面崩壊が描かれている。ただしこの絵図では崩壊部の外周に土俵を積み土留をしているが、調査では土俵は見つかっていない。今回検出された暗渠にせよ、絵図に描かれた土俵にせよ仮設的な施工であり、最終的には土を入れて崩壊箇所を復旧する手段が採られたと思われる。ただ一度崩壊した場所は、その後も崩壊を繰り返す可能性が強いため、遺構と史料の照合には今少し検討が必要であろう。

注)

- ①山下雅義『歴史時代の地形環境』古今書院 1980
②田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966

第4節 須恵器窯の調査

I 狹山池1号窯

1 調査の経過

狹山池北堤の北側において1992年に調査を実施した池尻遺跡⁽²⁾の水田遺構は、狹山池北堤の直下に位置する。この水田遺構の上面を被覆する黒色の灰土層は、北堤堤体裾から北側へと広がっていた。その分布域は東西約30mの幅で、北堤裾から約20m北方の箇所まで達していた。平成4年度に水田遺構の畦畔を検出する過程でこの灰土層の掘削を行い、コンテナ約50箱分の須恵器を取り上げた。水田遺構における灰土の広がりは、調査区の南西域に集中していたため、その南側の北堤斜面に須恵器窯跡が存在することは確実と思われた。

1993年7月18日に、須恵器窯跡の検出を目的として北堤の北側斜面においてフラックスゲート型磁力計による磁気探査を実施した。しかし堤体盛土が予想以上に厚かったことと、後世の人工物や廃棄物による磁気的な障害が大きかったことなどから、窯跡の領域を限定するに至らなかった。

1993年の冬季に灰土層が収束する箇所の延長線上の北堤斜面において、バックホーで試掘溝を掘削し窯跡の範囲確定を試みた。その結果、堤体裾のコンクリートブロックが積まれていたN点(X=-165924.7885, Y=-40872.6360)から南へ約6m付近の場所を上端とした堤体盛土の掘込みが認められ、それに裾をカットされた状態で、現況堤体地表面から1.6m~1.9mの深さに灰原らしき灰土層の堆積を確認した。

そこでこの試掘溝を東西に延ばし灰原の東西端と思われる箇所まで調査区を拡大し、灰土層上面で南北約9m、東西約16mの第1次調査区を設定し、1993年9月1日から同年11月30日まで第1次調査を実施した。なお、第1次調査の時点では北堤の頂部に市道が通っていたため、安全上の理由から、N点から南へ約10mの地点までしか掘削をすることができなかった。

第1次調査完了後、市道がダム化工事のために通行止めとなつた後の1994年2月1日から、前回の調査地点以南における灰原・窯体の有無の確認、さらには第1次調査で灰原の下層に位置することが明らかとなった第1次堤体の状況等を確認するために、バックホーによる試掘調査を開始した。第1次調査の際に最も厚い灰土の堆積が確認されたN-S軸(S点:X=-165936.8512, Y=-40877.7851)にそって灰土層上面を追いかけ、N点から南へ約15mの地点まで第1次堤体盛土の上面を確認することができた。この試掘調査結果に従つて、第1次調査区全城を含めた南北最大14.0m、東西最大17.4mの第2次調査区を設定し、1994年2月14日から同年3月31日まで第2次調査を実施した。

なおこの調査において検出された須恵器窯を狭山池1号窯と呼称する。



写真78 狹山池1号窯と北堤

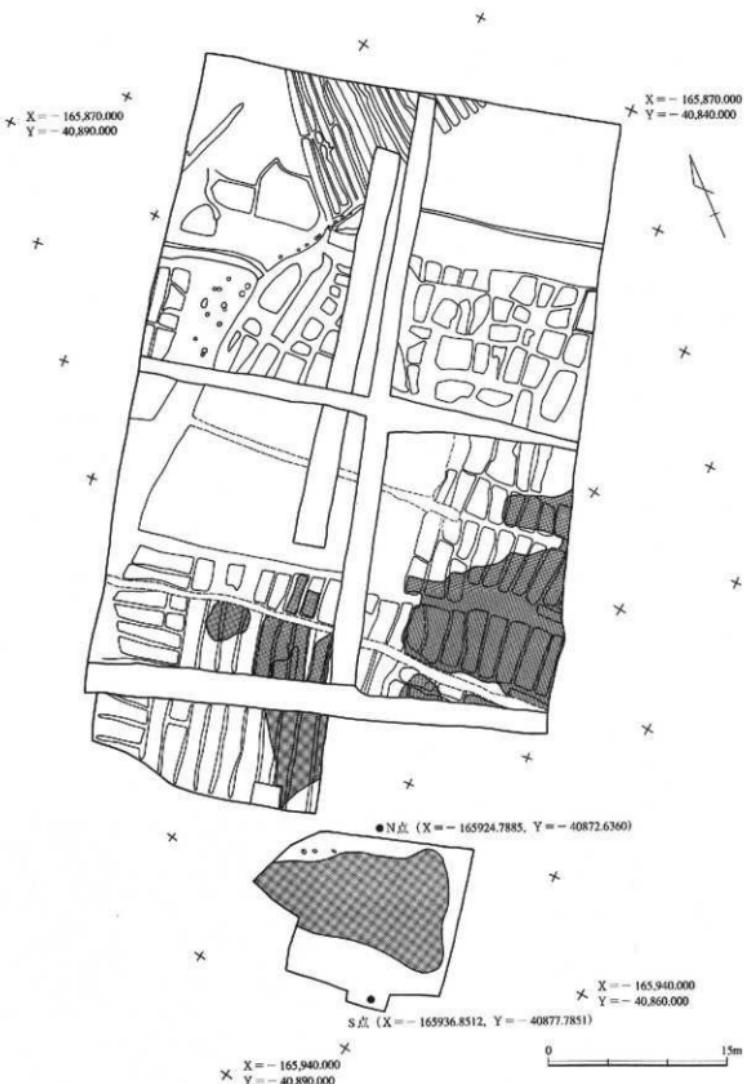


図153 狹山池1号窯と池尻追跡(2)の位置関係

1. 灰土
 2. 雷灰褐色砂質土 (ガラ混じり)
 3. 黑褐色砂質土
 4. 灰褐色砂質土
 5. 深灰褐色砂質土 (九石を多く含む)
 6. 深灰褐色砂シルト
 7. 明灰褐色砂土
 8. 深灰褐色砂土
 9. 暗灰褐色土 (燒土多く含む)
 10. 暗灰褐色土
 11. 深灰褐色砂質土
 12. 暗灰褐色土 (燒土多く含む)
 13. 深灰褐色砂質土
 14. 暗灰褐色土 (一部灰青色に混じる)
 15. 暗灰褐色土 (燒土多く含む)
 16. 黑褐色砂質土
 17. 暗灰褐色土
 18. 带灰褐色土 (燒土多く含む)
 19. 深灰褐色砂質土
 20. 暗灰褐色土
 21. 明灰褐色砂質土
 22. 深灰褐色砂土
 23. 暗灰褐色土
 24. 深灰褐色砂質土
 25. 明灰褐色砂質土
 26. 暗灰褐色土 (燒土多く含む)
 27. 暗褐色砂質土
 28. 暗灰褐色土
 29. 明黄褐色砂質土
 30. 深灰褐色砂質土
 31. 暗灰褐色土
 32. 暗灰褐色砂土
 33. 暗灰褐色土 (燒土多く含む)
 34. 明灰褐色土 (燒土多く含む)
 35. 暗灰褐色土 (燒土多く含む)
 36. 暗灰褐色土
 37. 暗灰褐色土
 38. 黑褐色砂土 (暗青色粘土含む)
 39. 黑褐色砂土
 40. 深灰褐色砂土 (明黃色シルト含む)
 41. 黑褐色土
 42. 深青灰褐色砂質土
 43. 黑褐色土
 44. 明黄褐色砂質土
 45. 明灰褐色砂質土
 46. 明灰褐色砂土
 47. 暗灰褐色砂土
 48. 暗青灰褐色砂土
 49. 暗灰褐色砂粘土
 50. 暗青褐色砂土
 51. 暗灰褐色砂土 (植物混生含む)
 52. 深灰褐色土
 53. 深灰褐色土 (一部灰色に酸化)
 54. 暗青褐色土
 55. 暗青褐色土 (植物混生含むの水平ブロックあり)
 56. 明灰褐色土
 57. 暗灰褐色砂土
 58. 暗灰褐色砂土 (植物混生含むの水平ブロックあり)
 59. 暗灰褐色砂土
 60. 暗灰褐色砂土 (*)
 61. 暗青褐色シルト (*)
 62. 暗灰褐色砂粘土 (*)
 63. 暗青褐色砂土 (*)
 64. 暗灰褐色砂土 (*)
 65. 暗灰褐色砂土 (*)
 66. 暗灰青褐色土 (*) } 河川堆積

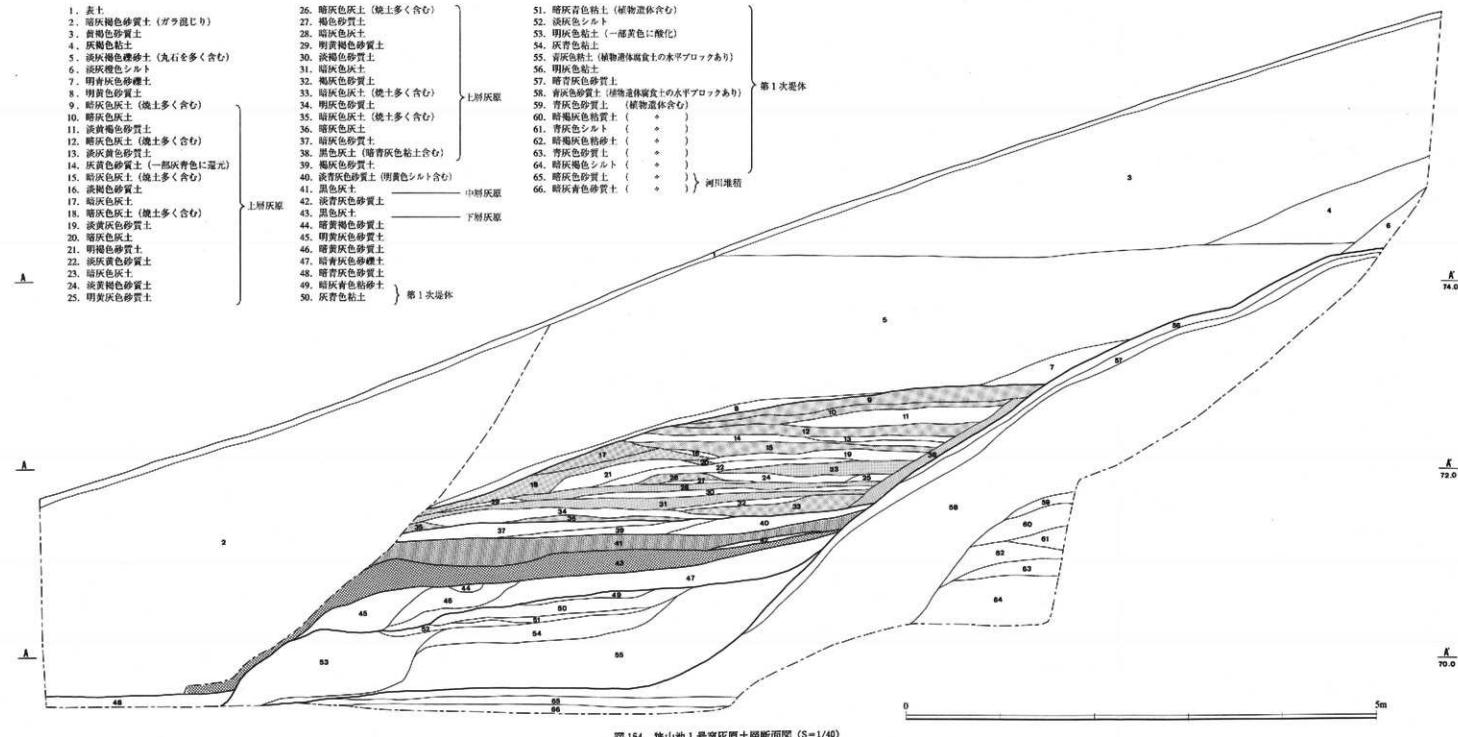


図 154 狹山池 1 号窪灰原土層断面図 (S=1/40)

2 節 序

北堤北側斜面の表土をめくると N 点より S 点方向へ約 7m の地点以南には、標高 74.2m 以上の箇所に灰褐色粘土層(土層 4、以下土層番号のみを略記)が盛土されている。その下層には、N 点より約 4m 地点から約 14m 地点までの間に、淡灰褐色礫砂上の盛土層(5)が存在する。この層は標高 71.4m ~ 72.8m 以上の場所に分布し、径 15cm 程度の円礫を多く含む。この盛土層は、N-S 軸から約 30m 東方の北堤北斜面で試掘調査を行った際にもその東端が確認されており、第 1 次堤体が遺存する箇所で広範囲に存在するものと思われる。N 点から約 6m 南方の地点から堤体北縁までの間で、この淡灰褐色礫砂土層上面を掘り込み面とした擾乱がおこなわれたようであり、コンクリート塊の混じった暗灰褐色砂質土層(2)が盛土されていた。おそらくは、堤体裾のコンクリート擁壁およびコンクリートブロックの設置工に伴う擾乱であろう。

淡灰褐色礫砂土層の下層で明黄色砂質土層(8)と明青灰色砂礫土層(7)がそれぞれ約 10cm、最大 30cm の厚みで存在し、その直下が灰土層の上面となる。灰土層の標高は 71.2m ~ 72.9m で、それぞれ 5cm ~ 20cm 程度の厚みの橙色の焼土を含んだ暗灰色灰土と、それを含まない暗灰色灰土・黄褐色系砂質土・灰黄色系砂質土が互層になって、北向きに緩やかに傾斜しながら堆積している。この灰土を多量に含む互層(9 ~ 38)は 2 次的な堆積である可能性を残すものの、これを仮に上層灰原と呼称して記述を進みたい。

上層灰原の N-S 軸付近での南端は N 点から南へ約 11m の地点で、それ以南では第 1 次堤体の表面が露出する。N 点から約 4m の地点で、前述の堤体裾部工事によって上層灰原は削平されており、この箇所が堤部分の調査で確認できる上層灰原の北限となる。

N 点から約 9m 地点以北では、上層灰原の下層に褐色砂質土(39)・淡青灰色砂質土(40)が最大 17cm の厚さで分布し、さらにその下層に最大厚が 30cm の黒色灰土層(41)が遺存する。この黒色灰土上層は、砂質土などの混入が全く認められず、包含する須恵器破片の遺存状況が比較的良好であるために、窯の操業に伴い隨時廃棄作業が行われたことによって形成された灰土層、つまり後世の 2 次移動を受けていない灰原であると判断できる。この黒色灰土層を中層灰原と呼称する。中層灰原は標高 70.9m ~ 72.0m の間で緩やかな傾斜で堆積し、N 点から 9m でその南端に達する。また北側は N 点から約 3.5m で擾乱を受け途切れている。

中層灰原の下層には、部分的に厚さ 5cm 程度の淡青灰色砂質土の間層(42)を挟んで暗橙色灰土層(43)が遺存する。この灰土層は中層灰原と同様の遺存状況を残すため灰原と判断される。この暗橙色灰土層を下層灰原と呼称する。下層灰原は標高 69.2m ~ 71.4m の間で緩やかな傾斜で堆積している。N 点から 3.5m 南方の地点以北は、第 1 次堤体の裾部分にあたり、上面は水平方向から約 40 度の急傾斜となっている。この箇所は前述の擾乱を受けているために、現状で 10cm 以下の厚みしかないものの、当初は 50cm 以上のかなり厚い堆積であったものと推測され、その上面の傾斜はもっと緩やかであったと思われる。N 点から 8.5m 南方の地点が下層灰原の南端となるがこの箇所は第 1 次堤体が再度立ち上がる傾斜変換点に接している。下層灰原は調査区北端付近で擾乱による削平を受けながらも調査区北側へと延びていくが、平面的にみた場合、その分布は散在的で、かつその北端は後世の削平を受けているため、水田造構の上面を被覆する灰土層が下層灰原と同一層であるとの確証はない。

水田造構の上面を被覆する灰土層は、南北約 20m、東西約 30m の範囲で確認できる。最も厚みのある部位で 35cm 程度の厚さであるが、薄い部位では 2cm 程度である。この層は暗灰色灰土を主体とするが、橙色の焼土のみが堆積する箇所もある。灰土の色や質、砂質土との混合の程度を観察する

限りでは、堤体斜面部分の上層灰原の灰土が水田造構上面の灰土層と最も近似しており、水田造構の上面で検出された灰土層は上層灰原に含まれるものと考えられる。

N点の南方約2.5m～8.5mの間では、下層灰原の直下に黄褐色系砂質土(44・45・46)と暗青灰色砂礫土(47)が最大40cmの厚さで堆積している。この2層の色調の相異は、狭山池の水による還元箇所によるものである。この2層は堤体盛土としては締まりが悪く、上方から崩落流出した土である可能性が強い。この層の上面が後述のような灰原堆積以前の遺構面となっている。

この土層の直下に第1次堤体の裾部上面が遺存する。N-S軸付近の第1次堤体盛土は、N点から約2m南方の地点から認められる。この箇所における標高は69.5mである。N点から約3m離れた地点で裾から約80cmの高さまで立ち上がり、そこから約5m南方の地点までは緩やかな傾斜面となる。この箇所における標高は70.9mを計測する。この地点を傾斜変換点として、水平から約36度の急傾斜でN点から約11m地点(標高72.9m)に達する。この地点から傾斜角は約24度の緩やかなものとなり、N点から約14m地点での標高は74.3mとなる。そこからさらに緩やかな傾斜で上昇し、第1次堤体の頂部に達するものと思われる。最頂部は今次調査区の域外にあるため推測の域を脱しないが、中樋付近で実施した堤体断面調査では、第1次堤体の高さは5.4m、標高は74.4mであった。第1次堤体頂部に嵩上げする形で盛土されている第2次堤体の頂部の標高は75.0mである。狭山池1号窯灰原の検出位置は、堤体断面調査位置から約70m東に離れているが、第1次堤体頂部の標高はさほど異なるものではないと推定できる。

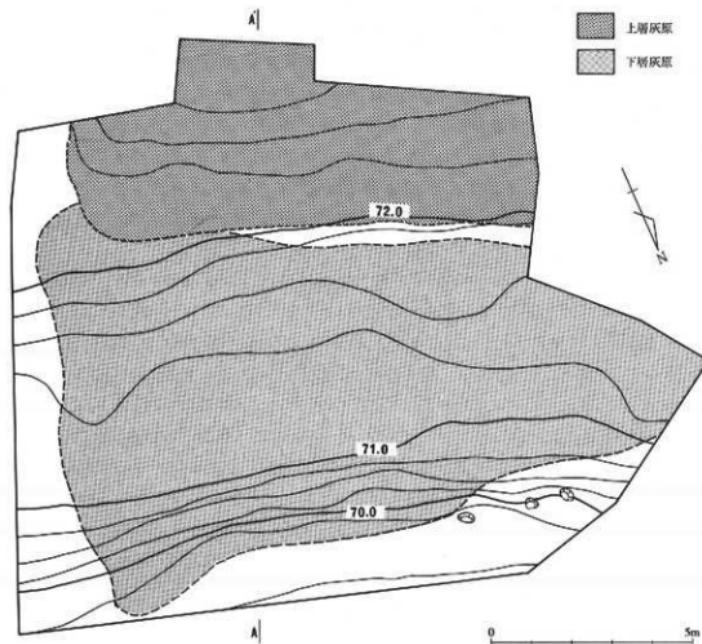


図155 狹山池1号窯灰原平面図(1)(S=1/125)

次に、第1次堤体盛土と考えられる土層について記述する。本項で述べている第1次堤体が、中樋筋で実施された堤体保存工事および東柵構造調査で確認された第1次堤体と完全に同一のものかどうかは他の調査成果を詳細に検討する必要があるが、以下の理由から同一の堤体盛土であると判断している。中樋付近の堤体断面においても、東柵の堤体断面においても、堤体盛土の腹付工事のはほとんどは池の内側部分である堤体南側斜面で実施されたことが判明しており、北側斜面では第1次堤体の直上に、土質のまったく異なる後世の堤体盛土がのっていた。よって、狹山池1号窯灰原の箇所においても、後世の大規模な腹付工事は想定できず、表土の直下において、敷葉工法を用いた第1次堤体が確認されることは妥当であるといえよう。

調査区内では、基本的に第1次堤体の裾部分における盛土は堤体の中心から外側へ、つまり、北側斜面では南から北へと盛土されている。N点から約9m以南では標高約72m以下において青灰色系と灰褐色系の粘土・シルト・砂質土が交互に、ほぼ水平に盛土されており、そのすべての層内には葉や枝などの植物遺体が多量に含まれている(59~64)。この盛土は敷葉工法がぎわめて丹念になされた第1次堤体の盛土であるといえよう。

この第1次堤体の盛土を上方および側方から完全に被覆する盛土が、砂粒が細かくさらさらとして均質な青灰色砂質土層(58)である。この青灰色砂質土はN点より約3m地点以南に盛土されており、

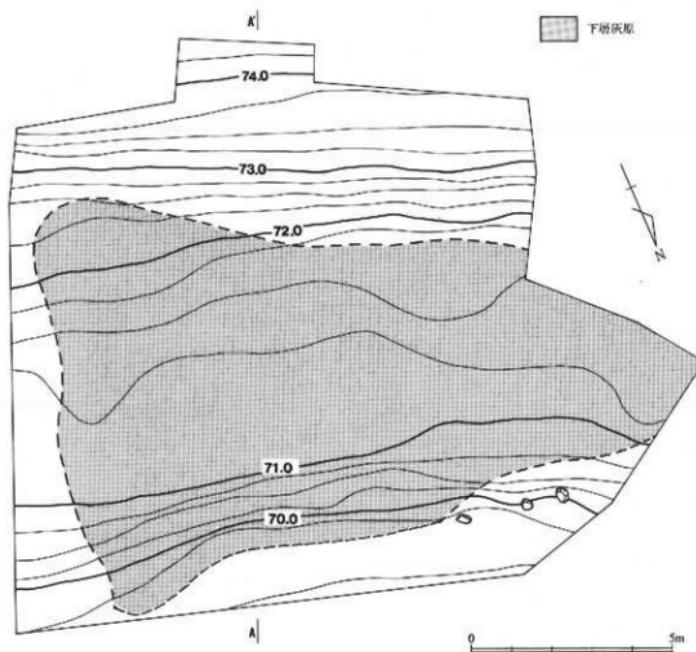


図156 狹山池1号窯灰原平面図(②)(S=1/125)

N点から約6m地点までは標高69.5m～69.7mの高さで平坦に近い盛土がなされている。この箇所の層の厚みは約8cmと薄く、これを剥ぐと直下に第1次堤体築堤以前の河川堆積層と推定される暗灰色砂質土(65)が認められ、さらにその下層には同様の堆積層と考えられる暗灰青色砂質土層(66)が遺存する。この2層中からは細かい纖維状の植物遺体が多量に検出される。北堤が築堤される以前には本調査区近辺は旧天野川の氾濫原で湿地状であったと推定されており、^③その植生環境を復元する上で、この植物遺体は興味深い資料である。この旧地表面を被覆する青灰色砂質土層(58)は、前述の第1次堤体の盛土を被覆するために、その上面がN点から約6mの地点以南で平均約38度の傾斜角で立ち上がり、N点から約11m地点で約25度に傾斜を変え、N点から約14.5mの地点(標高74.2m)までその存在が確認できる。N点から約11m地点ではこの層の厚みは約1.1mで、調査区より南側においては、それ以上の厚みをもって盛土されている可能性が高い。なお、この層中においても植物遺体が腐植したと思われる細かい層が無数に観察されることから、前述の敷葉工法が採用されているものと考えられる。この青灰色砂質土層の上面で、N点から約7.5m地点以南においては暗青灰色砂質土層(57)が厚さ最大15cmで盛土されている。この層とその下層とは土質がほぼ同じであるが、植物遺体腐植上の含有の度合いが下層(58)に比して高い。これはこの土層(57)が表土層となって一定期間が経過したことを示すものか、あるいはこの層を盛土する際に上層(58)よりも念入りな敷葉工法が

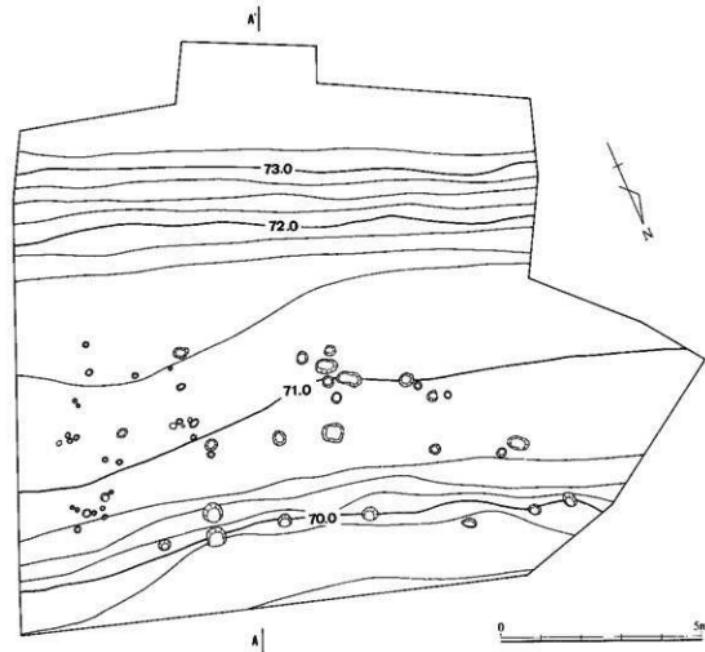


図157 狹山池1号窪状原平面図 (S-1/125)

行なわれたことを示すかのどちらかであろう。この砂質土層の直上には、明灰色粘土層が10cm程度の厚さで、N点から約9m以南の箇所に盛土されている。この層の上面は長期間第1次堤体の表土面であった可能性が高く、雨水などによって浸食を受けやすい砂質土層をこの粘土で被覆したと想定するのが妥当なところであろう。

土層57・土層58の上面が急傾斜をなしている盛土部分を外側からさらに被覆している土層が、青灰色・灰青色・灰色系の粘土層(49~55)である。第1次堤体の最も高くなるN点より約2m地点(標高69.5m)の箇所から、N点より約8.5m地点(標高71.2m)の箇所までの間に、上層(57)・(58)の急落する部分を腹付するようにこれらの粘土層は盛土されており、この部位の第1次堤体上面はテラス状の平坦面となっている。

3 遺構

①上層灰原

2cm~35cm程度の厚みの暗灰色灰土と棕色焼土からなる。堤体斜面部分においてはこれらの灰土と焼土が、灰黄色系砂質土と互層をなし、水田遺構上面ではこれらの灰土と焼土が遺構埋土となっている。上層灰原の規模は、堤体斜面部分では南北約7m(現存長)、東西約17m、また水田跡部分では南北約20m・東西約30mである。

標高73m付近に位置する上層灰原の南端ラインは、第1次堤体にはば平行して検出された。上層

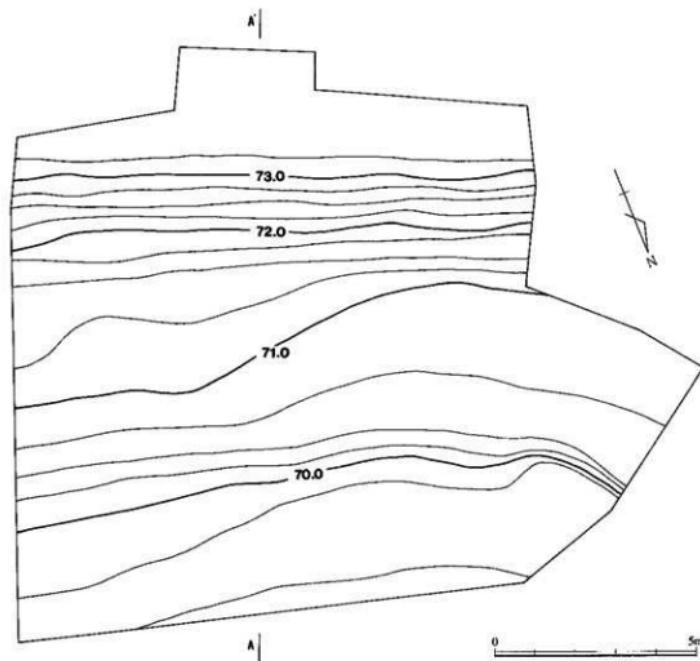


図158 狹山池1号窓灰原平面図(4)(S-1/125)

灰原上面は南から北に傾斜し、最高部と最低部の比高差は2m近くある。上層灰原中の各灰土層が水平に堆積しているにもかかわらず、上層灰原の上面が斜面をなす状況は、操業に伴う廃棄によって堆積したとすればいかにも不自然である。上層灰原の上面は、後世の削平を受けている可能性が高い。

また、ほぼ単一の灰土のみで形成されている中層灰原・下層灰原とは異なり、上層灰原が灰土と砂質土の互層で形成されていることは、堤体斜面上方に遺存した窓体部分が崩落して堆積したためであるのか、あるいは窓の操業に伴う灰土の遺棄の単位によるものなのかは、2次堆積であることを決定づける後世の遺物の混入が確認できないために判断できない。

なお、上層灰原からはコンテナ約90箱分の須恵器が出土し、蓋杯・椀・高杯・短頸壺・長頸壺・平瓶・提瓶・横瓶・穿孔壺・廳・甕・器台などの器種が認められる。

②中層灰原

黒色灰土の單一層で形成される中層灰原の厚さは、最も厚い部分で約30cmである。N-S軸以西における中層灰原の上面南端は、標高71.75m～72.00m付近の堤体斜面のコンターラインには平行して検出され、同軸以東の南端は標高72.50m付近の堤体斜面にまでその堆積が及ぶ。

中層灰原の規模は、東西約17m・南北5.9m(現存長)で、第1次堤体斜面に沿って調査区の西側へと続いている。当初、上方のコンクリート擁壁を除去することができなかつたために、その直下の部位については擁壁解体時に確認調査を行ったが、灰原は遺存せず、上層47の上面を検出した。

中層灰原は第1次堤体斜面裾部のテラス状平坦面に堆積しているため、その上面は南側から北側へ緩く傾斜しているが、比高差は1m以内に収まっている。ただし中層灰原の北端は攪乱によって欠失しており、これより以北の堆積状況は不明である。

この灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約20箱分を数える。その器種には蓋杯・高杯・椀・廳・短頸壺・長頸壺・平瓶盤・甕・器台などが確認できる。

③下層灰原

焼土を多く含む暗褐色灰土の單一層で形成される下層灰原は、最も厚く堆積する箇所で約30cmの厚みを有する。その規模は東西17m・南北8.5mを測る。

下層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約20箱分である。その器種には蓋杯・高杯・短頸壺・平瓶・長頸壺・提瓶・横瓶・甕がある。

④下層灰原直下の遺構

土層44～47の黄褐色系砂質土・暗青灰色砂礫土からなる流出土の上面において、図157のようなビット群を検出した。ビット群はN点から約8m地点以北の流出土によって形成されている平坦面と、その北側の第1次堤体裾を含む傾斜面のみに分布しており、N点から約8m地点以南の第1次堤体斜面上においては検出できなかった。

ビットには直径30cm～50cm程度のものと、直径30cm未満のものとの2種類がある。前者の径の大きいものは、N-S軸より西側において、斜面に平行して平坦面上に3点、斜面上に6点が並んで検出された。強いて復元するならば、南北方向1間、東西方向5間の掘立柱の構築物がこの箇所に



写真79 下層灰原遺物検出状況

あったと推定される。南北方向が1間にとどまることと、あえて傾斜面に柱を立てていることからテラス状の平坦面を堤体裾よりも北側に延長するための棟敷状の構築物、または仮小屋のような建物が想定できる。なお、このピット群の埋土は下層灰原の灰土である。よって、灰土堆積段階には、この構築物は柱を抜いて撤去もしくは破壊されていたと考えられる。おそらくは、窯の操業にかかる作業上、必要とされた施設であろう。また、直径30cm未満のピットはN-S軸以東の平坦面上に集中して検出された。杭痕と考えられるこのピットの埋土は、やはり下層灰原の灰土層であった。

⑤第1次堤体

狹山池北堤第1次堤体の盛土状況は、層序の項で述べた通りである。今回の調査区内における第1次堤体の裾は、狹山池1号窯灰原によって被覆されていたために築堤当初の状態をきわめて良好に保存していたと判断できる。また灰原の及ばない標高73m以上での第1次堤体についても、土層を観察する限り、特に顕著な削平は考えられない。よって、調査区よりも南側の第1次堤体頂部までの間は、ほぼこの傾斜で斜面が続いているものと考えられる。堤体保存工事の断面調査結果から、第1次堤体頂部の標高は74.4m程度であると予想され、部分的に高い箇所が存在するとしても、標高75.0mを大きく上回ることはないと想われる。とすれば、堤体斜面の調査区南端における第1次堤体上面から堤体頂部までの比高差は2m未満となり、1号窯灰原の南側上方に、窯体が堤体斜面に直交する形で築かれていた可能性はきわめて低い。これらの状況から、狹山池1号窯の窯体構築状況として次の2案が想定できる。

- (1)堤体斜面部の灰原の南東方向もしくは南西方向で、第1次堤体斜面に斜行して構築された窯体。
- (2)灰原の南側直上において、第1次堤体頂部を池側の南斜面までは貫通するような、半地下式構造の窯体。

実際の1号窯の構造が上記のいずれであるかは、今回の調査で痕跡すら確認できなかったために断定しがたいが、いずれにしても、限定された傾斜面で窯体の長さを最大限に確保するため、焼成部の床面傾斜角度は非常に緩やかなものであったと推測される。

ところで、調査区内における第1次堤体の形態は、図158のような傾斜面をなしている。標高70.75m～71.50mのコンターラインの間にみられるテラス状の平坦面は、土層49～55の粘土系の盛土によって形成されている。この平坦面は調査区から約20m東方の堤体斜面に設定したトレーンチでの土層断面調査では確認できなかった。この箇所では第1次堤体斜面の傾斜はどの場所においてもほぼ同一であった。このようなテラス状の堤体裾部は、中樋筋の堤体断面調査・東廻遺構発掘調査・堤体本体工事の立会調査でも確認できなかったため、1号窯灰原付近のみで確認できる構造であるといえる。第1次堤体の構築から1号窯操業までの期間に、池の水を堰き止める機能上、この部位に盛土をする必然性はまったく考えられない。おそらくは、窯の操業に伴って必要となった盛土であろう。つまり、その上面に設置された仮設的な性格の強い建物と関連性をもった平坦面と考えている。



写真80 下層灰原直下のピット群

4 出土遺物

灰原から出土した須恵器片の総量は、コンテナ約130箱に達した。本項では、平成4年度調査において水田造構上面の上層灰原から出土した遺物と、平成5年度調査において第1次堤体斜面上面の下層灰原・中層灰原・上層灰原から出土した遺物のうち、図化を行うことができた遺物をすべて報告する。なお1号窯出土遺物は2点の特筆すべき性質を有している。1点は、本窯が狹山池第1次堤体斜面に造営されたものであるため、本窯で生産された須恵器は狹山池築造時期の下限を示す資料であると理解できることである。もう1点は、第1次堤体の下層から検出された東柵下層遺構の構築時期が、その部材に使用されているコウヤマキの伐採年代からA.D.616年と判明している^⑨ことから、その上層に層位する第1次堤体の築造時期と本窯の操業開始時期がA.D.616年以後に限定されることである。つまり、東柵下層遺構と本窯の出土遺物から狹山池の築造時期の上限と下限が特定されるとともに、本窯で生産された須恵器にはA.D.616年以後の絶対年代が与えられることとなる。本窯の須恵器は須恵器型式の尖年代を考える上できわめて有用性の高い資料であるといえよう。

以下、各灰原層ごとに出土した須恵器の概要を述べる。なお、個別の遺物観察については表12～表15の遺物観察表を参照されたい。

①下層灰原出土遺物（図159～162・図版70～72、表12）

下層灰原中に含まれていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は126点を数える。器種別の個体数は次の通り。杯H身37点・杯H蓋41点・杯G身3点・杯G蓋2点・有蓋高杯1点・長脚無蓋高杯（杯部）4点・長脚無蓋高杯（脚部）3点・短脚無蓋高杯6点・短頸壺6点・短頸壺蓋1点・平瓶4点・長頸壺（胴部）2点・長頸壺（口頸部）2点・搗瓶1点・横瓶1点・甕14点。

杯H身の口径平均値は10.6cm、杯H蓋の口径平均値は11.3cmである。第3章で述べるように、1号窯下層灰原の杯H身の法量は、図306のような数値分布を示しており、口径9.0cm～10.6cm、器高2.2cm～3.4cmの範囲にはほとんどの個体が集中している。45のように、口径14.6cmを測るものも少数含まれている。杯H身のたちあがり高、たちあがり角度は、図309のような数値分布を示す。杯H身の外側調整は、14点が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、19点は底部に回転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、3点が底部全域を未調整とする。杯H蓋の外側調整は、16点が天井部頂部から回転ヘラ削り調整を施し、24点は天井部に回転ヘラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とし、1点が天井部全域を未調整とする。

杯G身の口径は23が10.4cm、24が10.6cm、82が10.6cmを測る。杯G蓋の口径（外径）は21が12.1cm、22が12.0cmを測る。杯G蓋のかえりは、21・22とも口縁端部以下に突出している。杯G身の外側調整は、3点とも底部中央から回転ヘラ削り調整を施している。

長脚無蓋高杯は、88が脚部に長方形スカシを2段2方向に有している。89・90は脚部に長方形スカシを有していない。

短頸壺は体部最大径が11cm～15cm程度の小ぶりなものが多く、肩部が外方へ緩やかに下る形態のものと、肩部が外下方へ強く張り出す形態のものの両者が存在する。

平瓶は、体部が外下方に張り出して肩部が角張る形態の107と、体部が下外方に比較的緩やかに張り出して肩部が丸みをもつ106・109がある。

長頸壺110・111の体部外面にめぐらされている沈線はいずれも非常に純いものであり、体部外面にある刺突文も不規則な間隔で施文されている。

甕は、口頸部が大型のもののうち、565・566・567・568・569は口縁部直下の沈線のみを横描き斜行沈線文を施文する。570・571・572・573・574は沈線のみを頸部外面にめぐらす。口頸部が小型

のもの561・562・563・564の頸部外面は無文である。

②中層灰原出土遺物(図163～165、図183、図版73～76、表13)

中層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は102点を数える。その器種別の個体数は次の通り。

杯H身39点・杯H蓋42点・杯G蓋1点・榠1点・長脚無蓋高杯(脚部)4点・有蓋高杯蓋2点・短頸壺4点・短頸壺蓋1点・長頸壺1点・平瓶2点・盤1点・甕3点・器台1点

杯H身の口径平均値は10.6cm、杯H蓋の口径平均値は11.5cmである。第3章に述べるように、1号窯中層灰原の杯H身の法量は、図307のような数値分布を示し、杯H身のたちあがり高、たちあがり角度は、図310のような数値分布を示している。杯H身の外表面調整は、16点が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、21点は底部に回転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、2点が底部全域を未調整とする。杯H蓋の外表面調整は、15点が天井部頂部から回転ヘラ削り調整を施し、24点は天井部に回転ヘラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とし、3点が天井部全域を未調整とする。

杯G蓋の口径(外径)は195が11.0cmを測り、かえりは口縁端部以下に突出し、外面上には底部中央から回転ヘラ削り調整を施している。

長脚無蓋高杯は、198・200が脚部に長方形スカシを2段2方向に有している。199・201は脚部に長方形スカシを有していない。

短頸壺は体部最大径が12cm～16cm程度の比較的小ぶりなものが多く、肩部が下外方へ緩やかに下る形態のものと、肩部が外下方へ強く張り出す形態のものの両者が存在する。

平版は、体部が外下方に張り出して肩部が角張る形態のものである。

長頸壺202の体部外面上にめぐらされている沈線はいずれも鈍いもので、下層灰原出土資料の110に近似した形態のものである。

③上層灰原出土遺物(図166～175、図183～190、図版77～85、表14)

上層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は340点を数える。その器種別の個体数は次の通り。

杯H身120点・杯H蓋106点・杯G身4点・杯G蓋2点・榠2点・長脚無蓋高杯(杯部)4点・長脚無蓋高杯(脚部)12点・短脚無蓋高杯18点・短頸壺7点・短頸壺蓋4点・長頸壺(脚部)2点・長頸壺(口部)1点・平瓶3点・提瓶10点・横瓶1点・穿孔壺2点・甕1点・甕38点・器台3点

杯H身の口径平均値は10.3cm、杯H蓋の口径平均値は11.4cmである。第3章に述べるように、1号窯上層灰原の杯H身の法量は、図308のような数値分布を示し、杯H身のたちあがり高、たちあがり角度は、図311のような数値分布を示している。杯H身の外表面調整は、39点が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、50点は底部に回転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、28点が底部全域を未調整とする。杯H蓋の外表面調整は、44点が天井部頂部から回転ヘラ削り調整を施し、50点は天井部に回転ヘラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とし、12点が天井部全域を未調整とする。

杯G身の口径は234が12.0cm、235が11.0cm、236が11.6cm、237が9.6cmを測る。杯G蓋の口径(外径)は233が11.9cm、409が11.6cmを測る。杯G蓋のかえりは、233・409とも口縁端部以下に突出している。杯G身の外表面調整は、4点とも底部中央から回転ヘラ削り調整を施している。

長脚無蓋高杯は439・440・444・508の4点が杯部を遺存し、456・457・458・459・492・494・496・497・498・499・500・507の11点が脚部のみを遺存している。439・440・444の杯底体部境界と底部

上方にめぐらす稜の間は無文である。496・497・499・500は脚部に2段3方向の長方形スカシを有しており、507は脚部に2段2方向に長方形スカシを有している。457は脚部に2段2方向のスリット状スカシを不完全に切り込んでいる。456・458・459・492・494・498は脚部に長方形スカシを有していない。

短脚無蓋高杯は441・442・443・446・447・448・449・451・452・453・490・491・495のような脚部にスカシをあけないタイプのものと、445・450・454・493のように円孔スカシを脚部に有するもの、455のように長方形スカシを有するタイプのものがある。

短頸壺は体部最大径が10cm～16cm程度の比較的小ぶりなものが多い。肩部が下外方へ緩やかに下る形態のもの469・484・485と、肩部が下外方へ強く張り出す形態のものの両者が存在する。

長頸壺479・489は似通った形態である。479の体部外面にめぐらされている沈線は鈍く、その間の刺突文は不規則な間隔で施文されている。また、489の体部外面にめぐらされている沈線の間に施文されている刺突文の間隔は不規則ではないものの、上下端の高さが部位によって異なるため、やや乱雑な感を受ける。

半瓶480・481・482は、体部が下外方に比較的緩やかに張り出して肩部が丸みをもつ形態のものである。

甕477の頸部は細く、頸部と肩部が緩やかなラインで接続されているため基部が明瞭でなく、肩部も緩やかに外下方へ下る。

甕は、口頸部が大型のもの580・581・587・588・590・591・593・594・595・597・598・600・602・605・606・608・611・623・625・626は口縁部直下の沈線の下方に櫛描き斜行沈線文を施文する。589・592・596・599・607・609・612・624は口縁部直下の沈線の下方に波状文を施文する。601・603・604は沈線のみを頸部外面にめぐらす。口頸部が小型のもの584・585・586・620・621・622の頸部外面は無文である。

④灰原表面採集遺物（図190、図版82、表15）

灰原が遺存していた堤体斜面の表上層上面に散布していた遺物、および試掘溝内から出土した遺物をここに掲載した。なお、水田遺構を被覆していた部位の上層灰原における表面採集遺物は、池尻遺跡(2)の項に掲載し、ここには含めていない。

杯H身・杯H蓋・杯C身・杯G蓋・無蓋高杯・短頸壺・提瓶・甕等の須恵器と、中世の羽釜が出土している。なお、522の杯G身は底部中央部分を欠損しているため、無蓋高杯の杯部である可能性も残すが、ここでは杯として扱った。

杯H身の口径平均値は10.3cm、杯H蓋の口径平均値は11.2cmである。

5 小 結

今回の調査で、河川氾濫原の直上に北堤第1次堤体が築かれ、さらに、その北側斜面において造営された須恵器窯からの排出物によって形成された灰原が、第1次堤体斜面およびその北側に広がる水田跡に堆積している状況が確認できた。つまり、第1次堤体斜面における須恵器窯本体の遺存状況を確認するまでもなく、第1次堤体の盛土が7世紀前半の須恵器窯灰原の下層に層位しているという、重要な層序関係を確認することができたのである。このことによって、狹山池の築造時期の下限を、考古学的なデータからおさえることが可能になった。第1次堤体よりも南側において、堤の痕跡らしきものはまったく検出されておらず、第1次堤体が狹山池築造当初の堤であることは間違いない。すなわち、狹山池の築造年代は、1号窯灰原の須恵器が示す時期よりも下降することはなく、第1次堤

体の下層に層位する東堀下層遺構の埴管材の伐採年代 A.D.616 年より古くなることもありえない。

また以上のことから、1 号窯灰原から出土した須恵器は、A.D.616 年以後に生産されたことが確実である。北堤斜面を被覆する灰原のうち、1 号窯上層灰原は 2 次堆積による灰土層である可能性を残すために別に扱う方が良いと思われるが、下層灰原と中層灰原は窯体操業時に廃棄された今まで遺存すると考えられる。よって、灰原資料とはいえ、下層灰原・中層灰原から出土した須恵器は、生産年代の上限が特定可能な数少ない窯跡資料であり、陶邑窯跡群の須恵器編年を考察するに際してきわめて重要な資料であるといえよう。

本窯の灰原から出土した須恵器は、下層灰原出土資料・中層灰原出土資料・上層灰原出土資料とも、杯の蓋身逆転期のいわゆる TK217 型式の範疇に含まれるものである。第 3 章で検証しているように、杯 H 身の法量は TG10-1 集中域内に、たちあがりの形態は HII 分布域・TG10-I 分布域内に集中する数値を示している。このことから、1 号窯の資料は TK217 型式第 1 類^④に分類できるといえよう。また、無蓋高杯には、長脚 2 段の脚部を持つものと短脚の脚部を持つものとが認められ、このうち長脚 2 段の高杯には、長方形またはスリット状スカシのあるものと、スカシのないものとが存在する。これは TG10-I・東池尻 1 号窯の窯跡資料と同様の高杯を生産していたものと理解でき、TK217 型式第 1 類に分類される資料と同様の器種バリエーションを有しているといえよう。

また、1 号窯の出土資料の中では、杯 G の出土点数がきわめて少なく、杯の生産割合のはほとんどを杯 H が占めている。TK217 型式第 2 類に分類されるひつ池西窯^⑤の出土点数が、杯 H : 杯 G = 2 : 1 となるのに対して、第 1 類に分類されるで本窯や東池尻 1 号窯における杯 G の出土数の少なさは非常に特徴的である。加えて、1 号窯の杯 G 身の口径は 10cm～11cm を測る。杯 G の法量と形態、杯 H と杯 G の出土数量比からみれば、消費地遺跡であるならば、まさしく飛鳥 I と判断される資料であろう。

本窯の調査によって、狭山池 1 号窯の須恵器が、TK217 型式第 1 類に分類される資料であり、この型式の須恵器が生産されていた年代は A.D.616 年以後であるとの指標を得た。狭山池の築造時期についても、北堤第 1 次堤体の構築年代の上限を A.D.616 年に、その構築年代の下限を TK217 型式第 1 類が陶邑で生産されていた時期に求めることができ、その間に狭山池築造年を限定することができる。1 号窯発掘調査と東堀遺構発掘調査と北堤堤体保存に伴う断面観察の 3 調査の成果によって、狭山池築造時期の問題に対して非常に明瞭な解答を得ることができたといえよう。

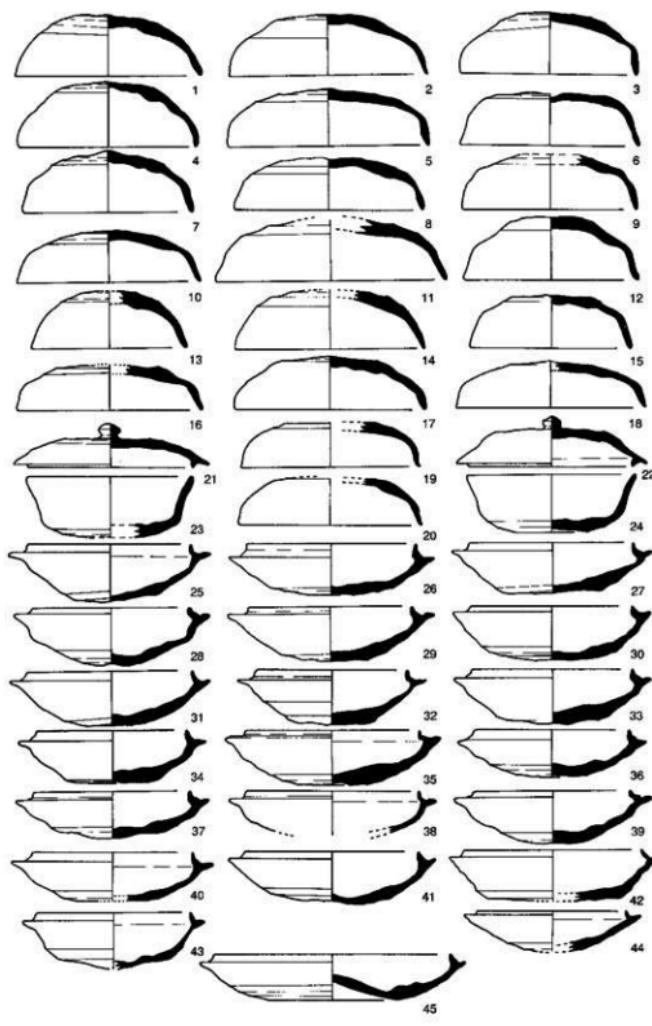


図 159 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 (1) (下層灰原)

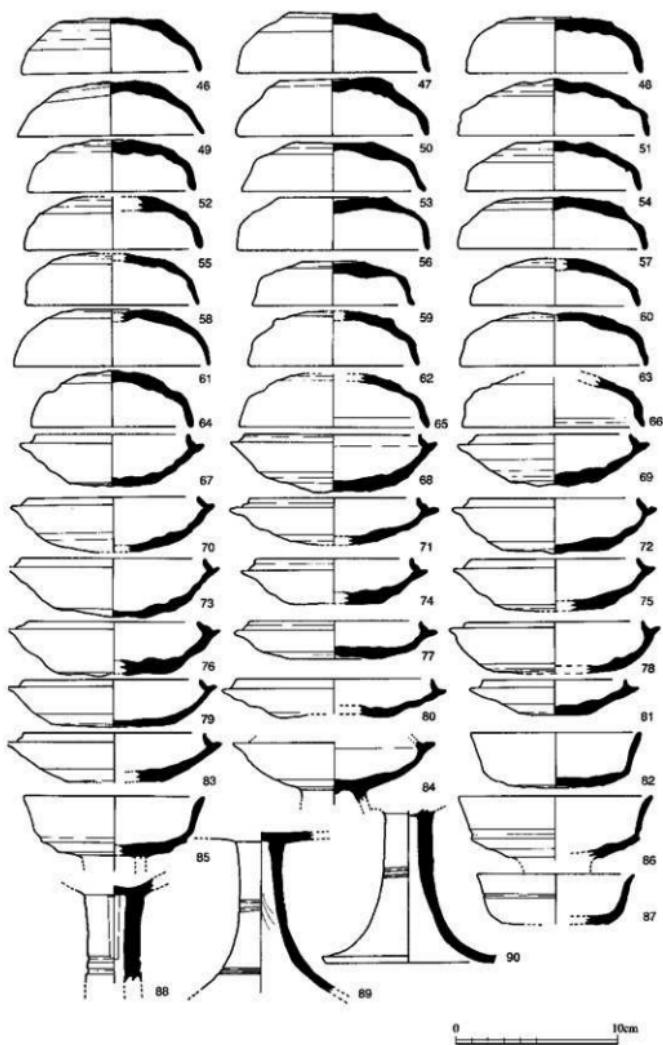


図 160 狩山池 1 号窯原出上遺物 (2) (下層灰原)

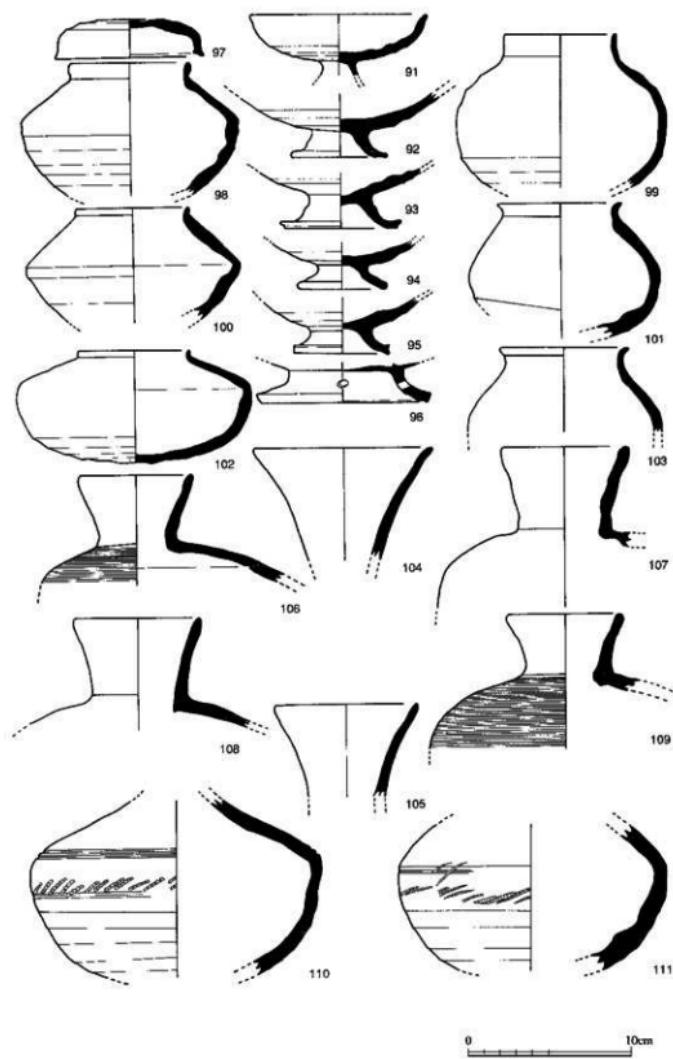


図 161 鉄山池 1 号窯底原出土遺物 (3) (下窯底)

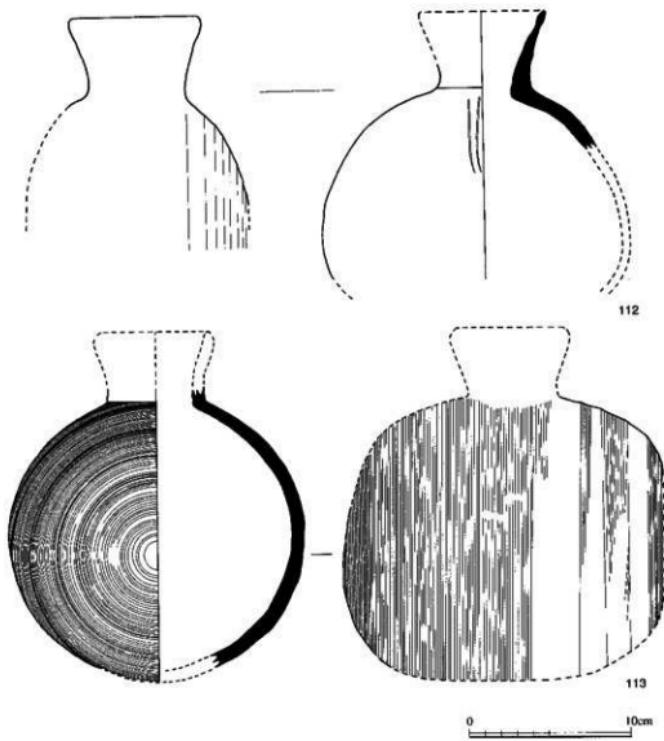


図162 狩山池1号窯灰原出土遺物(4)(下層灰原)

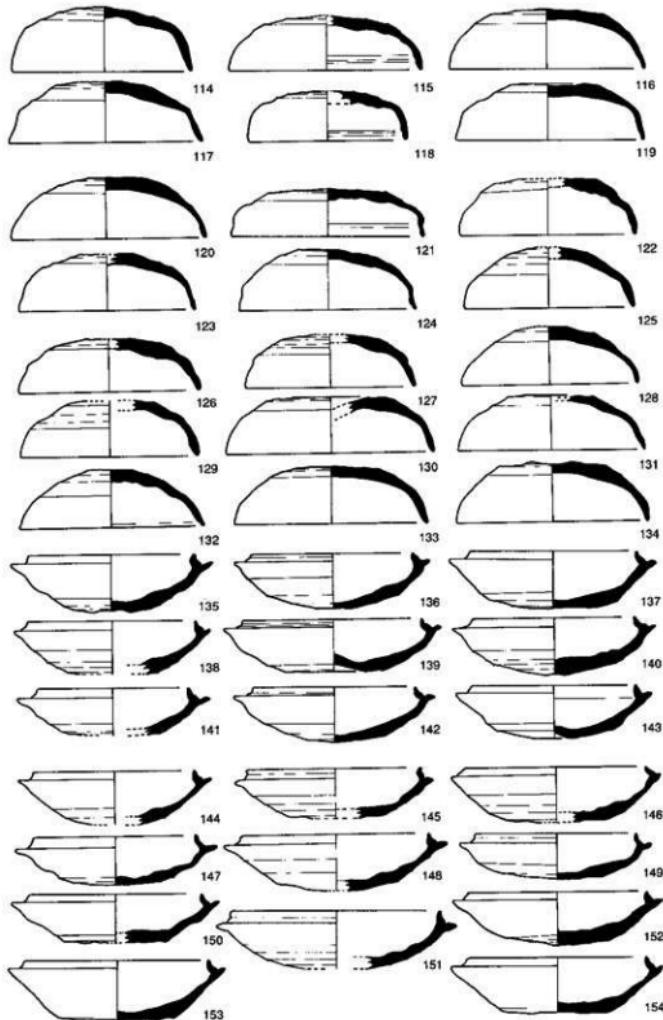
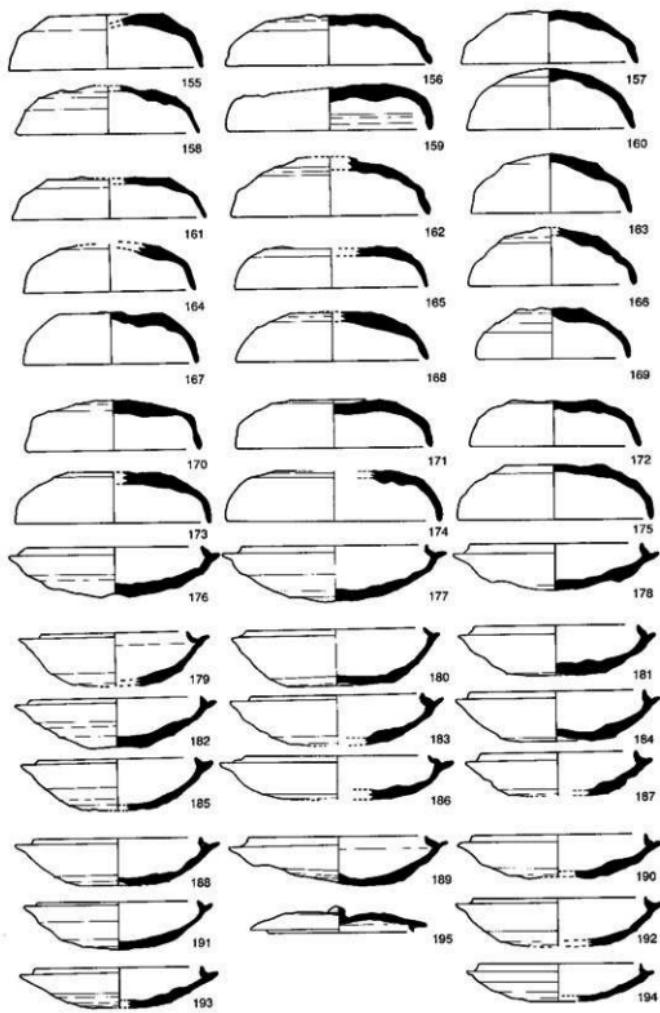


図 163 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 (5) (中層灰原)



0 10cm

図 164 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 (6) (中綱灰原)

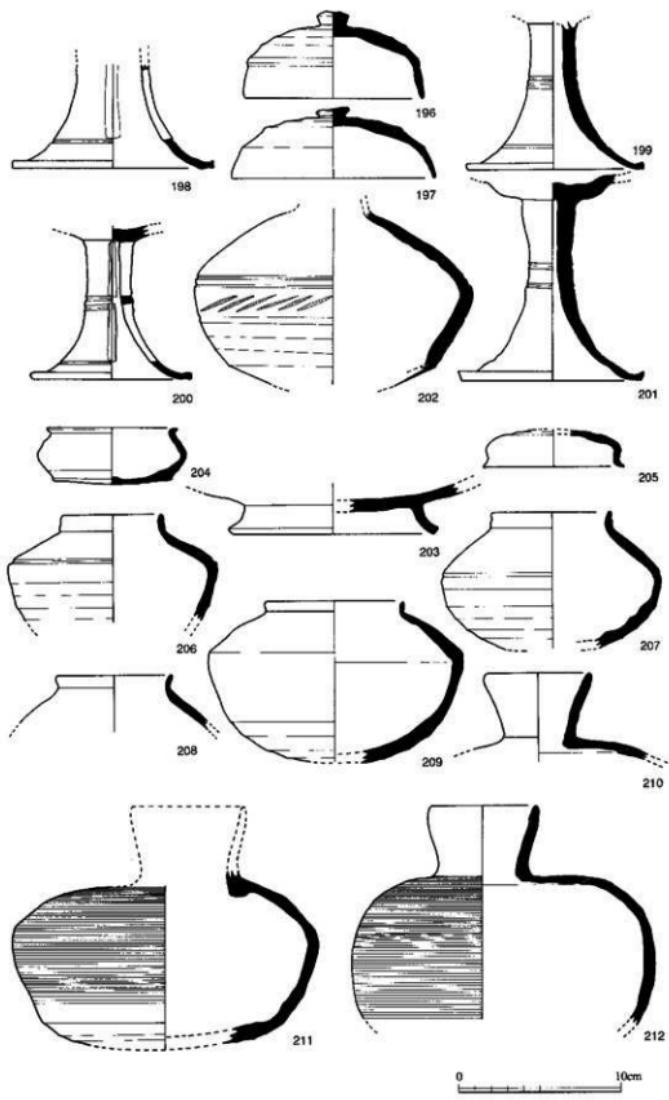


図166 狹山池I号窯灰原出土遺物(7)(小柄灰II)

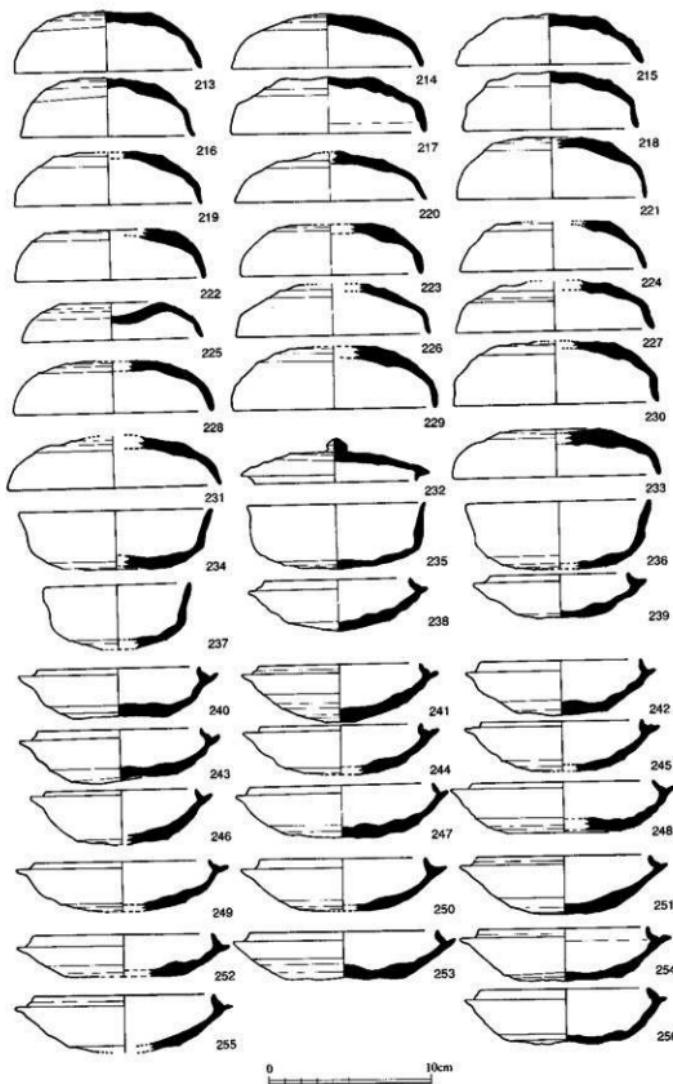


図 166 狭山池 1 号窯灰原出土遺物 (B) (上層灰陶)

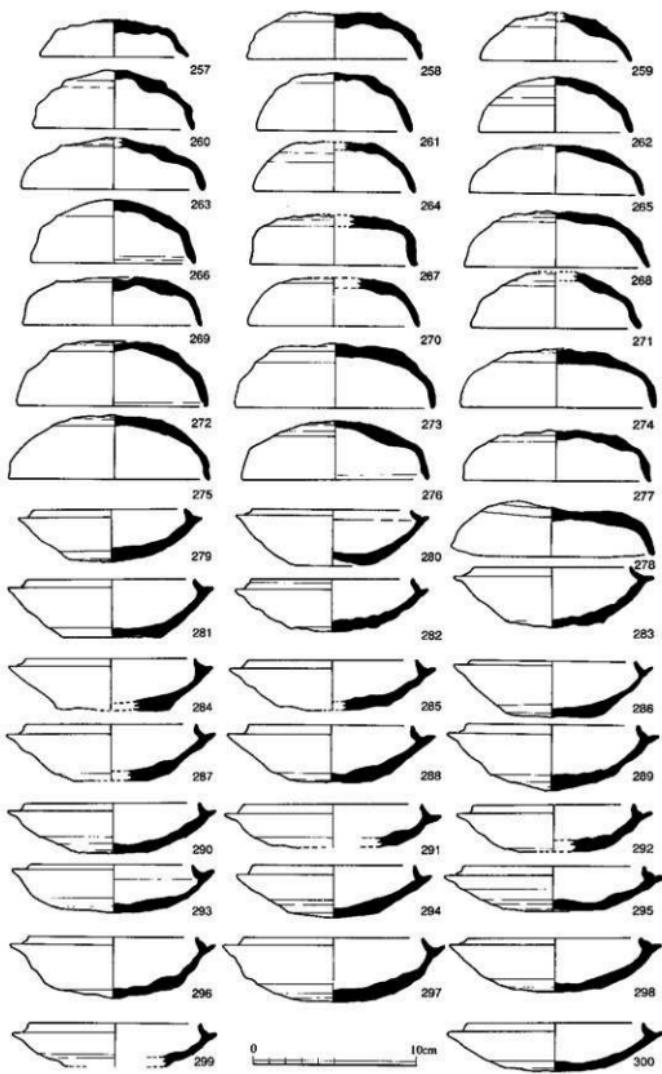


図 167 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 (B) (上層灰原)

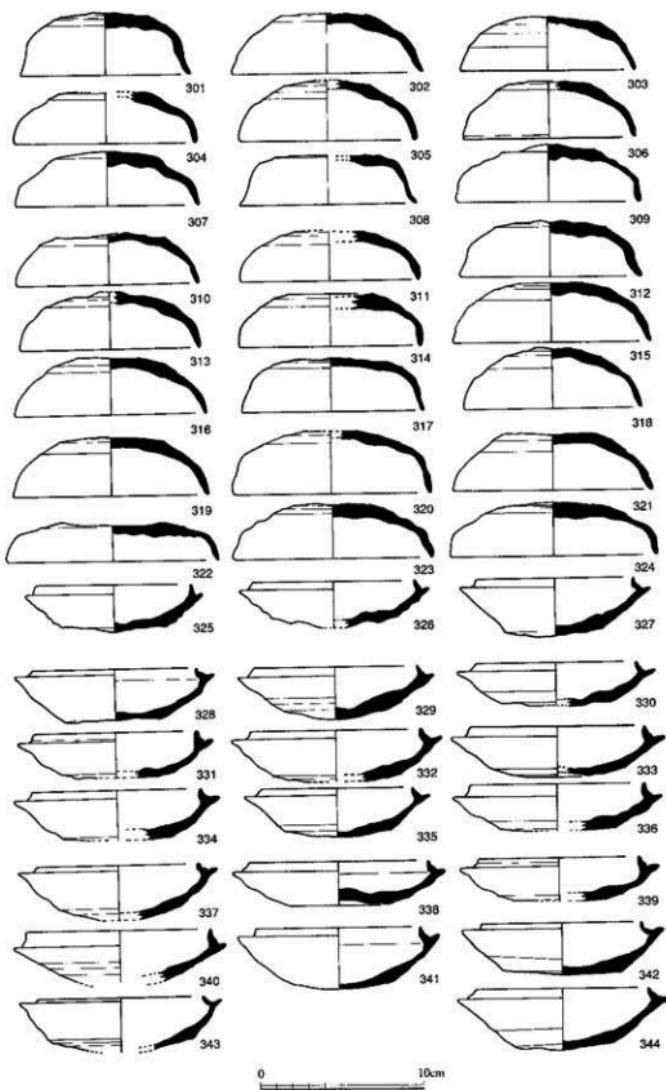


図 168 狛山池 1 号窯灰原出土遺物 09 (上層灰原)

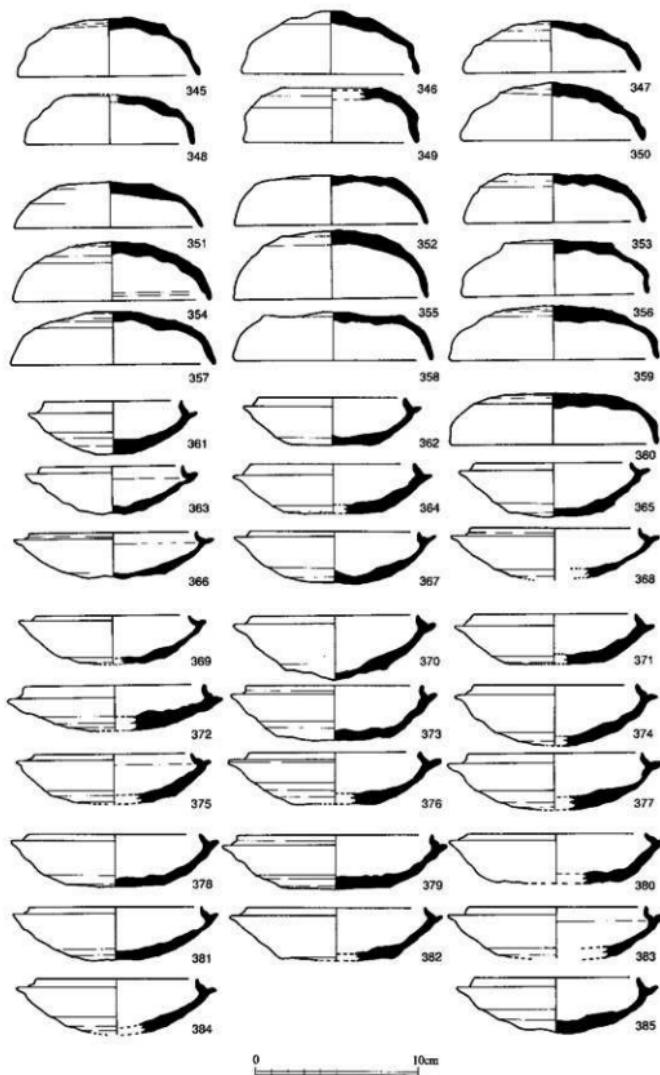


図 169 猿山池 1 号窯灰原出土遺物 ⑩ (上層灰原)

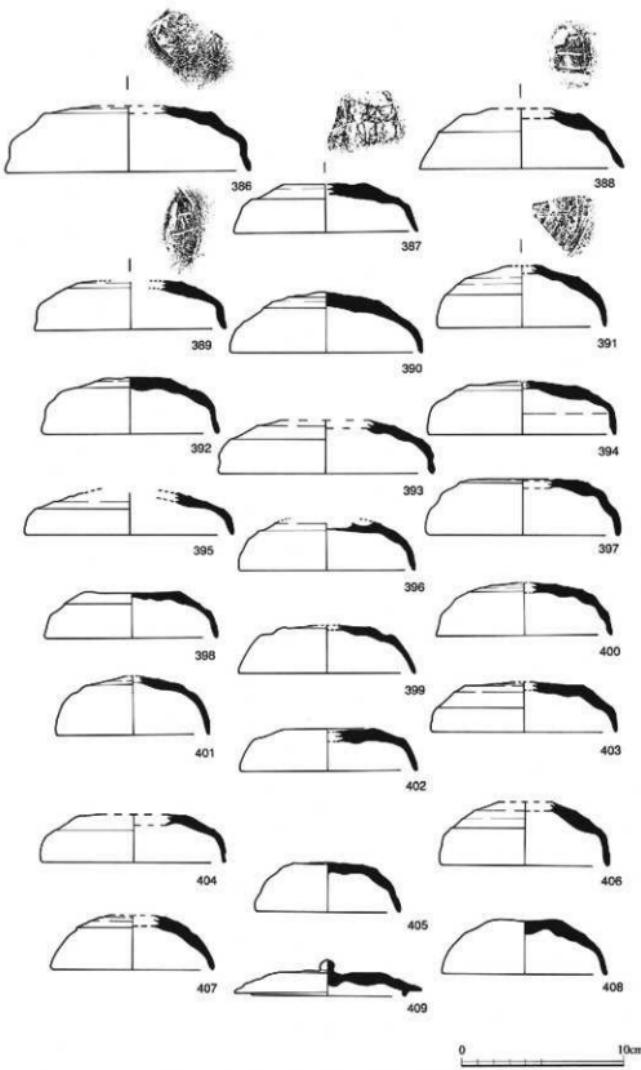


图 170 狹山池 1号窯灰原出土遺物 ㉙(上層灰6)

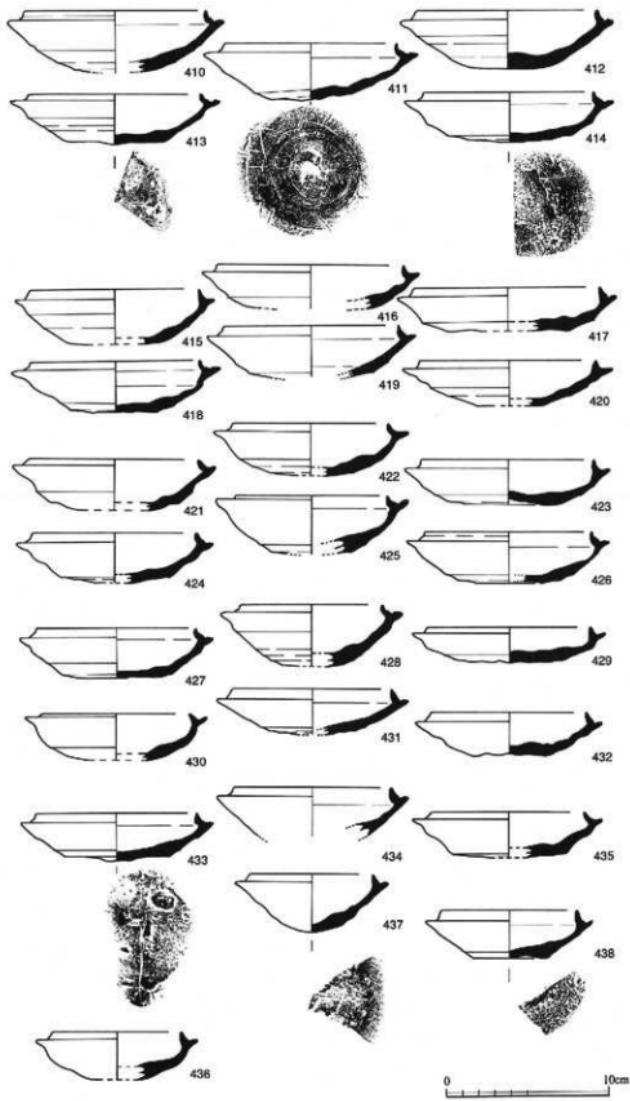


図 171 狐山池 1 号窯灰原出土遺物 03 (上層灰原)

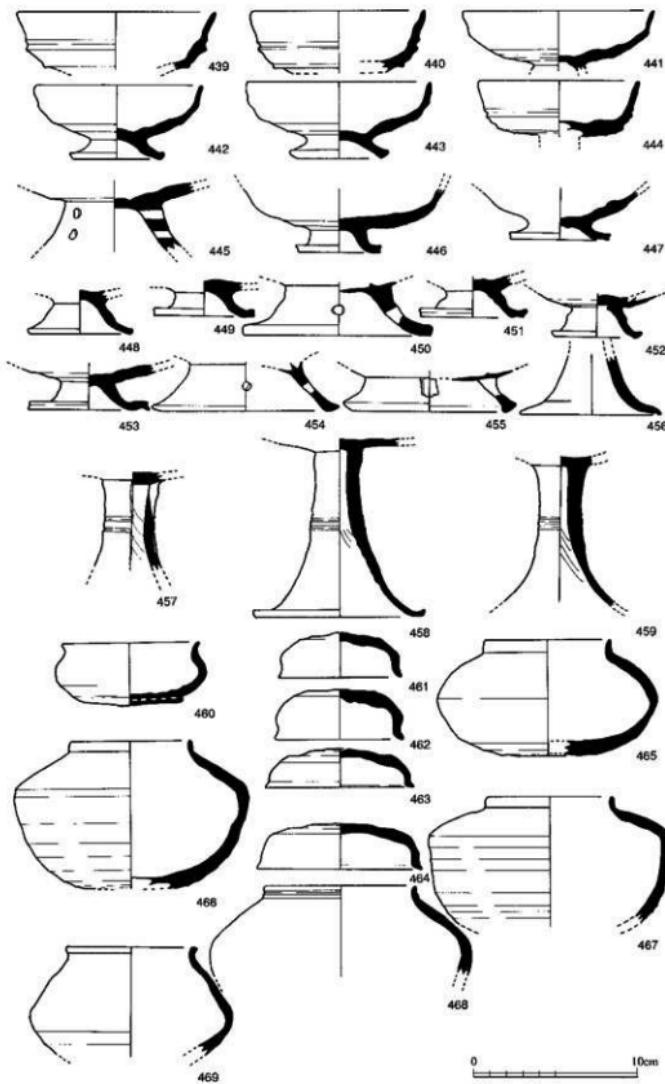


図 172 狹山池 1 号窯原出土遺物 (II) (上巻灰原)

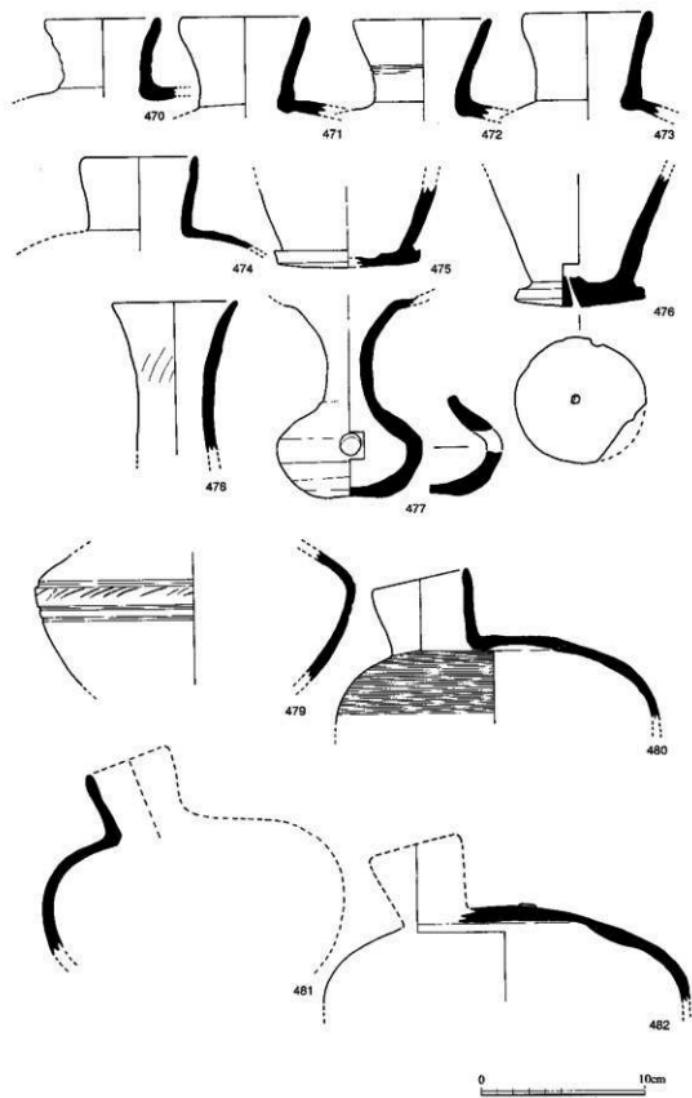


図 173 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 09 (上層灰原)

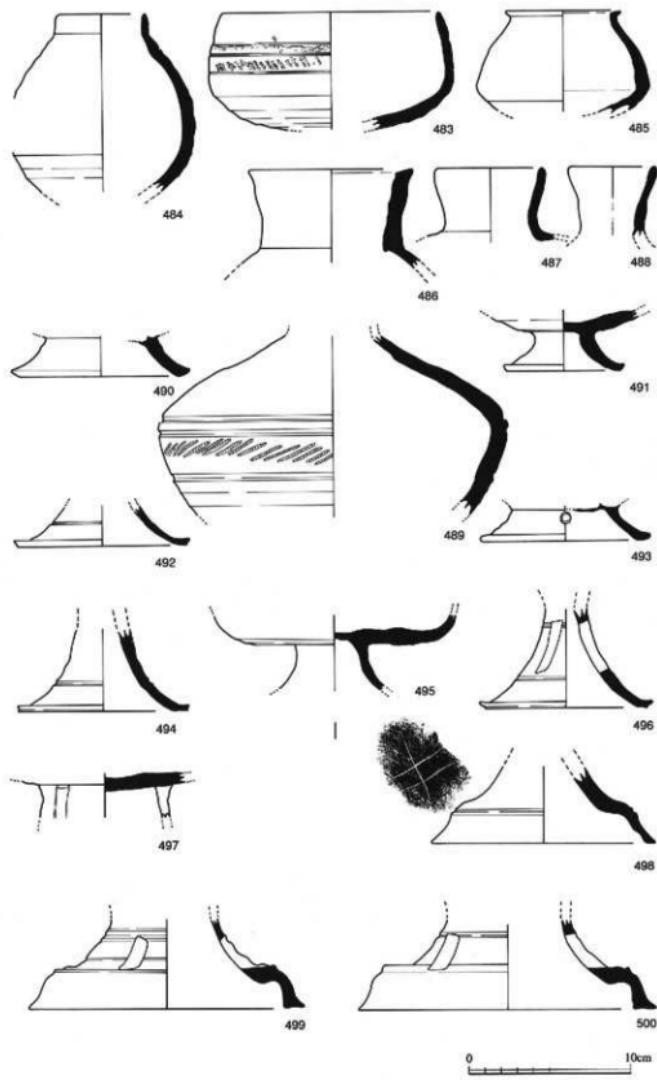


図 174 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 09 (上層灰原)

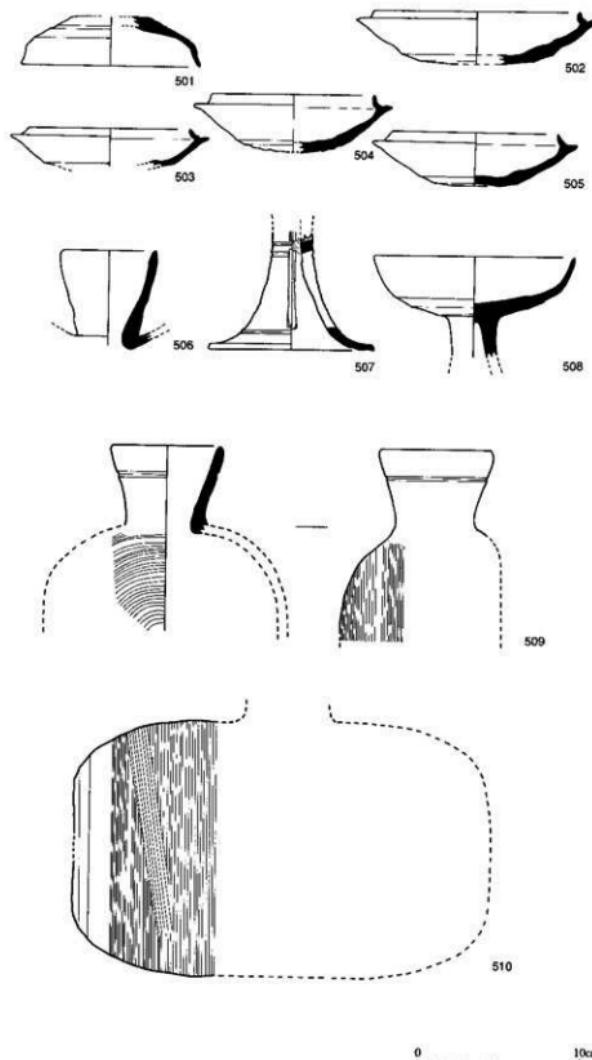


図 175 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 20 (上層灰原)

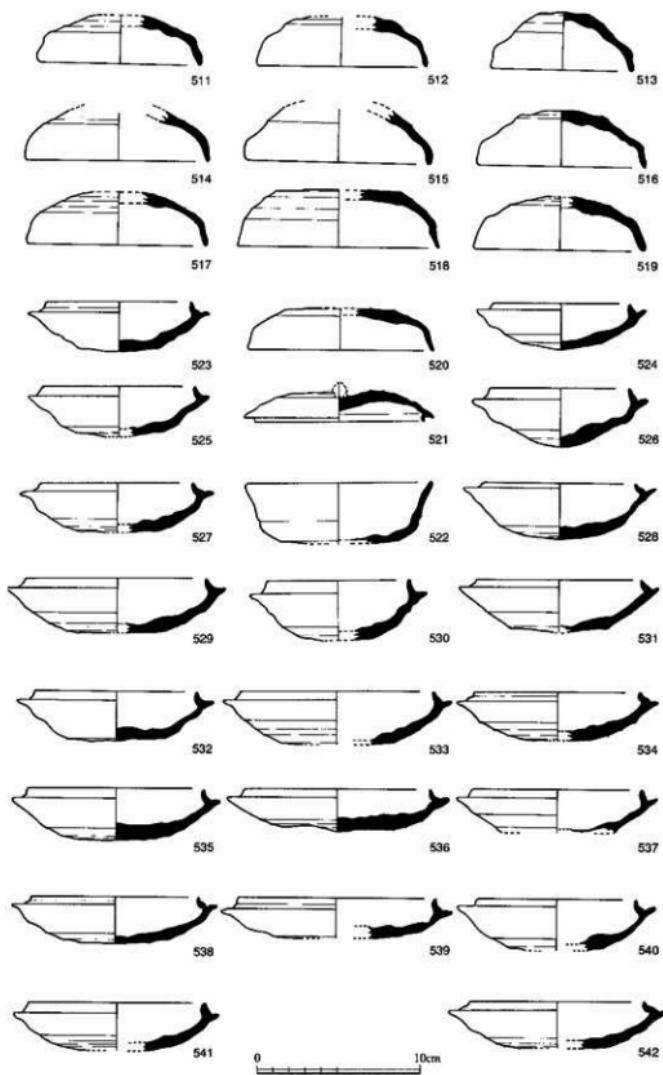


図 176 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 88 (表面採集)

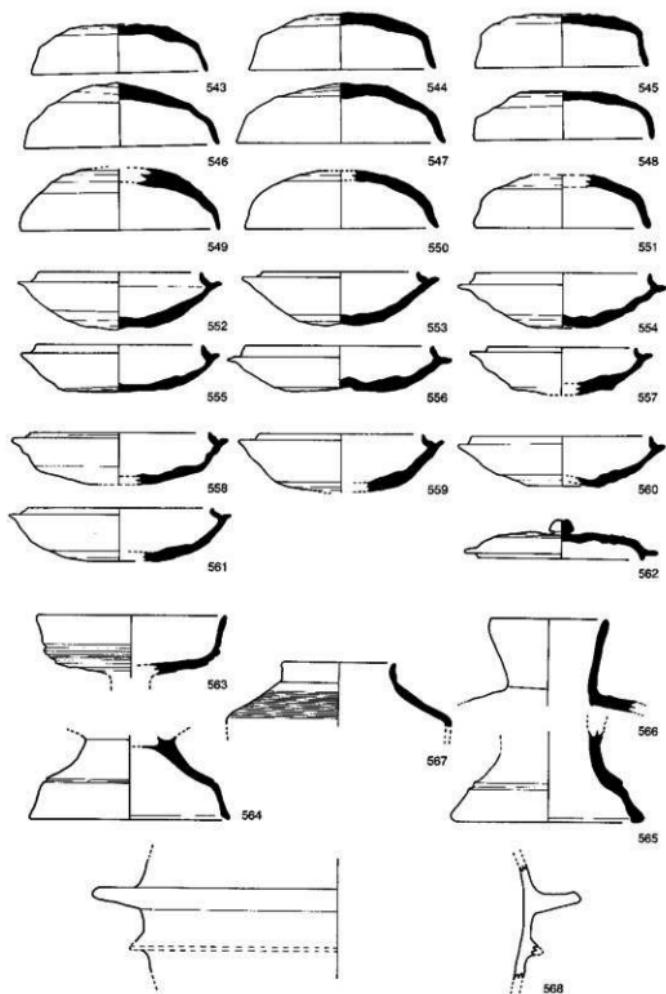
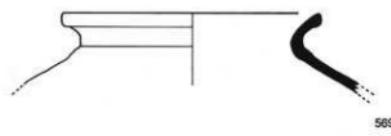
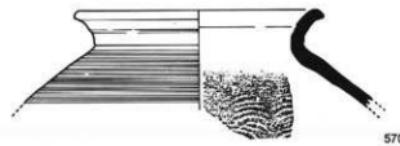


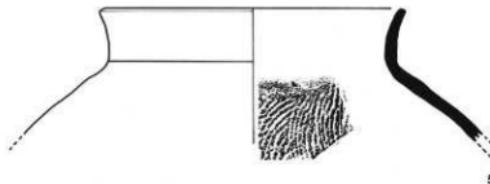
図 177 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 09 (表面採集)



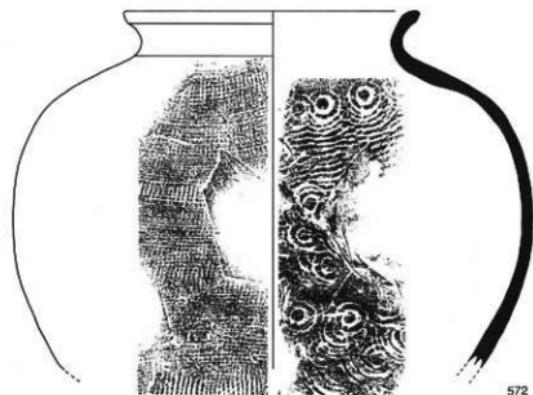
569



570



571



572



図 178 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 第（下層灰原）

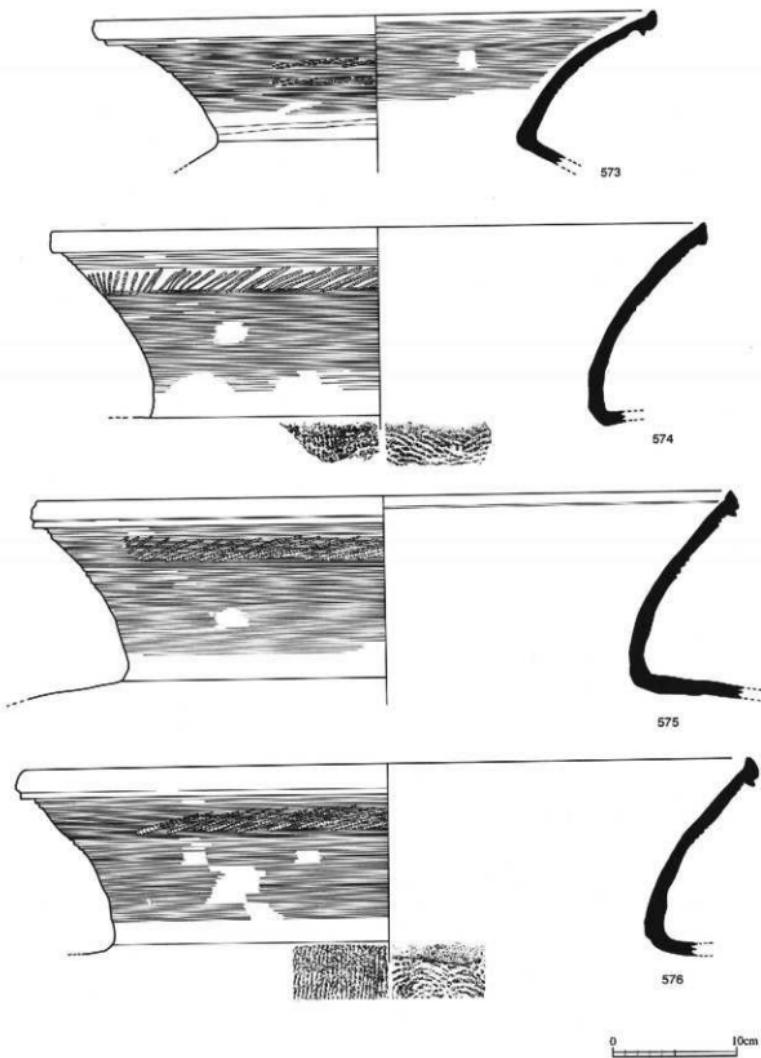


図179 狹山池1号窯灰原出土遺物 須恵器の断面

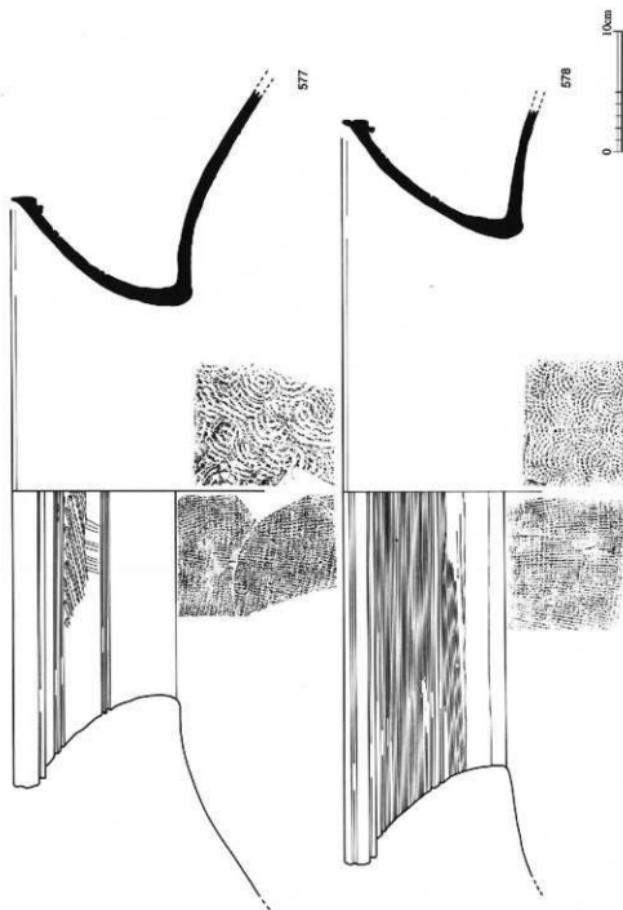


図180 狹山池1号窯灰原出土遺物 ②(下層灰原)

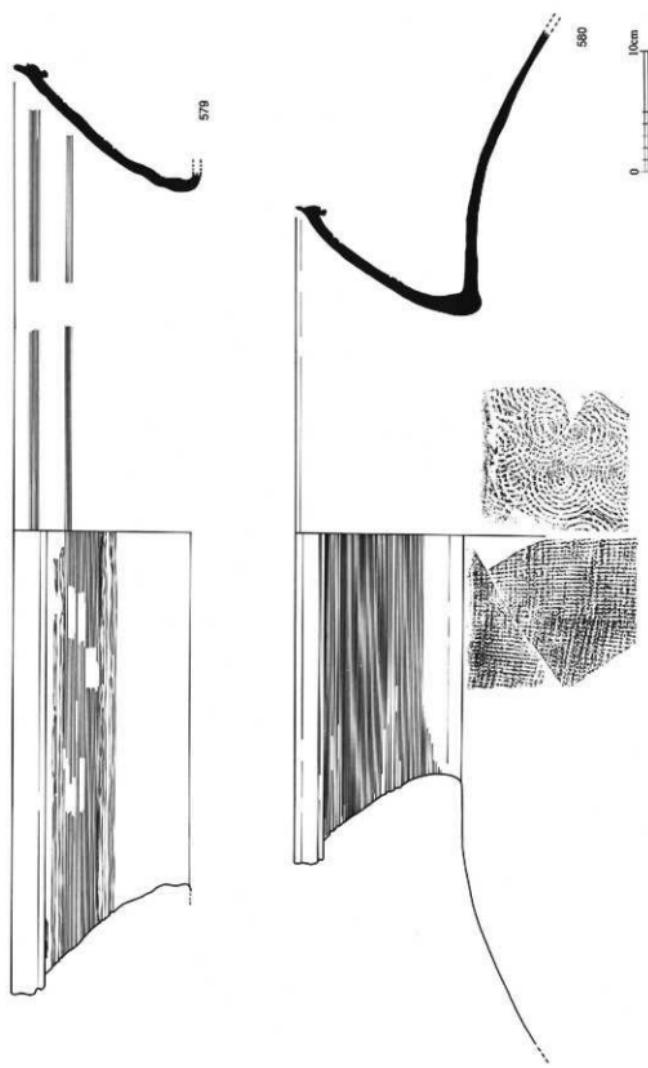


図 181 狹山池 1号窯灰原出土遺物 ⑩(下層灰原)



図 182 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 ⑧ (下層灰原)

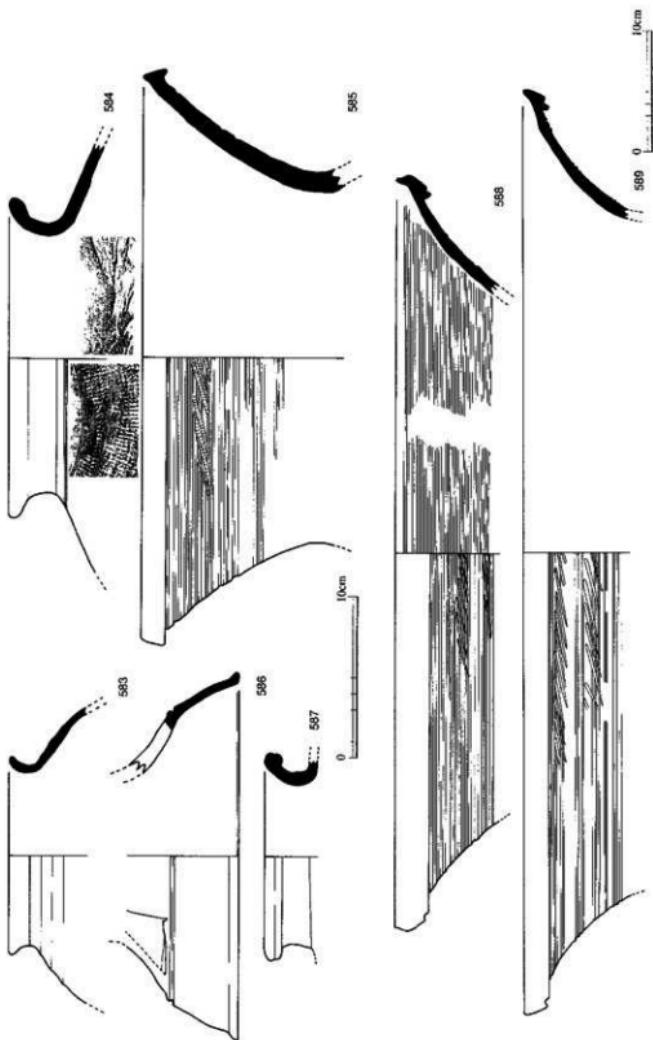


図183 捕山池I号窯灰原出土遺物 (583~586: 中層灰原、587~589: 上層灰原)

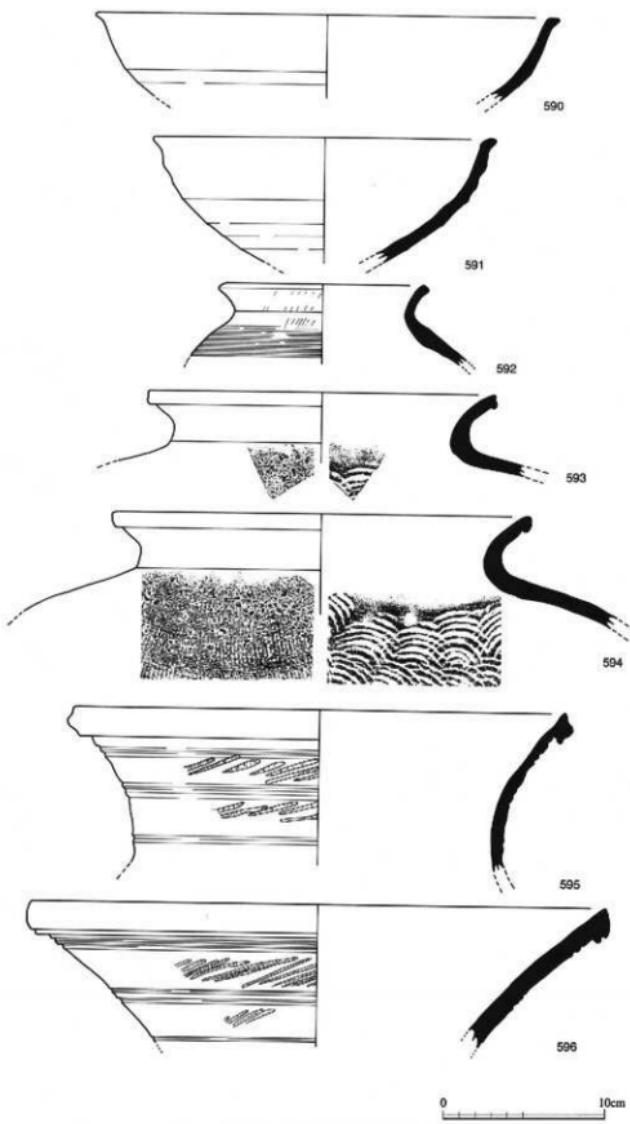


図 184 烧山池 1 号窯跡出土遺物 590 (上層灰原)

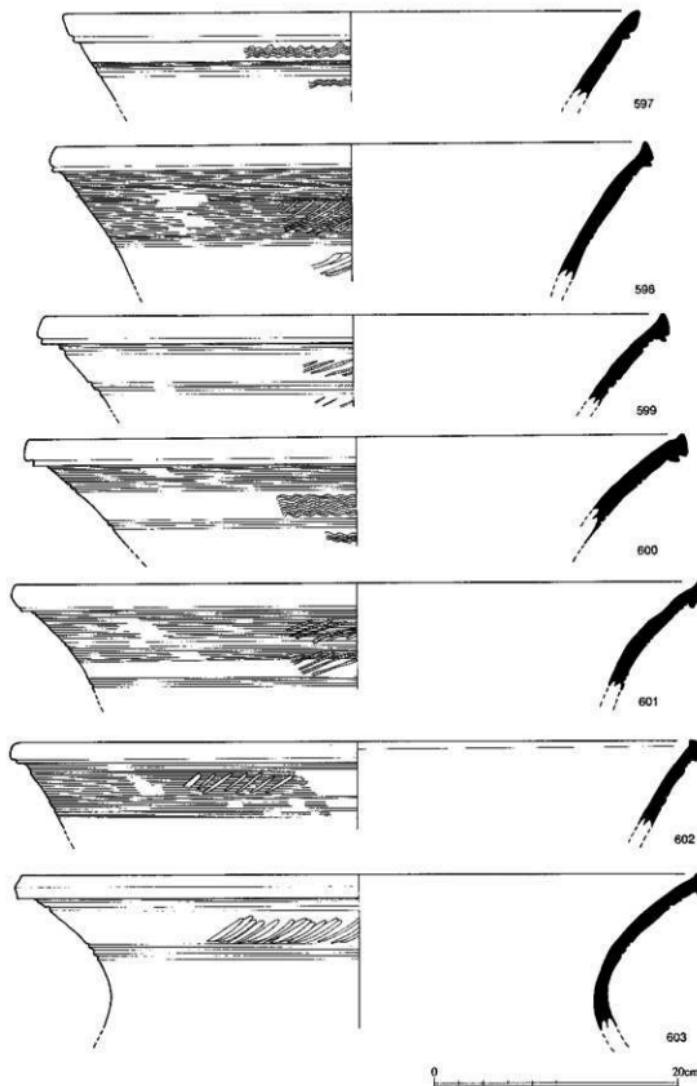


図 185 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 ㉙ (土器灰原)

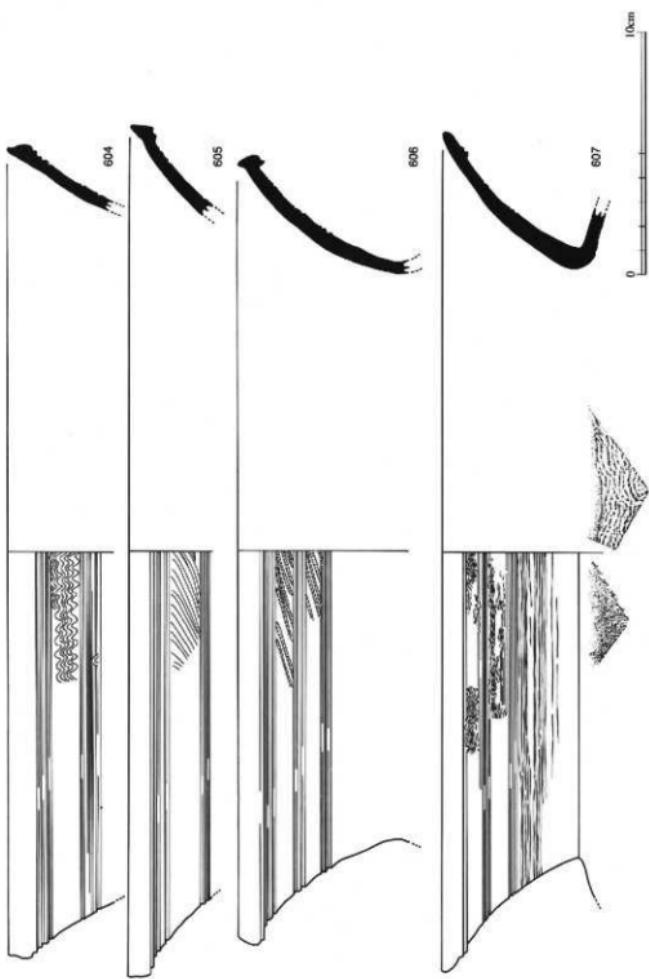


図 186 狹山池 1 号窯灰原出土遺物 ②(上層灰原)

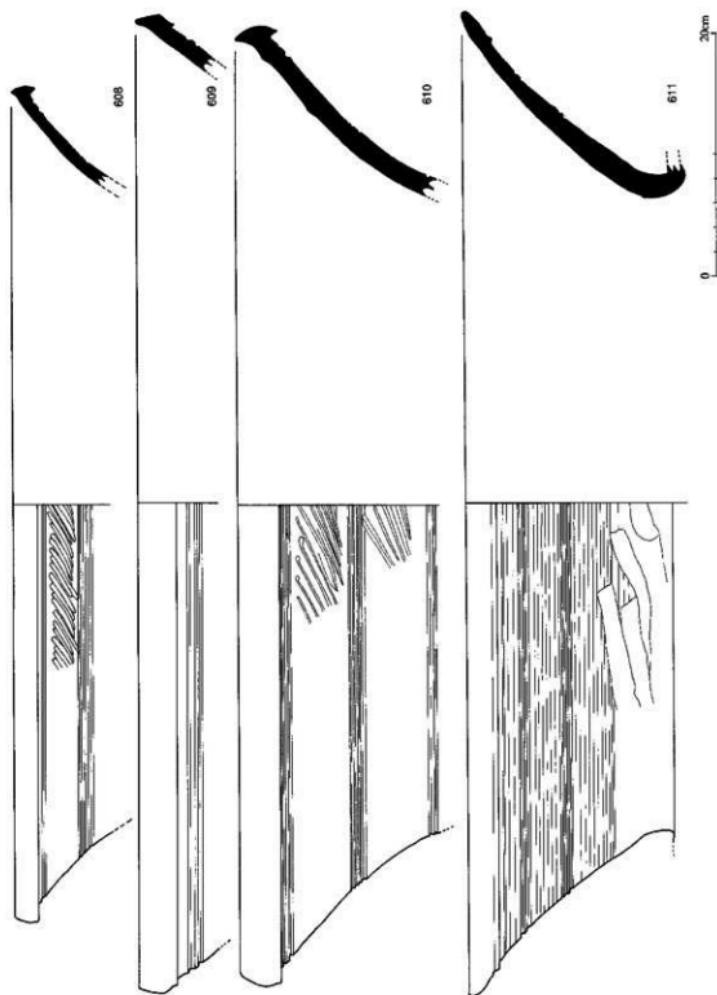


図 187 狸川池 1 号窯灰原出土遺物 ④(上野灰原)

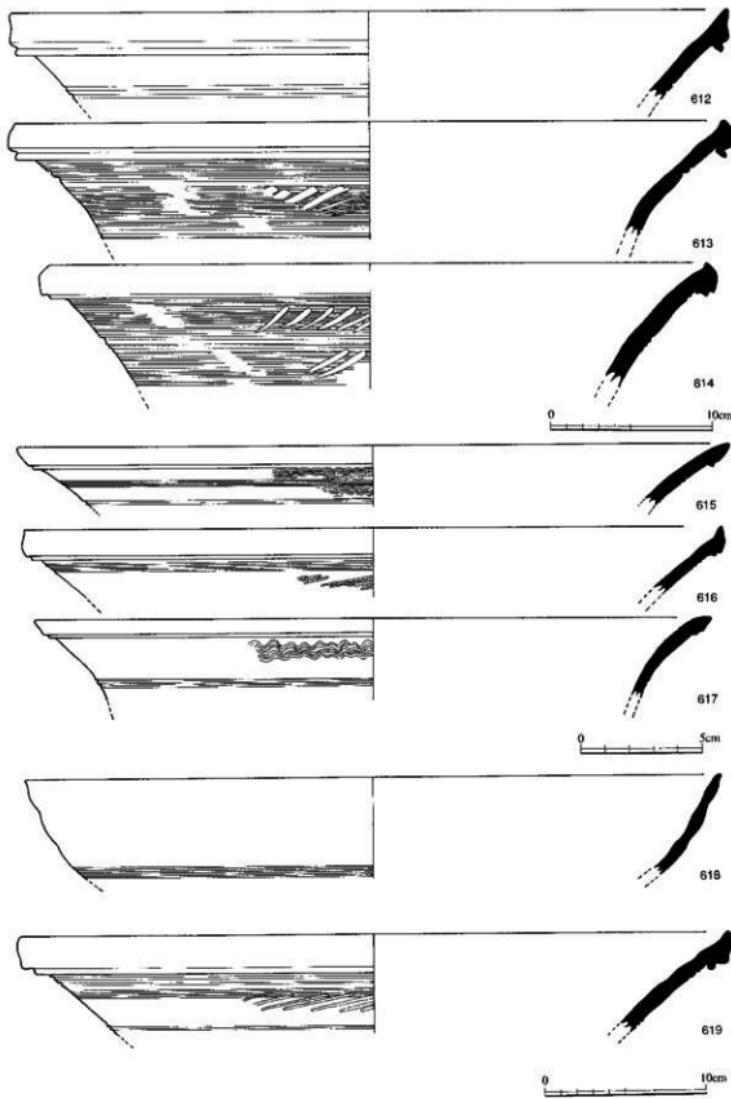


図 188 狹山池 1 号窯灰渣出土遺物 ⑩ (上層灰原)

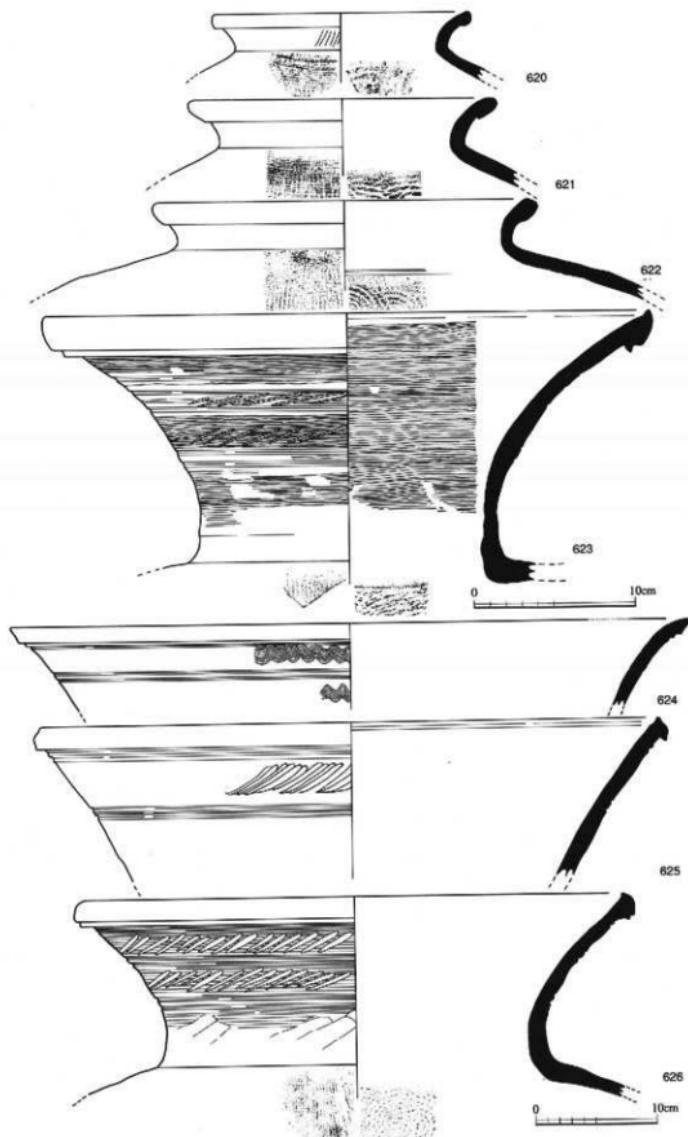


図189 狸山池1号窯灰原出土遺物 図(上層灰原)

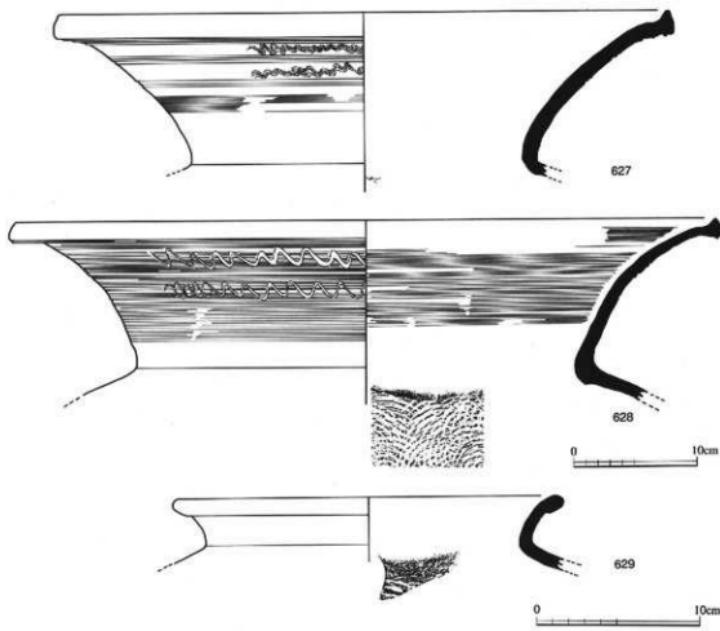
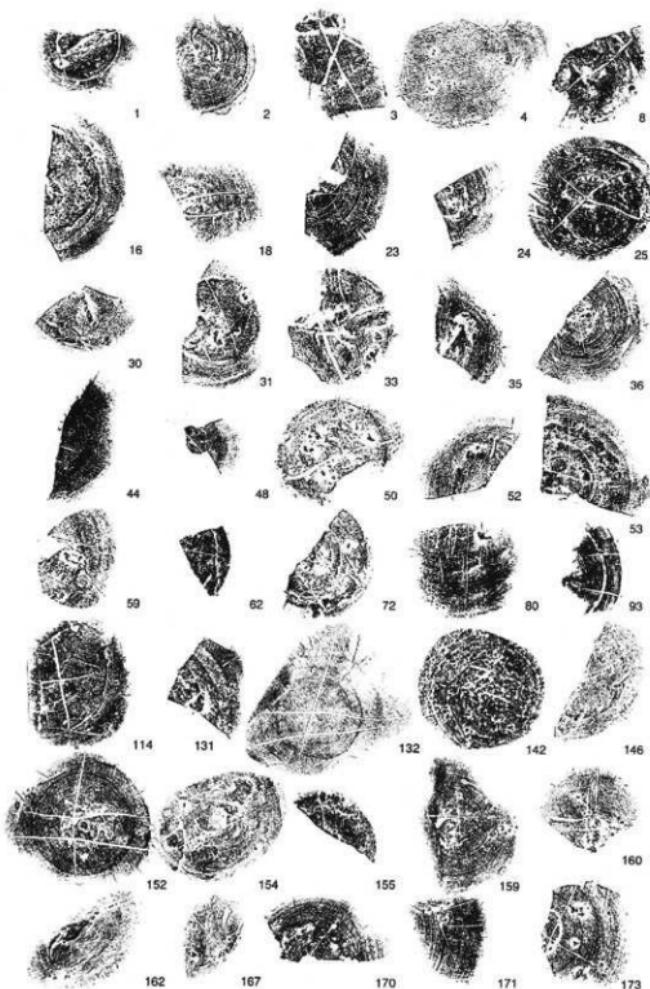
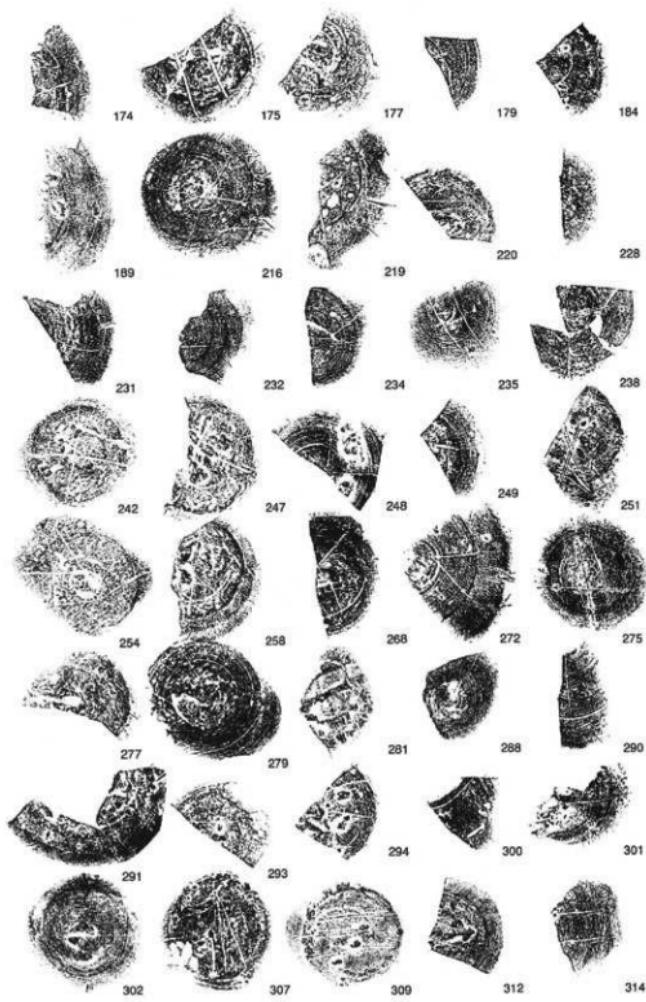


図190 狹山池1号窯灰原出土遺物 627(上層灰原、628~629:表面採集)



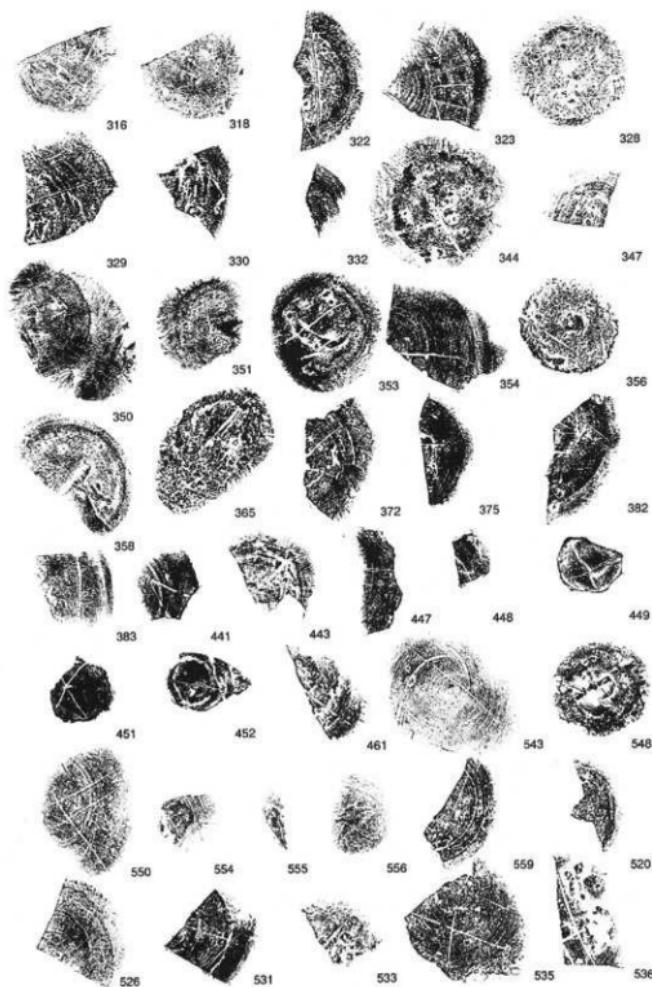
0 10cm

図191 狹山池1号窯跡出土遺物 (3)



0 10cm

図192 狹山池1号窯灰原出土遺物 36



0 10cm

図193 狹山池1号窯灰原出土遺物 ⑩

表 12 狩山池 1 号窓下層灰原出土遺物目録表

(丁はたあがりを示す)

器種	図面 図版	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	159- 1 70- 1	口径11.6 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。大井部外面1/4(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。合成復元。ヘラ記号: 大井部外間に「-」あり。
杯 蓋	159- 2 71- 2	口径12.4 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。合成復元。ヘラ記号: 天井部外間に「-」あり。
杯 蓋	159- 3	口径11.0 器高3.7	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く半円に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。合成復元。ヘラ記号: 天井部外間に「-」あり。
杯 蓋	159- 4 70- 4	口径10.6 器高3.1	端部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内・暗灰青色、外・暗灰色。胎土: 砂。焼成: 良好。残存: 3/4。外面灰かぶり。ヘラ記号: 天井部外間に「-」あり。
杯 蓋	159- 5	口径12.4 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/4(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。内外面灰かぶり。
杯 蓋	159- 6	口径11.1 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。一部反転復元。内外面灰かぶり。
杯 蓋	159- 7	口径10.6 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。
杯 蓋	159- 8	口径11.8 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/6回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 蓋	159- 9	口径11.0 残存高3.4	体部・口縁部はやや内側して下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 蓋	159- 10	口径11.4 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/4(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。灰かぶり。
杯 蓋	159- 11	口径14.4 残存高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。自然剥離付。
杯 蓋	159- 12 70- 12	口径11.0 残存高3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 砂。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	159- 13	口径9.6 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 砂。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 蓋	159- 14	口径11.8 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。端部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。
杯 蓋	159- 15	口径10.2 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/3(頂部)未調査。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内・暗灰青色、外・暗灰色。胎土: 砂。4mm以下の長石をやや多く含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。外面上に自然剥離付。

杯 蓋	159- 16	口径11.8 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(底部)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。外表面にあり。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
	159- 17	口径11.8 高さ3.3	口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(底部)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一明灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。外表面にあり。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	159- 18	口径11.8 器高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/1(底部)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：深灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。外表面にあり。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
	159- 19	口径11.2 残存高2.8	体部は下外方に下り、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/1(底部)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：深灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/6。合成復元。外表面に自然釉付。
杯 蓋	159- 20	口径11.2 残存高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石、チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。外表面に自然釉付。
	159- 21 71- 21	口径12.1 つまみ拌2.8 高さ2.8 つまみ高0.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。口縁部内部に内相するかえりを付し、端部は丸くおさめる。天井部外側に腹壁像つまりますを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。外表面に自然釉付。
杯 蓋	159- 22	口径12.0 つまみ拌1.1 器高3.1 つまみ高1.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。口縁部内部に内相するかえりを付し、端部は丸くおさめる。大井部外面中央に腹壁像つまりますを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。3mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/6。合成復元。灰かぶり。
	159- 23	口径10.4 残存高3.8	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。3mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。ヘラ記号：底体部外面に「-」あり。
杯 身	159- 24	口径10.6 残存高3.6	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。ヘラ記号：底体部外面に「-」あり。
	159- 25 71- 25	口径10.6 受部径12.6 器高3.8 T 高9.6 T 角度43°00'	たちあがりは内傾したのち中位で直する。端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾したのち中位でいまい段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/6回転ヘラ削り調整。底体部外面3/5(底部中央)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色。胎土：密。3mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。灰かぶり。
杯 身	159- 26	口径10.6 受部径12.8 器高3.2 T 高9.6 T 角度47°15'	たちあがりは内傾したのち中位で上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。灰かぶり。
	159- 27 71- 27	口径10.2 受部径12.6 器高3.2 T 高9.6 T 角度47°15'	たちあがりは内傾したのち中位で上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/5回転ヘラ削り調整。底体部外面3/5(底部中央)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。灰かぶり。
杯 身	159- 28	口径9.6 受部径12.2 器高3.5 T 高9.6 T 角度50°00'	たちあがりは内傾したのち中位で上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面3/7回転ヘラ削り調整。底体部外面1/7(底部中央)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。
	159- 29 71- 29	口径10.6 受部径13.0 残存高3.4 T 高9.6 T 角度48°15'	たちあがりは内傾したのち中位で上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。合成復元。
杯 身	159- 30	口径10.6 受部径12.4 器高3.4 T 高9.6 T 角度54°45'	たちあがりは内傾したのち中位で上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/3回転ヘラ削り調整。底体部外面1/2(底部中央)木調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。ヘラ記号：底体部外面に「-」あり。

杯 身	159- 31	口径10.3 受部径12.5 器高3.4 T 高0.6 T 角度38°15'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/5回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。4mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
	159- 32	口径8.4 受部径11.8 器高3.6 T 高0.6 T 角度41°45'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周2/5回転ヘタ削り調整。底部外周3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。
杯 身	159- 33	口径10.0 受部径12.4 器高3.5 T 高0.6 T 角度41°45'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周2/5回転ヘタ削り調整。底部外周3/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。
	159- 34	口径8.4 受部径11.8 器高3.3 T 高0.6 T 角度36°15'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/2回転ヘタ削り調整。底部外周1/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。内外面灰化あり。自然釉付着。
杯 身	159- 35	口径10.8 受部径13.5 器高3.4 T 高0.5 T 角度52°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周2/5回転ヘタ削り調整。底部外周2/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。内外面灰化あり。自然釉付着。
	159- 36	口径9.6 受部径11.8 器高2.9 T 高0.6 T 角度41°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/2回転ヘタ削り調整。底部外周1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。内外面灰化あり。自然釉付着。
杯 身	159- 37	口径10.6 受部径11.9 器高3.3 T 高0.6 T 角度45°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周2/5回転ヘタ削り調整。底部外周1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。
	159- 38	口径10.8 受部径13.0 器高3.6 T 高0.6 T 角度41°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/8。反転復元。
杯 身	159- 39	口径9.6 受部径12.4 器高3.2 T 高0.5 T 角度41°45'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/6回転ヘタ削り調整。底部外周1/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。
	71- 39	口径10.0 受部径12.6 器高3.0 T 高0.7 T 角度41°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周3/4回転ヘタ削り調整。底部外周3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。
杯 身	159- 40	口径10.0 受部径12.6 器高3.2 T 高0.7 T 角度41°30'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周3/4回転ヘタ削り調整。底部外周3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。
	159- 41	口径10.8 受部径13.0 器高3.3 T 高0.6 T 角度42°30'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/5回転ヘタ削り調整。底部外周3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外面上自然釉付着。
杯 身	159- 42	口径11.0 受部径13.0 器高3.2 T 高0.5 T 角度45°15'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/5回転ヘタ削り調整。底部外周3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内灰化、外灰。胎土: 密。4mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外面上自然釉付着。
	159- 43	口径9.6 受部径11.4 器高3.5 T 高0.5 T 角度33°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/5回転ヘタ削り調整。底部外周3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外面上自然釉付着。
杯 身	159- 44	口径9.4 受部径11.2 器高2.5 T 高0.3 T 角度45°30'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外面上自然釉付着。
	159- 45	口径14.6 受部径16.6 器高2.9 T 高0.5 T 角度41°30'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周1/3回転ヘタ削り調整。底部外周3/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内明灰紫色、外淡灰紫色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外面上灰化。
杯 身	160- 46	口径11.2 器高3.4	体部・口部部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は浅く半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井外周1/3回転ヘタ削り調整。天井外周2/3(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。

杯 蓋	160- 47	口径12.0 器高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面3/5(頂部)未調整。白は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。外間に上器片焼着。
杯 蓋	160- 48	口径11.0 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。外間に灰かぶり。
杯 蓋	160- 49	口径11.6 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。外間に灰かぶり。
杯 蓋	160- 50	口径12.0 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/8回転ヘラ削り調整。天井部外面2/8(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	160- 51	口径12.0 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	160- 52	LH径10.4 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。烧成：良好。残存：1/5。ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。
杯 蓋	160- 53	口径11.4 器高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰紫色。外一暗灰青色。胎土：密。烧成：良好。残存：1/3。反転復元。
杯 蓋	160- 54	口径11.0 器高3.1	体部・口縁部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一明灰紫色。外一暗灰青色。胎土：密。烧成：良好。残存：1/3。反転復元。
杯 蓋	160- 55	口径11.0 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。烧成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	160- 56	口径11.0 器高3.3	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5(頂部)未焼成。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
杯 蓋	160- 57	口径11.6 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色。外一暗灰白色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。合板復元。外間に自然釉付着。
杯 蓋	160- 58	口径10.8 器高3.2	体部・口縁部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/9(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一明灰紫色。外一暗灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。外間に自然釉付着。
杯 蓋	160- 59	口径10.0 器高2.7	体部・口縁部は外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰白色。外一暗灰白色。胎土：密。4mm以上の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。
杯 蓋	160- 60	LH径10.6 器高2.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/7回転ヘラ削り調整。天井部外面2/7(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色。外一暗灰绿色。胎土：密。烧成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	160- 61	口径12.0 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。4mm以上の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	160- 62	口径10.6 器高3.4	体部・口縁部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。4mm以上の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。

杯 蓋	160- 63 ⁺	口径11.6 器高3.1	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。犬井外部面2/5回転ヘラ削り調整。天井外部面2/5(頂部)木調査。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗赤色。胎上: 密。4mm以下の長石をやや多く含む。燒成: 良好。残存: 2/5。
	160- 64	口径10.0 器高3.5	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井外部面1/3回転ヘラ削り調整。犬井外部面1/6(底部)未調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 蓋	160- 65	口径11.8 残存高3.3	体部・口縫部はやや外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井外部面2/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
	160- 66	口径11.4 残存高3.1	体部は下方に下り、口縫部は外反して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井外部面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。残存: 1/8。反転復元。
杯 身	160- 67	LIP9.4 受部径11.4 器高3.2 T 高0.6 T 角度35°00'	たちあがりは内傾したもの、中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面1/4回転ヘラ削り調整。底部外部面1/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
	160- 68	口径10.9 受部径12.8 器高3.6 T 高0.6 T 角度39°45'	たちあがりは内傾したもの、端部で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面1/3回転ヘラ削り調整。底部外部面2/3(底部中央)未調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。1mmの黄石を若干含む。ナットを含む。燒成: 良好。残存: 1/2。合成復元。外面灰かぶり。
杯 身	160- 69	口径9.6 受部径12.0 器高3.1 T 高0.6 T 角度44°30'	たちあがりは内傾したもの、端部付近で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面3/8回転ヘラ削り調整。底部外部面3/8(底部中央)未調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。1mmの黄石を若干含む。ナットを含む。燒成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外面灰かぶり。
	160- 70	LIP10.6 受部径12.6 器高3.4 T 高0.5 T 角度44°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面3/8回転ヘラ削り調整。底部外部面2/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。5mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 身	160- 71	口径10.4 受部径13.0 器高2.9 T 高0.6 T 角度45°30'	たちあがりは内傾したものの、中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面3/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 明灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/6。反転復元。
	160- 72	口径10.6 受部径12.8 器高3.5 T 高0.6 T 角度39°15'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面3/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。9mm以下の長石をわずかに含む。1mmの黄石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 身	160- 73	LIP11.4 受部径13.2 器高3.7 T 高0.7 T 角度36°15'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面3/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一淡灰白色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。外面灰かぶり・自然釉付岩。
	160- 74	口径9.6 受部径11.6 器高2.8 T 高0.8 T 角度35°15'	たちあがりは内傾したものの、中位で上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一淡灰白色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。外面灰かぶり・自然釉付岩。
杯 身	160- 75	LIP10.6 受部径12.6 器高3.2 T 高0.5 T 角度43°45'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
	160- 76	口径10.4 受部径13.2 器高3.2 T 高0.5 T 角度43°30'	たちあがりは内傾したものの、端部付近で直立する。端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 身	160- 77	LIP10.6 受部径12.6 器高3.3 T 高0.6 T 角度38°30'	たちあがりは内傾したものの、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外部面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調査。	ロクロ回転: 右回り。色調: 明灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。

杯身	160- 78	口径11.0 受部径13.2 器高3.2 T 高0.5 T 角度42°00'	たちあがりは内傾したもの。中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部は半らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。5mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外腹灰かぶり。
杯身	160- 79	口径11.0 受部径13.0 器高2.9 T 高0.5 T 角度48°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外腹灰かぶり。
杯身	160- 80	口径12.2 受部径14.0 残存高2.2 T 高0.5 T 角度31°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰黄褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。ヘラ削り: 部外面部に「」あり。
杯身	160- 81	口径9.0 受部径10.5 器高2.2 T 高0.5 T 角度22°00'	たちあがりは内傾して上方にのび、端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯身	160- 82	口径10.6 器高3.4	体部・口縁部はやや外反して上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内淡灰色、外一灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯身	160- 83	口径11.2 受部径13.4 残存高3.0 T 高0.6 T 角度37°00'	たちあがりは内傾したもの。端部で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外腹灰かぶり・自然地付着。
高杯	160- 84	受部径12.6 基部径4.1 残存高3.8	たちあがりは内傾して上方にのびる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。脚部は下外方に下る。たちあがり・脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。一部反転復元。外腹灰かぶり。
高杯	160- 85	口径12.2 残存高3.9	体部・口縁部は外反して上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。底体部境界に段差がある。底部中央欠損。脚部は基部より下方に下る。3方向に長方影スカリを有する。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	リリコ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
高杯	160- 86	口径12.0 残存高4.0	体部・口縁部は外反して上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部はやや深く。底体部境界に段差がある。底部中央欠損。脚部は基部より下方に下る。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
高杯	160- 87	口径9.8 残存高3.1	体部は上外方にのびる。口縁部は外反して上方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。体部に1条の縫・沈鉢を有する。底部中央欠損。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外腹灰かぶり。
高杯	160- 88	基部径9.6 残存高6.0	脚部は下方に下ったもの。脚部中に2条の縫・沈鉢をめぐらしたのも、2段2方向の反方彌スカリを有する。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。焼成: 良好。
高杯	160- 89	基部径9.0 残存高10.0	脚部は下方に下ったもの下外方に聞いて下る。脚部中央・基部上方に2条の縫・沈鉢をめぐらす。脚部・脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。脚部内面にしほり日本語表記。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。一部反転復元。
高杯	160- 90	基部径9.0 脚部径10.5 残存高9.5	脚部は下方に下ったもの下外方に聞いて下り、脚部は外方にのびる。端部部外輪する平面を成し、端部内面で接する。脚部中央に2条の縫・沈鉢をめぐらす。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。一部反転復元。外腹灰かぶり。
高杯	161- 91	口径11.0 基部径2.6 残存高3.8	体部は上外方にのびる。口縁部はやや外反して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや深く。脚部は下外方に下る。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底外側1/2回転ヘラ削り調整。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。
高杯	161- 92	基部径3.5 脚部径6.0 残存高4.0	杯底部は平らに近い。脚部は外反して下外方に下り、脚部と外方にのびる。端部部はやや丸く、脚部内面で接する。脚部以降欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底外側2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。一部反転復元。杯部内面に茎葉型焼痕。

	161- 93	基部径4.0 脚底径7.0 残存高3.5	杯底部は平らに近い。脚部は外反して下方に下り、底部で上方にのびる。端部は外輪の凹面を成し、粘部で接地する。杯体部以上欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外側面ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：杯部外面に「-」あり。
高 高 杯	161- 94	基部径3.2 脚底径5.0 残存高2.9	杯底部は平ら。脚部は下方に下ったものとして外下方に聞く。端部は丸く、端部内面で接地する。杯体部以上欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外側面ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。一部反転復元。
高 高 杯	161- 95	基部径3.8 脚底径5.8 残存高3.6	杯底部はやや丸い。脚部は外下方に外反して下り、端部はやや内傾する凹面を成し、端部内面で接地する。杯体部以上欠損。脚部は焼け歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外側面ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。一部反転復元。
高 高 杯	161- 96	基部径7.1 脚底径10.4 残存高2.5	杯底部は平ら。脚部は下方に下ったものとして外下方に聞く。端部は外傾する平面を成し、内面にあまり段を成し、端部内面で接地する。2方向に内凹カシキを有する。杯部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外側面ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。一部反転復元。
査 査 査	161- 97	口径9.6 高さ3.4	脚部・山根部は下方に下り、端部で外反する。端部は内傾する平面を成し、外側で接地する。天井部は近く半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面2/5回転ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。一部反転復元。
短 短 短	161- 98	口径7.2 基部径7.2 体部最大径13.6 残存高3.4	口頭部は基部から立ち直し、端部は丸くおさまる。肩部は外下方に下り、体部は内下方に内傾して下る。底部中央欠損。体部最大径は上方2/3に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外側面回転ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。
短 短 短	161- 99	口径7.0 基部径7.3 体部最大径13.0 残存高9.6	口頭部は基部からやや外反して上方にのび、端部は丸くおさまる。肩部は外下方に下り、体部は下方に下る。底部下部欠損。体部最大径は中位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外側面回転ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。
短 短 短	161- 100	口径7.0 基部径7.1 体部最大径13.5 残存高7.1	口頭部は基部から上方に矧くのび、端部は丸くおさまる。肩部は外下方に下り、体部は内下方に下る。底部下部欠損。体部最大径は中位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外側面9/10回転ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。
短 短 短	161-101	口径7.7 基部径7.4 体部最大径11.9 残存高8.4	口頭部は基部から外反して上方にのび、端部は丸くおさまる。肩部は外下方に下り、体部は内下方に下る。底部下部欠損。体部最大径は下方2/3に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外側面9/10回転ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。反転復元。
短 短 短	161-102	口径7.0 基部径7.1 体部最大径14.6 残存高7.0	口頭部は基部から直し、短い。端部はやや丸くおさまる。肩部は外下方に下り、体部は内下方に下る。底部下部欠損。体部最大径は下方1/3に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外側面9/4回転ハラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。
短 短 短	161-103	口径7.4 基部径7.3 体部最大径11.8 残存高5.3	口頭部は上方にのびる。端部は丸くおさまる。肩部は外下方に下り、体部は下方に下る。底部下部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
長 長 長	161-104	口径11.0 残存高7.0	口頭部は外反して上方にのび、端部は丸くおさまる。肩部下方・肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
長 長 長	161-105	口径9.0 残存高6.8	端部は外反して上方にのび、口頭部はやや内傾して上方にのび、端部は丸くおさまる。体部上面は外下方へ張り出る。脚部・絞部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一端暗青色、外一端灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
半 半 半	161-106	口径7.0 基部径6.3 残存高6.8	口頭部は外反して上方にのび、口頭部はやや内傾して上方にのび、端部は丸くおさまる。体部上面は外下方へ張り出る。脚部・絞部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部・肩部外側面カキ目調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一端灰褐色、外一端灰褐色。胎土：密。焼成：良好。内外面に自然釉付着。
半 半 半	161-107	口径7.6 基部径5.8 残存高10.0	口頭部は外反して上方にのび、口頭部はやや内傾して上方にのび、端部は丸くおさまる。体部は外下方へ張り出る。脚部・絞部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外側面タキのカキ目調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。

提 瓶	161-108	口径7.8 基部径6.0 残存高7.0	口縁部は上方にのび、口縁部はやや内縮して上方にのび、端部は丸くおさまる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。一級反転復元。外面灰かぶり。自然釉付着。
	161-109	口径6.9 基部径5.9 残存高6.4	口縁部は上方にのび、端部は大きくおさまる。体部は下方に張り出す。体部上・中・颈部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部・肩部外面カキ目調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。一部反転復元。内外面灰かぶり。自然釉付着。
長 颈 瓶	161-110	体部最大径18.0 残存高11.0	肩部は下方に張り出し、体部は下内方に下る。体部最大径は上方1/3に位置する。肩部部境は2条のやや長い沈線をめぐらし、体部下方に1条の非常に浅い沈線をめぐらし、その間に刺突文を施す。口縁部・底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面部タキ。のち体部外面部3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。外面灰かぶり。自然釉付着。ヘラ記号：体部外前に「-」あり。
	161-111	体部最大径16.6 残存高9.1	肩部は下方に下り、体部は内寄せし下方に下る。体部最大径は上方2/3に位置する。肩部部境は1条の非常に浅い沈線をめぐらし、その間に刺突文を施す。口縁部・底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部・底部外面部タキ。のち底部外面部5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。外面灰かぶり。自然釉付着。ヘラ記号：肩部外前に「-」あり。
提 瓶	162-112	口径7.8 基部径6.0 残存高16.6	口縁部はやや外反して上方にのび、端部は丸くおさまる。肩部・体部・底部は正面でひだりな球形を成し、側面で横円形を成す。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部・底部背面削りヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。一部反転復元。外面灰かぶり。自然釉付着。
	72-112				
横 瓶	162-113	残存高17.5	肩部・体部・底部は正面で横円形を成し、側面で球形を成す。口縁部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部・体部外面カキ目調整。	色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良灯。
	178-569	口径16.0 基部径13.8 残存高4.5	口縁部は外反して上方にのび、口縁部は上方にのびのうち内反して上方にのび、上方にのびの白絵部内面に張り出る。肩部は下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面部タキのちカキ目調整。底部内面青海波タキ。他は回転ナダ調整。	色調：暗灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。残存：口縁部1/2。反転復元。外面に自然釉付着。
甕	178-570	口径14.8 基部径12.9 残存高6.3	口縁部は外反して上方にのびのうち、上方にのびる。口縁部下で上方にのびのうち内反して上方にのび、口縁部内面に張り出る。口縁部内面に1条の浅い沈線を施す。肩部は下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部・肩部外面部カキ目調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナダ調整。	色調：外一灰色、内一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。残存：口縁部1/2。反転復元。外面に自然釉付着。
	178-571	口径18.4 基部径18.0 残存高8.3	口縁部は外反して下方にのびのうち、下方にのびる。口縁部下で下方にのびのうち内反して下方にのび、口縁部内面に張り出る。口縁部内面に1条の浅い沈線を施す。肩部は下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面部タキ。肩部内面青海波タキ。他は回転ナダ調整。	色調：内一灰色、外一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。残存：口縁部1/6。反転復元。外面灰かぶり。
甕	178-572	口径18.4 基部径17.0 体部最大径16.2 残存高22.3	口縁部は外反して下方にのびのうち、下方にのびる。内反して上方にのび、口縁部内面に張り出る。肩部は下方にやや内反して下り、体部は下方にやや内反して下る。体部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面部タキのちカキ目調整。肩部内面同心円タキ。他は回転ナダ調整。	色調：内一灰色、外一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。残存：口縁部1/6。反転復元。外面灰かぶり。
	179-573	口径46.0 基部径26.0 残存高12.5	口縁部は上方にのび、口縁部下で下方にのびの上方にのび、あまり成長をしたのち内反して下方にのびる。端部は丸くおさまる。口縁部直下1/3条の沈線、縫部上方1/3に2条の沈線をめぐらし、その間に構造斜行捺文を行す。縫部は水平にのびる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面部・内面カキ目調整。肩部外面部タキ。肩部内面青海波文。他は回転ナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口縁部1/2。内面に自然釉付着。
甕	179-574	口径53.8 基部径58.0 残存高15.6	口縁部は系部から上方にのびのうち、外反して上方にのび、口縁部でやや内反する。内反して上方に、口縁部端部にいたる。端部は丸くおさまる。口縁部下に2条の沈線、縫部上方1/3に2条の沈線をめぐらし、その間に構造斜行捺文を行す。縫部は水平にのびる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面部カキ目調整。肩部外面部タキ。肩部内面青海波文。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石、石英、チャートを含む。焼成：良好。残存：口縁部1/5。反転復元。自然釉付着。灰かぶり。

179-575	口径67.0 基部径43.6 残存高17.3	口型部は基部から上方にのびたのち、外反して上方にのび、口縫部で外方にのび、あまり段を成して内反して上方にのびたのち、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出す。口縫部直下に2条の沈線、頭部上方1/3に3条の沈線をめぐらす。その間に筋括き斜行沈線文を有する。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面タキのちカキ目調整。肩部外面タキ。肩部内面青海波文。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。胎上：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部1/3。反転復元。灰かぶり。
179-576	口径60.0 基部径42.0 残存高16.4	口型部は基部から上方にのびたのち、外方にのび、口縫部下で内反して外方にのび、上内方にのび、あまり段を成して内反して上方にのびたのち、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出す。口縫部直下に3条の沈線、頭部上方1/3に3条の沈線をめぐらす。その間に筋括き斜行沈線文を有する。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面カキ目調整。他は回転ナゲ調整。	色調：暗灰褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。外面一部に自然釉付着。灰かぶり。
180-577	口径49.0 基部径35.8 残存高20.3	口型部は基部から上方にのびたのち、上方にのび、口縫部下で内反して外方にのび、上内方にのび、あまり段を成して内反して上方にのびたのち、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出す。口縫部直下に2条の沈線、頭部上方1/3に2条の沈線をめぐらす。その間に筋括き斜行沈線文を有する。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部外面にタキ。肩部外面タキのちカキ目調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：口縫部外面一暗灰色、肩部一灰色、内一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：口縫部1/2。反転復元。外面に自然釉付着。灰かぶり。
180-578	口径62.0 基部径45.0 残存高16.0	口型部は基部から上方にのびたのち、上方にのび、口縫部下で内反して外方にのびたのち、上方にのび、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出す。口縫部直下に2条の沈線、頭部上方1/3に2条の沈線をめぐらす。その間に筋括き斜行沈線文を有する。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部外面カキ目調整。肩部内面同心円タキ。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：口縫部外面一暗灰色、肩部一灰色、内一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：口縫部1/6。反転復元。自然釉付着。
181-579	口径77.6 基部径76.0 残存高14.8	口型部は基部から上方にのび反して外方にのび、口縫部下で外方にのび、上方にのびたのち、あまり段を成して内反して上方にのび、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。口縫部直下に2条、頭部上方1/3に2条の沈線をめぐらす。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面カキ目調整。肩部内面同心円タキ。他は回転ナゲ調整。	色調：暗褐色。胎上：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。内面灰かぶり。
181-580	口径55.0 基部径41.0 残存高20.8	口型部は基部から上方にのび反して上方にのび、口縫部下では垂直にのびたのち、あまり段を成して内反して上方にのびたのち、上方にのび、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。口縫部直下に2条、頭部上方1/3に2条の沈線をめぐらす。肩部は外下方に張り出す。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面カキ目調整。肩部外側タキのちカキ目調整。肩部内面同心円タキ。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：口縫部外面一暗灰褐色、肩部外面一灰色、口縫部内面一暗褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。口縫部外面に自然釉付着。反転復元。
182-581	口径51.6 基部径50.0 残存高11.5	口型部は外方にのび、口縫部下で垂直にのび、上方にのびたのち、あまり段を成して内反して上方にのびたのち、上方にのび、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。口縫部直下に2条、頭部上方1/3に2条の沈線をめぐらす。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面カキ目調整。肩部内面カキ目調整。他は回転ナゲ調整。	色調：外一暗灰褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。内面灰かぶり。
182-582	口径57.4 基部径42.4 残存高14.5	口型部は基部から上方にのびたのち、外反して上方にのび、口縫部下で下方にのび、上方にのびたのち、あまり段を成して内反して上方にのび、口縫部に至る。端部は丸くおさめる。口縫部直下に2条、頭部上方1/3に2条の沈線。肩部は外方にのびる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面カキ目調整。頭部内面カキ目調整。他は回転ナゲ調整。	色調：暗褐色。胎上：密。焼成：良好。口縫部外側・体部に自然釉付着。内面灰かぶり。

表 13 猿山池 1 号坑中層灰岩出土遺物觀察表

(丁はたちあがりを示す)

器種	面版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	163-114	口径11.1 器高4.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 2/3。合成復元。ヘラ記号: 天井部外面に「×」あり。
	73-114				ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-115	口径12.0 器高3.4	体部・口縁部は内傾して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
	73-115	口径12.1 器高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰白色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。内面灰かぶり。
杯 蓋	163-116	口径12.0 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。
	73-117				クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-118	口径10.0 残存高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。以転復元。
	73-119	口径11.5 残存高3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部はやや丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一灰褐色、外一灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。合成復元。
杯 蓋	163-120	口径12.2 器高3.9	体部・口縁部は内傾して下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 不良。残存: 5/6。一部反転復元。
	73-120				クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 不良。外沿一部に自然輪打ち。
杯 蓋	163-121	口径12.0 73-121 残存高3.0	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
					クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。外沿一部に自然輪打ち。
杯 蓋	163-122	口径11.0 73-122 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/7(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。
					クロロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-123	口径11.0 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
					クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。外縁に土裏片付着。
杯 蓋	163-124	口径11.0 73-124 器高3.8	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/6回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。合成復元。自然輪打ち。外縁に土裏片付着。
					クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-125	口径10.6 残存高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
					クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-126	口径11.4 残存高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
					クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-127	口径10.6 残存高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
					クロロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石、チャートを含む。焼成: 良好。残存: 2/3。合成復元。内面に自然輪付着。天井部外面に土裏片付着。
杯 蓋	163-128	口径11.0 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
	73-128				クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	163-129	口径11.2 残存高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3(頂部)本調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰褐色、外一暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
					クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。

杯 蓋	163-130	口径12.8 高さ3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外側に自然釉付着。天井部外面上部器縁焼。
	163-131	口径11.6 高さ3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。内側底灰かぶり。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	163-132	口径11.6 高さ3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。火炎外側2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。
	73-132	器高3.6			
杯 蓋	163-133	口径12.0 高さ3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘタ削り調整。天井部外面1/5(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。
	73-133	器高3.6			
杯 蓋	163-134	口径12.0 高さ3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘタ削り調整。天井部外面2/5(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	163-135	口径10.4 受部径12.6 器高3.5 T 高0.7 T 角度31°00'	たちあがりは内傾したのち、小位で外方にのびる。端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面2/5回転ヘタ削り調整。天井部外面2/5(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。内側底灰かぶり・自然釉付着。
杯 身	163-136	口径10.0 受部径12.2 器高3.4 T 高0.5 T 角度40°45'	たちあがりは内傾したのち、端部付近で上方にのびる。端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面2/5回転ヘタ削り調整。底体部外面2/5(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰黄色、外一暗灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	163-137	口径10.3 受部径12.9 器高3.3 T 高0.5 T 角度41°00'	たちあがりは内傾したのち、端部付近で盛り立てる。端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/2回転ヘタ削り調整。底体部外面1/3(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一暗灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。外側に自然釉付着。
	74-137				
杯 身	163-138	口径10.4 受部径12.2 残存3.3 T 高0.5 T 角度37°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	163-139	口径11.2 受部径13.6 器高3.2 T 高0.6 T 角度48°30'	たちあがりは内傾したのち、中位で直立し、端部は丸くおさまる。受部はやや上方にのび、その上面は内面を成す。端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。底座中央は焼け歪。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面4/5回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外側底灰かぶり。
杯 身	163-140	口径10.0 受部径12.6 器高3.5 T 高0.7 T 角度50°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/3回転ヘタ削り調整。底体部外面1/3(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗紫褐色、外一暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外側に自然釉付着。
杯 身	163-141	口径9.4 受部径12.2 残存6.2 T 高2.7 T 角度45°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/2回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外側に自然釉付着。内側底灰かぶり。底部に土片跡巻き。ヘラ記号：底部外側に「-」あり。
杯 身	163-142	口径10.0 受部径12.6 器高3.5 T 高0.6 T 角度45°15'	たちあがりは内傾したのち、低位で外方にのび、端部はやや丸い。受部はほぼ水平にのび、端部はやや丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/2回転ヘタ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	163-143	口径10.0 受部径12.2 器高3.3 T 高0.6 T 角度34°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/3回転ヘタ削り調整。底体部外面3/5(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外側に自然釉付着。
	74-143				
杯 身	163-144	口径10.0 受部径12.0 器高3.3 T 高0.6 T 角度40°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/4回転ヘタ削り調整。底体部外面1/4(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰褐色、外一暗灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外側に自然釉付着。
杯 身	163-145	口径10.8 受部径12.4 器高3.1 T 高0.7 T 角度19°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、上面でやや内面を成し、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は半ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/3回転ヘタ削り調整。底体部外面1/3(底部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰褐色、外一淡灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。

杯 身	163-146	口径11.0 受部径13.0 残存高3.4 T 高0.5 T 角度62°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は近く外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/2回転ヘラ削り調整。底部外面部2/5(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一淡灰色、外一淡灰色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
	163-147	口径10.0 受部径12.6 残存高3.0 T 高0.7 T 角度40°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや浅い。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/3回転ヘラ削り調整。底部外面部1/5(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 身	163-148	口径11.6 受部径14.0 残存高3.5 T 高0.6 T 角度39°30'	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/3回転ヘラ削り調整。底部外面部1/5(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。
	163-149	口径10.0 受部径12.0 残存高2.9 T 高0.7 T 角度35°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は丸く上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/4回転ヘラ削り調整。底部外面部1/5(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。
杯 身	163-150	口径10.8 受部径13.0 残存高3.0 T 高0.6 T 角度38°30'	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。端部は丸くおさめる。受部は丸く上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/4回転ヘラ削り調整。底部外面部1/5(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
	163-151	口径13.0 受部径15.0 残存高3.6 T 高0.9 T 角度20°45'	たちあがりは基部からねじ立て、端部は丸くおさめる。受部は丸く上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 墓灰青色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 身	163-152	口径11.0 受部径13.1 残存高3.3 T 高0.5 T 角度41°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや浅い。受部はやや外方にのび、端部はやや浅い。底体部は浅く、底部は平ら。全体に旋けむ。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部1/5回転ヘラ削り調整。底部外面部1/5(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 墓灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。一部反転復元。内面灰かぶり。ヘア記号: 底部外面上に「」あり。
	163-153	口径11.4 受部径13.6 残存高3.8 T 高0.6 T 角度46°30'	たちあがりは内傾したのち位直し直せる。端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外面灰かぶり。外面に十字削痕。
杯 身	163-154	口径11.2 受部径13.2 残存高3.4 T 高0.7 T 角度40°45'	たちあがりは内傾したのち位直しやや下方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外面部未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。ヘア記号: 底部外面上に「」あり。
	164-155	口径12.0 高3.4	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。底部欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部2/5回転ヘラ削り調整。天井部外面部3/5(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。ヘア記号: 天井部外面上に「」あり。
杯 蓋	164-156	口径12.8 高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部3/8回転ヘラ削り調整。天井部外面部4/5(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。4mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
	74-156		体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くや丸い。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	164-157	口径11.0 高3.2	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。端部欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面部1/4(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
	164-158	口径11.4 高3.0	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。端部欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面部1/4(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	164-159	口径12.8 高2.7	体部・口縫部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面部1/4(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。ヘア記号: 天井部外面上に「」あり。
	74-159		体部・口縫部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面部1/5(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。4mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	164-160	口径10.4 高3.8	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面部1/5(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。外面灰かぶり。
	164-161	口径12.0 高2.6	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外面部1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面部3/5(底部)未調整。他の回転ナナ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。

杯 蓋	164-162	口径12.4 我存高3.7	体部は下外方に下り、口縫部は外反する。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/4(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暖灰色、外一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外面上に自然釉付着。ヘラ記号：大字頭部に「一」あり。
	164-163	口径12.0 我存高3.6	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/2(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰白色。胎土：密。焼成：不良。残存：1/6。反転復元。
杯 蓋	164-164	口径10.8 我存高3.0	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/2(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰白色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/10。反転復元。外面上に自然釉付着。
	164-165	口径12.0 窑高2.6	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/2(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一灰褐色。胎土：稀。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/5。反転復元。外面上灰かぶり。
杯 蓋	164-166	口径10.4 窑高3.6	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：稀。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	164-167	口径11.0 窑高3.2	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/2(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：稀。焼成：良好。大字頭部に「一」あり。
杯 蓋	164-168	口径12.0 窑高3.0	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：稀。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面上灰かぶり。
	164-169	口径9.6 窑高3.1	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暖灰青色、外一暗灰青色。胎土：稀。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	164-170	口径9.6 窑高3.1	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暖灰青色。胎土：稀。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。大字頭部に「一」あり。
	164-171	口径11.0 窑高2.8	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：稀。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面上灰かぶり。
杯 蓋	164-172	口径10.6 窑高2.8	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	164-173	口径12.2 窑高3.2	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：稀。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/10。反転復元。
杯 蓋	164-174	口径12.2 窑高3.2	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面外1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暖灰青色、外一暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
	164-175	口径12.2 窑高3.2	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/8、天井部外面5/8(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：稀。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
杯 身	164-176	口径11.0 受部高13.2 窑高0.5 T角度45°30'	たちあがりは内傾のもの、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はぼんやり丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/8回転ヘラ削り調整。底体部外面5/8(底部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一深灰青色、外一暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面上灰かぶり。
	164-177	口径11.4 受部高14.0 窑高3.5 T角度5°5	たちあがりは内傾のもの、端部は近で直立する。端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はぼんやり丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/2回転ヘラ削り調整。底体部外面5/8(底部)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。ヘラ記号：底部外側に「一」あり。
杯 身	164-178	口径10.6 受部高12.8 窑高2.9 T角度37°45'	たちあがりは内傾のもの、端部は直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はぼんやり丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面1/3(底部中央)未調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：稀。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面上灰かぶり。

164-179	口徑9.2 受部径12.0 器高3.3 T 高0.5 T 角度49°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎上：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。ヘラ記号：底部外間に「-」あり。
164-180	口徑11.0 受部径13.0 器高3.5 T 高0.4 T 角度44°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰青色。胎上：粗。3mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：4/5。反転復元。
164-181	口徑10.0 受部径12.2 器高3.1 T 高0.7 T 角度40°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎上：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
164-182	口徑10.6 受部径12.5 器高3.0 T 高0.4 T 角度40°00'	たちあがりは基部から上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎上：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
164-183	口徑10.6 受部径13.2 器高3.1 T 高0.5 T 角度52°00'	たちあがりは内傾したのち中位では直立する。端部は丸くおさめる。受部部外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎上：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
164-184	口徑10.8 受部径12.8 器高3.1 T 高0.6 T 角度35°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一淡灰白色。胎上：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面部灰かぶり。内面部自然釉付着。ヘラ記号：底部外間に「-」あり。
164-185	口徑9.8 受部径12.0 器高3.2 T 高0.3 T 角度50°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一淡灰白色。胎上：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
164-186	口徑11.4 受部径14.6 器高2.7 T 高0.5 T 角度57°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎上：密。燒成：良好。残存：1/5。反転復元。
164-187	口徑9.6 受部径11.6 器高2.7 T 高0.5 T 角度30°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎上：密。燒成：良好。残存：1/7。反転復元。
164-188	口徑10.4 受部径12.8 器高3.0 T 高0.5 T 角度45°15'	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(未調整)他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰綠色。胎上：密。燒成：良好。残存：1/5。反転復元。外面部灰かぶり。内面部自然釉付着。
164-189	口徑11.0 受部径13.6 器高3.1 T 高0.5 T 角度59°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(未調整)他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一淡灰白色。胎上：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。底体部外表面に器瘤等。
164-190	口徑10.6 受部径12.6 器高2.6 T 高0.6 T 角度35°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(未調整)他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一淡灰白色。胎上：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。外面部灰かぶり。
164-191	口徑10.0 受部径11.8 器高3.0 T 高0.4 T 角度45°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外面部灰かぶり。
164-192	口徑10.6 受部径13.0 器高2.8 T 高0.4 T 角度50°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外面部灰かぶり。
164-193	口徑10.6 受部径13.0 器高3.0 T 高0.4 T 角度32°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰綠色、外一暗灰白色。胎上：密。3mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
164-194	口徑10.0 受部径11.8 器高2.8 T 高0.5 T 角度39°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。

杯 蓋	164-195	口徑11.0 基高1.7 つまみ径1.0 つまみ高0.7	口縫部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。かえりは口縫部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部は低く平ら。天井部外側中央に腹巻模様つまみを付す。天井部は傾け歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。底面外側1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：泥。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。外面灰かぶり。
	165-196	L口径11.0 基高0.4 つまみ径2.0 つまみ高0.8	体部・口縫部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高く丸い。天井部外側中央に、中央部がやや左むむ扁平なつまみを付す。天井部と体部の境界に難波模様をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰白色、外一灰色。胎土：泥。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面灰かぶり。外側に自然釉付着。
	165-197	口径12.6 基高1.4 つまみ径2.0 つまみ高0.4	体部・口縫部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。天井部外側中央に、中央部がやや左むむ扁平なつまみを付す。天井部と体部の境界に難波模様をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰白色、外一灰色。胎土：泥。4mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
高 杯 蓋	165-198	腹底径12.6 残高6.5	脚部上方1/2以上欠損。脚部は下外方に開いており、脚部は外方にびれる。端縁部はやや内側する平面を成し、端縁部内側より脚部内側で接地する。脚部上方に1条の沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカシを育てる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰白色、外一灰色。胎土：泥。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	165-199	脚底径11.1 基部径3.1 残高9.2	脚部欠損。脚部上方1/2以上欠損。脚部は下外方に開いており、脚部に至る。端縁部は外側する平面を成し、端縁部内側で接地する。脚部中位に2条、底部方に1条の鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰白色、外一灰褐色。胎土：泥。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面灰かぶり。
高 杯 蓋	165-200	脚底径10.0 基部径6.3 残高9.6	脚部欠損。脚部は基部から下方に下ったもの下外方に開いており、脚部に至る。端縁部は内側する平面を成し、端縁部内側で接地する。脚部中位に2条、底部方に1条の鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰白色、外一灰白色。胎土：泥。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外面に自然釉付着。
	75-200	脚底径11.6 基部径6.5 残高12.3	脚部底部全体上方以上欠損。脚部は基部から下方に下ったもの下外方に開いており、脚部に至る。端縁部は外側する平面を成し、端縁部内側で接地する。脚部中位に2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。脚部内面にしり口あり。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一暗灰色。胎土：泥。焼成：良好。残存：脚底部の1/3。合成復元。外面灰かぶり。内外面に自然釉付着。
長 杯 蓋	165-201	脚底径11.6 基部径6.5 残高12.3	脚部底部全体上方以上欠損。脚部は基部から下方に下ったもの下外方に開いており、脚部に至る。端縁部は外側する平面を成し、端縁部内側で接地する。脚部中位に2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。脚部内面にしり口あり。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一暗灰色。胎土：泥。焼成：良好。残存：脚底部の1/3。合成復元。外面灰かぶり。内外面に自然釉付着。
	165-202	体部最大径17.2 残高10.7	L型部・底部下半以下欠損。肩部は外下方に下り、体部は下内方に下り。肩部・体部境界に2条の鈍い沈線、体部中位に非常に鋭い1条の沈線をめぐらす。その間に斜文刺を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底面・体部外側回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：泥。焼成：良好。合成復元。
杯 蓋	165-203	基部径11.0 残存高3.2 高台高12.4 高台高1.8	体部以降欠損。肩部は半ら。底部に八の字形に開く舟合を付し、高台端部内側で接地する。高台端部は外側する平面を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一灰色。胎土：泥。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：高台の1/4。反転復元。外面灰かぶり。内外面に自然釉付着。土片埋没。
	165-204	口径8.0 基部径7.6 体部最大径9.2 残存高3.6	口縫部は基部から外上方にのび、端縫部は丸くおさめる。肩部は下外方に下り、体部は下内方に下り。底部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底面外側1/5回転ヘラ削り調整。底面外側1/5(底面中央)水割調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：泥。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
盖 蓋	165-205	口径8.8 基部径2.3	体部は下方に下り、口縫部は丸くおさめる。口縫部は平面を成して端縫部内側で接地する。天井部は低く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：泥。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/6。外面灰かぶり。反転復元。
	165-206	口径8.0 基部径6.5 体部最大径12.9 残存高6.7	口縫部は基部から上方にのび、端縫部は丸くおさめる。肩部は外下方に下り、体部は下内方に下る。底部欠損。体部最大径は上方に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外側3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：泥。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。外表面灰かぶり。一部反転復元。
短 蓋 蓋	166-207	口径7.4 基部径7.4 体部最大径13.8 残存高8.5	L型部は基部から直立し、端縫部は丸くおさめる。肩部は外下方に下り、端縫部は下内方に下る。底部中央欠損。体部最大径は中央に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部・底面外側回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰白色。胎土：泥。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	165-208	口径7.0 基部径7.0 残存高3.5	口縫部は基部からやや上方外方にのび、端縫部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：泥。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：ロ縫部の1/2。反転復元。外面灰かぶり。

短 縫 臺	165-209	口径8.6 基部径8.6 体部最大径15.8 残存高10.1	口縫部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下内方に下る。底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縫部の1/4。外側面に自然釉付着。外側に上唇片焼着。
	165-210	口径6.5 基部径4.5 残存高5.5	口縫部は外反して1外方にのび、端部は丸くおさめる。体部は外下方へ張り出す。体部下半、肩部、底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縫部の1/4。外側面に自然釉付着。外側に上唇片焼着。
平 腹	165-211	体部最大径19.0 残存高10.8	口縫部欠損。体部は外下方へ張り出し、肩部は下内方に下る。底部はほぼ半ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部・肩部外側面カキ回転調整。底部外側面ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/3。合戻復元。外側に自然釉付着。
	165-212	口径6.5 基部径6.5 体部最大径19.0 残存高10.8	口縫部は外反して1外方にのび、端部は丸くおさめる。体部は外下方へ張り出し、肩部は下内方に下る。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部・肩部外側面回転ハラ削り調整調整のちカキ回転調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/5。合戻復元。外側面に自然釉付着。
腰	183-583	口径12.0 基部径11.2 残存高4.9	口縫部は上方外方にのび、口縫部下で上外方にのび、内反して口縫端部に至る。口縫部は丸くおさめる。肩部はやや下外方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外側面回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縫部1/8。合戻復元。
	183-584	口径20.0 基部径17.2 残存高5.9	口縫部は1外方にのび、口縫部で上外方にのび、口縫端部に至る。口縫部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側面カキ回転のちタキ。肩部内側面背腹接タキ。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縫部2/5。合戻復元。口縫部外側・肩部内側面背腹接タキ。
腰	183-585	口径36.4 残存高12.7	口縫部は1外方にのび、口縫部下で下外方にのび内反して上内方にのびる。口縫部下に2条、肩部上方1/3と2条の沈線をめぐらす。肩部上方沈線の上部に櫛縞斜行沈線を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外側面カキ回転調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 口縫部1/12。外側面灰かぶり。内外面に自然釉付着。
	183-586	脚底径23.0 残存高6.9	脚底基部付近欠損。脚部は下外方に開いており、脚部上方で段を成し下外方で下り、脚底部は内側を曲にして外側で接地する。3方向のすかしを有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 腹部1/3。合戻復元。

表 14 狩山池1号窯上層灰原出土遺物観察表

(Tはたちあがり表示)

器種	画面 図版 番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 蓋	166-213 77-213	口径11.4 高さ3.7	体部・口縫部は外下方に下り、端部はやや純い。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面3/5回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内淡灰色、外一淡灰白色。胎土: 砂。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。天井部外側面灰かぶり。
	166-214 77-214	口径11.9 高さ3.4	体部・口縫部は外下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/2回転ハラ削り調整。天井部外側面1/3(頂部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一暗灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。合戻復元。外側面灰かぶり。
杯 蓋	166-215 77-216	口径11.6 高さ3.1	体部・口縫部は外下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/2未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰青色。胎土: 砂。焼成: 良好。合戻復元。
	166-216 77-216	口径10.8 高さ3.7	体部は下外方に下り、口縫部は外反する。端部は丸くおさめる。頂部はやや焼け歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/5回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 砂。4mm以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成: 良好。一部合戻復元。外側面灰かぶり。ヘラ記号: 天井部外側面に「X」あり。
杯 蓋	166-217 77-217	口径12.2 高さ3.5	体部は下外方に下り、口縫部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/9回転ハラ削り調整。天井部外側面1/2(頂部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰綠色。胎土: 砂。焼成: 良好。合戻復元。口縫部外側面に自然釉付着。
	166-218 77-218	口径11.0 高さ3.6	体部は下外方に下り、口縫部は外反する。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/2未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一弱灰青色、外一暗緑灰色。胎土: 砂。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成: 良好。

杯 蓋	166-219	口径11.4 残存高3.8	体部は下外方に下り、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
	166-220	口径12.0 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや脱い。大井部外面は低くや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転へハタ削り調整。天井部外面3/5(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	166-221	口径11.8 残存高3.8	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転へハタ削り調整。天井部外面1/4(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。他は回転ナダ調整。
	166-222	口径11.8 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。
杯 蓋	166-223	口径11.4 残存高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低く平らに近い。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転へハタ削り調整。天井部外面1/4(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
	166-224	口径11.6 残存高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。大井部は低く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	166-225	口径11.2 残存高2.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転へハタ削り調整。天井部外面1/3(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
	166-226	口径12.1 残存高3.2	体部は下外方に下り、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転へハタ削り調整。天井部外面1/3(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。チャットを含む。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	166-227	口径12.4 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転へハタ削り調整。天井部外面1/2(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
	166-228	口径11.0 残存高3.2	体部・口縁部は内彎して下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くや丸い。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/8回転へハタ削り調整。天井部外面1/8(頂部)木調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	166-229	口径12.6 残存高3.9	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
	166-230	口径12.8 残存高3.9	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
杯 蓋	166-231	口径13.0 残存高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
	166-232	口径13.0 残存高2.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頭部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	166-233 79-233	口径11.9 器高2.8 つまみ径1.3 つまみ高0.8	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内凹に内傾するかんたりを付し、その端部は丸くおさめる。かんたりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部が接地する。大井部は低くや丸い。大井部外側中央に握室跡をつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
	166-234	口径12.0 器高3.6	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：大井部外面に「-」あり。外曲筋かぶり。
杯 身	166-235 79-235	口径11.0 器高4.0	体部は上外方にのび、口縁部付近は外反して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は深くは平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転へハタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。外側に土器斤焼痕。

杯身	166-236	口径11.6 残存高4.2	部・口縁部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一明灰緑色。胎土：密、燒成：歯白。反転復元。
杯身	166-237	口径9.6 残存高4.0	部・口縁部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-238	口径9.0 受部径11.2 器高3.2 T 高0.6 T 角度48°15'	たちあがりは内輪してのび、端部は細い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-239	口径8.6 受部径10.8 器高2.7 T 高0.4 T 角度55°00'	たちあがりは内輪してのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転(5頭)本調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-240	口径8.0 受部径12.2 器高3.0 T 高0.6 T 角度45°00'	たちあがりは内輪したのち、端部附近で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、上面で凸面を成し、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底体外面2/4(追跡)本調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-241	口径8.0 受部径12.2 器高3.6 T 高0.5 T 角度49°45'	たちあがりは内輪してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、上面で凸面を成し、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一淡灰色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。外側灰かぶり。
杯身	166-242	口径8.0 受部径11.8 器高3.4 T 高0.6 T 角度30°00'	たちあがりは内輪してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、上面で凸面を成し、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。底体外面1/2(追跡)木削調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外面上に「-」あり。
杯身	166-243	口径10.0 受部径12.4 器高3.1 T 高0.6 T 角度45°45'	たちあがりは内輪したのち、中位附近でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや細い。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底体外面1/9(追跡)木削調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰黒色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-244	口径10.0 受部径12.2 器高3.1 T 高0.5 T 角度40°45'	たちあがりは内輪したのち、中位附近でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でややあまい段を成す。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗紫紺色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-245	口径10.0 受部径12.2 器高3.1 T 高0.5 T 角度35°00'	たちあがりは内輪したのち、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、上面で凸面を成し、端部はやや丸い。底体部は浅く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗灰紺色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-246	口径9.2 受部径11.2 器高2.4 T 高0.5 T 角度40°45'	たちあがりは内輪してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰胎。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。外側灰かぶり。受部上部に上器片培養。
杯身	166-247	口径9.0 受部径13.2 器高0.7 T 角度31°00'	たちあがりは内輪してのび、端部はやや細い。受部は外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部はやや細い。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。底体外面1/2(追跡)木削調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一淡綠緑色。胎土：密。燒成：良好。ヘラ記号：底部外面上に「X」あり。
杯身	166-248	口径11.2 受部径14.0 器高3.1 T 高0.6 T 角度52°45'	たちあがりは内輪してのび、端部はやや細い。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底部は半ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底体外面1/2(追跡)木削調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外面上に「-」あり。
杯身	166-249	口径10.8 受部径13.2 器高3.1 T 高0.5 T 角度53°15'	たちあがりは内輪してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部はやや細い。底体部は浅く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯身	166-250	口径10.4 受部径12.8 器高3.2 T 高0.6 T 角度41°00'	たちあがりは内輪してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部はやや細い。底体部は浅く、底部は半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一淡綠色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。外側灰かぶり。
杯身	166-251	口径10.8 受部径13.0 器高3.6 T 高0.6 T 角度48°30'	たちあがりは内輪したのち、中位でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の内輪ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰胎。胎土：密。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外面上に「X」あり。

杯身	166-252	口径11.0 受部径13.2 底径高6.6 T高0.7 T角度36°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。武部部は浅く、武部は平ら、底部中央欠鋸。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯身	166-258	口径11.6 受部径13.8 底径高3.8 T高0.7 T角度38°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯身	166-254 79-254	口径10.5 受部径13.1 底径高3.3 T高0.7 T角度43°30'	たちあがりは内傾してのち、中位でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、上面で円曲を成し、端部は丸くおさめる。たちあがりが底部内面であまり段を成す。底部部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外一派暗褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。
杯身	166-255	口径11.2 受部径13.6 底径高3.5 T高0.8 T角度38°00'	たちあがりは内傾してのち、中位でやや上方にのびる。端部はやややせない。受部は水平にのび、端部はやせない。底部部は浅く、底部は丸い。底部中央欠鋸。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外一派暗褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。
杯身	166-256	口径10.7 受部径16.0 底径高3.4 T高0.6 T角度42°00'	たちあがりは内傾してのび、上位で上面を成す。端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色、外一派暗褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。
杯蓋	167-257	口径9.2 基高2.3	体部は下外方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部はやややせない。大井部は低く平んで近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-258	口径10.8 基高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/8回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。8mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「×」あり。
杯蓋	167-259	口径9.4 基高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/8回転ヘラ削り調整。大井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-260	口径10.0 基高3.6	体部は下外方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一派暗褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-261	口径9.6 基高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一派暗褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-262	口径9.6 基高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-263	口径11.4 基高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はやや下外方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。頂部欠鋸。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/9(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-264	口径10.0 基高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く半円。頭部欠鋸。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色、胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯蓋	167-265 77-265	口径10.8 基高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く半円。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。灰かぶり。
杯蓋	167-266	口径10.2 基高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸い。大井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。大井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外一派暗褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。
杯蓋	167-267	口径10.2 基高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は外反し、端部はやや丸くおさめる。大井部は低く平ら。底部欠鋸。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。窓盤片燃器。
杯蓋	167-268	口径11.6 基高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：大井部外面に「_」あり。一部灰かぶり。

杯 蓋	167-269 口径11.0 器高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石、チャートを含む。燒成：良好。合成後元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	167-270 口径10.6 器高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面2/5回転ヘラ削り調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色、外一明灰黄色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。
杯 蓋	167-271 口径10.6 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘラ削り調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一明灰黄色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。
杯 蓋	167-272 口径11.8 器高4.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。外面に自然釉付着。灰かぶり。ヘラ記号：天井部に「V」あり。
杯 蓋	167-273 口径12.0 器高4.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/6回転ヘラ削り調整。大井部外面1/6(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	リリコ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一明灰黄色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	167-274 口径12.0 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/6回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石をわずかに含む。燒成：良好。一部反転復元。
杯 蓋	167-275 口径12.4 器高4.0	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。燒成：良好。一部反転復元。ヘラ記号：天井部に「-」あり。外面部灰かぶり。
杯 蓋	167-276 口径11.6 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯 蓋	167-277 口径11.8 器高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/6回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。燒成：良好。一部反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。外、内面に自然釉付着。
杯 蓋	167-278 口径12.7 器高3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/6回転ヘラ削り調整。大井部外面2/3(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。燒成：良好。
杯 身	167-279 口径9.6 受部径11.4 器高3.3 T 高0.5 T 角度46°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや鋸歯状。受部は水平にのび、端部はやや丸い。底部部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/4(頂部)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。燒成：良好。一部反転復元。ヘラ記号：外面部に「-」あり。外面灰かぶり。
杯 身	167-280 口径9.8 受部径12.0 器高3.5 T 高0.4 T 角度56°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部はやや丸くおさめる。底部部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/4回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰黄色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。
杯 身	167-281 口径10.4 受部径12.8 器高3.1 T 高0.5 T 角度45°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部に「-」あり。外灰かぶり。
杯 身	167-282 口径10.0 受部径12.0 器高3.3 T 高0.7 T 角度34°15'	たちあがりは内傾したのち、端部部近でやや上方にのびる。端部はやや鋸歯状。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。同軸子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。外面部に自然釉付着。
杯 身	167-283 口径11.8 受部径12.6 器高3.8 T 高0.6 T 角度52°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面調整。他に回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。1mm以下の長石、チャートを含む。燒成：良好。合成後元。内面灰かぶり。
杯 身	167-284 口径10.6 受部径12.8 器高3.3 T 高0.5 T 角度49°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸い。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底部部は浅く。底部内欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。同軸子調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。4mm以上の長石を多く含む。焼成：良好。底部外部に露窓片透感。外面上に山筋格付着。

杯 身	167-285	口径10.4 受部径12.8 残存高3.1 T 高0.8 T 角度46°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。四転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一淡灰色。胎上：密。焼成：良好。反転復元。
	167-286 80-286	口径10.2 受部径12.5 残存高3.5 T 高0.5 T 角度45°30'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一淡灰色。胎上：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。外面部かぶり。自然胎付着。受部上面にト澤片接着。
杯 身	167-287	口径10.6 受部径13.0 残存高3.5 T 高0.7 T 角度39°15'	たちあがりは内傾したのち、中位で直立し、端部はやや丸い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一淡灰色。胎上：密。焼成：良好。反転復元。
	167-288	口径10.2 受部径13.0 残存高3.6 T 高0.7 T 角度42°30'	たちあがりは内傾したのち、端部附近で上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら、底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一淡灰色。胎上：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。一部反転復元。ヘラ記号：「底部外面に『-』あり。灰かぶり。」
杯 身	167-289	口径10.6 受部径13.2 残存高4.1 T 高0.7 T 角度40°45'	たちあがりは内傾したのち、中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。焼成：良好。反転復元。
	167-290	口径10.8 受部径13.0 残存高3.1 T 高0.5 T 角度39°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：「底部外面に『-』あり。」
杯 身	167-291	口径11.0 受部径13.1 残存高2.7 T 高0.7 T 角度33°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部山川欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面3/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/3(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。焼成：良好。ヘラ記号：「底部外面に『-』あり。」
	167-292	L口径11.0 受部径13.4 残存高2.7 T 高0.7 T 角度47°15'	たちあがりは内傾したのち、中位附近で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/3(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。焼成：良好。
杯 身	167-293	口径10.1 受部径12.6 残存高3.0 T 高0.5 T 角度56°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部外面1/6(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。焼成：良好。ヘラ記号：「底部外面に『-』あり。外面部灰かぶり。」
	167-294	L口径10.2 受部径12.2 残存高3.3 T 高0.7 T 角度34°00'	たちあがりは内傾してのひ、端部はやや丸い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。焼成：良好。
杯 身	167-295	口径11.2 受部径13.8 残存高2.8 T 高0.7 T 角度45°15'	たちあがりは内傾したのち、中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰青色、外一淡灰色。胎上：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。底部外面に「-」あり。
	167-296 80-296	口径10.6 受部径12.8 残存高3.7 T 高0.7 T 角度45°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰白色。胎上：密。2mm以下の中長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	167-297	口径11.0 受部径13.8 残存高4.0 T 高0.7 T 角度44°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面4/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰青色、外一淡灰色。胎上：密。4mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。反転復元。外面部に自然胎付着。
	167-298 80-298	口径11.2 受部径13.5 残存高3.4 T 高0.4 T 角度56°30'	たちあがりは内傾したのち、上方で直立し、端部はやや丸い。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は半ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面4/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰青色、外一淡灰色。胎上：密。4mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。一部反転復元。外面部に自然胎付着。
杯 身	167-299	口径10.6 受部径12.8 残存高2.7 T 高0.7 T 角度38°45'	たちあがりは内傾したのち、中位でやや直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/4(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎上：密。2mm以下の中長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
	167-300	L口径11.0 受部径13.6 残存高3.0 T 高0.7 T 角度45°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎上：密。2mm以下の中長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：「底部外面に『-』あり。内面部灰かぶり。」

杯 蓋	168-301	口径10.6 器高3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。内部外面に墨跡が残る。ヘラ記号：底部外面に「一」あり。
	168-302 78-302	口径11.8 器高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。底部外面に日赤釉付着。ヘラ記号：底部外面に「一」あり。
杯 蓋	168-303	口径11.0 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。底部外面に日赤釉付着。ヘラ記号：底部外面に「一」あり。
	168-304	口径11.2 残存高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	168-305	口径11.0 残存高3.8	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一暗灰褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
	168-306	口径10.8 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外側灰かぶり。
杯 蓋	168-307 78-307	口径11.4 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
	168-308	LH径11.0 残存高3.0	体部は下外方に下り、口縁部は外反し、端部はややくぼん。端部内面は内傾する。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外側灰かぶり。
杯 蓋	168-309 78-309	口径11.6 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。ヘラ記号：天井部に「一」あり。
	168-310	口径11.2 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘラ削り調整。大井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。外側灰かぶり。
杯 蓋	168-311	口径11.0 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石、石英を含む。焼成：良好。反転復元。
	168-312	口径11.4 器高3.4	体部は下外方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/7(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰青色、外一淡灰褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
杯 蓋	168-313	口径11.2 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/6(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰褐色。胎土：密。燒成：良好。以転復元。
	168-314	口径11.2 残存高3.3	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
杯 蓋	168-315 78-315	口径12.4 器高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰紫色。胎土：密。焼成：良好。
	168-316	口径11.8 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
杯 蓋	168-317	口径11.3 器高3.4	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/6(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。合転復元。

168-318	口径11.0 器高4.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は高く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。反転後元。記号：天井部外面に「」あり。外側に自然釉付着。灰があり。
168-319	LH径12.0 器高4.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰白色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。
168-320	口径12.4 残存高3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。
168-321	口径9.2 器高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰白色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。
168-322	口径13.2 器高2.2	体部・LJ縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外1/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。
168-323	口径12.4 器高3.3	体部・LJ縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は底くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/5回転ヘラ削り調整。大井部外1/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。記号：大井部外面に「」あり。
168-324	口径13.0 器高3.4	体部は下外方に下り、口縁部は外灰して下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/3回転ヘラ削り調整。大井部外1/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。記号：大井部外面に「」あり。
78-324	口径11.0 器高3.4	受部は外方に下り、受部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/3回転ヘラ削り調整。大井部外1/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。内・外側に自然釉付着。
168-325	口径10.6 受部径11.0 器高3.9 T高0.7 T角度14°30'	たちあがりは基部より直立してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。
168-326	口径10.0 受部径11.8 器高2.9 T高0.6 T角度35°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は斜り。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。受部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。受部は内傾してのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。外側灰かぶり。
168-327	口径9.8 受部径12.0 器高3.6 T高0.7 T角度38°45'	たちあがりは内傾したものの、中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。合成後元。外側灰かぶり。自然釉付着。受部上面に上器片接着。
168-328	口径10.2 受部径12.4 器高3.3 T高0.4 T角度54°45'	たちあがりは内傾したものの、底部附近で直立し、端部は丸くおさめる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石、チャートを多く含む。焼成：良好。反転後元。記号：底部外面に「」あり。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
168-329	口径10.0 受部径12.2 器高3.2 T高0.6 T角度37°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は斜り。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/4回転ヘラ削り調整。底部外1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石、チャートを多く含む。焼成：良好。反転後元。記号：底部外面に「」あり。外側に自然釉付着。
168-330	口径10.0 受部径12.4 器高2.7 T高0.6 T角度35°45'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや斜り。受部はほぼ水平でのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/2回転ヘラ削り調整。底部外1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。記号：底部外面に「」あり。外側に自然釉付着。
168-331	口径10.0 受部径12.2 器高2.8 T高0.7 T角度35°00'	たちあがりは内傾したものの中位で直立し端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一淡灰白色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。
168-332	口径10.4 受部径13.0 器高3.2 T高0.7 T角度39°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/4回転ヘラ削り調整。底部外1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰紫青色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。記号：底部外面に「」あり。
168-333	口径11.0 受部径13.4 器高3.1 T高0.8 T角度34°15'	たちあがりは内傾したのち1/4位付近で直立し、端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/4(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一淡灰色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。外側自然釉付着。
168-334	口径10.4 受部径12.8 器高3.1 T高0.6 T角度45°30'	たちあがりは内傾したのち、端部でやや上方にのびる。端部はやや斜り。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外1/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一淡灰色。胎土：密。焼成：良好。反転後元。

杯 身	168-335	口径9.4 受部径11.6 器高3.0 T 高0.6 T 角度45°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。外部に重ね焼きによる土器片埋蓄。
	168-336	口径10.8 受部径13.0 器高2.9 T 高0.8 T 角度45°30'	たちあがりは内傾したのも端部付近で立ちし、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。
杯 身	168-337	口径10.0 受部径12.4 器高3.4 T 高0.5 T 角度24°45'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのびる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。
	168-338	口径11.0 受部径13.2 器高3.4 T 高0.5 T 角度42°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。
杯 身	168-339	口径10.0 受部径12.4 器高2.7 T 高0.6 T 角度42°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。
	168-340	口径11.6 受部径13.2 器高3.2 T 高1.0 T 角度33°00'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部が水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。反転復元。外部に灰垢が付着。
杯 身	168-341	口径10.2 受部径12.6 器高3.9 T 高0.7 T 角度39°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。反転復元。
	168-342	口径10.0 受部径12.6 器高3.6 T 高0.5 T 角度51°00'	たちあがりは内傾したのも中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を多く含む。焼成: 良好。一部反転復元。外部に灰垢が付着。受部に重ね焼きによる土器片埋蓄。
杯 身	168-343	口径12.6 受部径12.6 器高3.2 T 高0.4 T 角度43°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。外部に灰垢が付着。受部に重ね焼きによる土器片埋蓄。
	168-344	口径10.8 受部径13.2 器高3.9 T 高0.6 T 角度43°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。一部反転復元。外部に灰垢が付着。受部に重ね焼きによる土器片埋蓄。
杯 身	169-345	口径11.4 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一淡灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。外壁灰垢が付着。自然軸付器。
	78-345				ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰褐色。胎土: 密。残存: 1/2。反転復元。
杯 蓋	169-346	口径11.0 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰褐色。胎土: 密。残存: 1/2。外壁灰垢が付着。自然軸付器。
	169-347	口径11.0 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一淡灰褐色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。ヘラ記号: 天井部外面上に「」あり。
杯 蓋	169-348	口径10.6 器高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。
	169-349	口径10.8 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 蓋	169-350	口径11.4 78-350 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/3。ヘラ記号: 天井部外面上に「」あり。

杯 蓋	169-351	L口径11.7 78-351 器高2.9	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:1/2。合板復元。ヘラ記号:天井部外面に「—」あり。
	169-352	口径12.0 78-352 器高3.1	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:1/2。一部合板復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋	169-353	口径11.2 78-353 器高3.0	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/8回転ヘラ削り調整。天井部外面8/8(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。4mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/3。ヘラ記号:天井部外面に「—」あり。
	169-354	口径14.4 器高3.7	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:外一暗灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。ヘラ記号:天井部外面に「—」あり。
杯 蓋	169-355	L口径12.0 79-355 器高4.3	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:2/3。反転復元。
	169-356	口径11.6 79-356 器高3.5	体部はやや外下方に下り、口縫部は直面する。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。ヘラ記号:天井部外面に「—」あり。
杯 蓋	169-357	口径12.8 79-357 器高3.3	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
	169-358	口径12.4 79-358 器高3.0	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/3。反転復元。ヘラ記号:天井部外面に「X」あり。
杯 蓋	169-359	口径13.0 器高3.4	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
	169-360	口径13.0 器高3.2	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
杯 身	169-361	口径9.6 受部径10.6 器高9.3 T 高0.8 T 角度31°00'	たちあがりは内傾してのひ、上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は後く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。3mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/3。反転復元。
	169-362	口径9.0 受部径11.0 器高9.0 T 高0.6 T 角度37°00'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は後く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/4回転ヘラ削り調整。底部外側1/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。3mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。灰かぶり。
杯 身	169-363	口径9.0 受部径10.8 器高9.0 T 高0.5 T 角度38°30'	たちあがりは内傾して下位で上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は後く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。3mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。灰かぶり。
	169-364	口径10.0 受部径12.4 器高9.1 T 高0.7 T 角度41°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は後く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰色。胎土:密。焼成:良好。残存:1/2。反転復元。
杯 身	169-365	口径9.7 受部径11.8 器高9.3 T 高0.5 T 角度45°00'	たちあがりは内傾してのひ上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は後く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/5回転ヘラ削り調整。底部外側3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:外一淡灰色。胎土:密。2mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:3/4。合板復元。外次かぶり。自然釉。ヘラ記号:底部外面に「—」あり。
	169-366	口径10.4 受部径12.6 器高9.2 T 高0.5 T 角度49°15'	たちあがりは内傾してのひ上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は後く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/5回転ヘラ削り調整。底部外側1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。1mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/3。反転復元。内外面にぶつ。
杯 身	169-367	口径10.4 受部径12.6 器高9.3 T 高0.8 T 角度40°45'	たちあがりは内傾してのひ中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は後く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/5回転ヘラ削り調整。底部外側1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。1mm以下の長石を含む。焼成:良好。残存:1/3。合板復元。外側灰かぶり。

杯 身	169-368	L1径10.4 受部径13.0 残存高3.1 T 高0.6 T 角度4°15'	たちあがりは内傾しての上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面2/3回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：外淡灰色。内一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。内外面かぶる。
	169-369	L1径9.8 受部径11.8 基高3.0 T 高0.4 T 角度4°15'	たちあがりは内傾しての上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面3/4回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：外淡灰色。内一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。受部に内ねじきによる沿石焼着。
杯 身	169-370	L1径10.2 受部径12.6 基高4.0 T 高0.6 T 角度4°45'	たちあがりは内傾して中位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面2/3米調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。受部に内ねじきによる沿石焼着。
	169-371	口徑10.0 受部径12.4 基高3.1 T 高0.8	たちあがりは内傾して上位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	169-372	口徑11.2 受部径13.4 基高2.8 T 高0.8 T 角度42°15'	たちあがりは内傾して下位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面2/3回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	169-373	口徑10.8 受部径12.8 基高3.4 T 高0.7 T 角度29°30'	たちあがりは内傾して中位で上外方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/6回転へラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：外淡灰青色。内一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	169-374	口徑10.0 受部径12.6 基高3.8 T 高0.7 T 角度44°00'	たちあがりは内傾したの上位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	169-375	口徑10.0 受部径12.4 基高3.0 T 高0.5 T 角度53°30'	たちあがりは内傾したの上位で上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	169-376	口徑10.6 受部径13.2 基高3.2 T 高0.6 T 角度45°00'	たちあがりは内傾したの上位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転へラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	169-377	口徑10.8 受部径13.4 基高3.5 T 高0.6 T 角度41°30'	たちあがりは内傾したの上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/5回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：不良。残存：1/4。反転復元。
杯 身	169-378	口徑10.6 受部径13.0 基高3.3 T 高0.5 T 角度45°00'	たちあがりは内傾して上位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/3回転へラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	169-379	口徑12.0 受部径14.0 基高3.4 T 高0.7 T 角度36°45'	たちあがりは内傾して中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/5回転へラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 身	169-380	口徑11.0 受部径13.4 基高3.1 T 高0.4 T 角度58°30'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
	169-381	口徑10.8 受部径12.8 基高3.4 T 高0.6 T 角度46°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/4回転へラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一明灰青色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	169-382	口徑11.0 受部径13.2 基高3.3 T 高0.6 T 角度46°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一明灰青色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	169-383	口徑10.8 受部径12.6 基高3.2 T 高0.7 T 角度32°30'	たちあがりは内傾して中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/3回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
杯 身	169-384	口徑10.8 受部径12.8 基高3.4 T 高0.6 T 角度46°00'	たちあがりは内傾して上内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一明灰青色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	169-385	口徑10.8 受部径12.6 基高3.2 T 高0.7 T 角度32°30'	たちあがりは内傾して中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外面1/3回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。

杯 身	169-384	口径10.0 受部径12.2 残存高3.3 T 高0.6 T 角度45°0'	たちあがりは内傾して上位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は水平面上にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：灰色。底部：密。4mm 以下での長石をわずかに含む。チャートを含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。外腹面かぶり。
	169-385	口径10.0 受部径12.6 残存高3.4 T 高0.7 T 角度41°30'	たちあがりは内傾して上位方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/4回転ヘラ削り調整。底部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：内灰青色。胎土：密。2mm 以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/2。合成復元。内外腹面かぶり。外腹面に薄着。
杯 蓋	170-386	口径15.2 残存高4.1	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。大井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/2。18.0、反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。外腹面かぶり。
	83-386				
杯 蓋	170-387	口径11.4 残存高3.0	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側3/7回転ヘラ削り調整。天井部外側3/7(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/2。18.0、反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。外腹面かぶり。
	170-388	口径12.8 残存高3.7	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側3/9回転ヘラ削り調整。大井部外側山口(9)(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。
杯 蓋	170-389	口径11.8 残存高3.0	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。
	83-389				
杯 蓋	170-390	口径11.8 残存高3.8	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。大井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/5回転ヘラ削り調整。天井部外側2/5(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。2mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。自然剥離。
	83-390	岩高3.8			
杯 蓋	170-391	口径10.6 残存高3.8	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。大井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。天井部外面に「—」あり。
	170-392	口径10.6 残存高3.5	体部・口縁部は下方方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。大井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外側1/3回転ヘラ削り調整。大井部外側1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。4mm 以上の長石を含む。チャートを含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	170-393	口径11.4 残存高3.8	体部はやや下方に下り、口縁部は反してやや下方に下る。端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。天井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
	83-393				
杯 蓋	170-394	口径11.6 残存高3.3	体部・口縁部は下方方に下る。口縁部内面に非常に多い瑕を吸し、口縁部端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。大井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/3回転ヘラ削り調整。天井部外側1/3(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
	83-394				
杯 蓋	170-395	口径13.0 残存高2.6	体部・口縁部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。大井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/5回転ヘラ削り調整。天井部外側1/4(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
	83-395				
杯 蓋	170-396	口径10.8 残存高3.0	体部・口縁部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。大井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。1mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
	83-396				
杯 蓋	170-397	口径12.0 残存高3.5	体部・口縁部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。天井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。2mm 以下の長石を含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。
	83-398				
杯 蓋	170-398	口径10.8 残存高2.9	体部・口縁部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/3回転ヘラ削り調整。天井部外側3/5(頂部)未調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。燒成：良好。残存：1/4。反転復元。
	83-398				
杯 蓋	170-399	口径11.0 残存高3.0	体部・口縁部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。天井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。燒成：良好。残存：1/4。反転復元。
	84-399				
杯 蓋	170-400	口径11.0 残存高3.8	体部・口縁部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低くやや丸い。大井部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：胎。燒成：良好。残存：1/4。反転復元。
	84-400				

杯 蓋	170-401 84-401	口径9.6 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや底く丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。内面灰かぶ。
杯 蓋	170-402 84-402	口径11.0 器高2.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。大井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-403 84-403	口径11.6 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-404 84-404	口径11.6 残存高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底くやや平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/6回転ヘラ削り調整。大井部外面2/3(裏面)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一端暗色。内一淡灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-405 84-405	口径9.0 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-406 84-406	口径10.4 残存高4.0	体部・口縁部はやや下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや底く丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-407 84-407	口径8.6 残存高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-408 84-408	口径10.4 残存高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面2/3(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	170-409 84-409	口径11.6 つまみ径0.9 高2.3 つまみ高0.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下のチヤート・長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	171-410	口径11.2 受部径13.4 残存高3.8 T高0.7 T角度34°45'	たちあがりは内傾したの中位で上方にひき、端部は丸くおさめる。受部は外上位にひき、端部は底くおさめる。たちあがりは基部内面で段を成す。底部は底く、底部は丸い。底部中央少欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。灰かぶり。
杯 身	171-411	口径10.8 受部径13.4 残存高3.5 T高0.65 T角度45°30'	たちあがりは内傾したのち位で上方にひき、端部はやや鋸てん。受部は外上方にひき、端部はやや鋸てん。たちあがりは基部内面で段を成す。底部は底く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。一部底部外面上に「一」あり。灰かぶり。
杯 身	171-412	口径11.2 受部径13.2 高3.8 T高0.6 T角度32°13'	たちあがりは内傾したのち位でやや上方にひき、端部は丸くおさめる。受部は外上方にひき、端部は底くおさめる。たちあがりは基部内面で段を成す。底部は底く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/6(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下のチヤート・長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
杯 身	171-413	口径10.8 受部径13.4 高3.5 T高0.7 T角度50°30'	たちあがりは内傾してひき、端部は丸くおさめる。受部は外上方にひき、端部は丸くおさめる。たちあがりは基部内面で段を成す。底部は底く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/6(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一端暗色。内一淡灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。ヘラ記号：底部外面上に「一」あり。
杯 身	171-414	口径10.5 受部径13.0 高3.1 T高0.7 T角度45°30'	たちあがりは内傾してひき、端部は丸くおさめる。受部は外上方にひき、端部は丸くおさめる。たちあがりは基部内面で段を成す。底部は底く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一淡灰青色。内一灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面に自然釉付着。
杯 身	171-415	口径10.6 受部径12.4 残存高3.4 T高0.6 T角度33°30'	たちあがりは内傾してひき、端部は丸くおさめる。受部は外上方にひき、端部は丸くおさめる。たちあがりは基部内面で底くおさめる。底部は底く、底部は半ら。底部中央少欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰青色。外一淡灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面に自然釉付着。

杯 身	171-416	LH611.6 受部径13.6 残存高2.7 T 高0.5 T 角度32°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/7回転ヘラ削り調整。底部外面2/7(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	171-417	口径11.4 受部径13.6 残存高2.7 T 高0.5 T 角度35°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/7回転ヘラ削り調整。底部外面4/7(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mmの長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。
杯 身	171-418	口径10.4 受部径13.0 残存高2.3 T 高0.5 T 角度45°00'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。合模復元。
	171-419	口径10.8 受部径13.0 残存高3.2 T 高0.7 T 角度41°15'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。かぶれ。
杯 身	171-420	口径10.8 受部径13 残存高2.8 T 高0.5 T 角度46°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部外面1/3(底部中央)未調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	171-421	口径10.4 受部径12.6 残存高3.2 T 高0.4 T 角度47°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)未調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 身	171-422	口径9.6 受部径12.2 残存高3.25 T 高0.5 T 角度47°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗紫色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	171-423	口径10.6 受部径12.8 残存高2.8 T 高0.6 T 角度34°15'	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗紫色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。一部反転復元。外側に自然釉付着。
杯 身	171-424	口径10.0 受部径12.2 残存高3.1 T 高0.6 T 角度38°45'	たちあがりは内傾したのち上位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/4(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	171-425	口径9.4 受部径12.0 残存高3.6 T 高0.5 T 角度34°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。外側に自然釉付着。
杯 身	171-426	口径10.4 受部径12.6 残存高2.2 T 高0.6 T 角度40°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たまにあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。外側に灰釉付着。
	171-427	LH9.8 受部径12.0 残存高3.1 T 高0.6 T 角度42°15'	たちあがりは内傾したのちやや上位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たまにあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。底部外面2/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗褐色。胎土：密。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側に自然釉付着。
杯 身	171-428	LH8.8 受部径11.4 残存高2.9 T 高0.6 T 角度43°30'	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たまにあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面12/13回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	171-429	口径10.0 受部径12.0 残存高2.8 T 高0.4 T 角度31°30'	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たまにあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠损。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。1mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。

杯 身	171-430	口徑9.0 受部径11.2 残存高2.9 T 高0.2 T 角度53°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外暗灰色。内一暗灰白色。胎土: 密。2mm以下の長石: チャートをわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
	171-431	口徑10.0 受部径12.0 残存高3.8 T 高0.7 T 角度36°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外灰青色。胎土: 密。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/8。反転復元。外側灰かぶり。
杯 身	171-432	口徑10.0 受部径12.0 残存高2.8 T 高0.7 T 角度35°45'	たちあがりは内傾してのひ、中位でのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外灰青色。胎土: 密。1mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
	171-433	口徑10.0 受部径12.0 残存高3.0 T 高0.6 T 角度41°30'	たちあがりは内傾してのひ、中位でのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外灰青色。胎土: 密。1mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。内側灰かぶり。
杯 身	171-434	口徑9.8 受部径12.0 残存高3.0 T 高0.7 T 角度40°15'	たちあがりは内傾してのひ、上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外淡灰茶色。内一灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/8。反転復元。外側灰かぶり。
	171-435	口徑9.4 受部径11.8 残存高2.8 T 高0.5 T 角度45°30'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外一灰色。内一灰褐色。胎土: 密。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。内側灰かぶり。
杯 身	171-436	口徑8.0 受部径10.0 残存高3.0 T 高0.5 T 角度38°30'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外淡灰茶色。内一灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
	171-437	口徑7.6 受部径9.6 残存高3.6 T 高0.5 T 角度35°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に丸いまい段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外淡灰茶色。内一灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
杯 身	171-438	口徑8.2 受部径10.4 残存高3.0 T 高0.8 T 角度32°00'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部に丸いまい段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外淡灰茶色。内一灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/6。焼成復元。底部外面に「△」あり。外側灰かぶり。
	172-439	口徑12.4 残存高3.6	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部周縁に膨を、底部1/2の位置にやや鋸歯をめぐらす。底部下半に欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外一暗灰黄色。内一暗灰绿色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
高 杯	172-440	口徑11.0 残存高3.9	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部端部および底部上方1/2の位置に膨をめぐらす。底部半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/16。一部反転復元。灰かぶり。ヘラ記号: 底部外面に「△」あり。
	172-441	口徑11.8 基部径3.2 残存高3.7	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/16。一部反転復元。自然輪付査。
高 杯	172-442	口徑10.3 基部径3.7 脚高4.7 底径5.6 脚高1.2 残存高4.8	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。脚部はやや外反して下外方に下り。端部部は、外極する半面を呈し端部内部側で接続する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外暗灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。脚部内面灰かぶり。杯部外面に自然輪付査。
	172-443	口徑11.4 基部径4.8 脚高5.4 脚高1.2 残存高4.8	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。脚部はやや外反して下外方に下り。端部部は、外極する半面を呈し端部内部側で接続する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外暗灰青色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
高 杯	172-444	口徑10.0 残存高3.5	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部周縁に膨を、底部下方にやや鋸歯をめぐらす。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外一暗灰青色。内一暗灰白色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。内面灰かぶり。
	181-444	口徑10.3 基部径3.7 脚高4.7 底径5.6 脚高1.2 残存高4.8	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部周縁に膨を、底部下方にやや鋸歯をめぐらす。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 外一暗灰青色。内一暗灰白色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。内面灰かぶり。

高 杯	172-445 81-445	基部深6.0 残存高4.3	軸部は欠損。底部は平ら。脚部は中央外反しながら下外方に下る。梢部以下欠損。2段3方向の円形スカシを打ち出す。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。船土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。施成：良好。残存：杯部1/5、脚部外端元。脚部内側かぶり。杯部外面に自然釉付着。
高 杯	172-446	基部深3.5 脚底深5.6 脚高1.5 残存高4.0	口縁部欠損。軸部は上外方にのびる。底部は平らである。脚部は下外方に下り、梢部は外方にのび、端部は凹曲を成し、端部内面および端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。船土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：脚底部1/2。合板復元。灰かぶり。
高 杯	172-447	基部深4.6 脚底深6.0 脚高1.0 残存高3.2	軸部は平ら。体部以下欠損。脚部は下外方にのびる。脚部は外方にのびる。脚部は凹面を成し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。船土：密。焼成：良好。残存：口縁1/4、反板復元。ヘラ記号：杯部外面上に「-」あり。
高 杯	172-448	基部深3.2 脚底深6.2 脚高1.9 残存高2.7	杯底部一部残存。体部以上欠損。脚部は外傾する平面を成し、端部内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。船土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：脚部1/2。反板復元。ヘラ記号：杯部内面上に「-」あり。
高 杯	172-449	基部深3.6 脚底深6.2 脚高1.5 残存高2.3	杯底部一部残存。体部以上欠損。脚部は下外方にのび、梢部は外方にのびる。脚部は平面を成し、端部内面および脚部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。船土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：脚底部7/8。灰かぶり。ヘラ記号：杯部内面上に「-」あり。
高 杯	172-450	基部深6.6 脚底深11.5 残存高3.3	杯底部一部残存。体部以下欠損。脚部は下外方にのびる。脚部は外方にのびる。脚部は平面を成し、端部内面および端部内面で接地する。脚部3方向に円形スカシを育す。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。船土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。施成：良好。残存：脚底部1/4。外側面に自然釉付着。反板復元。
高 杯	172-451	基部深5.4 脚底深6.6 脚高1.7 残存高2.6	杯底部一部残存。体部以上欠損。脚部は下外方にのびる。脚部は下外方にのびる。脚部は外傾する平面を成し、端部内面および端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。船土：密。焼成：良好。残存：脚底部1/4。ヘラ記号：杯部外面上に「×」あり。
高 杯	172-452	基部深3.2 脚底深5.2 残存高2.6	杯底部一部残存。体部以下欠損。脚部は下外方にのびる。脚部は外方にのびる。脚部は外傾する平面を成し、端部内面および端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。船土：密。焼成：良好。残存：口縁1/2。ヘラ記号：杯部外面上に「-」あり。
高 杯	172-453	基部深6.4 脚底深16.7 残存高2.9	杯底部一部残存。体部以上欠損。脚部は下外方にのびる。脚部は外方にのびる。脚部は内傾する凹面を成し、端部内面および端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。船土：密。3mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：脚底部1/3。反板復元。
高 杯	172-454	基部深6.8 脚底深10.0 残存高3.1	杯底欠損。脚部は下外方に下ったのち、下外方に開いて端部に至り、端部はやや外傾する平面を成し、内面であまり深い窪を成す。2方向に円形スカシを育す。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。船土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。
高 杯	172-455	基部深8.1 脚底深9.5 残存高2.6	脚部は平ら。体部以下欠損。脚部は下外方に下ったのち、下外方に開いて端部に至り、端部はやや外傾する平面を成し、内面であまり深い窪を成す。4方向に方形容スカシを育す。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。船土：密。1mm以下の長石を若干含む。施成：良好。反板復元。
高 杯	172-456	脚底深8.8 残存高3.7	脚部は下外方に開いて下る。脚部端部外側に対する制限部上に一一条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰黄色。船土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。一部反板復元。
高 杯	172-457	基部深3.7 残存高6.1	脚部は平ら。脚部は下外方に下ったのち、下外方に開いて下る。制限部基部附近から上方は欠損する。中位に2条の沈線をめぐらす。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰黄色。船土：密。3mm以下の長石を若干含む。施成：良好。一部反板復元。内外面に自然釉付着。
高 杯	172-458 81-158	基部深10.0 脚底深10.6 脚高10.5 残存高11.1	脚部はやや下外方に下ったのち外傾して下外方に下り、脚部で外方にのび、脚部はやや内傾する平底を成す。中位に2条の沈線をめぐらす。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰黄色。船土：密。焼成：良好。合板復元。外側面灰かぶり。
高 杯	172-459	残存高9.0	脚部は平ら。体部以下欠損。脚部は下外方に下ったのち、下外方に開いて下る。脚部下部欠損。中位に2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：内一輪暗青色。外一輪暗灰色。船土：密。3mm以下の長石を若干含む。施成：良好。反板復元。外側面灰かぶり。
高 杯	172-460	口縁8.6 基部深8.2 体部大径9.4 脚高4.0	口縁部は基部から外傾して外方に開き、脚部は丸くおくる。脚部は下外方に強引り出し、体部は下内方に下る。底部は平らに近い。体部は最大径は中位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面4/5脚部中段未削剃。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。船土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：不良。合板復元。

漆 蓋	172-461	口径7.6 高さ2.8	体部は下外方に下り、口縫部は外反し、端部は丸くおさめる。端部内面は内締する。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面木調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。反転復元。ヘラ削り: 天井部。「一」あり。灰かぶり。
	172-462	口径8.0 高さ3.1	体部は下外方に下り、口縫部は外反し、端部は丸くおさめる。端部内面は内締する。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を多く含む。燒成: 良好。反転復元。
漆 蓋	172-463 81-463	口径9.4 高さ2.4	体部は下外方に下り、口縫部は外反し、端部はやや脱く、端部内面は内締する平面を成す。天井部は低くや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/4(頂部)未調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。燒成: 良好。反転復元。
	172-464	口径10.4 高さ2.9	体部はやや直線に下り、口縫部は外反し、端部はやや脱く、端部内面は内締する。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5(頂部)未調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を含む。燒成: 良好。反転復元。外面上に器片接着。外面に窓片跡。
短 颈 蓋	172-465	口径7.6 基部径8.0 体部最大径13.6 残存高7.2	口縫部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に崩く張り出し、体部は下外方に下る。底部中央欠損。体部最大径は巾位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。反転復元。
	172-466	口径7.4 基部径7.6 体部最大径14.6 残存高9.2	口縫部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下外方に下る。底部中央欠損。体部最大径は上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。反転復元。灰かぶり。
短 颈 蓋	172-467	口径7.1 基部径8.1 体部最大径15.0 残存高7.9	口縫部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下外方に下る。底部中央欠損。体部最大径は1位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。4mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。反転復元。灰かぶり。
	172-468	口径9.4 基部径9.8 体部最大径16.3 残存高5.7	口縫部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に崩く張り出す。体部・底部欠損。頸部外側に一条の沈れをめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。
短 颈 蓋	172-469	口径8.0 基部径7.8 体部最大径12.6 残存高6.8	口縫部は基部からやや下外方にのびたのも、やや内側しながら直立し、端部端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。体部部分的に壊んでいる。
	173-470	口径7.0 基部径6.2 残存高4.8	口縫部は外反しながら上外方にのびたのも、やや内側しながら直立し、端部端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。燒成: 良好。
提 瓶	173-471	口径9.6 基部径5.8 残存高6.2	口縫部は上方にのびたのも、やや内側しながら上外方にのび、口縫端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側カ目調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を含む。1mmの石英石を若干含む。焼成: 良好。灰かぶり。
	173-472 82-472	口径8.5 基部径6.2 残存高6.4	口縫部は外反しながら上外方にのびたのも、端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。頸部内面中位に2条の沈れをめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm以下の長石を含む。自然釉付着。
提 瓶	173-473	口径7.8 基部径6.4 残存高6.7	口縫部はやや外反しながら上外方にのびたのも、やや外側ながら上外方にのびる。口縫端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡褐色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。1mmの石英石を若干含む。燒成: 良好。反転復元。自然釉付着。
	173-474	口径7.0 残存高5.8	口縫部欠損。体部は上外方にのびる。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一輪灰色、外一輪灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を多く含む。焼成: 良好。一部反転復元。外面に自然釉付着。
漆 蓋	173-475	基部径8.0 胎部径8.7 残存高5.0	口縫部欠損。体部は上外方にのびる。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一輪灰色、外一輪灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を多く含む。焼成: 良好。一部反転復元。外面に自然釉付着。
	173-476	基部径6.3 胎部径8.1 残存高8.3	口縫部欠損。体部は上外方にのびる。底部は平ら。底部中央に円孔を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。一部反転復元。外面に土器片接着。

ハ シ ウ タ	173-477	基部深3.4 体部最大径9.0 残存高12.0	頭部は外反して上外方にのびる。口縫部欠損。脣部は下方に下り、体部は下内方に下る。頭部は平ら。体部最大径は上方1/3位に位置し、その他の間に削りを生ずる。	マキアゲ・ミズビキ成形。武体部外面回転+カット削り調整。体部上半の回転ナダ調整。他は回転ナダ調整。頭部内面にしぶりがあります。	ロクロ回転：右回り。色調：内暗灰緑色、外淡灰緑色。胎土：密。焼成：やや不良。
	173-478	口径7.8 残存高9.4	口縫部は上外方に外反してのびる。口縫部は丸くおさめる。頭部基部付近以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。内面にしぶりあります。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。一部反転復元。
長 頸 壺	173-479	体部最大径19.8 残存高8.2	口縫部欠損。頭部は下方に下り、体部はやや内彎して下内方に下る。体部下半以下欠損。体部最大径は上方に位置する。頭部は圓い1条の沈線。体部に跨る2条の沈線をめぐらす。その間に削り文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面カタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。灰かぶり。
	173-480	口径6.0 基部65.7 体部最大径20.0 残存高9.5	口縫部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。頭部上面に丸をもって外下方へ張り出す。頭部上面中央部・脣部・底部欠損。なお、口縫部は頭部上面祐土板の肩峰が基部の中心点を通る位置で接合されている。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面カタキ調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。反転復元。
平 瓶	173-481	口径9.2 基部10.0 残存高9.7	口縫部は上内方にのび、端部は丸くおさめる。頭部は丸みをもって、ド外方に下る。体部上面以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。自然釉付器。灰かぶり。
平 瓶	173-482	残存高6.3	山頭部欠損。体部は下外方に下る。以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰白色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。
梅	174-483	口径13.5 残存高7.4	体部・口縫部は上内方にのび、端部は丸くおさめる。底部は丸い。体部に3条の浅い沈線をめぐらし、その間に削り文を有する。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。灰かぶり。
短 頸 壺	174-484	口径5.4 基部65.8 最大径11.6 残存高11.1	口縫部は基部から立ち、端部は丸くおさめる。口縫部は下外方に下り、体部は下内方に下る。底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：やや不良。我社：1/3。反転復元。
短 頸 壺	174-485	口径7.2 基部6.6 残存高6.4	口縫部は上方にのび、端部は外反する半面を成す。底部は下外方に下り、体部は下内方に下る。底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。我社：1/3。反転復元。
提 瓶	174-486	口径10.2 基部9.0 残存高5.8	口縫部はやや外彎しながら上外方にのび、口縫部に至り、端部は丸くおさめる。頭部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部内面青海波タタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰紫色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。我社：1/3。反転復元。
提 瓶	174-487	口径6.6 基部6.2 残存高4.2	口縫部はやや外彎しながら上外方にのび、口縫部に至り、端部は丸くおさめる。頭部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：口縫部1/3。内外面に自然釉付器。内面灰かぶり。
提 瓶	174-488	口径5.2 基部4.3 残存高4.3	口縫部はやや外彎しながら上外方にのび、口縫部に至り、端部は丸くおさめる。頭部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：口縫部1/3。反転復元。
長 頸 壺	174-489	最大径22.0 残存高11.1	頭部は外下方に張り出し、体部は下内方に下る。頭部に2条、体部に1条の沈線をめぐらす。その間に削り文を有する。口縫・口縫部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：体部1/3。反転復元。
高 杯	174-490	基部66.9 脚部径10 残存高2.6	脚部は下外方に下り、端部は外側する半面を成して内側で接地する。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：脚部1/4。反転復元。
高 杯	174-491	基部4.4 脚部7.0 残存高3.8	杯底部は平らに近い。底部上方以上欠損。脚部は下に下ったものと下外方に下る。端部は外側する半面を成して内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：脚部1/2。反転復元。
高 杯	174-492	脚部径10.6 残存高2.5	端部は下外方に下る。端部は外側する半面を成して内側で接地する。端部に1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：脚部1/3。反転復元。外側灰かぶり。

高 杯	174-493	基部径6.6 脚部径9.0 残存高2.3	脚部はほぼ平ら、底部上半以下欠損。脚部は下外方に下り、端部は外傾する平面を成し内側で接する。脚部に円形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：褐色。 胎土：胎。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：脚部1/3。合成復元。内外面灰かぶり。
高 杯	174-494	脚部径10.6 残存高5.1	脚部は下方へ下ったのも下外方に下る。端部はやや内傾する平面を成し接地。累部は中位以下に1条の鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。胎土：胎。 1mm以下の長石・チャートをわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
高 杯	174-495	底部径4.2 残存高4.8	底部は外上方にのび底部は平ら。脚部は下方に下り下外方に開いている。底部上半以上に、端部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側回転ヘラ削り調修。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：外・灰色。内・暗灰色。胎土：胎。1mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：脚部1/3。合成復元。ヘリ記号：脚部外方にあり。柄部外側灰かぶり。内面自然輪付。
高 杯	174-496	口径10.0 残存高6.3	脚部は下方へ下ったのも下外方に下る。端部部外側に凹凸を成し、端部内側で接する。中位以下に1条の沈線をめぐらす。底部上方に1条のあまい沈線をめぐらす。3方向に方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：淡灰青色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
高 杯	174-497	基部径8.0 残存高2.8	底部は平らに近い。底部上半以下欠損。脚部は下方に下り、やや下外方に開く。脚部に下方に丸形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：内・暗灰青色、外・暗灰色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
高 杯	174-498	脚部径14.0 脚部高4.8	脚部上方1/2以下欠損。脚部は下外方に開いて下り、脚部上方で段を成して下外方に下る。端部は内傾する平面を成して接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：内・暗灰青色、外・暗灰色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
高 杯	174-499	脚部径17.0 脚部高5.6	脚部上方欠損。脚部は下外方に下るのも外下方に開き、脚部上方で段を成して下外方に下る。端部は凹面を成して接地する。脚部上方に3条の沈線をめぐらし、3方向に長方形のスカシを行子。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：淡灰青色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
青 杯	174-500	脚部径18.6 残存高5.5	脚部上方欠損。脚部は下外方に下ったのも外下方に開き、脚部上方で段を成して下外方に下る。端部は内傾する半曲面を成して接地する。3方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：淡灰青色。胎土：胎。3mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：脚部1/4。
杯 蓋	175-501	口径11.0 残存高3.1	底部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：褐色。 胎土：胎。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/12。反転復元。
杯 身	175-502	口径12.9 受部径15.0 残存高3.3 T 高6.6 T 角度37°00'	底部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調修。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：内・青灰色、外・暗灰青色。胎土：胎。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。チャートを含む。堅穂。残存：1/5。反転復元。
杯 身	175-503	口径10.8 受部径12.4 残存高2.3 T 高4.6 T 角度56°00'	たちあがりは内傾したのも底位で上方内方にのびる。端部はやや丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部はやや丸くおさめる。たちあがり基部部はやや丸くおさめる。底位部は丸く、底位は丸い。底位下方に欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調修。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：淡灰青色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。外側に自然輪付。
杯 身	175-504	口径10.2 受部径12.4 器高3.6 T 高6.7 T 角度37°30'	たちあがりは内傾したのも底位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、上面でやや内傾を成し、端部はやや丸くおさめる。たちあがり基部部はやや丸くおさめる。底位部は丸く、底位は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調修。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：淡灰青色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側に自然輪付。
杯 身	175-505	口径10.4 受部径12.8 器高3.8 T 高6.7 T 角度43°30'	たちあがりは内傾したのひ、端部はやや丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常にまろい段を成す。底位部は丸く、底位は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調修。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：淡灰青色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側に自然輪付。
高 杯	175-506	口径9.8 基部径3.8 残存高6.2	口縁部は内脣しながら上外方にのび、端部は丸くおさめる。脚部は丸くおさめる。底部上方に欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：内・暗灰青色、外・青灰色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/3。脚部の1/4。反転復元。
高 杯	175-507	口径10.4 残存高7.5	脚部上方1/2程度欠損。脚部は下方に下ったのも外下方に開いて下り、端部は外下方にのび、端部はやや内傾する面を成し、端部内面および脚部内面で接地する。中位に2条、底部上方に1条の非常に鈍い沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転・右回り。色調：内・暗灰青色、外・青灰色。胎土：胎。2mm以下の長石をわずかに含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：脚部の1/4。反転復元。

高 杯	175-508	口径12.5 基部厚3.5 残存高6.8	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底盤はやや丸い。脚部は下方に下ったのち外方に下る。 底部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は同軸ナダ調整。脚部内面にしれり目あります。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
提 瓶	175-509	LIP57.0 基部厚5.3 残存高11.6	口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。脚部・体部は正面に幅に長いS形を成し、前面で舟形形を成す。底部下半、底部欠損。口縁部外面上に3条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部前面カキリ調整。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。口縁部外面上に自然釉付着。
横 瓶	175-510	残存高16.1	体部の外方に張り出し、体部は直下にいる。底部は平らに近い。口縁部・底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石・1mmの石英を若干含む。焼成：良好。反転復元。
基 盤	183-587	口径13.0 基部厚11.0 残存高3.6	口縁部は基部から上方にのびたのち、中位で上外方にのび、口縁部下で底く外方にのびたのち内傾する形を成して、内側にひじ彫刻部にいたる。端部は丸くおさめる。底部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部内面同心円タクシ。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。口縁部に十唇片接着。
一 般	183-588	口径62.4 残存高8.5	口縁部は外上方にのび、口縁部下で底く外方にのびたのち上外方にのび、あまり段を成して反対して上外方にのび、上外方にのて端部に生まる。端部は丸くおさめる。口縁部直下で2条、頸部下位1/3に2条の沈線、頸部沈線の下に舟形引き斜行文を行す。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外面・内面カキリ調整。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外暗灰色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
基 盤	183-589	口径77.0 残存高8.7	口縁部は外上方にのび、口縁部下で底く外方にのびたのち上外方にのび、あまり段を成して、上外方にのび、端部に至る。端部は丸くおさめる。口縁部直下で2条、頸部上方1/3に2条、頸部下位1/3に2条の沈線を有する。頸部上方沈線の上下に舟形引き斜行文を行す。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外面カキリ調整。他は同軸ナダ調整。	色調：暗灰褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。自然釉付着。
器 台	184-590	口径29.0 残存高5.3	体部内部に上外方にのび、口縁部は外反して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面回転ヘラ削り調整。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/9。反転復元。
器 台	184-591	口径21.2 残存高7.8	体部内部に上外方にのび、口縁部は外反して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面回転ヘラ削り調整。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石・チャートを含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
基 盤	184-592	口径12.2 基部厚1.1 残存高6.0	口縁部は外反して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底部は下外方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部外面タクシのちカキリ調整。肩部外面タクシのちカキリ調整。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mm程度の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
基 盤	184-593	口径20.6 残存高4.4	口縁部は外反して上外方にのび、口縫部では上方にのびたのちやや凹面をして上外方にのびる。端部は下外方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部外面タクシのちカキリ調整。肩部内面青海波タクシ。他12回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mm以下のチャートを含む。焼成：良好。残存：口縁1/5。反転復元。
基 盤	184-594	口径26.0 残存高6.3	口縁部は外反して上外方にのび、口縫部で外上方にのびたのち内縮して上外方にのびる。端部は下外方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクシのちカキリ調整。肩部内面青海波タクシ。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
基 盤	184-595	口径30.6 残存高8.7	口縁部は外反しながら上外方にのび、口縫部下で底く外下方にのびたのち上外方にのび、端部は丸くおさめる。口縫部下方に2条、頸部中位に3条、頸部下位に1条の沈線をめぐらし、その間に舟形引き斜行文を行す。基部以卜欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外面カキリ調整。他は同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一端黄色、外一端灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁1/10。反転復元。
基 盤	184-596	口径36.0 残存高8.8	口縁部は外反しながら上外方にのび、口縫部下で底く外下方にのびたのち上外方にのび、端部は丸くおさめる。口縫部下方に2条、頸部中位に3条、頸部下位に1条の沈線をめぐらし、その間に舟形引き斜行文を行す。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。同軸ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一端灰褐色。胎土：密。1mm程度の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：口縁1/2。反転復元。

185-597	口径47.0 残存高7.3	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのびたものも設 を成し、内傾して上方にのびる。端 部は丸くおさめる。頭部上方に2条 の沈継をめぐらし、その上下に波状 文様を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色、外-暗灰青色。胎土： 密。1mm以下の長石に含む。残存： 口縁部わずかに残存。反転復元。
185-598	口径48.6 残存高11.4	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのびたものも設 を成し、内傾して上方にのびる。 端部は丸くおさめる。頭部上方に2条 の沈継をめぐらし、その上下に波状 文様を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部 外面カキ目調整。他の回転ナガ 調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色、外-暗灰青色。胎土： 密。3mm以下の長石を含む。石 英を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：口縁部一部。 反転復元。外側に口縁部自然釉付 窓。内面に自然釉付。
185-599	口径51.0 残存高7.6	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのびたものも設 を成し、内傾して上方にのびる。 端部は丸くおさめる。頭部上方に2条 の沈継をめぐらし、その上下に波状 文様を有する。基部部下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色、外-一層暗灰。胎土： 密。2mm以上の長石・1mm以 下のチャートをわずかに含む。燒 成：良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。
185-600	口径54.0 残存高9.0	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのび、平面を成 し、外向外にのびる。段々成し、内 傾して上方にのびる。端部は丸く おさめる。頭部上方に2条、頭部中位 に2条の沈継をめぐらし、中位の 沈継の上に波状文様を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部 外面カキ目調整。他の回転ナガ 調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色。胎土：密。2mm以下の長石 を含む。チャートを含む。燒成： 良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。
185-601	口径56.4 残存高9.0	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのびたもの、 あまり段々成し、内傾して上方に のびる。端部は丸くおさめる。口頭 部下に2条、頭部中位に2条、頭部下 位に2条の沈継をめぐらし、その間 に波状文様を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部 外面カキ目調整。他の回転ナガ 調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色、外-暗灰青色。胎土： 密。3mm以下の長石をわずかに 含む。焼成：良好。残存：口縁部 わずかに残存。
185-602	口径56.0 残存高7.2	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのびたものと内 傾して上方にのびる。端部は丸くおさ める。口頭部に2条、頭部中位に2条、 頭部下位に2条の沈継をめぐらし、中位の 沈継の上に横書き斜行文を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部 外面カキ目調整。他の回転ナガ 調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色。胎土：密。1mmのチャート を含む。焼成：良好。残存：口縁部 わずかに残存。反転復元。自然 釉付。
185-603	口径55.6 残存高12.7	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのびたものとあ まい段々成し、内傾して上方にのび る。頭部中位に2条、頭部中位に 2条の沈継をめぐらし、中位の沈継 の上に横書き斜行文を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰綠色、外-一層暗灰色。胎土：密。 1mm以下のチャートを含む。燒 成：良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。
185-604	口径57.0 残存高8.8	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのび、段々成 し、内傾しながら上方にのびる。端 部は丸くおさめる。頭部上方に2条、 頭部中位に2条の沈継をめぐらし、中位の 沈継の上に横書き斜行文を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。口頭 部外側カキ目調整。他の回転ナ ガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色。外-淡灰白色。胎土： 密。2mm以下の長石を含む。燒 成：良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。内面自然釉付。
185-605	口径51.8 残存高6.9	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのび、段々成 し、内傾しながら上方にのびる。端 部は丸くおさめる。頭部上方に2条、 頭部中位に2条の沈継をめぐらし、中位の 沈継の上に横書き斜行文を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰白色、外-一層暗灰色。胎土： 密。2mm以下の長石を含む。燒 成：良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。
185-606	口径64.2 残存高14.2	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのび、段々成 し、内傾しながら上方にのびる。端 部は丸くおさめる。頭部上方に2条、 頭部中位に2条の沈継をめぐらし、中位の 沈継の上に横書き斜行文を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰青色、外-一層暗灰色。胎土： 密。2mm以下の長石を含む。燒 成：良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。
185-607	口径70.0 残存高13.5	口頭部は外反して上方にのび、口 縁部下で近く外下方にのび、段々成 し、内傾しながら上方にのびる。端 部は丸くおさめる。頭部上方に2条、 頭部中位に2条の沈継をめぐらし、中位の 沈継の上に横書き斜行文を有する。基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部 外面カキ目調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 層灰青色、外-一層暗灰色。胎土： 密。2mm以下の長石を含む。燒 成：良好。残存：口縁部わずかに 残存。反転復元。

	187-608	口径6.8 残存高8.0	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。口縁部下に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、中位沈線の上方に横拂き斜行沈線文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一灰色。内一灰白色。胎土：密。3mm以下の良石を含む。焼成：良好。残存：口径1/2。反転復元。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
翌	187-609	口径31.0 残存高5.0	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。口縁部下に2条、頸部上方に3条の沈線をめぐらし、その間に横拂き斜行沈線文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石若石を含む。焼成：良好。残存：口径1/2。反転復元。
翌	187-610	口径58.8 残存高12.5	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。口縁部下に2条、頸部中位に2条、頸部下位に2条の沈線をめぐらし、その間に横拂き斜行沈線文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一暗灰青色。胎土：密。4mm以下の良石・石英を含む。焼成：良好。残存：口径1/2。反転復元。内面自然釉付着。
翌	187-611	口径62.0 基部2641.8 残存高13.8	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。口縁部下に2条、頸部上方に2条、頸部中位に2条、頸部下位に2条の沈線をめぐらし、その間に横拂き斜行沈線文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：外一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の良石・石英を含む。焼成：良好。残存：口径1/8。反転復元。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
翌	188-612	口径44.8 残存高5.7	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。頸部上方に2条、頸部中位に3条の沈線をめぐらす。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の良石・石英を含む。焼成：良好。残存：口径1/8。反転復元。外側自然釉付着。
翌	188-613	口径44.2 残存高7.3	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。頸部上方に2条の沈線をめぐらす。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の良石・石英を含む。焼成：良好。残存：口径1/8。反転復元。
翌	188-614	口径40.0 残存高7.8	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。口縁部下に1条、頸部上方に3条の沈線をめぐらし、上方の沈線の上下に横拂き斜行沈線文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石若石を含む。焼成：良好。残存：口径1/8。反転復元。自然釉付着。
翌	188-615	口径58.6 残存高5.0	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。頸部上方に2条、頸部中位に1条の沈線をめぐらし、上方の沈線の上下に横拂き斜行沈線文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。1mm程度のチャートを含む。焼成：良好。残存：口径1/12。反転復元。
翌	188-616	口径57.2 残存高5.7	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。頸部上方に3条の沈線をめぐらし、その上方に波状文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰青色、外一暗灰青色。胎土：密。1mm以下の良石を含む。焼成：良好。残存：口径1/8。反転復元。
翌	188-617	口径55.6 残存高6.8	口縁部は外反して上方にのび、口縁部で細く下外方にのび、内傾して上方にのひたものと上内方に至る。端部は丸くおさめる。頸部上方に3条の沈線をめぐらし、その上方に波状文を有する。頸部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：口径1/8。反転復元。
翌	188-618	口径43.6 残存高6.3	体部下半欠損。体部・口縁部は内側して上方にのびる。	マキアゲ・ミズビキ成形。外側カキ目調整。他の回転ナデ調整。	色調：淡灰色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
翌	188-619	口径44.4 残存高6.2	口縁部の下半欠損。口縁部は上方にのび、口縁部下でやや下方にのびて段を作成して上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部底面に2条、頸部上方1/3に2条の沈線をめぐらし、その間に横拂き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。外側カキ目調整。他の回転ナデ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。

189-620	口径15.8 基部径13.3 残存高4.3	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下でやや内彎して上方にのびたもの上方にのび、口縫部内面に至る。端部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側タクシのも回転ナダ調整。肩部内面青海波タクシ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:白。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:口縫部の1/4。反転復元。外側からかぶり。口縫部内部に自然釉付着。
189-621	口径18.7 基部径15.5 残存高5.6	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下でなく外方にのびたもの上方にのび、内彎して上方にのび、口縫部内面に至る。端部は外下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タクシのちカキ目調整。肩部内面青海波タクシ。他は回転ナダ調整。	色調:内一筋青色。外一筋灰。胎土:白。焼成:良好。残存:口縫部の1/8。反転復元。
189-622	口径23.3 基部径21.3 残存高6.4	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下で内彎して上方にのび、口縫部内面に至る。端部は外下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タクシのちカキ目調整。肩部内面青海波タクシ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:淡灰青色。胎土:白。1mmの長石をわずかに含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:口縫部内面、肩部内面からかぶり。
189-623	口径37.6 基部径20.0 残存高6.9	口縁部は上方にのびたもの外反して上方にのび、やや大きい段を作ったもの内彎して上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部内面に非常に多い段を作。肩部外方に張り出る。肩部下以下欠損。頸部上方1/3以上に1条ずつの浅い沈線と3条めぐらし。頸部中位に1条の浅い沈線をめぐらす。上方1/3の沈線のうちの下2条の間、上方1/3の沈線と中位の沈線の間に斜文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ目調整のち上方1/3は回転ナダ調整。頸部内面カキ目調整。肩部の下方1/4は回転ナダ調整。肩部外面タクシ。肩部内面青海波タクシ。他は回転ナダ調整。頸部の刺突は沈線をめぐらしたのちに施す。	ロクロ回転:左回り。色調:内一筋灰青色。外一筋灰。胎土:白。4mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:口縫部の1/6以下。反転復元。口縫部内外面・頸部内面灰からかぶり。
189-624	口径55.8 残存高7.1	口縫部は半以下欠損。口縫部は上方にのび、口縫部下でやや外下方に非常に多くのひたち上方にのび、段を作ったの外反して上方にのび、口縫部内面に至る。口縫部底面下に1条、頸部上方1/3と2条の非常に深い沈線をめぐらし。上方1/3の沈線の下に波状文をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。肩部の被伏文は沈線をめぐらしたのちに施す。	ロクロ回転:左回り。色調:内一筋灰青色。外一筋灰。胎土:白。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口縫部の1/30。反転復元。
189-625	LH50.8 残存高12.9	口縫部下方1/5以下欠損。口縫部は上方にのび、口縫部下で外下方にのびたのちや上方にのび、外反して上方にのび、口縫部内面に丸くおさめる。口縫部内面に、あい段を作らず。口縫部直下に1条、頸部上方1/3と2条の非常に深い沈線をめぐらし。上方1/3の沈線の下に波状文をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一筋灰青色。外一筋灰。胎土:白。4mm以下の長石をわずかに含む。チャートをやや多く含む。焼成:良好。残存:口縫部の1/15以下。反転復元。内外面灰からかぶり。
189-626	口径44.0 基部径33.4 残存高16.8	口縫部はやや外反してやや上方にのびたのちや上方にのびる。口縫部下で外下方にのびたのち上方にのび、内彎して内下方にのびる。端部は丸くおさめる。端部は外下方に下る。肩部下以下以下欠損。口縫部底面に2条の非常に深い沈線を、頸部上方1/4に2条、頸部中位に2条の深い沈線をめぐらし。上方1/4の沈線の上下に櫛目斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ目調整のち上方1/4は豊多方向のナダ調整。肩部内面同心内凹タクシ。他は回転ナダ調整。(頸部内面に平にナダ調整時の布か革の斜行模様は沈線をめぐらしたのちに施す。	ロクロ回転:左回り。色調:内一筋灰青色。外一筋灰褐色。胎土:白。2mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成:良好。残存:口縫部の1/4以下。反転復元。肩部外側灰からかぶり。頸部内面上半・頸部外側基部付近に自然釉付着。
190-627	口径55.0基部径28.4 残存高8.8	口縫部は基部から外反して上方にのび、口縫部下でやや外下方にのびたのち上方にのび、段を作ったのち上方にのびる。端部は丸くおさめる。端部は外下方に下る。肩部下以下以下欠損。口縫部底面に2条、頸部上方1/3と2条、頸部1/3と2条の沈線をめぐらす。その間に波状文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。内面青海波タクシ。他は回転ナダ調整。	色調:灰色。胎土:白。3mm以下の長石を含む。焼成:良好。反転復元。内面一部灰からかぶり。

表 15 桃山池 1 号窯灰原表面採集遺物観察表

(丁はたちあがりを示す)

器種	表面 凹面	法 蓋 蓋	形 態 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 蓋	176-511	口径10.2 残存高3.0	体部は下方に下り、口縫部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。犬井:ロクロ回転:右回り。色調:暗灰。外部外面2/5回転ヘラ削り調整。胎土:白色。胎土:密。焼成:良好。反転復元。他は回転ナダ調整。	
杯 蓋	176-512	口径10.5 残存高3.1	体部は下方に下り、口縫部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。犬井:ロクロ回転:右回り。色調:淡灰。外部外面1/5(頂部)未調整。胎土:密。天井部外側面1/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	

杯 蓋	176-513	口径9.0 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-514	口径11.4 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-515	口径11.6 残存高3.3	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-516	口径10.6 残存高3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-517	口径11.2 残存高4.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-518	口径12.4 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-519	口径10.8 残存高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/7(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-520	口径11.6 残存高2.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。頂部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右開き。色調：灰白色。胎土：灰。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 蓋	176-521	口径11.8 つまみ径1.0 窓西1.9 つまみ高0.1	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内彌すかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。かえりは口縁部以下に突出し、かえり端部で接する。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：左開き。色調：灰白色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。合成復元。灰かぶり。
杯 身	176-522	口径11.6 残存高3.8	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部はややくぼく。底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部はややくぼく。底部は平ら。底部中央欠損。	クロコ回転：右開き。色調：明灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	176-523	口径9.0 受部径11.2 窓西3.1 T高0.7 T角度37°00'	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に内傾してのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	クロコ回転：右開き。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	176-524	口径8.6 受部径10.6 窓西2.9 T高0.5 T角度45°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや弧い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に内傾してのび、端部はやや弧い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	クロコ回転：右開き。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	176-525	口径9.4 残存高11.2 窓西3.1 T高0.6 T角度36°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、底体部は丸くおさめる。底体部は浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、底体部は丸くおさめる。底体部は浅く平ら。	クロコ回転：右開き。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	176-526	口径8.6 受部径11.0 窓西3.2 T T高0.8 T角度31°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。底体部は丸くおさめる。底体部は浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はやや丸い。	クロコ回転：右開き。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	176-527	口径9.6 受部径12.0 窓西3.3 T高0.5 T角度51°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや弧い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に内傾してのび、端部はやや弧い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。底部中央欠損。	クロコ回転：右開き。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
杯 身	176-528	口径9.4 受部径12.0 窓西3.5 T高0.5 T角度50°45'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外方に内傾してのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はやや丸い。	クロコ回転：右開き。色調：内明灰青色、外暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。
杯 身	176-529	口径10.0 受部径12.2 窓西3.1 T高0.6 T角度35°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや弧い。受部は水平にのび、底体部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外面1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右開き。色調：内明灰青色、外暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。
杯 身	176-530	口径8.8 受部径11.0 窓西3.7 T高0.8 T角度29°30'	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部は下外面1/4(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロコ回転：右開き。色調：暗灰黄色。胎土：密。焼成：やや不良。反転復元。

杯 身	176-531	口径10.4 受部径12.6 残存部3.3 T 高0.6 T 角度50°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/5回転ヘタ削り調整。底面外側3/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外側に「-」あり。灰かぶり。
	176-532	口径11.0 受部径13.6 残存部3.4 T 高0.6 T 角度42°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。底部中央少欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内暗灰色、外一暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。外面部に自然剥離付着。
杯 身	176-533	口径11.8 受部径14.2 残存部3.3 T 高0.6 T 角度38°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一暗灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を多く含む。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外側に「-」あり。外面部かぶり。自然剥離付着。
	176-534	口径10.2 受部径12.6 残存部3.0 T 高0.6 T 角度46°30'	たちあがりは内傾してのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/3回転ヘタ削り調整。底面外側1/3(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。外面部かぶり。
杯 身	176-535	口径10.8 受部径13.0 残存部3.2 T 高0.7 T 角度43°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/5回転ヘタ削り調整。底面外側2/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外側に「-」あり。外面部かぶり。
	176-536	口径11.6 受部径13.8 残存部3.1 T 高0.5 T 角度43°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/7回転ヘタ削り調整。底面外側2/7(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外側に「-」あり。外面部かぶり。
杯 身	176-537	口径10.6 受部径12.6 残存部2.7 T 高0.7 T 角度45°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/5回転ヘタ削り調整。底面外側1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外側に「-」あり。外面部かぶり。
	176-538	口径10.4 受部径12.8 残存部3.9 T 高0.6 T 角度43°45'	たちあがりは内傾してのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。燒成：良好。反転復元。外面部かぶり。内面部自然剥離付着。
杯 身	176-539	口径12.2 受部径14.4 残存部2.5 T 高0.7 T 角度25°30'	たちあがりは内傾してのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。外面部かぶり。
	176-540 82-540	口径10.0 受部径12.4 残存部2.2 T 高0.7 T 角度42°00'	たちあがりは内傾してのち中位でやや直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。外面部かぶり。
杯 身	176-541	口径11.0 受部径12.8 残存部3.0 T 高0.7 T 角度45°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側2/3回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰色、外一暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。内面部かぶり。
	176-542	口径10.8 受部径13.6 残存部2.9 T 高0.7 T 角度44°30'	たちあがりは内傾したのち、端部部近で直立し端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。燒成：良好。反転復元。
杯 蓋	177-543	口径11.0 器高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側3/5回転ヘタ削り調整。大井部外側1/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。一部反転復元。ヘラ記号：大井部外側に「-」あり。外面部かぶり。
	177-544	口径11.8 器高5.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は平らで近い。大井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側3/4回転ヘタ削り調整。天井部外側1/6(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。燒成：良好。一部反転復元。外面部かぶり。
杯 蓋	177-545	口径10.6 器高3.7	体部はや下方に下り、口縁部はや外側して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外側4/5回転ヘタ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。反転復元。外面部一暗灰褐色。
	177-546	口径12.0 器高4.0	体部・口縁部は下外方に下り。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/3回転ヘタ削り調整。大井部外側1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石、チャートを含む。燒成：良好。一部反転復元。外面上に自然剥離付着。

杯 蓋	177-547	口径12.9 残高3.8	体部は下外方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低くややたいへん。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(底部)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。チャートを含む。機成：良好。西欧反転復元。外・内面に焼かぶり。
杯 蓋	177-548	口径11.1 器高2.9	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は底ぐら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(底部)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を多く含む。燒成：良好。一部反転復元。
杯 蓋	177-549	口径12.2 残高3.8	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は底ぐら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(底部)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。チャートを含む。機成：良好。反転復元。
杯 蓋	177-350	口径11.0 残高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底くや高い。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。燒成：良好。ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。反転復元。
杯 蓋	177-551	口径11.0 残高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底くや高い。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。機成：良好。反転復元。
杯 身	177-652	口径10.0 受部径12.7 器高4.6 T高0.7 T角度45°15'	たちあがりは内傾したのも上位でや上方にのび、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部はやや低い。底体部は深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。燒成：良好。外面部かぶり、自然胎付石、受部に重ね焼きによる土器片堆積。
杯 身	177-553	口径9.8 受部径12.3 器高3.2 T高0.4 T角度54°00'	たちあがりは内傾したのも中位で直立ち、端部はやや丸くおさまる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。燒成：良好。外面部に自然胎付石、受部に重ね焼きによる土器片堆積。
杯 身	177-554	口径10.8 器高9.4 受部径13.1 T高0.7 T角度36°00'	たちあがりは内傾したのも上位で直立ち、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。燒成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
杯 身	177-555	口径10.4 受部径12.4 器高2.9 T高0.6 T角度42°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。底面部面焼成。
杯 身	177-556	口径11.7 82-556 受部径14.0 器高2.6 T高0.7 T角度32°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内淡灰褐色、外-淡灰色。胎土：密。8mm以下の長石を含む。チャートを含む。燒成：良好。白成反元、灰かぶり。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。底面部面焼成。
杯 身	177-557	口径9.2 受部径13.4 残高2.9 T高0.4 T角度45°15'	たちあがりは内傾したのも上位で直立ち、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底中部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。燒成：良好。反転復元。
杯 身	177-558	口径11.0 受部径13.4 残高3.2 T高0.5 T角度48°15'	たちあがりは内傾したのも上位で直立ち、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底中部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。燒成：良好。反転復元。
杯 身	177-559	口径10.2 受部径12.8 残高3.6 T高0.4 T角度53°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底中部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。燒成：良好。反転復元。
杯 身	177-660	口径11.2 受部径13.0 残高3.1 T高0.6 T角度38°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底中部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内-灰色、外-淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。燒成：良好。反転復元。灰かぶり。
杯 身	177-561	口径11.5 82-561 受部径13.8 残高3.3 T高0.4 T角度52°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：白色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。燒成：良好。反転復元。外面部かぶり、自然胎付石、焼成：良好。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。

蓋 蓋	177-562	L1径11.5 つまみ径1.6 器高2.4 つまみ高0.8	口縁部は丸くおさめ、口縁部内面に内側からかえりを付し、その端部は丸くおさめる。かえりは口縁端部以ドに突出し、口縁端部で接続する。大井部は低く平ら。大井部外面部中央に複数様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井外周1/4回転ヘラ削り調整。大井部外周1/2(頭部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
高 杯	177-568	口径11.6 残存高3.7	体部：(1)縁部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。底部、体部境界に縫を底部上方1/2の位置に後をめぐらす。縫と縫の間に1条の沈線をめぐらす。(2)脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部外周2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：外一端灰白色。内：灰白色。胎土：密。3mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：残存1/5。反転復元。内部自然釉付着。内側灰ふり。
高 杯	177-564	脚底径12.4 基部径5.5 残存高5.2	杯部欠損。脚部は外側にして下外方に下り、脚部上方で段を成し、下外方に下る。脚端部は内側する半円を成して外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：残存1/7。反転復元。灰かぶり。
高 杯	177-565	脚底径12.0 残存高6.7	杯部欠損。脚部は下外方に下り、脚部上方で段を成し、下外方に下る。脚端部は平面を成して接地する。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。外側灰かぶり。
平 瓶	177-569	口径7.0 基部径5.7 残存高5.8	口部は基部から上方にのびたのち、上外方にのび、縫跡は丸くおさめる。肩部は外下方にのびる。底部下部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。外側灰かぶり。
短颈 瓶	177-567	口径7.2 基部径7.3 体部最大径14.0 残存高1.3	口縁部は基部から上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。肩部は外下方向へと伸びる。脚部は下内方に下る。底部下部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。肩部外周カキ目調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャート・石英を含む。焼成：良好。残存：口縁部のみ残存。一部反転復元。
羽 蓋	177-568	残存高7.2 受鉢30.2	口縁部欠損。口縁部は上外方にのび、受鉢は外上方にのび、縫跡は丸くおさめる。肩部は下外方にのび、以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：桜褐色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
蓋	190-628	L1径58.0 基部径38.0 残存高15.2	口縁部は基部から上方にのびたのち外反して上外方にのび、口縁部下でやや外下方にのびたのも上方にのび、段を成したのも上内方にのびる。縫跡は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。脚部以下欠損。口縁部直下に3条、縫跡上方1/3に1条の沈線をめぐらす。その間に旋状文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成型。底部内面カキ目調整。肩部外周タタキのちカキ目調整。肩部内面青海波タタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。外側自然釉付着。
臺	190-629	口径24.0 残存高4.0	口縁部は外反して上外方にのび、口縁部下で短く下方にのびたのも上内方にのび、口縁部内面に生る。肩部は外下方に下る。脚部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。肩部外周タタキのちカキ目調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一端灰赤茶色、外一端灰青色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。反転復元。ハラ記号：“-”あり。口縁部内面に自然釉付着。灰かぶり。

II 狹山池 2号窯

1 調査の経過

狹山池の池岸には、数ヶ所の須恵器片散布地があることが古くから知られていた。森浩一氏がおこなった分布調査では、池岸において5基の窯跡が確認されている。^⑤ また豊田兼典氏・大阪府立狹山高等学校地歴部が実施した遺跡分布調査の成果を活用した『大阪狹山市埋蔵文化財分布図』では狹山池内の窯跡は5基記載されている。^⑥

狹山池調査事務所が1989年1月に実施した池内試掘調査の結果、北トレンチにおいて灰原の堆積を確認した。この結果を受けて、1990年12月から1991年3月まで、この北トレンチで確認された灰原の発掘調査を実施した。本書ではこの窯を狹山池2号窯と呼称する。

2 遺構と層序

2号窯の灰原は、狹山池東岸の東除口の南側に位置し、東から西へ下る緩斜面上に形成されている。旧天野川の東岸を南北に延びる中位段丘崖に営まれた須恵器窯に伴うものと考えられる。

灰原の断面の状況を示したのが、図195である。灰原は、暗灰赤色砂質灰土層(5)・暗灰黄褐色砂質灰土層(3)・暗灰褐色砂質灰土層(1)の3層の灰土で形成されている。下層灰原と呼んでいる暗灰赤色灰土層は調査区内において南北約50m、東西約4mの範囲に分布し、中層灰原と呼んでいる暗灰黄褐色砂質灰土層は南北約30m、東西約3m(調査区内)の範囲に、上層灰原と呼んでいる暗灰褐色砂質灰土層は南北約26m、東西約2m(調査区内)の範囲に分布している。調査区内における灰原上面の標高は77.5m～78.5mを測る。

灰原の基本層序は下層灰原・中層灰原・上層灰原の3層より成るが、同一の灰原の層内においては、灰土層と黄褐色系の砂質土が含まれており、各灰原の上面において灰土の濃淡が確認できる。とくに灰原第1層中では黄褐色系砂質土を間層として灰土が小単位に分層可能であった(図194断面)。この灰原を形成した窯体を確認するために、灰土、窯壁片および須恵器の分布がもっとも密である中央トレンチ以南の南北約15mの範囲で、コンクリート擁壁護岸を除去し、堤体盛土を約80cm掘削した。その結果、堤体内に中位段丘崖の立ち上がりは確認できず、上層灰原が堤体盛土直下を東方へと延びている状況が確認された。本窯の窯体は今回の調査範囲では検出できなかったが、コンクリート擁壁を除去した範囲のさらに東方に位置すると考えられる。



写真81 2号窯灰原と狹山池

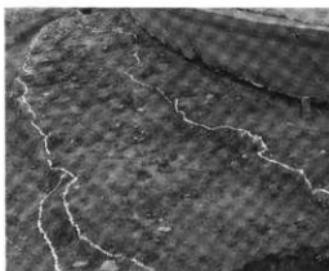


写真82 狹山池2号窯灰原